

---

# 続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

神戒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

### 【Nコード】

N1050X

### 【作者名】

神戒

### 【あらすじ】

ジャン・スティールは幼い頃に、ケンタウロスの女騎士に命を助けられた。

「強くなれ」

その言葉から、彼は人生を決定する。

強くなり騎士になる。そう決意して身体を鍛え、数年が経過する。

やがて肉体、精神共に成熟した少年は、あの女騎士が属しているという国にやってきたのだが――。

出会う女性は異人種ばかり。

ボーイ・ミーツ・人外ガール。ここに登場。

とりあえず色々とやりながら気長に続けます。

気長に生暖かい目で見守ってください。

## 主な人物紹介（随時更新あり）

アレスハイム王国

王立騎士養成学校

一年

ジャン・ステイル 男 ヒト

使用武器…刀剣類

主な魔術…パワー・ポイント肉体強化（魔方陣）  
アウト・ルック

魔力放出（同上）  
フォービドゥンフルーツ

禁断の果实（同上）  
シフト・チェンジ

変則転移（詠唱）

魔法…なし

特徴…東洋系の深い黒髪は本来短髪でまとめられているが、散髪の時間がないために現在では適当に伸ばしたままになってしまっている。鋭い目付きは笑顔によって柔和なものになるが、一重の涼しげな目元には冷たさが伺える。

通った鼻筋に、薄い唇は色男然としているが、長年鍛えられた肉体からの雰囲気が見事にそれらの要素をかき消し、長身とも言い切れぬ中途半端な背丈がその容姿を一般層に引き下げる。

性格は基本的には温和で事なかれ主義であるが、沸点を超えると死すら我物とする幽鬼が如き戦いを見せる。

サニー・ベルガモット 女 エルフ妖精族

使用武器…弓

主な魔術…スコーティング索敵魔術（魔術紋様）

魔法…治癒系

特徴…色素の薄い明るめの茶髪は肩の長さで切り揃えられるが、もみあげは肩口を越して脇にまで伸びる。二重まぶたは大きめの瞳

を強調し、顔立ちにさらなる幼さを加速させる。華奢で外観年齢は義務教育レベル。基本的に容姿が良く頭の回転も早い、誰かと共に行動するとそれらに依存し指示待ちになることが多い。単独行動では瞬間的な判断が正しいと信じ、またそれ故に戦況を持ちこたえる、あるいは逆転させることが多い。

性格は基本的にジャンの影響によって同様だが、その容姿に反して怖いもの知らず。遠くからの射撃を好む。

トロス 男 不明

使用武器…短剣

主な魔術…炎、風を主とする。（魔術紋様）

魔法…地牢獄々<sup>ヘル・プリズン</sup>

特徴…生え際が黒くなりつつある金髪を持つ。年齢の割に大人っぽい（老け）顔をし、無精髭は毎晩剃っている。顔立ちは一般的で、やや華奢なのがコンプレックスとなっている。ジャンに憧れてトレーニングを開始して努力は実り始め、戦闘訓練での成績は上がり始めた。

“テポンを姉に持つので”誰かに頼る”といった考えが根底にあるが、徐々に自立し始め、それが戦闘センスに大きく影響を与えている。

レイミイ 女 蛇族<sup>ラミア</sup>

使用武器…拳

主な魔術…補助魔術となるものを主とする。（魔術紋様）

魔法…魔眼

特徴…深い青色の長い髪を持ち、それを薄めたような蒼眼は魔法使用時には黒に近い紺色に変化する。身体は細身で、腰の辺りからは全長五メートルになる蛇の尾を持つ。蛇族ゆえに腕力はヒトの数倍に至り、さらに蛇の肉体は意のままに操ることができ、また絞めつける力は瞬間的に最大で二トンを超える。

大らかで、悪く言えば雑だが多くを容認する寛大な器や、誰とも分け隔てなく接する話しやすさ、また座学での成績から人望は厚く友人が多い。だが主な友好関係は、サニー、アオイ、クロコの三名である。

#### アオイ 女 植物族

使用武器…植物

主な魔術…アウト・ルック魔力放出（魔方陣）

魔法…アンナチユラル自然干涉

特徴…茶系の髪は肩より高く短めに整えられていて、右側頭部には紅いハイビスカスが咲く。体調や感情によって花の色や状態が変化する。目尻が下がり顔立ちは優しく穏やか。言動は丁寧で、スタイルは特に秀でたものはないが、制服でも私服でも、常に葉で構成されたスカートを身につける。

当たり障りのない雰囲気には溶けこむことを得意としているが、彼女が創りだす穏やかな雰囲気を楽しんで好意的に接してくる人間が多い。またそれによって、人望とは別に同性異性問わず好かれている。

#### クロコ 女 リザード 蜥蜴人族

使用武器…爪

主な魔術…パワー・ポイント肉体強化（魔術紋様）

魔法…瞬間加速

特徴…赤みの掛かった明るい茶髪は雑に短く切りそろえられていて、また右半身は緑の鱗によって覆われている。右腕は左腕とは対照的に図太くなり、また物々しい鉤爪をそこに備える。戦闘を得意とする種族故に戦闘能力は高く、単純な身体能力では学校で上位に喰い込むほどである。

そつけなくぶっきらぼうな印象が殆どで、あまり誰かと交流することはないが、関われば関わったなりに相手をいたわり大切にすること、情に厚い一面もある。また、サニーを”血縁関係でないのに妹”と

扱っているジャンに不安を抱き、やや嫌悪の念を抱いているが、戦闘面から見直し、ある種の信頼を寄せている。

リサ（クリイム） 女 蠍族

使用武器…爪、尾、毒

主な魔術…風（魔術紋様）

幻惑（同上）

魔法…隠密ステルス

特徴…血のように紅い髪は長く腰まで伸び、その毛先から上辺りをリボンで纏める。同色の瞳は宝玉を思わせる秀麗さで、だが目尻は釣り上がり、一見鋭い印象を与える。美人の部類に入る外見だが、人見知りでしどろもどろな対応や、視線を合わせないことから周囲からある程度の距離を置かれている。

幼少期から集団生活を離れて師と仰ぐ者との生活ゆえの影響であり、学校に編入してからはジャンを通してクラスにも溶けこんでいる。またその経験が純粋に戦闘に慣れさせ、芽生えている野生の本能が戦場で”生き抜く”という執着を生み出し、瞬間的に己の限界を凌駕する力を発揮する。

その為、戦闘能力は高く、騎士に十分通ずる力を持っている。

また、その師が有名な傭兵であり、そこから”元はぐれ”である事が割れぬようにエクレルのはからいで偽名を使用している。

ラック・アン 男 ヒト

使用武器…剣、短槍、手斧

主な魔術…氷雪、土属性を主とする。（詠唱）

魔法…硬質化ダイアモンド

特徴…短く揃う黒髪を持ち、またその瞳も黒くどこか東洋人らしい出で立ちだが、純然たるエルフェーヌの生まれで育ちである。元はその才能を買われてエルフェーヌで騎士を務めていたが、ある事件を気に右腕を喪失うしなない、精神療養や左腕の生活に慣れるためにア

レスハイムの養成学校に編入。

幼い出立ちは確かに十八歳未満だが、特例として認められている。またその風貌から一部の女生徒から”かわいい”と評判で、人当たりの良さから友人も多い。

騎士を務めていた事だけあって実力は高く評価されていて、左腕のみとなっても学校では常に上位に名を残している。

ルーク・アルファ 男 ヒト

使用武器…長槍（二槍）

主な魔術…爆破（魔術紋様）

アウト・ルック  
魔力放出（同上）

干涉魔術（同上）

魔法…反発

リベリオン

特徴…黒にも見える濃い緑色の短髪はつんつんと尖り、自己主張を見せる。ジャンよりやや身長が高く、常に周囲を敵視するように鋭い目付きは悪いが、基本的には競争心は高いものの明るく元気なムードメーカーである。細身でありながらもがっしりとついた筋肉は己より遥かに長い二対の槍を簡単に振り回すことができ、槍術に長けている。また魔法を使用する機会は素手での白兵戦以外にはないが、周囲からの評価は武器を使用しないほうが強い、というのが殆どである。

戦闘能力は、ヤギユウ侵攻の際に訓練部隊に編入されるレベルであり、ジャンに負けずとも劣らぬ実力を孕んでいる。

二年

レイ・グリーム 男 ヒト

使用武器…長槍

グレイトウォール  
主な魔術…空間の障壁（魔術紋様）



ワイヤー  
魔力糸（同上）

魔法…予防対策  
プリコシオン

特徴…生まれつきの白髪は乙女よろしく長く伸びて首筋あたりから一つにまとめられるが、ケアもしていない為の一つの束にならずに爆ぜたように広がる。常に笑顔だが温和というわけではなく、悪巧みでもしているようなソレであり、横暴さから知り合いは多いが友人は少ない。長身で筋肉質、顔も良く座学も戦闘訓練も優秀と来ているが、そういった人間関係の薄さは常に高みを求める為に強者を求める姿勢にある。

自分の障害になるとなれば力づくで排除し、あるいは頭を使つて排除する。信ずるのは己と武器であり、認めるのは相棒であり好敵<sup>ライ</sup>手たりえるクランのみ。

クラン・ハセ 男 ヒト

使用武器…太刀

主な魔術…魔力放出（魔術紋様）  
アウト・ルック

その他多くの魔術を状況に合わせて使用する（詠唱）

魔法…魔眼

特徴…ある時をきっかけにして脱色し、染めた紅い髪は好き放題に伸びてボサボサ。倭国とアレスハイムの混血<sup>ハイフ</sup>であるが、東洋の血が強く現れている。輪郭がやや丸く、東洋故の幼さというものを残す顔立ちだが、しなやかに伸びる肢体がそれを拒絶し歳相応な外見を持つ。

基本的に人当たりは良い方だが、深く踏み込む会話を拒み、そしてその殆どには無関心。目付きの悪さがコンプレックスで常にやや目を見開いた形である。面倒くさがりで座学や戦闘訓練での成績は悪いが、彼を知る者の多くはその実力を認めており、不思議と人望は厚い。

出来る限りの面倒事は回避するが、唯一受けて立つのは己の”腕”を確かめるための挑戦。その為、一月に一度はレイと、校庭で戦

うハメとなっている。

また魔眼使用時には黒い瞳は赤く変質する。

テポン 女 不明

使用武器…なし

主な魔術…雷属性（魔術紋様）

魔法…無常の果実

特徴…闇に溶け込む黒い髪は肩よりやや下の位置で切り揃えられている。また瞳は真紅で、吸血鬼然としているがそういった能力はなく、平凡。サニーよりは幼いという外見はないが、それでも歳相応に見られた経験はなく、その身長の高さがコンプレックスになっている。

明るく人当たりが良く、友人は多い。だが一度感情的になれば感情のままに突き走ることもあり、戦闘面でもそれが反映されている。対人戦闘は、背後に回りこんで急所を打ち込みひるんだ所で、武器を奪う事を主として居る。が、感情に流されれば魔術を主とした戦闘を行い、中でも得意とするのが雷。雷を鎌に形を変えて武器とすることもある。

また、珍しい”魔法無力化”の魔法を持つ。

## 王立騎士団

騎士団は全てで第十騎士団まで存在し、

精鋭部隊を第一

偵察部隊を第二

戦争や異種族殲滅戦で主に前線に出るのが第三～五

魔術や魔法を主戦力とする部隊を第六

衛生部隊を第七

国防部隊を第八～十

と指定している。

また第七騎士団の育成は基本的には養成学校で行われているが、より専門的な技術を身につける場合には修道院を推薦、あるいは修道院から人材を推薦する場合がある。

ユーリア 女 ケンタウロス 人馬族

所属部隊…なし（補充要員） 元第一騎士団、トップアタッカー 特攻隊長

使用武器…槍

主な魔術…炎、雷属性（魔術紋様）

魔法…ストライク雷撃疾走

特徴…色素の薄い金髪は、それ故に光を良く通してきらめく。頭の高い位置でくくられて一束になるのは、その馬の尾と良くにて居て、彼女の特徴とも言える。凜と引き締まる目元に、形の良い鼻、口はそれ故に美形であり、また誠実な性格や国で最高峰たる実力から周囲はおろか、名も顔も知らぬ国民からの信頼も厚い。

口調は堅いが雰囲気は穏やかであり、また根が真面目であるために誰が居ても居なくても常に誠実に生きるが、意識すればそこから逸れることも出来る。

また彼女が雷撃と信じてやまぬ魔法は、実のところ光の粒子であり、雷撃ではない。それを身に纏って一体化し、疾駆すれば空気摩擦で過剰な静電気をまとい、それを魔力で圧縮し電撃として放出することを無意識に行う為に、彼女はそれを雷撃と認識していた。

アエロ 女 ハルピュイア 鳥人族

所属部隊…第三騎士団 副団長

使用武器…なし

主な魔術…サウザンド・ウエイブ数多の疾風（魔術紋様）

魔法…暴風流々《ストーム・イーチ》

特徴…明るい緑色の髪は短くまとめられていて、同色の瞳は光を反射しやすくキラキラと煌めく。腰から羽毛を生やして鳥の腿を持ち、また黒い鳥の足は鋭い爪を生やす。両腕は肘先から手羽先とな

って髪と同色の羽毛を生やす。

それ故に日常生活は不便に思われがちだが、器用に手羽先で掴んで物事をこなしたり、あるいは魔法で風を操って操作することも出来る。

明るく、小生意気な性格を持つが、あどけない笑顔や悪気のない発言から部隊に限らず多くから好かれている。自分では賢いつもりで少し上から目線の言葉遣いになるが、その実勉強が苦手という典型的な頭の弱いタイプであり、特にモノを覚えるという事が一番苦手で、それ故に鳥だから鳥頭、とバカにされる事が多い。

それでも白兵戦の実力は高く、先陣切つての力比べというよりは相手を翻弄する立ち回りでないし、倒すというものが主要な戦い方を得意としている。

クレア・ルーモ 女 ヒト

所属部隊…第三騎士団

使用武器…剣

主な魔術…土、風属性（魔術紋様）

魔法…吸収

特徴…長い金髪はそのまま下ろされて、琥珀色の瞳は大きく、少女の名残を見せる。華奢な肢体は少女然としているが、騎士然とする誠実かつ生真面目な態度が、その雰囲気を払拭する。

基本的には生真面目で公私で言えば公の態度で多くの人と接し、堅いイメージを根付かせる。

戦闘能力は平均よりやや上というものだが、自分に自信を持てず、自己鍛錬を日課にしている。

エクレル 女 人牛族

ミノタウロス

所属部隊…第一騎士団 副団長

使用武器…斧、槌、大剣

主な魔術…自己治癒（魔術紋様）

## 魔法…絶対領域

特徴…黒を明るく、紺をさらに明るくしたような色の髪は適当に流されて背中まで伸び、側頭部には二本で一对となるうねる角、規格外の豊乳、そして腿から黒の毛皮に包まれる蹄を持つ足が特徴的なミノタウロスであり、怪力持ち。主な武器を大戦斧を使用するが、殲滅戦では身の丈を遥かに超える長大な大剣を振ることがある。

性格は穏やかで、下がった目尻から”お姉さん”という雰囲気をもたらし、また世話好きで面倒見が良く、またその引き締まるところは引き締まり、出るところは出る肉付きの良いスタイルから多くの男性陣を魅了している。が、怪力から下手に手を出せず、いわゆる隠れファンというものが多い。

ミキ 女 ドワーフ族

所属部隊…第二騎士団 団長

使用武器…大剣

主な魔術…武器や装飾品経由の多数の魔術（魔術紋様）

魔法…全方位知覚

特徴…やや暗めの金髪を頭の左右でくくり、瞳はそれぞれ琥珀と蒼からなる。種族が持つ避けられない小柄さを持ち、背丈は少女そのもの。また顔つきも幼く、サニーよりも子供らしい。が、ドワーフが持つ特殊技能によって造られた装飾品や武器を個人で作成することができ、そこから腕力などを強化したり、肉体に紋様を刻まずに魔術を使用する。

が、任務が基本的には隠密厳守であるために戦闘は極力避けるので実力を知る者は少ないが、彼女個人でも精鋭部隊に編入できるレベルの力を持つ。

真面目で努力家という面を部下から評価され、信頼も厚い。しかしユーモアもある程度はあるために部隊は常にリラックスし、公私をはっきりとするために、団長たりえる器だと認められている。

シイナ 女 オーガ 鬼族

所属部隊…第一騎士団 トップアタッカー 特攻隊長

使用武器…規格外の特大武器多数

主な魔術…なし

魔法…自在重力 マインド・グラビティ

特徴…赤鬼たる真っ赤な肌を持ち、瞳は黒。側頭部にひねりの無いまっすぐの角を二本生やし、鋭い牙を持つ。起伏の多い肢体は艶やかで、基本的な出立ちも露出度が高い。が、硬派な性格ややる気の無い適当な受け答えから男性陣が手を出せず、浮いた話に縁がない。

種族の特徴として高い身体能力を持ち、戦闘能力や瞬間的な判断能力は極めて高く正確。正に一騎当千の実力を持つが、ユーリアには一歩及ばず。後輩的な関係であるために彼女を尊敬する一面もあるし、基本的には分け隔てなく誰とも接し、豪快な性格。

己より大きな武器を好み、鉦山都市やコロンの街に特注品を頼むことが多く、また戦場には所持している半数以上の武器を持っていることが殆どである。

十万に及ぶ人口の中で、その十分の一を占めるのが警ら兵（いわゆる憲兵）である。

主な役割は歩哨として街を警備する事、犯罪者を逮捕する事、そして重要施設や門の当番などであるが、緊急時には兵站や戦闘員として騎士団に率いられて前線に赴く。警察と軍の役割を兼ねているという事になる。

養成学校の入試で落第したものや、学校を諦め退学した者、卒業出来なかった者や、また己を鍛えるため、働き口がないためなど様々な理由で就く事が多い職業。基本的に魔法を持つものは少ない。

騎士団同様に部隊編成はされているが、管理はされておらず、部隊長らが編成の見直しを軍務大臣に申請しているが、その兆しはな

い。

エミリオ 男 ヒト

所属部隊…なし 警ら兵を統率する大隊長

使用武器…剣

主な魔術…なし

魔法…なし

特徴…頭部が薄くなってきた事をきっかけにしてきれいに剃り上げた頭とは対照的に、口ひげはたくましく伸び続けている。巨漢とは行かずともゴツイ外見を持つ中年男性であるが、常に着こむ鎧の下には筋肉の鎧が構成されており、”下手な騎士でも殺せない男”という異名が知れ渡っている一方で、そういった噂すら聞き逃さない男”の為に”地獄耳”のあだ名を持つ。そして後者がより一般的。

戦闘能力は極めて高いとされていて、部隊に所属せず指示のみを出すデスクワーカーだが、状況により複数の部隊を纏めて部隊長として戦場に駆ることがある。

実力は第一騎士団に匹敵するとされているが、事実闇の中である。

傭兵組合”ブラックオイル”

ディライラ・ホーク 男 ヒト

所属部隊…教導隊 隊長

使用武器…剣 双剣ではなく、普通の剣を二本

主な魔術…不明

魔法…無限射程の長槍、大長槍、槍

特徴…黒い髪は短く、だが坊主というほどではない。前髪はまゆにかかる程度で、後ろ髪は襟にかかるほど。左目に眼帯をしている

が、他は五体満足。世界的に手を広げている傭兵組合ブラックオイルの教導隊メンバーであり、現在はその隊長を勤めている。

剣、あるいは徒手空拳での戦闘力は個人として達することが出来る限界レベルまで精錬されているが、好きであり得意であり、自他ともに認める本来の実力は銃火器を持つことで発揮される。狙撃銃を使用するが、隠れて伏せてなどということが嫌いであるために、その身軽さや豊富な経験を使用した突撃スナイパーとして活躍することがある。

スミス・アーティザン 男 ヒト

所属部隊…教導隊 副隊長

使用武器…なし

主な魔術…不明

魔法…不明

特徴…非戦闘員であり、主な交渉ややり取りを行う部隊の、縁の下の力持ち的存在。丸メガネを愛用し、黒髪は長く肩まで伸びる。穏やかな性格で、部隊の一人ひとりを気遣うような男。

クラリス 女 竜人族

所属部隊…教導隊

使用武器…なし

主な魔術…なし

魔法…不明

特徴…水色の長い髪をサイドテールでまとめて、右腕を甲から肘までを分厚い鱗で覆っている。白金の板金鎧を身に付け、はいだて佩楯をスカートに、下半身は太ももの口を広くする脚甲を装備。

伝説ともなる存在の竜の末裔である竜人は、それ故に個人で一騎当千の実力を持つとされていて、クラリス自身もその噂に違わぬ強靱な力を持つ。

かつてはそれが原因で作戦部隊を離れていたが、ヤギユウ帝国で



ホークと再開し、その際の交渉で仕事を請け負う代わりに教導隊に編入することを約束させる。

快活な性格で、理屈屋に見えるが感情に従順で、頭はゆるい。実力は、純粋な力比べならホークを上回るが、頭の出来が残念であるため一度も勝てたことがない。

## テポン家

タマ 女 獣人族（ネコ）

使用武器…爪

主な魔術…なし

魔法…狩猟者<sup>ハンター</sup>

特徴…ネコ時は一般的な三毛猫として過ごし、また食べ物の消化や燃費の問題から好んでその姿になっていて、必要であったり、求められない限りそこから姿を変えることはない。

人型時は肘、スネから先をネコの四肢に変え、肉球の大きさも規格外のソレになる。また髪は濃密な金色に染まり、琥珀の瞳を持つ。身体能力はネコの延長線上であり、極めて高いが、怠惰と興味あるものにしか反応しない性格から、それが発揮されることはない。

自分を理解し、受け入れる者を好む傾向にあり、それ故にジャンには一度恋心を抱くが、徹底したペット扱いに今では友人、あるいはペットとして信頼を抱いている。

また同じ視点にたって行動するノロとの交友関係が深い。

オクト 女 タコ族

使用武器…触手

主な魔術…水属性（魔術紋様、詠唱）<sup>スライミング</sup>

魔法…監中水泳

特徴…頭にタコの触手を太い房として四本備え、また身体は透き通るような美白。四肢には細やかな吸盤を付ける形で、テポン家で

お手伝いとして働く。が、家族同然で接しているために下手な隔てが無く、その為に仕事そっちのけで趣味である読書に夢中になることもある。

キャミソールに短パンという簡単な格好だが、ヘッドドレスだけは身につけている。

種族の特性として擬態を得意とするが、使い道はなく、長年の間その存在すら忘れている。

好きな本のジャンルは恋愛ものから、恋愛からなるサスペンス。

戦闘能力は皆無と言っていいほど、低い。

スクイド 女 イカ族

使用武器…触手

主な魔術…水属性（魔術紋様）

魔法…君死氷片<sup>アイスノン</sup>

特徴…頭に十本の触手を持ち、額から鼻筋にかけて稲妻のような魔術紋様を持つ。大きな瞳がひとつだけ存在し、眼力が強い。下半身は皮膚と癒着し人魚のようになるが、それは自在に二つに分かち足とする事もできる。

真面目で懇切丁寧な対応に定評があり、掃除や庭の手入れなど隅々まで丁寧な仕事をやってのける。料理は苦手というわけではなく、あまり経験がないためにする機会が無いが、料理をした場合は全てに栄養満点のイカ墨をかけるために焦げと見間違えられることが多い。

戦闘能力はオクト同様に無い。

パスカル 男 不明

使用武器…なし

主な魔術…不明

魔法…不明

特徴…黒い短髪は、坊主を少し伸ばした程度の長さ。二十代前半

という外見を持ち、テポン家では基本的に力仕事を任せられているが、殆ど家にはとどまらない。

「テポンの命によって”溝の向こう側”と行き来をするが、その事実を知るものは居らず、また他言することはない。

その他

ノロ 女 不明

使用武器…触手

主な魔術…多数の魔術を状況に応じて利用する（詠唱、魔方陣）

魔法…なし

特徴…学校の地下にある広大な空間に閉じ込められた謎の生命体。本体は生肉として空間に広がり、その中心には心臓のような形をもつ。学校の七不思議の一つとして数えられる”呪い”と呼ばれ始めた存在。知能は高く、瞬時に現代の言語を理解し我が物とする。

図書館並に魔術を持っていると自称し、また触手の一部をヒトの形に変える事ができる。が、触手から離れた時点での寿命は二時間であり、寿命が終わりに近づくにつれて腐食していく。またその外観は、少女然とし、長い銀髪、深い闇が如き瞳に、紅いワンピースを纏う格好をしている。

ジャンの肉体に身体の一部を埋め込み、『禁断の果实』を強制的に刻み込んだ張本人。

ラアビ 女 獣人族（ウサギ）

使用武器…外套に付属される爪

主な魔術…爆破（魔術紋様）

魔法…疾駆発火  
イグジット・イグニッション

特徴…茶髪は肩よりやや長い程度。頭に長い耳を持ち、また常に羽織る外套は肘辺りから流線型に太くなり、その先に収納可能な三

本の鉤爪を備える。下半身はウサギのそれであり、常につま先立ちのような状態になる。酒を好んで飲み、常に何かしらを飲用している。酒には強く、蒸留酒を薄めずに瓶のまま直に口にするほど。

開けた性格で、大らか。大雑把で、酒飲みという事から軽い女と見られがちだが、貞操観念は強く、また己と同等か、ソレ以上の実力の持ち主以外とは交際しないと決めている。

戦闘能力は高く、その為、アレスハイムからの傭兵という形で幅広い範囲で仕事をこなしている。

ボーア 女 獣人族 (イノシシ)

使用武器…なし

主な魔術…灼熱の牙ブローケンフレイズ(魔術紋様)

魔法…熱暴走ヒート

特徴…胸元から足先にかけて伸びる網目のシャツに、毛皮のベスト、革のショートパンツに太ももまでの革製のブーツを身につけるとい目立った格好を基本とし、また黒髪は艶やかで長く、白目のない目は深淵のように黒。

元は騎士団に所属しており、ある理由から国を追放されて”はぐれ”となる。

常に孤独感を抱えていたが、ジャンと出会い、徐々に解消されていく。やや口が悪い面もあるが、基本的には思いやりがある暖かな気持ちをもっている。

戦闘能力は、騎士団に居ただけあって高く、着の身着のままでの戦闘でも異種族を殲滅出来るほど。

ウィルソン・ウェイバー 男 ヒト

所属…魔術師組合、商業組合

使用武器…剣

主な魔術…幅広く使う為に特に決まって出す、という固定化した魔術はない

魔法…不明

特徴…小汚い旅人然とした外套を着こみ、ボサボサの黒髪に、やや緑がかった瞳をもつ。

武器商人として組合ギルドから支給される人型武器倉庫マクロと呼ばれる、擬似脳と言う実際の脳と相違ないそれを埋めこまれた意識ある、ヒトと見分けがつかぬ外見のタスクという名の相棒と共に商売をしながら旅をしている。

また旅の目的に私的なものを含み、それは”天そらから落ちてきた鉱物を使用して造られた”と言われる十本の武器の収集。神話時代の武器、あるいは伝説の武器と呼ばれるそれらを集めることが彼の人生目標である。既に二本を所有している。実際には、『異世界』からの”異物”であるのだが、こちらの世界ではそう伝わっていた。

ジャンとの出会いをきっかけに、彼に目をかけるようになり、白い鉱物を利用した通信からジャンにアドバイスをしたり、手助けをしたりするようになる。

マリー・ベルクール 女 ヒト

所属…魔術師組合

使用武器…なし

主な魔術…状況に応じて変化する

魔法…不明

特徴…長い金髪は基本的にもみあげを編みこみ、後ろを大きな一つの房とするように三つ編みにする。ゴスロリ調からパンツルックまで色々と服装を気にする普通の女の子だが、その魔術師としての適性は大きく、既にその時点で大魔術師（大魔導師）としての実力を備えているとも言われている。

大陸間での転移魔術を成功させるのは、魔術師組合創設者の孫とすることだけが理由ではなく、血のにじむような努力の賜物である。また生まれつき両脚を失っており、人工皮膚により本物と遜色のない義足を使用している。

ハンス・ベランジェ 男 獣人（オオカミ）

所属…警備組合

使用武器…なし

主な魔術…なし

魔法…咆哮<sup>ハウル・モーター</sup>迫撃

特徴…背広に蝶ネクタイをする格好に、短い黒髪をオールバックにする頭。顔は老けていて、きりつとする目元や整った鼻、口を持っているものの三十代後半に見られがちであるものの、実年齢は二十八。

警備組合という、その名の通り警備や警護を主な仕事とする組合に所属しており、二年ほど前からマリー・ベルクールの護衛としてあるいは付き人として派遣されている。仕事の終点は未定で、マリーのわがままや突拍子も無い行動からいい加減うんざりしているが、その無邪気な姿や屈託の無い笑顔、特に毎月渡される申し分ない報酬から、その仕事を気に入り始めている。

警備組合に入る前は軍に所属していたために戦闘能力は極めて高く、それは一国の騎士を瞬殺し、ディライラ・ホークに認められるレベルである。

エルフェーン公国

ドラゴ 男 ヒト

所属…騎士団

使用武器…剣

主な魔術…不明

魔法…不明

特徴…ラック・アンの師たる男。基本的に黒い外套を頭まで羽織る。が、その下は黒髪の甘いマスクをもった色男であり、ノリのよ

い適当な性格ゆえに親しみやすい。

アレスハイムと共闘の異種族殲滅作戦時には活躍することが出来なかったが、アレスハイムでも十分通用できる実力の持ち主。

## ヤギユウ帝国

ロメオ・ヤギユウ 男 ヒト

所属…皇帝

使用武器…剣

主な魔術…不明

魔法…不明

特徴…透き通るような見事な金髪は適当に整えられていて、額の位置で両側へと分けられる。顔形は整っていて容姿端麗。王たる威厳と共にまだ若い、貴族の気品さを見せる。年齢は三八。

腰に携える騎士剣は軍で一律で揃えた量産品とは異なり、ウィルソン・ウェイバーが探し求める『異世界』からの十本の剣の一振りであり、それが単体で持つ魔術的效果は、一言で言えば『壊滅』。異世界にしか存在しない鉱物と技術を使用した武器であるから、単純に剣として使えば何の抵抗もなく骨さえも断ち、魔術仕様の武器を扱うように振るえば『戦略級魔術』同様の効果が得られるが――実際ににはなにが怒るか、ロメオ自身は知らない。

気高い性格でプライドは人一倍高いが、幼少期からの親交ゆえにレヒト・アレスには頭が上がらず、また自分が気に入ったものには砕けた様子で、あからさまな『特別扱い』をする。

ラウド・ヴァンピール 男 吸血鬼

所属…第一騎士団 団長

使用武器…オートマチックリボルバー 13mm弾使用

主な魔術…指を鳴らして『記憶している』魔方陣を即座に展開さ

せる。固定された使用魔術はなし

魔法…不明

特徴…燕尾服にシルクハットを常に身に付け、日差しよけに黒く分厚いカーテンのような外套を羽織る。顔は中年男性のように小じわが目立つものであり、鼻の下のちょびひげがあらゆる人に胡散臭い印象を与える。

だが吸血鬼であるがゆえに物理攻撃の一切は効かず、また魔術師としては限りなく高い能力を持ち、己の能力をよく知り、それを十分発揮できている。が、近接戦闘が苦手であるために、魔術仕様の武器を持つ拳闘士や剣士が相手である場合、敗北する可能性は極めて高い。

誰に対しても敬語だが、人に対して残虐的な実験を行い、また気に入った者の首に防腐効果を施して飾る趣味がある、そういった残酷な一面がある。性格は温和だが、一方的に嬲られると思考が停止し、覚醒状態<sup>トランス</sup>になる。

クリード 男 ヒト

所属…先遣隊

使用武器…剣

主な魔術…不明

魔法…付加属性<sup>アトリビュート</sup>

特徴…薄い黒髪、琥珀の瞳の男。中肉中背で、外見の特徴はあまりない。が、猛禽のような鋭い目付きや全身から吹き出る雰囲気、近づきがたい印象を与える。

戦闘能力は高く、またそれを誇示するかのようには強者との戦いを求めている。



## プロローグ

春先のまだ肌寒い季節。しかし日中は、上着を羽織らずとも外を歩ける程度に、ほどよく温かい。

春の日差し。

されど、その空間だけは異様なまでに熱かった。

大地は焦げ、熱を孕む。その上に立つだけで肉体は予熱で中までじつくり火を通してしまいうようだった。

青年は構えを解いて幅広の剣を振り下ろす。が、対応する人の手が――そこから鋭く伸びる長い爪が、その最中で剣の横っ腹を叩いて弾いた。

甲高い、金属音が響く。

同時に対象を斬り裂かんとしていた刃は、ちょうどその対象、目の前の女性の脇に落ちた。刃は情けなく焦げた石畳を勢い良く叩いて打撃し、砕けぬ故に跳ね返る力が腕へ戻る。衝撃が両腕をビリビリと痺れさせ、

「ちよつとは面白かったわよ」

彼女はそう言って、青年の顔面を力強く押しこむように掴んだ。

視界は暗転し、そして華奢な腕なのにも関わらず青年にはとても太刀打ちできぬ暴力が、彼の行動を束縛した。直接的な攻撃からではなく、ただ純粹に己の力を誇示するだけで、適わぬと理解させていた。

そして腰に引きつけた腕。貫手を作る手は依然として爪を鋭くさせたまま。

「もっと強くなってから遊びたかったわね」

毛皮のベストを羽織り、頭には中身のない猪の顔を乗せる。ネットのような網目だけの衣服をまとい、エナメルのスボンを履く。妙に露出度が高く、またそのあらわになる肉々しい肢体には目のやり場に困ったが、今ではもうその姿すら見えない。

黒目しかない瞳がギロリと青年を睨む。

もう終わりだ、ここで死ぬ。

そういった思考を、恐怖の中で、あるいは絶望の中ですら無く、どこか他人事のように感じる自分に思わず呆れた。

——体の中の、魂や心といったモノが熱くなるのを感じた。

ここで死んだら後ろの少女はどうなる？ 新たな獲物としてこの女に殺されるだけではないか。

冷静な思考はそう告げると同時に、されど己の死の予感を認めなかった。

そう、おれは死なない。

漠然とそう思う。

根拠なんて無い。

だが死なない。

「おれは、お前の暴走を止める……っ！」

女が腕を振り抜いた。

同時に、頭の中のもっと奥、芯たる部位が熱く、熱く、熱くなるのを感じて——。

「やっと来たわね、だけど……ッ！」

「降り注げ！ サウザンド・ウェイク 数多の疾風ッ！」

女が楽しい微笑を崩して表情を歪めたのはその刹那だった。

顔を掴む腕を少し引き、そして突き飛ばすように青年を弾いた。

同時に大地を弾いて彼女は後退。その場に僅かな残像を見せて、彼女は既に石畳に傷一つ無い位置で跪いていた。

その直後に降り注ぐのは、半月状のかまいたちだった。

標的を仕留められずに虚空を切り裂き大地を刻む幾多の真空波。

彼は勢い良く背後に吹き飛ばされながらそれを見て、

「っ?!」

壁もないはずの位置で、何かが背中を打った。滑空を遮る障害物は人の形であり、そして力強く青年を受け止める。やがて慣性の力も失われて着地すると、その”人の身体”のあった部分は妙に高い

位置だった事に気づく。

「下がっている、一般人」

凜とした声が届く。

透き通るような金髪を持つ女性。それを後頭部の高い位置で一纏めにし、身体には甲冑を纏う。装備する武器はその身の丈ほどの槍。 ”馬”の下半身は、薄い生地の下着を履いたうえに鉄の佩楯はいだてを纏って守られる。

彼女は”ケンタウロス”と呼ばれる、異種族だ。人の上半身に、馬の下半身。その異形の姿は、されど力強く凛々しく雄々しい。彼女はケンタウロスなれど、この国を守護する王立騎士団の一人だった。

「き、騎士様……！」

ケンタウロスが睨む先、 ”獣人族”で猪科の女性は、前屈姿勢で様子を伺っていた。

青年がそれを確認みる中で、気配は声と共に現れた。

「そうそう、お子ちゃまはあたしたちに任せればいいのよ」

青年を挟むようにして現れた女性。

その身の丈は一般人とほぼ同等だが、その両腕は人ならざる鳥の翼だった。さらに羽毛滾る腿を経て、足さえも鳥のソレである。彼女も同様に異種族であり、鳥人ハルレユイアと呼ばれる存在だ。

人を凌駕する聴力、視力を持って尚飛行能力を有する。また種族としてもひどく友好的で、だが戦闘能力はそうそう大きく離れているというわけでもなかった。

「でもまあ、こんなに出てくる必要はないのでは？」

うねるツノを持つ女性は、それ以外にも規格外に豊満な胸と、そして獣を直立させたような毛皮を纏い蹄を持つ足が特徴的なのはミノタウロス。甲冑を装備できないのか身体に張り付くような衣服一枚を着て、腰巻を装備するだけの姿。さらに異種族の特徴として怪力が挙げられ、それを誇示するように身の丈ほどの戦斧を肩に担いで鳥人の隣に立った。

「いいんじゃないの、暇だしな。それにアイツだって常連客だ、門前、っつーか門内だけど、さすがにそろそろもてなすべきじゃないか？」

ケンタウロスの影になる位置に来たのは、一際小柄の少女だった。明らかに自分よりも巨きな大剣を背負うが、その剣先は既に地面を削っている。が、彼女ドワーフ族の作る道具の全ては逸品であり、『魔術』を用いて特殊な効果を持たせる道具ばかりが生まれている。例えば筋力を増加させるものもあれば――彼女の大剣のように、硬度、密度、素材がそのままでありながらも質量だけを減らす事も可能である。

「というか女郎蜘蛛おひめ蛛が待機してるし、ちゃっちゃと終わらせない？ 昨日徹夜で、彼女イライラしてんのよ」

そう提案したのは、全身をゆでダコのように真っ赤に染め上げる女性だった。

頭に対となる二本のツノを誇り高く聳えさせるように生やす彼女は、胸当てとショーツだけを身につける大胆ないで立ちでドワーフの隣についた。

彼女、鬼族は尋常ならざる身体能力を持つ。純然たる戦闘能力ならばこの集団の中でも随一であり、それゆえに切込隊長トップアタッカーに任命されることが多い。が、その場合は切込隊長だけの活躍で戦闘が終えると言われるほどに強靱だ。

まさに鬼というくらいに強い。容赦もない。

――ケンタウロス、鳥人、ミノタウロス、ドワーフ、鬼。

総数五名の女騎士。それぞれ人に似て非なる者でありながらも、その姿は圧巻だった。そして異種族と呼ばれる存在でありながらも、王立騎士団の屈指の実力者だった。

やがてそれぞれが揃い、構える。

「ま、そういう事だからキミらは下がってなさい」

槍を構える。同時に、ケンタウロスの雰囲気が一気に変わった。殺気が迸る。鋭い眼光が、まるで獣人族の女性を射ぬくようだっ

た。

「さすがに予想外。私もここで退かせてもらおうッ！」

そう言うが早い——魔術か、単なる身体能力か。彼女の言葉を理解する頃には既に、その姿は忽然と失せていて、

「じゃ、ジャン！」

ぷつりと、緊張の糸が切れたようだった。

首を締められたように、意識が不意に遠のく。深淵に蹴落とされたように身体が地面へと沈むその中で、背後で待機していた少女がそう叫ぶのを聞いて——青年、ジャン・ステイルの意識はそこで途絶えた。

## 試験前夜

ここアレスハイム王国が存在する大陸の地平線上がひび割れ巨大な”溝”が現れたのは、今から約一五〇年前。全世界を混乱の渦に陥れた世紀の大地震を伴ってそれが突如出現したというのは、この世界で生きる人間ならば知らぬ者はいないほど有名な話だ。

溝は階段状になっている。そしてその深淵の最中、階段の突き当りには巨大な門扉<sup>ゲート</sup>があった。

そこから現れたのは無数の『異種族』。

架空の生き物だと信じてきたケンタウロスや鳥人、ミノタウロス、ドワーフ、鬼……さらに無数の異様な、半分は人であったり、完全な”魔物”<sup>モンスター</sup>の風体をするそれらが現れた。

彼らは知能を持つ。人間と同等、あるいはソレ以上の超高度な知的生命体だった。

そして彼らが望んだのはこの世界。

ふっかつけたのは戦争。

ではなく、友好的な関係を築く為の慈善活動だ。<sup>フィランソロピー</sup>

荒れ果てた土地を潤し、枯れ果てた河川を潤し、汚れた大地、海を浄化。魔法のような業の数々で、人類の文化は加速度的に進展して、今がある。

持つもの、持たざる者は居るが——個人が持つ、根拠不明寮の奇跡の業である『魔法』が、個人の才能<sup>センス</sup>が無くとも努力次第で使用可能になる『魔術』が人々の手に渡ったのも、その異種族の出現と同時期だった。

魔法とは、一人が一つだけ持つ特異な能力。だが持たざる者が殆どであり、全人口を見てもその一割に満たぬ存在である。

魔術とは、先ほどの真空波がそうであるように、『精霊』という者の力を借りて起こすもの。例えば『炎』や『雷』、『水』や『氷雪』、あるいは『具現化』を可能とする業であり、それは肉体に紋

様を刻んで”世界と契約”する事でまず扱える段階になる。

が、『サウザンド・ウェイク数多の疾風』のように本格的に使うには、惜しまぬ努力が必要となる。

——世界各国。それでもやはり異種族という存在ものを拒むところは多い。

世間に馴染み、『魔法使い』を主として構成する騎士団は各国に必ず在るものの、そこに異種族を含めるのはやはり異例な事だった。それは、ここアレスハイム王国が、その異種族たちとの外交官的な役割を持つことが理由だった。

たとえば異種族と人類が対立したとしても、ここだけは中立を貫く。そう契約やくそくしたのは、やはり今から一五〇年前だった。

このジャン・ステイルは、幼い頃にどこぞの帝国軍によって故郷を焼き尽くされた。強奪して食料、水を補給。ついでに金銭を奪い、村人を殺害してから村々を焼き払っていった。追手はその村での補給が不可能になり、さらにその残虐性を見て追跡を諦めたという。

彼はその追手の部隊に、その中に居たケンタウロスの騎士に生き残っていた所を助けられたのだ。

「ジャン、またトレーニング？」

そう声をかける少女も、同じ故郷出身の生き残りだ。

二人はそれから近く、この王国の支援下にある街の児童保護施設で十二歳まで育った。義務教育の制度のお陰で、彼らはまともに文字を読み書きでき、極めて一般的な幼少時代を過ごすことが出来た。

「ああ、身体がなまっちまうからな」

それからは自立生活だ。

二人でドワーフが営む炭鉱、鉱山、採石場で働き、ジャンは現場仕事を、『サニー・ベルガモット』は寮で寮母手伝いとして過ごしてきた。

かくして生き抜き、六年後。

十八歳となる少年少女は、騎士になるべくこの王国にやってきた。騎士の求人は毎春行われる。募集要項は極めて簡単で、『十八歳以上』であり『心身共に健康』で、『文字の読み書き』ができ『特殊技能』を有すること。

特殊技能は碎いて言えば、魔法の有無である。

サニーは簡単ながらも『治す』力を持つ。

ジャンはと言えば――。

「つと、一先ず腕立て伏せは終わりだ」

規定の回数を終えた所でジャンは起き上がり、肩で息をしながら質素な寝台に腰をかける。

共同住宅で寝食を共にするサニーは、そんな彼の自室で、彼の隣に腰掛けた。

セミロングの茶髪が揺れ、琥珀色の瞳がジャンを捉える。尖る長い耳は、彼女がエルフ族である証拠だった。

容姿端麗、頭脳少し明晰。さらに弓を自在に扱い、治癒の力を持つ。

天はいくつ彼女に与えれば気がすむのだろうかと嘆いたのは、ジャンが物心ついたその時だった。

彼が持つものといえば、ドワーフ族から餞別にと渡されたブロードソードが一振り。特別製だから魔術を扱う為の道具にもなるが、それだけだった。

「もう、明日が試験なんだからね？　少しは休まないとダメだよ」  
立ち上がり、机の上に乱雑に置かれる赤い本を手取る。表紙には『毎日十分勉強するだけで絶対に受かる！　王立騎士入試対策』傾向と対策』と立派な御託が並べてあるが、僅か一時間で理解できるほどに内容は薄っぺらく、一般常識程度の事しか綴られていなかった。

こういった商法があることを、鉱山で働いていた彼は知らない。購入時の店員の嘲笑の意味を理解したのは、この本の第一章を読み終えた頃だった。



昼食三日分の値段が一時間で潰された。

しかも一切有意義にすらならない内容で。

「わかってるけどさ。落ち着かなくて」

すり切れるほどに読んだと思うそれを、また読み始める。

いくら内容が稚拙だろうと、もしかするとコレが本当にヒントになるかもしれないのだ。とりあえず頭に入れておくだけでも損にはならない筈だ。

——意識を失った後は、この寝台の上で寝ていた。共同住宅まではあのケンタウロスが運んできたらしく、それから半日ほど眠り続けていたらしい。

本当なら礼を言いに城まで行くべきだったが、どのみち騎士の入試試験があるのだ。わざわざ赴かなくとも逢える、はずである。

ちなみに試験で合格してもすぐに戦場へ、というわけではない。

二年制の学校に通い、そこで知識を蓄え肉体を鍛える。そこで卒業して晴れて騎士なのだ。

「わくわく？」

「そわそわ」

「でも楽しみでもあるんでしょ？」

身体にひつつき、体重を掛けるようにしてサニーが言った。

「まあな」

自分のこれまでの力が試せる。

ケンカもなく、ただ鍛えるだけ鍛えてきた今までの全てを出せるのが、明日の試験だ。

心配でもある。

楽しみでもある。

しかしやはり、

「サニーは？ 運動神経悪いってわけじゃないけど、得意でもないだろ？」

彼女が一番心配だった。

騎士を目指した理由が『ジャンが目指すから』であり、仮にジャ

ンが落ちれば『辞退する』という。騎士を舐め腐った考えだが、そんな彼女がこれまで支えになってくれたのは確かだった。

だからサニーと一緒に騎士になりたい。

あの騎士に恩返しをしたいという事もあったが、今ではそれが一番の願いになっていた。

妹のような存在。ゆえに、たった一人しか居ない大切な家族だ。

互いに助けあってきたからこそ、その心は繋がり、今に至る。この触れ合いだって男女の性的な意味ではなく、もはや動物のスキップのようなものだった。

「わたし？ そうだね、わたしはねえ、実はジャンに隠れてトレーニングしてたりして」

「へえ、どんな？」

「えへへ、筋トレとか、あとね、素振りとか」

「割りとちゃんとやってんだな。頼んでくれればもっと指導とか出来たのに」

「やだよ、だってジャン、人一倍頑張ってるからあんまり迷惑かけたくなかったもん」

「いや、そんな事……」

「次の日仕事なのに、夜中に抜け出して走りこみしてたり」

「そ、それは……」

思わず口ごもる。

まさか見られていたとは思わなかった。

それこそ、彼女の言葉を借りるが、人一倍頑張ってるサニーに心配を掛けぬために影でひっそりとやっていたのだが、それは無駄な努力になっていたようだ。

お陰で今では、年齢の割には随分とがっしりとした体形だし、体力だって自信がある。だが基準がわからない以上、試験に余裕を持てることはなかった。

「でもほら、ジャンは頑張り屋さんだから絶対受かるよ！」

彼女がいるから、ガチガチに緊張して集中できなくなることがな

い。

「ああ。サニーもな」

「えへへ、ジャンに言われると嬉しいな」

言って、頭を肩に乗せる。この上なく嬉しそうな顔で、彼女はこのひと時を過ごしていた。

その後、適当なトレーニングを二人で行い、夕食を済まして、少しばかり早めの就寝となる。

適度に疲れた身体が休息を求める。そのお陰で高ぶった精神はいくらか落ち着いて、夢の中へと落かけていた。

サニーが、「どうせだから一緒に寝る？」と聞いてきたが、なにが”どうせなのか”分からないし——彼女だって年頃の娘だ。淫らな獣となる男の本能を殺しきれていないジャンが、そんな事を二つ返事で許可できるわけがなかった。

いくら妹のように思っていたって、女の子のやわらかさにはドキドキするし、髪の毛の石鹸の香りには虜になる。今まで仕事もあったから尋常ならない運動量で誤魔化してこれたが、今度はそうにはならないだろう。

騎士を侮っているわけではないが、それでもあの炭鉱や鉱山での苦行じみた活動は無い。もしそうになったら、

「死ねるな……」

ドワーフの力持ちが大勢いたからこそ、それらが創りだす特別な魔術稼働の道具があって尚あのキツさだ。同等の苦行など、この街で一ヶ月ほど過ごした適度な気楽さからそっちへなんて、とても堪えられるきがしない。

もっとも、それは杞憂に過ぎるだろうが——。

コンコン。

不意に音が、静寂を司る自室に響いた。

コンコン。

大した間も置かずに、もう一度。

扉ではなく、窓を叩くような軽い音。

壁に寝台が添えられるような配置だ。窓は、その壁に埋め込まれている。だから思わず目を開けてそちらに視線を向ければ、見えてしまうのだ。

月明かりを遮る、妙な人影。

息を呑む。

微妙な尿意ゆえに我慢していたことが悔やまれるほど、心臓が凍りつき、全身の血液が凍てついた。

「っ……!？」

悲鳴が出なかったのが、不幸中の幸いというものだろう。

コンコン。

ノックは繰り返された。

『ちよっと、開けてってば!』

窓越しにこもる声は、女の子のソレだった。

強気に、命令口調。

どちらにせよ悪い予感しかしなかったが、これ以上ノックを繰り返されてサニーを起こすわけにもいかない。

ジャンは身体を起こして布団を剥ぐと、寝台の上で膝立ちになってカギを開け、窓を開け放つ。と共に、その影は勢い良く部屋の中に飛び込んできた。

寝台を飛び越えて床に着地。両手を天井高く伸ばして直立。まるでその妙技を褒めてと言わんばかりの笑顔をジャンに向けていた。

「おーすごいすごい」

やるせない拍手だった。

だというのに、彼女はともうれしそうな笑顔だった。なにやら胸が痛くなるが、ジャンは気にせず続けた。

「どちらさまで？」

「あ、えーっと……あたしの名前はテポン」

コウモリのような羽根を折り曲げて収納する。ソレ以外の特徴といえば、炎のように真っ赤な瞳や、サニーといい勝負の少し小柄な

女の子らしい肉体程度しかない。またエナメル質の、腿まで伸びる妙に踵の高い靴や肘までの手袋という異文化の服装しか無かったが、この街で出会った異種族の中で一番人間に近い少女だった。

何族なのかと聞いてみたかったが、異種族とそれほど深く関わった経験がない。ドワーフはいい歳の中年男性——といっても寿命の関係で殆どが百歳超え——だったから、会話は普通の人間とあまり変わらなかった。

だから”違う部分”に関して、どこまで聞いて良いのかが未だに分からないのだ。

異種族初心者というところだろう。

興味が人一倍あるのは、いつかのケンタウロスのおかげかも知れない。

「お、おれはジャン・ステイル……。おれに何か用？」

「え、まあね。ほら、この前、獣人のボーアと戦ってたじゃない？」

「ボーア……？ ああ炎の魔術使ってたヤツ、だよな」

「うん。知らないと思うけど、あのヒト毎月、不規則だけどね。来るの。街を壊すけど、門の近くだけ。人を殺すけど巻き込まれたヒトだけ。確実にアブないんだけど、すぐに逃げちゃうから捕まえないのよね。なんで来るのか、理由がわかんないし」

彼女は丁寧の説明してくれる。

自分より少しばかり年下に見える彼女はやはり華奢で、だが異種族ならではの身体能力を持つのだろう。

だが、わざわざ聞いても居ないことを補足してくれるあたり、

（こいつ、イイヤツかも）

そう思えた。

「あ、それでね。特に用ってわけじゃないけど……あんた、騎士を目指すんでしょ？ 明日試験だし」

「ああ、その情報をどこで仕入れたか甚だ疑問だが、その通りだ」  
寝台の上であぐらをかく。彼女は腕を組んで、ジャンを見下ろした。

「警ら兵のなんとかってヒトが教えてくれた。あの、ヒゲがすごいヒト」

「隊長じゃねえか……」

地獄耳のエミリオの名を関する彼は、街の、そして国が保有する軍の主力として活躍する警ら兵の隊長だ。もっとも全てを統率する隊長という訳ではなく、いくつか分けられた部隊の長である。だがやはりその実力は折り紙つきで、特に周囲に近づいた敵の足音を聞き逃さず、逆にそれを利用して勝利を収める――奇襲対策のプロであることから、その二つ名が冠されていた。

だからもちろん、ジャンの話を聞いていてもなんらおかしい話ではなかった。

「えっと、テューポーンつつたっけ？」

「テポンよ！ あんたの脳みそ醗酵はっこうしてんじゃないの？」

「おお、おれの頭は二酸化炭素でパンパンだぜ」

「もう、冗談はそこまでね」

腰に手をやり、呆れたように首を傾げる。

もしここでため息を吐かれたとしても、寝ぼけた頭だから傷つくことは無いだろう。多分。

「あたしはもういいんだけどね。ただウチの連れが騎士志願で、たぶんあんたと一緒に試験を受けることになるのよ。素質はあるように見えるんだけど、どうにもヘタレっていうか、気が弱いってわけでもないんだけどね……」

ははん、とジャンが鼻を鳴らす。

そういう事かと彼は察した。

「良かったら試験だけでも仲良くやってくれない？ 名前はトロス。黒い髪で、見た目はニンゲンそのもので、まあそわそわしてるから、見れば分かるわよ」

「トロそうな名前だな」

「せっかちだね。まあ、飽くまで良かったらだし、気にしないでもいいわ。邪魔したわね」

なんでもないような顔で彼女は寝台を飛び越えて、窓のサンへと跳躍した。身軽なジャンプで、まるで浮遊するように優しくそこにとどまる。窓の枠を掴んで身体を支え、首をジャンへ回した。

「せっかく起こされたんだ。仲良くやとくよ、テュポーン、だっけ？」

「デポンよ。ふふ、ありがとう。ジャン・ステイルね、覚えとくわ」

窓の外へと身を投げる。その直後にコウモリの羽根を広げて、風を起こす。と、風もないのに空中でとどまり、彼女は頬を赤くして微笑んだ。

「騎士試験、受かりなさいよ。あたしは”まだ”だから、今年受ければやさしくしてあげる」

「よく分からないがありがとよ。風邪、引かないようにな。薄着だからさ」

「あたしは大丈夫よ。年中コレだし。あんたもね」

「あいよ。おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

彼女は控えめに手を振って、また羽根をはためかす。するとその身は瞬く間に上空高く浮かび上がって、闇の中に影すら残さず消えていった。

ジャンはそこで寒さが染み込んだ身体を震わせてから窓を閉め、カギをそのままにして寝転んだ。

ただそれだけの会話で疲れたのか、その余韻もそこそこに、ジャンの意識は可及的速やかに夢の世界へと転げ落ちていった。

## 入試試験

「ねえジャン見てみて！ お城だよお！」

「ああ、いつみてもすごいよな」

噴水のある広場を抜けて、大通りをしばらく歩いた先に、半円に広がる広大な空間がある。それだけでも十分驚きだというのに、その突き当りには門があった。

そしてその向こう側にあるのが巨大な城だ。

見上げるだけで首が痛くなるような、荘厳で威圧的な雰囲気。でありながらも上品で、自分なんかが足を踏み入れて良いのか戸惑うほどに格式高いのが見るだけで理解できる。

少し高い丘の上に立っているのか、城は見下ろすように、あるいは見守るように街の奥にある。門の付近には警ら兵が槍を天に突きあげて構えており、その脇には大きな看板が設置してあった。

「えーっと、『試験会場はこちらです』だって」

矢筒と弓を背負いながらジャンの手を引く彼女は、そう教えてくれる。

同様に剣しか持たないジャンも、彼女に連れて行かれるままに、その開け放たれた門の中へと進んでいく。門の警ら兵に会釈をするのと、「頑張れ」だの「期待している」だのと妙に励ましてくれる言葉に嬉しく思いながら、やがて敷地内へ。

——この街に来た当初は観光客気分でぶらぶらと歩いてみて回ったが、それでも城の中ばかりは入ったことがなかった。

そしてまた、まさか試験が城の敷地内で行われるなんて考えても見なかったが……。

「うわあ、けっこう人いるねえ」

「本当に。百人以上いるんじゃないか？」

「でも大丈夫だよ。ジャンなら、ね」

「あまり自信を持ちすぎるのもどうかと思うけど。一緒に合格する



んだ、サニーだって大丈夫さ」

一応、合格すれば学校に通うことになるのだ。学校からさらに騎士へと昇格する時点で”ふるい”にかけられるとしても、騎士養成学校に入学させるのは一定数という数が決まっているはずだ。

となれば、一クラス三〇人前後だとすれば……推測できるのは三〇人から六〇人が限界。何クラスも育てる時間も無いだろうし、多ければ多いほど国の負担も大きくなる。

そしてまた、ジャンのように自分が”特殊技能”<sup>まほう</sup>を使えるか否かすら分らない者も多いはずだ。

一応試験内容に『適性検査』があり、その力が扱えて居らずとも、本質的にはその力を持っている。その有無を確認によって騎士になれるかが決定的になる。が、その検査は最終試験で午後に行われる。恐らく精神、肉体ともに健常であれば警ら兵として推薦するためなのだろう。

ともかく、今は考えても無駄な事だ。

筆記試験はあるかどうかとも疑わしいし心配だが、なるようにしかない。

今までだってそうだった。

ジャンはそう帰結すると、大きく息を吐いて、愛しい妹（仮）の頭を優しく撫でてやった。

「頑張れよ、サニー。試験中はずっと一緒にいてわけにはいかないし、自分の力を試すしかないんだからな？」

「もう、子供扱いしないでよ！ 私だってね、結構やる時はやるんだよ？」

「はは、頼もしいな。それじゃおれは人探しするから、適当にそこらへんぶらついててくれ」

「人探し？　じゃあ私もついてく！」

「んー、まあ、大丈夫か……な？」

トロそうな名前でせっかちという印象しかない相手だ。

黒髪ということだったが、今朝起きた時には窓に手紙が挟まって

いて『金髪に染めたみたい』との追加情報があつたから、それを念頭に置いて探せば良いのだろうか……。

周囲を見渡せば人だらけ。

それでも門のすぐ内側の、城の敷地内に見ればちょっとした空間に集まっている彼らである。

甲冑を着こむもの。ラフな、布の服だけで剣を持つ男。あるいは外套姿など。

また異種族は集団の二割ほどしか居らず、まるで猪をそのまま人型にしたような男や、トカゲのような皮膚と尾を持つ蜥蜴人族リザードマンの女など。そう種類が多いわけではなく、他にはドワーフハルビユイアの少女などありふれた種族ばかりだった。

周りを見るだけで、この中から探すのかとうんざりする。

だがその中で、一人だけ妙な男を発見した。

「ねえジャン？」

サニーもそれを視界に入れたのだろう。不安気に、手を握る力が少し強まるのを感じる。

「すまん、たぶん探し人見つかった」

今度はジャンが手を引いて、人ごみをかき分けその男へと近づいた。

短い金髪頭で、前面にボタンがつく黒い外套コートを着る男。彼は落着かない様子で、その場をグルグルと回転していた。

なぜ引き受けてしまったのだろうと後悔しても時既に遅し。

保護者は随分とまともな風だったのに、こっちがコレでは——そう思っても、約束は約束だ。

物理的に無理というわけではないのだから、いい加減決意するしか無いだろう。

だから胸いっぱい息を吸い込んで、口を開けた。

「あ、あの、さ。ちょっといいか？」

男には妙な斥力ちからがあるらしい。

彼の周りには人がおらず、半径一メートルほどだが空間ができて

いる。

人ごみがあまり得意ではないジャンにしてみれば羨ましい限りだが——こういったいかにも変だという条件付きで得られる力だったら願うだけだった。

だからその、ちょっと変な人に声を掛けた刹那に周囲が無意識に少しだけ緊迫するのが、彼にも良くわかった。本来ならばそこに居た人間なのだから。

果たして男は回転を止めた。

ちょうどジャンと対面するように停止し、恐らく長い間回っていたであろう筈なのにしっかりと、鋭い視線を彼に向ける。

瞳は燃えるように紅く、肌の色はジャンと同じ。背中にコウモリの羽根がある以外に、ソレ以外の特筆するべき特徴は一切ない。まさに人間そのものだ。羽根さえなければそう間違えていたことだろう。

「なんですか？」

男は冷淡に、直球に聞く。

せっかちで、どこか人見知りであるような事を聞いたが気のせいだったか。

そう思ったのも束の間、そんな男の膝は驚くほどに小刻みに震えていた。

気がつけばガチガチと顎を震わせて歯を噛みあわせているのすら見える。

純粹に、彼はジャンに怯えていた。

「あー、いや。そんな身構えないで欲しいんだけど……ほら、キミ一人だったし、もし良かったら試験始まるまでだけでも話したいなって思ってたさ。おれも緊張しちゃってた」

ははは、と発した乾いた笑いは、果たして良い方向に事態を招いた。

「あ、あー！ だよ、僕もちょっと緊張して、落ち着かなくてさ。知り合いも居ないし、姉さんが大丈夫って言ってたけど、でも全然。

ガチガチで」

「はは、良かった。おれはジャン・ステイール。んでこっちが」

「サニー・ベルガモットです。よろしく」

代表してジャンが手を差し出すと、彼は快くソレに応じた。

「僕はトロス。人間たちとはちよつと違<sup>きみ</sup>うけど、仲良くしてくれたら嬉しいな」

街の通りのような幅広の道。その両脇は芝生が敷き詰められており、城に近づく位置になると噴水があるちよつとした広場がある。

それからややあってからやってきた甲冑姿の男が約百人余りの集団をそこにまで移動するように指示し、また待機の命があった。

「最初は何するんだろう。ステイール、分かる？」

「ああ、一応募集用紙みたいな貰ったからな」

トロスにきかれて、ポケットから持参した紙を取り出す。

そこには集合時刻と場所、そして行われる三つの試験がおおまかに記されており、恐らく自主的にここに集まった者はそれを持っているだろう。

姉に為す術もなく連れてこられた彼は持っていないし、それも仕方が無いことだ。

「えーっと、第一次試験が身体検査。次が体力で、最後に適性検査だってよ」

「身体検査か……。ねえジャン、私の検査員が男の人だったらどうしよう」

「自分の並ぶ列を間違えることで回避できるから安心しろ」

「でもそれだといふ時間<sup>ひま</sup>ができるよね？」

「まあダベってりゃいいだろ。次が始まれば招集かけるだろうし」  
そう提案した最中の事だった。

「注視せよ！」

甲冑姿の男がそう叫んだ。

噴水の縁に仁王立ちして、まるで英雄ごっこをして遊ぶ子供のよ

うに腰にてをやつて。

兜を外して足元に置き、鼻の下にちよつとしたヒゲを伸ばした中年男性は、瞬く間に静まり返る集団を見て頷いた。

「ここに居る者はみな少なからずとも騎士を志したのだろう。その給金が目当ての者、騎士という存在に憧れを持つ者、ただ流されるままにここに居る者……それこそ、ここに立っている貴様ら一人ひとりに別の理由があると言っても過言ではないはずだ」

騎士らしき男は語り始める。

ただそれだけで、にわかに和らぎ始めていた空気は瞬く間に引き締まる。

彼は一拍置いてから続けた。

「騎士とは誇り高き戦士の肩書きだ。ただ乗馬し剣を、槍を振るい戦う職業だ。貴様らはこれからそれになる。だがソレ以上に、騎士という存在は最上に気丈で気高い。騎士とは職業だが、職業ではないとも言える。魂が、心が気高く誇り高く成長する！ 貴様らにはそれを感じて欲しいと思う……簡単だが挨拶を終わりとする。噴水の後ろに簡易小屋をこしらえた。貴様らは男女に別れ、それぞれ列を成せ。第一次試験はそこで開始する。以上！」

——騎士になるまでの試練。

そのまず始めがこれから開始される。

男の言葉の後に、各々はその表情をキッと鋭く引き締めて円形の噴水の左右へと流れていく。

「それじゃ、またね！」

十数人ほどこしか居ない女性の列に、サニーは紛れていく。ジャンは手を挙げる彼女に返事をしながら、トロスと共にぞろぞろと動き出す列の最後尾についていった。

トロスが小屋に入って数分が経過する。

列が出来上がってから既に一時間以上が経過していて、寒空の下、いくら晴れ間で日差しが暖かいと言えどもいい加減身体が冷えてき

た。

後ろではまた噴水付近に戻っていった志願者たちがたむろし、緊張がいくらか解れたからか、誰もが親しげに会話を楽しんでいた。それはサニーも例外ではなく、さっそく友達が出来たのか、リザードマンの少女と対面してなにやら話し合っていた。

ジャンは最後尾であり、後ろには誰もいない。強引にでも割り込めばよかったのかもしれないが、わざわざこんな所で心証を悪くする必要も無い。

彼は腕を組んで縮こまる。歯がガチガチと噛み合って音を鳴らし始める頃に、トロスは安堵したような表情で扉を開け、外に出てきた。

「ステイール、君が最後か」

「最初じゃないだけマシだよ」

「扉の前で声を待つんだ。入れて言われたら、入ればいい」

「ああ」

頷き、トロスと立ち位置を入れ替える。

やがて眼前に扉が迫り、彼はそこで足を止めた。

ひとつ大きな深呼吸でもして心を落ち着かせておこう。そう思っ  
て息を吸い込むと、声がかかった。

『次の者、入れ』

「っ、はい！」

肩を大きく弾ませてから、息を吐く。

彼は扉を二度叩いてから、開け、中へと入っていった。

「失礼します」

扉を閉め、頭を下げる。

——自室より少し広い程度的小屋には、簡素な椅子と、その前方に机があった。書類が何十枚と重なるそこには小柄な少女が居た。

左右の瞳の色が違う、ただそれだけの違いがあるだけの少女だ。  
なぜこんな所に幼い子がいるのだろうかと思うのも束の間、記憶が、  
その正体を見破った。

左右で長い髪を括る少女。それはドワーフ族の騎士だ。一度だけ見たことあるその姿は、以前獣人の襲来時に駆けつけた内の一人であるからだ。

「ん……、お前、どこかで見たことあるな」

書類に羽ペンの先を押し付けながら彼女が言った。

「と、まあいいか。お前が最後か？」

「はい！」

「そうか。まあ座れ」

「はい、失礼します」

一礼を置いて、椅子の左側へ。そこでその手前に移動し、ぎこちなく、操り人形のように腰を落とした。

ドワーフの少女は奇妙なものでも見るような目で彼を蔑みながら、その口角を少しだけ釣り上げてから咳払いを一つ。一呼吸を置き、口を開いた。

質問されるだろう事はおおよそ予測してきたし、その返答は全て暗記してきている。

これで問題はないが、一つだけ非常に困ったことが現在起きてしまっていた。

その返答を全て忘れてしまったことである。

その原因は、この少女の正体を思い出す過程により、集中が別方向に向いてしまったことだと考えられた。

（ええい、ままよ）

そう決意する。

見透かしたように、彼女の言葉はその直後にやってきた。

「えーと、ジャン・ステイルで間違いない？」

「あ、はい」

「住所はアレスハイムでいいんだな？」

「あはい」

「これは元々か？ この街で生まれ育ったっていう？」

「いえ、元々はその、コロンの街で過ごしてまして、十八になった

ので騎士になるべくここに越してきました」

ほう、と唸る。

ふう、と胸を撫でた。

「いい心がけだな。なら寄宿舎でなくとも良いわけだな？」

「あ、いや……共同住宅は結構金銭面で負担になるので、貯蓄が結構キツイ事になりました、ですね……」

「血族の家に転がり込んだわけではなく、共同住宅の一室を賃貸したっていう？」

「あーまあ。肉親居ないんで」

「それは、すまない。悪いことを聞いた」

「いえ、大丈夫ですよ。慣れっこですし」

彼女はそれから少しだけペンを動かして何かを記入した。カツカツと書きこむ音だけが空間内に響き、妙な緊張に包まれる。

彼女は少女だが、それでも大人っぽい言葉遣いだ。そして事務的でもある。

あの時もそうだったが、今回は特に固い口調だった。

だからそのせいで緊張が助長されているのかもしれない。

「まあいい。本題に入ろう」

彼女は言い、そしていよいよと彼は決意する。

「お前はなぜ、騎士に志願した？」

ごくりと喉を鳴らしツバを飲み込んだ。

妙に心臓が高鳴って、耳元で脈動が聞こえるような気がした。

乱れる呼吸を察されぬように息を飲み、彼はようやく口を開く。

「おれは昔、故郷を滅ぼされました。その時に、生き残りだったおれを助けてくれたのが……強くなるという事を、生きる希望を教えてくださいましたのが、騎士さまだったんです。ケンタウロスの、金髪で、碧眼の……。そして強さの象徴が騎士になったのも、その時でした。だからおれはそれから身体を鍛えて、ようやく今になったんです」

「騎士になって何かをするということが目的ではなく、騎士になることが目的という事でいいか？」



「いえ。おれは騎士になって人の助けになりたいんです」

「具体的には？」

具体的に――横暴すぎる戦火を出来る限り抑えたい。だがそれを成すには個人では到底不可能だ。

ならば街で、困っている人の手助けになりたい。しかし、であればわざわざ騎士にならずとも出来る事。

とどのつまり、困窮。答えは無く、正解は存在しない。

おもわず宙を泳いだ視線を、彼女は狡猾に見逃さなかった。

「つまり、漠然と”誰かの助けになりたい”と？」

その通りだ。

人の助けでもない、確かに村を焼き払うような事を止めたいことは確かだったが――。

彼が助きたいのは、その、強くなった力で手伝いたいのはあのケンタウロスの女騎士だった。今ではサニーと共に騎士になる事で頭がいっぱいだったが、根底にはソレがある。決意し、揺らがぬたった一つの思いだった。

だがそれを言うてどうなる？

寒いはずなのに、額から一筋の汗が流れ落ちた。

いや、だがここで落ちるわけにはいかない。妙な予感だが、次は無い気がするのだ。こと、自分に限ったことだが。

言えば少なくとも何らかの評価につながる。だが言わなければ何も残らない。

そう思い立った瞬間には既に、ジャン・スティールの言葉は紡がれていた。

「ただの騎士に、新米に何ができるかわからない。だけどおれは、手助けになりたいんです」

この平和な世界で。

特に戦争もない、異人種が現れてから特に平穏になったこの国で。「綺麗事を言っているわけじゃないんです。ただ力があるなら助きたい。誰を、じゃなくて、誰でも……困っている人を。助けを求め

ている人を！」

「……それがお前の正義か？」

「正義……？」

「騎士はいついかなる時でも、どんな場所でも悪に対抗し正義を守る。お前はその魂を守り通せるか？」

「はい！」

気がつけば、ドワーフの少女は微笑んでいた。

また筆を走らせ、簡単に一言二言を記入する。が、やはりその位置からでは何を書いたのかは分からなかった。

「では次の質問。義務教育は受けていたか？」

「はい。コロンの街で受けていました」

「なら読み書きは大丈夫だな。最後に何か質問は？」

「あー、その。お名前を伺っても？」

「構わないが、なぜわざわざそんな事を……」

「おれが騎士になった時に、お世話になるかもしれないんで」

彼女はふんと鼻を鳴らして、また記入する。

そこでペンを床に叩きつけるようにして彼女は立ち上がった。机を軽々と飛び越えて、瞬く間に座るジャンの目の前へ。

「立て」

言われるがままに起立。すると、彼女はボディチェックでもするように肩、腕、脇、など身体中に手を添わして検査する。

「座れ」

次いで、少しだけ自分より小さくなったジャンの瞳を覗き込むようにした。

蒼と、琥珀色の瞳。そして端正に整った、幼さが残るといふか幼さ前回の顔。そして石鹸の香り。それが近づき、赤面し始める頃に彼女は離れた。

「異常はないな。視力も、普通よりはいいくらいだ」

「あ、ありがとうございます」

「体つきも割合にがっしりしてるし。どこかで鍛えてたのか？」

「え、ええまあ。炭鉱とか、鉱山とかで六年間働いてました」

「ろ、六年！？　というと、十二からか？　すさまじいな……」

ほうほうと唸りながら、彼女は何度も彼の身体と顔とを見比べた。ジャンは何やら恥ずかしくなって、頬が熱くなるのを感じながら、されどどうしようもないこの状況を甘んじた。

「それじゃあドワーフはもう慣れっこか」

「まあ、すごいお世話になりましたし」

「そうかそうか、いやー、立派だな。十八で、ねえ。……あー、そうか！　お前、あの時の少年か！　ボーアの時の！」

「はは、あの時はお世話になりました」

そうかそうかと、今度は力一杯両肩を叩き続ける。うれしそうに、もう身体検査や面接なんて忘れてしまったように彼女の顔は、興奮やらなにやらで上気していた。

この上なく嬉しそうに笑顔を作って、まだ若者も捨てたもんじやないと褒めちぎる。それから頭を鷲掴みしてぐわんぐわんと振り回すと、今度はつかれたのか、机に腰をかけた。

小柄な身体は床から足を離し、ぶらぶらと振り子時計よろしく揺れる。

「あの時のみんなは結構褒めてたぞ？　警ら兵だってビビってたのに良く立ち向かったって。ただユーリア……あのケンタウロスだけは『無謀だ』って怒ってたけどな」

「いや、でも本当に褒められたもんじゃないですよ。ただ、その場の勢いで行っちゃっただけです」

「だがそうするにも勇気が要る。お前には、まずそれがあるって事だけでも誇るべきだと思う」

ぴょん、と机から飛び降りて、彼女は腰に手を当てる。騎士のポーズはこれが一般的なのかおと思うほどに、騎士はこうやっていた。

「ジャン・ステイルと言ったな」

「はい」

「私はミキだ。検査は以上。最後のお前に配慮がないのは申し訳な

いが、このまま第二次試験に移行する。準備はいいか？」

名を名乗ってくれた。

それは一概には言い切れないが――騎士である彼女がこの青年を認めた。そうとも取れるものであり、そして彼女自身はそういった意味合いで名前を教えていた。

この青年には期待できる。

そして、こういった若者こそ騎士にしてやらねばならないとも思っていた。

それはとても平等じゃないし、私情を挟むというか完全に私情だが、恐らくこの調子ならば、普通にやっていれば合格するだろう。彼女はそうとも思っていた。

「はい！」

気持ちのいい返事を最後に、第一次試験は終了を告げた。

## 体力検査

圧倒的だった。

「くっ、駄目だみんな退けッ！」

木剣を構える男が悲鳴のように仲間に命ずる。そして呼応するように、彼らは出会って僅か一、二時間やそこいらであるのにもかかわらず、それだけで前に出ていた二人は地面を弾いて飛び退いた。コンビネーションはこれまで前に出た組グループよりも拔群だ。旧来の友と組んでいるような戦いぶりである。

しかしそれはあくまでも”素人”にしては、だ。

鬼を前にして、それが通るはずがない。

「良い判断。六十点」

切迫する真っ赤な拳。燃えているわけではなく、血に濡れているわけでもない。肌の色素が濃密な緋色なのであり、そしてそれは腕のみならず全身がそうであった。

そして強打。

志願者、その三人組のリーダーのみが装備する胸の青銅器は音を立てて粉々に砕け散った。

——失格。

これはそういう試験だった。

集まった総数一〇〇余名が二から四名のグループを作り、その中で一人のリーダーを決める。

決定した代表者は木剣を人数分、そして青銅器と、それを括りつける紐を担当試験官まで取りに行き、それぞれが装備する。

そしてそのグループは、いつぞやの鬼族オーガの女騎士との戦闘が強い  
られた。

一太刀を入れる、あるいは五分間逃げ切れれば志願者の勝利。試験  
続行。

だが五分内でその青銅器を破壊された時点で無条件に受験資格が喪失する。つまりは落第だ。

あの身体検査、面接はこの戦闘を行う際に著しく障害があるものを省く為のモノだったのだろう。今回は奇跡的、というか当たり前にそれが居なかったただけだ。

この体力検査で”ふるい”にかける。

見ているだけでもよくわかるが、圧倒的過ぎる敵を前にして、逃げ出さずに五分間を守りぬく事は酷く困難だ。だから敢えて攻めに転ずる手段を選ばざるを得ないが、攻撃の隙を狙われて撃沈。

既に落第した十数組はみながそうだった。

そして体力が切れて戦闘を強制終了させられた者も多数。

まだ十数組残って居るが、指名は殆どランダムであるためにいつ呼ばれるか分からない。緊張が血流に乗って、痛む下腹部が少しだけ気になった。

「サニーちゃんが心配？」

無意識に零れるため息を聞いて、トロスが尋ねた。

サニーは今、珍しくジャンの隣に居ない。それは、仲良くなったらしい蜥蜴人リザードマンの娘が一人ぼっちだったからだ。最初は四人組はどうか、という提案を彼女がしたのだが、

『人数が多すぎると逆に不利になる可能性が大きい』

『素人ならなおさらだ』

ジャンとリザードマンから出たその意見が見事に合致したために、今ではその右腕、右足に鱗と鉤爪を持つその娘『クロコ』とサニーが、そしてトロスとジャンがそれぞれ二人一組で組んでいた。

少し寂しい気もしたが、こうやって成長してそれぞれ自立するのが当たり前なのだと彼は思う。

そしてまた、もし合格したらこれでサニーにも友だちができる。

これは嬉しい限りではないか。

「心配だが、あのクロコって娘。中々やるぞ、アレは」

「爬虫人はそもそも身体能力が高いらしいけど、それとは別に個人

の強さでって事？」

「ああ。まず立ち振る舞いが経験者だ。据えた腰、歩き方。無駄のない修練されたそれだ」

さらに右半身が鱗で覆われている。鉤爪もあるところを見るに、攻撃の主体となる部分だ。そして青銅器の着用は原則的に右胸であり、代表者は彼女。ならば、いくら鬼だとしても手加減をしながら掻い潜るのはある程度の難易度を誇るだろう。

死ぬ気で逃げれば、あるいは攻めれば五分はもつ。ジャンはそう評した。

もつとも、彼自身も素人だからあまり信ぴょう性のある評価とは言えないのだが。

「なら僕たちも負けてられないな」

「その通りだ。今はおれたちだからな」

——気がつけば呼ばれていたとある一組。

トロスとの話に夢中になっていたが、そろそろ順番が来るだろうと思って戦場と化すちよつとした空間に目を向ければ、そこにはまだ二人組が立っていた。

そして試験官の鬼も動きを止めていて……。

「五分経過。合格」

ハルビュイア

人間と鳥人の組み合わせ。その二人は暫くの間、言葉の意味を理解できていないような顔でそれぞれ見合わせていたが——実感が湧いた。そんな風に笑顔を作って、両手に作る拳を空高く突き上げていた。

「や、やったアツ！」

「あははは！ 良かった……！」

腰が抜けそうになる鳥人の肩を抱いて、彼らは鬼が示す方向——城内へと進んでいく。

まるで勢いがついたのか、あるいはコツを掴んだのか。単に彼女自身が見込みがある者には手心を加えているだけなのかもしれない。

そこからの合格者は徐々に数を増して行つた。

だがそれまで十数組が続き、合格するのは約半数。城内へと向かつたのは三十人に満たない数である。

そして残るのはいいよ、サニー組とジャン組。この二名で、

「その女子二名。来い」

どうやら随分と運に見放されているようだと確信したのは、その時がきっかけだった。

「はい！」

サニーが木剣を手に提げて前に出る。クロコは手ぶらで、そして――青銅器を付けずに出てきた。

何かがおかしい。その異変に気づいたときには既に、サニーの胸にはクロコが付けていると信じていたソレが装備されていた。

ジャンがそれに何かを思うよりも早く、鬼は指を鳴らし、その靱やかな腕を腰に構えて敵を待った。

「試験開始だ」

――言うと同時にクロコが弾けた。

地面を蹴り飛ばし背後へと送る。まるで地面が高速で動いているかのように、滑るように鬼へと肉薄した。

腕をふるう。鉤爪が、空気を切り裂いて鬼へと迫った。

顔面に襲いかかる爪を寸でで避ける。頭を下げれば、刃は虚空を切り裂いた。同時に彼女は体勢自体を低くする。初めての先制攻撃に怯む間もなく、手馴れた様子でクロコの懷に潜り込んだ。

その直後に迫る膝先。鱗が逆巻く蹴りが鬼の腹部目掛けて撃ち上げられる。またもや顔面に吸い寄せられる攻撃は、さしもの鬼も予想出来なかったようだ。

握った拳を解いて、前屈姿勢を無理やり崩す。大地に寝転がるようにしてやや仰向けになると、水面に浮かぶような体勢で大地を蹴った。

だが、その行動は”読まれて”いた。

クロコの陰で全力疾走し、命からがら背後に回り込んでいたサニ



ーが木剣を構えて待ち構える。それに気づいたのは、既に無防備な腹に木剣が振り下ろされた瞬間だった。

「ていつ！」

ペチ、と木剣が触れる。

それからややあってサニーの元を通過した鬼は背中を地面に擦りつけて停止した。

ただでさえ静かだった空間が、より静寂になる。

落第組は愚痴ることをやめて彼女らの様子を伺い、息を殺した。

そして鬼は何事もなかったように立ち上がり、身につけている革の胸当てと腰巻についた汚れを軽く払う。彼女は簡単にそうして、やがて二人に対峙した。

「なるほど、作戦勝ち。合格！」

「やったー！」

嬉しそうにぴょんぴょんと跳ねるサニーを微笑ましく見守るクロコは、それから促されるよりも早く彼女を城内へと誘った。その最中に大きく手を振ってくるサニーにジャンは返してから――この上無く大きく息を吐いた。

随分とレベルの高い戦闘のような気がした。

いや、通してみれば相手の油断を誘っただけなのだ。だが、少なくとも鬼を止められるという、実力がなくても相手にそう思わせる態度を示したことが偉大だ。間違いなく強い。彼は認めた。

同時に――なぜよりもよってあの組の後なんだと、嘆かざるを得なかった。

あの、合格して当然だというような態度。感慨もなく城内へと引っ込んでいった潔い、格好良く思える姿。

こちらは持ち前の体力で五分間逃げ続ける覚悟をしていたのに……決意が揺らぐ。

少しでも試したくなってきた。

気持ちはいつでも前向きだ。

胸の青銅器を指先で触れながら、自分だけは攻撃を受けていない

と再認識しながらも。

だがここでとち狂うわけにはいかない。負けても勝っても評価につながるのならまだしも、負けた時点で落第だ。個人ならまだしも、トロスを巻き込んで。

許されない。

よし、逃げよう。

彼はそうやって自分を正当化してみせた。こればかりは得意なので、人知れず得意げな顔でトロスの肩を叩いて合図した。

「なりふり構わない。作戦通りだ。いいな、トロス」

「わかってる。君ならそうしてくれると思った」

「落ちても恨みっこナシってのはおれの言い訳だけど、それもいいか？」

「構わないさ。もうこの時点で運命共同体なんだから。姉さんにどやされるだろうけど、もう心は決まってる」

「いいやつだなお前——」

「——私語は謹んで！ 最後、来い！」

ジャン・スティールの体力検査は、また三〇分ほどの間隔を開けてようやく開始した。

最後に回してくれたのは、おそらくミキナリの配慮のような気がしてならなかった。

ともあれ、全てを見学できたのは良くも悪くも良い判断材料になったのは確かだったのだが。

前に走りだせば良い。

そう判断して動き出そうとしても、どうしてもあの鬼の機動力故に叩き潰される未来が見えていた。

なら後退するか。

そう考えても、トロスを打ち破って投げて、彼もろとも吹き飛ばされる事態は簡単に予想できた。

自分にできる全てのことが、彼女には防がれてしまう。

彼女と同じ立場にたって、彼はそれをようやく理解できた。

頭の中での作戦が瓦解していく。その音を耳にしたのはその瞬間の事だった。

体力に自信があつたはずだが、僅か一分足らずの時間で息が上がっていた。顎が上向く。空を仰ぐ。

そうなる理由は、慣れぬ環境で緊張したせいで動きに無駄が多くなるのが主である。

「ステイール！」

トロスの合図。ジャンは勢い良く横転して、頭上から降り注ぐ強烈な殴打を避けてみせる。受身をとって流れるように立ち上がり、すぐさま走りだす。その後を追おうとする鬼の前に立ちふさがるのは勇敢なトロスだ。

「ふらふらと避けて、あんた、それでも騎士志願!？」

騎士になりたいから逃げてるんだよ!

叫びたくてもその余裕が無い。口は今や、呼吸をするためだけの器官と化している。

そしてまた、彼女がそう声を荒げたのは初めてのことだった

理由としては、ミキから随分と色好い評価を聞いたからだと思う。あるいは、あの上っ面の勇敢さを覚えてくれたからだろうか。

それは非常に嬉しいことだが、こと今回に限っては忘れていて欲しいところである。

「ステイール！」

「あい、よ！」

トロスの脇を抜けてジャンへと切迫。息も切れ切れで動きが鈍る。ジャンは振り返り、いよいよかと覚悟した。

木剣を構えて待つ。鬼は拳を振り上げ、流れるような軌道で滑るように彼の眼前、懷に潜るように深く踏み込んだ。

「逃げるなんてするから――」

振り下ろされる拳。そして触れる木剣の腹。それぞれが触れ合い、軋んだ音を立てて、

「くっ！」

木剣は呆気無く、悲鳴を上げて二つにへし折れた。が、拳は未だ勢いを持って彼の胸元へと迫る。ジャンはその振り下ろされる拳に手を伸ばして、触れる。

掴む。

背を向ける。

彼女の足の間に踏み込み、伸ばされた腕を肩に乗せた。

体重が背中にかかる。女性特有の柔らかさは、残念なことに胸当てやらに遮られ、何よりも疲労と緊張と、半ば脊髓反射的な行動ゆえに感じる暇もなかった。

少なくともジャンよりは筋力があるはずだと思っていた。身長は大体同じくらいだが、失礼な話少しだけ彼女のほうが重いと思っていた。が、それは幻想だ。

彼女の身体は簡単に持ち上がる。前屈すると肩に乗せられる腕を視点にして、くると一回転した。

身体は重力に則って地面に吸い込まれるように叩きつけられる。

背中を打ち、驚いたように目を見開きながら、肺の中の空気を全て吐き出したようにむせ込んだ。

一太刀……ではなく一本。入れたには入れたが、カウントされるかは不明だ。

あまりに無防備すぎる体勢は衝撃故に身体を痛める。だから最後まで握っていた腕を自分に引きつけるようにしてふわりとした着地を促し、それはある程度成功した。

ジャンは腕を離して少し離れる。

彼女は驚いた顔のまま。トロスは意外そうな顔で後ろから、横に並んだ。

彼がしたのは柔術だ。倭国と呼ばれる極東の島国に伝わる徒手、あるいは短い武器を用いて攻防するさいの技法を中心とした武術だ。やがて鬼は立ち上がり、ぼそりと漏らすように呟いた。

「四分二〇秒……経過した時間は」

「はは、窮鼠猫を囓んだか」

トロスが冗談っぽく言った。

「火事場の馬鹿力でもあるな」

ジャンも冗談っぽく言った。

鬼は、どこか見直したような。だけどどこか怪訝そうな、疑うような目で彼へと手を差し伸ばした。

「合格だ。ジャン・ステイル。そしてトロス、だったな」

手を握り返す。視線を交わし、じっと目を見据える。真っ赤な肌に、その琥珀を埋め込んだかのような瞳は妙に綺麗だった。

「わたしはシイナ。今回の試験、合格することを祈る」

「ありがとうございます」

深く頭を下げると、なにやら小さな笑い声が漏れるのを聞いた。顔を上げれば、微笑ましく微笑みを作るシイナの顔があった。

「このまま城に向かえば女中が案内してくれる。日程としてはこれから昼食休憩後、それぞれ個人ごとに適性検査ね」

鈴が鳴るような声。穏やかに彼女は説明して、それからジャンらに背を向けた。

「わたしは落第生の相手をしてくるから、行ってなさい」

そうして、第二次試験は終了を告げ、束の間の休息が開始した。

## 適性検査

昼食には広間のような場所があてがわれた。

巨人が出入り出来るほど大きな扉から中に入り、メイドに案内されるままに近場の部屋の中へと入る。その客間は数十人が入ってもまだ余裕があるくらいの広さを誇り、その中心には長机が鎮座する。その机には無数の料理が並んでいた。パンやスープから始まり、蒸し焼きにした肉をスライスしたものや、魚の丸焼き。サラダからデザートプリン、ゼリー、ケーキ類など、まるでこれまでのご褒美のように滅多にはお目にかかれないそれらがある。

既に中で待機していた者たちは食事を開始しており、ジャンらも入室時にほんの少しだけアルコール分の入ったぶどう酒がメイド達から渡され、それを口に含んでから少しだけ肩を落とした。

気が抜けた、というのが正確かもしれない。

他の志願者がわいわいと試験を忘れたように談笑し、料理に舌鼓を打つのを見ながらほっと息を吐いた。

トロスは既に料理を取りに行っている。対照的に、ジャンは壁に背中を預けるようにしばしの休憩をとっていた。

緊張ゆえの疲労だろうか。大して動いていないのに、妙に疲れてしまった。

サニーもクロコと楽しそうだし、トロスは料理に夢中だ。これで昼食休憩時間分はゆっくり休めるだろう。

「食事はお気に召しませんでしたか？」

リラックスできるようにぶどう酒を渡したのだろう。彼はそれで喉を潤していると、不意に声がかかる。扉付近で待機していたメイドの一人だった。

普通の人間だ。動きにくそうなエプロンドレスを着て、頭には白いレースがついたカチューシャを身につけている。長い黒髪が特徴的な、東洋系の女性だった。

「ああ、いやそんな事はないですよ。ただ緊張と疲れで、喉に通らなくて」

「それでは他に食べやすいものをご用意いたします」

彼女はそう言って丁寧に頭を下げる。背を向けようとするメイドを、ジャンは慌てて引き止めた。

「ちょ、ちょっと！ 結構ですよ、結構です。わざわざそんな……」  
メイドは振り返る。努めて無表情で、それでも、と食い下がるように言葉を返した。

「第二次試験合格者である皆様方には一時間後に控える最終試験に備えてリラックスしてもらわなければなりません。私たちはそうするための仕事を命ぜられていますので……その、困ります」

言葉が続かないのか、思いつかないのか。彼より歳上であるだろう彼女は気まずそうにやや俯いてそう告げる。メイドなりの世話焼き根性かと思っていたが、どうやら皆が何かを口にしないと怒られるらしい。気難しい職業だとジャンは思う。

究極的にはリラックスしていれば良いのだろうが、そこらへんはさじ加減だ。

ともあれ、何かを食べなければ彼女らの迷惑になってしまうらしい。そこまでして拒否をする理由があるはずもないジャンは、苦笑して頷いた。

「わかりました。手を煩わせたようすみません」

「いえ、こちらこそ……もしよろしければ料理をお持ちします。何がお好みでしょうか？」

両手を前に組み控えめな態度な彼女は、妙に親切にそう言ってくれた。

それは嬉しい提案だったが、ジャンは資金を持ちあわせては居ない。チップを要求されても無い袖は振れないものだ。

「あ、いや。そのくらいは自分でするんで。ありがとうございます」  
やんわりと拒否してみると、メイドはそこはかとなく残念そうな顔をした。一体なんなのだろうかと思いつながら会釈をして、背を向

ける。目指すは長机だ。

まず空の皿とフォークを取る。ひとまずパンを一つ拾い、それから適当に、彩色を気にしながら、バランスを考慮しながら、サラダ、肉、魚を一通り摘む。青年の昼食にしてはいささか量は少なめだったが、ただでさえ食欲が無いのだから十分だろう。

周囲は依然と歓談を続けている。トロスは遠征して遠いところの料理を漁っていて、やはりサニーはクロコのおしゃべりに夢中だ。寂しい気もする。だがどこか解放的な、清々しい気分になる。

一人は新鮮だ。

たまには良いだろう。

サニーは既に魔法を自覚しているから合格は確実だし、クロコ、トロスは分からないが……なるようにしかならない。それは自分だって同じだ。

定位位置にしつつある壁際に戻って、彼はまずサラダを口に運んだ。グラスは指に挟んで床に対して水平になっているが空だから問題はない。

「んー、まんま野菜だな」

自然の味だ。草というわけではないが、ドレッシングをかけなければ特別旨いというわけではない。ドレッシングをかけ忘れたが、わざわざ机まで戻るのは面倒だ。彼はサラダを食べきり、魚を口にする。

好きな食べ物は最後に残す主義である。が、その魚は思いの外美味かった。程よい塩加減。脂が乗り、疲れた身体に染み込むような味だ。癒される。活力が与えられるようだ。

こちらを残せばよかったと思う。最後に口にした肉は、味の濃いものの後だったせいか、妙に薄味に感じた。ハムよりは歯ごたえがあるが、それだけだ。

「ご馳走だったな……」

一通り食べてみた総評は、まあ美味かった、である。

炭鉱や鉱山での食事はパンや、ウサギや蛇の肉が主だったから牛



は新鮮だったし、中々食べられるものじゃなかった。野菜だって同じだ。魚も。

この街にきて、騎士になるまで資金が幾ら必要なのかわからないから散財は出来無いという理由で、食費は真っ先に削られた。それでもサニーが不服を言わない程度には材料を揃え、調味料だって適度に購入した。が、毎日肉を食べられるわけじゃないし、買いた物を頻繁にするわけにもいかなから生鮮食品はそもそもあまりなかった。

もつとも、それでも無いなりに食材は買いたしたから、ただこの城での食事は中々お目にかかれない手の込んだものばかりだ、という評価につながる。

だからどうというわけでもないのだが。

ただぶどう酒だけは気に入ったから、できれば愛飲したいものだった。

それから暫くの時間が経過した。

まったりとする雰囲気。

些細なアルコールが回ったせい、周囲の朗らかさに溶けこむようにジャンは微笑を作る。気分が良かった。

「お気に召しましたか？」

先ほどのメイドが近づいた。

嬉しそうな笑顔でそう訊いた。

「はい。中々食べられないものばかりで、とても美味しかったですよ」

他の機会であればもっと堪能できたことだろう。スープに、シチューやらなにやら。まだ食べてみたいものはたくさんあるが、どうにも食指が伸びない。食べる気力がないのだ。

下手に食べ過ぎて、適性検査で不備が出るという可能性を無自覚に心配しているのかもしれない。ともあれ、こういった立食パーティーのような経験は雰囲気だけでも味わえて良かったというものだ。「それは良かったです」

彼女はやはり笑顔で頷いた。可愛らしい、まだあどけなさが残る少女らしい顔だ。歳上かと思っていたが、もしかすると同年代かもしれない。もしそうなら、その歳でメイドなんて立派なものだと言は思う。

「ジャン・スティール様、でよろしかったでしょうか？」

胸の前で指を絡めるように手を握る。百面相と言うべきか、表情豊かなメイドは、今度は少し不安気に眉尻を下げていた。

「ああ、はい。そうですけど……」

「最終試験、開始致します」

軽く頭を下げて彼女は背を向ける。その最中に無表情に戻る彼女は、その後一言も口にせず歩き出した。その背中中、ついてこいと言わんとしていることは、さしものジャンにもすぐに分かった。

最後尾が二度あった。しかし最後の最後で、一番最初とはどういう見なのだろうか。

おそらく適性検査は最初の面接のような形で行われる。そして面接に限るものではないが、試験の順番で最初の人間というのは、判断基準にされる事が多いのだ。

最も大切だろうと思われる最終試験での順番が、最も避けたかった最初であるのは、今回彼にとって良いのか悪いのか、正直良くわからなかった。

——広い廊下を歩き、やがて玄関のフロアにやってくる。巨大な扉から真っ直ぐ続く紅い絨毯は、王座の間に続く道だ。

そしてメイドは、その上を歩き始めた。

左右の壁には扉はなく、向かう先は王座の間。

ジャンの緊張が瞬く間に高まったのは、言うまでもないだろう。そして思い出す。この試験は、ただの騎士団養成学校入試試験ではないことを。

”王立”騎士団だ。王が、この国が支援し創りだした組織である。ならば責任者は王であることは明白。

その面接官に王がわざわざ出向き、それぞれ品定めをするのは当然の権利である。それを予想はおろか、考えもしなかったのが不思議なことだった。

やがて、自分より一回りも二回りも大きな両開きの、立派な装飾がなされる扉が行く手を遮った。

「こちらの準備は整っております。扉はご自分でお開け下さい」  
手を前で組んで、扉の脇に彼女は立つ。おそらく、一番初めに彼が試験を受けることを知っていたからわざわざ親切にしてくれたのだろう。ありがたい心遣いだ。

「ありがとうございます」

「ご健闘をお祈りします」

「……はい」

緊張を隠せず、表情を強張らせた。あの昼休憩で緊張しっぱなしだったら、確実に頬の筋肉がこむら返りしていたことだろう。

コンコン。

ノックを試してみる。

『どうぞ』

男の声が返事をした。

ドアノブを捻り、扉を押し開ける。

彼は重いソレが作りだす隙間に身体を滑り込ませるようにして、中へ侵入した。

「失礼します！」

荒げるように挨拶をする。深く頭を下げ、顔を上げる。

紅い絨毯は長く続く。中に入ったというのに、王座は数メートル先の段差の、さらに先にあった。

先ほどの客間よりも遙かに広い空間、その王座の奥の壁には龍の装飾がしてあった。金でそれを形作る、見栄の権化であるようだ。が、城なのだから当たり前だ。一国の王が住まう城をわざわざみすばらしく飾るわけがない。

この豪華絢爛が唯一許されるのが、この城というものだ。

そしてその空間は、一言で言えば荘厳だった。

二言で言えば、すごく荘厳だ。

ジャンは歩き出し、段を上がって王の前へ。

二つある王座の内、その一つだけが埋まっている。白髪頭に冠を乗せた、白い顎鬚を蓄える老人。『レヒト・アレス国王』その人だ。王座のやや手前には、長槍ではなく剣を装備する甲冑姿の男が両脇に二人づつ並んで待機している。

ジャンは、王座の数歩手前で立ち止まり、片膝について頭を下げた。  
た。

「今日は下賤な民の為、騎士を志す我らの為に時間を割いていただき、大変光栄に存じます」

あまりに打算的すぎただろうか。

だが一番最初ということもあるし、代表として挨拶をして置くのは常識だろう。

それとも言葉が何か間違っていたのだろうか……返答の無い挨拶に、ジャンは不安になってくる。

恐る恐る下げた頭を上げてみる。

王は肘置きに肘を立てて、頬杖をついていた。

目が閉じていた。

王は寝ていた。

「……！」

そうか、試しているのか。

ジャンは直感的にそう考える。

コレをどう凌ぐか、王はその見事な回答を望んでいる。

そういった思考に落ち着いた刹那に、王の頭は頬を穿つ拳から落ちた。

肩がビクリと跳ねて、何が起こったのか理解できていないような眼で周囲を伺う。ソレに倣って、近衛兵は視線をジャンに向けてやる。

「よ、よく来た、少年よ」

そして、寝起きのようなしやがれた声が彼によく返される。

ジャンは心のなかで深く嘆息した。

——この国はこれで大丈夫だろうか。

「ふむ、ジャン・ステイルだな。話は聞いている。先日、我が騎士団が駆け付けるまで襲撃犯を抑えてくれたとかなんとか」

「ああ、いえ。滅相もないです。ただ調子に乗ってやったことなので……」

「勇敢な行いには変わりがない。基本的な心理検査、動機は既に聞かれているだろうし、貴公も疲れているだろう。手短に終わらせる」

「……はい」

思ったよりも適当なのか。あるいは思いやりあふれる行動なのだろうか。

少なくとも今のところ、王の威厳というものはない。いや、確かにあることはあるのだが、いかにも王で、逆らえばもう命はないというくらいに厳格な人を想像していた彼にとって、その存在はあまりにも親しみ易すぎた。

もつとも、外交の面を考えればその方が都合がいいのだろう。国内での信頼度もそうだ。

「十八歳以上で、読み書きができ、心身共に健康。募集要項にはその他に何が記してあったか覚えているか？」

「特殊技能の有無……つまり魔法を扱えるか、否か。ということです」

「うむ、そのとおりだな。基本的に、魔法が使えるか使えないかは先天的なものだ。そしてまた、使える者でも力の存在に気づいていない者も多い……ただ魔法があっても単純な肉体面やその他が未熟であった場合は我が騎士団を諦めてもらいたい所存だ」

「はい」

「貴公がここに居るということは、全ての試験をクリアしたということだ。騎士を目指すに値する、その最低限の位置には立てているという事だ」

だが一番の問題は、ここからなのだ。

「そして貴公が魔法を扱えれば……その素質があればめでたく、騎士養成学校への入学が許可される。余談だが、学校生活の二年間で魔法が扱えなければ残念ながら騎士にはなれない。最大で二年の留年が許可され、それを超えた時点で退学処分だ。入学するには、また春の試験を受けなければならない」

「……はい」

王が近衛兵に目配せをする。

先ほどの、寝起きのどこか間の抜けた姿はどこへやら、王たる尊厳は果たして保たれている。

合図された近衛兵は跪くジャンの隣に移動し、屈むようにしてジャンに声を掛けた。

「君、これを」

手渡されるのは、白っぽい石だ。石英のようだが、それにしても妙に白すぎる、氷のような石。

手触りは滑るようであり、感触は加工された水晶そのもの。だが自然な、どこか無骨な丸さを見るに加工はされていないはずだ。

そしてジャンは、その石を知っている。

昔みたからというものではなく、仕事で扱っていたからだ。

とある一つの鉱山。特殊な道具を作る場合にのみ用いられる、特殊な鉱物。

——魔石と呼ばれるのは、ちょうど彼が手の中で確認しているその石だった。

色彩は無数にある。環境によって色が異なり、魔石がもつ特徴も色ごとに変わる。

魔石というのは、魔力という不思議な力をもつ石の事だ。古くからある、希少なながらも様々な装飾や道具、あるいは武器に加工して使われている汎用性の高い鉱物。それが使用された道具は全て特殊な効果、効能を持つようになる。

本来肉体に紋様を刻まねば使用できない魔術を、道具に刻むこと

で”一部”を利用できたり、またそういった魔術の効果を持つように魔石を加工し、ただ身につけるだけで身体能力が強化されるなど。単なるお守りとして使われることも多い鉱物だ。

そしてこの白い魔石の特徴は、魔力伝達に過敏であること。

——魔術は妖精の力を利用して行われると言われている。

一人が一つだけ持つ魔法は、その魔力というものを利用して行われると言われている。

そうなれば、魔法が使える者は魔力を持つのだ。

となれば、その魔力に、魔石が反応する。無意識でも潜在的にそれを持つのなら、石は必ず反応する……それを渡された時点で、ジャンはそれを理解した。

「石が反応した場合、その色によって魔法の傾向を掴むことが出来る。例えば赤なら炎、熱、青なら水、氷雪……白なら光、あるいは大気を……なのだ、が……」

アレスは明らかに困惑していた。

また、周囲の近衛兵も毎年の光景をいつものように見守っていたのだろうが、ジャンは思わず漏れたのだろう当惑の唸り声を聞き逃さなかった。

そして彼自身も、少しばかり困っていた。

——石は輝いている。

この時点で合格は決定した。

それは嬉しいし、今にも両手を突き上げて喜ぶたいくらいなのだ。色なんて、魔法の傾向なんて正直なところ、どうでもよかったのだが……。

「透明の輝きとは……前例に無いな……」

アレスが唸る。

そう、石は透明に輝いている。意味が分からないだろうが、そのままの意味だ。ジャンだって意味が分からない。

ただ、透明だと判断できた理由は——この白い石が白く輝けば眩く直視できないだろうが、今はただ”明るくなっている”としか説

明できない所にある。濁ったような白い魔石が、存在感を示したようになる、たったそれだけの反応。

輝いていることには間違い無いのだろうか……。

「ふむ、面白いな。完全なる未知、何者にも、これまでの全てに染まらぬ新しい力というワケだ。だが例外的イレギュラーである分、使いこなすことはもちろん、己がどのような魔法を持っているのか自覚することすら難しいだろう」

アレスは、嬉しそうに口角を釣り上げて、眼を細めて、頬を上げて、顎鬚を撫でた。

それから、周りには近衛兵しか居ないというのに、声を少しだけ小さくして、

「貴公の学校生活、その成績や評価によって考慮しよう。貴公には、何か特別な力がある。そんな気がするのだ」

異人種がこの世界に現れてから生まれた、魔法という力。その時はそんな考えられもしない、ありえない特殊な力に多くの人間が目を見詰めて、あこがれ、称えた。

そして一五〇年が経過した今、その力は希少なながらもごく常識的に存在している。

ジャン・ステイルはその中で唯一生まれた、魔法の中でも異例的なものである——より異人種に理解があり知識がある王がそう評した。

お墨付きだ。

誇るべきか、戸惑うべきか。少しだけ困った後、ジャンはまた深く頭を下げた。

「ありがとうございます……ですが、大丈夫です。おれはこの魔法を使いこなす、必ずやこの国の為に尽力致します」

つまりは魔法を使いこなせなければ国のために働けないということだ。

従来通り、魔法を覚えるまで卒業できないという宣言である。

少し遠まわしだったような気がしながらも顔を上げると、それに



応ずるようにアレスは頷いた。

「相分かった。貴公の言うとおりにしよう」  
立て。

アレスはそう言うと同時に、自分自身も椅子から立ち上がる。

ジャンは促されるままに前に進み、やがて彼の目の前へ。国王の、  
畏れ多くもすぐ眼前へ。

「今日から七日後、試験と同じ時刻に城へ来るが良い。入学式を開  
催する。制服や教科書は三日以内に合格者の住所に配達しておく。  
服装は制服だ。荷物は特にない」

王が手を差し出す。ジャンは石を持ち替えて、それに応じた。

がっしりとした老人の、シワだらけの手が彼を包み込む。力強い  
握手を交わし、それから彼はまた椅子に腰を掛けた。

「活躍を期待しておくぞ、ジャン・ステイール」

「あ……ありがとうございますっ!!」

この言葉は、あの握手は、一国民としては異例なほどに光栄で、  
名誉なことのように思う。国というものの、王という存在をあまり知  
らない彼でさえそう思うのだから、それはそれは凄まじい状況なの  
だろう。

彼はそう深く頭を下げてから、振り返る。近衛兵に魔石を返して  
会釈をしてから、扉へ。

また王へと向いて、

「失礼致しました」

そう挨拶をして、彼は王座の間を辞した。

「おめでとうございます、ステイール様」

帰りを待っていたメイドは恭しくうやうやそう言った。

のぞき見でもしていたのか、あるいはその雰囲気で察して賭けに  
出たのか。

なにわともあれ自分のことのように微笑むその表情を営業スマイ  
ルだとは思えないのは、自分が純粋なお陰なのだろうかと思はる。

——呆気なかった。

思い返せばそうだった。

石は簡単に光るし、体力試験だってなんとか凌いだ。身体検査は論外だ。

それにそもそも、合格したという実感が、全く持っていないのである。眠る頃になれば実感も否応無しで湧くのだろうが、それまではなんだか勘違いしているような気分で、複雑だ。

「ありがとうございます。あのぶどう酒でリラックスできたお陰ですよ」

「あ、いえ……そんな事はございません。スティール様の持たれる実力が全てです」

そんな言葉は不意打ちだったのだろうか。彼女は少し言葉につまり、少しだけジャンから視線を逸らしてそう返す。

「そういえば、メイドさんって騎士団の世話もするんですか？」

少し余裕が生まれた。

だから調子に乗って訊いてみた。

彼女は少し驚いたような顔でジャンを見てから、やがて紅い絨毯を引き返すように歩き出す。彼はその後が続こうとすると、それを見た彼女は歩調を緩めて隣に並んだ。

「そうですね。基本的に騎士団の皆様も敷地内の寮で過ごされているので。私は城内の清掃係なので、あまりお会いする機会はないのですが……」

メイドにも役割というものがある。例えば清掃係でも、どこからどこまでの範囲を。配膳係や、買い出し係、王、后、姫の世話係など。庭の手入れには庭師がいるし、厨房には料理人が居る。それでもメイドの負担は割合に大きいというらしい。

「はは、じゃあ騎士になった時はよろしくお願いしますね」

この城に勤めているのならば、少なくとも今よりは会う機会は多くなるだろう。

冗談っぽく、だがその本心をさらけ出して言ってみると、今度は

吹き出すのを抑えるように口元を抑えた。

「自信家なんですね」

「まあ、そうですね。でもおれはどのみち、騎士以外には興味ありませんから」

騎士になる。今まではそれしか見て来なかった。

だが今でもそれしか見ていない。

これで学校を無事卒業出来なかったとしても、また入試を受けて、入学して……繰り返すだけだ。

「メリィです」

「……はい？」

「私の名前。騎士になったらよろしくお願いします、ですよね？」

「ああ」

手を、ぽんと打つ。

唐突だったが、どうやら仲良くしてくれるらしい。

これまで友達の居なかった彼にとっては嬉しい限りである。

「ジャンです。ジャン・ステイール」

「知ってます」

うふふ、と笑う。可愛らしい少女だとつくづく思う。

サニーにあるようにでない穏やかな雰囲気を纏う女の子だ。エプロ

ンドレスが良く似合うメイドさんだ。

女騎士たちが持つクールビューティなものとは大きく違う、それとは別の魅力。

新鮮だった。

この街に来てから、多くのものにそう感じていた。

「それでは、ステイール様はここでお別れです」

玄関の扉の前で止まると、彼女は平然と言う。惜しくも、寂しうでもない。いつでも会えるから大丈夫だと言うような風体で、扉へと促した。

「お友達なら、庭園でお待ちください」

メリィはそう言って軽く手を振った。

ジャンも振り返し、扉に向かう。

彼女はまたこういった往復を繰り返すのだろう。やはりメイドという仕事は忙しそうだ。

そう思いながら、扉を開ける。軋んだ音を立てて、中へと漏れる、彼を照らす光の隙間が徐々に開いてくる。

外に出た。

眩い陽光が、突き刺さるようにジャンへと襲いかかって――。

彼は、天高く両手を突き上げる。

「よっしゃ！」

小さな勝利感。

全てはここから始まるはずなのだ。

だが、この合格を、じわりじわりと心の奥から染み出し始める実感を、彼は感じずに居られなかった。

――最終試験を合格に納めて、ジャン・スティールの入試試験は終了した。

## 順応の日々

新しい環境での一週間とは、ドギマギと緊張に駆られらしく無くもぎくしゃくしながら過ごしていれば、気がつけば過ぎているという、長いようで短く感じるあつというまの期間である。

そしてまた、新しい人間関係が概ね構成し始める一週間でもあった。

「おっはー」「おはよ」「どうよ、昨日の」「あ、あれメチャいいわ」

なんて、相手の出方を探り合いつつも親睦を深め合う、どこにもあるような若者の会話が交錯する。

登校する道。往来には、妙に堅苦しい白い制服を着る男女が歩いていた。

学校は城の南東、約一キロほどの距離にあり、学生寮は城と学校の通過点にある。だから、そんな楽しげに笑いあう彼らの様子は嫌でも目に入り耳に届いた。

憂鬱ではない。

むしろ微笑ましかった。

彼も皆と同様に制服をまとい、肩にかけるショルダーバッグには今日行われる授業日程に合わせた教科書、そしてサニー特製の弁当が入っている。どれもコレも、今所持しているもの全ては学校から購入したものだ。

サニーとあわせて、まさか資産の三分の二が吹っ飛ぶとは思わなかった。

「ねージャン？ 今日のおべんとは頑張ったからおいしいよ？」  
不景気な表情を見たのだろうサニーは、心配そうに顔を覗き込んでそう言った。

ジャンは笑顔で頷く。

「ああ、ありがとう。サニーの弁当はいつも美味しくて助かるよ」

買いだめした米がだいぶ残っているのが不幸中の幸いだった。

寮は家賃も無く、水も使い放題。台所もトイレ、浴場は全て共同だし、男子女子で分かれているが、少しでも出費を抑えたい彼らにとってはそれだけでも上等だ。

そして寮生は、一年生三十人のうち、大体半数ほどがそうだった。ちなみに学年は二クラスに分かれていて、十五人ずつ。奇跡的にサニー、トロス、そしてクロコともクラスは一緒になっていた。

そしてクラスでも、挨拶するだけの者から日常会話を交わす者が多くでき、立ち位置も整ってきた。

全てが順調に來ている。

少しだけ問題なのは、クラスの半数以上が――異人種という事である。

そしてそういった関係で微妙なギクシヤクがあるのは、多くが城下町ではなく、その支配下、支援下にある多くの街や村出身の者が多いからだろう。簡単にいえば、慣れていないのだ。

加えて純粋に異人種に好意を持っている人間も少ない。憧れすら抱いているジャンは、その中では珍しい方だった。

「よっ、ステイール!」

「サニー、ステイールくん、おはよ!」

クマのように毛深く、ライオンのタテガミのような髪型の男が背中を叩き、その後ろからやってきた昆虫の羽根や、蜂のような触覚と腹を持つ女子生徒らが追い抜いていく。

「ああ、おはようみんな」

そうしてわざとらしい早歩きを、されど勘付かれぬようにクロコはサニーの隣にやってきた。

「あ、クロちゃんおはよっ!」

サニーは親しく挨拶する。クロコもそれに笑顔で応対した。

物々しい右半身を持ち、また見た目相応にクールな彼女はあまり感情を表に出さない。さらに口数も少ないから少し心配だったが、サニーには心をひらいているようだ。

やはり同じクラスに居るのだから、誰かが苦痛に感じる環境を作りたくないと思っていたから、これはいい傾向に思えた。

彼がそう、人知れず満足気に頷くと、

「うん、おはよう。二日の休みがあっただけど、ステイールに変なことされなかった？」

思わず吹き出した。

「な、ど、どういう意味だよ！」

「そのままの意味だ、色魔が」

「クロちゃん、ジャンはそんな事しないよ？　優しいけど、家事は全然できないから私無しじゃ生きてけない身体なだけで」

「お前が元凶か！」

なぜ大して接していないクロコにこんな妙に傷つく誤解を受けなければならぬのかと思っていたが、その誤解をもたらす元凶は身近に居た。

思わずその尖る耳を引っ張ると、

「いたたたっ！」

涙目になって必死に抵抗する。振り回す腕はかくしてジャンの腕に鋭いチョップをかまして、手を離すと同時にクロコがサニーの頭を優しく撫でた。

「サニー大丈夫？」

心配気に彼女を見守る一方で、キツとジャンを睨み返す。

ジャンはさらに何か返そうと思ったが――外壁に囲まれた校舎、その柵のような門が見えてきた。もう無理だと肩を落とし、彼は為すがままで校舎へ、そして教室へと向かった。

校舎は三階建てで、一階部分は食堂や保健室、職員室などがある。二階部分は二年教室が、そして三階部分には一年教室が並ぶ。規模的にはそう大きくも広くもないこの校舎で一日の大半を過ごすことになる。

まず校舎の昇降口から外に出れば、広大な空間がある。授業時間

中は閉ざされる門が見えるそこは屋外訓練場であり、肉体訓練や模擬戦闘などの授業は主にここで行われていた。

さらに校舎から伸びる渡り廊下から向かえるのは、校舎顔負けの大きな図書館と、その近くには人工的な水たまりがある。正方形に大地を繰り抜いたようなそこは『プール』であり、夏場はここで訓練もするという。

そういった具合に、施設は充実していた。

総数百人にも満たぬ養成学校、訓練学校とも呼ばれるここで、およそ十人前後の騎士が毎年生まれているらしい。大半の者は卒業出来なかったり、あるいは過酷さに堪え切れずに自ら騎士への道を辞退するからだという。

「そうか……じゃあ今週から本格的にって感じだろうな」

食堂で集まって食事を終えた後、それぞれ自然的に解散となる。

サニーとクロコは教室に戻って周囲を巻き込んで和気あいあいとお喋りをしている。ジャンは絨毯が敷き詰められている廊下で、校庭が見える窓に身を乗り出すようにしながら、トロスと談笑していた。「多分ね。ステイルなら大丈夫だと思うけどね。姉さんもそう言うってたし」

——授業内容は、教育というものから六年も離れていた彼にとっては退屈以外の何者でもなかった。

ただ座って、話を聞く。数式を解く、数学という授業もただ延々と公式を覚えるまで似たような問題を解かされるのだ。さらに状況訓練という授業では、あらゆる作戦下で、どのような不測の事態が起こるか、誘発されるか、そこでどのように行動するのがもっとも適切なのか。そういった事を学ぶ。

武具の扱いもまずは机上で習うし、騎馬だってそうだ。

まずは理屈からという考えだ。

だが、そのやり方はジャンに良く合っていた。実際にやってみるにあたって、モノがどういった原理でどう動くのか。武器はどういった事を目的に、どう使われるべきなのか。そういった事を理解し



た上で行うのが一番効率がいい。何よりも身体の負担にならない。

そんな事を考えていると、不意に後ろから気配が迫った。

「ステイルくん、トロスくん。何してるの？」

振り向くと、チョロリと細く長い舌を覗かせた女子生徒が立っていた。深い青色の髪を持ち、それを薄めたような水色の宝石が如く綺麗な水色の瞳の女性だ。上着をしっかりと身に付けて居るものの、その引き締まる腹部が、へそがあらわになる。

そして彼女はスカートも、ショーツも着ていなかった。

「ああ、委員長」

言葉に、彼女のすぐ後ろでとぐろを巻く尾がちよろちよと反応した。

そう、彼女の下半身は蛇である。

彼女は蛇族<sup>ラミア</sup>の少女だった。名前は『レイミイ』。これからの学校生活でクラスの代表となる立場にわざわざ立候補した、立派な女の子だ。

「おれは今何もしてないをしているんだよ」

「へえ、よくわかんないけど」

「まあ普通にトロスと話してるだけだしね。レイミイは？」

「あたし？ そうねえ、貴方に話しかけたってところかな」  
てへ、とわざとらしく舌を出す。

打算的な行動だと彼は思う。

「レイミイは学校に慣れた？ 結構、周りの女の子たちと話してるみたいだけど」

「うん、まあね。ただちょっとね、ヒトの男の子が怖いかな」  
ヒトが怖い。

それは、これまでの経験や聞いた話でよくあるパターンだ。

異人種は人間の多い場所に好んで住み着く。といっても勝手に居住を構える訳ではなく、移民として普通に転居するように街に済むのだ。そして閉鎖的な場所であればあるほどに外からの人間は珍しく、それが異人種となれば珍しいどころの話ではなくなるだろう。

そして幼い子供ならばなおさら、異人種に対する態度は顕著になる。子供というものは、自分とは違う場所を指摘し弄りたがる生き物だ。

そのあとの出来事は想像に難くない。

一言で言ってしまうえば、いじめに遭うのだ。そしてそういった環境にあった異人種はそう少なくはない、というのがこれまで聞いてきた話である。

全てが全て、この国内、城下町内のようにうまくいく話ではない。残念な話だが、一五〇年が経過した今でも、異人種が存在が常識的になっても尚、それが受け入れられる環境は決して多いとは言えないものだった。

「やっぱり慣れかな。でもおれもそのヒトなんだけど？」

「あー、なんかステイルくんて、あんまりそういうの関係無いって感じるの。良くわかんないけど、ステイルくんって異人種わたしたちでも普通の人間みたいに接してくれるでしょ？　ちよつとの動揺も気後れもなしに。ただちよつと、ぼーっとこっち見てくることはあるけど」

「それは見とれてるだけだよ。だってすごいよ、魅力的っていうかね。おれたちに無いものを持ってるから羨ましいっていうか。もっと仲良くなりたいかな」

「ステイルって女好きだよな」

「あ、トロスクンもそう思う？　しかもなんか手馴れてる感じしない？」

「分かる、日常的になってるんじゃないかな」

気がつけばそういう話に移行する。

まだ一週間しか経過していないのにそんな不名誉な称号はいただけないものだ。

ジャンはそれらの声を飲み込む程大きな声を荒げるように、話を転換した。

「あ！　ああ、そういえばさ——この校舎の地下って知ってる？」

そしてまた、不意を突くようなその質問に、それぞれが疑問符を浮かべるように彼を注視した。

「地下？ なにそれ」

「僕も知らない」

うまい具合に興味を逸らせたようだ、ジャンは胸をなでおろす。安堵の息を吐きながら新鮮な空気を吸い込み、勿体ぶらせるように説明を開始した。

「なんでも地下には、『呪い』が封印されてるらしいんだよ」

「呪い？」

「なにそれ」

「まあ、超ヤバめの魔術みたいなもんかな。それが具現化して、ヒトの形で暴走したんだって。それを地下の一室に封印したとかなんとかって話」

この話の出自はシイナ。あの鬼族の女騎士である。

聞いたのは、入学式であり、そこで挨拶をした際だった。なんでまためでたい日に幸先の悪い話を聞かせるんだと思っていたが、まさかこんな所で役立つとは思わなかった。

今では感謝感激雨あられだ。

「へえ、異人種じゃないんだ？」

「みたいよ。権化そのものって感じかな」

細かいところはよく知らない。聞いた話だからだ。

だからそこらあたりは全てジャンのさじ加減、イメージで語る。

どのみち縁のない話だから、どこまで飛躍してしまっても関係無いだろう。

「でも地下って入り口ないわよね？」

「絨毯で隠してあるんじゃない？」

「あー、それじゃあ搜索は無理ね」

と、レイミイは残念そうに肩を落とした。とぐろを巻く尾もそこはかとなく元気がなさそうだ。

「いや、一応委員長なんだから、むしろ止めようよ？」

「委員長なんだから、危険かもしれない場所を確かめておいて、そこから対策を立てるべきだと思わない？」

もっともらしく言ってきた。

たしか委員長に立候補した時も、他に誰も対抗馬が居なかったのにもかかわらず妙に説得力のある言葉でまくしたてていたな、とジャンは思い出す。

頼もしいと感じられるが、突っ込みどころはいくつか隙間を開けるようにある。警戒すべきか否か、迷ってしまう点だ。

「さすがレイミィ、頼もしい」

ひとまずスルーしておくに越したことはない。

彼女もその返答を流すようにうなずいてから、また改めてジャンを見据えた。

「そろそろ授業始まるわ。遅刻しないように教室に戻りなさいね」

「ああ、ありがと」

と言って、彼女はうねうねと尾をうねらせながら滑らかに前進。割合に速い速度で教室の中へと戻っていった。

——順調だ。

ジャンは改めてそう思う。

人間関係も良好。憧れの異人種も身近に多いし、授業にも追いつける。

だが同時に、ここまで都合よく進むことに不安を覚えた。

また何かあるのではないだろうか。直感的にそう思う。

ジャンはまた窓の外へと身体を向けて、空を仰ぐ。晴れ渡る青空は、いつ見ても心が澄むようで、少し気が紛れた。

「気のせいなら、いいんだがな……」

それからややあって、授業開始の鐘の音が鳴り響いた。

## 春季の疾風

その日の放課後。

春の陽気に誘われて眠りこけていれば、授業が終わった頃に目が覚めた。

「おー、じゃーなステイール」

「まったね、ステイールくん」

可笑しそうに笑いながら、獣人、虫族、植物族は挨拶をして去っていく。やがてただでさえ少ないクラスの中には、その半数程度しか生徒が残っていなかった。

ジャンも、特に慌てるようではないが、カバンに教科書を詰め込み帰宅の準備を開始する。

「ねえジャン、私たちこれからちよつと遊びに行くんだけど、ジャンも行く？」

と声を掛けたのはサニーだが、振り返ればクロコを含む女子二人が群れをなして彼女の背後にたむろっていた。おそらく仲良くなったお友達なのだろう。一人は頭に大きなハイビスカスを咲かせ、スカートのように花卉を広げる植物族の女性である。

仲良き事は美しきかな――さすがのジャンも空気が読める男だ。

ここで「行く行く！」と笑顔で大手を振る愚か者ではない。

「あー、悪い。今日はいいや。また今度な。じゃあみんな、サニーの事よろしく頼みます」

言いながら彼女の頭に手を置いて、冗談っぽく頭を下げる。

彼女らはくすくすと笑いながら、「いえいえ」だの「こちらこそ」だのと親切に返してくれた。

「サニーちゃんのお兄さんって面白い人だね」

「えへへ、まあね。自慢のお兄ちゃんです」

妹のような存在だとは思っていた。だがそれでも血は繋がっていないし、そもそもジャンは人間で、サニーは妖精<sup>エルフ</sup>族だ。まず物理的

にありえないことだが、彼女らも”兄のような存在”と聞いてそう口走るのだろう。

彼は思わず少しだけ驚いてから、納得し、軽く手をあげた。

「それじゃ、また明日」

「うん、じゃーね！」

もう寒さに怯えることも身を震わせる事もない春。

そして労働の必要もない、一日を過ごして僅かな疲弊すらない夕方というのは懐かしすぎて、ある意味新鮮だった。

ジャンは大きく伸びをして道を歩く。やがて近づく寮の前はスル<sup>1</sup>。

トロスは姉と待ち合わせをして帰ってしまったから残念なことに一人ぼっちだが、ここを敢えて利用して街をぶらぶらと観光するという手が残っている。特に城周辺には店も少なく民家もあまりないが、だからこそ興味深い。

また適当に店を見てまわるのも良いだろう。いかにも暇人で商売の邪魔になるだろうが、なんにしろ今程に落ち着いていて、なおかつ労働が無い日は無いのだから、ただ帰って寝て潰すのはもったいないように思えた。

「ほー。んつとに、いつ見てもすごいな」

やがて城の前にまでやってきて、思わず足を止めた。

清々しい程に巨大で荘厳。縁のない場所のようで、騎士になればここに仕えることになるのだ。これからは飽きるほど見ることになるのだろうが、それでもジャンは、それから少しの間目を離せずにした。

そんな事をしていれば、やがて風景の中で動く物体に注意が向く。それが――不意に空へと高く飛び上がって、こちらに向かってくるものならば尚更だ。

「なっ……えっ、ちょ――」

ただの鳥だと思っていたが、その姿異様に大きすぎた。そして近

づくにつれて、それが翼を大きく広げ楽しそうに空を滑空する女性の姿だというのが見えた。その姿が、ちょうど自分の元に突っ込んでくる事もばっちり。

空気を切り裂いて、まるで重力によって地面に吸い寄せられているかのような滑空。楽しげに頬を上げて笑みを作っているものの、瞳はまっすぐとジャンを睨み、瞬く間に切迫。

息を吐く暇もなく突風と共に迫り、その四本の趾あしゆびが彼の顔面を掴まんと広げられて――。

「う、わ――」

頭を抱えるようにして屈み込む。

直後に鳥人は、暴風をまき散らしながら数メートルほど後方の地面に着地した。翼をバサバサと羽ばたかせて体制を整え、ごく優雅な着陸である。

心臓が破裂する勢いでバクバクと激しい鼓動を繰り返す。

思わずへたりこんでその姿を眺めていると、彼女はくるりと楽しげに振り向いた。

肩に届くくらいのライトグリーンの髪を振って、それからジャンにこれでもかと言うほどの笑顔を向けた。

「ごめーん、驚かせちゃった？ でもじつとこっち見てるジャンくんの方が悪いんだからねー？」

と、まるで自然に名前を呼ぶ彼女にうろたえる。

彼女はそれに気づいたように、そういえば、と続けた。

「あたしはアエロ。ほら、獣人ボーアの時に居たの、覚えてない？ ミキもシイナも会ってるって聞いて、どうもズルイなって思ってたさー」

楽しげにカラカラと笑う彼女は、大きく胸を反らしていた。そしてそこにもフワフワとした羽毛が顔をのぞかせていて、また豊満な胸が笑うたびに揺れていた。

胸の谷間が見えるような穴の空いた、首を包むように襟がある長袖のシャツを着る彼女は、それ故にその鍛えられ引き締まった抜群のスタイルが浮き出ていた。

だからいささか冷静になったジャンにとっては、存在そのものがあらゆる意味で刺激的であり、眼を逸らさざるを得なかったわけである。そうすると、自然的に無言になり、

「ん、どうしたの？ まだ驚いてる？」

なんて、未だへたり込んでいるジャンへと屈み込んで、覗くように顔を近づかせた。

「あ、いや……は、ははは。驚きましたよ、突然飛んでくるんですから」

自分が情けなく赤面しているのを感じながら、精一杯の虚勢を張る。決して動揺せず、平静を装って対処してみるが――無駄だった。アエロはそれから自分の谷間に興奮している事に気づいて、ははん、と鼻を鳴らした。

彼女は趾であしゆびジャンの腹を掴むと、そのまま被さるようになりつけた。

「へえへえ、聞いたとおり、異人種は全然、平気なんだ？」

「へ、平気だったって、この街じゃみんな平気でしょう？」

「そりゃ年季が入ってる人はね。ジャンくんの歳だと、慣れてても親しくお友達ってのは珍しいよ」

「あー、そうですね……」

クラスの中を思い出せば、彼女の言葉通りなのが分かる。

確かにある程度の会話を交わしたりはする。だが一緒になって遊んだり、遊びに誘ったりなんて事は今までなかった。

「今日は一人なの？ いつもあのエルフの女の子と一緒に居るけど」

「ああ、サニーは友達と遊びに出かけて、今日は一人ですよ。暇なもんで、街でもぶらつこうかと」

「へー、それじゃあ」

と、彼女は翼をジャンにつきつけ、羽毛で鼻先をくすぐってみせる。

それが妙に淫靡な行動に思えてしまうのは、彼の意識がそちらに偏っているためだろうか。



「お姉さんと二人きりで遊ん——」

アエロがイタズラっぽい笑顔を向けて、そう口にする刹那。

それをものの見事に雰囲気ごとぶち壊しにして声を掛ける輩が現れた。

「お、ステイール、奇遇じゃん」

そんな無作法な声に思わず肩を弾ませる。

驚いたように、肩越しに後ろを振り返り見ると、そこには二人の男が居た。人間の、彼と同じ制服を着る生徒だ。

加えて説明すればクラスメイトである。

獅子のタテガミのように逆立たせた髪が特徴的な者や、長髪を後ろで括る者。共通しているのはジャケットを脇に抱えて、ワイシャツのボタンを胸元まで開ける妙に露出度の高い格好をしていることだろう。

そして一週間過ごしてわかったことだが、異様なまでに異種族に差別的である。

「どしたん、そんなところで寝そべって。人外に食われてんの？」

男が言うのは極めて差別的の台詞だ。だが心の底から異種族を恨んでそう口にする皮肉なソレではない。単なるその場でのノリであり、悪ふざけだ。

百歩譲って、人間同士ならまだ伝わる。あまり良い印象を抱いてなければ笑えるし、友達同士なら縁を切る覚悟で制するか、愛想笑いで済ますだろう。

だが異種族には通じない。

誰も、見ず知らずの人間に、外見が違う、故郷が違うという事だけで馬鹿にされれば頭に来るだろう。

ジャンはだから、その刹那に振りまかれた殺意を機微に察知して——足にタップし、アエロに降りてもらって立ち上がった。

やがて目の高さが対等になる。

——頭に来るのは、異種族が大好きなジャンも同じだった。

「なあステイール、たまには人間と遊ぼうぜ？ お前学校に来てか

らずっと人外に付きまとわれてキツいだろ」

「そうそう、今からアクセ買いに行くんだけど、一緒に行かね？」

馴れ馴れしく肩を掴み、組む。

不快な体温が服越しに伝わり、ジャンは思わず嫌悪した。

作法も礼儀も何もない、恐らく義務教育を経て高等教育を受け、以降の六年間をろくに学ばず無為に捨てたのだろう。なぜ合格したのかが不思議な連中だった。

「キツいのはお前らの方だよ」

ああ、言ってしまった。

大した葛藤もなかったが、いざ口にしてしまうと何かが崩れてしまったように思う。

ケンカなんてしたこと無い。だが胸を焼く怒りは久しぶりだ。

これでクラスでは迫害されるだろうが――構わない。学校にはお友達を作りに来てくれるわけではないのだ。

何が起こったか分からないように、ぽかんと口を開ける男の腕を振り払って彼らを引き剥がす。

「あ？ お前何言ってるの？ 舐めてんの？」

「どんな場所にもお前らみたいなのが居るってわかった、嫌気がさすよ。おれはお前らみたいなのが大っキライなんだ。お前らみたいなのを、なんて言うか知ってるか？」

「は、テメエ調子こいてんじゃ――」

「口が臭いんだよ、ド低能が」

食い気味で吐き捨てる、およそ口にしたことのない悪意。

喉が、顎が、四肢が痙攣するように小刻みに震える。自分が何か、とんでもない事をしているような気がしたが、なんだかどうでも良くなってきた。

男がツバをまき散らしながらジャンの胸ぐらを掴み上げる。もう一方で、手持ち無沙汰の青年は振り上げた拳を、何の迷いもなく彼の頬に振り落とした。

衝撃が顔面を歪め、骨を伝達して脳みそを激震させる。

ひどい痛みだ。とても、簡単に決意して相手に与えられるものではない。となれば、彼らはそれに慣れていて、人の痛みを無視して攻撃ができる立派な兵隊なのだろう。

思わずよろけて跪く、が。

「炭鋤マンの体力舐めんなよ！」

立ち上がりざまの殴打。顎を殴り上げれば、タテガミの男は大きくのけぞって、よたよたと後退。のちに尻餅をつく。顎から素直に衝撃を伝達されたがゆえに、彼の眼にうつる世界はぐるぐると回っていることだろう。

さらに長髪の男へと拳を構えるが――。

「やめなさい！」

翼から離れた羽毛が振り上げた腕に絡みつき、まるで縄のようになって動きを止める。

それと同時に、アエロが傍らに現れた。

「一発は一発。それ以上はダメ。それに……」

キツと、先ほどの殺意を込めて彼女は二人組を睨みつけた。

だが、その殺意の源になる感情は、先程とは大きく異なっているのだが。

「あんた達も分かっているでしょう？」

ジャンに言い聞かせるものとは大きく変わる、冷淡な言葉。

そして彼らもソレを感じ取ったのだろう。立ち上がり、衣服の汚れを払う暇もなくバツが悪そうに背を向け、退いていった。

「バカじゃないの？ 確かに異人種あたしたちに優しくしてくれるのは嬉しい

けど、人間は人間と仲良くしなきゃ、ダメなのよ？」

広場のベンチで、ジャンとアエロは隣り合って座っていた。

頬の殴打は大した威力ではなく、口の中を切る事はおろか頬が腫れ上がることも無い。

「バカって……まあ、感情に流されたのには確かに後悔してますが」  
それぞれアイスを口に運びながらまどろむ夕方。

アエロに奢ってもらったのは少し恥ずかしいような気もするが、助かったことには違いない。

「でもお姉さん、ちょっと嬉しかったな。ああいう、男気のあるのは嫌いじゃないよ」

「はは、喜んでもらえれば良かったですよ」

コーンまでを食べきると、アエロは「よいしょ」と立ち上がる。それから腰を曲げてジャンに顔を近づかせると、そのまま舌を伸ばして頬についたアイスを舐めてみせた。

「……っ?!」

「あはっ、こういうのは初めてだった?」

頬に伝わる熱い、柔らかい感触。鼻をかすめる甘い匂いに、その全てに頭の芯が煮えたぎってしまいそうになる。頬が、顔全体が真っ赤になって、彼女は楽しそうに笑った。

「でもね、お姉さん大奮発してもっとお礼したいんだ。貴方みたいな人は初めてだから。あの獣人<sup>ホーア</sup>の時のお礼も兼ねて……ね?」

彼女はそう言って、優しい微笑みを見せた。

「くっ……、あ、アエロさん……もうっ!」

イキそうだ。

凄まじい重力が身体に直接振りかかり、さらに全身を凍えさせるような突風の中で、ジャンの意識は幾度ともなく逝きかけた。

彼は今、地上から遙か高く離れた上空に居た。

腹を鷲掴みにする鳥足が肉に食い込み、そしてそれを成している足の上には楽しげに空を舞うアエロの姿が。

なんでも彼女は今日仕事が休みで、暇を持て余していたらしい。騎士にも休みがあることに少し安心したが、彼女が暇つぶしのために誰かを誘おうとしていた所にジャンを発見したという経緯だった。そして思いもよらぬ男気あふれる行動に彼女は気を良くして、空中散歩へと相成った。

聞く話によると鳥人族はある程度の信頼や親密度を築かなければ、

こういった共に空を制するような行動は取らないと聞いたから良いことなのだろうが――。

目が回る。

下を見るしか無いジャンは暫く前から目をつむっていたが、いよいよ自暴自棄<sup>やけ</sup>気味になってきて目を見開いた。が、景色がまともな景色として彼の脳に刻み込まれることはない。

「どーしたの？ もう限界？ まだ三〇分も経ってないよ？」

「い、一時間経ってます……」

「あはは、そうだっけ？ やっぱ楽しいと時間が経つの早いね。ジャンくんはいい男だし、独占したくなっちゃう」

「は、はは、そりゃどうも」

呼吸が出来る事が幸いかもしれないが、全身に突き刺さるような突風や、速度やらでいい加減グロッキーになってくる。

そもそも掴まれ方からして、捕獲された魚かなにかのようだ。

いくら仲睦まじくなったとしても、これでは恋人同士なんかではなく、獲物と獵師<sup>ハンター</sup>にすぎない。

「でも、いい景色でしょう？ 風も、気持ちいい……」

速度をやや緩めれば、空中と飛び交う鳥と同じ速度になる。

肌に触る風は途端に柔らかなものになって、上空からの光景も、いくらか落ち着いて見学できる。

となると、その新鮮な光景はあまりにも広大で、思わずため息が漏れた。その余裕が出てきた。

「うわ、上空<sup>そら</sup>から見ても街でかいですね」

――円形のようになる外壁の中に存在する巨大な街。空の上からでもその大きさは随分と目立つものだ。

そこから黄土色の道が草原の中を突っ切り、道の通過点には森が生い茂る。

またその道とは逆方向、城がある近くから外へと伸びる道の先には海があり、近辺には小さな漁村らしき集落があった。

大雑把に見れば森の先にも小さな町があり、上空でさえ小さく、

豆のような大きさに見えてしまう街がさらにその奥にある。それがジャン・ステイルが保護されていたコロンという街だ。

あらゆるものが小さく見えるその位置で、ジャンは世界の広大さを改めて認識した。

この広い大地の中で、こんなちっぽけな人間が四苦八苦して生きている。そう考えれば、異種族だとか人間だとか、そういったものが小さく思えてくる。

「はは、アエロさんはいつもこの世界を見てるんですか？　羨ましいなあ」

「でしょ？　いいわよ、空は。小さい事がつまんなく思えちゃうもの……あ、そうだ！」

「どうしたん——」  
ポイツ、と。

ジャンの腹を鷲掴みにする痛みが、不意に喪失<sup>きえ</sup>した。

にわかに彼を取り巻く重さが失せたと思うと、身体は大地に吸い込まれるように自由落下する。

風がまた暴風となって全身を蹴り、臓腑が全て浮き上がるような不快感を催した。

「でえええええええっ！！」

だからそんな間抜けな悲鳴も気にならず、

「ほら、抱きついて！」

目の前に、垂直に降りてくるアエロにさえも、何の感情も抱けなかった。

ただ藁をも縋る思いだ。だから彼女の言葉は既に耳に届かず、ただ手を伸ばし、その細い体軀<sup>からだ</sup>を抱きしめた。

それから少しの間は速度がやや緩むだけで、バサバサと幾度か翼をはためかせれば、ようやく緩慢に落下し始める。

豊満なバストに顔を埋めていたジャンはそこでようやく、己の破廉恥な行動に気がついたが——どうしようもなく、その密着体勢のままアエロを見上げた。

「あははっ、ごめんね？ 足が疲れちゃって」

「な、なら降りればよかったじゃないですか……」

どれだけ平静を装っても、激しく高鳴る心臓は彼女に伝わってしまう。そして、それが落ち着いた今でもなぜだか元に戻らない理由さえも。

彼は再び頬を赤く染めて、横を向いた。

「いい景色なんでしょ？ だったらもっと、少しでも長く一緒に居たいじゃない」

まるで空中で直立するような形のまま、彼女はゆっくり回るように振り返る。景色は、海の方へと転換した。

「これを見せたかったし、ね」

海に大陸が飲まれていくような砂浜。その先には、空の色を写す蒼い海が広がり、その先はにわかに赤くなる。

水平線に身を沈めつつある太陽は、それまで世界を明るく照らしていたソレだった。

今まで見たことのな光景。

水面はキラキラと揺れて光を反射させ、どこか偉大ささえ覚える凄まじい風景だ。

ジャンは思わず嘆息した。

「……すごい」

としか言えない、語彙のない自分がなんだか情けない。アエロに申し訳なくなってくる。

「でしょう？ ヤなことがあったらいつも見に来てるの。でも、今度からはジャンくんを見ればそれがすんじゃうわね」

「な、なぜですか」

「だってこの思い出を共有した相手だもの。貴方を見れば、今日のことを思い出せるし」

と言いながら、彼女はその翼で、ジャンの頭を包むように抱いた。「何があっても前だけを見るのよ。後ろに夢なんかないんだから」  
そうして、ゆっくりと空を惜しむようにして彼らは下降する。

——奇妙なまでに心に残るその言葉を胸に、ジャンは地に降り立ち、アエロと別れて、急ぐわけでもなく、家路についた。



## 戦闘訓練、開始

「あー、今日は校庭三週したらここに集合だ」

そう告げる戦闘教官の言葉に、校庭に集まっていた各々の表情は徐々に弛緩してくる。

これまで二週間ほどずっと校庭を走ったり、筋力トレーニングをしたりなど体づくりが基本だった授業には無かった発言である。そこからそれぞれが察するのは、『実技』という言葉だ。

実際に木剣を握り、あるいは弓、槍を手にして戦うための訓練。それが、脳裏によぎったがゆえに彼らは喜んでいた。

体力づくりは確かに大切だが、退屈で、さらにしんどい。これが午前中の授業に組み込まれていれば、次の授業に確実に支障が出るレベルの疲弊だ。というのは、ジャン以外の感想である。

そしてまた実技というものが未知である事も、彼らの興奮を助長させているのだろう。単純に「かっこいいから」という理由も、もちろんあるのだろうが。

「ようステイール、良かったなア？」

そう言って背中を力一杯叩くのは、この間の二人組だった。

タテガミの男は嬉しそうに肘鉄をジャンの脇腹に突き刺して走り去り、長髪の男もその後が続く。

前回、アレがあつてから割合に陰湿な嫌がらせもなく済んできたと思つたが――ずっとコレを待っていたのかと思うと、ご苦労様とでもねぎらいたくなる。その意欲を他のことに持っていけば、もっと生産的な生活が出来ると思うのだが、彼らにとっては余計なお世話であり、言っても無駄なことなのだろう。

因縁を買うだけだ。

ジャンも自分のペースで走りだすと、すぐ横にトロスがついてきた。

「さっきの連中と何かあったの？」

「いや、特に何もないけど」

「……相談してくれよ、友達だろ？」

最近のトロスはなんだか落ち着きを持ち始めている。

早くもなんらかの成長を遂げたようで、風によって後ろに流されてオールバックになる彼は非常にナイスガイだった。

童顔かと思っていたが、顔だけを見るとなかなか渋い。ジャンはそういった意味でも見直し、肩をすくめるように頷いた。

「あいつら一回ぶん殴ってから目え付けられるみたいなんだぜ！」

思い出しながら言えばなんだか心の奥底からふつと負なる感情が沸き起こってくる。だから極力元気に振る舞い親指を突き立てると、「誰だお前」と突っ込まれた。

「何か嫌がらせとかされてる？」

「いや。ただ同じ寮だから、部屋の扉思い切り蹴っ飛ばされたり、トイレットペーパーが常に切れてたり、風呂入ってる時に服破られてブレーカー落とされたくらいしかないねえ」

寮は共同住宅とは違い、一軒家の中に自室をそれぞれ作り、台所やトイレ、風呂などを共同に使うようになる。そして彼らも同じ寮住まいであるためにそういった事が起こり得た。

もつとも、上級生も居るためにそうそう目立った行動ではなく、それこそ隠れてこそそそという訳だ。

「うわ、典型的なイジメじゃん。やり返さないの？」

タツタツタ、と教官に目を付けられない程度の速度で五〇〇メートルある外周を走り続ける。

トロスもこの二週間である程度鍛えられたのか、慣れたのか、呼吸を乱さずに会話を続けられていた。

「やり返したって、火に油注ぐだけだろ？」

「そんな事言ったって……」

「だから大丈夫だって。飽きるまでやらせときゃ良いんだよ」

「そ、それじゃあ……多分、異人種グループの空気が悪くなるよ。キミはただでさえ評判良いんだから」

「まあ外交官的な意味だけだな」

クラス内でも異人種から人間へ、直接何かを伝えられることはあまりない。多くはジャン・ステイルを介した伝達となり、あったとしても事務的な会話以外は行われない。

そもそも、これが普通の姿だった。

世界から見れば、この国の在り方が少しばかり異常なのだ。

確かに世界的には受け入れられた存在だが、という具合である。クラス内は見事な縮小図になっている、と言っても過言ではない。

「なんでこんなことになったのやら……」

「ぶん殴ったからだろ？ まあ、キミの事だからどうせ逆恨み的なものだろうけど」

「いや、そっちじゃない」

「ああ、そっちね。まあ、なんでだろう。普通に接してくれるからじゃない？」

とはいえ、人間側だってなぜ普通に接しないのかがジャンにはわからなかった。

確かに見た目のインパクトはあるが、それこそが異種族の特徴だし、そこに魅力さえある。個人ごとに感想は異なるだろうが、一、二週間ほどが経過してその改善が見られないというのは根本的な何かがあるのだろう。

親に「付き合ってはいけません」とでも釘を刺されているのだろうか。

だが彼らとて最低でも十八歳だ。自己判断でどうにかする筈だし、わざわざこの国に来ているのにもかかわらず”異人種は苦手です”なんてもう意味が分からない。

だから、ようするにきっかけが必要なだけなのかもしれない。

となれば——圧倒的なまでに反異人種を掲げる輩は障害になってしまう。

「時間が解決するもんならいいんだけどさ——」

「まあそんな感じで、二人一組になって打ち合ってくれ」

素振りを数回こなし、構え、振るい方を教えた後、教官は適当にそう告げる。

そんな適当な指示に、思わずジャンは食いついた。

「ちよつと、教官！ そんなんで良いんですかッ?!」

「最初だからな」

「さ、最初なら自由時間みたいなもんでいいんですか?」

「まず道具に慣れなくちゃな。身体だって出来上がってるわけじゃないし。まあ経験者は居るが、少ないしな。殆どが高等教育からの入学だから、まずはこういった時間が無くちゃならない。お前だって最初は雑用から始まったんだろ? それと一緒にだ」

「そ、そういう事ですか……」

なんとなく分かる。

彼の言う通りだ。誰もが入学に備えて身体を鍛えているわけではないし、しっかりと出来上がっているわけでもない。彼らはここで肉体を作り、武器に慣れる。そのつもりで入学したのだから。

二年もあるのだからそう急ぐことはないし、ジャンだって最初に覚えた違和感を、今ではあたりまえのように感じている。それと同じで、このヌルい訓練が徐々に厳しくなっていく過程も、慣れてしまっただろう。

そうこうしていると、魔の手が彼の背中を勢い良く平手で打ちぬいた。

スパーンと小気味良い音が破裂音が響き、背中に鈍い痛みが走る。そういった行動をした男は、悪びれるでもなく肩を組み、ジャンを誘った。

「なあスティー、一緒にやろうぜー」

やってきたのはタテガミの男だ。

あたりを見渡すと、長髪の男は割と真面目にトロスと打ち合っている。しっかりと反撃させ、ゆっくりでありながらも組手となっているのを見るに、長髪の事は少し許そうかと思った。

「あー、そうだな。ちょうど余ってるし」

言いながら、二の腕を力一杯つねる男にイラついた。

なんて幼稚なんだろうか。

こうやってはしゃいだり、異人種を差別するのも、あるいは――。それぞれが二人一組になって木剣を振るい、受け、返す中で、やがてジャンとタテガミも対峙した。

「てめえムカつくんだよ！」

喧噪の中で、辛うじて教官には届かない程度の声音で叫ぶ。そして剣を振りかぶり、力任せにジャンが構える木剣へと叩きつけた。

「スカしやがって、人外が居なけりやなにもできねえクセしてよ！」  
相手にあわせて剣を対面させ、受ける。容赦無い一撃一撃が、剣伝いに衝撃を伝播させるように腕を痺れさせる。攻めに転じる暇のない全力の攻撃に、彼は受けるので精一杯だった。

「クソ野郎が、この、このッ！」

「じゃあなんでお前は、そんなクソ野郎に一々関わるんだよ」

「ムカつくからだよ！」

「ひっそりと暮らしてるだろ。可愛いものじゃないか」

「うっせ、黙れ！」

上段からの振り下ろし。ジャンは本能的に大地を弾こうとするのを防いで、剣を横に、頭上に構える。

やがて衝撃。

体重を掛ける一閃が木剣の腹を力一杯叩き、そして流される。頭上から脇へと剣が移動するのを感じながら振ってやると、タテガミの男は重心を崩したようにそのまま前のめりに倒れていった。

あれをまともに受けていれば、さすがに怪我にはならないだろうが、かなり痛い。そんな事でいちいち激昂されてはジャンとてかなわないから起こした行動だったが、やぶ蛇だっただろうか。

「おれが嫌なら無視してくれ。それがお互いのためだろう？ わざわざ潰して、何が残るんだよ。気持ちの悪い爽快感だけだろう？」

「スカしやがって！ なに余裕ぶってんだよ！」

「スカしてねーって」

「だまれおまえええッ！」

男の中で何かが切れた……何か、決定的な何かが。

肩肘を張って振り回す剣撃を、ジャンは仕方なくいなしながら受け続ける。

一撃、それはそれは重い一撃だが、腕だけの力で振るうそれらだ。さらに構えもぎこちなく、棒を振り回すのと同じ感覚だ。路上でのケンカと同意義。剣を剣としてではなく、一つの道具として扱う意識。

故に攻撃を防がれた事によって跳ね返る衝撃は、彼の身体に蓄積されていく。これまでの訓練を適当に過ごしてきた青年なら無意識の内に限界は近づいているだろう。

そしてその時は、大した時間も置かずに来てきた。

ジャンが剣を受ける。衝撃が彼に、そして男に伝わり――柄が男の手の中からすっぽ抜けた。

木剣は空中でくると回転して、孤を描いて彼のやや背後の地面に突き刺さる。誰にも当たらなかったのは、彼の自棄気味の乱舞に周囲が気づいて、空間を作ってくれていたお陰である。

「て、てめえ……！」

思わず崩れ落ち、上目遣いで睨んでくる男に、ジャンは大きく嘆息した。

「本当ならお前なんか徹底的に無視するんだけど……腕、痛いだろう？ 冷やすかマッサージするかしないと明日から響くぞ。医務室行ぶべらっ!？」

格好良く手を差し伸べる。男は呼吸を乱しながら勢い良く、その手に伸ばした拳を振り上げ、ジャンの顔面に叩き込んだ。

ジャンは不意打ちを素直に受け、視界がぼやけるのを見た。

世界が一転し、今まで地面を見ていた筈なのに、気がつけば空を仰いでいた。

どさりと音がして、背中から全身へと衝撃が走る。痛い。受身も

取らずに倒れてしまった。

「は、はっ？　ばっかじゃねーのてめえ？　俺を舐めすぎ、なんだよ。医務室ぐらい一人で行けるっつーの！」

——しかしまあ。

こんな真っ直ぐなヤツばっかなら、やりやすいんだけどなあ。

足音が遠ざかっていくのを聞きながら、ジャンは大きく息を吐いて微睡まどろんでいく。

意識は間もなく、ブラックアウトした。

「ジャンくんって結構バカなのね。カールなんて無視してれば良かったのに」

レイミイはとぐろを巻く尻尾をジャンの上に乗せてそう言った。

結局授業が終わった後に意識が回復し、タテガミの男『カール』も授業を抜けた後そのまま帰ってしまったらしい。ひとまず関わりたくは無いから、向こうから何かをしでかすまで放置で構わないだろう。

そして医務室の寝台に寝かされているジャンを待つのは、サニーとレイミイ、そしてトロスと……。

「あー、どちら様？」

「わ、忘れたの！？　あたしよ、テポンよ！　トロスのお姉ちゃん！！」

なんて激昂するのは、いつぞやの深夜にジャンの部屋に忍び込んだ弟想いの姉テポンだった。

「は、はは。冗談っすよ。ただ長い間見なかったんで、ちょっと誰かなーって思ってただけで」

「すっかり忘れてるじゃないのよ。脳みそ発酵してんじゃないの？」

「それ、いいすぎ」

「まあ何にしても話は聞いたわ。いじめられてるなら相談すればいいのに」

「いじめたって……ただのケンカでしょう？　第三者が入るよう

な事じゃないっすよ」

イジメだと言われて思い返してみれば、イジメというのは言いすぎなような気がする。

ただの個人の憂さ晴らしであり、嫌がらせだ。イジメの定義は分からないが、そういったものではないような気がする。

もつとも、ここまでやられて彼を擁護するつもりなどは無いし、その義理もないが——かといって友人らに本人の居ない所でボロクソ言ってもらうのも気が引ける。非常に卑怯で卑劣な感じがするのだ。

そもそも鬱陶しいと思っただけで、ソレ以上の感情は無いのだから。

無関心といえぱったりだろう。

更生させるつもりは毛頭ないし、仲良くするつもりも同様。生活が脅かされなければそれでいい。

——グレルキツカケは、こういったものなのかもしれない。

漠然と考えながら、カールに少しだけ同情した。

「まあ話はもう終わりですよ。もうカールが手を出してこなければいいし、来たら来たで話し合います。迷惑だとか、そういうんじゃない……こう、おれたちの問題、みたいなの？」

しかし、と思っただけをしてみる。

すると、扉の近く、部屋の隅で腕を組むクロコの姿を発見した。

そして気づいたのだが、見舞いに来ているのは全て異人種だった。人間は誰一人としていない。

身体から妙なフェロモンでも出しているのかと疑いながら、彼はそれで自分の立場を再認識した。

「あ、そうだ」

と手を叩くのは、テポンだった。

「うちに来ない？」

と誘うのも、テポンだった。

「イヤですよ」



即答してみる。

腹の上でとぐろを巻く蛇の尾が、なにやら意図的に腹部を圧迫するような窮屈感を覚えた。

「ス、スミマセン……今日はなんだか食欲が無いので……」

「ジャンくん本気で言ってるの？」

レイミイが小馬鹿にするように言ってくる。眉尻を下げ、可哀想なものでも見るような顔だ。

同情されているようで悲しくなってきた。

カールもこんな気持だったのだろうか。

人はこうして、分かり合っていくのだろうか――。

「家で生活しない？ って、先輩はそう言ってるのよ」

「リアリィ？」

「だって居づらいでしょ。他の人の迷惑になるかもしれないし」

「あー、そういう見方もありますねえ」

尻尾をタップして重量を軽減してもらう。

すると、レイミイはなぜだか腕を組んでそっぽを向いてしまった。おれが何をしたってんだ。

「ねえジャン、そうしてもらった方がいいよ。せつかくこっちにきてゆっくり出来ると思ってたのに、家でも疲れちゃうよ？ 本当だったら私の部屋でいいんだけど、寮長さんが厳しいから……」

「あ！ じゃあサニーちゃんも一緒に家に来ればいいのよ！ 家広いし、部屋は無駄にあるしね。トロスはいいでしょ？ それで」

「姉さんの好きにしていいいよ。まあ、ジャンの判断が一番だけどね」

「ほらジャンくん、先輩の好意をどうするの？」

尾先がチロチロと揺れる。それを腹の上で見ながら、ジャンは静かに頷いた。

もうどうにでもなれ、というのが正直な所だ。

「じゃ、じゃあ週末にでも、お邪魔します……」

そういう事になってしまった。

## お引越し

寮の退去にはそう時間はかからず、事務係から書面を渡され、理由と署名を記してから約三日ほどで許可が降ろされた。

紙製品からなる板状の包装資材を箱に組み立て、荷物を整理しつつ中にぶち込む。蔵書や着替え、教科書など。他に何かあるかな、と部屋の中を漁るが、そもそもこの街に来る前ですら大した荷物がなかったことを思い出す。

やがて約束の週末が訪れた。

二連休の初日。

テポンは荷車を引いてやってきた。

「……これが、先輩の自宅ですか」

「なにを今更、先輩とかガラじゃないわね。いつも通りでいいわよ」

——そこは噴水広場から東に進んだ所にある。

少しばかり進めば、鉄門に蔦が巻き付いたり、その奥には噴水のある庭などが多く見られる館が殆どの、この城下町でも一等地と呼ばれる区画に入る。彼女の家は、その通りの中心部付近に建っていた。他と同じように鉄門が侵入者を拒み、外から見える庭には芝生が敷き詰められている、小奇麗な光景が目に入る。そしてその奥にあるのが大きな屋敷だ。

二階建てだが、厳かで、だからといって目立つわけでもない、良くも悪くも他と同様の館と言った風の建造物である。

「さ、入って」

施錠のされていない鉄門は、少しだけ重い手応えをみせてから、滑るように開いていく。錆びているわけではなく単純に重量のせいだろう。彼女はそれを全てを収納部分に押し込むと、大きく息を吐いた。

「ようこそ、我が家へ」

「お邪魔します、と、これからよろしくお願いします」

「わ、私も来て、本当に良かったんですか……？」

サニー・ベルガモットは不安気に口にする。そしてそれを表すように両手で胸を抑える所作を見せる。テポンはそれに苦笑するよう  
に、

「だって兄妹きょうだいでしょう？ 一人ぼっちは寂しいもんね」

それから優しい笑みを見せて、サニーの頭を優しく撫でた。まるで姉の風体だ。ジャンはそう思いながら、荷車を引いて門から中へとお邪魔した。

——芝生が敷き詰められている庭には、されど噴水は存在しない。その代わりとばかりに、ローズアーチを始めとした多種類の花が庭の一面を占めていて、ちょっとした庭園になっていた。

そこにはジョウロを片手に、そういった花壇などを手入れするつなぎ姿がそこにある。気配や物音に気づいたのか、ソレはゆっくりと振り返り、やがて彼らを視認した。

「ああ、お嬢さん……と、その薄汚い小僧と可愛い娘さんは？」

頭に被る麦わら帽子を取り、彼はジョウロを置いて歩み寄ってくる。ジャンを一瞥すれば眉間にシワを寄せ、サニーを見ればにこやかな笑顔を見せる、ある意味紳士的な男だ。

「パスカル、話したでしょう？ 今日から家に住むことになったジャン・ステールとサニー・ベルガモットよ」

男は腕をまくり、首にさげるタオルで額の汗を拭いながら、やがて彼らの前に止まる。

短髪の頭を掻き耑るようにして、パスカルと呼ばれた男は大きく息を吐いた。

「冗談か何かで？」

「……言わなかったかしら」

「聞いてないっスよ！ 大体、住むってんなら昨日今日の話じゃないでしょうッ！？」

「でも、他の二人とトロスは歓迎会の買い出しに行ってるけど……」  
「うわあッ、また除け者かよ！」

大げさなまでに頭を抱えて跪くパスカルをよそに、テポンは彼を指さし、ジャンらに紹介した。

「お手伝いさんのパスカル。こんな感じの男よ」

「ど、どうもよろしく……お願いします」

「これからよろしくおねがいますっ！」

一先ず一礼。これから世話になる相手に、心から深く頭を下げると――既に立ち直り腰に手をやるパスカルは、ふふんと鼻を鳴らしてジャンを見下ろしていた。

「お嬢さんを始めとする女性に手を出したら俺が直々に殺す。いいな？ それから――」

途端にニヤニヤと表情を綻ばせて手を差し出すのは、サニーに対してだ。

下心丸出しのパスカルはそれから声色を変え、咳払いを一つ。

「お嬢ちゃん、何かわからないことがあったり、不便なことがあったらいつでもなんでも言ってくれ。俺はいつでも君の味方だよ」

「……ジャンに悪いことしたら許しませんよ？」

上目遣いで睨みつけて、サニーは彼と握手を交わす。

ぎよっと顔を強張らせてからパスカルはジャンを一瞥し、舌を鳴らした。

「善処します」

「さ、パスカル。業務に戻っていいわよ」

「ぎよ、業務だったって……みんな朝っぱらからどっか行っちゃうから、暇で仕方なくやってたんスよ。俺で良ければ、荷物運びの手伝いでもしますよ。ジャンくんのもな！」

厭味ったらしく強調し、彼はテポンの了解も得ずに玄関へと歩き出す。

彼女はそんな彼に肩をすくめてから、二人を案内するように先を歩いた。

玄関から入って右手側に伸びる通路には窓から差し込む日差しが、心地よく室内を照らしていた。壁には五つの扉が並び、説明によればそこがお手伝いさんの私室らしい。

さらに正面右手側には二階へと続く通路があり、その脇には奥まで続く通路。突き当りの扉はバスルームであり、左手側の壁、そこからほど近いドアはトイレらしい。それより遙か手前の、両開きの扉は大広間に繋がるものであり、主な団欒や食事はここで行われるということだった。

家主の自室は階段の上にあり、正面の壁には私室が。その反対側の壁には、客室が並ぶ。

ジャンらはその中から、扉に打ち付けてある、真鍮プレートに刻まれた自分の名前を探して、そこに荷物を運び入れ――終えて、それぞれの部屋で休憩していた。

「しっかしまあ、おれがこんな所に来ることになるとはなあ……」

夢のようだ、とジャンは思う。

キングサイズのベッドは、部屋の中央壁沿いに鎮座する。扉の近くには大きなクローゼットがその存在を隠すこと無く堂々と置かれて、さらに本棚さえもある。それでも尚、部屋が狭く感じることはない。

レースのカーテンがかかる窓は両開きのガラス戸であり、開ければ半円形のベランダが備え付けられている。その近くの壁には、これまた大きな机があつて――。

ジャンは思わずため息を付く。

これでもう二桁に上るソレだ。

夢のようだ、心の底から思う。

きっかけはどうであれ、まさか、冗談か何かではないのかと疑いなくなる。

それほどまでに彼は浮かれていて、思わずその良く身体が沈み反発する寝台に寝転んだ。

「にゃっ?!」

刹那、悲鳴が聞こえる。

慌てて身体を転がすと、そのすぐ後ろ、腰の辺りにはもっこりとした妙な感触があった事に、そこでようやく気がついた。その盛り上がりはそのそと移動して、足元から落ちる。軽い音を鳴らして姿を現したのは、まごう事無き猫だった。

大きさからしてまだ子猫なのだろう。

小さな体軀は一度ジャンに背を見せてから、くるりと振り返って、彼の姿を見る。しっぽをゆらゆらと揺らすその姿は愛らしいの一言に尽きる。

「ネコかー。ネコかわいいなー」

座ったまま前屈体勢になって手を出し、指を揺らす。が、興味なさそうに顔を逸らすと、そのまま悠々とした足取りで扉へと向かう。ジャンはその後についてドアの隙間を少し開けると、ネコはそのまま隙間を抜けて出ていった。

ジャンはそれから、箱を開けて荷物を出す。壁に立てかけたブロードソードはそのままにしておいたとしても、制服やは早い所ハングーに掛けてしまわないと皺になってしまう。

それに、荷物整理を後に回しても良いことなど無いのだ。

彼が決意して行動を起こすその瞬間に、ドアは勢い良く開かれた。

「アンタがジャン・ステイルね」

扉を全開にして、壁に叩きつける。

黄金色の長い髪を翻すのは女性であり、四肢は毛皮に、手足は肉球に覆われている。頭に、尻にはネコの耳や尾が生えていて――考えるまでもなく、彼女は先程のネコなのだろう。

完全にネコに擬態できるのはかなり高度な技術を要すると聞きかじったが……どうあれ人並の知能を持っているのだ。それを理解した瞬間、ヒエラルキーの下級層に落とされていくのを、彼は感じていた。

「ええ、はい。これからよろしく願います」

「つまんなそうな男ねえ。まあいいわ、そんな感じでよろしく。種族はなんなの？」

「種族、ですか。えー……人間、ですかね」

「人間？ ヒト？」

その大きな琥珀のような眼を見開き、縦に長い瞳孔をより細くして彼女はジャンを見る。腕を組んだまま、腰を折り曲げるようにして視線を近づかせる。

「……ビビんないの？」

それから、恐る恐るといった風に、珍しいものに触れるように声をかける。先ほどの、威圧的な勢いは既に失せているようだった。

「いや、おれネコ好きですし」

「異人種よ？」

「そう言われてもなあ……」

困ったように頭を掻いてみせる。

なぜこんな愛らしい姿に畏怖しなければならないのだろうか。

剣を振り回したり、傍若無人な人だったりしたら怯える、恐れるといった感情を抱くのは当然かも知れないが、ただ外見が少し異なるだけでそういったモノを抱くことはない。

これまでがそうだったし、そういった人間に対する理解はあっても、ジャン自身納得はしていない。

そうしてまた、それだけで異人種に自分が評価される事も、しつくり来ないのだ。

ただの感性の違いなのに良い評価をもらう。好意さえ持ってくれる。そんな彼らに、どこか後ろめたさを感じるような気がした。

「へえ、見る目あるじゃないの。あんた」

「はは、ありがとう。えーっと……」

「タマよ。ここでは一応ネコとしてやってるからね」

「タマさんは——」

「呼び捨てでいいわ。ネコに敬称って、気持ち悪いったらありやし

ない」

身を抱くようにして、冗談っぽくフルフルと彼女は震えてみせる。美女然としているのに、表現はどこか子どもっぽい。ジャンは思わず微笑むと、タマはキッと睨んできた。

「あに笑ってんのよ」

舌っ足らずのように不平する。

「いや。まあ、その……よろしく」

抑えられない興奮に、思わず頬がゆるむ。手を差し出して握手を試みると――肉球が、鋭くジャンの顔面を殴打した。

表面の、ちょっとした硬さの中にはマシュマロのようなやわさがある。お日様の匂いがして、ジャンは満面の笑みで寝台に倒れていた。

「……なに、こーゆーのが好きなんだ？」

軽々と床を蹴ると、タマは獣人らしい身体能力を発揮して軽々と寝台に飛び乗った。大きく弾み、ついで彼女のたわわに実るバストが揺れるのを見ながら、ジャンはさらに頬をペチペチと肉球で叩かれ続けていた。

「ほらほら……そんなだらしのない顔して、そんなに気持ちいいの？」

「あ、ああ……に、肉球！ 肉球もつと！」

「うふふ、気持ち悪い……そんなに欲しいのなら、ほら！」

「ああっ、あああああっ！！」

両手の肉球を力一杯顔に押し付けられる。

幸せだ。

もう、人生全ての運を投げ売っているのかもしれない。

理性が潰える、彼はソレが失われるのを感じていて――。

「何やってんの？ ふたりとも……」

テポンの底冷えるような声は、瞬間的にジャンに理性を取り戻させて、また反射的にタマは寝台を弾くようにして床に着地した。

「肉球分を補給しました」

「補給させてました」



「……まあいいけど。わからないことがあったら、いつでも訊いてね？」

「あ、ありがとうございます」

ひどく恥ずかしいところを見られてしまった。

つい理性を投げ捨ててしまう程の事態に陥ったことは仕方のないことだが、自制しなければならぬだろう。

しかし、こんな魅力的な存在が身近にいて、果たして理性が保つだろうか？

タマをちらりと見ると、彼女はニッと笑って、八重歯を見せた。

「ははっ、可愛いやつめ」

——新生活は、こうして開始した。

## 休日謳歌　くその猫に肉球はあるか？く

なんでも、この屋敷にはトロス、テポンの他には三人のお手伝いさんに加えてタマ一匹だけの構成で、両親は不在らしい。亡くなっているという事ではなく、単純に”溝の門扉<sup>ゲート</sup>”の向こう側、つまり異人種の故郷で暮らしているだけであり、完全な放任主義ということだ。

「うう……もう、朝……？」

ガラス戸から差し込む陽が床を照らし、その反射がまぶたを照らす。ジャンはそこから意識が少しずつ浮上して、やがて覚醒した。

だが眠気に半身がどっぷりと浸っている状況である。夕べは荷物の整理や、緊張やらで深夜まで眠れなかったこともあるが、なによりも布団が異様なまでに温かいことが一番の理由だった。

羽毛布団は熱を逃さず、さらにジャンの熱を蓄えて身体を温める。さらにまるで人の肌のような抱枕が熱を持ち、心地よい毛皮が身体に抱きつく感覚が酷く心地よくて――。

「ん……？」

抱枕など、この部屋にはなかったはずだ。

ジャンは、己が掴む手を少し動かす。と、彼がこれまでの人生で触れた何よりも柔らかく、最上の弾力を持つ何かがある中に入っていた。

薄く目を開ける。

共に、穏やかな吐息が顔に掛かるのがわかった。

――眼前に、タマの寝顔があった。

絹の衣服は既に布団の中で大きく肌蹴っていて、タマはそのままジャンを抱枕にするように抱きついている。抵抗するように体の前に突き出された両手は、それ故に彼女のバストを存分に鷲掴む形となっていた。

「なんという事でしょう」

思わず漏らすと、その声に反応したのか、タマのまぶたがぴくりと弾んだ。

それからややあって、

「ん、ん……っ」

艶やかな吐息と共に声を漏らし、力一杯抱擁するように伸びをする。

タマは、それから眠そうに目を開けた。

「どしたの、ジャー？」

ジャーというのは、タマが勝手に名付けたジャンの愛称だ。実にあざとい呼び名だとは思うが、タマ補正のお陰で特に疑問に思うことはない。ただ、それが伝播してしまったようにサニーまでそう呼んでくるのは、少しばかり恥ずかしかった。

「なんでお前は抱きついて寝てんだよ？」

理性が手を離せと囁いている。

だが、どれだけ理性がフルに稼働して腕力を駆使して彼女から引き剥がそうとしても、本能が許さない。故にたゆんたゆんと、肉球顔負けの弾力を味わうように手の中で揺れるだけであり――幾多の刺激を経て、手のひらに硬度を持った突起が生まれた。

「……ジャーのすけべ」

言って、タマは頬を桜色に染めて、ぎゅっとジャンを抱きしめた。

「という夢を見ました」

「なにそれキモい」

タマは心底軽蔑したような視線でジャンを見下ろした。

「ジャー？ なにそれ、炊飯器？」

「いや、その……」

「大体なんで常に燃費の悪い人型になってなくちゃなの？ ジャンを楽しませるためのマスコットじゃないんだけど」

「おっしゃる通りです」

ネコの姿でカンカンに怒るタマは、寝台の上で正座する彼に対し

て、何度も布団を叩いて、尻尾をパタパタと振って感情を表現していた。

そもそもこうなった理由は、タマが起こしに来た際に布団をひっ剥いて――生理現象を見られてしまったからだ。そこからごく自然的に、「何の夢を見てたの?」という流れになり、現在に至る。

まだその時は怒られてはいなかった。

だが、先日のタマに対する印象があまりに強かったせいで見た夢である。

もつとも、さすがにそんな事は口にできないので、秘密なのだが。「まあなんでも良いけど。朝ごはん食べるなら、用意してあるけど」「すぐ行きます」

「もう二度とキモイこと言わないでよね。嫌いになるから」

「はい……あ、最後に一つ、いいですか?」

何か心残りがある。胸の中に感じたそのしこりの正体がわかった所で、ジャンはそう声を上げる。

後ろ姿を見せたタマは、いかにも不機嫌そうな顔でジャンを見る。

「あによ」

ぶつきらぼうに訊いてきた。

――言うか、言わざるか。

されど、後悔するならば確実に告げたほうがいい。何もしない後悔は、何よりも苦しいからだ。

「ごっ、語尾に”にゃあ”だとか”にゃん”は付けないんですか?」

「……あの」

口ごもるように、彼女は続ける。

「もしかして会話成り立ってなかった? 言葉通じてなかった?」

「いえ、大丈夫です。タマの言葉は全て理解できてます。今日も可愛いし」

「フオローすれば良いってもんじゃないけど……真性ね。そんなにネコ好きなの?」

「大好きです。もうタマンねえです」

タマの姿が、不意に消える。

否、ジャンの肉眼で尾を引くように肉薄する陰だけは捉えられていた。

音もなく気配が近づく。僅か一秒にも満たぬ時間の中で、その白に茶色にこげ茶の混じる三毛猫は、地面を弾いて眼前に迫った。

目の前にネコが現れた。そう認識するよりも早く、振り薙がれた一閃があった。

それから間もなく、タマは軽々とジャンのすぐ近くに着地する。

すうっと、鼻筋から血が線状に三本浮き上がったかと思うと、鋭い痛みが並のように押し寄せてきた。

鮮血が吹き出るわけでもなく、また傷があると教える程度の出血だけがそこにはあったが、痛みは見た目に反して非常に強い。

まず目が開けられない。痛みのせいで、思考がままならない。

タマの声は、横になって悶えるジャンの耳元で聞こえた。

「安心して。消毒してあるから……にゃあ」

ぽん、と頭を肉球で叩く感触を残して、気配は走り去るようになぐ遠くなっていった。

「お食事はどうでした？」

暑いからという理由だけでキャミソールを来て、腿までがあらわになる短いズボンを履く女性は、それでも体裁を整えるようにヘツドドレスだけは身につけていた。

そんな彼女は顔や肌、足が驚くほどに透き通るように白く――その腕、足、指に細かく吸盤を付け、また太い四本の房を好き放題に背中に流す頭には、されど髪はなく、髪のような触手があるだけである。

彼女はタコ族の異人種であり、この屋敷のお手伝いさんの一人だ。

「ええ、美味しかったです。なんだか、もっと味わってずっと食べていたかったです」

「あらら、嬉しいことを……ふふ」

嬉しそうに彼女は笑う。しかしそんな褒め言葉に頬を紅潮させたり、恥ずかしがったりするようなウブな姿は一切無く、経験豊富な大人の女性の雰囲気醸し出していた。

「でも、わざわざスミマセン。最後まで寝てたおれを待っていてくれたみたいで……」

長く伸びる机には、まだ日が登ってからそう時間が経って居ないのであろう頃合いなのにもかかわらず、ジャン以外の顔は無い。彼女の話の聞くに、既にテポンはサニーを連れて買い物に出かけてしまったらしい。トロスは入学してから日課にしているトレーニングに出かけたばかりで昼頃まで帰ってこないらしく、この屋敷に残されたのはジャンと、お手伝いさん、それにタマだけになる。

「いいのよ、別にやることなんてあまりないし。それに、あまり褒めてもらったことがないから嬉しかったしね」

「いや、ホントの事を言っただけですし」

「あまり褒めると、サニーちゃんが拗ねるわよ？」

「ああ、そう。サニーで思い出したんですけど、もしサニーが料理を手伝いたって言ってきたら、断らないでやってほしいんですよ。あいつ、なんだか料理が趣味だか生きがみたいで、ずっと料理ばっかしてましたし」

「ふうん……そうね、なら今夜あたり手伝ってもらおうかしら」

そういう彼女は、どこかイタズラっぽい笑みを浮かべていた。怪しく、何か企んでいそうなソレだが、ジャンには彼女が何を考えているのか皆目見当もつかない。

「それじゃ、オクトさん。ごちそうさまです」

「お粗末さま。あ、ジャンくん。これから何か用事でもあるの？」

「そーですね……特には無いです」

「ちょっとおつかい頼んでもいいかしら？ 他のに頼むと、いちいちうるさくってね。もちろんお礼はするわよ？」

「いや、大丈夫です。お世話になっている身ですし。それで、おつかいっていうのは――」

その男はジャン・スティーレルから注文の内容を聞き終えると、椅子から立ち上がり、その埃っぽい空気をかき乱すように乱暴な様子でカウンターを乗り越えてきた。二メートルほど離れたジャンを睨みつけるようにしてから、わざとらしいと言うよりも、どこか演技がかった動作で、近場の本棚へと向かう。

本棚が無数に並ぶ店内。そして本棚と本棚で作られる通路の、その終着点にカウンターがあった。

胡散臭い口ひげを生やす男は、髪を脂でオールバックにして、片眼鏡を掛けた紳士然とした外観だった。どこか気難しく神経質そうな顔立ちに反して、その”本屋”は客があまり来ないのか、掃除があまりなされていないのか、空気中に埃が漂っている。

くしゅん、と顔を揺らしてタマはくしゅみをして、ジャンはそれに続くようにくしゅみをした。

「いつ来ても最悪」

「まあそう言ってくれるなタマゴウチ少佐。奴らから姿を隠すための隠蔽工作の一種だと、何度言ったら分かってくれるのだ？」

ジャンの肩に乗るタマは不快そうに、店主から視線を外した。

「その名前、わけわかんないし」

「やはりまだ記憶は戻らないのか。やはりガウル帝国の内戦の代償は大きいか……」

店主はそう口にしながら本棚を漁る。

オクトの説明によれば、彼はガウル帝国という、この王国が存在する大陸の向こう側、海を越えた先にある大陸からやってきたという。そこであつた内戦から逃げてきたという説明だが、タマを、その恐らく飼っていたであろう愛猫と信じ込んでいる。しかしその愛称を完全に拒否していたおかげで、今は間をとってそんな珍妙な名前になっていた。

そしてオクトは、この店を最前はなしにしている。理由は単に、品揃えが良いからだ。

どんな理由で本屋を営んでいても毎月新書を仕入れるし、客も居ないというわけではないから経営を維持できている。そしてどれほどマニアックな本でも、古書でも妙に揃っていた。

ジャンとて興味が無いわけではないが、今日はおつかいだ。また後日、個人的に來たいと思っていた。

「ったく、なんであたしまで連れてきたわけ？」

「いや、だってオクトさんが、こっちのほうが話が早いって言うたし」

「もう……ま、”中佐殿”の様子は相変わらずで良かったけど、もう二度と來たくないわ……くしゅっ」

また小さくくしゃみをする。首を振り、前足で顔を撫でるように拭いた。

「中佐殿！ちゃんと掃除してよ！」

「何を言うタマゴウチ少佐、この古臭さ、カビ臭さが良いのではないか。なあ少年、あながちわからんでもないだろう？」

「え、いや……まあ。こういうところが図書館とは違う、本屋の良いところでもありますよね」

「おお！さすがタマゴウチ少佐に見初められた男！分かっているではないか！」

「ですが、せめて簡単な掃除くらいはしたほうが良いのでは？」

「むう、先程からさすがにそこまで言われればしないわけには……っと、見つけたぞ少年！望みの品はコレで良いのだな？ははは！うっかり新刊をしまいこんだから少々手間だったが、見つかって安心だ！」

中佐殿は比較的新しい、革張りの本をジャンに手渡すと、腰に手を当てて豪快に笑う。豪気というのはこの男のためにあるような言葉な気がした。

本のタイトルは『あなたが死ぬまでにやっておきたい一〇〇のこと』というもの。一見自己啓発本のように見えるが、内容は深い恋愛小説らしい。オクトは最近この作者に熱中しているらしく、すべ



ての単行本はこの店で購入し、新刊を心待ちにしていたとの事だ。

「ええ、これで大丈夫です」

本を念のために確認して、中佐に手渡す。彼はそれからカウンターの奥へと飛び上がるように引っ込むと、手早く紙袋に本を入れて、カウンターに置いた。

「お代は既に受け取っているから、このままで大丈夫だ。心ゆくまで堪能するがいい！　っと、少年は何か気になる本はあったのか？」

ジャンはそれを受け取りながら、タマの首の下をくすぐるように撫でる。そうして不意気味の質問に少し驚いてから、首を振った。

「たくさん本があつて、まだよくわかんないです。また後日来たいので、その時はよろしくおねがいします」

「ふむそうか……残念だが、待つとしよう。用がなくとも、私はいつでもここに居る。来てくれると嬉しい！」

「は、はい。失礼します」

軽く会釈をするジャンに、中佐は結局本名を覚えてくれること無く、敬礼してその姿を見送った。

あらゆる意味で後ろ髪引かれる思いに駆られながら、ジャンはそそくさとその店を後にする。

「でもジャンが居て助かったわ。いつもなら一人だもん」

気を良くしたのか、彼女は人型になってジャンの横を歩いていた。なぜだか衣服は着たままの格好で、四肢はやはり毛皮に、掌は肉球へと変化し、頭にはネコミミ、尻からは尾を生やす。

そして腕を組む、胸を押し付けるといふことはなく、シャツにデニム生地ズボン姿で傍らにつく。肉球、正確には掌球は、その往来でも構わずジャンの手の中にあった。驚掴むような形で、他者から見れば手をつなぐように見えているであろうものだ。

「おれもタマと一緒によかったよ」

「どうせあたしの肉球が目的からだなんでしょ？」

「そ、そういうワケじゃないよ！　タマと一緒にいると楽しいし」

「楽しい……？ 可愛いとかじゃなくて？」

彼女はマジマジとジャンを見つめて、首を傾げる。

うん、と彼はうなずいて、わかりやすく説明した。

「まあかわいいよ。ネコでも、人型でも。でもさ、タマと一緒にいると……こう、一緒に居るだけでも心が踊るんだよね。楽しいってそういうことだと思うけど」

「そ、そうなんだ……あ、や、やっぱりジャンって結構変わってるよね。女の子に、みんなにそう言ってるんでしょ？」

いつでも余裕を持っているような彼女は、頬を桜色に赤らめてそっぽを向く。だというのに、指球はぎゅっと締まって指を包んだ。

「別にそういう訳じゃないけど……この街だと、タマが初めてだし」

「は、初めてなんだ。あたしが、初めて？」

「まあ、そうだな」

「へ、へえ。……ねえ、ジャン？」

呼ぶ声に、顔を向ける。タマはそれに応じるように手を離して、その肉球を顔面に押し付けた。

すこし固い角質層の中には、ぷにぷにと柔らかい独特の感触がある。変わらないお日様の香りがして、ジャンの吐息に、抑えるようなタマの声が聞こえた。

「ジャン、またキモイこと言ったから、お仕置きだからね……っ！」

「た、タマ……こんな、み、みんなが見てる、ところで……！」

「うふふ、肉球って、結構ビンカンなんだからね！」

すっかり上気してしまった顔を隠すようにそっぽを向きながら、また肉球を強引にジャンの顔に押し付けて、足早に往来を歩く。

肉球のお陰で他の事に頭が回らなくなってしまふ彼の特性に少しだけ感謝しながら、タマはそそくさとジャンを連れて屋敷へと戻っていった。

ジャンはまた、不意打ちの幸福を堪能して――。

そうこうしている内に、楽しい休日は終わりを告げた。

## 日常風景

「なんだか、家で上手くやれてるようで僕は安心したよ」

いよいよ春が終わろうとしている季節。街路樹は青々とした葉が生い茂り、青空は澄み渡る。清々しい朝に、共に家を出たト罗斯は笑顔でジャンの肩を叩いた。

「いや、みんな何だかんだで親切だし、良い人ばっかだしな。環境も持て余すくらいだし、本当に感謝してるよ」

「何言ってるんだよ、僕だって、キミが試験の時に声をかけてくれたから学校でも、試験でも上手くやれたんだ。それに、家だとお手伝いさんの手伝いまでやってるんだろ？」

ト罗斯はそう言うが、手伝うのは食器の片付けや簡単な掃除、庭の手入れくらいしかやれていないし、それだって本当に手伝い程度だ。それが彼らの手助けになっているかは、未だに疑わしい。

——そんな彼らが歩く通りはいつものように警ら兵が街を巡回していて、住民が日常的に歩いている。これから仕事に行くものや、ペットの散歩、井戸端会議をしている主婦層などその様相は様々だが、平和なものには変わりがない。

妙なまでに満たされている感覚がジャンの中にはあって、思わず頬は綻んでいた。

「でもジャン、最近なんだか私にかまってくれない……」

彼らの前でテポンと仲睦まじく、それこそ姉妹のように話していたサニーは、そんな会話が耳に入ったのか振り向いてから、むっつりと膨れた。テポンは宥めるように彼女の頭を撫でる。身長差は頭一つ分で、テポンがやや大人っぽいお陰でサニーの外見年齢は如実に下がっているようだった。

「登下校と家、学校で一緒じゃないか」

「ちがうの、だって前ならもっとお話したり、色々してたもん」

「んな事言ったって……これ以上一緒に居たら、一日中ずっと傍に

居ることになるぞ？ お前だって友達とか居るだろ。ほら、クロコとか、なんつったつけ……ハイビスカスの人とか」

「く、クロちゃんとアオイちゃんは学校でいつも遊んでるし、学校帰りで一緒に遊ぶ事もあるし……」

「いつでも会えるおれより、そういう仲良くしてくれる友達を――」  
遮るように、トロスが再び肩を叩く。

大人気ないぞ、といわんばかりの表情に、些か無粋すぎたかと己の台詞を思い返した。

だがそれとは全く異なる、思いも寄らない一言は果たして放たれたのだ。

「キミはまだ気付かないのか？」

「……何をだよ？」

「これまでサニーちゃんとずっと一緒に居たんだろう？」

「まあな。それが当たり前みたいなもんだったし」

やれやれ、と肩をすくめるトロスに、ジャンは彼が何を言わんとしているのかをなんとなく悟る。

だから彼は首を振って、

「強調するわけじゃ無いが、物心ついてからずっとサニーと一緒にだったんだ。今更、何かが変わるわけじゃない」

「……ジャンは私の事きらい？」

うつむきがちでサニーが言った。上目遣いでサニーが責めた。

ジャンはいよいよ、なんだか彼女に悪いことをしているような気がする、

「好きだよ。……わかった、一緒に居ればいいんだろ？」

「うん！」

嬉しそうな、子供っぽい笑顔を見て、彼もまんざらではなさそうに微笑んだ。

学校と外との敷地を区別する鉄門を過ぎると、土がむき出しになる訓練場には人だかりができていた。野次馬とも形容すべきその群

れは円くなって、その中央にある程度の空間を残す。

互いに剣を、あるいは槍を構えた二者には素人が見て分かるほどに揺らぎがない。子供のケンカという様相は一切無く、今まさに血しぶきが宙を舞い鋼鉄の乱舞が周囲を切り刻まんとする威圧的な雰囲気、周囲を包んでいた。

「……あの、何が始まるんです？」

最後尾にて、その巨軀を活かして中を覗き込むクマのような鋭い爪を持つ男に声をかける。また毛皮を肌に癒着させる姿は、まさにクマといった風体だ。

彼は前を見つめながら静かに告げる。

「いや、それが良くわからねえのよ。俺がここに来た時はもうこうだったし、沈着してるし……ほら、周りを見てみる。みんな飽きて校舎に入り始めてる」

促されるように周囲に眼を向ければ、円を作る要素となっていた詰襟の白い学生服の連中、あるいは大きな襟や胸元のリボンが特徴的な制服の女子生徒らは、徐々に数を少なくしている。

リボンが紅い、あるいはボタンが銀であるのが一年、水色で金なのが二年であるが――そのほとんどは二年だった。残っているのは一年のみであり、よく見れば、声を掛けた生徒は上級生だった。胸元のボタンを外して露出する格好は、野性味溢れる男らしい姿である。

「まあ、いつもの事だろうけど……前からは随分期間が空いてたしなあ」

「いつもの……とは？」

ん、と反応して男は振り返る。それからジャンらの姿を一見すると、なるほど、と手を打った。

「あいつらは犬猿の仲っつーのかな、良く喧嘩してて、ヒートアップするといつでも得物を出して戦うんだよ。最近はそれを止める奴が居たんだが……どうやら今日は居ないらしいな。だからこうなった。ま、決着がつくか飽きるかすれば教室に戻るだろうよ。お前ら

も、遅刻すんなよ」

男はカッカカッと笑うと、それからジャンの頭を幾度か叩いて、校舎へと戻っていった。

気がつけば野次馬も随分と数を減らし、隙間から中の様子を伺うことが出来る程となっている。

「ねえジャン、教室行こ？」

「ああ、そうだな。見ても仕方が無いし」

飽きたのか、あるいはそういった闘争を眼にしたくないのか、サニーの提案にジャンは従った。

そうして彼らに背を向ければ、やがて鋼鉄がぶつかり合う音、さらに咆哮が耳に届く。また背中を押すような凄まじい威圧を感じながら、かくして彼らは昇降口へと向かっていった。

——その刹那の事だった。

「唸れ、剣風ウツッ！」

尋常ならざる衝撃が、振り下ろされた剣から離れて斬撃と変異する。刃状の巨大な旋風は空間を断裂する勢いで男へと迫り、大地を削り深い溝を作りながらやがて接触。構えた槍の穂先が甲高い悲鳴を上げるように、空気が切り裂かれる摩擦音、さらに金属を削る摩擦音を大気に伝播させながら、火花を散らしていた。

だが、勢いは殺し切れない。

間もなく体勢を崩して吹き飛ばされる男は、掻き別れた人波を通り過ぎて——迫る。

何も気付かぬジャンの背へと肉薄したその陰は、結局そのままごく自然的に彼を巻き込んで倒れこんだ。

大地に、重なって倒れる二人。が、巻き込んだ張本人は白く染まり上がる長髪を乱したまま、ジャンを弾くようにして横に飛ばうとして、舌を鳴らす。

「くそ、邪魔くせえ！」

片膝を付いて半身を起こす。そのまま槍の柄を地面に突き刺すと

——得物を握る腕から紋様が浮かび上がり、それが槍へと伝播する。袖を捲るが故にあらわになる腕、複雑な紋章。紅く輝き槍にさえもソレが刻み込まれ、大地に干渉した。

「空間の障壁ッ！」

果たして魔術は発現する。

腕、槍ともに刻まれた紋様が一樣に虚空、その槍の手前に弾かれて浮かび上がる。紅い輝きがそれと共に、槍を中心点にした半円形の盾のような障壁を創りだした。

追撃と思しき衝撃波からなる斬撃は、再び大地に深い傷痕を作りながら切迫し——衝突。眼前で空間の中にそこにあるという確かな姿を作って現れた斬撃は、第一打で障壁に決定的な亀裂を入れる。が、破壊されない。

さらにジリジリと押し殺すように剣風は障壁を砕き、無数のヒビを刻み込んだ。斬撃は途絶えず、されど威力は徐々に殺されて、やがて途絶える。吐息のような小さな旋風となって失せた斬撃は呆気無く、共に白髪の男は口角を吊り上げ、この瞬間を待っていた。

全身に流れる心地よい衝撃に四肢を震わせ、一撃のみならず追撃を許して守備に転じた男は、されどこの事態を喜んでいた。

障壁は役割を終えて、間もなくバラバラに、ガラスが砕けるように虚空の中に散っていく。だが、空气中に溶けることはしない。

それを構成していた魔術的要素を持つ破片はそのまま矢尻の形を作って、さらに篋、つまり棒の部分、さらに矢羽を構成する。槍はやがて弓と相成り、弦は同様に穂先と、大地に突き刺さる柄尻とを繋ぐ。

男は手馴れたように矢を手に取り、弦に引っ掛けて力一杯引き寄せる。張り詰めた弦は今にも断裂してしまいそうな雰囲気を感じながらも、力強く、その威圧をも孕む。

——攻撃を防いだ刹那の出来事。

対する男が、その攻撃手段を理解するよりも早く、やがてその矢は虚空を穿つ。

大気を切り裂く一点の矢は、鋭く、吸い込まれるように男に迫る。同時に男は、槍を引き抜いて大地を弾いた。

守備から攻撃への、乱雑とも流麗とも受けて取れる流れ。

男は咆哮<sup>さけ</sup>ぶ。

「賢<sup>さか</sup>あしんだよ、てめえは！」

「貴様にゃ負ける！」

振り上げられた剣先<sup>きつさき</sup>に、紅い輝きを纏った半透明の矢尻が触れる。その集中力、判断、対応。その全てが常軌を逸していた。まともな動体視力では反応できるはずのない矢に動き、さらに線から点へと転ずる突きの攻撃を活かして対する。また、障壁を矢へと展開する柔軟性。

異形とも見える実力は、やはり騎士志願ゆえのもののだろうか。単なる才能や努力では決して覆せないであろう印象は、僅か数度のやりとりだけで心に刻まれる。

やがて矢が碎けて、突撃が勝利を収める。

再び距離を縮めた両者だが――。

「何をしとるか貴様らアアアッ!!」

戦闘教官の乱入にて、何らかのパフォーマンスにも似たケンカは、終わりを告げるのだった。

「なんかすごい人たちだったなあ……」

教室で、机をあわせて弁当を展開。

始まる昼食の最中にそう漏らしたのは、ジャン・ステイルだった。

多くのクラスメイトは食堂へと向かい、残るのは昼食持参組のみ。今日はトロスト、クロコ、アオイ、サニーという面々で、それぞれ向かい合わせになって席につく。

残る三人ほどのグループは窓枠に腰をかけるようにして、あるいはその対面の机に腰をかけて、登校時に購入したのであるうパンを食んでいた。



「あ、それ私見てましたよ」

と口にするのはアオイだ。頭に側頭部にハイビスカスを咲かせて、スカート代わりに大きな花卉を腰に纏う、植物族の娘である。ただそこに居るだけでなんだか暑くなるような気がする、常夏気分になさせてくれる女の子は、妙に丁寧なジャーンに反応する。

「あんな戦闘、初めて見たんですけど……圧巻でした」

「に比べてお前という男は……」

クロコはわざとらしく肩をすぼめて、鼻を鳴らした。果たして彼女にケンカを売っている自覚があるのかどうか、甚だ疑問である。

「し、仕方ないだろ！ 後ろから飛んでくるって予想できないし、対応できないし！」

「でも避けられるだろうに」

「よ……そのとおりだよ！」

「うわ、開き直った」

トロスはサニー特製の弁当に舌鼓を打ちながら、苦笑しつつそう漏らす。

「でもジャンも怪我が無くてよかったよね」

「確かに、アレで怪我したら笑えないし」

サニーはいいタイミングで助け舟を出してくれる。やはり付き合いが長いだけに、どこで困っているのか、どこで助けて欲しいのかがよく分かっている、だからこそ大助かりだ。ジャンは手を伸ばして、サニーの頭を撫でてやる。

彼女は嬉しそうに首をかしげて、横に並ぶジャンに寄り添った。

「なんか……どっちかって言うて微笑ましい感じだよね」

「確かに」

「ですね。ほんとの兄妹きょうだいみたいです」

ほんわかと、落ち着いた雰囲気。

そういった日常が構成されて、ジャン・スティールは一日の大半、全てと言っても過言ではないほどに、その殆どを異人種と共に過ごしていた。

だからこそ、と言わべきなのか。

「ジャン！ ジャーン！」

妙なことに巻き込まれるのも、割合に多くなっていた。

彼の名を叫びながら廊下を走り、そうして教室に飛び込んできた姿は小さく、四本の足で床を弾くとそのままジャンの後頭部に突っ込んだ。

ネコはそうして頭に抱きつくと、ポンポンポン肉球で頭をたたき、どうやら錯乱しているらしい事を教える。

「ど、どうしたんだよタマ？　っていうか、なんで学校に――」

「助けて、しよ、しよ……」

「しよ？」

「触手が……地下から、なんか出てきたのよ！」

## 地下の呪い　　（学校の七不思議1）

まさか、地下室というものが本当にあるとは思わなかった。

ジャンは、及び腰のタマを肩に乗せて、食事が終わり次第教室を飛び出していった。

向かう先は、校舎裏。地面に埋め込まれている床収納庫の扉のよな蓋がある、焼却炉から程なく近い場所だ。

今ではその蓋は開け放たれていて、よく見れば『封』と書かれた紙が半ばから黒い炭に変わっているのがよくわかる。

「またなんでこんな所に……」

「だ、だって怪しい匂いがプンプンしてたのよ？　行くっきゃないじゃない」

「ていうか、なんで学校に？」

「いい加減暇だったのよ」

すまし顔でタマが言った。

面倒事を持ってきたというのにこの表情である。手馴れたもののなのだろう。

が、ジャン自身興味がないわけでもないし、まんざらでもない。だからまず教員を呼ぶより、先に自分で確かめたかったからここに来ていた。

護身用に持ち歩いている短刀を腰のベルトにくくりつけて、下りの階段となるその中へと足を伸ばした。

明かりには、魔石を使用した技術の粋である携帯式の電灯がある。筒状になり、先頭に装着した魔石が僅かな光を吸収して増幅、そして切り替え装置によって点灯を操作できる。

人造の石材で塗り固めてある階段や壁、天井は冷たく、中に入るだけで空気の冷え込みを感じることが出来た。ジャンはそれから、ポケットから電灯を取り出して付ける。と、十数段の階段を下りた先にある通路の奥。硬く閉ざされていたであろう鉄の扉が半分だけ、

口を開けているのが見えた。

長い間人が踏み込んだような形跡は無く、通路の床にはタマの足あとだけが残っている。

鼻を突くような腐臭にジャンは袖口で鼻を抑え、階段を降りてから、少しばかりそこで立ち止まった。

――扉の向こう側に、強い気配を感じる。

それが、彼女が言っていた触手なのだろう。

だが、触手があるとなれば、それを操る、その元になっている存在があるはず。しかしなれど、長い間人が寄らないこの地下で、果たして生存していられる生物などが存在するだろうか？

さらにこの、騎士養成学校の敷地内にあるというのにも疑問が生まれる。

封印されていた、と考えられるが、なぜこの場所に。そしてまた、それはどのような姿なのだろうか……。

疑問は重なり、解消されない。

ジャンはその淀んだ空気を衣服越しに吸い込んでから、小さく頷いた。

「行くぞ、タマ。準備はいいか？」

「あたしはできてる」

「よし……！」

タマはジャンの首元に顔をうずめて待機する。

彼は重い一步を踏み出して、さらに一步、もう一步……そうやって、やがて扉の前へと近づいた。

電灯を持つ手で、扉に手を掛けると――。

『だれ……？』

淀んだ空気に鈍く伝播する声音。

声帯を潰されたような、醜悪な声。

だがそれは確かな言葉となって、ジャンへと投げられた。

思わず腰が抜けそうになる。高鳴る心臓が今にも破裂せんとして、ジャンはそのまま扉を掴む腕に寄りかかるように停止した。

——言葉が通じるのか？

臭気がより強くなるのを感じながら、ジャンは考える。

異人種なのだろうか。

人と同じ程度の知能を持つ生物。さらに触手を持ち、長い間地下空間で生きながらう事ができる生き物……少し考えても、それがなんなのか、ジャンの頭の中に該当する存在はない。

しかし異人種だ。人間側からしてみれば、ある意味何でもありのような生物である。

これまで人間界に、表面上でも溶け込んできたのは、この世界にそもそも存在している生物と同化したような異人種だ。たとえば獣あるいは植物、軟体動物、爬虫類。種類数多で、恐らくまだ見ぬ種族もある。

その中に、こういった生き物がいても、なんら不思議ではない。

この世界の科学が通用しないのだ。ありうる話である。

ジャンは息を飲み、少しだけ考えてから、口を開けた。

顎が震える。足がガクガクと揺れる。これが恐怖ゆえなのか、興奮ゆえなのか、自分でもよく分からない。

「か、勝手に入ってすみません。あの、気分を害したのであれば、すぐに帰りますので……」

『……だれ？』

果たして言葉に返答はやってきたが、それは会話として成り立たない。

あるいは。

彼は考えて、ようやく告げる。

「ジャン・ステイルです。この学校の、一年です」

——言ってから、少しだけ後悔した。

こう言わなければこの場を乗り切ることは出来なかったかもしれない。だが、噂に寄ればこいつは『呪い』だ。名前さえあれば、人を殺すくらいなんでもないかもしれない。そんな存在、権化なのかもしれない。

そうだ。生物である確証などもとより無かった。

魔術によって生まれた意識のある何かなのかもしれないし、科学によって作られた何かなのかもしれない。何よりもこれを生物と断定するにはあまりにも情報が少ないし、早計すぎた。

早まってしまったか……そう考える最中に、扉の隙間から何かの陰が現れた。

ぬるりと粘膜をまわりつかせる、一本の流線型の何か。くすんだ紅い色はむき出しになった真皮のようだが、鮮血が漏れる様子はない。触手と呼ばれるそれは、その身を起こすとやがてジャンの膝くらいの高さにまで持ち上がった。

『きて……』

鈍い声音は、触手の手招きと共に発される。

それは幾度か頭をさげるように手招いてから、ヌルヌルと蛇が這うように部屋の中へと退いていった。

「行くの？」

首に抱きついて目を瞑ったままのタマは、小さな声でそう訊く。

「行くしか、ないだろうな」

既に選択肢というものはないような気がする。もう巻き込まれてしまったのだ。こうすることは、仕方なの無いことなのだ。

ジャンは大きく息を吐いてから、扉の隙間にその身を滑り込ませるようにして、空間の中へと入っていった。

中に入ると、まず床の感触が途端に変わったことに気がついた。

分厚い苔の上に立つような感覚。不安定で、ぬめり、そして歩けばぬちゃぬちゃと粘液がすれ合う音がする。電灯を床に向けると――肉のような何かが、一面に敷き詰められていることがわかった。

それだけで腰が抜けそうなのにもかかわらず、教室ほどの広さを持つその空間の中央には、巨大な柱のようなものがあつた。

包み紙でアメを包んだように、中央部はやや膨らみを持つ。そしてそれは、まるで心臓のように鼓動していた。床は主に肉で埋まり、

また小さな触手が刺激に反応して現れる。いわば、腸絨毛のようなそれらだった。

さらに壁には蔦が這うように、触手や肉がこびりつく。その全ては蠢いていて、呼吸をするように臭気を放っていた。  
耐えられない。

あまりにも世界が違いすぎる。

気色が悪いだとか、気持ちが悪いだとか、そういったもので括れる空間ではなかった。

最悪だ。

予想を上回る事態を目の当たりにして、尚、彼の足はその柱、声の主と思しきものへと近づいていった。

『きてくれた……ほんとにきたんだ……』

肉の柱。膨らみを持つ部分には、その空間には酷く似つかわしい姿があった。

透き通るような肌。鮮血のように、その肉と同化するような色のワンピースを身につける、銀髪の少女。四肢は肉に取り込まれるように、まるで磔にでもされているような姿がそこにはあった。

——おそらくこれが外界と接触するための装置と言うべき部分なのだろう。

そう考えれば、この空間内の肉やらそれらが全て、ひっくるめて一つの生物という事になる。

「ご、ごきげんよう……?」

挨拶を試みる。

『ごきげんよう……』

返された。

「お、お名前は?」

『ない……』

「そ、それでは、ちょっと……おいとましようかなあ、と思います」  
言って、ごく自然的に背を見せる。

その瞬間だった。

粘液が音を立てる。肉から剥がれた一振りの触手が、その本体と  
言うべきソレから振り抜かれて――刹那。彼がその肉薄を理解する  
よりも早く、触手はジャンの腹に巻き付き、宙に持ち上げた。

電灯が手からこぼれ落ちる。照明は、吸い込まれるように本体へ  
と近づいていく様を照らしていた。

「う、わああああ――っ?!」

『まって……』

身体が肉塊に叩きつけられる。ぶよぶよとした奇妙な感覚に身体  
が埋もれた。

『おともだちに、なって……』

タマは引っ張られる最中に落ちたのだろう。その通過点で、口か  
ら魂を吐き出すように倒れていた。精神が過負荷に堪え切れずに気  
絶してしまっただけらしい。

「お、お友達……ですか……」

『おともだち……』

繰り返す。

そうすると、不意に肉塊の手前から勢い良く触手が突き出るよう  
に出現した。

それはうねうねと、見えざる手によって粘土細工が加工されるよ  
うに、触手はその形を変異させる。

人のように二本で一对の腕が生まれ、五本の指が作られ、また胸  
には未発達な膨らみ、まだくびれは無く寸胴、そしてぷつりと肉か  
ら引き離された触手は、やはり二本の足を生やしていた。

色が変わる。

先ほどの境界面と同様に、人間のような肌を持ち、腰までの長い  
銀髪を生やす。くすんだ、生気の無い瞳はそのままだが――何も知  
らなければ、その姿はそのまま人間に見える。人間以外の何者でも  
ない姿だ。

やがて少女は、紅いワンピースを纏って、裸足のままで肉の上に  
立ち、触手に握られ肉塊に叩き込まれるジャンの姿を見上げていた。



『あげる……がつこうはかよう。おうちは、ここ……』  
鈍い声音は続けた。

『おともだち、なつてほしい……』

——何が目的なのか。

そもそもコレは一体なんなのか。

その全てが、意識的に彼の頭の中から排除された。

生存だけを考える思考が彼を突き動かし、口を動かす。言葉を紡ぐ。

「お友達に、なりましょう……！」

精一杯に吐き出されたその言葉を最後に、ジャンの意識はぷつりと途切れた。

「ジャン！ ジャーン！」

名前を呼ぶ声と共に、身体が大きく揺すられる。共に、深く沈んでいた意識は呼び起こされて、浮上。

ジャン・スティールの意識はそこで覚醒した。

「……はっ！」

反射的に眼は開き、そして同時に心臓が激しく鼓動する。

彼の視界には心配気な視線を送り、今にも泣き出してしまいそうな人型のタマがあった。

タマはジャンが目覚めると安心したように大きく息を吐き、それから見る間に縮んで、猫に戻る。

「もう、死んじやったかと思った」

「こ、ここは……」

震える声で告げるタマの頭をやさしい手つきで撫でてやりながら、彼は身体を起こす。周囲を伺うように首を回せば、そこは校舎の裏。焼却炉の近くだった。

振り返れば、大地に埋まる蓋は閉まったまま。

彼はそこでようやく胸をなで下ろして、深く息を吐いた。

「良かった、おれを襲う触手はいないんだ……」

そう漏らすと、背後から凄まじい衝突音が鳴り響いた。まるで壁に勢い良く馬か何かが突っ込んだような音に、衝撃。彼は慌てて立ち上がって振り返ると――くるくると、蓋は宙を舞っていた。

やがてそれは角の部分を深く大地に突き刺すと、殆ど同時に、それは着地した。下には何も身につけていない少女は肩までワンピースを翻してから、ゆっくりとしたようすで落ちていくその衣服がやがて地面に触れてから、緩慢な動作で立ち上がる。

くすんだ黒い瞳がジャンを見上げた。少女は裸足で仁王立ちする。

「呼んだ？」

そうして声は、いかにも少女らしく澄んだ声音となって言葉を紡ぐ。

「呼んでません」

「そう。残念。ちなみに、本体から離れられるのは、二時間までだから。過ぎると腐っちゃう。臭くなる」

「頑張ってください」

「ありがと」

慣れない言語を一生懸命使うように、拙くも、彼女は先程よりも遥かマシな声でそう教えてくれる。

もしかすると、この学校の七不思議となる一つを、そして最大級のその不可思議を解けるかもしれない。さらに恐怖さえ忘れてしまえば彼女だって、普通に接することができる。

食われることは……ないだろう。そうだ、あの地下で生きて行けるのだから、食事やら何やらは不要なはずだ。

ならば大丈夫。

おれは大丈夫。

彼は頷き、自分を納得させる。

「ま、そういう、事だから。よろ」

……どこでそんな言葉遣いを覚えるのだろうか。

台詞に関してはまだ本体のほうが可愛げがあったかもしれない。手を差し出す彼女に、ジャンは対応してその小さな手を握り返し

た。

「よろしく、ノロ」

「ノロ？」

首を傾げる彼女を指さすと、彼女は自分で自分を指さした。

「ノロ？」

「そう、君の名前だ」

名前の由来が呪いだと言われたら、本格的に殺されるかもしれない。

そう思いながらも、口をついて出てきてしまった以上引き返せない。時間程度を巻き戻せない自分を不甲斐なく思った。

ジャンが言うと、彼女は僅かに、口角を吊り上げた。

「わたしの、名前」

「そうだ。名前がないと不便だからな。それじゃ、ノロ、悪いがこれはこれから授業だ。帰るからな」

「うん、わたしも準備が必要。学校は来週から」

「そいつは良か……残念だな。それじゃあまた今度！」

「うん」

畳み掛けるようにして、ジャンはタマを強引に肩に乗せてから、ノロに手を振り背を向ける。

なんだか奇妙な罪悪感に苛まれながら――ジャンは教室に戻る。

閑散とする、誰もいないその様子から、既に時刻は放課後を過ぎていることを理解するのは、それから数分後の事である。

## 遠征　　学校行事

程なくして『図書館には”出る”』という噂が広がり始めた。

何が出るのかと言えば、この世の者ならざる存在、いわば幽霊の類だ。

ジャンは校舎裏でない事にいささか疑問を感じたが、出会ったびに語彙が増えるノロを見れば、その理由をなんとなく察した。彼女なりの努力なのだろうと思えば、可愛らしくさえ見える。

しかし結局、来週から学校に通うと断言していたノロは、一週間待てど二週間待てど、入学する様子はない。さりげなくごく自然的にクラスに紛れ込んでいる様子もないからわざわざ、あのどう我慢しても気持ちの悪い『肉の部屋』を訪問して、本体に訊ねてみれば、『めんどくさく……なっちゃった……』

まるで最近の若者じみた台詞が返ってきて、ジャン・ステイールはなんだか安心したような、どこか残念なような心持ちになる。

そんなこんなで時間が経過して――新たな月を迎えた。

季節は初夏に移り変わり、気がつけば入学してから初めての学校行事が催される頃合いになっていた。

まずはじめに、武器適性という検査が行われた。

といっても、それぞれ個人が武器を扱い教官がそれを判断するわけではなく、戦闘訓練の授業過程で判断した適性ある武器を生徒に手渡すだけである。もっとも、既に武器を所有している者は持参することが許可されているために、ジャンとサニーは、それぞれ自前の剣と弓を装備していた。

ドワーフ族の特製装備。剣は肉体に紋様を刻まなくとも魔術を使用することが許され、弓は――未だ使用されていないために、効果は分らない。だが恐らくは同様のものなのだろう。

そういった中で、生徒の多くは剣や槍を装備する。

三十分にも満たぬ時間で準備の整えた白い制服姿の集団は、されど集団とも言えぬような三十人余りの団体だ。

「はぐれるなよー！」

先頭に立ってそう告げる戦闘教官は、街の門から下級生総員を引き連れて出発する。

——この学校行事は、『遠征』と呼ばれるものだ。

内容を簡単に説明すれば、ここから十数キロほどある森まで行進し、昼休憩を経てまた街へと戻るというもの。

簡潔に言えば遠足だ。<sup>ピクニック</sup>

しかしそれでも一日の授業がなくなり、また珍しい外の世界を歩けるといふ新鮮さもあって、各々の興奮は最高潮となる。

だからこそと言うのだろうか、出発時に構成された列は瞬く間に乱れて好き好きに並び、会話を交わし談笑しながら、それでも辛うじて動きが緩慢にはならずに行進する彼らには、教官らも少しかり眼をつむっているのだろう。

そんな連中のしんがりは、女騎士のシイナ。鬼族の娘だ。そう考えば、今回の行事に対する安全対策と言うものは出来る限り考えられているのだろうと思われる。

ジャンはその最後尾付近でいつものメンバーと共に行進し、背後<sup>うしろ</sup>のシイナの機嫌を伺いながら、されども緊張など微塵も必要のないこの状況に、思わず表情を弛緩させた。

「ねえジャン、こんなの久しぶりだよね」

肩に矢筒を担いで、また同時に弓を収めた細長い専用のケースを担ぐ。傍らで、ジャンはパンパンに膨れた荷を背負い、腰に剣を提げていた。

「確かに。前はちょいちょい散歩に外歩いてたけど、最近は全くないよな」

「うん。だから嬉しいかな」

「そいつは良かった。今でこそたまにしか無いが、時間があつたらまた、近場でも散歩するか。今日は楽しむって程の事はないが、下

見感覚なら面白みもあるだろ」

「ジャンは冷めてるね。私これでも結構楽しいんだけど」  
「そいつは良かった」

にしても、だ。

ジャンは穏やかな日差しの下、そういった大した速度でもない遊覧とも言える緩慢さで歩きながら、またサニーと会話しながら、あるいはクロコやアオイらの会話に耳を傾け微笑みながら、内心は少しばかり焦りが生まれている。

考え出せば、少しでも計算してしまえば分かってしまう破産までの日数。

特にこれといった出費がないし、テポンの所で住まわせてもらっているからなんとか生きながらえているが、それでも資金は心許ない一方だ。下手に本を数冊、あるいは一週間でも昼食全てを外食で済ませれば、財布は空になる。

ならばアルバイトでもしてみようと思うが、どこで募集しているのか、その応募を周囲に知らしめているのかが分からない。既にこの街に来て三ヶ月にもなるが、手がかりをつかむことすら無い。

そういった事に行動しない、積極性のなさが一概に要因と言えるのだが――流石に、いよいよ行動せねばならないだろう。

帰ったら調べよう。

彼はひとまずそう考えるも、不安は胸の中に渦巻いたまままで不快感募る一方だった。

「それにしても――」

「これより九〇分の昼休憩をとる！ 分かっていると思うが、森には入るな！ あらゆる意味で危険が多いし、さらにあまり離れすぎるとな！ 時間厳守で、守れなかったものは連帯責任として貴様ら全員に罰則を強いる！」

舗装された道は、やや木々が生い茂る周囲から、途端に薄暗く緑を鬱蒼とさせる自然のトンネルの中へと続いていた。

彼らはまだ林にすらなれない草原の中で立ち止まり、整列する間

もなく戦闘教官は声を張り上げて注意した。

言葉はそれで終わりであり、「解散！」の声から、各々は好き好きに散らばり始めた。

「もう着いたのか……」

ジャンは腰に手を当て、されど一切の疲労を覚えない肩や腰を確認しながら息を吐いた。

「もうって、結構歩いたよ？ 歩きっぱなしだよ？ 疲れたよ……」

「そうだな。なら早速昼食にするか……ん」

どこか適当な場所は無いか、そう周囲を見渡してみれば、既に草原の小丘に立つクロコ、アオイ、トロス三名の姿があり、それぞれは彼らを見て、気づいたのを確認してから手招いた。

重箱は、三段重ねで量、種類ともに随分あったものだが、五人でつづけば見る間に量を減らして、やがて空になった。

満腹になった腹をさすってトロスは草原の上にそのまま横たわり、シートの上ではサニーら三名が水筒からお茶を出して飲み、団欒とする。

「それじゃちょっと、腹ごなしに出てくるよ」

ジャンはそう残すと、地面に寝かせた剣を拾い上げて腰に携え、大きく伸びをした。

辺りは、年甲斐もなく追いかけてこをしたり、またトロスのように寝転がりひなたぼっこに興じていたり、あるいは組手や、剣術のおさらい、紋様を持っている同士で程度のごく軽い魔術のお披露目会など、様々な暇つぶしが行われていた。

時間にして、まだ一時間近く残っているのだ。

何かをするには、この環境では十分な時間だ。

「さて、ちよつと森——」

「頂けない発想だな」

「の周りでも走ってこようかなー」

振り向かずとも分かる異様な威圧。凜とした声に、ジャンは逃げ

出すように走りだした。

が、素早く、足が動くよりも早く背後から腕を掴まれた。

「ちょいまち」

「な、なんですか！」

振り向けばまず視界に入り込むのが赤い姿だ。

胸の形に型を作ったような胸当てに、革製の腰巻には独特な刺繍が施されている。破廉恥な姿だが、さらに背中にはナマクラ以下の鉄の塊と形容できる巨大なソレを背負っていた。それらをひっくりめれば異様な姿と言える。

「あれを見ろ」

振り向くと同時に、シイナは彼が向いていた方向へと腕を伸ばして指をさす。その先には、道が飲み込まれていく森が広がる、その光景があった。

そして、まるで吸い込まれるように中へと入っていく二名の姿。

それは人間ではなく、毛皮を身につける獅子のような勇ましい姿の男に、鳥のようなトサカにクチバシをつける二人組だ。

「クラス代表に頼もうかと思ったけど、頭でっかちタイプの人間だし。君のクラスの代表は女の子だし、隣のクラスを巻き込むのもどうかなっと思って」

「……おれは、その隣のクラスの、しかもただの一般生徒ですが……」

「君は実績があるから。えーと、カールくんだった？　もう仲直りしたの？」

「ぎこちないですが、こちらから話しかけたら返してくれる程度には。挑発したのはこっちですし、九分九厘おれが悪いんですけどね」  
「まあそれなら別にいいけどね。そういうわけだからお願いしたいんだけど」

と、彼女はジャンを掴む腕を離して告げる。軽く腰を曲げるようにしながら両手を顔の前で合わせ、お姉さんからのお願い、といった風体で頼み込んでいた。



さすがに彼女も周囲から自分がどう見られているか分かっているだろうから、この体勢を長く続かせるわけにもいかない。ヘタをすればジャンが、周囲からこの成り行きを妙な噂として流される立場にさえなってしまうのだ。

だから思わず、

「分かりましたから、頭上げてくださいよ」

そう返してしまえば、

「そ。ありがと」

彼女は豪快にジャンの頭をポンポン、と叩くと、そのまま促すように背中を押した。

木々から生い茂る葉は幾重にも重なりあって、自然のカーテンになる。その隙間を掻い潜る木漏れ日は薄暗い陰の中に鮮やかなコントラストとなって、風によって踊る葉と共にその明かりも揺れた。思ったよりも明るい森の中は、教官らが脅していたほど危険は少ないように見えた。

ガサガサ、という草木を掻き分ける音と共に、木々の脇から道路へと飛び出してきた陰があった。小さく、足元を横切るのは薄茶色い野うさぎだ。森だから居てもおかしくはない小動物を見て、さっそくあの二人を見つけたかと期待したジャンは少し肩を落とした。

それからそう間もなく、同じような物音と共に、今度は狐がその後を追うように飛び出し、反対側の草木へと飛び込んでいく。

ううむ、自然の摂理。たぶんあのウサギは捕食されてしまうだろう。これが弱肉強食だ。

そうやってどこか憂いげのある眼差しを、舗装もされていない、無造作に自然生い茂る方向へと向けていると――これも運命か、それとも直感か。そのやや奥側、道よりもさらに暗がりとなる位置に例の二人組を発見した。

おそらく、趣味が狩猟か何かなのだろう。

狩りというものは命を弄ぶというイメージが根底についてしまっ

ているから、ジャン自身あまり良い印象がない。が、それは彼自身がやっていたこともあって、それを咎めることは決して出来なかった。

彼らがここで狩った動物を持ち帰れば、毛皮を剥いで衣類にするも良し、煮て焼いて食うもよしでなんでもござれだ。放置しても他の小動物が血肉に変えてくれるだろう。何も悪いことばかりではないし、殺される小動物に「可哀想だ」だのなんだのと口をだすほど善人でもない。

そもそも、今回は彼らを森から引きずり出すだけだ。シイナが、あの時点で連帯責任を発生させなかっただけ感謝するべきだろう。ジャンは大きいため息を付いてから、大きな一歩で、茂る藪の中へと入り込んでいった。

「おい！ ふたりともー！ 帰ってこーい！」

手を口に添えるようにして叫ぶと、彼らは大きく肩を弾ませる、それから一様に振り向いて走りだす。彼らはその場から離れて、さらに奥へと入り込んでしまった。

「何やってんだよあのバカ……」

泣きそうになる。

頭を抱えたくなる気持ちを抑えて、ジャンは足場も環境もなく、それな位悪い森の中を走りだす。藪をかき分け、名前も知らない葉に肌を切られないよう気をつけながら草木をより分け、踏み倒し、たどり着くのは彼らが先ほど居た場所だった。

大きな樹木。その幹の根元には――。

「……ッ?!」

まだ血なまぐさが残っている。

内蔵を引き摺り出され、いたずらに首を切断された狐の死骸は幹に磔<sup>はりつけ</sup>られていた。

血糊がべったりとついた安物の果物ナイフが近くに落ちていて、雑貨屋で打っていきそうな数種類の釘の詰め合わせケースが置いてあるのを見る。

ジャンは思わず漏れてしまうため息をそのままにして、屈み、幹に叩きこまれた釘を引きぬく。まだ子狐だったのだろうその四肢、愛おしい肉球はズタズタに切り裂かれて見るも無残だ。

皮膚が裂け、手が血だらけになるのも構わず、彼はやがて素手で穴を掘り、そこに子狐の死骸を置いて、埋める。簡単な墓だが、この樹木が墓標となってくれるだろう。

ポケットから取り出したハンカチで手を拭ってから、彼は改めて嘆息した。

さて、バカは何処に行ったのやら。

「狩猟なら、まだ自分のためにもなるんだけどなあ……」

野生動物はなかなか手強い。

まず、確実に殺気を察知して、音や気配に敏感で、あの特有の身体能力がクセモノだ。

だからそれを狩るためには、単に殺すための技術を高めるだけでは獲物を捉えられない。気配を殺すこと、あるいは罠を作ること、ナイフの振るい方や、まず根本的な歩き方など。その様々な技術があつて、初めて獲物を捕らえることが出来る。

狩猟が趣味ならばまだ許そう。

しかしこの悪趣味過ぎる事が目的だったならば……。

ジャンは剣を引き抜く。金属が鞘の金具に擦れる、小気味良い音を鳴らして白刃を晒すと、彼はそのまま柄を両手で握りしめたまま、大地に突き刺した。

——刀身に紋様が浮かび上がる。それは明るく、太陽のように眩く光を放ち始める中で、ジャンは命じた。

「投獄しろ……大地の怒りっ！！」  
アース・ピック

ブロードソードに鈍い衝撃が疾<sup>は</sup>り、両腕に伝わる。彼の強い意思を読み取った魔術は大地に立つ、彼が対象とした二つの足音を聞き取り読み取り位置を把握した後——彼らが何かが起こったとしか認識し得ぬ刹那的な速さで大地が錐状に変異して突出し、彼らを囲い込んだ。

うろたえるような悲鳴、喚き声、悪態がやや近くから聞こえる。轟音と共に巻き上がった土煙が、同時にジャン・ステイルに彼らの居場所を教えてくれた。

ジャンは剣を引き抜くと、数十メートル離れた森の中に、不意に出来上がった出来損ないの牢獄へと切っ先を差し向ける。

再び紋様が輝いた。

魔石から創られたこの武器は、あらゆる魔術を可能とする。

もっとも使用者の技量や知識に干渉して発動するため、ただ媒介となるだけの剣が全てを可能とするわけではない。が、大地や風、そういったある程度の”属性”は、触れるだけで発現出来た。

「疾<sup>はし</sup>れ、剣風」

剣を引き、右腕で身を抱くように構える。左腕は顔の位置まで引き上げ――交差する諸手を勢い良く広げれば、その刹那に刀身からの鈍い衝撃が大気を伝播し、一つの真空波<sup>かまいたち</sup>となって大地の牢獄へと迫る。

やがて音もなく通過する真空波は、それから瞬く間に形を崩して疾風となる。

天をつく勢いでそびえた錐状のそれは、やがてズズズ、と半ばかりズレ始め、鈍い衝撃音を響かせながら、その半ばかり切り裂かれたように崩れていった。

――ジャンがそこを覗き込めば、縮み上がって頭を抱える二人の姿があった。

剣を収め、中へと飛び込む。

男達の怯えるような悲鳴に、少しだけ胸が痛んだ気がした。

「一つだけ訊いていいかな」

極力穏やかな口調でジャンが言った。

彼らは、その威圧的な風貌が嘘のように、こっくりこっくりと、壊れかけのブリキ人形のように頷く。

「さっきのは解体がメインだったのかな？」

二人が揃って頷く。

「狩猟がメイン？」

全く同時に頷かれた。

「言葉通じてんの？」

こくりこくりと返事をする。

依然として言葉はない。

これで彼らは、どちらにせよ反省したのだろうが——これではただ単に、暴力で黙らせたただけだ。

根本的に、ああいった死を侮辱する行為はいけないと教育できていない。

あれでは、子供が好奇心のままにアリを潰したり、カエルを風船のようにふくらませて破裂させたり、そういったものと全く同意義ではないか。

良し悪しすら区別できていないのなら問題だが、果たして……。絶えず零れるため息を最後に、ジャンは近くの、脇ほどまでの高さの錐を手で押した。すると、たったそれだけでも牢獄を作る要因となっていたソレはボロボロと、まるで水気のない砂でなんとか形を維持させたように崩れていった。

そう、脆いのだ。

土に固められた大地を、岩石のように硬く構成しなおしてアース・ピックを発動させることは、今のジャンの技量では到底ムリ、不可能だ。

だからこれが有用なのは、石畳の上など元々堅い場所。岩なども可能かもしれないが、下手をすれば変形することすらなさそうだと思えてしまう。

だからこそ、あの剣風だって当たれば痛い程度。濡れた布で叩かれた程のダメージしかない。

「殺すことを怒ったわけじゃないんだ。馬鹿にするわけじゃないけど、野生動物は捕まえるのも難しいし、素直にすごいと思う。だけど、死骸を遊びに使うのは良くないと思うんだよ。極端な話になるけど、お前らだって自分の死後に解体されてハリツケにされたら嫌

だろ？」

なるべく論すように言ってみる。

その頃になると、彼らは錐状に変化したそれらを見てハツタリに気づき、それからやがて冷静になったのだらう。

変わらず口を利いてくれないが、その頷きには確かな理解の意が汲み取れた。

——面倒に口答えされなくて良かった。

以前の出来事、いざこざから少しだけ学んだジャンはそう安堵して、彼らに背を向けた。

「なら戻ろう。いい加減、教官に気付かれるかもしれないから」  
また草木を踏み分けて歩き出せば、ソレに倣って動き出す気配を感じる事が出来た。

それから程なくして、こっそりと森を抜ければ——。

「……ようやく戻ったか」

威圧的な、どこか怒りさえ孕むような声が響く。

戦闘教官が、腰に手をやり待っている姿がそこにはあった。

「一足先に帰ることにしよう」

まず教官がそう提案した。

既に背負っていた鞆から抜いた両手剣を軽々と片手で持ち上げ、肩に担ぐ。その姿は、鬼族のシイナよりも鬼らしかった。

教官の言葉に三人は背筋を伸ばして居直る。それからまず教官の出方を伺っていると——大剣は、ジャンの額の薄皮をにわかに切り裂いて振り下ろされた。前髪がパラパラと舞い散る中で、鼓膜を突き破る怒号が響く。

「何を止まっている！ さっさと俺を先導しないかッ！」

『は、はいっ！』

声は重なり、行動も全てが同時に、彼らは振り返った。

「走れ！ 全速力だ！」

『はいっ！』

返事をするが早いか、背中目掛けて大剣が振り下ろされる。彼らは途端に死の恐怖を感じ取ると、死に物狂いで大地を弾き、緊張故にまともに可動しない関節や筋肉をそのままに、来た道を、来た時の穏やかさや楽しさなど嘘のように走りぬいていく。

——なぜおれまで。

ジャンは巻き込まれたからどうのこうのなどと言いつつ訳する事も思いつかず、されど被害者根性だけは胸の奥底で燻らせて走り続けた。

そう時間も置かずに、彼らの影は小さくなる。

シイナは申し訳なく思いながら、されどなんだか愉快なまでの理不尽に飲まれたジャンが可笑しくて、口元を抑えて笑いをこらえながら、その姿を見送った。

「帰るまでが遠征だからね！ 気を抜かないでよ！」

集団の先頭を務めるのは、来る時とは違ってシイナだった。

女性だからか、あるいは新鮮だからか、下級生一同の呼び掛けに対する返事はより元気で、列も乱れない。

歩き出せば少しばかりズレが生じるが、イイところを見せたいという本能に近い部分が働いて、談笑は続くながらも、軍隊の行進とあいなるそれらは、結局街に着くまで続くことになった。

## 図書館

放課後。

ジャン・スティールは渡り廊下から図書館へと渡った。

あと一ヶ月も経てば定期試験が始まる。まず授業ごとの筆記試験があつて、戦闘訓練では実際に一人二組になって出来栄を披露する。彼は今のところ、後者に対する自信は持ち合わせていたが、どうにも勉強というものに自信が持てなかった。

理解ができないということではなく、単に不安だ。だからこそこれまでやってきたように、それを努力することで満たして補う。

——という事もあるし、いい加減ノロの事も気にしてやらなければならぬだろう。

今日はサニーもクロコと近くの服屋へ寄ってから帰ると言っていたし、トロスは他の友人に誘われるがままに帰っていった。何はともあれ、いつものグループ以外にも行動できる者がいるというのは良いことだ。

「……おれ、なんか距離置かれてんなあ……」

異人種間で、『キレたらヤバイヤツ』の異名が伝わるのに、決して長い時間は要さなかった。

気がつけば腫れ物を触るような扱いを受けていた。それは人間も同じであり、辛うじて普通に声を掛けてくれていた連中さえも、最近では目も向けてくれない。異人種も同じだ。

どこで間違ったのやら……ジャンはため息を吐いて、図書館の重い扉を開けて中へと入った。

円形の建物は、その内部も円形に形作られている。

まず内装として最初から存在している本棚は、壁にそってぐるりと中を一周していた。本は余すことなくジャンル分けて詰め込まれていて、ちょうどその上に沿うようにして備え付けられている吹き



抜け状の廊下には、それと同様に本棚が壁に埋め込まれていた。さらにそこに収まり切らない本は、その本棚に重なる棚に並べられていて、取るためにはキャスターのついたハシゴを使用する。

入り口の正面には階段があり、また内周の本棚から直角に、棚は本屋のように鎮座し並んで、狭い通路をつくりだす。

試験が近く、また放課後ということもあって利用する生徒の数は割合に多いようだった。

入ったすぐ右側にはお手洗いの扉があり、その脇に壁に沿うような半円の受付カウンターがある。

自習用の長机は、階段の手前に多く並んでいた。

「あ、ステイルさん……？」

聞きなれた声に振り向くと、そこには幾冊かの本を胸に抱くアオイが居た。既に夕方近いからか、頭のハイビスカスは心なしかしぼんでいるようだった。

唯一まともに接してくれる内の一人に、ジャンは少しだけ胸を撫で下ろすようにして向き直る。

「アオイも勉強？」

「うん、はい。そろそろ試験も近いですし、万全を期したいので。レイミイも居ますよ？」

そう言って彼女はジャンの背後に視線を配る。彼は促されるままに自習机の方へと顔を向けると、既にこちらに気づいていたレイミイが大きく手を上げて主張して見せている姿が見えた。

「行きましょうか」

「おれも良いのか……？」

「……みんなの事を気にしてるなら、私達の間には要りませんよ。お友達じゃないですか」

「そう、だな。ありがとう」

「それじゃ、行きましょう？」

手を伸ばしてくる彼女の手を握り返すと、そのまま連れられるままに、ジャンは長机へと向かっていった。

ハイビスカスは、なぜだか綺麗に咲き誇るのを見ながら——ジャンはやがて席についた。

「や。秀才二人に勉強を教わるなんて光栄だな」

「嫌味ね、ジャンくんなんて他人のことなんて興味ないクセに」

「失礼だな。いつもヒトの目気にしてビクビクしてるっていうのに」  
「だったらもっと表面に出してくれれば、まだ可愛げもあるっつものよ？」

レイミイは会うなり机に頬杖を付いて、もう片方の手では指先でペンを弄繰り回してそう口にする。が、純粹に悪く言っているというわけではなく、単なるコミュニケーションとしてのソレだ。

だから隣に座るアオイも、それが分かっている微笑んでいる。幸せな空間だ。

「奇遇。勉強？」

そう考えていると、不意に現れた声。教科書を取り出していたカバンから顔を上げて振り向けば、そこには赤いワンピース姿の少女が立っていた。

思わず驚き身体が弾むが、ジャンはそれをなかったコトにして大きく息を吐いた。

「ああ。試験があるからな」

言葉を返すと、少し遠慮がちにアオイが袖を引いた。

「……ステイルさん、この方は？」

と、そこで気がつく。

そういえば彼女を知るのはジャン以外では、タマくらいしか居ないことに。

「まあ、ノロ。座りなさい」

「御意」

鞆やかに伸びる白い腕を上げて、勢い良く振り下ろすと——腕は紅く変色し、そしてにゅると伸びた。それからレイミイの隣の席の手前に手をつくつと、力を込めて跳躍する。ノロは軽々と高く宙を舞ってから——もう片方の腕を触手にして椅子を引き、着地すると

同時に腰をかけた。

……心臓に悪いという以前に、嫌なものを見たという感じだ。今が朝でない事感謝するばかりである。

そしてまた、慣れたと思っていたジャンでさえこうなのだから二人もさぞかし大変なことになっているだろう。そう思ってアオイ、レイミイに目を向ければ――やはり異人種。反応が違った。

「まあジャンくんの友達に人間なんて居るわけないと思ったけどね」レイミイは得意げに鼻を鳴らし、アオイは何かを口にするのは無いが、困惑した様子もなく平然とノロに微笑んでいた。

「私はアオイと申します。ステイルさんのクラスメイトです。趣味は、お昼寝です」

「わたしはレイミイ。同じくクラスメイトよ。そうね、好きな事は魔術の勉強、かしらね」

と、ジャンが紹介するよりも早く自主的に名乗り、簡単に自己紹介する。さすがが出来ている人間は違う。そう思いながら、ジャンは手でノロを指し示した。

彼女はジャンに身体を向ける。

「彼女はノロだ」

「……です」

「というわけだ」

「……よくわからないけど、よろしくね。ノロちゃん」

「よろしくお願いしますね」

両者の微笑みは、どちらかと言えば迷子の幼子に向けるようなソレだった。

ジャンはその間にノートと教科書を展開し、カバンを椅子の下に流す。ノロはと言えば、二人のちょっとした質問、たとえば趣味や好きな食べ物やらの無難なそれらを、意外にも適当に流していた。彼女はそうしながら、服の下から数冊の革張りの本を机に置く。

「――それじゃあ、今度一緒に洋菓子屋さんに行かない？」

「それがいい」

「あ、この前見つけた美味しい所があるんですよ。そこで良いですか？」

「それでいい」

なんて、無愛想にも程があるだろう返しにも関わらずしっかりと会話をして、あまつさえあそびに誘ってくれる彼女らはなんて親切なのだろうか。親心に感動しながら、自然的に除け者にされたジャンは適当に教科書をめくった。

「ノロちゃんって、どんな本読むの？ それとも試験の勉強？」

やはり学校の敷地内に居るという事だから、ここの生徒という事を前提に話しているのだろう。服装や外見などは二の次というらしい。ジャンとしてはもう少し言及して欲しいところだったが、わざわざ口出しするのも無粋というものだ。

「いまは、魔術書を。言葉は、元から知っている……から」

「随分と古い本ですねえ……装丁ボロボロですよ、これ。ちょっと良いですか？」

「ご自由に」

アオイはノロがどこからか取ってきた本を手に取り、左腕に背表紙を乗せてパラパラと開く。どれもこれも黄ばんで、紙の端が欠けていたり虫が食っていたり、外見以上に中身は風化していた。インクも薄く、表紙のタイトルさえ読み取れない。否、それ以前に現在の言語ではないようにさえ思えるのは、あながち間違っては居なかった。

中の文章を読み解こうにも、同様に読めない。

仮に古文だとして、これが原本だとして――彼女は一体、どこからどうやってコレを持ちだしたのだろうか。そう思って最後のページを見れば、やはり貸出不可の紙が貼付けられているのが見えた。

そこで頭が、無意識に切り替わる。

アオイは微笑んだ。

「む、難しくてよくわかんないです。すごいですね、ノロさんは」  
彼女はそれを読まなかったことにして、ノロの前に本を置いた。

ジャンはそれを横目に見ながら、ノートに魔術の原理を簡単に書き写し——中々に賢明な判断だ。そう思った。彼女は長生きをするだろう。

依然として、ジャンへと身体を向け視線を投げながら会話するノロが気になるが。

「言葉より、文字はムズい」

アオイにとってあまり触れたくない事をノロが吐く。

レイミイが「あー、やっぱり詠唱より陣はねえ」と勘違いして話を逸したことに、彼女は心底感謝して胸をなでおろした。

「詠唱か魔法陣、どっちかすれば魔術発動するけど……ぶっちゃけ魔法文字とかワケわかんないもんねえ」

「だから、刻む」

「そうそう。身体に刻んだり、魔石使ったほうが簡単だもんね。昔の人は、詠唱とか魔方陣を未だに使うけど、便利な方がやっぱりいいもんね」

「愚か。手間ゆえに、意味がある。見る……？」

「え……？ うん、まあ。でも危なくない奴をお願いね？」

「了承。詠唱開始。『地の底より出でし魔性の権化、邪悪なる神の御心なるままに吐き出されたる憎悪の残渣——』」

なにやらブツブツと、妙に流暢に話だす姿は初めて見る。ジャンは目も向けずに、ただ声だけを聞いて考えた。趣味が合ったようにいい事だ、と。

つらつらと綴ると、そう時間もかからずに魔術学の試験範囲を大體押さえてまとめることが出来た。ざっと教科書を見返してノートをながめれば、存外に範囲が狭かったことを知る。

良し、案外なんとかなるかもしれない。

ふんふんと満足気に鼻を鳴らすと、またアオイは袖を引いた。

「ん、どうし……どうしたんだ？」

顔を向ければ、彼女の顔面は蒼白になっている。思わず言葉に詰まってから改めて口にする——視界の端に、妙な紫の光が見えた。

視線を向ける。

そこには、両手を胸の前に合わせるようにするノロの姿。触れていない手との間には、その輝きの原因。紫色の禍々しい光球が、凄まじい魔力を周囲に放出し、さらに圧縮しながら徐々に大きさを増していく。

ノロの口は小さく動き、詠唱を止めることはない。

やがて空間が歪んでしまうような錯覚に陥った。この図書館全てに満ちる圧倒的な魔力は、一体どこから漏れ出したのか、発されたのか理解しようとする以前に、理解しようとする考えに至らない。

「す、ステイル、さん……。彼女は、いったい……？」

アオイの言葉も耳に入らず、ジャンは思わず机に身を乗り出して腕を振り上げていた。

「こら」

鋭いチョップがノロの頭部に叩き落される。

直後に集中が、詠唱が途切れて——魔力は空气中に霧散し、輝きは溶けるように消えていった。

「痛い」

「なに発動させようとしたんだ？」

「ブレイク・スタンダード  
標準的な消滅」

「効果は」

「触れた物質は対消滅を起こし、質量が<sup>エネルギー</sup>衝撃となって周囲に放出される。相手は死ぬ」

「お、お前身体こっち向いてたじゃねーか！」

「……凡ミス」

飽くまで無表情のまま、されど声と風体は少女そのものだというのが、その存在には凄まじい違和感を覚えてしまう。

もう慣れたとはいえ、改めてマジマジと見れば、やはり改めてそう思わされてしまうのが悲しいところだった。

「まあ今日は被害ないから良いけど……今度はアレだ。基本的には魔術禁止だからな」

「御意」

「それとな――」

「む」

小さく声を上げて、ノロは右腕を引き上げたかと思うと、その手首をマジマジと見てから頷いた。

椅子を引いて立ち上がり、その背に回りこんで机に押し込んでいく。それだけで、やはりここには頻繁に来ているのだと分かる。あの程度のマナーは、周囲を見て学んだのだろう。

「時間がない」

「あ、何か用事？」

と訊くのは、あんな目にあつたのにも関わらず好奇心が失せないレイミイだ。

ジャンは周囲の、いかにも迷惑気な視線に深く頭を下げながら、ノロに注視する。

「腐る」

頷きながら口にした。

「臭くなる。臭いのはイヤみたい、だから」

それで分かりやすくなったと思っているのだろうノロは、何故だかここで誇らしいように少しだけ口角を吊り上げた。何か大きな仕事を成し遂げたような表情だ。思わず頭を撫でてやりたくなる。

「帰る」

別れの挨拶もなしに、ノロは床を弾いて一直線に、虚空を穿つ矢が如き速度で、扉から外へと飛び出していった。

「一ヶ月出禁になってしまった……」

あの魔力の暴走は周囲になにか実質的な破壊をしたわけでも、あるいは障害を起こしたという事は無かったが、それでも迷惑になったことには変わりがない。あんなのは、大声を出して騒ぎ立てるようなものと同じなのだ。

司書から勝手にノロの保護者扱いを受けたジャンは、そんな事で

そういった処分を下された。

夕暮れ、買い物帰りや帰宅の姿が多くなる通りで、ジャンは先程の面々と共に帰路についていた。

「それじゃ、もし良かったら今度はウチで勉強しない？」

レイミイは胸に手を当てて提案する。

「あ、いいですね、それ。サニーちゃんと、クロちゃんも誘って」

「ね。試験一週間前くらいで良い？」

「はい！　なんだか、今からでもちょっと楽しみになってきました」

「あは、本末転倒にならないようにしなきゃね。ジャンくんもよ？」

「……なぜに？」

自分で自分を指さして、首を傾げる。

まさかここで名前を呼ばれたり、誘われたりするとは思わなかった。

「勉強なんて一人で出来るぞ」

今日がそうだった。

なんだかんだで、彼女らが談笑している間に終ってしまったのだ。他の教科に手をつけようとしたところで追い出されてしまったのだが。

「あ、そっち？　いやだって、出禁になったって話題から、家で勉強って言うんだから分かるでしょ？」

「さすがに盲点だったなー。あー、でもなー」

「なんで？　みんなで勉強すると捗るわよ？」

「大勢の中で除け者にされるのはイヤだから」

「なーにスネてんのよ」

肘で脇をつつく。ジャンは身をよじって彼女から離れると、すぐ隣のアオイの肩にぶつかった。

「おっと、ごめん」

「大丈夫ですよ。でも、本当に来ないんですか？」  
心配するような声色。

ジャンは思わずたじろいで、首を振った。



「行かないとは言っていない」

「……捻くれてるわ。根性ひん曲がってるわ」  
やれやれと、レイミィは肩をすくめて首を振る。

「ヒネてない」

「まったく……あ、私達ここまっすぐだから」  
大通りから、やがて噴水広場へと到達する。

「また明日、です」

「ああ、じゃあな。ふたりとも」

「まったねー」

大きく手を振るレイミィに、慎み深く手を上げ別れを告げるアオイ。ジャンはそれに応対して――家路につく。

大きく息を吐きながら今日の事を思い出すと、随分と自分が恵まれていることを再認識できた。

仲良くしてくれる連中がいる。

幸せなことだ。

できれば、こういった時間が少しでも長く続けば良い。

真っ赤に燃える空を見上げながら、ジャンは切にそう願った。

## はぐれの襲撃

「喰うこともせず、ただ殺し、イタズラに散らかして埋める。これには何の意味があるのだ？」

人工的な盛り上がりを見せる樹木の下、死骸が埋まるそこを見つめながら呟くのは女性だった。

透き通るような声音で、熱はなく、限りなく無感情で漏らすように呟いた。

鋭い爪を持ち、仙骨から伸びる球を連結させたような尾は、サソリのソレだった。

「死ねばいいのに」

その言葉だけは、声にならない声で呟かれたが、その中で唯一確かな熱を孕む言葉だった。

「ヒトの子よ。その愚かな行い、死を以って……」

身体の内側から、酷く硬質な細胞が浮かび上がる。身体が闇に飲まれるように黒く染まり上がって、ついなる腕が、気がつけば大きなハサミへと変化していた。

興奮を表すように尾はいきり立ち、その万年筆の先のように先端からは、黄色い液が滴って——じゅう、と音を鳴らして、地面に積もる葉が溶けた。

「死を以って、償わせてもらおう」

彼女は振り返り、歩き出す。

既に死骸は腐り、その惨事が幾日も前であることを教えていたが——構わない。彼女がそう決意する理由は、これだけではないからだ。

今回がきつかけに過ぎない。

喰うなら許そう。野生動物が血肉に変えるならばまだ許せる。

だが——。

彼女は冷たい目で森の中を見渡してから、静かにそこを後にした。

その日は学校が休みだった。

だからこそ、街が少し慌ただしいことに気づくことができていた。

「ふふっ、なにを見ているんですか……？」

街の外から巨大な鳥——それはアエロだった。彼女が空を舞い、外壁の向こう側から城へと向かうのが見えた。ベランダから身を乗り出して往来を眺めれば、通常よりも数人は多いだろう警ら兵が待機しているのが見える。その中に、大きな戦斧を担ぐ、ねじれたツノを頭の両脇に備えるミノタウロスの女騎士が混じっているのを、彼は見逃さない。

「いや、街が……」

「なーにをしてんのよ、っと」

背中に飛びつくようにするのはテポンだった。

彼女はいつしか、いつかの深夜に見たスタイリッシュを取り戻して、ジャンに飛びかかる。元気なのは良いことだが、彼にとっていい迷惑なのには変わりがない。

首の後ろからにゅっと顔が生えてきて、テポンはジャンと一緒に街を見る。それから「なーるほど」と頷くが、その軽快な発言から、事態をしっかりと認識しているかは甚だ疑問だ。

「定期的な軍事訓練かしらね。ほら、今の御時世なにがあるかわからないし」

——広大な海の向こう側では紛争が繰り広げられる地域があり、この大陸、国の隣国では今にも内戦が始まりそうな雰囲気だ。

そしてその国と、海の向こう側の紛争地域の国とはにらみ合いが続いており、紛争さえ治まれば火の粉はこちらに降り掛かってくる、というような恐ろしい状況に囲まれている。

世界は平和だ、という言葉を、最近聞いたことがない。

そりゃそうだ。平和じゃないんだから。

だから、魔法を持つ騎士が求められる。魔術がより簡易に発動できるようになって、争いは被害を大きくする一方である。科学技術

より、はるかに有用性の高い魔法、魔術が割合的に多い戦は、それ故にそれまでとは大きく異なる被害をもたらすのだ。

そして科学は衰退していく。

世界は、異人種を迎えてから大きく変わろうとしていた。

「だと良いんだけど……」

「戦争とか、無いよね？」

いつのまにか、下から潜り込んでジャンの脇から外を見るサニーがそう呟いた。

ジャンの部屋に集まった各々、トロスやクロコ、レイミイ、アオイも同様にベランダに集まる。

無数の建造物を隔てた向こう側に辛うじて見える、路地とも言える往来。

そこは街の人間の目が、あまりつかない場所だ。そんな所に警ら兵が居ることも不思議だが、さらに騎士が居るといふ事が疑問を増やしていた。

「だとしても、僕たちは見習い以下で一年だ。戦争が起こっても参加することはできない……と思う」

「だと、良いんだけどな」

そう返すと、不意に背中を力一杯叩かれた。肺の中の空気が全て吐き出されて、その勢いで思わずベランダから落ちそうになる。彼は両腕でベランダの柵を掴んで身体を支えてから、怪訝な表情で振り返った。

「な、何すんだよ！」

「ジャンくんはみんなを不安にしたいわけ？ ふつう、男の子ならたくましくて頼り甲斐のあること言うでしょ？」

叱責するのはレイミイで、どうやら背中を叩いたのはその尾っぽらしい。常ならば渦巻いている尾が今は足元まで伸びているのを見れば、そう理解するのに時間要らなかった。

「まあどうせ何も起こらないんだから、少しくらいそういう雰囲気を楽しんだっていいだろ？」

「ダーメーよ。怖いのは嫌いだもの」

テポンは背中の、縮小する羽根をパタパタとはためかせながら注意する。

「浅はかな貴様にはわからないと思うが、他人を気遣うというものは重要なんだ」

クロコが続けるように言う。

ジャンはバツが悪そうに肩をすくめて、「わかったよ」とベランダから離れて部屋へと戻っていった。

『――皆様に、お知らせがあります！』

声は幾度かそう繰り返してから、続けた。

『この街に、“はぐれ”が近づいています！ 危険ですので、再び放送”があるまでは決して外に出ないでください！ この街に――』

広場から響く声は、拡声器を介して街中に響いていた。

柱の根元にある専用の装置に声を吹き込めば、音声を増幅して拡声してくれるその機械は、そうそう使われない。使う必要な時が無いのだ。

だから、その必要がある状況とは――。

「まさか、ね」

テポンが脂汗を額に滲ませる。

勉強会は、その声のせいで一時中断となって、されどそれぞれは何も出来ずに部屋の中で立ち上がっていた。

はぐれが近づいている。

だが、以前の獣人の際であればこういった放送は行われなかった。ならば、今回に限ってなぜそれがなされるのか。

その敵が、今回初めて街を襲いに来るから。あるいは、既に交戦してはるかに格上であることが判明したから。または、途方も無いほどの集団を率いているから。

以上のどれかであり、以上のそれらでもある。飽くまで、一つだ

けである可能性などはないし、そう希望的観測ばかりしていられるほどの状況などではないのかもしれない。

特に異人種は、そういった緊張や状況を過敏なまでに感じ取っていた。野生の勘、とでも言うのだろうか。

故に何よりも緊迫して動けずにいるのは、ジャンを除く全ての友人らだった。

「姉さん、これは……」

「大丈夫よ。騎士が動いてるんですもの」

「そうだよ。おれたちは養成学校の学生だけど、それだから戦えて訳じゃない。国を守る人がいる。おれたちはその人たちを信じるだけでいいんだ」

隣に座っていたサニーの頭を撫でながら、ジャンは無責任にそう告げる。

もしかしたらとんでもない軍団が襲ってくるのかもしれない。”はぐれ”というのは嘘で、隣国からの進軍かもしれない。あるいは、伝説とも謳われる凄まじい実力の持ち主が敵対しているのかもしれない。

考えればキリがないそれらを、まずは払拭しなければならぬ。ジャンはまずそう思って、飽くまで落ち着いた様子で涼しそうに口にする。

「どちらにしろ、おれたちには何も出来ない」

一番不安そうに眉をしかめていたアオイに目を配りながら、できるだけ優しい口調にする。

クロコは、応じるようにそれに続いた。

「正確には、足をひっぱることしかできない、だがな」

「ははっ、耳が痛いな」

「……確かに、そうかもしれないけれど」

「不安なのはおれたちだけじゃない。この街に住むみんながそうだから……でしょう？」

言い聞かせるような言葉に、テポンはまるで仕方なく納得したよ

うに肩をすくめて、椅子へと腰をかけた。

「まだひよっこ以前の、卵だものね。今はただ燻っていきましょうか」

首まで丸い首襟が伸びる綿の衣服一枚を纏う女性は、薄い紫がかった髪をそよかせになびかせながら、深い溜息をついていた。

側頭部で対になる、ねじれるツノが特徴的な女性はミノタウロスと呼ばれる牛族である。その持ち前の怪力とタフさが強みであり、どれほどの小柄でも彼女が背に担ぐような身の丈ほどの戦斧は容易に扱える。

「あなたは、いったい誰なのでしょう？」

見知らぬ来訪者は殺気立っていた。

不躰に、この一ヶ月の間に森に來た者を全て差し出せと告げてから、彼女の鋭い眼光はミノタウロスの女性に張り付いて離れない。

エクレルはそう訊いてみると――背後に控える五人の警ら兵が一樣に剣を構えた。

両手にハサミを持ち、パールのような尾を持つ女性。衣服は質素に、胸を隠す布を巻き付け、無造作に腰に布を巻くだけの格好だが、それ故だろうか。

むき出しの野性味が、十分すぎるほどに肌に感じられた。

”はぐれ”はだからこそ強い。

この世界に來てから徐々に忘れつつある野生というものを持っている。そして本来の鍛え方で維持しているその戦闘能力は、下手に型通りに鍛錬した騎士や警ら兵を、容易に超越する場合がある。

だからはぐれは厄介だ。

この世界に馴染めないのに、この世界に居座っている。

エクレルは答えない彼女に、深い溜息を漏らした。

「アナタの要望には答えられません」

そう答えれば彼女はどうか動くだろうか。

それは、想像するまでもなかった。

「自然を穢すヒトを出せ。さもなくば……」

ハサミを、まるで拳を構えるように持ち上げる。尾はいきり立ち、頭部を超えて前面にもたれかかってきた。

——サソリの怖いところは、その尾から注入される猛毒にある。それは変幻自在に変異する打撃技、あるいは鞭のようにしなやかに力強く、素早く捕食対象に迫り、そのハサミで捕らえて突き刺すのだ。

一度ハサミに捕まれば逃げるなどほぼ不可能。その上、ダメ押しとばかりに毒に侵されれば……。

「同種であろうとも、わたしは戦闘をも辞さない」

「なら……」

彼女に応じるように、エクレルは背負う戦斧を背中から引きぬいて肩に担ぐ。同時に、それは背後の警ら兵たちへの抑止にもなるような姿だった。

「私がアナタの目論見をはずしましょう。みなさんは、どうか手を出さないください」

得も言われぬような威圧が、それまでの温和な様子からは想像もできない程に放たれていた。剣を構えた彼らはそれぞれ顔を見合わせてから、声も出さずに剣を収め、身を引く。それはこの状況ではどちらにせよ、足を引っ張ることしかできないだろうと考えたが故でもあった。

だが、果たして彼女を傷つけぬままで退かせることが出来るだろうか。

彼女はにわかに不安になる。

はぐれだから強いが、はぐれだから悪だという方程式は存在しない。そういった存在が村や街を襲う理由は、彼女が口にしたように、人間による自然破壊を許せなかったりした場合が多いからだ。こればかりは生きていくことに必要なものだから防げないし、どうすることもできない。

だからどうにかして、一旦退避してもらいたいのだ。



どうにかして話し合いの場を設けられさえすれば……彼女の考えは、ごく平和的なものだった。

たとえソレが、途方も無い夢物語だとしても。

「どうしたのです？ わざわざここまで来たのに、待つつもりですか？」

斧、と言っても典型的なバトルアックスではない。柄の両脇に半月の刃を備える武器ではなく――それは片刃の剣のように、あるいはカマの刃を折り曲げて柄に沿わせたような外観を持っていた。

樹木の幹をそのまま使用したかのような柄、まず先端――つまり鍔として大きな箱状の金具が叩き込まれる。そこから伸びるように装着される片刃である刀身は柄の半分よりやや長い程度の長さを持つ。逆側の峰打ちたる部分は平たく台形状に広がり、鋼鉄で覆われている。つまるところ、槌ハンマーのように扱えるわけだ。

それを構えるだけで威圧感が尋常ではないというのに、大きく振り上げれば、どれほど使用者の身が無防備に晒されようとも、踏み込めば己の上半身が吹き飛んで居るような錯覚を覚えてしまう。

だが――サソリの娘は大地を弾いた。

瞬く間に肉薄する彼女に対して、構わずエクレルは戦斧を振り下ろす。

虚空を切り裂いて、間もなく大地を砕く。

衝撃は腕に伝わり、やがて四肢に伝播して全身を震わせた。大地に亀裂が入り、すぐさまその巨体ゆえに前方の視界が遮られた。

斧の影から、土煙を切り裂いて不意気味にハサミが切迫する。

エクレルは予想通りの行動に思わず頬を緩めながら、

「はっ！」

まるで重さなど感じさせぬ動きで斧を、横薙ぎに振るう。共に槌の部分で横腹を穿たれたサソリ娘は、身体をくの字にへし折り、確かな手応えをエクレルに与えながら吹き飛ばされていく。

だが、彼女もただでは食らわない。

その最中に翻る尾は鋭く木製の柄に突き刺さったかと思うと――

焼き尽くされるように煙を上げ、腐食するように黒く変色し、柔く、脆くその部分が重さに耐え切れずに砕けて、斧の部分は振り抜いた柄に置き去りにされていた。

彼女と共に減速しながら大地を抉り、その影に巻き込んだ女性を潰しきる事もなくやがて止まる。

弾くと、されど持ち上がる事無く反転して、鈍く大地を叩いて倒れた。

サソリの女性は、その表情に怒りを携えたまま、されど侮ること無く、確かにエクレルの実力を読み取っていた。

「アナタはなぜ我々を襲うのです？」

武器は失せた――わけではない。

今度は柄を棍棒のように構えて、対峙する。

「ヒトはあまりにも穢し過ぎた。そう思うのは、なにもわたしだけではないだろう」

紅く染まる瞳でエクレルを睨み続けたまま、一拍、息を吸い込む間だけを置いて、彼女は続けた。

「このままならばいずれ、立ち上がる者も居る。国を利用する者さえもな。わたしも、そうすることはやぶさかではない」

「共存を諦めたならば、溝の門扉<sup>ゲート</sup>から帰れば良いでしょう？ アナタはわざわざ気に食わない世界で生活をして、気に食わないからと自分の思うように変えようとするのが正しいと思っているのですか？」

彼女はたまらず反論した。

穢していると感じるのならば帰れば良い。

もとより、この世界はヒトの地だ。彼らの世界を、彼らがどうしようも構わない。それが例え、滅亡や破滅に傾く事になったとしても、口添えすることが出来たとしても強制的に、その決定に干渉する事は異人種には許されない。

あくまで訪問者である限り、共存を目的としている限り、その存在が完全に許されない限り、そうする事はできない――というのが、

彼女らの暗黙の了解でもあった。

「その考え方、身を滅ぼしますよ」

低く、底冷えするような声が大気を震わせる。

サソリの女性はそれを受けて、短く舌打ちをした。

「黙れ。懐柔された貴様らに何が分かる。ヒトの政治などに翻弄され、ヒトの争いに巻き込まれ、ヒトに侮蔑されながら後ろ指さされて生きながらえ、寿命や、異質な力のせいで畏怖され——なぜそれでも貴様らはこの世界に固執する。滅んだほうがいい。我々が、新たに作りなおせば良い。違うか？」

「慢心、環境の違いですね」

話にならない、とエクレルが肩をすくめて嘆息する。

それと同時に、敵は再び駆け出した。

エクレルも応じて大地を駆け、棍棒と化したそれを肩の高さまで引き上げて、弦を引いた矢のように後ろへと大きく引き、解放。投擲された棍棒は、その刹那に尾から吹き出した黄色い液体に触れ、飲み込まれて——醜悪な腐臭を発生させながら、変色し、溶けていく。

にわかに動きが緩慢になるエクレルへと、踏み込んだサソリの女性鋭くハサミを振り上げる。

その刹那。

彼女が、エクレルが動いたと認識するよりも早く、その手は力強くハサミの元となる腕を掴んでいた。構えるハサミも同様にして、怪力ゆえに反抗できず、動けない。

ピクリと、頭の後ろで弾む尾を見るや否や、エクレルはそのまま足の側面で彼女の足を纏めて払うと、瞬く間に姿勢は崩れて地面に沈む。

うつぶせにして、両手を後ろで組ませて馬乗りになる。慣れた様子で組み伏せたエクレルは、大きく息を吐いて、額から流れる汗を拭った。

「アナタも、ヒトに迫害された口ですね？」

乱れた赤髪をそのままに、サソリの娘はそっぽを向いて黙り込んだままだった。

「アナタなら、迎えてくれるヒトが居れば、わかってくれるでしょう。今の私の……私たちの気持ちだ」

「ヒトと、共存しろと？ このわたしにッ!？」

「応じなければ首を折ります」

そっと首筋に手を添わせると、びくりと肩が大きく弾んだ。

どれほど強気な態度をとっていても、やはり怖いものは怖い。彼女はそれがわかって、どこか安堵したように微笑んだ。

「ふ、ふざけるな！ わたしは——」

「口答えするなら腕を折ります」

「ひっ……わ、わたしは……ッ！」

「腰折りまーす」

「わ、わ——わかった……言うとおりに、すれば良いんだろう……？」

怯えた声で、すっかり全身を萎縮してしまった彼女はぐったりと倒れこんで、そう告げる。

彼女の尾も今やいきり立つこと無く、身体に乗っかるままに乗っているだけだった。

「はい。十分ですよ。あ、もちろん強制するつもりはないので、ひとまず一ヶ月ほど一緒に生活するだけでいいです。それでも本当にダメなら、しょうがないって事で」

「……一応訊いてみたいんだが、しょうがなかったらどうなるわけだ？」

「一応反乱未遂ってことで、軽く二、三〇年くらいは牢屋暮らしですわね」

「さ、さんじゅう……。わたしは何よりも、貴様が相手だったことがこの人生の中で、一等の不幸だと思う」

今にも泣き出しそうな顔になって、泣き言のように彼女は言う。先ほどの啖呵や何かを叫んでいた彼女の姿は一切無く、今の格好は

何かの冗談のようだった。

エクレルは穏やかな笑みを保ったまま、思いついたように口にする。

「そういえば、お名前ってなんですか？」

「名前……わたしは――」

日が暮れ始める時刻。西の空は既に赤らみ、空からは太陽が姿を消していた。

全身から吹き出る汗に不快感を覚えながら――エクレルは、思いも寄らない拾い物をした。

そう思いながら、まず最初に報告をしようと、ポケットから小さな白い魔石を取り出して――大事になりそうだった任務は、あっけなく終了を告げた。

## はぐれの入学

「――わ、わたしの名前は」

緊張した面持ちで、紅く長い髪の先を指先でくると弄る女性は教壇に立っていた。傍らでは、作業服のようなそれを着るこのクラス担当の教員が腕を組んで教室全体を眺めている。

伏し目がちの赤い瞳は教卓をじっと見つめながら、控えめに自己紹介を続けた。

「リ……イヤ、ちがう。クリイムだ。よろしく、頼む」

淑女らしく、慎み深く告げた後、彼女はそのまま口ごもる。

教室内が奇妙な緊張感に包まれるのをジャン・ステイールは感じながら、休みに入る前までは隣に居た獣人の男が窓際の方に行ってしまったことに疑問を抱いていた。そして、彼の隣には不自然に空席になった机が置いてある。

教室の真ん中の列、その最後尾に至るそこは目立つことはなかったが、それでもそこに誰が座るかが容易に想像がついてしまうために、多くの視線が集まりつつあった。

「えー、クリイムは騎士さんのエクレルの親戚らしくてな。試験も見事にスルーして転入することになった」

担任が渋い声で補足する。

思わぬ騎士の名前にあたりは騒然として、静寂は果たして破られる。ざわざわと騒ぎ始めるその中で、手を上げて彼女に質問をする者が現れるまでそう時間は必要なかった。

「質問でーす！ 趣味はなんですかー？」

そう訊いたのは、人間の男だった。特に目立つ特徴は、腰辺りから生えるサソリの尾だけであるためにあまり気にはしないのだろう。それにこういった控えめな女性というのはあまり居ないから、彼らにとっては新鮮で嬉しいのかもしれない。

異人種がどうか関係なくそう接してくれると、なぜだかジャン

も嬉しくなってきた。

彼は微笑みながらクリイムを眺める。

しどろもどろになりながら、「特にない」と答える彼女と眼があつて——心臓が不意に高なつた。

「好きな男性のタイプは？」

「え、あ……の、つ、強い人かな」

——彼女の言葉に、クラスが静まり返る。ぱつと、まるで示し合わせていたように多くの視線が、途端にジャンへと集中した。振り返り、一斉に彼を注視する姿は異様で、ジャンは思わずすくみあがつた。

「な、なんだよ……」

「お前、戦闘訓練の成績良いよな……」

空席とは反対側の男が、ぼそりと漏らすような、それはジャンに言つたと言うよりは、思わず零れたような台詞だつた。

「アイツ倒さなきゃか……」「険しい道だな」「いばらだ」「俺やめとくわ」

どこからともなく、そんなネガティブシンキングな言葉がぼそぼそと聞こえてくる。

不平不満のように聞こえて、ジャンはいたたまれなくなるが——戦闘訓練の授業で、それほど良い成績を収めた記憶などは無かつた。ただそつなくこなしている自覚はあつたが、組手の際は相手を圧倒すること無く合わせていたし、徒競走も真ん中辺りの順位を守り抜いていた。

だから目立つわけなど無かつたのだが、彼らはどうやら以前の森の戦闘以来、”強いから手を抜いている”という妙な勘違いをしているようだった。これが良い意味で、羨望というものを得られるのならばよかったが、身を引かれるという悪い意味で影響を与えられているのならば、願ひ下げたい評価である。

「あー、他に質問が無いならいいな。クリイム、お前の席は今注目受けたヤツの隣だ。あの空席な」

「わ、わかりました」

（――あのエクレルとか言う女さえ居なければ、今頃また森に戻って自由気ままな快適生活が続けられていたのに）

クリイムは幾度ともないため息を心の中で漏らしながら、着慣れない制服に窮屈感を覚え、また見慣れない大勢の視線を一心に受けながら受け答えをしていた。

緊張のせいで、頭の中が空っぽになる。

もしかするとこれがある種の尋問や拷問で、へたな受け答えをすればすぐさま鞭り殺されるのではないか……そう思うとどうしようもなく身体が震えてしまう。エクレルから刻み込まれた恐怖が、未だに忘れられずに居るのだ。

（やつは……恐ろしい）

アイツだけには逆らってはいけない。

まさか、騎士というものがこれほどに強い相手だとは思わなかったが、仮に油断していなくとも勝てたような気はしない。

教壇を降りて、席へと向かう。

既に在籍している生徒からの好奇の視線を一心に受けて胸くそを悪くしながら、いつか心労で倒れてしまうのではないかと自分を心配する。

やがて席に到着すると、人間の子が隣の席で、こちらを見ていることに気がついた。

「よ、よろしく」

先制攻撃。

先に挨拶をしたことによって有利な状況を作り出せる。

クリイムはそう思って、引きつった笑顔を見せてやる。これで更に、こちらは余裕だぞという威圧さえも与えられた。

相手は畏怖して跪くだろう。

彼女は浅はかに、訳のわからぬ自分ルールを展開していた。

「ああ、よろしく。おれはジャン・ステイル。わからない事があ



「つたならなんでも訊いてくれ」

——その効果は望めなかった。

クリイムは肩を落として嘆息してから、思わず緩んだ心で返答した。

「黙れヒトの子が」

「……はい？」

「っ……忘れてくれ」

ちよつとした問題発言にジャンは少しだけ意表を突かれながらも、まあ緊張してたんだししょうがないか、と受け流す。

ちよつとだけぶつきらぼうで、釣り上がった目尻に、大きな瞳は威圧的な雰囲気を孕むが、緊張指定せいなのだろう。そんな、典型的な軍人のような淡白さを伺わせる無駄のない動きに、制服を着ていても分かる、絞られたスタイルの良さも、彼女の努力の結晶なのだろう。

夏休み前の試験直前という、そんな不自然な転入は、おそらく家庭の問題かもしれないから、あまり深く訊かないようにしよう。

ジャンはそう考えて、間もなく始まる授業へと挑むことにした。

まさかこの歳にして学園なんぞに通うはめになるとは思わなかった。

エクレルからこう名乗れと強制された『クリイム』という偽名も甘ったるく貧弱で気色悪いし、授業も、本当に同じ言語を用いて説明しているかすら判然としない程に、不明瞭。わけがわからない。これを、机上で一体なにをどう学習するつもりなのだろうか。

学ぶだけなら野生で十分だ。今までそれで生きてきたし、これまでもそうだったつもりだった。

この五年近くは少なくともそうだったし、またわざわざ人里に降りるつもりなども、毛頭なかったのだが……。

担任とは違う教員がやってきて、黒板にチョークで奇っ怪な図形を描いて、数式を加える。最初は魔術か何かかと思って眺めていた

が、どうやらそうではないらしいことを、彼女は理解した。

『えつくす』がどうか、『このさんかくかんすうの』がどうか、うわ言のように口にする、神経質っぽい男は度の強い眼鏡をくいつと上げて、生徒の中から一人を指名した。

「はい君イ！ 視線を逸めしたね、この問いを答えてみなさい！」

この街にはあまりない近代的な洋服、白衣を羽織る男は大げさな動作で腕を振り、指で相手を指し示す。

クリイムはその指先がこちらに向いた気がして驚き、思わず身体が椅子から引き剥がされる勢いで弾んだが――気だるげな様子で後頭部を掻きながら、椅子を引きずる音を立てて立ち上がるのは、傍らの男だった。

「えー、と。十三メートル、ですか？」

「そうそう、よくできているね。この問いはつまるところ……」

ごきげんに男は笑みを作って、また黒板にチョークを走らせる。

ジャンはほっと息を吐いて脱力するように席に座り込んだ。

「良くわかったなあ、俺さっぱりだったよ」

そう言うのは、彼の隣の、人間の男だ。

「お前は教えてもわからないからな。まあ得手不得手つてのはあるもんさ」

「そんなもんかね。なんにしろ、試験が心配だよ」

「おれもだよ。授業だと分かるんだけど、テストとかだとさっぱりでな」

こそそこそとするごく日常的な会話。

自分とは圧倒的なまでに異なる平和的なそれらに、クリイムは思わず嘆息した。

そんな吐息に気がついたのだろう、ジャンはふと視線を向けて、小さく声をかけた。

「クリイムさんは大丈夫？」

「……わけがわからない」

高等教育レベルの授業内容だと、エクレルが説明していたのを思

い出す。

義務教育過程はなんとかスルーしたクリイムだが、それ以降の記憶はない。あまりの待遇の酷さに血反吐を吐いて胃を穴だらけにして、死ぬ気で人里から逃げ出してから、まともな生活などはしていなかったような気がする。

捕獲されてから、まさかの翌日に転入だ。

あまりにも突然すぎる展開に目を回すだけだったが――ここに来て、いよいよ他人ごとではないのだと理解する。

ここで一ヶ月を過ごして、ヒトに慣れなければならない。そうするにはあまり目立ちすぎず、気の良い風体を装わなければならない。苦痛だ。

クリイムはにわかに頭痛を覚えて、頭をかかえた。

「試験も近いから大変だけど……遠慮無く訊いてくれて構わないよ？」

「そう、だな……」

エクレルは、今学期の成績は反映されないとかなんとか言っていた。

おそらくこの夏休み前の期間は飽くまで”体験”に過ぎないのだろう。これから夏休みに入り、次の学期の一ヶ月が本番だ。

なんにしても、どう考えようともこの憂鬱な気分が晴れることは無かった。

ただ、この漠然とした絶望の中で陽の光のように接してくる、妙に馴れ馴れしい人間の姿はあったが。

途方のない時間が過ぎたと思われた。

十分間の休憩時間を挿し込んで、幾度かの授業を繰り返す。内容はそれぞれ異なったもので、最も困惑した数学を筆頭に、戦術・戦略だの、物理がどうのといった授業が終了した。

そうしてまた休憩時間が始まると思うと、

「終わったー」「今日もしんどいねえ」「やっぱ休み明けってキツ

いな」

だのと、緊張が弛緩するように各々は大きく伸びをしたり、友人らと会話を交わし始める。それはいつもと変わらないが、異変とも言うべき状況は――クラス内の、そう多くない生徒たちがおもむろに教室から出ていったことだった。

半数以下しか残らない教室では、それぞれ集まって惣菜パンを食んだり、あるいは机をいくつかくつつけて、その上に四角い箱をそれぞれ用意する姿があった。

ぐう、と腹の虫が鳴るのを聞いて、彼女の脳内で間もなく合点がいく。

昼食休憩なのだと、彼女はエクレルの説明を思い出して頷いた。

「……まいったな」

つい先日は、街を襲撃したお祝いにウサギの皮を剥いで、いつもならば干し肉にして保存食とするところを、丸焼きにしようと血抜きをして放置してきた。

そう、放置してきたのだ。

森の中で。自分の住処とする、樹木が作る自然の穴蔵の、ちょうど入り口付近の枝にひっかけて。

調味料は調達して、面倒な事は先に済ませておくタチだから、火打石と燃えやすい枯れ枝と、焚き火の材料は全て纏めておいた。

捕まった後はそんな事を忘れてしまったし、夕食はエクレルの自宅で、牛の肉を頬張った。さすがにミノタウロスの身で、この上なく美味しそうに牛肉を口いっぱい頬張って、厚い唇に脂を塗りたくって艶やかさを増すあの彼女はどうかと思ったが――エクレル自身も、この昼食のことをすっかり忘れていたに違いない。

なんだかんだで用意周到だったのにも関わらず、この事にだけは触れられなかった。

（やろう、帰ったら怒ってやる）

そう決意すると間もなく、後頭部を鈍器か何かで殴られるイメージが過ぎたが――払拭するように頭を大きく振ってから、彼女は

立ち上がった。

（なんにしろ、ここから離れよう）

こんな所にじっと居ては、まるでお誘いを待っている引っ込み思案の女の子のようだ。あるいは乞食か、なんにせよ、良いイメージには転換できない。

どこに何があるか、見学して回るのも良いだろう。少なくとも一時間は時間があるのだ。学校内を回っても、まだ時間が残る。

そうなれば……その時に考えよう。面倒になって、彼女はやや出遅れた形で教室を辞す。

否、それは退室しようとした、というのが正しいのかもしれない。

「ねえ、クリィムさん」

男の声が彼女を引き留めた。

恥ずかしながらも淡く期待していたこともあって、彼女は戸惑うこと無く足を止める。体を捻り、そのまま振り返ると、好青年の微笑が彼女へと迫ってきていた。もはや見慣れたとも言える、ジャンのそれだった。

「もしかして、お昼は学食？」

「ん、いや……それ、なんだがな」

学食という言葉聞いて、そんなシステムの存在を知る。

が、無念。金がない。

ヒトの世界は金が全てだから、彼女はそういう手もあるんだなあと考えてから、思わず短く嘆息してしまう。

「お昼は無い、とか？」

「その通りだ。だが気にするな。おまえに施しを得るつもりなど毛頭ない」

「相変わらず堅苦しい言い方だけど……残念だな。ちょうど弁当が一つ、余ってたんだけど……このままだと無駄になっちゃうしな」

——実際には余っていない。ただいつものようにジャンの弁当は大食漢並の量があるから、半分程度で済むのだ。サニーの許可ももらって今はすっかり、蓋と弁当箱とで中身が分けられている。弁当

箱の方がいささか惣菜が豪華であるのは愛嬌だ。

サニーを始めとする、半身を鱗や鉤爪で構成するリザードマン蜥蜴人や、花卉でスカートを作り、頭に赤い華を咲かせる植物族、下半身を蛇にする少女や、背中からコウモリのような羽根を生やす……ともかく異人種が、机をくつつけてジャンらの行く末を見守っていた。

異人種ばかり。

人間は、この男のみ。

極めつけは、女性が四に対して男性が二人だ。圧倒的な女性率。ハーレムである。

「悪いな、ヒトの食い物は喉に通らないんだ」

ぎゅるるるゝ、と腹の虫が空気を読まずに断末魔を響かせた。

「事情はなんとなく把握した。安心しろ、ウチの料理番は生粋の妖エ精族だ」

「米を食べたのは七年ぶりになる」

もしかすると、旨みを味わいながら彼女は冷静に告げる。

「これは旨い。まず味があるという所に注目したい」

これを見れば、あの食生活がどれだけ悲惨なことだったかよくわかる。便秘気味の時に野草を食べたあの思い出を蘇らせれば、涙さえ溢れてくる。

油で上げた白身魚に、表面がきつね色になる鶏肉。にんにくの香りはぬるくなってもまだ口の中に香ばしく広がって、咀嚼しながら唾液が溢れてきた。

ご飯を掻きこみ、彩り良く並ぶ数多の野菜をフォークで突き刺す。喰う。飲み込む。

「栄養がよく考えられている弁当だ。おまえは、この弁当を喰えるありがたみをもう一度考えたほうがいい。まともに食事ができる喜びを噛み締めるべきだ」

「あはは、ここまでほめられると、照れちゃうなあ」

サニーが頬を桜色に染めて笑う。

クロコはいつものように、愛らしい少女の頭を撫でながら、器用に食を進めていた。

そんなクリイムに、まずレイミイが疑問を投げる。

「クリイムさんって」

「敬称は要らない」

「……クリイムって、エクレルさんの親戚ってきいたけど、エクレルさんの所に住んでるの？」

「その通りだ」

首肯し、返事をしながらもくもくと、がつつく様子は無いが、手を止めること無く食事は続く。

「あの、今まではどこに居たとか……訊いても大丈夫ですか？」

控えめに、だが突っ込んだ問いをアオイは投げると言うよりは手渡した。

クリイムは同じく頷き、もしやもしかと言葉を交わしながら答えてみせる。

素直に答えてもよ良さそうだったが、エクレルに殺されるのも嫌だし、彼女がわざわざ嘘を付いているのにも理由があるはずだ。彼女はそう考えて、仕方なく”乗る”ことにした。

「とある国で、とある人と共に外交を主として働いていたのだが、その人が亡くなって身寄りがなかったために引き取られてきた。」

そのとある人が居て、亡くなった、という以外は全て嘘だ。

この街に来るといふそれ以前の、ヒトに確かな殺意を覚えたのはそれがきっかけだった。亡くなったというのは正確ではなく、逃がすためにその場に残ったのだが――とても生き残っているようにには思えない。

今となっても未だ悲しいが、どちらかと言えば惜しい人を亡くしたという感情のほうが強い。

精神年齢は高いほうだと自負しているから、早熟なのだろう。年齢は、目の前の彼らとそう大きく離れているわけでもない。

彼女は申し訳なさそうに目を伏せるアオイを一瞥して、

「気にするな。下手に同情されるのは好きではない」

「ご、ごめんなさい……」

「あ、それじゃ勉強とか出来るの？」

そう訊いたのはトロスだった。

「最低限の教育は受けている。義務教育、だがな」

「あー、それじゃキツイだろうな。後期の授業は専門的なのが多くなるけど、前期は高等教育のおさらいみたいなもんだし」

「……後期は、あの奇っ怪な授業がなくなるのか？」

「ああ。少なくとも数学だとかは無くなる」

「命拾いだ」

「ははっ、特にダメそうだったもんな、クリームは」

「おまえは、つくづく遠慮というものを知らないな……」

馴れ馴れしいジャンに、クリームはわざとらしく肩をすくめてみせる。

それからフォークを弁当箱の中に落とし、空になったそれをサニ―に手渡した。

「ありがとう。美味しかった」

旨い上に、腹が膨れるというのは最高だ。伊達に三大欲求の一つとして食欲がランクインしているわけではないようだ。

「えへへ、どういたしまして。良かったら、明日も作ってこようか？」

「あ、いや。ありがたい申し出だし、断りたくは無いが……わたし  
が君にしてやれる事がない」

「もう、友達なのにそんな事、気にしないでよー」

「む、友達？」

「あ、嫌だった？ ご、ごめんね。勝手に舞い上がってたみたいで  
――」

そんな響きが、心のなかに染み渡る。

友達、友人。自分の中では、いつしか忘れられて失われていた言葉であり、存在だった。



最後の友人は、いつしかクリイムを裏切って守る側から攻める側へと転じていたの思い出す。あれが彼女の処世術なのだから、自分には攻める理由などないのだが……あれは堪えた。人生の中で、五本指に入るショッキングな出来事だ。

そんなちよつとしたトラウマがあるから、もし友達ができたらどうしようとかを昔考えていたが——ここまで育ててくれた人がいた。そいつのお陰で、ようやくその心配が出来る立場になった今では、冷静に対応できていた。

「いや、嬉しい。こちらからお願いたいくらいだ」

——この学校ではいくら上手くやっていけるかもしれない。

そうだ。ヒトに慣れるのも、この気のいい友人らの中で、なんだか妙に中心的な位置にいる、この男からにするのもいいかもしれない。

この瞬間に出来た多くの女性、加えて何の種族か不明瞭な男性一人から祝福の言葉を与えられながら、クリイムはジャンを一瞥する。彼はどこか超然とした、一歩引くような態度でその様子を微笑んで眺めているのが、良くわかった。

もしかすると、彼はこうなることを望んで声をかけたのかもしれない。そのきっかけをわざわざくれたのだとしたら……。

「手強いな……」

ヒトは思いもよらず思慮深い。

彼女はそう思いながら、ぎこちなく笑みを作って、その昼食休憩を満喫した。

「今日はそんな一日だった」

薄紫の、ウェイブがかった髪をタオルで拭きながら、綿で出来たガウン一枚になるエクレルに一から説明した。

今日の出来事。何時に何をして、何が起こったか。初日だけど友達ができて、お弁当を分けてもらったただとか。放課後は、友達に誘

われるままに街を見て回って、どこから逃げ出せるかなど考えた、なんてうっかりと零してしまうのは愛嬌だ。

ふかふかの寝台の上で足を組み、程良く肉がついた太ももにはまだ水滴が滴っている。艶っぽい、女性という部分が特出した女性らしい女性だった。

「そう、良かったです。『リサ』が学校に馴染めるように」

「昨日から疑問だったが……なぜわざわざ偽名を使用する？ わたしの名前など、誰も知らないのに」

「一応、ですよ。少なくともアナタの育ての親は、ごく有名でしたから」

「……調べたのか？」

膝を折って床に直接敷いてある布団の上に座り、膝に両手を突っ立てて肩を張る。自然的に上目遣いになると、まるで睨んでいるようになるが、エクレルは気にせず頷いた。

「少し後ろめたかったけど、ね。だけど、アナタも”その人”の最期を見ていないなら、まだ分からない。アナタさえ良ければ、今後捜査を続けられるけれど……どうします？」

悪戯っぽく、どこか意地悪そうな笑みを浮かべるエクレルに、彼女は短く舌打ちをした。

「すまないが、頼む」

もしアイツが生きているならば——恐らく決してありえないことだが、仮に命がまだあるのなら、言いたいことが残っている。この人生の在り方というものを教えてくれた人だから、アイツだけは、どうしても諦め切れないのだ。

辛気臭くうつむくと、エクレルがわざとらしく「それでえ？」と口を開いた。

空気をぶち壊す発言に、彼女は短く舌打ちをしながら、「何がだ？」と訊き返す。

「ジャンくんは、中々気のいい人間ひとでしょ？」

「あいつは、貴様の差金か……ッ!？」

くそ、騙された！ 思わずそう叫びそうになるが、彼女の自制心がそれを力一杯抑えこむ。

またヒトに、この短時間でにわかになにを許しそうになった自分を恥じながらも、彼女は精一杯、エクレルを睨んだ。

「ち、違いますよ、人間きの悪い。あの子は、私達のお気に入り、みたいなのでね。平凡なんだけど、出会い頭がちょっと頼もしかったから、それがきっかけになって……」

「要領を得ないな。奴は特別なのか？」

「そうじゃないですよ。でも、優しいし、なによりも妙に異人種わたしたちに気に入られるタチらしいです」

「……特殊なフェロモンかなにかでも出ているのか？」

「さあ。ただ異人種に、普通に接してくれるからってだけな訳じゃないだろうに、おかしいですよ。普通の、本当に普通の人間なのに」

彼女は心の底から不思議そうに、顎に指を指すようにして考え込んだ。

説明しようにも、言葉を挙げれば挙げるほど理由が出てこない。生まれるのは疑問ばかりだ。

騎士志願の中では、あの学生の中では案外実力があるし、勇気も十分。幾度か修羅場をくぐったような目付きには、彼の過去を照らしあわせれば理由がわかるが――もしかするとその経験からなる少し大人っぽい様子が、全ての理由なのかもしれない。

それに加えて恐らく、ジャンを助けたというケンタウロスの女騎士と、エクレルの友人でもあるケンタウロスの女騎士である『ユーリア』は同一人物なのだろうが……彼女が接触したがないのにも、理由があるのかもしれない。

いかんせん、頭が沸騰しそうだ。

エクレルは大きく息を吐いて、立ち上がった。

壁に備えてある照明のスイッチを押して、辺りを昼間のように明るく照らす照明をオフにする。魔石は空気中から魔力供給を停止さ

せて、間もなく部屋の中を黒い闇に塗り固めた。

「彼はいい子ですよ。ヘンに勘ぐらないで、普通に接してみるのもいいかもしれませんね」

飛び込むように寝台に寝転がると、弾力のあるマットレスが幾度か彼女を弾ませて、ガウンをはだけさせた。

「リサ、おやすみなさい」

「……ああ、おやすみ」

おいしいご飯に、ぽかぽかお風呂。暖かい布団でぐっすり眠る。こんな素晴らしいことが他にはあるだろうか。

——生活レベルはぐんと上がって、リサ、あるいはクリイムと呼ばれる彼女にとっては最上級層並の生活をしているような感覚だ。まるで、この間までの野生の生活が嘘のようだと、彼女はつくづく思う。

どうあっても、どれだけヒトが憎くとも、この生活ばかりは手放せなくなりそうだ。

彼女は布団に潜りそう考えるも、数秒と待たずに、今日一日の疲れもあつてかすぐさま夢の中へと滑りこんでいった。

## 期末試験

クリイムの転入がちよつとした騒動になってから一週間が経過する。

その頃になると、クラスは再び落ち着きを取り戻し――正確には、取り戻さざるを得なかった。

期末試験。

今日がその、初日だからだ。

一ヶ月前から準備をしてきた用意周到のジャン・ステイルの傍らでは、試験が開始してから十分ほどで頭を抱えて机に突っ伏したクリイムが居る。

やや前方、先頭から一つ手前に座るサニーは意外にも詰まること無くペンを走らせ、アオイやクロコ、レイミイも同様に余裕を持った表情で解答用紙に答えを綴っているようだった。

――今は初日の三時限目で、今日の日程最後のテストだ。

さらに明日と明後日で筆記試験は終わりになり、次の日に戦闘技術の実施試験になる。

それが終わると、翌日に終業式を執り行つて――夏休み突入だ。

「残り十分。氏名と、解答欄がズレてないか、確認しとけよ」

作業服姿の担任は、気怠そうに椅子に身体を預けて足を組み、腕を組みそう告げる。

ジャンは既に幾度も繰り返した確認の作業を、担任の言葉に倣つてもう一度だけ繰り返す。問題用紙の余白には残ったままの計算式と、くだらない落書きが今更になって恥ずかしく思い、その上にペンをぐちゃぐちゃに走らせて塗りつぶす。

大きく欠伸をする。

時間が、その流れがいつもより緩慢な気がした。

退屈だ。

何よりも、思ったよりテストの内容が簡単だったことに驚いた。これなら案外、これ以降のテストもなんとかなるかもしれない。そんな思いを馳せながら――担任の、終了の合図を聴いた。

すぐに弛緩する空気の中、それぞれはぼやきながら、ジャンは席を立てて解答用紙を回収する。そうしてから席へと戻ると、その後ろに着いて来ていたクリムは深いため息を漏らして、席に着いた。「どうした、大丈夫か？」

「……こ、肯定しよう」

搾り出すように彼女は口にする。ぐりん、と机に当てていた頭を回して、怠惰なままに突っ伏したままジャンを見た。

「いいなあお前は、優秀で」

「冗談言うなよ。おれだって頑張ってるんだ」

「そんなの、頑張っても出来ない奴に向ける言葉じゃないぞ」

「基礎が出来てないのに応用からやろうとするからだ。卵焼きも満足に作れない奴が、いきなりシチューとかビーフシチュー作れるかよ」

「なんでシチュー限定なんだ……」

「例えだよ、気にしないでくれ」

むう、こいつは恐らくシチューが好きなのだろう。

クリムは話の流れなど関係なしにそう思って、担任の適当な報告やらを聞き流す。

大した連絡もなく、ただ明日も頑張れだの、赤点はオレ的に勘弁な、だのと無責任極まりない言葉をいつも通り吐きちらしていく。平常運転だ。

そうすると間もなくそれも終わって、担任は教室を後にして、教室内は途端にざわめきだした。

つまり――放課後になった。

「もし良かったら勉強するか？　今日は、みんな個人で勉強するみたいだし、おれも暇だし」

「なぜ二人つきりなんだ。みんなが居る時でいいだろう？」

「まあ、イヤなら良いんだ」

と彼は言いながら、ごそごそとショルダーバッグの中に手を突っ込んで何かを漁る。目的の物を掴むと表情がぱっと明るくなり、彼は口元に笑みを携えて、三冊のノートを引き出した。

ジャンはそれを彼女へと差し出して、好青年の様相で告げる。

「明日の教科だ。割と読みやすいと自負してる。良かったら使ってくれると嬉しい」

「……そうなる、お前はとうなる？」

クリイムが怪訝な表情で訊くと、彼は得意げに側頭部を指で叩いてみせた。

嫌味な表現に、思わず本能的な嫌悪が背筋を走り、サソリの尾がぴんといきり立った。

「頭の中に入ってるから大丈夫だ」

「くっ、気持が悪いな！」

シャー、と今にも唸りだしそうな尾を必死で抑えながらクリイムが叫ぶ。

なぜこれほどまで得意げなんだ。恥ずかしく無いのか。ヒトには羞恥心というものが無いのか。なぜ平然と、こんな赤面モノの発言が出来るのだ。

気持が悪い。

クリイムは彼の手からノートをひったくってから、数歩だけ後ろに下がった。

「好意には応えよう。だが期待はするな」

「せめて卵焼きくらいは作れるようになれよ」

「お前の好物など知るか。ともかく感謝するぞ、ステイール」

彼女は素直に礼を言って、丁寧すぎるまでに丁寧にノートをカバンに詰め込んで、それを両手で提げる。長い赤髪を翻しながら、彼女は徐々に尾の立つ角度を鈍角にしながら、またジャンへと振り返った。

「わたしは帰宅する」

「ああ、じゃあな」

「お前はどうするんだ」

「おれ？ みんなはもう先に帰ったし……まあ、先に帰ってて良いって言ったからな」

クリイムのための時間を取るだろうから、なんて恩着せがましいことを冗談っぽく言ってみようかと思ったが、彼女はこう見えても生真面目だ。本気にして、妙なまでに仮を返そうとする。

ジャンには少しばかり手厳しいコミュニケーションを図る彼女だが、そんなこともあって、ジャンは本気でクリイムと関わりたくなくど無い、と考えることは無かった。むしろこれから親密になって、他の友人らと同様に齒に衣着せぬような関係になりたいとさえ思っていた。

もちろん下心など無く、また腹黒い計算のもとではなく、その気持は混じりっ毛のない純粹なものだった。

「ま、おれも帰るよ。ふつうに」

「そうか。わたしの家は、北区なんだが」

北区、というのは噴水広場から北、つまり城がある方向だ。ちょうど帰宅途中に通過する地点でもある。

南区は商店が主に集中する街の出入り口部分であり、借家や宿屋なども点在する、いわゆる商業区だ。そして東区が居住区であり、西区も、一応居住区だ。

「家が近そうでよかったな」

彼女が何を言わんとしているかわかっている。

素直にお礼は言えるのに、そういったお誘いだとか、自分から行動を起こすことに関してはとことんダメ、不得手である。だからジャンはちよつとした悪戯心と、クリイムに慣れさせようとするおせっかいな親切心も相まって、そんなわざとらしい対応をしていた。クラスメイトが、いつもの組み合わせだとチラチラと見てきてから視線を外す。

彼女も今ではすっかり、とまではいかないが、クラスに馴染んで



きている。その中でもこの組み合わせは――飼い主と犬といった関係だと認識されていた。

「そうだろうな。お前は、どこをどう帰るんだ？」

手提げかばんを提げる彼女をよそに、ジャンはショルダーバッグを肩にかける。授業がない上に弁当も無いからひどく軽いソレは、それ故にバッグの存在を忘れてしまいそうになる。

「これから通りに出て、城の前を曲って広場に出て、東区に行く感じだな」

「奇遇だな。わたしも、広場に出るまでの道が一緒なんだ」

「そうなんだ。家は近いのか？」

「ああ」

彼女は首肯した。

「なによりだ」

なにがだ。

彼は自分の言葉に疑問をもちながら、いつものように笑顔を向けてクリムに背を向けた。

「少し待て、待とうじゃないか」

頬から鼻先までを真っ赤に染めて、震える手を握りこぶしに変えて震えを抑える彼女は、回りこむようにしてジャンの前に立ちはだかった。

ぶっきらぼうな口調だが、しっかりと感情がある。むしろ、抑えているだけで喜怒哀楽などは、他人よりも豊なのかもしれない。というのは、彼女自身も無自覚なのだろうが。

「おう、どうした」

「奇遇だな。わたしも、広場に出るまでの道が一緒なんだ」

「ループしてんぞ」

「つまり、だ」

「おう」

「わたしが言いたいことは、だな……」

意気込むように、胸いっぱい息を吸い込む。

何をこんなに緊張する必要があるのだろうか。教室で、いつも一人で本を呼んでいるような子でもここまでは緊張しないぞ、とジャンは思いながら、微笑ましく見守る。

そんな中で、悪魔がささやいた。

そしてささやいたままに、口に出してしまった。

「帰り道が同じなら、一緒に帰らないか？」

――その刹那。

ジャンは、驚いたように目を見開いて見つめてくるクリイムの顔を見て、時間が止まったのを実感した。

が、それも束の間。

彼女は顔をうつむかせて、わなわなと怒りを表現するように肩を震わせる。

しまった、とジャンは思った。

「しまった」

つい悪戯心が先走ってしまった。

「おまえ、わたしが何を言いたいのか、ずっとわかってて……ずっと、からかっていたのか……？」

右腕が黒く変色する。そう認識した時点では既に、その指先は結合して、鋭いハサミの形になっていた。

「ちょ、ちょっとまで落ち着こうぜ。右腕がファンタスティックなことになってんぞ？」

「おまえと言うヒトは……せっかく、わたしが頑張ってヒトに慣れようと、頑張ってるのに……嘲笑って……！」

「ち、ちがうって！ 嘲笑ってないって！ つまり、あれだ――」

クリイムの視界から、不意にジャンの姿が消える。だが野生で鍛えた動体視力が容易く彼を見逃すはずも無かったが……膝を折り曲げ、額を頭にこすりつける姿には違和感を覚えずにはいられなかった。

「ごめんなさい！ つい、クリイムがちょっとあの、アレでして。出来心で！」

いわゆる降参の合図だと、動物でいう腹を見せる体勢であるのだと、エクレルが言っていたのを思い出す。

だが、腑に落ちない。

降参されたからって、自動的に怒りが収まるわけではないのだ。

「アレってなんだ」

「クリイムって良く見ると可愛くなって思いました」

——ぼん、と爆ぜる音が聞こえた、気がした。

怒鳴られる事を覚悟して吐き出した言葉に何の反応も返ってこない事が逆に恐ろしく思えて、彼は意を決して顔を上げる。と、顔を真赤に染め上げたクリイムは顔の前にまで垂らす程に尾をいきり立たせていたが、手は、いつものようなしなやかな指を作っているままだった。

「まだやってんの？ お前」

膝についたホコリを払って立ち上がる。そうする中で声を掛けるのは、金髪をタテガミのように逆立たせた人間の男だった。名前をカールという、今では割と声をかけてくれる人間の一人である。

「まあな」

「物好きだな。とことん」

「んな事言うとおサミで真っ二つにされんぞ」

「ははっ、おっかねえな。んじゃな、また明日」

カールは言うだけ言って冷やかすと、そのまま背を向けて教室を後にする。

と、そこには既にクリイムとジャンしか居ないことに気がついた。クリイムは何かの冗談のように、全く動く気配がない。サソリ族とは、立ったまま気絶する習性でもあるのだろうか。

ジャンはだんだん面倒臭くなって、結局は腕を引っ張って帰るところにした。

——そんな日々があと二日続いて、いよいよ筆記試験が終了した。

ごく平和な日々だった。

何事もないし、クリイムともだんだん距離が縮まっている実感がある。ノロも最近ではよくちよく顔を出すようになったし、最近ではタマと街を歩いている姿も見ると。

全てが良い方向に動き出していた。

問題は、あと資金の工面がつくことだけだろう。

しかし、どうにも自分に出来るような仕事が見つからなかった。

商店でのアルバイトを考えてみるが、学校があるから中々時間の都合がつかないし、ならば警備などのソレはどうかと考えるが、まず募集していない。

その時点でもう手詰まりだった。

「そこまで！」

戦闘教官の、砲撃のような大音声が轟いて、対峙していた二人の生徒は同時に動きを止めた。

グラウンドの中心で行われていた戦闘技術の実施試験の最中である。その二人組は、ちょうど最後から数えて二組目だった。

「二人共、入学時よりは随分と成長しているな。その調子で頑張るがいい」

『ありがとうございます！』

声を揃えて頭を下げて、二人は木剣を持ったまま、ジャンの方へと近づいてくる。

うち一人は、数歩分の距離を開けたままそれをほうり投げてみせた。木剣はくるくると空中で回転しながらジャンへと迫り、彼が手を伸ばせば、ちょうど柄が手に触れる。掴んで、振り下ろせば勢いもいい具合に流して殺せた。

「最後だ。がんばれよ」

木剣を投げたカールが激励する。

ジャンは軽く手を上げて、隣で木剣を渡されたトリスを一瞥した。「おれって、こういう順番はいつもついてない気がするよ」

「今回は僕だってそうなんだから、あまり嘆かないでくれよ」

「最後オッ！ さっさと出てこい！」

教官の声に二人は肩をすくめるようにして、生徒らが円を作るその中心へと躍り出る。

男女混合の中で、注目される試験に少しばかり緊張するのは当たり前だったが――それが最初や最後だったならば、尚更だった。

「はじめ！」

適当なタイミングでの合図に、されど既に準備を整えていた両者は射程からやや離れた距離を保って、剣を構えた。

――考えてみれば、トロスと打ち合うのは初めてだ。

出会ってから随分仲良くやらせてもらった。彼が居るのが、当たり前のような感覚に、今ではなっている。

穏やかで、だが力強い。初対面ではせっかちと言われていたが、今では落ち着きある、年齢よりも遥かに穏やかな物腰で全てに対応している。

甘いマスクだ。

生え際が黒くなりつつある金髪も、短くして染め直せば中々に渋い男にすらなる。

羨ましい限りだし、成績だっていい方ではないが、無難。戦闘技術も中の上程度だ。学校が始まってから開始したらしい自主トレーニングのおかげも相まって、この授業での成績は実績に加えて努力も評価されているから、随分といい具合になっているだろう。

「ねえ、ステイール」

そういえば、いつの間にか呼び捨てになっていた。

それが気に入らないわけではない。

むしろ心地良かった。

「今日は、本気で頼むよ」

真剣な面持ちで告げるのは、試験だから適当にやりすぎそうという提案ではなく。

「なに言ってるんだ」

自分の実力を試したいという純粹な願望と、

「おれはいつだって、本気だよ」

親友と認める友人と、本気でぶつかり合いたいという欲望だった。

はじめに動いたのはジャン・スティーレルだった。

大地を弾くように走りだし、真正面からトロスへと向かう。

同時に動き出したトロスは、されど走りだすことはなく、飽くまでジャンの攻撃を待っていた。

俊足故に距離は瞬く間に縮まり、残り数歩分という距離でトロスが動く。腰を落とし、腰に構えた剣を力強く閃かせる。当然、それはジャンがそのまま突っ込んでくるという確信を持つがゆえの行動だし、そうすることしかできないと、常識では考えられた。

が、居合いと呼ばれるその剣戟は、ジャンには当たらない。

剣先は何かに触れることもないままに、虚空を切り裂き――。

「……ッ!？」

ジャンの姿が、周囲から消えている。

トロスがそう理解する間に、彼の姿は足元から浮かび上がるようにせり上がってきて、

「これで終わり、だな」

木剣の切先が、優しく喉元に触れた。

――敗因は行動を読まれていたことと、構えからすぐにどう出るか理解されてしまう攻撃手段しか持ち得なかったことにある。

攻撃速度は十分だし、居合いという技も素人のソレではなかった。そして、彼自身ジャンとまともに打ち合って勝てるわけがないと決めつけていたことも敗因の一つだろう。

「そこまで!」

教官の声が轟く。

そうしてあつという間に、期末試験の最後のテストが終了した。

## 冒険者ギルド　〈初めての仕事〉

「サニー……すごく、言いづらいことなんだがな」

夏休みに入ったその翌日。

空になった布袋の口を逆さにして軽く振りながら、ジャンは不景気な口調で重大な事実を告げた。

「資金が底を尽きた」

つまり、だ。

「今月のお小遣いはナシだ」

それは、夏休み初日の出来事だった。

「私まだ銀貨十枚残ってるから大丈夫だけど……これからどうするの？」

寝台に座ってうな垂れるジャンの背中に手を添わせながら、サニーが心配そうに声を掛ける。

ジャンはそれから壁に立てかけられている、革の鞆に収まったブロードソードに目をやって、

「なんでも、ギルドってヤツがあるらしい」

「ギルド……？　なにそれ」

「まあ、ギルドって言葉自体は、組合って意味なんだけどさ」

諸国には、職業別にそういった組合が存在していて、海を挟んだ国同士でも組合として繋がりを持つことが出来る。主に占めているのが商人のギルド、つまり商業組合であり、他にも工業などの生産系統の組合が次に多い。

そうして次点が、冒険者によって建設されたギルドだ。街に最低一つは存在し、種類はいくらかあって統合はされていない。そこでは相互援助という形で、その街を中心にする無数の仕事が集まっていた。

探しものや、おつかい、あるいは知能を持たぬ――異人種ではなく、異種族と呼ばれる怪物退治などの種類を選ばぬ仕事だ。そのギ

ルドに登録して仕事を委託してもらえれば、依頼主を介してギルドで仕事を請け負う事ができる。

拘束期間は仕事を請け負って完了するまでであり、長い間ギルドに行かないからといって強制的に登録内容を抹消されることはない。だが仕事が簡単であればあるほど報酬である給金は低く、一度の仕事で大量に資金を得たいのならば、命の危険すらある高難易度の仕事を請け負う必要がある。もっとも、ある程度以上の難易度の仕事は信頼性が必要であるために、新人が行うことは決して出来無い仕様になっていた。

「……それで、これから登録しに行くってこと？」

あらかたの説明を終えると、サニーは頷き、訊いてくる。

ジャンは静かに首を振った。

「登録はしてあるんだ。この街に来たときに、一番最初にしておいた……けどさ」

多分、自分がやるとしたら、仕事の大半は外に出て怪物退治に勤しむことになるだろう。それが自分を高めることに繋がるし、これまでしていた仕事を考えれば、身体も動かせて一石二鳥なのだ。

だから、危険を伴う。

黙って行っても良かったが、サニーに心配はかけられなかった。

「怪我するかもしれない。あんまり、サニーに心配ばっかかけてられないからな」

「もう、ジャンも、私の心配するまえに自分の心配もしてよね。ジャンがちゃんとしてれば大丈夫だし——怪我をしても私が居る。大丈夫でしょ？」

「ああ、そうか。そういえば、確かに」

盲点を突かれたようにジャンは微笑んだ。

サニーは魔法を持っているし、その力を自覚して自分でしっかりと扱うことができている。

彼女の魔法は、端的に言えば治癒だ。怪我を治し、あるいは壊れてしまった物も、その破損具合がある程度ならば直すことが可能で



ある。

忘れていた、とジャンは手を打ってから、いつものように彼女の頭を撫でてやった。

サニーはくすぐったそうに首をかしげて微笑んで、ジャンはそれを見ながら立ち上がる。

「さて、それじゃ行ってくるよ」

人が渦巻く噴水広場を南に抜けて、少し進んだ所に広めの路地がある。組合の軒がひしめくように並ぶ、専用とも言ってもいい道がそこにはあって、店の間に馬車を待たせる姿や、ちようど品物を運んできたのであろう荷揚げ場には屈強な男達が半袖から図太い腕を見せて荷物を運んでいる姿がある。

それぞれギルドは、創設者によって建物の外観が異なる。地方の人間が建てたものならば、その地方色が色濃く出るのが、ギルドの良いところでもあった。どの国に行っても故郷の空気を感じることができるといえるのは、それはとても嬉しいことなのだ。

ジャンが見つけたのは、その中では割合に一般的で、大して近代的も無い、この街にはどこでもありそうな建造物だった。

石段を上がり、獅子が噛み付いているノッカーを掴んで幾度か叩く。が、どうにも中のざわめきのせいで音は通らず、訪問者に対しての返事はない。

いくら夏休みだからとはいえ、今日は休日だ。こういった何でも屋の役割をする冒険者ギルドは片手間で仕事をこなす人間が多いから、このギルドという建物に留まる機会はありませんはずなのだが……。

ジャンは首をかしげながら、勝手に扉を開けた。

薄暗い室内に、外からの陽の明かりが挿し込むように入る。途端に外へと逃げ出す空気の流れが巻き起こって――濃厚なアルコール臭が鼻腔に突き刺さった。

「うっ、くっせ……！」

思わずそう漏らして手で鼻と口を覆う。

腰に剣を下けたまま、せめて外套でも羽織ってくればよかったとジャンは思いながら、訪問にすら気付かぬ連中など気にせず中に侵入した。

――内装は、板張りの床に、幾つかの円卓や、長机が並ぶだけのものだ。一番奥には酒場のように長いカウンターがあつて、入って右側の壁には掲示板がある。そこにはいくつもの張り紙がなされていて――その張り紙自体が仕事の依頼書となっている。

登録者はそこから自分で仕事を選び、カウンターに居る主へと提出し、吟味の末に承諾されれば、そこでようやく仕事に向かうことができるのだ。

仕事が終われば、その証明を出来るものを持ち帰り、マスターに提出。報酬はそれから後日、依頼者からギルドを介して渡される。

いつもは閑散としている筈の館内は、まるで早朝から酒を振る舞っているかのように酒臭い。

そして円卓はどれも満員で、そこかしこの椅子に腰掛ける半分ほどは、旅人風情の連中ばかりだった。

ジャンはそのまま掲示板へと向かおうとすると、マスターがジャンに気づき、軽く手を上げるのを見た。

「おう、久しぶりだな。登録してから一向に姿を見せないから、冷やかしかと思った」

ジャンが歩み寄り、カウンターの前に立つと、彼はまずそう言った。

恰幅の良い男だ。頭髪にはまだいくらかの余裕はあるようだが、額はますますその面積を広げている。愛嬌のある笑みを浮かべて、その人当たりの良さが心地良かった。

「一応学生だね」

「ああ、養成学校の、だっけか。エリートコースまっしぐらだな。はは、俺のギルドから騎士が出るなんて、何年ぶりか。アイツらはお高い所に止まって、自分で金を稼ぐって事を知らないからな。お

前さんのような苦労者は大歓迎だよ」

すこし筋肉質の腹を豪快に叩いて笑う男は人間だ。だが、ギルドには構わず異人種も多い。他国ではあまり見られない光景なのだろうが、やはりありがちな差別が水面下にすらない所が、この国のいいところだった。

「むしろ働かずに金が入ってきたら怖いですよ。ただより高いものはないですからね」

「がはは！ 全くだ！」

「それで」

とジャンが話を切り出した。

おもむろにポケットから取り出したのは、財布に使っていた布袋だ。今では悲しいくらいに薄っぺらく、中身がないために軽い。重さを忘れてしまった財布をカウンターの上に出すと、マスターは途端に神妙な面持ちになってジャンを見つめた。

「金貨五枚ほどの仕事は、ないですかね」

金貨五枚。

その価値は、簡単にいえば――銀貨にして約五〇〇枚の価値。銅貨にして、約五〇〇〇枚の価値だ。

それだけあれば共同住宅で半年は金の心配をせずに居座れるし、毎日外食しても足りる金額である。

もっと簡単に言えば、魔術仕様の武具が一つだけ購入できる。何もない一般的な武器ならば、警ら兵御用達の装備一式が揃えられるはずだ。

つまり、それがあれば今年は心配せずに過ごせるはずであり、思わぬ出費に対応できるのだ。

もともと――ジャン・ステイルが六年間貯めた資金がわずか三ヶ月で底を尽きたところを考えれば、そうそう楽観的に考えられるものではないのだが。

救いなのが、入学金と学費が一度に二年分払込だったことだった。「そうだなあ。コロンの鉱山で働いていたんだろ？ この街もあるそ

この装備は最<sup>ひご</sup>屑にしてるから、お前の実力がお墨付きつてのもわかるんだが……正直言って厳しいな。戦闘経験が足りなさすぎる」

「んー、ですと、どの程度の仕事なら出来ますか？」

「その前に、お前が使用可能な魔術によってかなりランクが変わってくる。そのブロードソードは魔術仕様だと聞いたが……」

「まあ一応、一通りの属性に対応できますが、威力に不安が残ります」

少なくとも、直撃したとしても怪物<sup>モンスター</sup>を一撃で倒すことはできないだろう。その程度の威力だ。

「他に紋様だとか、詠唱や魔方陣は覚えているのか？」

「あー、まあ。一応」

彼は言いながら、肩から背中に手を回して、軽く叩いてみせた。

「詠唱は本番では使えないレベルですが、背中に魔方陣が刻<sup>ル</sup>んであります」

魔術の発動を簡易化した紋様ではなく、それはその形や魔法文字<sup>ルーン</sup>さえ正確ならばどこでも魔術を発動できる魔方陣だ。

そして簡易化、省略可されていないために紋様よりも発動にはいささかタイムラグがあり——だが術者の成長に比例しない、刻んだ者の魔術が威力をそのままに刻まれるから、どれほどの弱者でも、幼子でも、魔術師が最高練度のそれを刻んでやれば、誰でもそれを再現することができるのだ。

彼はそれを背に持っていた。

鉱山に居た、というか定期的に訪問してくる魔術を嗜む旅商人によって与えられたのだ。

身を守るために、と魔術の専門家である魔術師を目指していた彼がくれたのは——今のジャン・ステイルでさえ手に余るほどの魔術だった。

「へえ、珍しく古臭いやり方だな。陣を少しでも間違えば台無しだろうに」

そう、魔方陣を正確に複製できなければ魔術は発動しない。

魔方阵はそれぞれの魔術によって異なるが、例えば『大地の怒り』  
ならばそれ専用の陣が存在する。が、その魔方阵を形成した術者に  
よってその威力は異なるのだ。

それを肉体に刻むというのは、それ故にリスクが高い行為である。  
持ち歩きの為に紙に記すという、巻物スクロールと呼ばれる魔術道具もある  
が、魔術の発動に耐え切れずに破損してしまうために、実質使い捨て  
の道具であった。

だからと言って、肉体に直接魔方阵を刻む例は決してそう多いわけ  
ではない。

そこで採用されているのが、肉体の成長や熟練度と共に変異する  
”紋様”だ。これには特定の形というものは無く、魔力を込めて特  
殊な方法で刺青を入れるだけなのだ。故に失敗というものはなく、  
成長を実感できるために多くの者がそれを手にしていた。

「まあ、鉱山は危険が付き物ですからね。何より自分を守るのは自  
分ですし」

「そうだな。それで、その魔術はどういったものなんだ？」

「えーと、最後に使ったのが一昨年なんだけど不安なんです  
——純粹に肉体強化ですね」

肉体に魔力を流して筋力や反射神経などに強制的に干渉し、強化  
する。

仮に鉱山が崩れてきても、一時的にそれを発動させることで生き  
埋めになる前に脱出することも可能だし、上手くいけば瓦礫をかき  
分けて自力で脱出することも可能だ。もちろん、活性化する肉体は  
それ故に傷も回復させるから、負傷の心配がない。

その代わりに、無茶な機動や力の発揮で反動が来てしまう。  
筋肉痛程度で済めば良いのだが、鉱山では無茶が祟って骨が砕け  
てしまったドワーフも居たのを思い出す。

マスターは彼の言葉に何かを思案するように顎に手をやりうつむ  
くと、うーんと唸って、指を鳴らした。

そうすると、掲示板に貼付けられている一枚の紙が引き剥がされ

て、ふわりと宙に浮かび、無風の空間内で風に乗るように、ゆらりと揺れながら、やがてカウンターへとやってきた。

「お前以上の実力者がもう一人居れば、この報酬が金貨三枚の仕事があるんだがな……」

「二人で分けて、金貨一枚に銀貨五〇枚ですね。学生には十分な金額ですが……」

これを資本にして、地道に仕事をこなすのであれば、十分すぎると言えるだろう。

だが、ジャンが口ごもるにはそれ以外の理由があった。

「身勝手な危険ごとに、あまり友人を巻き込みたくないですよねえ」

どうにかありませんか、と無駄だとわかりながら食い下がるように訊いてみる。

が、やはりマスターは毅然と首を振った。

「仕事内容は一般的な怪物退治。最近なんでも、農産物や畜産が被害にあっているらしい。そいつの巢は街から西、海への道の通過点にある洞窟だ。それでも仕事を受けるつもりか？」

「ええ。そのつもりでここに来ました」

剣の柄に手をやって微笑むと、彼はそうか、と力強く頷いた。

「仲間に心当たりが居ないのならば、こちらで手配しても良いかな？」

「よさそうな人がいいです」

「んー、ま、一応プロだからな。ウマが合うかわからないが……おい、ラァビ！ 暇ならこっちこい！」

大きく叫ぶと、不意に空間が静まり返る。

しん、と静寂に包まれ始めた館内は妙な緊張をはらみ始める。ジャンは確かに、その異様な空気を肌で感じて、思わず振り返ると――それと同時に、椅子の足が床を引きずった、その摩擦音が響き渡った。

長机で一人、ビンから直接酒を飲んでいた姿が立ち上がっている

のが見えた。

頭から長く伸びた対なる耳は、その半ば辺りから脱力するように垂れている。外套を肩から羽織るような格好だが、その袖の部分は肘辺りから図太くなつて、その先端の部分には巨大な鉤爪を直接に装着していた。

「なあによ、ヒトのくせに。都合の良い時ばっかあたしを呼んでえ！」

にわかに身体が沈む。

その直後に、「ふっ」と息を吐いたかと思うと――彼女は見る間に天井高く跳躍して、そうして床へと近づいてくる。軽々とした様子で着地し、ウサギのように踵が長く、ややつま先立ちのようになる姿は、さらに太ももまでを黒い毛皮に包んでいた。

しなやかな姿。鍛えられた、野生の動物を彷彿とさせるたくましい雰囲気には、強い酒気がまどわりついていた。

「うはは！ ま、話は聞いてただけだね。ヒマだから。どうせヒマなのよ」

平たい酒瓶を口に咥えたまま、外套の下では胸を抱くように腕を組んでいる。そんな彼女は、うさぎ族の女性らしかった。

「金貨三枚だってね。いいよ、受けるよ。相棒はこの子でいいんだね？」

「一応注意しておくが、報酬は働きぶりに関わらず半々だ。いいな？」

「なによ細かいわね。知ってるわよそのくらい」

「ま、それもそうか。それより、貯蓄はあるんだからいい加減タダ酒はよして、代金を払ってくれないか？」

「……さあ君、一緒に冒険しようか」

「あ、おい！」

マスターの制止も聞かずに、ラァビと呼ばれた女性は力一杯ジャンを抱き上げたかと思うと、また大腿筋に力を込めて――跳躍。

重力の縛りを吹っ切つて宙に舞い上がり、そして床に吸い込まれ

るように引っ張られる。視界は瞬く間に移り変わって、静かな着地と共に、鈍い衝撃をジャンは覚えた。

「さ、自己紹介はあとにして。主<sup>マスター</sup>様の愚痴を聞かされる前にちやっちやと行くわよ！」

酔いのせいか、高い体温が彼女の頬をにわかに赤くさせて、ひどく酒臭い息を吐きかけながら彼女は手を引いて、さっさと館内を後にした。

ジャンはそんな、何かの冗談のような展開に思わずため息をつきながらそのラアビについて——初めてのアルバイトが、不意に爆発的に溢れ出した不安の中で、かくして開始した。



## 冒険者ギルド　〈初めての仕事〉？

閑散とする、というよりはやや小汚い格好の住人が目立つ西区を抜けると、出入り口同様に巨大な門扉が街を塞いでいた。門番に、ラアビがギルドを辞す際にちゃっかりと奪い取っていた依頼書を見せて、その門を開けてもらう許可を得た。

南の門から出てこちらに向かうことも出来たが――なにぶん、街が大きいために厄介なまでに時間がかかるし、無駄な労力になる。だから、これが適切な判断といえた。

そこから舗装された道を歩くと、やがて道の両脇に芝生が生い茂る草原にまでやってきた。

「――それじゃあ君は、この仕事が初めてって事？」

草原には、野放しにされた牛が雑草を食んでいる。その向こう側には牛舎があって、近くには納屋らしき小屋もあった。

「ええ、お金がなくなったっていうのが、なんとも情けないきっかけですけどね」

ジャンは肩をすくめるようにして息を吐く。彼女は外套の下から薄く湾曲した銀色の水筒を取り出して、喉を鳴らして蒸留酒を飲み下す。

より酒気が濃くなった吐息を漏らして、彼女は背中を丸めるように嘆息した。

「でもいい傾向じゃないの？」

「そう、ですかね……」

「そうそう、だからマスターもあたしを呼んだわけだし」  
力一杯大きく何度も頷いた後、ラアビは不意に吐き気を催したように顔をしかめて口元を抑える。

頬がにわかに膨らんだかと思うと、ごくりと喉を鳴らした音がする。彼女は酷く気分が悪そうな顔でまた蒸留酒を口に含むと、無理にそれを飲んでみせた。

ラアビは僅か一分にも満たぬ時間で顔色を悪く、青白く変色させてから、少しばかり機嫌が悪そうにうな垂れる。

「どういう事なんです？」

「あたしが一番酔いが浅かったのよ」

酸っぱい吐息が鼻腔に突き刺さる。

彼女は眉をしかめて、舌に残る最悪な後味を覚えながら、簡単に答えてみせた。

「実方面は信賴して良いんですか？」

どうにも心配になって訊いてみる。吐き気を催して吐瀉物を飲み込んだり、それを酒でごまかしたりなどどう見ても酔っぱらい同然の行為に、ジャンは不安を禁じ得ない。

もしかすると一人のほうが良かったのでは、とさえ思えるのだ。

この人は、いったいなんなのだろうか。

「う、うはは！」

胸をそらしてぎこちなく笑ってから、彼女はジャンの頭を叩いて、「舐めんじゃないわよ？ あたしは強いんだから」

別にいいけど。彼女はそこで一区切りにするように、肩を回して身体を解すように軽い体操をした。

――暫く歩くと、潮の香りが風に乗って届いてくる。

それに反応した彼女が足を止めると、間もなくジャンの視界から消えて、

「海、ちよつと見てみる？」

後ろから抱きついて、また沈むように屈む。

「ちよ、つとまっ――」

制止も聞かずに、ジャンは全身に過負荷を覚えながら大地から足が引き剥がされる感覚を覚えて視界が瞬く間に高くなっていくのを見ていた。臓腑が浮かび上がるような不快感は、以前に一度だけ経験がある慣れない感覚だ。

空が近くなって、日差しが強くなったような気がした。

芝生が、地面に塗料でも塗りたいような風に変化して、その

向こう側に集落を見た。陽光によって反射する浜は白く輝いて――その向こうには、鮮やかな蒼い海が広がっていた。

空を飛ぶよりは遥かに低い位置から見る海だ。

だが、以前見た時よりも遥かに近いソレだった。

世界の広さを、改めて理解する。実感する。そうすると、身体の中から暖かく火照るような熱が生まれるのを、彼は感じていた。

ふっ、と意識が遠くなる。気絶するのではなく、自分の存在が、今よりも小さくなってしまったかのような認識。白昼夢でも見ているような錯覚に、ジャンは思わず呆然とした。

だから着地したことにも気付かなかったように、虚空を見つめて、ラアビによりかかったままだった。

が、彼女はそこまで優しくはなく、ジャンをそのまま押しつけて前に突き飛ばした。

「おわ……っち！」

そのまま顔面から地面に飛び込みそうになる体勢を、ステップを踏むようにして何とか整え、そうして跳び上がるように大地を弾いて、空中で回転。振り返って着地するまでの過程は、ダンスでも踊っているかのようなだった。

「な、なにすんですか！」

「あたし、馴れ馴れしいのは嫌いなよね」

「……そうですね」

ジャンは他にも何か言いたげに眉をしかめたが、結局口にしたのはそれだけだった。

むすつと、拗ねた子供みたいにそっぽを向いてジャンは踵を返す。前へと向き直ると、彼はラアビを置き去りにするように進み始めた。ラアビが困ったように肩をすくめて、急ぎ足で彼の横につく。

冗談も通じないのか、と首を振ってから、仕方なしにご機嫌伺いとばかりに声をかけてみた。

「そういえば、君は戦えんの？」

「……ええ……まあ、一応」

「なにそれ、煮え切んないわねえ」

「いや、実戦経験ってもんがあんまり無いんで。身体は鍛えてきたんですけどね」

腕を叩いて筋肉を主張してみせるが、これがイコール戦闘能力に変わるわけではない。

戦闘で最も重要になるのは、センスと経験だ。確かに身体能力が圧倒的に劣っていれば先制を受けてしまつて攻撃に転ずるまでもなくなってしまう可能性があるが、それでも経験があれば、行動を先読みすることができる。センスがあれば、どう動けば良いか、その直感が良い方向に、自分の流れを作り出すことが出来る。

だが、ジャン・スティールの実力とは未だ未知数。命をかけた戦闘は、まだ未体験だった。

「ま、そこら辺は追々教えてあげるわ。君は、今日は見学なさい」

「いえ、足手まといにならない程度には頑張ります」

「そう出来ればいいけど、ね」

「腐っても騎士志願ですから」

さて、と。彼女は立ち止まる。道はそのまま海岸へと続く道と、草原を突っ切つて林の中へと伸びるものとの分かれ道が目の前に現れた。

「さ、こつちよ」

林の中へと入る。

その手前に、怪物は居た。  
モンスター

——モンスターは異人種と共に、溝の門扉ゲートから現れた、いわゆる”向こう側”の生物だ。この世界の動物と似て非なる、圧倒的な戦闘力を誇る存在だ。だから、ある程度の実力を持たなければ、その姿を見かけた際には相手に気付かれぬように逃げなければならない。モンスターの多くは好戦的だ。

そして常に飢えている。

故に、戦闘はより必然的に起こるのだ。

「ふふん、君は下がってなさい」

外套の袖に両手を通して、彼女は巨大な鉤爪を諸手に装備する。対峙するのは、一頭の狼だ。牙は鋭く上顎から突き出て、爪は長く伸びて地面に食い込む。威嚇するように鳴る喉は恐怖を煽るように唸り続け、獐猛な瞳は既に彼女らを捉えていた。

一触即発の、張り詰めた空気の中。

ジャンは思わず口走った。

「そいつを、殺すんですか……？」

「……はあ？」

イラついたようにラァビが返す。

「それはどういう意味？」

モンスターから決して視線を外さず、言葉を交わす中でも隙を伺い続ける彼女は、敢えて会話を続けるために膠着を選んだ。

ジャンは頷く。

「そいつは、おれ達がここに来たから、多分……その、住処を荒らされると思って抵抗しようとしてるんですよ。なのに、それを殺すのって……」

「なら君は殺さずに殺されればいいわ。まったく、何を言い出すかと思えば——失望モノだわ。じゃあ何、君はあたしに死ねって言う訳？」

「そ、そういうわけじゃないですけど……」

——ジャンは困惑していた。

モンスターを見た瞬間に思い出したのは、森の中でイタズラに解体されたウサギの姿だった。

それはやってはいけないことだと彼は怒った。イタズラに動物を殺してはいけないと。

ならば、自分が今しようとしている事は何だ？ 人のエゴやなにやらず、生きるために必死になっている動物を殺そうとしている、この現状はなんだ？

そう考えるが、彼が本心からソレをそう思っているわけでもない。

自分がそうに、今まで取り繕っていた姿と――今の、金のために命を散らす行動。そこに矛盾を見出して、混乱した。

おれはどれを通せば良いのか、どうすればいいのか。

気がつけば声が震えているのに気づく。

自分の取り繕いの思考を自分で論破できてしまうのにも関わらず、思わずでてしまった言葉に、にわかな後悔を覚えていた。

自分というものを見失い始めている。

たかが、モンスターと対峙しただけで。

仕事を与えられた時点で、こういう状況が来るということが分かっていたのにも関わらず。

――考える間に、ラアビが動いた。

狼がそれに大して反射的に跳び上がる。鋭い爪と爪とが振り薙がれて一閃が走り、二つの影が交差する。

ほぼ同時に両名は着地して、直後に切り裂かれた腹部から鮮血を吹き出して、脱力するように狼が倒れた。

一瞬の出来事だ。

先程まで生きていた狼が死に、そして血に濡れることすら無い速度で振られた鉤爪を腕からはずして、ラアビは再び袖ごと垂らし、腕を組む。

死骸を目の当たりにするジャンへと彼女は振り返って、明らかにまでに嫌悪感を表す表情で、彼を睨みつけていた。

「わかったわ、君は八方美人タイプね。誰からも嫌われたくないから、誰にでも良い顔見せて。差別なく接するからある程度は仲良くなるけど、誰も持ちあげないからそこで終わり。つまらないヒトね、君は」

「……」

沈黙し、俯くジャンに舌打ちが響く。

さらに追撃が来た。

「そんな甘ったるい事考えてんなら、今すぐ剣を置いて国に戻りなさい。学校なんてやめて、平和主義唱えとけばいいわ。あの国だか

ら二、三人は賛同してくれるでしょ」

ずかずかと大股で歩み寄り、狼が作った血溜まりを踏みつけて水の弾ける音を鳴らして、ジャンの目の前に立ちはだかる。無言の彼の胸ぐらを掴み上げて、息が掛かる近さまで顔を引き上げさせた。

「君の剣は、まさか」誰かを守るため”なんて馬鹿<sup>わけ</sup>つたらしい事を理由にして腰に提がってるわけじゃあないわよねえ？」

全てを押しつぶすような威圧に、心がまっ平らになってしまふのを彼は感じていた。

「お、おれは――」

食い下がるように、彼女は言葉を遮って額をぶつけた。

「剣は飽くまで何かを傷つける、打倒するための道具に過ぎないわ。誰かを、何かを守るなんてのは結果でしか無いし、それは剣じゃなくて使い手にすぎない。どう？　ちがう？」

あと一押しだと思う。

彼の中で、あと一度だけ背中を押しってもらうようなきっかけが必要だった。

今の経験は凄まじく自分を変えてくれる。

彼女の言葉が全て凶星なだけに、されどそれまでの自分を捨てるにはあととは行動するためのきっかけが要るのだ。

ジャンは軋む首を何とか動かして頷く。

ラアビは乱暴に彼を突き飛ばすと、腰に手をやり、見下すようにジャンを見た。

「どこまで甘ったれてんのよ」

冷たく突き刺さる言葉に、ドクン、と心臓が高なった。

まるで心を見透かされているような気がして、頬が熱くなるのが良くわかった。

羞恥だ。そして同時に、自分がどうしようもなく軟弱で情けないのかを理解できる。

「きっかけは自分で作るものよ。さあ、今”すべきこと”と”どうしたら良いか”、君はわかるでしょう？」

——濃厚な血の匂いが広がり始める。

それは空気に乗って、林の中へと入っていったのか、ラアビは背後に強い気配が現れたのを覚えていた。

一つという単体ではなく、三つ以上の複数の気配。殺気。

歩くたびに、どすんと地面を揺るがす質量に巨体。

それは恐らく、今回の目的たる敵だろうと、振り向かずには彼女は認識した。

「お、おれは——」

腰の剣に手をかけ、こなれた手つきで白刃を閃かせる。

声は震える。

自分のしていることが正しいのかわからないし、心が本当に、今の行動に賛同しているかも不鮮明だった。

だが、今すべき事はこれである。

それだけは、決して間違えては居なかった。

「おれは、戦います」

「住処を荒らされて、怒って抵抗している罪のない動物よ？」

悪戯っぽくラアビが訊いた。

ジャンは首を振って否定する。

「無理が通れば道理が引込む。おれはそれを両立させる事はできないし……何も傷つけないで生きていくことなんて、おれには出来ない」

綺麗事で生きていけるほど、この世界は綺麗じゃない。

裸足で歩いて無事で済むほど、この世界は安全じゃない。

自分で理解していたことだ。経験したことだ。

ただ、そんな理不尽に悲しい出来事を忘れて——否、忘れようとして、彼は自分の中に決定的なまでに綺麗なものだけを残そうとしていた。

今それを完全に変えることはできないし、今の決意も、いずれ揺らいでしまうかもしれない。

だが、今は戦うと決めたのだ。



ならばせめて、その今だけはそれに従おう。

ジャン・スティールはそう考えた。

ラアビは少しだけ表情を緩めて、踵を返す。

振り向いた先に居たのは、彼女より遥かに大きい――クマの姿だった。

クマの咆哮。

ビリビリと肌を震わせる衝撃の中で、ラアビは大地を弾くようにクマへと肉薄した。

鉤爪による一閃。大地に這う程に深く沈んで、地面を蹴り飛ばして懐へと飛び込んだ。

「グオオオオオッ！」

刹那。

無防備に攻撃の予備動作に移行した彼女へと、およそ通常のクマよりも遥かに俊敏に動く右腕が影に目掛けて振り下ろされた。

が、彼女も反射神経で攻撃へと転じていた左腕を引き上げて鉤爪を腕に叩き上げる。間もなく腕は弾かれて、打ち合った故に生じた衝撃が腕を震わし、動きを鈍くさせる。

その最中に、左腕が振り上げられた。

懐に飛び上がったラアビを切り裂かんとして――彼女は空中で力一杯足を伸ばした。そう思うと、足は伸び切らずにつま先が何かに触れて、蹴り飛ばし、さらに飛び上がってクマの頭上へと飛び上がった。

機敏な機動。

頭の上で逆立ちする彼女は、そのままクマの首筋に鉤爪を当てて、軽く掬うように腕を引く。

引き締まった筋肉と、頑強な骨の抵抗を覚えながら、ミチミチと肉が引き裂かれる音がして、鮮血が迸る。切り裂かれた喉元からはあふれた血が泡となって吹きこぼれて、首は中途半端に半ばまで引き剥がされたかたちで、ぶらりと垂れた。

彼女は倒れかけるクマを蹴り飛ばして体勢を整えて、すぐ背後に回り込んでいた敵へと切迫。

意表をつくように鉤爪を振るい、一閃。冷たい刃は優しく鼻先に触れて、食い込み、挟る。すると鼻の皮膚は肉ごと豪快に引き剥がされて、

「ゴオオオオオオオオーッ!!」

断末魔。

それは衝撃を伴って、眼前のラァビの腹に突き刺さった。

「……るさいっての!」

全てを喰らい尽くすように大きく口を開ける顔へと、頭上から腕を振り下ろして強引に口を閉ざさせる。鼻を切り裂いた手を振るって喉を穿ち、彼女はまたクマを蹴り飛ばして、それからようやく着地した。

大きく息を吐く。

やれやれと、額に浮かぶ汗を拭うような所作の中。

ジャンの遙か前方。そんな彼女の、すぐ後ろで、その巨体は未だに本領を発揮できていないその凶太い腕を振り上げていた。

「ラァーッ」

声をあげようとして、それが無駄だと悟る。

もう間に合わない。声が届いて、彼女が背後に気づいて、それから反応して……それではとても間に合わない。あの位置、既にクマの射程圏内で、背を向けている為に致命傷は避けられない。

”どうすれば良いか”——考えるまでもなく、彼は殆ど無意識に、ソレを発動させていた。

「発現<sup>めざ</sup>、め、ろおおっ!」

衣服の、背中の部分がはじけ飛ぶ。

そうしてあらわになる背中いっぱいに刻まれた魔方陣は眩く閃光を放ち、そうしてそのすぐ後ろに、波紋するように同様の魔方陣を重ねてに出現させた。

——その直後に、全ての動きが緩慢化した。

感覚が鋭敏になる。

クマの、腕を振り下ろす行動が止まって見えて――ジャンは大地を蹴り飛ばし、加速した。

風を切り裂き、見る間にクマとの距離が縮まるのを感じる。今までの全てを挽回するように、やがてジャンは、気がつけば敵の目の前へと回り込んでいた。

「うおおー」

切り上げる一閃。

だがソレは、殆どクマの目に映る事無く攻撃が終了した。

腕は半ばから切り裂かれて、未だ血も吹き出ずに切断面はまだ肉をあらわにし、綺麗な筋と骨の断面を見せていた。

「――おおおおっ!!」

さらに一閃。

跳び上がり、その頭部から縦に振り下ろす剣戟。

斬り伏せると言うべき行動だったが――。

ジャン・スティールのしたこの上なく信じる正しい行動が終えた瞬間に、彼が体感する時間は通常通りに流れ始めた。

鞘を収め、クマを前にした彼が、

「……っ!？」

そのモンスター頭の頭が、腕が不意に爆発したのを見たのは、その直後のことだった。

魔方陣の輝きは失せて、効果は消え失せる。反動として肉体には既に立っていられるはずもないくらいの疲労が襲いかかっていたが、ソレよりも、目の前で爆ぜた対象に彼は目を奪われていた。

クマにとっては一瞬の出来事だ。つまりはそれほどの速度で腕を切り裂き、頭を打ち砕いた。全ては斬撃だったが、その威力は碎き散らす爆撃に等しかった。入刀する一閃がの衝撃がその体内で伝播し、肉体は耐え切れずに破裂したのだ。

ジャンは全身にクマの返り血を浴びてから、ややあって跪く。

まさか今日に限ってこの魔術を発動させるとは思っても居なかつ

たが——そのおかげかも知れない。  
色々と吹っ切れた。

彼は確かに、それを感じていた。

「頑張ったじゃない」

水筒を傾けて蒸留酒を口に含んだラアビは、まるでこうなることを知っていたかのように告げた。

「それでも本当に殺すのがイヤだとか言うのなら、世界を変えなさい。できないなら自分を変えるの。わかった？」

「はい、もう、十分なほどに」

「君はもつと世界を知ったほうが良いと思うのよ。騎士になるんだったら」

「あの……」

「ん？」

袖で顔を拭い、なんとか四つん這いから中腰へと体勢を引き上げた。

見上げる形でラアビを見れば、先ほどの怒りはどうやら消え失せてくれているように見えて、ほんとにジャンは安堵する。

「また、一緒に仕事を受けてくれますか？」

「……うははは！ 君はヘンタイ？ あんだけ怒鳴られて、それでもあたしと仕事したいの？」

「おれ、もつと頑張りますから」

「はははっ！ いいわね、いい目になってるわよ。どうせヒマだもの、ヒマだから、君が誘ってくれるならいつでもいいわよ」

ポンポン、といつもジャンがそうするように、ラアビは知らずに彼の頭を叩いてみせた。

それから彼に背を見せるように歩き出して——歩けぬほどに疲弊してしまっているのを知ってか知らぬか、数歩ほど離れた所で立ち止まった。

「早く帰らないと、陽がくれちゃうわよー」

「ちょ、待ってくださいよ……」

ガクガクと膝が震え、歩こうとすれば足が動かず、前のめりになって倒れてしまう。また起き上がろうにも、腰が痛くて半身が起こせない。

今すぐにも眠りにつきたい。そう思いながらも、彼は歯を食いしばり、唸りながら立ち上がると――不意に腹に違和感を覚えて、そうして身体は大地から引きはがされた。

視線の位置が高くなる。

ジャンは、ラァビに担がれていた。

「たく、これで報酬が半々なんだからやってられないわよねえ」  
すっかり酔いが覚めてしまったように、彼女は深々と嘆息した。

「ごめんなさい……」

「いいわ。それじゃ、ギルドのツケを払ってくれる？」

「い、いくらですか？」

「金貨一枚と、銀貨五〇枚くらい」

「……いくらなんでもふざけんな！」

「うはは！　これで愛想笑いで済ませたらどうしようかと思ったわよ」

なんだか妙なまでにご機嫌に彼女は笑って――街に到着するのは、ちょうど西の空が赤く染まり始めた時刻だった。

## 嫉妬の夏、ねこの空

「最近、ジャンくんが妙な女と歩いているのをよく見るわけよ」

「ほうほう、くわしく」

「いいわ、よく聞いてなさいね」

猫は尻尾をぱたぱたと揺らして床を叩きながら、目の前で膝を立てるように座る赤いワンピース姿の少女に告げる。

そこはジャン・スティールの私室であったが、彼が夏休みに入って以降ヒマになったタマとノロの溜まり場と化していた。週三程度で彼は日中は外出して夜まで帰ってこないの、その事実を部屋の主は知る由もなかった。

ふかふかの寝台の上で、タマは布団を叩いて抗議でもするように興奮気味の口調で説明した。

「あの女！ あれのせいでジャンくんが最近構ってくれないのよ！ カリカリくれないし！ べちゃべちゃの魚は美味しくないのよ！」

「ほうほう」

ノロは言いながら、蓋の開いたツナの缶詰をタマの前に取り出して、そのままフォークで掬い、持ち上げる。タマは誘われるように器用に二本足で立ち上がって、不安定な動作で空中を掻き巻く。だが、頭上のフォークには前足は届いていなかった。

彼女は反射的に餌を追い求めてしまうタマを弄びながら、この上なく興味がなさそうに訊いてやった。

「その女とは」

「あ、そうそう！ なんかねエ、こう、頭にウサギみたいな耳くっつけて、下半身が立ち上がったウサギみたいな毛皮の、あたしみたいに完璧な獣人化も出来ないくそつたれなウサギよ！」

「それで？」

「ジャンくん、家にいる時より楽しそうな顔してたのよ……っと！」  
布団を弾いて跳び上がる。が、反射的に腕を引くと狙っていたフ

オークはタマの眼前から消え失せて、そのままノロを飛び越えて背面に着地する。短い舌打ちを鳴らすタマの頭を撫でながら、ノロは飽くまで表情を変えぬまま、頭を撫でてやりながら目の前に缶詰を差し出した。

「ばあ、つと先ほどの憤怒が嘘のように表情が明るくなる。」

さすが猫。

彼女はそう思い、ガツガツと缶詰に顔を突っ込んだタマを見下しながら、顔に軽くかかった長い銀髪を後ろに流した。

「わたしも、近頃構ってもらっていない。友達なのに、無責任」

「これは由々しき事態よ。あの思わせぶりの馬鹿に鉄槌を下す時が来たわ」

「作戦、開始」

「サニーも起こしていくわよ！」

ヒマなのと、無駄なまでに積極性の強い事も相まって、壮大な勘違いのもとで行動は果たして開始した。

「いい加減、酒飲み過ぎなんじゃないスか？」

ギルドを出てからすぐに平たいの水筒を口につけるラアビに、ジヤンは呆れるように言った。

かれこれ一週間、彼女に鍛えてもらいながら仕事をこなしてきた。街の中で、体の不自由な老人のために買い物をしてきたり、あるいは届け物をしてきたり。あれ以降の戦闘は無かったが、それでも今までには無かった体験は、彼にとつて貴重なものになっていた。

自分の知らない、住民の生活が垣間見える。それが妙にうれしくて、自分が世間と関わっているという証になるようで楽しかった。

「いいのよそんな量ないし。というか、今日はもう仕事もないし、帰れば？」

彼女は、ほっと胸から大きく息を吐き出して肩を落とす。

最近ろくに仕事をこなす人間が居ないという話だったのだが、ジヤンらが熊を三頭退治して<sup>グリズリー</sup>みせてから、そういった怪物退治の仕事

が増えたのだが――それを待っていたとばかりに、館で待機していた旅人がこぞってそれを奪い去っていったのだ。

それでもそうそう間を置かずに来てみたのだが、やはりろくな仕事はない。

資金も溜まってきているから、無理に仕事をする必要もないのだが……今日で一週間目だ。いい加減、あの時の情けない姿を払拭したいと、ジャンは思っていた。

「そんな寂しいこと言わないでくださいよ。むしろ、仕事も無い日に、初めて会ってるんですよ？」

「別に好きで会ってるわけじゃないけど」

いつものように外套の下で腕を組むラアビは退屈そうに言ってから、静かにその言葉の後を追った。

「じゃあ、君を育てたお礼に何か奢ってくれる？」

今まさに思いついたような台詞だった。

そこで同時に、そうか、とジャンも手を打った。

今日は仕事もないからどうしようもないが――ならば日ごろの礼という手があった。

ここで、決定的なまでにどうしようもない糞ガキだと思われているイメージを、なんとか変えられるかもしれない。

「そうですね、ちょうど昼頃ですし……でもおれ、ここら辺の店ってあまり良くわからないですよね」

「そうねえ、街並みはすごいけど都市って感じじゃないからあたし自身もこの街をあまり見回らなかったから知らないんだけど――あったわ、一つだけ、とっておきの」

「ラアビさんが良ければ、そこに行きませんか？」

「うはは！ そうねえ、いいかもねえ！」

誘ってみると、ラアビは嬉しそうにジャンの頭を撫でるように叩いて、歩調を早めた。

ジャンはそんな喜んでいる彼女にほっと胸をなでおろしながら、強い日差しの中、額に浮かぶ汗を拭いながらラアビの後を追うよう



についていった。

「ほら、アイツよ」

タマは物陰から、仲睦まじく往来を歩く二人の姿を指してみせた。妙に艶艶しい肌で傍らに屈むノロは、つい先ほど、制限時間的な問題で選手交代してきたがためだ。先ほどとは違うノロだが、記憶と意識は共有されているためになんら問題はない。

「ラアビか」

「あんた、知ってるの?!」

「聞こえた」

「……すげえ役に立つじゃないのよ」

飛び上がって、タマはノロの肩に乗る。

サニーは既にクロコやアオイと出かけてしまった後だから誘えなかったし、テポンは新しく買ってきた魔術書にかじりついていて、お手伝い三人衆も相手にしてくれない。トロスが唯一の希望だったが、彼も彼で家には居なかった。

だから、この追跡は二人と形容すべきか、二匹と形容すべきかわからぬ兩名のみで行われることとなっていた。

もちろん、その対象二名には気付かれては居ないが、その微笑ましい組み合わせは通りすぎる人々には良く目立っていた。

彼女らはそうとはつゆ知らず、まさに自分たちは透明になったつもりで、影に隠れながらその後についていった。

「あんで会話してんの?」

舌っ足らずっぽくタマが訊く。ノロは頷き、聞いたままに口にした。

「『おれ、ラアビさんと出会ってから世界がかわったような気がします』『へえ、じゃあもうあたしナシじゃ生きていけないくらい、骨抜きにされてるわけね』……など」

「にやんですとおっ!？」

「『……まだ昼間ですよ。いくらなんでも早いんじゃないですか』」

『いつもそうじゃないのよ。ソレに、今日は君がもてなしてくれ  
んでしょう?』……だとか」

「やつろお……もう、そんな不快、もとい深い関係に……」

もふもふの毛皮を逆立たせて、倍近くに膨らんだ尾は針金でも入  
れてあるかのようにいきり立っていた。彼女の興奮は隠せるもので  
はなく、鋭い爪はノロの肩に食い込んでいたが――肌は切り裂かれ  
ること無く、逆に腕をそのまま飲み込むように、柔軟化していた。

そして対照的に、ノロは楽しんでいた。

表面上にはひどく冷めた様子だが、敢えて切り切りに台詞を紡ぐ  
ことに寄って、タマは面白いように情報を鵜呑みにしてくれる。滑  
稽だ。ジャンはからかえなかったが、彼女は違う。

もっともその行為は悪意に満ちたソレではなく、結局のところ、  
タマも本気で憎んでそうしているというわけではないことを知って  
いるから、ならば自分も少しくらいは楽しもうという思考のもとで  
行われていた。

「あたしの事は遊びだったんだ! あの手棒うさぎめ!」

「はっは、ゆかい」

「面白くにやいわよ!」

「ははは」

それから南区の大通りから、ちょっとした路地に入る。

二人はそれを見送ってから、タマはあんぐりと大きな口を開けて、  
二人が入り込んだ店の看板を見上げていた。

木で出来た、店先に飾られるソレ。看板たる板にはグラスから内  
容物の液体が溢れている絵が刻まれていて――それは酒場であるこ  
とを教えていた。

「酒場じゃん!」

「そうです」

「なんか、休憩用の宿屋かと思ったのに!」

「脳みそ不純物で、出来てる」

「っさいわね、ヘンな会話聴かせるからよ」

「理不尽」

バンバンと両手で素早くノロの頭を叩いてから、前に居直って扉を指し示す。

「中に入りなさい」

馬鹿だ。

思わずそう零れそうになった。

「馬鹿だ」

思わずそう口にしてしまった。

「なっ、あたしに何の恨みがあるのよ……」

「目立つ格好。気付かれるのは、確定的に、明らか」

ここは酒場だ。

明らかなまでに子供の容姿であるノロがその中に入る事自体が異様なのに、さらに目立つ赤いワンピースにサンダル。透き通るようにきらめく銀髪。その上で、何かの冗談のように肩には三毛猫が乗っていて……そんな少女が店に入れば、酔っぱらいはいよいよ幻覚が見えるほどに酒が回ったかと思うだろう。

いくら感情的になっているからとは言え、そこまで頭が回ってもらわねば命取りだ。

彼女が魔法を持たず、あるいは持っていたとしても、騎士の学校に入学していなくてよかったと思う。こいつが騎士になったら国が減びてしまうだろう。

かなり頭が馬鹿だ。頭腦的な意味で。

ノロは酷烈に、タマをそう評していた。だが嫌いじゃない。同時にそう思った。こいつは楽しめる馬鹿だ。ネコだけど。

「そっ、それじゃ、どうするの？ あんたが考えてみにゃ、さいよ！」

「ここで、ジーニアスなわたしは考えた」

ノロは得意げに人差し指を立てる。と、その指は瞬く間に赤黒く

変色して、うねり、粘土細工のようにうようよ見えざる手で加工されているように伸びて、触手状に変異した。

手を扉に向けると、地面と扉とのほんの僅かな隙間に、ねじ込まれるように触手が中へと忍びこむ。彼女はそうして扉の脇の壁を背にして膝を立てて座ると、タマはそのまま膝の上に乗ってきた。

「ノロってなんでもありだよねエ……」

「照れる」

タマの喉を掻くように指先で撫でながら、暫く待機。

そうすると、ややあってから、ノロは自主的に口を開いた。

「声を認識した」

「聞かせて！ レッツ！」

「ストーカー気質」

「いいから、レッツ！」

ノロは珍しく小さなため息を漏らす。

そうしてから、仕方なしに聞こえてきた言葉を伝えてやった。

「やっぱり、蒸留酒だけじゃ飽きるわね」

ラアビはご機嫌な表情で樽のようなジョッキを傾ける。中身はぶどう酒であり、蒸留酒よりアルコール分が低くて飲みやすいソレだった。

小さな円卓に向かい合わせになって座る二人は、それぞれ軽食じみたパンや干し肉、それにちよっとしたサラダを並べて、それぞれぶどう酒を煽る。

周囲は、ギルドをひと回り小さくしたような空間であり、満席ではないものの、客が多く賑わっている。

その中でラアビはポケットから出したメモ帳を広げて、筆記した。――さっきからついてきている子はだれ？

「確かに、会ってからは他の酒を飲んでる姿を見たことないですし」干し肉を咥えながらペンを受け取り、下に綴る。

――ノロっていう、友達です。ちなみに肩に乗ってたネコは獣人

です。

「でも、このぶどう酒は特に美味しいのよ。ほら、君もたんとお飲み？」

——君に用なんじゃないの？

「ええ、頂いてます」

ゴクリ、とわざとらしく喉を鳴らしてぶどう酒を一口飲み下し、大きく息を吐いてからペンを手に取った。

——たぶん、ラアビさんとの関係を何か勘違いして、ストーキングしているみたいです。遊びみたいなのですよ。

芳醇な甘い香りが鼻から抜ける。

確かに、城で飲んだものよりいくらかレベルが高そうなソレだった。

彼はそのままサラダにフォークを突き刺して頬張ると、ゴクゴクと天井を仰ぐようにぶどう酒を飲みながら、手元を見ずに文字は綴られた。

——勘違い、ねえ。

それから言葉を交わしながら、食事を進める。筆談はそれ以降行われず、彼女が一体何を聞いたかったのか、何を考えたのか、結局のところジャンにはわからなかった。

やがて皿が空になる。

何杯目かになるぶどう酒も、そのジョッキの中身が空になって、ラアビは腹をさすって満足そうに息を吐く。微笑を浮かべ、また天井を仰ぐように口を開けた。

「美味しかったわあ」

「ええ、軽食だと思ってましたけど、食事も結構美味しいですね、ここ」

「それで、お腹もいっぱいになった所で——」

「『——デザートとして、君も食べちゃおうかな』と言っている」「ファック！ 我慢ならないわ！」

タマは牙を剥いてノロを足蹴に、力一杯空中に飛び上がったかと思うと――不意にその四本足が伸びて胴の部分にメリハリのある起伏が生まれ、四肢が肉球をそのままに巨大化する。

彼女は瞬く間に人型へと変身すると、ノロが静止するよりも早く、酒場の扉に足を向けて、膝を胸に引きつける。そうしてからすべての力を解放すると、足先は力一杯扉を蹴破って――凄まじい破裂音のような破壊音が周囲に響き渡った。

扉を固定していた金具がひしゃげて、その巨大な板は空中をくるくると舞って床に叩きつけられる。

酒場のざわめきが、一瞬にして消え失せた。

彼女が大腿で中に入ると、まず目に入ったのが、

「ジャーンッ！」

しなやかな指先で顎を掴まれ、その息のかかる程の距離に顔を近づかせているラアビとジャンの姿だった。

「あんた、あたしにちょっと期待させておいて、こんなトコでにややってんのよ！」

ズカズカと大腿で円卓に歩み寄り、そうしてテーブルに両手を突く。バン、と盛大な音がして、木で出来た食器がにわかに弾んで机を叩いた。

「なんだ、タマか」

「にゃあ！」

迸る一閃。

肉球は、ジャンがその切迫を認識するよりも早く、意識の外から顔面に叩きつけられた。

少し硬度のある角質。そしてその中には、程良く柔らかい脂がクッションになっている、独特の感触。お日様の匂い。

麻薬的な効果によって、ジャンはこの状況でも尚自分を見失うことができていた。

「うわあ、肉球……」

「駄目だ、話にならないわこのバカ」

腕を引き剥がし、茫然とするジャンをよそ目に、今度はラアビへと目を向ける。キツと睨みつけると、席に座りなおしていた彼女は偉そうにふんぞり返って、足を組んで、頭の後ろで手を組んでいた。

「あんた。あんたでしょ、ジャンをたぶらかしたの」

「たぶらかしたって……随分と人聞きが悪いわねえ」

「泥棒どろぼううさぎ！」

「それじゃあ、アナタと彼は、男女の関係として付き合っていた訳？」

「そ、そうじゃないけど……」

思わぬ反撃に、彼女は言葉を失った。

突かれたのは一番の弱点だ。ここを見抜かれてしまえばここに来た事に対する正当性が失われてしまう。

残るのは、ただ思いついた一匹のネコだけだ。くすぶり、あらわになった嫉妬にひたすら羞恥するしかなくなるのだ。

そんな事、許して良いのか。

そんなことさせない——させてたまるか。

百グラム程度の脳みそが、その時点で最大限に思考を回転させていた。

言葉が溢れるように生まれでて、選択し、文章を構成する。整合性を以てして判断し、適切でなければ切り捨て。再選択。

刹那の刻。

心臓が一つ鳴るその最中に、タマは反撃した。

「うるさいビッチ！」

それは全てを終了させるのに十分すぎる言葉だった。

悲しきかな、人の肉体でネコの脳みそを持つ彼女には、深く思考するに値する質量を持ち合わせていなかった。もともと個人差はあれど、彼女は特に感受性に特化した造りを持っていたが故である。

「……くっ」

小さな、うめき声にも似た何かが聞こえた。

その直後だった。

「うはははッ！ おつもしろい娘じゃないの！ いいわねえ君は、こんな娘に囲まれて生活できて！」

いかにも愉快気に腹を抱えて笑うと、目尻に浮かんだ涙を払い、立ち上がっておもむろにタマの頭を撫でる。警戒するように尾がピンと逆立ったが、妙に手癖のいい慣れた手つきに、理性とは別に、本能が彼女をリラックスさせてしまった。

尾が垂れる。

そうして徐々に、頬が赤くなるのを隠すようにタマはその身体をどんどん縮小させていつて——やがてネコに戻っていった。

ラアビは構わずタマを抱き上げて胸に抱え、喉を撫でる。ゴロゴロと喉を鳴らしたタマを眺めて、ジャンは嘆息しながらも、微笑むことしか出来なかった。

なんだかなあ——そう思いながらも、心が満たされていくのを感じていた。

確かな充実感。体を動かし、自分が強くなっていくのを実感するのは大きく異なる、そんな幸福感が胸の中に広がっていた。

ラアビは良く面倒を見てくれるし、戦闘面でも良く鍛えてくれる。そしてこれまで出会った多くの人も、随分親切だ。

「そろそろ、腐るから」

いつの間にか酒場に入ってきていたノロは、脇から不意にそう声をかけた。

「ああ。なんだか、タマが迷惑をかけたみたいで悪かったな」

取り繕う程度の謝罪をすると、ノロは首を横に振る。銀髪は薄暗い照明の中でも鮮やかにきらめいて、その顔立ちは品の良ささえも伺わせていた。

「構わない。楽しかった」

「そうか。そりゃよかった」

「今度は、遊んで？」

ジャンを指さして首を傾げる。彼はソレに、小さく頷いて笑みを作った。



「ああ。今度遊びに行くよ」

「ぜったい？」

「もちろんだ」

「じゃあ」

彼女は軽く手を上げて別れを示す。ジャンもそれに応じて手を振ると、そそくさと、静まり返る酒場を後にした。

そうしてジャンもざっと酒場の中を見渡してから――タマに夢中になるラァビをよそに、カウンターへと向かって、無言で金貨一枚を差し出した。

「扉の修理代、これで足りますかね」

「ああ、気にしなくてもいいのに」

気の良さそうな中年男性は困ったようにそう告げながらも、カウンターに置かれた金貨に手を伸ばし、それをポケットの中に収めた。マスターたる人間はどこかクセがなければやっていけないのだろうか。彼はそう思いながら、それ以上面倒なことに巻き込まれない内に、とノロの後を追うようにその場を辞した。

タマが全身の毛を滅茶苦茶なクセを作って帰って来たのは、その日の深夜の事だった。

## おつかいとご褒美

「オクトにおつかいを頼まれたのでしよう？　なら、私のおつかいわたくしも頼まれて当然でありながら、断る道理などありはしない筈です」

もう一人のお手伝いさんである彼女は、稲妻のような黒い刺青を額から鼻筋と流し、また十本もの白い触手を頭から生やし、ひとつだけの眼球でぎよろりとジャンを睨んでいた。

身体は辛うじてヒトのようなものだったが、下半身から癒着する袋のような皮膚は、蛇族のように下半身を飲み込むようにして居た。その姿は、やはりヒトというよりはイカに近い。そんな彼女は、やはりイカ族の女性だった。

移動方法は主に触手を利用しての歩行だし、多くの行動はそれに重点を置いている。始めてみた時はさすがに度肝を抜かれたが、今ではずいぶんと見慣れている。

「構いませんが……」

「なら頼まれてください。本屋さんに行くのでしょうか？　ついにてこれから頼む本も買ってきてください。お代はこれです」

彼女は指先でピン、と弾いた銀貨を、落ちてくる最中に叩き落すような手さばきで手中に収める。ジャンの手をとってそれを押し付けると、次いで説明した。

「少年が少女と出会って世界を救うお話です。タイトルは、なんとかオブなんとか」

「……困ったなあ」

「あー、たぶんあの中佐殿なら分かるでしょう。若い世代向けに執筆されてる、文章も、登場人物の頭の中身も軽い感じの本です。最近流行ってるみたいで。文化が進んでる地域から届いたと聞きました」

「まあ、わかりました。それじゃあスクイドさん、行ってきます」

「ええ、健闘をお祈りします」

パタパタと言った風に、肘を曲げて上げた手を子供のように大きく振りながら、口調や外見に似つかわしくない所作で、ジャンを見送った。

「なんであたしがあんたなんかと、こんな所に来なくちゃいけないわけ？ まじであんたキモいんだけど、離れてくれない？」

タマはアレから悪態をつき続けていた。

肩で、前足を内側にたたみ込んで箱のようになって座るネコはいぶんと器用にバランスをとっていたが、耳元で吐き出され続ける悪意にはさすがに頭が痛くなってくる。

だからポケットに突っ込んだ紙袋から小石の様な大きさの、香ばしい匂いのするソレ、猫用のドライフーズを手にとって、彼女の口元に押し付ける。

「ふにゃあ！」

そんな間拔けな声を上げながら、ペロペロと舌で掌を舐めつつ餌を拾い上げてはむはむ、と食べ始めた。

そんなこんなで、本屋の前につく。

常時開放されている扉からやや薄暗い店内へと入ろうとする中で、囁き合うような、なにやら妙に物騒な雰囲気孕む声が奥のほうから聞こえてきた。

「肝心な時に作動不良だ。ったく、これだから複製品は信用ならんのだ」

中佐殿の、珍しく苛ついたような声が耳に届く。タマとジャンは、それから確かに顔を見合わせるようにしてから、慎重に、音を立てずに中へと入っていった。

「仕留めきれなかった、くそつたれ。やろう、覚えておけよ。まずだな。”まず手入れをした”、が、そこで見つけたぞ、軍曹。まことに言いづらい事だが撃鉄にヒビが入っていやがった。わかるか？ ”ヒビ”だ。お嬢さんのワレメじゃない。人を殺す気か？ 慎重に起こしたのに、怒ってへし折れちゃった。ありゃなんで出来てい

るんだ？ 紙か？ 紙粘土か？ お前らは、簡単な手入れすら怠るくそったれなナマケモノやろうなのか？」

中佐殿は激怒していた。

声は荒げないものの、言葉そのものは下品極まりなく、口調が荒い。今にも手を出してしまいそうな勢いでまくしたてていた。

言い訳など許さんぞと言った勢いで、それゆえに相手は萎縮してしまっているらしい。

やがて本棚を抜けると、カウンターに置かれている机上用の小さな照明が辺りを照らしていた。そうして見えるのは、カウンターの向こう側で眉をしかめて、無表情で睨む中佐の姿。

それに、対峙するのは見たこともない外套……どこかの国の近代的な服装、養成学校の制服も似たいわゆるスーツを着込んでいた。頭には、円筒状の帽子を被る、珍妙とも言える格好の男だった。

が、恐らく彼は外国から来たのだろう。

およそこの国には無いであろう格好だった。

そして脇から見えるのが、箱型の手提げかばん。それはカウンターの<sup>エネルギー</sup>上で、展開されていた。

「魔石などの<sup>エネルギー</sup>魔力を利用から、ようやく<sup>パウダー</sup>火薬の<sup>エネルギー</sup>爆発力を利用して実用化することができたんです。装薬<sup>かやく</sup>と、実際に対象に推進するものを弾丸と呼び、それらを含めたものを弾薬と呼びます。これが生まれたのが、ちょうど五、六年前。だからまだ”銃”というものは高価なんです。無茶を言われても、困ります」

”困る”だとお？ 困っているのはこっちだぞ、死にかけたんだ！ なんだあんな……くそったれ、思い出すだけでも怖気が走る！」

「シロアリの一種ですよ」

「ごっ……」

中佐は喉に何かが詰まったように言葉を止めて、カウンターに両手を叩きつける。バン、とやぐざが脅すような盛大な音がして、彼はその渋い顔を、及び腰の男へと迫らせた。

声は震えて、殺気籠った言葉を紡ぎ始めた。

「あの黒くて、てらてら光って妙に足の早い、気持ちの悪い触覚をゆらゆら揺らして無力な人間の魂を揺さぶり畏怖させる恐怖の象徴を、そんなものと一緒にするんじゃないッ！」

「……あの鬼神が。聞いて呆れますよ」

「ふざけるなよ、あんぽんたん。貴様はな、バカにしていいたいことと悪いことの分別をつける。食器（おけ）をかぶらせて撃ちぬくぞ！」

「ええ、ええ。わかりましたよ。というか少しは掃除したらどうなんです」

わなわなと全身を震わせる中佐をよそに、男は慣れた風にあしらってみせた。それから振り返り、店の内装をざっと見渡してから、肩をすくめるように嘆息する。

まるで国立図書館のようになるところ狭しと本が並んでいて、整理整頓もしっかりとしてある。なぜ増え続けているのに本棚から本が溢れないのか疑問になるほどだ。が、この狭さは図書館のソレとは大きく異なる。妙な威圧感さえ感じていた。そして妙に便意を催してくる空間だった。

「掃除はした。隅から隅まで、タマゴウチ少佐が怒るからな。だから今では、埃一つない。なあ軍曹、掃除はいいものだぞ。綺麗になれば、心まで綺麗になったような気分になる。本を揃えるだけでは満足できなくなってしまった」

「昔から、銃器はいつでもピカピカですもんね」

「銃は己に与えられた唯一の女性だと学校で習わなかったのか？ 確かにみすばらしい格好の美女もそれはそれで映えるが、やはり美女は着飾っている格好が一番映える」

「根っからの軍人ですね。まあ、分かりました。銃は持ち帰って修理します。それまで、こっちを持っててください」

彼は面倒そうに話をぶつ切り、それから赤いクッションが敷き詰められたかばんを指した。そこには、なにやらL字型の道具が埋め込まれていて、中佐はそれを引きぬいて慣れた手つきで構えてみせた。

持ち手は木製で、ちょうど親指と人差指を建てたような形だ。人差し指以下の指がある位置には、その接合部分に半円のフレームがあつて、接合部分からは棒のような突起が伸びている。

持ち手ではない部分は、先端に向かうに連れて先細り、ついには細い、中身のないペンの外装を突き刺したような形をしていた。

「他国で創られた銃で”ワーサー”というメーカーです。回転式弾倉ではなく、こちらの箱状の弾倉に弾薬を詰める形となっています。最大装填数は八発で、撃鉄を起こしてから弾薬を抜いて、また一発を弾薬に込めれば最大で九発になります」

「ほう。これも9mmか？」

「ええ。この国では弾薬の入手は難しいと判断したので、同規格を用意しました。やはり科学より魔術が発展している地域は、これに疎いですからね」

「だが、その分平和とも言える。いい街だぞ、ここは」

「ええ、わかりますよ。血の味を知らない街です」

「こいつも必要にならなければいいんだが――本格的に魔術でも覚えようかと、たまに思うよ」

「いつか科学が魔術に通じなくなる日がくると思うと憂鬱になりますよ。なんでもありませんか、アレは」

「わはは！ 軍曹、よくきけ。魔術が発展する。科学が発展する。」

良い事じゃないか！ どちらにせよ生き残るのは、強いやつだ。結局は魔術も科学も関係ない！ そこが面白いんじゃないか！」

「強い人はみんなそう言うんですよ。ぼくらみたいな小石みたいに溢れる中の凡人には、とても」

自信満々に、意気揚々と高笑いする中佐に対するのは肩を落としたり軍曹と呼ばれる男だ。

彼はそれから、堅い外装で出来たかばんを閉じると鍵をかけて、それを手に下げて帽子を脱いだ。

男はどこか礼節をわきまえたような態度で、丁寧な動作で帽子を胸に当てて頭を下げると、それから帽子をかぶって踵を返した。

「戻るついでに国を覗いてきます。中佐殿も、お元気で」

「ああ、無事を祈る。達者でな」

「それじゃ、失礼します」

「あ、ありがとうございます」

軍曹が店を出てから、素知らぬ顔で入店しなおしたジャンは素知らぬ顔で頼まれた本を中佐に渡した。表紙には『恋愛こいを始める前の五つの約束』と書かれて、ど真ん中にはハートが描かれている小説だ。

オクトが、転生したユウキが前世で恋人だったユキと出会って記憶を引き継いで云々の最終章だと言っていたから、おそらくずっと楽しみにしていたのだろう。

そして次いで、もう一冊の『たった一つのぼくのやり方』と書かれている本。

最後に、スクイドから頼まれたのは妙に可愛らしい少年少女が表紙に描かれているもので、紙の表紙であるためにずいぶんと安い。

代金を払って、紙袋に入れられたそれを受け取ったジャンは軽く頭を下げ、背を向けた。

その瞬間だった。

中佐は、恐ろしく自然なまでの動作で彼の肩を掴んで行動を制止していた。

「少年、見ていたのを知っているぞ。なぜ隠れていた？」

底冷えするような低音。殺気すらも孕んでいるような声音。彼は思わず、背筋を凍らせる。

ギギギ、と途端に首の骨が錆びてしまったように、彼は強い抵抗を覚えながら首を回した。振り返ると、無表情の中佐が彼を見つめていた。

もう彼の口ひげには、胡散臭さなど感じられなかった。

「な、なんの話ですかねー」

「誤魔化しても無駄だ。私は、タマゴウチ少佐と隠し事には敏感な

タチでな」

「な、なんであたしなのよ」

「わはは、今日も絶好調だな、少佐は」

「……いつもどおり意味分かんないわね」

肩から立ち上がって、ぴょんと軽く飛ぶと彼女はそのままジャンの頭の上で座る。絶妙なバランスを維持するのは彼の役目になった上で、暑苦しさが倍増したような気がした。

「まあいい、だが君等には嫌われたくないから事情を説明しよう」  
中佐は手を離す。彼はどこかつかれたような顔で短く息を吐いてから、振り返ったジャンへと顔を上げた。

「私は退職したのではなく、逃げ延びただけなのだ。今では逃げる原因となった内戦は終わったが、反政府武装勢力はまだ私を探している。他の残党も。彼らが敗残兵だというのにな。国から散った弱者をいじめることしか、彼らにはできないのだ」

「……じゃあ帰ればいいじゃないですか」

「うっ……」

彼はわざとらしく、大げさに胸を押さえて演技がかった動作で見を弾くように退いた。

後ろの壁に背中を打ち付けて、絶望的な表情でジャンを見る。

「なんて正論を撃ち出すんだ、少年きみってやつは」

「だって」

「残酷だな。命からがら逃げてきて、身を隠すために書店を営んだらなんだか儲かって、楽しくなってきた私の身にもなってくれ」

「うわー、同情の余地無いわね」

「だが気にするな諸君、この街には優秀な騎士がいる。たとえ”やつら”が来たとしても追い払ってくれる！」

「すごい他力本願」

「もういいじゃないか。今日は帰ってくれ」

「自分で引き留めたのに……」

今度は背中を押す中佐に、忙しい奴だと思いながら彼らは程なく



して書店を後にする。

新しく増えてしまった無駄すぎる知識にため息を漏らしながら、二人はそうして家路につくことにした。

「やればできるのですね。お釣りはお駄賃でいいですよ」

頭の触手で頭をペチペチと叩きつつ、スクイドは本を受け取り胸で抱きながら、そう告げた。

「あ、ありがとうございます」

「さて、昼食はオクトに任せるとして、ずぶんとざぶんと物語の世界に浸ってくるとしましょうか」

「オクトさんは今日、ちょっと友達と出かけたみたいで夕方まで帰ってこないって言っていましたよ」

「……安心なさい。パスカルが居ますよ」

「居ませんよ。彼は彼で出かけてますし」

スクイドは大げさに絶句した。

そういえば、彼女が調理に手を出しているところを見たことがないのを思い出した。

あんなパスカルでも一応は手伝っているというのにも関わらず、スクイドは横柄な態度でテポンと談話しているのが殆どだ。

お手伝いとして見るのは掃除をしている場面ばかりだし、確かにシーツを取り替えたり、部屋を掃除してくれていたりはするのだが……料理はできないのだろうか。

というか、ここまで逃げていればそれは明らかだった。

「あー、じゃあサニーとか呼んでお昼食べに行ってきますよ」

「こら」

ペチン、と触手が頭を叩いた。

「私はお手伝いさんです。このお館で生活する人たちの手を煩わせないようにお手伝いするのが存在意義です。家にいるのに、わざわざ外食するなんて……お手伝いさん魂が穢れます」

「……サニー呼んで来ましょうか」

「お願いします」

どちらにせよ住人に手をわずらわせているのだが……彼はそう思った言葉を飲み込んで、自室で学校から出された課題をこなしているであろう彼女を呼びに、階段を駆け上がっていった。

結果として、その行動は不正解といえる。

サニーに全てを任せるか、外に食へに行くかが正解だったのだろう。

今から過去にもどって、この選択をした自分を殴りたい衝動にかられながら、ジャンは目の前の黒い異物を見つめていた。

どろどろの、インクでもかけたかのような黒褐色の炒め物。ご飯。汁物。

もやしと豚肉、それとニラが入った炒め物は香ばしい、食欲をそそる香りがしている。この時点で美味そうだと思えるのが本当なのだが、見れば黒い。黒すぎる。

ご飯は、インクと一緒に炊きこんだのだろう。流石黒い。

汁物はもはやインクなのだろう。すごく黒い。

だが、サニーなどは隣で目を輝かせて居た。タマは、少し離れた所でドライフーズにがついていた。目の前では、なにやらしたり顔のスクイドが評価を求めるような視線でジャンを見ている。

確かに香りは美味そうだし、見た目はともかく美味しいのかもしれない。

だが、今頭の中には黒いという感想しか無い。言葉を考えようにも思考はすこぶる停止中だ。

「あー、その、ですね」

息を呑む。

ええい、ままよ。

「この黒いのって、なんなんですかね？」

「ああ、豚肉と野菜の炒め物です。味付けは塩コショウで、ガーリックを効かせて見ました」

「こ、この黒いのは……」

「倭国から輸入してきたブランド物の米で、評判のいいものです。炊くときに”みりん”をちょっと加えて甘みを増して、つやも良くなるので美味しいですよ」

「あの、黒いのって……？」

「かりゆう顆粒だしですが、ちよつと濃い目にして味を際立たせて見ました。ご飯に合うと思ってベルさんに教わった手順でつくってみたのですが……具は豆腐に、ネギとわかめです」

ベル、というのはベルガモット……つまりサニ一の事だ。意固地になって下の名前を呼ばないために、妥協してそうになっていた。

駄目だ、意図的なまでに本題が回避されている。

肩を落としたジャンの横で、言いたいことを感じ取ったサニ一が補足した。

「この黒い”ソース”は、万能調味料だつて」

「ば、万能？　つか、これソース？」

「うん。えつとね、なんとかって言う栄養素が体に良くて、旨味があるから結構な料理にあうらしいよ。でもなんでもかけるとオクトさんが怒るからつて、最近はあるまりかけてなかったんだつて」

禁止されていた分、反動として吹き出しまくったのか。

彼は妙に納得した気になった。

なら美味しいだろうと、無理やり自分を思い込ませた。

「いただきます」

だから、理性がそれを疑いだす前に箸を手に取り、まず炒め物をつまんだ。途端に箸先が黒く染まったが、ジャンは気にせず口に運ぶ——と、にんにくの香ばしい香りにズバンと脳みそを殴るような旨味、塩の辛い味付け、こしょうの塩とは違う辛さがうまい具合に合わさつて、絡みつく。

いつもサニ一が出してくれたソレに似ていたが、少し違うスクィドの味付けは、どこか新鮮なようで美味いと感じられた。

ジャンは驚いたような顔で料理を見て、もう一口食べてみる。

おかしいぞ、うまい。

彼はそうしてもう一口ほどを含んでから、茶碗を持ち上げて飯を掻き込んだ。

——そんな様子を見て、スクイドは少しばかり意表を突かれたように動きを止めてから、どういう原理か、自然と頬が上がってくるのを全力で抑えていた。テーブルの下で、ぐっと喜びを表現する握りこぶしを足に押し付けて、大きく息を吐く。

すると、嬉しそうにスクイドを見ていたサニーと目が合った。

「な、なんででしょう？」

「やっぱり、自分で作った料理を美味しいって食べてくれると、うれしいよね？」

「作った甲斐があるとは思いますが、品が無いですね。せっかく作ったのですし、もう少し丁寧に上品に食べてもらいたいものです」

「ふふつ、スクイドさんは頭が良くて物覚えがいいから、私が教えるとすぐ自分の物にしちゃうよね。だからすぐ上達すると思うよ？ 試しに、今夜もお夕飯作ってみる？」

「め、滅相もございません。いくらお褒めの言葉をいただいても、とても一日の食事のメインを張る夕食はダメです。いけません、というか、作った本人はいいのですが、とても人に食べさせるのは……」

「そう？ ジャンに食べさせるために作ったのに？」

「す、スティー爾さんは……放っておくと残飯でも漁り出すほど、飢えた犬っころのような方ですから。家にそんな方がいるのはテポン様方にとっても非常に恥となるので、どうせならと作ってさし上げたまでです」

ふうん、とサニーは彼女らしく無く含んだ相槌を打つ。

スクイドもいつもの強気な態度はすでに忘れ去られてしまって、攻めに攻められて顔を真赤にしていた。ぎょろりとした目は伏し目がちに、それから視線は、サニーからジャンへと移る。

ジャンは彼女の視線を感じて顔を上げた。

——結果として、あの選択は大正解だった。  
全てが美味い。

どちらにせよ、とても豪華と言えない料理だというのに、それぞ  
れを最大限に生かした料理となっていた。だからこそ妙に豪勢に思  
えてきて、食えば喰うほど胃が大きくなる。空腹度は、食事中なの  
に増大していた。

「あの、おかわりお願いできますか？」

「え？ あ、ああ……はい！」

冷たい表情、全てに関心がないような顔はいつしか崩れていた。  
ほのかな、薄い笑みがジャンに向けられる。あの強い眼力は無く、  
優しい視線で彼女は頷き、触手ではなく手で差し出された茶碗を  
受け取った。

彼女はそそくさと台所まで引いていき……食事を進めていたサニ  
ーが、ジャンに微笑んだ。

「美味しい？」

「ああ、すごく美味いぞ」

「あ、私が教えたから、とか言わないんだ？」

「まあな。味付け違うし、手順だけだろ？ サニーには悪いけどさ、  
これはスクイドさんの料理で、この料理は美味い。それだけだ」

「うふふっ、なんだか、ジャンはいい方向に成長したね。前だった  
ら、絶対に私も一緒になんとか褒めようとしてたのに」

「成長、か。そう見えるんなら、おれも頑張った甲斐があったって  
もんだ」

彼は言いながら、いつものように彼女の頭を撫でてやる。

そうすると、顔には表さないものの、ごきげんな様子でスクイド  
が山盛りのご飯を持ってきて――。

まるで家族のようだ、と彼は思う。

家庭というものにコレといった記憶はないし、最も近い集団生活  
は物理的にサイズの小さい中年男性とのソレだった。だから、家族  
というものにピンとは来なかったのだが……もしこれがそうならば、

非常に幸せだと思った。

居るだけで優しい気持ちになれる。癒される。

彼はそうして、また食事を再開させた。

やがて食事も終えて、解散となって自室に戻っていく。

ジャンは既に寝台で眠っているタマに誘われるがままに昼寝と洒落込み、サニーは課題の続きを再開させて――結局その日、スクイードは買ってきてもらった本を開けずに、自室で眺めては、昼の出来事を思い出してニヤニヤとすることしか出来ずにいた。

## 血の嵐 上

その日はいつもより蒸し暑い午後だった。

降雨があつて湿度が高く、服を着ているのも嫌になるような気候に、少年は胸ぐらをパタパタと服をはためかせて新鮮な空気を取り入れる。だが湿った大気には、とても心地の良い清涼感を与える効果を望むことは出来なかった。

そして何よりも――部隊の雰囲気は、この上なく最悪だった。

現在、隣国との関係は最悪なものであり、対立とまではいかぬものの、それぞれどう対処しようかとあぐねている中で――敵国から凶暴な異種族<sup>モンスター</sup>の軍団が放たれた。

それとはまた別の隣国であり、まったくもって対照的に交友関係にあるアレスハイム王国に援助を求めようとの声も上がるが、戦部隊長がそれを却下。まず始めに先遣隊を出し、異種族の軍勢を把握する作戦が執行された。本隊は情報を受け次第、二日行程に無茶を利かせて十分な装備と潤沢な援助のもとで半日で駆け付ける手筈になっていた。

――異種族の進軍は、先遣隊が到着した直後に行われた。

総数十二名は騎士の称号を冠する。魔法を持ち、戦闘能力は極めて高いと国から認められた存在だ。

しかし、一万余りの軍勢は、その進行を足止めするので精一杯だった。

命を削り、命を絶やす戦い。腕が飛ばうが視界が暗転しようが、彼らの決死の戦いは続き――五日あまりが経過した頃。異種族の総員は既に半数以下へと変わり、元より飢えによって駆り立てられていた戦意は恐怖に飲まれて喪失し、やがて散り散りになって野生に帰っていった。

同時に、気がつけば先遣隊の総員は五名になっていた。

戦傷、疲弊、欠損。既に空腹感と麻痺し、肉体の可動を彼らは自

覚できぬまま帰路をにっていた。

「なあ、人の肉って……喰えるらしいぜ」

誰かがそう口にしたのがきっかけだったのかもしれない。

少年は、その直後に共に戦い命を助け合った仲間の、狂気をはらんだ視線が全身を貫く感覚を覚えていた。

——彼はまだ幼かった。

齡、僅か十六にして騎士に就くという異例さは、その先天的に与えられている特異能力である魔法の熟練度もそうだったし、何よりもその年齢にしての才能が、周囲を認めさせていた。

だが、疲弊し息も絶え絶えで歩く彼は、現状況に於いては足手まとい他ならない。体軀は華奢で、少女のよう。加えて戦闘能力は高いが、筋力は成人男性のソレに劣る。

そして何よりも、その若さや人望は、一定以上の年齢で騎士となっている連中には嫉妬の対象となっていた。

そして——彼は、国に見捨てられた、騙されたという精神的ショックによって魔法の発現すらままならない。

ゆえに格好の的だった。

少年に、その後の記憶はない。

気がついた時、彼は見知らぬ土地にいて——莊嚴にも思える外壁に、口を開ける門を眺めながら、利き腕が喪失していた事を理解した後、意識は再び深淵へと転がり落ちていった。

アレスハイムでの怪我の治療や病気の対処は、城からほど近い修道院で行われている。

ジャン・ステイル自身それを知ったのはついこの間の——他国から来た負傷兵の存在を知ったのがきっかけだった。

少年が門の前で倒れていたところを発見し、運び込まれたのはつい二日ほど前の出来事で、旅人が多く賑わうギルドでは今やその話題で持ちきりであり、ジャンもそこで大まかの話を聞くことが出来



た。

隣国、砂漠の境目よりやや内側にある森の中にあるような、自然の豊かさが特徴的な『エルフェーヌ』。そこは、溝の門扉ゲートの向こう側にあるとされる妖精郷エルフヘイムと呼ばれる桃源郷をモデルにして、百年ほど前にその外観を大きく改築した国だった。

あまり多種多様な異人種は移民して来なかったが、それゆえに妖精族ルは国民の三分の一程の多さとなっていた。

エルフェーヌは公国であり、どこかの貴族が遙か昔に建国したというものだった。

軍勢力はアレスハイムよりやや劣る程度だが、純粋な魔術戦闘や、魔術を活用した技術はエルフェーヌに分がある。交友的な関係を保ち、今までで争いが起こったことは無いという話だった。

「だがなあ……異種族モンスターばら撒くって、頭おかしじゃねえか？」

外の国から移住してきた旅人は、この手の、”外”の話に興味津々だ。今までジャンが目の前の、頭にツノがついた帽子を被るドワーフの中年男性と話していたというのに、気がつけばその長机には多くの人間、異人種問わず集まっていた。

「というか、あんなの一万もどこからとっ捕まえて来たんだか……なあ？ 領外の連中は、まったく、頭があがらないぜ」

ご苦労なこった、と小馬鹿にするニュアンスを孕んで軽く笑った。

「つうか、エルフェーヌの隣ってどこなんだ？」

「……お前話を聞いてなかったろ」

誰かが呆れて、誰かが発言者の頭を叩いて、誰かが笑い、誰かが答えた。

「エルフェーヌのやや南西に進んだ位置にある共和制の国、『ブリック』。強固な砦が特徴的で、そもそも砦の中にあるような国だ。街みたいなの、小さい国でもある」

強大な軍勢力があるわけでもない。異人種も、エルフェーヌに比べて酷く少ない割合だ。

ならばなぜそんな二国が争っているのか——その説明はすでにさ

れていた。

それは傲慢な国交の結果だという。

原因はブリックにある、と目の前のドワーフは、その腫らせたような赤鼻をフンと鳴らして言った。

ブリックは数年前に政権交代した。首相となった男は、簡単にいえば己の好き嫌いで政治を執り行うような男だったという。そうして友好的なエルフェーヌはそれでも交友関係を保とうと試行錯誤を繰り返していたが――きっかけはいざ知れず、気がつけば関係は最悪なものとなっていた。

「というかよ、良くあんの砂漠を渡ってきたよな!」

興奮気味に男が言った。

ジャンは付き合いで飲んでいたぶどう酒を口に含みながら、確かに、と頷く。

と、誰かがバカにするように笑い始めた。

「お前、知らねえのか? あそこには”フネ”があるんだぜ? 常識だよ」

「……船?」

ジャンが顔を上げて振り返ると、そう口にした男と目があつた。

彼は頷き、得意げな顔で説明する。

「あの砂漠の熱とか、そういうのを利用して砂の上で船を走らせてんだ。かなり広い砂漠だからな、船がなけりゃとても渡ろうとは思えねえ。その、エルフェーヌの騎士もそうしたんだろうよ」

「ああ、あの船主は、そんじょそらの女より随分とサービスが良からな」

ガハハ、とその台詞を皮切りにするように、程良く酔いが回った周囲の男達は大げさに笑い始めた。

「つたくよ、これじゃあこっちまで巻き込まれて、マイン・アバンにそっぽ向かれちまうよ」

そんな中で、誰かが嘆くように呟く。が、それは豪快な笑いの渦によって瞬く間に飲まれてかき消されていった。

——マイン・アバンとは砂漠をわたらずに東にひたすら歩けば存在する都市だ。巨大な岩石が自然にひび割れ、出来上がった谷部分に人々が住み着いた事がきっかけで、今ではそこで採掘される希少な鉱物や魔石、そして長年で培ってきた加工技術を駆使した武具の製造や加工品などを輸出することで、生活を営んでいた。

この国の装備も大半が輸入品であり、その半分以上がマイン・アバンからの提供だ。もしそれが断たれたとすれば、中々の痛手となるだろう。

そうして、目の前のドワーフはいい加減鬱陶しそうに周りを見渡しながら樽のジョッキを傾けて中のぶどう酒を一気に飲み干した。

席を立ち、視線をジャンに合わせたまま、言い聞かせるような口調で、

「国のいざごさは出来事じゃない。”現象”だ。お前さんは無茶をする気質にあるが、この件にはあまり首を突っ込まないのが得策だな。金にもならないし」

銅貨を数枚ジャンに手渡してから、軽く手を上げて彼はその場を後にした。

ドワーフの男の退室を契機きっかけにするように、集まっていた男達はバラバラと自分が陣取っていた自分の席へと戻っていく。

ジャンもそろそろ出ようかと席を立った所で、この街に来て二ヶ月ほどになる流浪の男は、彼の肩を叩いた。

「この国が平和すぎるんだが……あのおっさんの言う通りだ。騎士サマは国に騙されて仲間に殺されかけて哀れだが、彼の処遇は国が決める。その気はないと思うが、あんまり関わるなよ」

「ええ、分かってますよ。とてもおれの手には負える問題じゃないですし」

「そうか、ならいいんだ。じゃあな」

「はい、おつかれでした」

屋下がりの空はどんよりとした灰色の雲が広がっていて、二、三日前から続く雨が飽きること無く今日も続いていた。

ジャンは雨具に持ってきていた革製の外套を羽織り、頭巾をかぶって外に出る。

——今日聞いた話は、自分とは関係のないことだ。

彼はそう認識していたし、この国に何かが起こるわけでもないし確信していた。

その負傷兵の母国は、ジャンがこれまで育ったコリンの街よりも遥かに遠い場所にある。コリンでさえここから結構な距離があると思っていたのだから、恐らく途方も無い場所なのだろう。

そしてここに来る時点で多くの致命傷を負っていたという話だから、もしかすると国は既に死亡したという扱いをしているかも知れない。

全くもって現実離れた話である。オクトにでも聞かせれば、眼を輝かせて食いついてくること請け合いだ。

だからこそ、ジャンは関わるというわけではないし、釘を刺されたから関わるつもりも毛頭無かったが、もう少し話を聴いてみたくなった。野次馬根性とでも言うのだろうか、良く言えば、外の世界に興味湧いてきたのだ。

以前もラァビに、外の世界を知ったほうがいいと言われたこともあって——ジャンは気がつく、街の正門の前へと足を運んでいた。「ん、どうした？」

門の前で立ち止まると、警ら兵の一人が近づいてくる。槍を構えたまま、甲冑姿で、凄むわけでもなく、単に話しかけるような口調だった。

「ああ、いえ。この間、エルフェーヌの騎士が運ばれてきたとか聞きました」

「その話か……つつても、俺も又聞きだし、その状況しか知らないんだが。それでも聞きたいのか？」

「参考までに」

そうか、と男は嘆息混じりに肩を落とした。

顔の部分がくり抜かれたような兜を被る彼は、顔に降りかかる雨滴を指先で払ってから口を開いた。

「それはソレは、酷い有様だったそうだ。左腕が無いし、身体中傷だらけで、横っ腹には途中からへし折れてる矢が刺さってるわ、糞尿垂れ流しだわ血まみれだわで、綺麗な顔がぐちゃぐちゃでよ。慌てて助けて修道院に運んだんだが、その時点ではもう息がなくなてな。それでどうしようかってトコで、ウチの騎士さまが登場よ」

男はどこか楽しげに、身振り手振りで説明する。あーだこーだと、まるで見てきたかのように嬉々とする姿はどこか不謹慎のような気がしたが、ジャンは構わず相槌を打ちながら話を聞いていた。

「その騎士さま、なんと魔法で見る間見る間に傷を治しちまうわけよ。シスターが慌てて胸に耳を当ててみると、とくん、とくんと心臓まで動いてきやがる。口から血を吹き出して、蘇生完了ときたもんだ」

パン、と手を打って傾奇者かぶきもののようなポーズを取る。

いや、しかし……と、調子に乗り始める警ら兵を他所に、ジャンは考え込んでいた。

——いくら魔法とは言え、死んだ人間を生き返らせることが本当に出来るのか？ いや、できるからこそ魔法たる所以なのかもしれないが……底知れない。

思った以上に、自分は魔法というものを侮っていたことを彼は理解した。

ならば、その魔法を持つ騎士が十人かかっても倒しきれない一万の異種族モンスターの軍勢は、やはり途轍もない脅威なのだろう。そもそも、この周囲の異種族はただでさえ凶暴で戦闘能力が高いと言われているのだ。

だからこそ国と国との間で争いをする隙がないと、彼は学校で習っていた。

「そこでまず目を覚ますまで保護してるみたいだが……もう二日が

経った。続報はないし、生き返りはしたが、眼を覚まさないんじゃないかって話が出てくるくらいだ」

「もし本当にそうだったら、どうなるんでしょうね？」

「ま、最終的にはエルフェーヌに送還するんじゃないか？ 鎧にエルフェーヌ特有の浮彫レリーフがあるから隠せるもんじゃないし……ま、あんたが心配するようなことにはなんねえから、坊主は安心してうちに帰んな。あの獣人の襲来だって、またいつ来るかわかんねーしな」

「そうですね。ありがとうございます」

丁寧に説明してくれた男に深く頭を下げると、気を良くした彼は大きく手を振ってジャンを見送った。

## 血の嵐 中

時間は少しだけ戻って――早朝。

（ぼくは、本当に国に騙されたのか？　なら何故？　むしろ、一万の軍勢を焼き尽くせという命ならば、この命を賭す覚悟くらいは容易なの……）

見知らぬ天井を見つめながら、少年はそう考えていた。

眼を覚ましたのは数分前。周囲を伺えば、殺風景な個室である事以外の情報は得られなかった。

彼が横たわる寝台は窓際に設置されていて、身体を起こそうとすれば全身に鋭い痛みがひた走る。呻く体力さえ無く寝台に沈み、その折に、左腕が失くなったことを思い出した。

（ぼくは、頑張ってきたつもりだった……）

だが捨てられた。任務は半ば成功したも同然なのに、仲間になえ襲われて命からがら逃げてくれば、気がつけば見知らぬ土地だ。恐らく、あの門から、その向こうがわの城を見るかぎりではアレスハムなのだろう。

ここでは生かされている。

ということは、まだエルフェーンから抹殺命令が出ていないというわけだ。そう考えれば、恐らくあの国はこの命が尽きていると信じてやまない筈だ。魔法や戦闘のセンスは高いと自負しているが、体力と筋力は人一倍無いのだから。

思いつが、走馬灯の様によぎる。

苦難の末に騎士になれた。努力が実ったように、多くの人たちが迎えてくれた。嬉しかった。最上の幸福だと思えた。

だが、今はどうだ？

理由さえわからぬ作戦に投入されて、なぜそんな、と思うほどに突発的に放たれた、どこから来たかもどうやって捕縛されていたかもわからぬ一万の異種族に奮闘し、仲間が頭から食われるのを、<sup>モンスター</sup> 囲

まれて全身に牙や爪を突き立てられるのを、口から吐き出された炎に飲まれるのを為す術もなく見ながら、剣を振った。

頑張ったのだ。そのお陰で五人生き残ったし、負傷だって怪我は多いが致命傷はなかった。疲れきっていて、仲間の喪失に国の本意がわからずに精神が不安定だったが、それでも任務達成の充実感はあるにあった。

あとは凱旋して、歓声の中を照れながら歩くだけだったのだ。

彼は思い描いた理想と現実との格差に、思わず目頭が熱くなった。誰かのために悲しんだり、怒ったりすることは出来る。だが、やはり何よりも、自分の不遇や理不尽には流石に堪えた。

瞬きをするたびに視界がぼやけて、やがて目尻から熱い液体が流れ落ちた。

少年は残った手で顔を覆う。

(こんな思いをするなら……)

長い間使用されていなかった口が、癒着してしまったような抵抗を覚えながらゆっくりと開いた。

乾いた唇が動き、水気のない声帯は掠れた声を紡がせた。

「死んでいれば、よかった」

今があまりにも辛すぎる。

いったい何のために生かされたのか。

もはや、喪失感が大きすぎて怒りすら生まれない。仮にこの国が復讐に手を貸してくれると言ったとしても、恐らく首を振ってしまいうそだ。

あんな仕打ちを受けても尚、少年は母国に帰りたいと思っていた。――ガチャリ、と金具が音を立てた。首を横に回すと、扉が開くのが見える。足音を鳴らし、やがてその隙間から姿を表すのは、一人の女性だった。

白い外套を翻し、その下には胸当てと、脚甲を装備する格好。スカートの下から伸びる足には太ももまでの黒い靴下を履いている、鮮やかな姿。透き通るような金髪は陽光にきらめいて、腰に提げる



剣はその柄にまで装飾が丹念になされていた。

彼女は騎士だ。

少年は本能的にそれを悟った。

「生存権はキミに委ねられている。生きるも死ぬも好きにすればいいが——それが望んだものであれ、望まぬものであれ、ここまで保護してやった恩を押し付けるといわけではないが……事情を説明してくれるくらいは、しても良いと思うんだけどね。一応、キミは他国の人間<sup>ヒト</sup>だし」

腰に手をやり胸をそらす彼女は、凜とした風体も相まって、その言葉が鋭利な刃物のように感じられてしまった。

穏やかな口調で、微笑すらある彼女なのにも関わらず、少年の眼には全てが敵に写ってしまっていた。

だから思わず顔をひきつらせる。そうすると、彼女は困ったように微笑んで、頭を掻いた。

「まいったな。怖がらせるつもりなんて、なかったのに」

りん、と鈴がなるような声。だが、芯の通った強さを感じられるそれは、ただそれだけで彼女がかなりの実力者であることを教えた。同じ騎士だというのに、同じヒトだというのにこれほどまで違うのかと——少年は天井に向き直って、眼を閉じた。

「事情って、何を話せば良いんですか。アレほどの戦いだ、知らないわけでもないでしょうに」

流石に一万の軍勢を相手にした戦いは、それを悟られぬように叩かる代物ではない。だから、噂でもなんでも、旅人からでも情報は入ってくる。この国は流通はさほど活発ではないものの、多くの人間、異人種がやってくる土地だ。それを知らぬはずがない。

「まあ、確かに」

彼女は壁に立てかけてある折りたたみの椅子を展開して、寝台の手前に置いた。腰から剣をはずして椅子に持たれかけさせると、そのまま腰を落とす。

ちよつとした動作でも顔にかかる長い金髪を掻き上げながら、だ

がな、と彼女は口にした。

「真偽を確かめずにここで死ぬか、確かめた結果、生存を知られて殺されるか……キミはどちらかを選ばなければならない。生きている限り、ね」

「もしすべてを知った上でまだ生きていたら、この国で保護し続けてくれますか？」

「ああ。しかし、この国で生きていくためには働かなければならない。キミには騎士としての実績があるが……養成学校からやり直してもらうことにする。体の傷が治っても、心の傷は深いだろうからね。なんでも、今年の新入生には期待のルーキーが居るみたいでね、異人種が随分と<sup>ひいき</sup>にしているから、近々会ってみるのもいいかもしれない」

「学校、ですか。ぼくの知らない世界だ」

目をつむったまま想像してみる。聞いたことがある施設名だ。確か、子供が色々なことを学ぶための施設だと記憶している。

わいわいと椅子に座って、教鞭をとる教師を前にして、それぞれ集中して話を聞く姿、集中力が切れて近くの友達にちょっかいを出す姿、居眠りしている姿……色々なそれらが浮かんで、なんだかそれが夢物語のように感じられた。

自分とは違う世界だ。

果たして、これから関わるものがあるのだろうか。

令嬢のように行儀よく、どこか儚げに膝に手を置いて少年を見つめていた騎士は、短く息を吐いて首を振った。

「知らないことをそのままにするのは、ヒトとして死んだも同然さ」  
「ならばくは死んだ。あの時にもう死んだんだ。こんな苦痛しか無い世界ではもう、ぼくという存在は消し飛んだんだ」

「言っただろう、死ぬのは勝手だ。だが事情を話せ、って」

「事情ってなんだよ。ぼくは知らない。何も知ることができない。結局本隊が来なくて、なんとか異種<sup>モンスター</sup>族追ひ払って、飢えて狂った仲間<sup>モンスター</sup>に襲われて……それだけなんだ。国が何をしたかっただとか、ぼ

くが知りたいくらいなんだよ」

ヤケ気味の口調で吐き捨て、彼は首を壁の方へと向ける。

騎士はそれを見て、まるで駄々をこねる子供のようなだと思いがちながらも、決して軽視できぬ背景を思い浮かべてやや複雑な心境になった。

彼はヒトだから同じヒトであり、また接し易いであろう女性が来るべきだと思って立候補したのだが……やはり戦場というものを良く知っている者の方が良かったかも知れない。

彼女、『クレア・ルーモ』は無力げに肩を落として、立ち上がった。

（いや、しかし彼はまだ子供だ。そこを配慮すれば……）

少し強気に出てみよう。

彼女は表情をキツと締めなおしてから、少しだけ緩める。

その中で——窓の向こうにある緑生い茂る木に、一羽の黒い鳥がとまった。

小雨が続く朝の空はどんよりと気分が落ち込むものだったが、まるで追い打ちをかけるように、そのカラスはやってきたのだ。

静かな様子で枝を揺らさず、葉が音を立てずに揺れる中で、そのカラスは窓の中に居る女性を見た。彼女はそれと、確かに目が合ったと認識した。

（……なんだ？）

そしてカラスが首を傾げる。視線はやや下に落ち、寝台へと移った。が、カラスはまだ首を捻る。

どうやら寝台の上の人物を見ようとしているのだが、ちょうど死角になってよく見えないらしい。カラスはばさりと対なる黒い羽を広げると、枝を弾いて窓へと寄ってきた。だがそれはぶつかること無くガラスの手前で停空飛翔。じっと、その鳥は寝台を見つめて——。

「カー」

何かの合図のように、カラスは空を仰いでそう啼いた。

カラスはそのまま勢い良く浮上すると間もなく視界から消え去って――クレアが、その行為を防げずにむぎむぎとカラスを返してしまったことに後悔するのは、それから数分後のことであった。

「ねえジャン、変な予感とか、敏感なほう？」

結局、ジャンはあれから中佐の本屋で適当な歴史小説を購入して帰宅。みんなは居間に集まって団欒している所で誘われ、ソファ―に腰と落として読書に勤しむ最中。

膝で丸くなっていたタマは、顔を上げてそう訊いてきた。

「予感、か。どうだろうな、考えたことも無かったけど……普通じゃないか？」

本から視線を引き剥がして栞を挟んで閉じる。肘置きに小説を置いて片手でタマの頭を撫でながら、

「そう。じゃああたしが、悪い予感がするって言ったら信じてくれる？」

彼女はお手伝いさんを巻き込んで談笑するテポンやサニーらを一瞥してから、じつとジャンを見つめた。彼は、なんだか神秘的な面持ちであることから気軽な質問でないことを悟って、小さく頷いた。

「もちろんだ。おれが一度でも、タマを疑ったことがあるか？」

「思わせぶりなことをして、裏切ったことはあるけどね」

「うっ……」

決して邪な気持ちではなかったのだ。

だが、それを突っ込まれれば少し胸が痛くなる。少なくとも無意識に、そう勘違いさせることをしていた自分に反省しなければならぬのだ。

タマはそれから、ふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向く。

「なら良いのよ」

意図が読めない質問に首をかしげてから、ジャンはサニーらの方をちらりと一瞥してから、その変わらぬ様子を見て、また本を手に

取った。

「おお、すまないが、開けてくれないか？」

同時刻。

警ら兵が鬱々と振り続ける雨に嫌気がさして、革のポシエツトから紙で巻いたタバコを抜き、火をつけて啜えて居ると――気配もなく現れた影があった。

黒い外套を被る影。それは明らかになまでに不審な姿であったが、妙に気安い声に、男はさらに警戒して構えた。

「どこから来た？ 流浪か？」

「おおい、やめてくれよ、物騒だなあ」

槍の穂先は天から男へと向き直る。と、彼は大げさに両手を上げて無害を示した後に、外套を翻すように背中の部分を身体の前面に引っ張り上げた。するとあらわになるのが、金の装飾、妙な、魔術ではない紋様。それがエルフェーヌの国章であることに気づくのに、そう時間は要さなかった。

男はそれから仕方がない、といった風にフードを引き剥がした。

「濡れるのって、あんまり好きじゃないんだけどな」

「ああ、エルフェーヌの。あの幼騎士を引き取りに来たのか？」

「いや、アイツは駄目だ。だって生きて帰れなかったからな。……あのさ、勘違いされたらイヤだから一応説明するんだけど」

「ん……なんの事だ？」

「いや、ウチが無茶な任務に新米騎士を追いやって見捨てたって。今回はブリックのバカが異種族一万とか訳分かんねーことするから公になったけどさ、これはいつものことなんだよ。明らかに成功不能な任務に、新米だけで行かせるってのは」

男は鬱陶しそうに雨に濡れた髪を掻き上げる。黒髪は艶艶しくな  
って、長いまつげは際立つように、その目を大きく見せた。

一見は優男だ。とても、こいつが騎士であるようには思えないだ

ろう。

「これは一応国家機密でもあるんだけどさ……ま、いいよな。オレたちが迷惑かけたようなもんだし！」

落ち込むように肩を落としていた男だが、何かを考え吹っ切れたのか、表情には笑みが戻って諸手を大きく広げるような、大げさな所作が目立ち始めた。

「お、おう」

警ら兵はそんな彼に戸惑ったような返事をする。

男は微笑んだ。

「エルフェーヌは、軍事力がそう高いわけじゃないから、実力主義なんだ。騎士は特にな。だから、新米に命からがらで任務に行かせて、帰って来たやつを正式に採用する。今回は四人だったが、途中で五人だと一人から聞いた。その一人が『ラック・アン』、今回、この国に来たガキだ」

「……そんな事やってたのか。にしても、それだとその新米が人間不信になったりしないのか？」

「ま、今回は新米の量も敵の量も異例だったからな。本来は、全員生還で無事って事が殆どなんだ。一種の儀式みたいなものでさ。今回は少し、期待しすぎたし……やりすぎた。そして血の匂いを垂れ流しながらこんなトコまで来るのも予想外過ぎた」

男は鬱陶しそうに顔の雨滴を拭ってから、大きく息を吸い込んだ。警ら兵は結局のところ、少年がどんな処遇になるのか、そしてこの男が本当は何を言いたいのかわからずに、眉をしかめたままで男を見る。

そうすると、彼は目を伏せて申し訳なさそうに頭を下げてから、少しして、顔を上げた。

「アイツが流した血はこんな雨でも流れずに染み込んでる。ここら一帯の怪物共は人間の血に興奮して、その匂いをたどり始めている」  
彼は指を二本ばかり立ててから、言葉を続けた。

「早くて二時間。奴らは本能を醒まして、ここに来るぞ」

底冷えするような、まるで刃物を喉に突き付けて脅し掛かるような声が、まことしやかに真実として、男の口から語られた。

「だから」

そうして、途絶えることなく続く。

表情はいつしか極まるほどに緊張したもので、だが先程のソレと比べるとどこか気楽に言葉紡いだ。

「匂いの主人を餌に異種族<sup>モンスター</sup>をおびき寄せて、”オレ”で対処する。

あんたらには申し訳ないが、念のためにここの警備を強化しといて欲しいんだ。もちろん、謝礼は弾むつもりだ」

なんでもないように男は言って、だから、と繰り返した。

手招きするような、あるいは駄賃を催促する子供のような手は、「生きてるなら丁度いい。ラックを連れてきてくれ」

まるでそうするのが当然だと言わんばかりに、少年の命を握ろうとしていた。

## 血の嵐 下

「ちょ、っと！ 困りますよ、他の患者さんだって居るんですよ！」  
今にも泣き出してしまいそうな声で、まだ十四、五の少女は修道服に身を包んで、強引に押し入ってきた黒い外套姿の男の胸板を押し返していた。

「悪いな、可愛いお嬢さん。オレは今あんたに構ってやれるヒマないんだ」

蒼い瞳が涙で潤む。少しばかり後ろめたさを覚えながらも、男はそれを見ながらしっかりと修道服が頭まで包まれている彼女の頭を、布越しで軽く撫でながらいなした。

少女には何が起こったのか理解出来ないだろう。素早くなめらかな体さばきに、彼女の抵抗は見る間に打ち崩されて行き、気がつけば男は背後に。前へと押し返す力は虚空に飲まれて――バランスを崩して、額を勢い良く床に打ち付けた。

きゅう、と鳴き声のような声が聞こえた気がした。動く気配がないのを見るに、打ちどころが悪く気絶してしまったのだろう。

「……まあいい、これが終わったらフォローしよう」

「まずフォローはこの現状からにしてくれないか？」

肩をすくめて歩みを進める男へと、背後から声が降りかかった。

されど、驚く様子もなく、むしろこうなって当然待っていたぞ、と言わんばかりの余裕さで踵を返し、外套を翻す。そうすると右手側にはどんよりとした空が見える窓、右手側には個室の病室が並ぶ壁。その通路の、数歩分先の位置に、甲冑姿の男が立っていた。

特別な格好でも何でもない。市販の一式。見る限りでは騎士ではなく、警ら兵のようにもうかがえた。

「不躰なのは後で改めて謝罪する。だが、これはこの国のためでもあるんだ。ここら一帯は、”溝”が近いだけに異種族<sup>モンスター</sup>の強さもひとしおだ。だから、出来るだけ遠くで引きつきたい」



「舐めるなよ、小僧」

しわがれた声は怒気さえも孕んで威嚇した。

立派な顎鬚を蓄える妙齢の大男は、腰に大ぶりのナイフを備えて、威圧するように表情に怒りを伝播する。

「問題が領内に持ち越された時点で、既にこれは我々の問題でもある。既にこちらの騎士は動き出したし、俺たち警ら兵も緊張を高めている。そしてまた、これが悪い問題ばかりとは言えない」

言いながら、にやりと男は不敵な笑みを浮かべた。

不意すぎるそんな不気味な表情に男は思わず身構えたが、落ち着けと言わんばかりに両手を振る所作に、男は一步だけ退いて立ち直る。

「アレスハイムでは、騎士を学校で育てている。二年制の学校でな。その中から将来性の高い生徒をクラスで一名、総数四名連れて寄越す。二年には実際に戦闘に加える予定だ」

「……まだ騎士でもない子供に？」

「そうだ。お前たちが、騎士になって間もない子供にそうしたようにな」

「……ああそうかい。そりゃ助かった……だが、異種族は染み付いた血をたどっている。オレたちが今外に出向いたとして、その全てを対処できるとは限らない。確実にいくつかの漏れを出すはずだ。こればかりはわかってくれ——オレは本気で、被害を出したくないんだ。身内のミスは、せめて身内の力でなんとかしたいんだ」

身体が熱くなる。男はそれを感じていた。

懐かしい感覚だと思う。これほど焦っているのは、一体いつぶりなのだろうか。

恐らく、今から来る異種族は多くて五、六〇〇程度。まず始めに魔術で面で攻撃を行い集団を個別に分けて、各個撃破していけばとても無理とは言えない数だ。むしろ、遠隔から魔術のみでの撃破さえ可能な実力を持ち合わせている。

だが確実に、と言うのなら、やはり直接戦火に身を晒さねばな

らぬだろう。

警ら兵の一軍を纏める男、『エミリオ』はその言葉を受けて、今度は威圧するものではない、むしろ好意を表現するように微笑んだ。「了解した。だが、少年……ラック・アンは今、この国にとって、エルフェーヌからの客人だ」

「……ああ、そういうことか」

わかったよ、と男は大げさに諸手を広げた。

「自国を貶めないように、オレはラック・アンを丁重に扱おう」

「ねえ、ステイルさん。学校の先生がお見えですよ」

「学校……？」

スクイドは来客に対応したかと思うと、そそくさと居間にやってきて、そう告げた。

そんな彼女の台詞に、オクトが笑い、テポンがイタズラに口走った。

「あはっ、成績不良じゃないの？」

なぜかトロスが吹き出した。

彼は飲みかけのオレンジジュースを瞬く間に毒霧に変えてむせこみ、それから涙目になってジャンを見る。

「す、ステイルに限ってそんな……」

「なんでもいいから、早くお出になってください。お客様を待たせています」

「あ、ああスミマセン。今行きます」

読みかけていた本を閉じた所で、栞をはさみ忘れたことに気づく。思わず動きが止まったが、彼は諦めて膝の上のタマを脇にどかしてソファアールから立ち上がり、そそくさと玄関へと向かった。

——そこに待っていたのは、平服姿の戦闘教官だった。

そんな彼に思わず意表を突かれて言葉を失っていると、彼は淡々とした口ぶりで用件を告げた。

「ジャン・スティール。今からちよつとした課外授業だ。剣を持て来い」

「なっ……成績不良、とかじゃないですよね」

もしかしたら、これからみっちりしごかれるのだろうか。外は雨だ。こんな中で戦闘訓練なんてされたら明日には風邪を引いてしまふかも知れない。

身体は強い方というのがちよつとした自慢だが、疲れきった身体にこの蒸し暑さは堪えるし、汗を掻けば冷えるだろう。ちよつと、というかなり遠慮したいのだが――。

教官を除けるように、一人の少年が前に現れた。

「へえ、お前がジャン・スティールか」

鮮やかな自然を彷彿とさせる、深い緑の髪が目立つ少年だ。鋭い目付きはまるで威嚇するようなソレであり、ジャンよりもどこかひ弱に見える体つきは頼りなさげに見えた。腰には三本の棒が並んで備えられており、その中の一本には槍の穂先が付属していた。

「……誰だ、あんた？」

「俺は隣のクラスの『ルーク・アルファ』。お前と同様に、選ばれた一人だ」

「選ばれた？ そりゃまた、いったい何の話だよ」

「知らないのも無理は無いな。俺だって聞いたばかりなんだし。実はな――」

「やかましい！ アルファは口を慎み、スティールは武器を取ってこい！ 五秒以内だ！」

「っ、はいっ！」

無駄口は果たして教官によって遮られ――ジャンは肉体強化の魔術を発現するその直前までに追い詰められながらも、なんとか時間の経過を十秒以内に抑えることができていた。

「しかし、今年は災厄もなく無事に一年を過ごせると思ってたのだ

がな……」

少年は、抵抗する間もなく一方的に事情を聞かされて、今は熟練ベテラン騎士の男の背に乗っていた。

日常を過ごす街は、雨のせいかな少しばかり活気がない。そしてそれに加えてそそくさと忙しく動く警ら兵の姿が、住人に少なからずとも不安を与えているように、少年、ラック・アンは捉えていた。男の傍らで言葉を漏らしたのは、下半身に馬の肉体を持つ女性だった。ケンタウロス族と呼ばれる女性は、この鈍く灰色に塗りたくられている空の下でも鮮やかな黄金色の髪を、頭の少し高い位置で一つに括っている。

馬の身体には薄い下着が着せられていて、周囲を鉄の佩楯はいだてで覆う鎧を着込んだ姿で、女性は一つため息を漏らした。

「だが、私が戻っていて良かった」

「ほう、それは、あなたが仲間を信じていないから？」

男は意地悪な笑顔で訊いてみる。だが同様すら無く、彼女は首を振って、顔も見ずに答えてみせた。

「私は外に出る仕事が多い。他の仲間に、負担ばかりかけているかな。こういった大変な時は助けてやりたいと思っている」

そうこうしている内に、やがて門をくぐって外に出た。

待っていたのは長い白髪の男と、短く刈り込んだ燃えるような赤い髪が特徴な学生だった。二人はわかりやすい制服姿で、それぞれ漆塗りの黒い槍に、装飾も何もないシンプルな刀剣を装備して、外壁に寄りかかっていた。

他には、今回共闘するミノタウロスの騎士であり、彼女はさらにもう一人居るだれかと話していたかと思うと、彼女らに気づいて、ようやく来たかと顔を上げた。

「待ってましたよ。敵の気配は、まだ少し遠いです。そちらの……えっと」

エクレルが男を指して、なんと呼べば良いのかと戸惑って口ごもる。それを察した彼は、満面の笑みで胸に手を当てた。

「ドラゴです。どうぞよろしく」

「あ、はい。そのドラゴさんが言ったよりも、少しばかり進行は遅いようです。烏合の衆ですし、内輪もめもあるのでしょう」

「そうか。まだ一年組も来ていないし、ちょうど良いんじゃないのか？」

「ですね。あと……ほら、自己紹介なさい」

じっとエクレルの影に隠れていた、やや色素の薄い赤髪の下に宝玉のように大きな赤い瞳を持つ少女は、背中を押されて、居心地が悪そうにうつむいた。

彼女はいきり立つサソリの尾を頭頂から生やししながら、ぎこちなく震えながら顔を上げた。

「あ、あ……り、リサ……です」

「……リサ？ ……彼女は？」

突然の紹介に戸惑ってケンタウロスの女性が顔を上げてエクレルに救いを求めると、彼女はどこか嬉しげに笑って、リサの肩を抱いた。

「もう、『ユーリア』さん、忘れちゃったんですか？ 報告した、あの”はぐれ”の子ですよ。いまは学校に通って、だんだんとヒトに慣れてきてます」

「ああ、彼女か。それは何よりだ」

ユーリアと呼ばれたケンタウロスが微笑むと、なぜだかりサは萎縮しきってエクレルの背に隠れてしまった。何か後ろめたい事があるのかと思ったが――そういえば彼女は、街を襲撃しようとしていたのだ。そして確か、騎士はエクレル以外には出会っていないと言っているのだから、それも仕方のない話だ。

そんな事を考えている脇では、ドラゴとラックは会話を交わしていた。

「正直、こんな失態をしたお前は、国では擁護できないぞ。いくら精神的に追い詰められていたとしても……食われそうになったという事実を上げて、あいつらを処分するくらいしか、な」

「ぼ、ぼくは……」

「ま——もしこの事が国に知られてたら、の話だけだな」

「え……？　ちょ、ドラゴさん、どういう事ですか？」

「今、国ではお前は行方不明扱いになってるし、捜索を任されたのはオレ一人。んで、国を出てからまだ一度も戻ってない。わかるか？　わざわざオレの友達<sup>カラス</sup>まで使って探したんだ。国に戻ったら感謝してくれよ？」

「あ、ありがとうございます！」

背中に力一杯抱きついて、少年は涙目になる顔をそのまま背中に埋めた。

彼は困ったように肩をすくめると、そこでようやくユーリアの視線に気がついた。

「な、なんですかその目」

視線は微笑ましく見つめるソレではなく、どこか訝しむようなものだった。

だからそんな視線に思わず気後れして、ドラゴは動揺を隠せずに口にする。と、彼女は肩を落とすように嘆息して、声を低く元氣のない口調で告げた。

「アレスハイム側が彼を擁護しなければ、有無をいわず処分するつもりだったのだろう？」

「……はっ、はは。じゃ、邪推がすぎますねえ」

「嘘のつけない男だ」

ユーリアはわざとらしく肩をすくめた。

「はあ……だが、その少年がエルフェーンで騎士として復帰できる可能性は？」

「余裕でありますよ」

男は言いながら、指を重ねてバツ印を作った。一応、背中に居るラックに配慮した表現だろう。

「なら良かった」

なるほどな、と思いながら、感情も何もない風に言葉を返す。

彼が騎士に復帰できない理由……それはエルフェーヌ自体が彼の治療や心の治癒を待ち切れないからだろうし、そもそも片腕がないから戦闘はできないと決めつけて判断しているからなのだろう。国が少し遠いだけで随分と変わる考え方だが、それも仕方がないものだった。

だが、このアレスハイムならどうだ？

彼女は考える。

異人種をまず受け入れて、さらに女性も騎士の大半という事態となっているこの国で、ある程度の成績を納めればたとえ片腕だけだとしても、この少年は立派に騎士を冠することが出来るのではないか？

少し大臣と相談をして――今回の謝礼として、彼を保護することはできないだろうか。

彼女はまたラックを一瞥すると、

「待たせたな」

半袖半ズボンという格好の中年男性が、二人の少年を引き連れてやってきた。

「こっちの目付きが悪いのがアルファ。こっちの要領のよさそうなのがステイールだ」

「どうも」

「よ、よろしくお願いします」

――今回は見学という位置につく、養成学校の一年組が軽く会釈し、あるいは深く頭を下げて挨拶をした。

その場に居る全員はそれぞれ適当にそれに返して、やがて二年組もその集まりへと寄ってくる。

「レイ、克蘭、そっちも準備はいいか？」

いよいよか、という面持ちでユーリアが訊く。

白髪の男が、そして赤髪の男がそれぞれ頷いた。

リサはジャンの隣に移動して、戦闘教官がさらに脇につき――ユーリア、エクレル、ドラゴ、レイ、克蘭に背負われるラックを加

えた六名は、ただ簡単に顔を合わせた直後に、言葉も無く進行し、その場を辞した。

「ま、気楽にしてろ」

教官が、事も無げに言った。

一応の説明を聞いていたジャンだが、混乱したままの展開には正直追いつけない。自分が関係してしまったようできて、まったくもって部外者の扱いをされている事もあるのかもしれないが。

しかし動き出してしまったこの流れは――恐らく今年最大の波乱になる……ような気がした。

草原に挟まれた、どこにでもあるような平坦な道。

数百メートルほど前方に、異種族モンスターの群れが見えた。

もはや血の匂いを辿ると言うよりは、血の匂いをきっかけにして街の方向を知り、ついでに人間を食べてしまおうと画策して突撃してくるような、迷いのない特攻の姿だった。

まずユーリアが先頭についた。両脇にはエクレル、ドラゴが待機する。背後に控えるレイとクランは、既に武器を構えて指示を待っていた。

――圧倒的な存在感。

だが畏怖はない。怖くない。どこか、呆気なささえ感じられた。ユーリアは久しぶりの乱闘に短く嘆息してから、槍を構える。

「私がど真ん中に一発入れる。エクレルとレイ、ドラゴとクランで左右に分かれて各個撃破だ」

それぞれが緊張を顔に出す。表情を引きつらせて、脇で為す術もなく震えているラックはこんな心境だったのかとにわかな共感を覚え始める頃、気後れした声は、ドラゴから上がった。

「ちよっと、一応侮れない集団なんですけど？ 作戦とかないんすか？」

「……貴様は何を言っているんだ？」



彼の言葉に、ほとほと呆れた、とユーリアが一睨み。彼は思わず背筋を凍らせるようにしながら、松葉杖で辛うじて立っていられるラックを一瞥した。無意識の救いを求める視線だったが、彼は既に異種族に釘付けで、見えていないようだった。

「作戦とは弱者に残された最後の望み。相手をいかに騙しに術中に嵌めるか、力がなくとも圧倒的な強者に勝利する唯一の可能性を持つ手段だ。だが我々はどうだろうか？ 相手は、圧倒的な力で、畏怖すべき存在か？」

「……なるほど」

「一時間とせずに終わる。安心して戦え……行くぞ」

槍の穂先を天に向けた形から、やや横に傾ける。そうして柄を握る手に、彼女はもう片手を静かに重ねた。

——彼女の肉体から、形容し得ぬ激しい威圧が溢れ出す。それがいわゆる”魔力”だという事を、彼らは理解していた。

紋様は輝かない。

つまり、彼女が今出そうとしているものは、魔法だった。

ユーリアは後ろ足で大地を蹴り続け、その馬蹄が音を鳴らす。今にも駆け出しそうな、そのための勢いづけるような動作に、言葉はなくとも周囲は少しだけ彼女から距離を取った。

敵は既に百メートル圏内に入り込んでいる。

動きの少ない、されど威圧の高まるユーリアに、誰もが集中し、緊張し、不安を抱く——が。

次の瞬間だった。

何の予兆もなく、光の粒子がどこからともなく現れて彼女の肉体に張り付き包んだと思うと、全身は眩く輝き、ユーリアは穂先を前方に向けた。

「行くぞ……ッ！」

大地を弾き、いよいよ彼女は走りだす。馬の加速は見る間に進んで一気に集団との距離を縮めて、馬から生える人の部分は、ブレること無く低姿勢で槍を構えていた。

「発現めよ——雷撃疾走ッ！」

肉体から輝きが放出した。全身から火花が火花が乱れ飛び、輝きと共に暴風が排出された。

眼前の異種族の陣形がにわかに崩れ、進行が止まる。

それが彼女の覇気のせいかな、暴風や輝きに驚異したのかは定かではない。

だが少なくとも——その隙が、決定的なまでの命取りだった。

彼女の速度はさらに加速する。それは既に視認どころか、馬蹄の音すらもまともに聴き取ることさえ不可能な速度だった。

電撃疾走——その名の通りに、彼女の肉体は電光と相成った。

加速する肉体。加熱する大気。構えた槍は、その速度に、衝撃の伝播に早くも悲鳴を上げていた。

やがて先頭の獣の腹に切先が触れた。

その瞬間に穿たれた腹部は間もなく焼き尽くされて穴を開けて——集団内に電撃が走る。それは複雑な経路よろしく余すことなく全体に、頭部を鈍器で殴られたような鋭い、脳髓を揺さぶるようなより直接的で効果的な衝撃を与えていた。

圧巻だった。

敵の土手っ腹に食いついたユーリアは自身に触れた異種族をその伝導熱で焼き尽くし、近づいた者を電撃で焼き尽くし、そして既に柄に致命的なまでのヒビを入れた槍に触れた者を刮り抜いた。ソレはやがて消し炭となり、焼け焦げた大地へと崩れてゆく。

そんな特攻の中でも、息を飲むような槍捌きは失われない。

薙ぎ払う一閃で数個体を腹から切断し、決り貫いて連なる三体を絶命させ、振り下ろす一撃はもはやその槍は大剣なのかと錯覚するほどの衝撃を以て、切断と形容するよりもはや爆撃、その個体、集団の四散を目的とした攻撃手段だった。

流れた鮮血が沸騰し、蒸発する。されどただの熱湯となるそれらもあって、周囲には鮮血が霧にもならず、ユーリアの勢いに伴って凄まじい暴風雨のように吹き荒れていた。

——彼女が集団から抜ける頃。

五〇〇からなる軍団は既に二〇〇近くを喪失しており、電撃の後遺症によってその他は皆動きを鈍くしていた。逃げることもままならず、呆然とする四名は、それからとはって指示された通りに、両断されたそれぞれへと駆け出していく。

失速したユーリアは同時に全身からの電気も失って、疾走から歩行へと変わる。酷い倦怠感を覚えながらも少しだけ目をつむり、深呼吸を繰り返す。

そうして最後に彼女が大きく息を吐いてから振り返ると——悲鳴や断末魔をあげながら地面に崩れていく異種族の姿が多かった。

飛び散る火花。魔術の輝き。巻き上がる血の嵐。

見る間に敵の数は減っていき、

「はあっ！」

ドラゴの一閃。

それを最後に、ついに集団の全ては呆気無く、手応えも見せずに殲滅された。

その頃になるとユーリアの体力はすっかり回復していて、対照的に四名は、緊張故か随分と疲れきったような顔で跪いていた。

「さすがユーリア殿。トップアタッカー特攻隊長の实力は未だ衰えぬ……か。現特攻隊長のシイナに劣らぬとは、正直驚いた」

軍務大臣は正直に感服した、と息を吐いた。

円卓にただ一人座る彼に、ユーリアは謙虚に首を振る。

「いえ、仲間が居たので。残党の危惧をする必要がなかったのです、余すことなく全力を出せたお陰です」

「特攻隊長の实力とはそれこそなのだが……まあいい。これ以上褒めても、貴殿はまず答えを聞きたいだろう」

「……申し訳ございません」

「かまわんよ」

男はカップの紅茶を一口含んで、味わうように飲み下す。

――あの戦闘から二〇時間が経過した。

怪我人はゼロ。ドラゴはその日の内に手配した馬に乗ってラックと共に帰って行き、また周囲の被害も大地の”焦げ”を除けば問題はなかった。

「エルフェーヌ国王から、即日で返答が来た」

「……その内容は？」

「申し訳ないことをした。貴国の要望はもちろん、公道の修繕や謝礼は後日遣いの者と共に寄越す……といったものだ」

「そうですか。関係の者が無事なら良いのですが……」

「あの国王に限ってそれは無いだろう。どちらにせよ、我々には関係のないことだ。他国の内情に関わりすぎても良いことはない」

「それはもちろん、重々承知しています」

「だろうな。貴殿のお陰で異人種の偏見はここら一帯からは薄れてきているし、その手腕から国交も安定している。そろそろ、騎士から離れて本格的な外交官として働いてもらいたいのだが……」

男はそういつて、また紅茶を口に含んだ。

だが、それまでと同じように、彼女はその言葉に対しては断固と首を振った。

「私には、最近楽しみが出来ました」

女性としての可愛らしさも無い口調だったが、それは凜とした声で紡がれた。彼女の声から穏やかささえ感じられたのは、長らく彼女と関わってきた大臣も久しぶりと感じるほどのものだった。

「私はある少年の人生を変えてしまった。強くなれとは言ったものの、来てほしくはない道に来てしまったのです。だけど不思議なことに、私はその男を待ちたいと思っている。どの世界でも、どの職業でも、ここに来てしまったからには、いずれ肩を並べたいと……そう考えているんです」

再開した時の少年は、あの時と変わらず真っ直ぐだった。身体も大きくなり男らしくなっていた。無茶を承知で、弱者の立場だとい

うのに作戦もなく特攻していたのには目も当てられなかったが――下手に小狡くなっているよりは良いと思えた。

学校では上手くやっているらしい。なんでも、ヒトより異人種の友人が多いというのはいかがと思ったが……なんだか、それに嬉しくなったのは、彼女の中では秘密だった。

「ならもしその少年が、外交官になるのならば？」

「……そうですね。大臣の手を煩わせるのも申し訳ないですし、私が教育しましょう」

「なるほど。なら、その少年の名前を伺ってもよろしいか？ 当分の間、貴殿程の逸材は、正直失いたくないからな」

「ええ……その少年は――」

ジャン・スティールは結局のところ、自分がなぜあそこに呼ばれたのかが理解しきれずに居た。

アレから夜を迎え、帰宅し、眠り。そして目が覚めた今でも疑問を抱く。

確かに遠目からでも凄まじい迫力や雷光は理解できたが、詳細な戦闘が見えるわけでもなかった。たった一匹の漏れも無く、門の前で待機するばかりで、何かの勉強になったわけではない。

「なあタマ」

「ん？ どしたの」

「……頭痛い」

腹の上で丸くなっていた彼女に声をかけると、微睡んで居たのにも関わらずやけに機嫌がよさそうに返してくれる。疑問に思っ頭をあげようと思うが、妙なまでに関節が痛く、その気になれなかった。

「ああ、どうりでジャンの身体が温かいと思った。熱があるでしょ」  
腹から胸元をたどって、口元に前足を置いてまたぐように額に肉球をやる。

「やっぱりね」

彼女は軽く笑った。

「バカでも風邪ってひくんだ」

結局——あのケンタウロスの騎士にも声をかけられなかった。

忘れられてしまっているのだろうか。

彼女のお陰で今の自分がいる。彼女が居なかったら、恐らくは今もあの鉱山で働いているだろう。

何も進展せず、妙に筋力をつけながら生活が続き、成長し、老いる。何のためにあの中で救出されたのか、その意味も意義も見いだせぬまま死に至る。

そんな生活を繰り返す事を回避出来たのは、一概にやはり彼女のお陰だ。

一度くらいは礼が言いたい。だがここまで来たら、むしろ騎士になってから会ったほうが良いのではないか、とさえ思える。

つばを飲む。

気管に入った。

「ごほっ、おえっ、えほっ、おほっ」

「うわ、きたなっ!」

「うう……タマ、悪いが誰か呼んできて……」

「じゃあ金貨一枚ね」

ジャンは無言で手を伸ばし、タマをどかす。と、彼女は腕の中で大きく暴れてから、何故だか怒気混じりに額を叩いた。

「もう、冗談よ。でも今度、何か奢ってね」

「ああ……元気が出たらな」

「まったく、一番何もしてないジャンが風邪をひくなんて。帰って来た人たち、誰も怪我してなかったわよ?」

「ぶくしゅっ!」

どこことなく心配げな様子で見つめてくる彼女に、勢い良くツバと鼻水を撒き散らす。

ジャンは我慢できずにくしゃみをしてから彼女の鋭い爪を覚悟し

たが——予想した惨劇は来ずに、強くつむった目を開ける。すると、そこにはわなわなと震えているタマの姿があった。

「一瞬だけ殺意を覚えたわ」

「すまん」

「もう、お風呂入ってくる！」

彼女は寝台から飛び降りるとそのまま人型に変身して——。

オクトが眠そうな目をこすりながら葉を持ってやってきたのは、それから五分と経たずの事だった。

——窓の外はまばゆいばかりの陽の光が差し込んでいて、久しぶりの青空を眺めながら、ジャンはその日一日は寝台の上で過ごすこととなった。

## 帰郷

夏休みも、残り数日にまで迫り始めた頃。

八月二五日はサニー・ベルガモットの誕生日であった。彼女はその日を決して忘れること無く楽しみにして居ながらも、それを決して悟られぬこと無く、その日を翌日に控えた昼下がりも、素知らぬ顔で自身のベッドに座ってジャンと他愛もない雑談をしていた。

明日は友人らと海に行く予定だ。ただ遊ぶただけにそこまで遠出するのは初めてだったし、同年代の友人とそういったことをするのも初めてだったからこの上なく楽しみにしていたのだが――。

「サニー、明日はコロンの街に行こう。たまには帰って来いって、ヴェンさんから手紙が来たからさ」

事もなげにジャン・スタイルはそう告げる。

そんな彼に、サニーは思わず言葉を失った。

「え……あれ、だって明日は……」

「ん？ 何か用事でもあったのか？」

「明日はレイミイとかアオちゃんと、クロちゃんとで海に行こうって。ジャンも一緒に行こうって誘ったのに……」

「あー、そうだったな……。どうする？」

「んー、もう、ジャンも早く言ってくれば良かったんだけど」

サニーは困ったなあと眉をしかめながらも、嬉しげな笑顔を作ってぴょんと寝台から飛び降りた。

隣のジャンは諸手を広げるようにして、

「どうするんだ？」

「みんなに言ってくる。行き先を変更したいんだけど、って」

正直なところを言えば、みんなと遊んだその翌日に行くことも出来たのだ。

「サニーの故郷ね。すっごい楽しみよ」



にこにこ笑顔でレイミイが告げる。尻尾の先をパタパタと振るのを見ながら、アオイは微笑んでそれに同意していた。

「確かに。私たちはこの街か、比較的近くの街出身ですが……コロンは森の向こうですものね。遠足より、ずっと遠くですし」

しかし思ったよりも、彼女らは随分と喜んだ上に、海に行くよりも強く賛同してくれた。

ジャンは再三、異種族<sup>モンスター</sup>が出て危険なものになると言って聞かせたのだが、結局各々はおざなりの武器を装備して集まっていた。

クロはいつもどおり閉口しているが、何も言わずもしんがり而努力してくれるという頼もしさを持っている。ジャンが知るかぎりでは、この集団の中では一番の実力者だからいちいち注意をする必要もないだろう。

トロスとテポンも誘ってみたのだが――さすが姉弟。二人揃って課題を終えていないという現実を目の当たりにして、四苦八苦していた。

それ故に彼らはその五人組で南の正門までやってきたのだが……。

「すいません、門を開けてもらいたいですけど」

「あー、悪いけどダメなんだ」

甲冑姿の男はジャンの要望を聞くなり、指でバツ印を作って顔をしかめた。

「どうしてです？」

首を傾げるジャンに、警ら兵は肩をすくめる。

「この間の戦闘があったろう？ あれからどうにも異種族<sup>モンスター</sup>どもが興奮しているらしくてな。ギルドの任務<sup>しごと</sup>か、俺より上からの許可がないと開けられないんだ」

「そうですか……」

口を固く結んで、困ったようにジャンは振り返る。すると、他の四人も同様に顔をあわせていた。

まさかこんな所でつまづくとは思わなかった。たしかに、最近は警戒の頻度がやや多いかな、と感じていたし、仕事で外に出るとき

も何も言われなかったから疑問にさえ感じなかったが、一般人にしてみれば確かに危険なものだろう。

溝よりやや遠い場所ならば、命からがらでも逃げきる可能性はあるが、溝に近ければ近いほどに異種族の戦闘レベルは高くなる。だからこそエルフェーンヌでは実力重視だし、この国では学校を設立<sup>つく</sup>って素人でも戦える教育を行なっているのだ。

いくらジャンが自力でコロシからアレクサハイムまで来たとはいえ、学校での教育がなければそれまでと同様に苦戦を強いられていただろう。自分の、自分なりの戦い方というもののさえも知らずに非効率的な戦い方をしていた筈だ。

「どうしようか」

どうにもできない問題でもある。

国がそう決めた時点で抜け穴はないし、ここでそれを破る程のリスクを踏む価値はない。

ただ最もここを抜けられる可能性の高い手段を用いるのならば、わざわざギルドに仕事を申請して受諾されるのを待つ事だが――それでもいつまで掛かるかわからない。

ならば出なおすのが一番だ。

目配せをすると、サニーは困ったように笑って、小さく頷いた。

「しょうがないよ」

「あら――何がしょうがないのかな？」

徐々に背景から近づいていた姿は、やがて後ろから無防備なサニーを抱くようにして現れた。

長く白い耳をぴよこぴよこと跳ねさせながら、彼女は若干沈む雰囲気にそぐわぬ笑顔をジャンに向ける。

「ああ、ラアビさん」

「今日はタマちゃんは一緒じゃないのね？」

残念、と彼女は軽くウィンクをしてみせた。

レイミィらは不意の闖入者に、加えて見知らぬ人物であることに目を白黒させながらジャンに視線で紹介を要求する。ジャンは頷き、

彼女に手を指した。

「ええ、まあ。紹介します。いま抱いてるのはサニーで、そっちら順にレイミー、アオイ、クロコです」

「わお、両手に華ってやつ？ 例のクラスメイトでお友達ね？」

言いながら振り向けば、それぞれが緊張したような面持ちで頭を下げる。

「サニーです、いつも兄がお世話になってます」

「レイミーです。よろしく」

「あ、アオイです。よろしくお願いします」

「クロコだ。よろしく頼む」

そんな各々に微笑みかけながら、一周回って彼女はサニーを離してジャンの肩に手をかけ、くるりと回る。

胸に手を当て、自分を示した。

「どうもラアビです。一応、ギルドでは彼の相棒パディやらせてもらってます」

口を開けば酒の臭気が鼻を突く。そしてよく見れば、手には酒瓶が握られたままであるのがうかがえた。

また酒を飲んでいたのだ。というか、彼女が酒を服用していない場面を見たことがない。

ジャンは呆れたように嘆息しながら、それでどうしたの？ と首を傾げる彼女に簡単に言った。

「ここから出られないんです」

「あら。それじゃあ今からあたしと部隊パーティを組まない？ ちょうど近くの村までお届け物があるし」

彼女は否応無しでジャンを横切り、そのまま大股で片手を外套の外側へと回す。そうしてポケットに突っ込んでそのまま一枚の紙を引き抜き、やがて警ら兵の前に突き出した。それは任務が委託された証書である。

「それじゃ、そういうことでいいでしょう？」

男は苦笑を漏らしながら、

「そうだな。構わないよ」

一応それで門を開けられる。彼はそう軽く笑ってから、カラクリ仕掛けの門をボタン一つで開けてみせた。

ラアビは出てから程なくしてある分かれ道で別離した。

もともと戦力に入れてなかったから異種族と対峙した場合を考え  
ていなかったが、簡単な助言を元に隊列を構成し、そして出来るな  
らば倒しきらずに逃げるのが一番だとも言われたことを胸に刻んで  
いた。

敵を倒しても一銭にもならないし、毛皮や肉を剥いで持ち帰った  
としても、毛皮はともかく肉は悪くなってしまう。そして解体の技  
術がなければ毛皮も上手く剥げないし、そもそも荷物を多くするの  
は得策ではない。

仕事でない限りあまり遭遇したくない連中だよ、と以前愚痴って  
いたことをジャンは思い出した。

——異種族モンスターはその本能的に備える高い戦闘能力に加えて、圧倒的  
な量にその強みを持っている。倒しても倒してもまるで消耗品を補  
充するように増えるし、ヒトが手を加えていない場所では常に集団  
で行動する。単体で出会えれば、それがまず幸運であると言えるだ  
ろう。

だから厄介だし、昔は殲滅を軍が掲げていたらしいが、いまでは  
その”せ”の字も聞かない。そんな事に尽力するならば、死傷者を  
少しでも減らすために軍事力を高めようと言うものに成り代わって  
いた。

そしてそれを元にして創られたのが、騎士という部隊だ。魔法を  
持ち、実力の高い精鋭部隊。それを量産することで、今はそれらに  
対処している。

「ねえ、ジャン？」

「ん、どうしたんだ？」

隊列はやや崩れて横に広がっているが、ジャンとクロコに三人が挟まれていることに変わりはない。

「レイミイが、お昼ごろにはつくの？　って」

「ああ」

ジャンが振り返ると、レイミイは疑問そうに頭をやや傾けた。

「どうなの？」

「そうだな……大体半日くらいだった気がするが」

「ならお弁当持ってきてよかった」

「ですね。早く着いたら、勿体無くなっちゃいますもんね」

背負った荷物に視線をやって、アオイが微笑む。

そうだな、とジャンも同意して——それから暫く歩いて異種族の気配も無く、森を抜けた見通しの良い平原で、昼食の提案をした。

具材が豊富なサンドイッチ。おかずが多様なおにぎり。それらは、意外にも緊張していたお陰か、それとも久しぶりの遠出だから随分と空腹していたお陰で、ものの数十分で平らげられてしまった。

出発は短い食休みの後だったが、腹ごなしの運動はその直後に強制参加させられる羽目となる。

「まったく——幸先が悪い」

ジャンが悪態をつくように腰から剣を抜く。同時にクロコは構え、レイミイとアオイは即座にクロコの近くへと退避した。

彼らが待機した場所より十数歩分手前に、狼の群れが現れたのだ。しかしそれは単なる狼ではなく、より凶暴でより獰猛でより凶悪な異種族のそれだった。

総数五体。

より一般的に確認される平均的な群れの数だった。

「グルルル……」

唸り声が耳に届く。

サニ―は弦を弓に張り、手早く弓を使用できる状態に構成した。背負う矢筒から三本の矢を引き抜き、その内の一本だけを構え、力

一杯弦を引く。

狼は彼らの姿を認知し、左右に散りながら、その中の一匹が正面か大地を駆る。迫る。肉薄する。

ジャンは軽くサニーの頭に手を乗せながら、短い深呼吸を促した。「狙いはそのまま。おれがこのまま走りだすから、思い切り横に跳んだ”瞬間”に放せ。クロコは左を頼む！」

「了解」

ジャンは簡単にそう告げて走りだす。クロコの返事が聞こえたのは、早くも彼女らから数歩分遠ざかってからのことだった。

――走りだしてから距離が縮まるまで、そう時間がかかるわけではない。

時間にして僅か数秒といったものだ。だから、ジャンは目の前の狼へと走りだしたその直後に、右方向へと力一杯大地を弾いて回避した。狼は大口を開けて牙を向き、強い酸性の唾液をまき散らしながら襲いかかった。が、その口は虚空を噛み砕き、勢い余って前方へと体勢を崩した着地をする。

その頃になるとややずれたタイミングで穿たれた矢が飛来し、間髪おかずに狼の眉間に突き刺さった。サニーは構え、さらに発射。発射。発射。ひるんだ狼へと、総数五本を叩きこむ。四肢に、右前足の付け根にある心臓へのダメ押しは、果たして効果的だった。断末魔を挙げることまもなく、狼は唾液を粘り気の強い鮮血に変えて大地に沈む。

生体反応は、完全に失せていた。

よくやったと、ジャンは魔術反応に刀身を輝かせ唸らせながら、胸の中で褒め称えた。

随分と成長したものだと思う。

先ほどの狼同様に頭を丸呑みできそうなほどに大きく口を開ける狼の、その口の中に切先を突っ込んで切り上げる。すると高速振動する刃や骨の抵抗などまるで無いものとするように完全に無視し、手応えなく切断。背半ばまで飲み込まれた刃は、そのまま肉を裂い

て骨を断ち、毛皮を引きちぎりながら大気にその身を晒した。

「以前は、あんなに怖がってたのになあ……」

鮮血が辺りに撒き散らされる。それでも構わず畏怖せず本能のまに、背後に回りこんだ狼は高く跳んで首筋へと飛び込んだ。

ジャンは振り上げた剣をそのまま頭上に突き上げ、姿勢をやや崩してそのまま背後へと倒れこむ。剣戟は半円を描き、間もなくその血に濡れた刀身は超振動しながら迫る狼の頭頂部に叩きこまれた。

まるで溶けたバターのように頭部は肉の焦げた匂いを振りまきながら真つ二つに両断されて、頭が縦に別れて崩れる。内容物は、狼がジャンの脇の地面に倒れたのとほぼ同時に零れ落ちた。

「やれやれ、おれも少しは強くなったかな……？」

振動する剣を振り払って血糊を飛ばす。それから魔術を止めれば、手には振動の痺れがやや残るのが良くわかった。

狼の毛皮で血を拭き取ってから鞘へと剣を収める。

振り返れば、同様にクロコも戦闘を終えたばかりらしかった。

辺りは血の臭気が一層濃い。このままでは、この匂いに興奮した異種族がさらに寄ってくることだろう。足の遅いそれならまだいいが、今回のような狼などならばややキツイ。

ジャンは短く嘆息をして、

「助かった、クロコ」

「構わん。それより……」

「ああ、そうだな。少し急ごう、あと二、三時間で到着する行程だから少し無茶が利く」

ジャンの平然とした冷静な指示に各々は頷き、歩みを進める彼の後についていった。

## 帰郷？

結局その後も幾度か戦闘を交えて、街に到着したのは三時間後の事だった。

そう多くはなく敵の数も少ない戦いだったが、初めてであったり慣れていなかったりしていた彼女らだから、それだけでも随分と疲弊してしまっただけらしい。わかりやすい疲れた顔をして、街についた途端にわざとらしく肩を落としていた。

——コロンの街は、アレスハイム領内ではほぼ中心近くにある。それ故に、観光と言うよりは通過点として、補給所として多くの人間が立ち寄り栄えているし、近くの鉾山から採取される魔石や鉾物の加工品が主な名産品として販売されている。

街の造りは一般的なもので、大きな通りの両脇に宿や武具店、道具屋、土産屋を始めとして様々な商店が並び、山に寄り添うように創られたこの街の奥まった場所は鉾山となっていた。

ジャン・ステイルとサニー・ベルガモットが世話になっていた鉾山はそこであり、今回はその経営者である一人のドワーフの手紙をきっかけに帰郷したことになる。

まだ昼下がりという時刻。西の空には未だ赤みさえ見えず、青々とした快晴の空が広がっていた。

「さて、まだ日は高いし、見物でもしてみるか？ おれはこれから、ちよつと知り合いの所に行くんだけど……」

「うん。じゃあ私がみんなを案内しようか？」

ジャンの提案に、サニーが躍り出る。

うん、と頷きながら彼は少女の頭を撫でて、

「それじゃ頼んだぞ」

その場はそのまま、一時お開きとなった。

まず始めに立ち寄ったのは、二年間だけだったが生活を支援し学



校にまで通わせてくれた保護施設だった。つまり、簡単にいえばわゆる孤児院である。

資金面の援助や入学手続きは全てユーリア……あのケンタウロスの女騎士が行なってくれたのだが、それでも育ててくれたのはこの施設だ。まずは学校に顔を出してみようと考えたが、特にこれといって良い思い出もなかった場所であることを思い出し、首を振った。

結果、気がつけばここに来ていたのだ。

小さな鉄門。その向こうにある小さな広場には、幼い子供たちが元気に走り回っていたり、ボールを投げ合ったりなど楽しげに遊んでいる姿が見えた。

一階建ての、長屋のような建造物は白い塗料で清潔に塗られていて、清潔感が溢れている。どうやら最近、改装した様子が見えた。

——男の子が一人、ジャンに気づいて建物内に引っ込んでいく。ややあって、袖を引っ張って職員を一人連れてやってきて、鉄門の前で佇むジャンを指さした。促されるように、妙齢と言うよりは歳をとっているし、最後に見た時よりも老けてしまっているようだが、それでも随分と若く見える女性は顔を上げた。

既に四〇代近いというのにシワひとつ無い顔に、鮮やかな桜色の長い髪は一つに括られて右肩に垂らされている。

彼女はジャンを見るなり驚いたように目を見開いて口元を抑え、それからおっとりと、危なげな足取りで門の近くまで駆け寄ってきた。

「あらあ、ジャンくんじゃない……！ すっごく、久しぶりねえ。もう、幾つになるんだっけ？ 街を出てから、結構経ったようにも感じるけれど、まだ、一年も経ってないのよねえ？」

垂れ下がった目尻に、薄く開かれた目。やや丸めの顔には愛嬌があって、高い鼻が特徴的だ。

琥珀色の宝石のような瞳をくりくりさせて、遥かに歳上であるのにも関わらず小動物のような雰囲気を感じ、彼女は指先で毛先を巻いた。

「ええ、お久しぶりです”クリスティン”先生。おれはもう十八になりますよ。というか、この街を出るときに挨拶に伺ったじゃないですか」

錆びた音を立てて門が開く。まるで無防備な様子で、彼女はエプロンで身体をタイトに絞めつけた出立ちで出迎えた。柔らかで、背丈はそう変わらないが小さく見える華奢さだ。

いかにも大人の女性という彼女から、やはり保護者という観念を拭えずにいた。

しなやかな指をからませて手を組み、クリスティンは微笑んだ。

「ええ、そうだったわねえ。どうせなら、お仕事中也たまには、遊びに来てくれればよかったのになって、思ってたけど。でもこうして遊びに来てくれると、嬉しいものねえ」

「ははっ、そう言われるとおれも嬉しいですよ。適当な土産しか買って無いんですが……」

肩から背負っていたバッグから包装された箱を取り出す。ずっしりとした重さが腕に伝わり、その分、肩からの重量が失せた。内容量を重視した、王道な土産物である。どこ産でどうか言うものを一切を無視したチョコレートだが、ここら一帯ではチョコレートの原材料であるカカオは採れず、その多くは輸入頼りだ。故に、そのぶん値段は高くつく。

「みんなで食べてください。お茶にあうかはわからないんですけど」  
「あらあら、まあまあ。嬉しいわねえ、いい男にもなったし、気遣いもできるし」

うふふ、と笑いながら彼女は手を伸ばす。その手は暖かに優しく頭を包み込むように撫でてみせた。

彼女の熱が頭髮越しに伝わる。その暖かさが、直に心を温めて、穏やかにしてくれるようだった。

――母は居ない。

しかし居たとするならば、こんな気持ちになるのだろうか。

「さあ、それじゃあ一緒に上がってお茶にしましょう？　ちようど、

あの子たちもお昼寝の時間だし……」

「ああ、すみません。これから他に行くところがあるので……もしよろしければ、その後でも良いでしょうか？」

「行く所？ あ、ドワーフさんたちの所かしら？」

「はい。多分、今日は泊まることになると思うので」

「それじゃあ、まず始めに私の所に寄ってくれたのね？ 嬉しいわあ、ほら、いつもみたいにギュッとしてあげるわ」

両手を大きく広げて、彼女は抱擁するような仕草を見せる。ジャンはそれに思わず紅潮し、顔が熱くなるのを自覚したが、それを抑えこんで一步踏み込む。

自分の腕を脇から後ろに回して、小さな背を軽く抱く。それと同時に、彼女の手もジャンの広い背中に回された。

吐息が耳にかかり、彼女のやや熱っぽい体温が衣服越しに良く伝わった。その女性特有の柔らかさも、まるで代わりなく感じる事が出来たのだが、正直に喜べず複雑に彼は微笑んだ。

「サニーちゃんとは仲良くやってるの？」

出迎えの抱擁から一歩離れて、彼女は訊いた。

「ええ。今日も一緒に来たんですよ。ここに居た時より、ずっと楽しそうにやっています。友達も出来たし、一緒に遊んでくれて、おれも一安心ですよ。サニーは頭もいいし可愛いから、多分これから大丈夫だと思いますよ。おれの用事が終わった後で、その友達も一緒に連れてきます」

「うふふ、楽しそうだなにより。私たちも変わらず元気よ。また来てね？」

「はい。明日にでもまた」

「絶対よ？ なんだか、嫌な予感がするから、念を押すのだけれど……」

「嫌な予感、ですか？」

「うん。だけれど、ごめんなさい。あまり、気にしないほうが良いかもしれないわ。ほら、いつも、私の勘ってあてにならないじゃない

い？」

言って、彼女は指を立てる。それはひとつ、というわけではなく単に空を指しているものだった。

確かに、とジャンは頷いた。

彼女が雨が降りそうだと無根拠で告げる時は確実に晴天になる。

逆に、晴れそうだという時は降雨があるわけではなく、どんよりとした曇り空だ。そういった事をはじめとして、彼女が口にする直感めいた言葉には一切の信ぴょう性がない。それはほとんど、彼女を知るものならば周知の事実と言えるだろう。

「それじゃ、頭の隅にでも置いときますよ」

「あら、ありがたいわ。ジャンくんは、いつでも私に付き合ってくれるものね。小さい頃から。立派だと思ってるわ」

「ま、それがおれの処世術みたいなものですし。それじゃ」

「ええ、行つてらっしゃい。今回だけじゃなくて、たまにでもいいから、また帰ってきてくれるとうれしいわ」

「はい。休みのたびに帰つてこようと思つていますよ」

軽く手を上げて、それにクリスが手を振り返すのを確認してから踵を返し、街の奥へと足を向ける。

それから当分の間背後の音に注意していたが――結局、鉄門が錆びた音を立てるものが聞こえることはなかった。

暫く歩くと、寂れた木造二階建ての宿舎が見えた。

さすが手先が器用であるように、最近なされたであろう目張りが目立たずに、されどその真新しい綺麗な板をしっかりと隙間に叩きこんでいた。

「変わらないな、ここは」

目の前には木々もない断崖。その麓には大きな穴が開いていて、そこからはレールが吐き出されていた。トロッコはいくつか止まっ  
ていて、そして適当な所で山になる石炭は無造作に鎮座していた。

トロッコが稼働していないということは、もう仕事を終えている

ということだ。そもそも鋤夫の仕事は朝っぱらから昼下がりまでだから、それも当然だろう。夜遅くまでやる必要は、今はないのだ。

「おや、やあやあ！ まさか、いや、奇遇だな！」

そんな風に、妙に感慨深く辺りを見渡していると、宿舎から一人の男が出てくるなり、彼の存在に気がついて大きく手を振った。格好は旅人然とした、そう清潔そうではない布の衣服に外套姿だった。そしてその傍らには、どこぞの令嬢かと見紛う少女。透き通るような柔らかな黄金の髪をそのままにして、色素の薄い肌に強い日差しが突き刺さる。腰までの長い髪をそよかぜに流しながら、薄く開かれる瞳は珠玉ルビーのように紅く、美しい。

まるで人形か何かのような美貌だが――事実、彼女はある意味で人形であった。

「まったくよ、偶然にもほどがあるぜ。今、帰ってきたのか？ 学校は休みで？」

――この男は、ジャンの背中に魔方陣を刻んだ武器商の男だ。魔術を齧っていると言っていたが、そのレベルはとても齧っている程度のそれではない。立派に魔術師を名乗ることが出来るものだ。

そして彼は、この大陸ではない世界から来ている。異人種が文明にそう大きく影響をもたらしていない、西の大陸だ。あの古本屋の”中佐殿”が居た国がある大陸である。

「お久しぶりです、ウィルソンさん。ええ、ちょうど夏休みなんですが……あと少しで終わりなんですよ。今日はちよつとヴェンさんに呼ばれてきました」

《――例の騎士学校にはご入学出来たのですか？》

胸に、『自分を励ます一〇〇の言葉』という自己啓発本を抱いた女性は、自然な人の声にやや機械的なノイズを混じらせた声音で訊く。

ジャンは頷き、照れくさそうに頭を掻いた。

「はい、お陰様で。順調でやっていけてますよ」

『ウィルソン・ウェイバー』はとある商業組合に属す一人の商人

である。その中でも特に武器を扱う者を武器商人と呼んでいて、それを託されるということはつまり、ある一定以上の信頼と戦闘面での実力を認められているということだ。

そして彼女、『タスク』はその商業組合で創られた人型移動式の倉庫である。

科学技術、そして魔術を組み合わせた特殊仕様によって擬似脳と呼ばれる、独立して人間のように思考するものを創りだした。もともと、完全なオリジナルというわけにはいかず、その思考や発言、行動理念は開発者あるいは開発者がモデルとした人間に偏っている。人工的な筋肉。人工的な瞳、神経。その多くは魔術を頼りに構成されており――その腹部にはなんでも”亜空間”だとか”異空間”に繋がる魔方陣が刻まれているらしい。

武器を主として、あらゆる販売道具やらなにやらはそこに収まっ  
ていて、販売する際にはそれを展開。虚空に虚像を浮かび上がらせ  
て表示するという。

彼女ら移動式倉庫は一般に人造人間などと呼ばれているが、武器  
倉庫としての名称は主として人型移動用武器収納倉庫というものにな  
っていた。

技術の粋だ。

到底、ジャンの住む世界とは大きく異なっているし、途方もなく  
高い位置に居る。

《――ともかく主人がどうこう言った所で、この嘆かわしい経済状  
況が覆るはずもないのですが》

「や、やかましいんだよ！　少し黙っとれ！」

《やれやれ、世界は悪意に満ちてますね》

「俺は個人的に思うんだが、その思想もある悪意の一つだと思わな  
いか？」

《そんな事を言える余裕の一つでもあれば、早く武器の一つでも売  
って資金をこさえてもらえませんか？　餓死したいのなら構いませ  
んが》

「くそ、観光人さえ居れば……！」

冷徹そうに無表情で言葉を投げるタスクに対し、心底嘆くようにウィルソンが頭を抱えた。

話を聞く限りでは、どうやら資金の工面に苦勞しているらしい。

彼らは、この一帯ならば異種族<sup>モンスター</sup>にも手間取るし、武器も必要になるだろうとやってきたのだろう。以前もそう話していたのを思い出す。

だがこの街には、既にそういった店が存在する。しかも、彼らが販売する魔術仕様の武器ではないものの、一般人が自衛のために用意するならば上等なそれらが格安で販売されているのだ。わざわざ高価なそれらを、持て余すとわかっていながら購入する物好きが居る筈もなく。

故に彼らは頭を抱える現状に至っていた。

「ああ、ならウェイバーさん？」

なら貢献ついでに、何かを買おう。彼はそう考えた。

「ん、どうした？」

「ペンダントか何かあります？ 今日、ちょうどサニーの誕生日でたぶんヴェンさんも、そのお誕生日会のために呼んだみたいなんですよ。一応適当なものを用意していますが――」

《……アナタは愚かしいですね、ステイール様》

やれやれと頭を抱えてタスクは首を振った。

その所作に合わせるように、ひざ下まであるフリルのついた黒いスカートはゆらりと揺れて、胸を張れば人形だというのに柔らかなバストが衣服に押されてやや形を崩すのが見えた。

彼女は、よく聴け、と言わんばかりに指をさす。

ジャンは、彼女のそんな姿に思わず息を飲んだ。

《女の子に”適当なもの”？ 何を言っているんです、妹と形容してもおかしくはない幼なじみに、それでよろしいのですか？ ただでさえ好意的で、あんな可愛い子なのに？ 正気ですか？》

「う……いや、それは……」

《ただの他者アプログラムの思考にここまで言われて、悔しくはないのですか？

アナタはここまで言われて、どうしたのです？》

彼女は言いながら、胸を締め付ける仕様の、衣服の胸元、その紐をほどこき始めた。ゴシック調の衣服は西の文明のものであり、こちらの大陸ではやや着るのも難しく面倒そうな造りだったが――彼女はいとも簡単に胸元をあらわにして、バストの大事な部分にだけ衣服を重ね、その輪郭を見せびらかした。

ついで現れたのが、水月付近に刻まれた魔方陣であり、

《これを、これが……》

おもむろに、その魔方陣へと腕を突き刺す。すると肉は裂けず皮膚は破けず、だというのに腕は体内へと飲まれていった。

《欲しいのではないですか？》

そして、なんでもないように慣れた様子で腕を引きぬく。

そうすると、それまで何も持っていなかった手には、ジャラジャラと鎖のついたハート型のペンダントが握られていた。

彼女ははしたない姿のままですそれをジャンへと突き出した。

《アナタの気持ちを読み取り、相応しいものを与えましょう》

ジャンは促されるままに手を出せば、その上にペンダントは音を立てて落ちて、乗る。

次に手を差し出したのは、タスクの方だった。

《金貨二枚で手を打ちましょう》

彼女はこの上なく上等な営業スマイルで、ぼったくりレベルの価格を交渉する間もなく要求した。

「えげつねえ」

それがウイルソン・ウェイバーの感想だった。

《いいのですよ。結局、主人マスタもこのあとステイル様の背中の魔方陣を調整するのでしょうか？ その手間賃も取っておきました。まったく、愚直……いえ、バカなご主人を持つと倉庫は苦勞します》

「言い直す必要ねえだろ……まあいい。街に出るぞ。倭国帰りで、



この文化をもう少し見て回りたい気分だ」

《結局、目的のものは手に入りませんでしたけどね》

「まあ、な。黄金の国と呼ばれるくらいだから期待したが……ま、神話時代のシロモノだ。俺たちが二本も所有してる事が奇跡なんだよ」

《しかし我々は単なる武器商人。ただ特殊な技術を用いているだけに過ぎません》

「そうなんだよなあ、ただの商業組合ギルドの一人ですったって、権力がなさすぎる」

《……いいですね、素敵ですね、騎士って響きは。ああ、わたしの騎士様はいつお迎えに来るのでしょうか》

胸元の紐を通して結び直して、それからわざとらしいため息を吐いた。彼女はじつとりと悪意を孕む視線でウィルソンを舐め回し、そしてあからさまに肩を落とす。

《甲斐性のない主人マスタを持つと苦労します。まだステイル様のほうがからかい甲斐もあって、可愛いのですのに》

「やっかましい！ さっさと行くぞ、日が暮れたら店が閉まっちゃう」

《はいはい》

ぽんぽん、と拗ねるウィルソンの頭を軽く叩いてやりながら、二人は宿舎へと向かうジャンに背を向けて、そのまま街へと歩みを進めていった。

## 帰郷？

「ただいま戻りました」

室内は、やはり寮母のがんばりのお陰で清潔が保たれていたが、少しばかりの喧噪故にその様子を明確に認識することは出来なかった。

入ってすぐは、一般的な酒場のような空間が広がっている。円卓に長机。その奥には寝室やらが並ぶ通路とを隔てる扉があつて、右手側の壁には台所に繋がる扉。

扉を開けるなり、慎ましく酒を煽る十数人の鉋夫が一様に振り向いた。

「……誰だお前」

まず開口一番がそれだった。

一番手前の、一番若いドワーフの青年が神妙な顔つきでそう告げた。

ヒトが、既に五〇近くの中年男性と寮母くらいしか居ないこの空間は既に凍りついたように静まり返って――ジャンは迷わず、バッグから土産物を机に投げた。今度はチョコではなく、酒のつまみになる牛の干し肉の袋詰めを幾つか。

すると打って変わったように表情を明るくして、男は立ち上がって勢い良くジャンを抱きしめた。

「良く帰ってきたなあ！ おめつとさん、無事でなによりだ！」

もはや慣れたとも言えるが、しかしラアビとは違う男臭さの混じった酒気に懐かしすら感じた。

ジャンは抱擁の後、男と強い握手をかわしてから、あたりを見渡す。するとみな同様に立ち上がり、ジャンの帰郷を我が子の帰郷のように喜び破顔し、タイミング良く寮母が持ってきた酒瓶を掲げてグラスに注ぎ始めていた。

中身は蒸留酒だ。ジャンの苦手な種類の酒だが、彼らはそれを知

ついても構わず木で出来たジョッキにそれをいっぱい注いで、押し付けてきた。

暫くして、酒が皆の手に回る。随分と手馴れた速さに改めて驚愕しながらも、また少し呆れて、だけど相変わらざる様子に思わず笑みが零れた。

「それじゃー、ジャンの帰宅を祝して……かんぱーいッ！」

「カンパーイ！」

こいつらはただ何かを理由にして酒が飲みたいだけなのだ。いつも酒をあおっているクセに、何かイベントがあれば興奮ゆえに酔いが早いからとわざとそうする。

ジャンは変わらない連中を見ながら、各々が一気に酒を飲み干す姿を眺め、ジョッキを口につける。途端にクセの強い香りが鼻腔に突き刺さり、ジャンは勢いで一口含む。すると辛い以外の味を覚えることが出来ず、彼はそのまま飲み下した。

「ふう……」

マズイとまでは言えないが、あまり進んだものではない。

ジャンは飲みかけのジョッキを近くの机に置くと、不意に背後に迫った強い気配に気がついた。

「ジャン、良く帰ったね。まさか、こんなに早く帰ってくるとは思わなかったよ」

振り返れば、恰幅の良い女性がそこにいた。長い髪を三つ編みにしてまとめ、頭には三角巾をつける彼女は寮母としてこの宿舎を切り盛りしている、無くてはならない存在だった。

差し出された手に手を返し、力強い握手を交わす。

早くも懐かしく感じる姿にジャンは素直に笑んで、頷いた。

「ええ、飛んできました。それに、今日はただの日じゃないですしね」

「ああ、なんだ。良かったよ忘れられて無くて」

豪気に笑って、彼女は力一杯ジャンの肩を叩いた。彼は強い衝撃に思わず顔をしかめながら、抵抗することなくそれを受ける。

彼女は続けた。

「安心しな。ケーキも用意したし、今夜は豪勢だ。来れたらクリスも来るっていったし、あの胡散臭い武器商の二人も参加するらしいし」

「そりゃ良かったです。あと、友達を三人ほど連れてきたんですけど……」

「んな心配は要らないって。こんな野郎どもでも腹や口を抑えてもまだ有り余るくらいの量は用意してるんだから」

「ははっ、なら安心しました」

「――おい、ジャン！ ババアなんかと話してねえで、こっち来い！」

「こらアンタ！ お前は明日の弁当ナシ大決定ね！」

「はっは！ そりゃひでえ！」

既に酔いが頭の芯にまで回ってしまっているのだろう。そんな事を言われても男は手で顔を隠すようにして、大きく笑った。まるで知性の”ち”の字もうかがえない空間だ。脳の要領を、ほんの僅かでも使っていないだろう。本能で生きている連中だ。

懐かしい。

喧噪を肌に纏って、ジャンは自ら飛び込むようにその中へと入り込んでいった。

結局その騒ぎがある程度落ち着くと、いつものように親しい者同士で円卓を囲む形となっていた。

特に誰と誰が仲が悪い、ということはないが、言うなれば特に相性がいい者同士だ。

ジャンが座ったのは、経営者であるドワーフ族のヴェンと呼ばれる八〇過ぎの男の席であり、そこには中年男性のヒトが一人に、手持ち無沙汰になった寮母が腰をかけていた。

しかしドワーフ族の平均的な寿命は二〇〇歳近く。だから見た目もまだ若いし、ヒトにしてみればここに居る中年男性よりもまだ若

い風貌を持っていた。

加えて、そこには最初に話をかけた青年が眠りこけるように、机に突っ伏していびきをかいている。

「ははは、いつもみてえにうるせえだろ。やっぱ、育ちのいい学校に慣れてからここに来ると、さ？」

口ひげを生やした、作業服姿の男。彼は倭国から流れてきた技術者だったが、いつからか居着いて今では立派な作業員となっていた。「いや、まあそうですね。でもやっぱり懐かしいっていうか、ここは良いです。落ち着きます」

「そう言われると嬉しいねえ」

「ははは、確かに。お前さんの故郷はここだからな。いつでも帰ってきてくれてもいい」

「ええ。そう何度も帰っては来れませんが、長期休暇があればまた来ますよ」

「ああ、それがいい」

二人のヒトはそう言いながら酒をあおる。

そうすると、寡黙だったヴェンが酒の手を止めてついに口を開いた。

「にしてもなア」

長らく聞いていなかった声が聞こえて、ジャンはそちらに顔を向ける。

立派な顎鬚を蓄えたヴェンは、図太い腕を魅せつける下着姿のままで、一口分だけ残っているジョッキを口に運んだ。

ごくりと飲み干し、寮母に次を催促すると、円卓に何本も置いてある内の一本の瓶を投げられた。

彼はそれを受け取り、蓋を捻り、ジョッキに注ぐ。

まるで一仕事終えたように嘆息してから、ヴェンは鋭い目付きでジャンを見た。

「まさかお前程度の実力で試験をスルーできるとは思わなんだ」

「まあ、おれが入学できるくらいだから皆さんも余裕でしょう。な

んたって、おれに戦い方を教えてくれたのは皆さんなんだし」

——ドワーフ族は一般的には戦闘が得意な種族ではない。ただ手先が器用で、魔法を持つ者は少ないがその特殊な加工技術故に無数の特殊な道具を創り出す能力に秀でているだけなのだ。

その気になれば、文明的にやや遅れ気味のこの大陸でも随一の技術を見せる事ができるが……彼らはそれをしない。理由は簡単に、そうする必要がないからだ。つまり現状で満足しているから要らない、といった所だ。

しかし、ジャンはそんな彼らから戦い方を学んだ。

もっとも、主な訓練方法は組手であり、その多くは倭国人の『イワヤ』か、ヴェンだったし、イワヤはその無駄のない修練されたまさに”サムライ”といった動きで苦戦を強いられ、ヴェンはその無茶苦茶な機動に馬鹿力によるゴリ押しで一度は死にかけた。

今生きていられるのは、養成学校に入学できたのはそのお陰とも言えるのだが、外に出て、あらゆるモノを体感してみて、知る。そして思った。

ジャンは彼らの、そのあまりの実力の高さを理解して、そのケタ違いの強さを再認識させられて、まだ彼らを相手に勝利することは難しいだろうな、と考えていた。

「ま、俺が直々に鍛えてやったんだから問題はなかろうかと考えては居たがな」

ヴェンはふふんと誇らしげに鼻を鳴らして、蒸留酒を一気にあおる。

それから寮母に麦酒を催促する。どうやら円卓の上には出てないらしく、彼女は面倒そうに肩をすくめてから席を立つ。

酒を待つ間に、ジャンが腰に下げている、己が与えた剣を指さした。

「んで、そいつの具合はどうだ？」

「ああ、すごく良いですよ。最近は何んだかんだで振動剣モードがバイブ一番使いやすいですが、地属性も風属性も、まんべんなく扱えるし。

使いこなせているかといえば、閉口ものですけどね」

「お前は性格的に力任せってのは似合わんのだが……まあ、魔術ナシの接近戦タイプなのは代わりがないな」

「……？ 力任せじゃないのに、接近戦タイプなんですか？」

「そう。正確に言えば、相手の力を利用して、あるいは隙を誘ったリするのが得意そうってんだ。違うか？」

「……そう、ですかね」

先ほどの狼との戦闘。そして思い出される、夏休み前のトロスとの実施試験。ギルドの初仕事ではそのまま力任せだったような気がするが、アレは魔術のお陰であり殆ど戦闘技術は不要だった。

戦闘をするという事自体あまりないから実感は無いが、その傾向にあるのは否定できないだろう。

ヴェンは台所から投げられたラベルが貼ってある麦酒のガラス瓶を軽々受け取り、指先だけでその金属製蓋をはじき飛ばした。

途端に飲み口から泡が溢れて溢れかけ、それを楽しそうに見ながら蒸留酒の香りが残るジョッキへと注ぎはじめた。

「でもまだ成長過程だからな。経験を積みば積むほど、そういった面が顕著になるだろうが——ま、お前は結局、騎士にやなれねえだろうが」

「はは、久しぶりに言われ——」

「冗談で言ってるわけじゃあないぞ？」

言葉を遮り、食い下がるようにヴェンは言った。

真顔で。真剣な眼差しで、ジャンを見据えながら。

だからジャンは戸惑ったし、なぜそんな事を行ってくるのかわからなかった。

当惑する少年に、ヴェンは一つ、と指を立てた。

「お前には色々なことを教えたし、このあまりにも厳しすぎる世の中を確実に生き抜くための力も与えた。だが騎士になるというには、お前にはある一つの才能が無かったんだな、コレが」

「じよ、状況判断能力……ですか」

「違う」

きっぱりと彼は切り捨てた。

「魔法だ」

そして、ためらいもなく、まるでそもそも周知の事を改めて伝えるように彼は言った。

「な……何を言っているんです。おれはちゃんと、あの白い魔石に魔力が反応して、ですね。それで受かったんですが――」

「――そりゃあ反応するわな」

ヴェンとは違う声が、脇から乱入した。

背後から掛かる声に振り返れば、そこには席に着いたばかりらしいウィルソンの姿があった。隣にはもれなくタスクの存在がある。

そうしてウィルソンは、ジャンが反応するよりも早く指を鳴らし、タスクに手を差し出す。すると、先ほどと同様に胸元から一つの石を取り出した。白く濁る魔石であり、それは魔力の伝達が限りなく高い種類の――入試試験で渡されたソレだった。

彼はそれをジャンに見せびらかすように掲げ、一つの文句を垂れる。

「魔術と魔法は、同じ魔力を根源にして行われるのが難点だな。そう考えれば、お前が受けた試験はとんでもねエザルだったって事がわかる」

魔法を持つ人間は、体内から魔力を生み出す能力を持つ。それは遺伝的なものでは無く、仮に親が魔法を持っていたとしても子が持たぬことがあるし、その逆もある。

魔術は体外にある魔力を利用して発現する。

それが魔法と魔術の、まず一つ目の大きな違いだった。

ならば特殊な施術によって、体内から魔力が感知されればそれは魔法が扱える事になった――そういう判断をしても良いのかといえば、違う。後天的な覚醒<sup>めざ</sup>めは本来無いとされるからこそ、魔法は魔法たらしめているのであり、そして施術によって行われる”魔法”は決して”魔術”の域を出ることが出来ない。



「ど、どうということなんですか？」

「まあ、まずは服を脱げ。簡単に説明してやる」

「俺のした施術は、つまり肉体に魔力を流して、常時発動を待機状態バイにしておく副作用がある。もつとも、そうしとかなないと魔方陣を発動させた際に、肉体に慣れない魔力介入が激痛を与えるし、発動も随分遅くなっちまうからな」

半裸になって座るジャンの背中を、ウィルソンは撫でながらそう説明した。

引き締まった身体。効率的についた筋肉。その背は広く、頼もしくさえ感じられた。

少年と言うには立派すぎる肉体だ。これから実戦を幾度となくかわしていく中で、彼がどう成長するのか――彼自身が本来目的とする、商業的なものではない己個人の欲望とは別に、純粋に興味があった。

彼は性格的に好敵手ライバルというモノを今後多く作っていくかも知れないが、あるいは一人もできないかも知れない。その代わりに出来るのは頼りになる友人あるいは、師だ。

人には、特に強くあろうという人間には良い師が重要になる。

この環境ではあまり望めなかったからこそ、ウィルソンは興味をひいた彼に少しばかりの手助けといった風に手を出したが、それが吉と出たか凶と出たか、学校に入学した今、それを推し量ることはできない。

ウィルソンは背中に強く念じて、己の右掌に刻んだ魔方陣を発動させる。ジャン同様に肉体内でくすぶる魔力が燃えて、陣が陣たる役割を果たさせてくれる。

「少し、我慢しろ」

掌が光熱を孕む。眩く輝き、その手はまるで太陽を掴んでいるのではないかと、炎を宿しているのではないかと錯覚するほどの熱を帯びた。

「ぐうつ?! な、何を――っ!?!」

輝きが灼熱を放ち、肉を焼き肌を焦がす。するとジャンの背中に刻まれた魔方陣の一部がソレに飲まれ、魔方陣は一瞬にして”出来損ない”へと姿を変えた。

ウィルソンが手を離し、即座に氷嚢を準備していたタスクがそれを布で包み、患部に優しく押し当てる。

「な、何を、したんですか……?」

怯えたような声色で、背中越しにウィルソンを眺める。それと共に、体内から呼気と共に何かが抜けていくのを感じていた。体力が減ったわけではなく、それはまるで筋力トレーニングの直後のように、身体に力が入らなくなっていくようだった。

全身から力が抜ける。身体は不拔けたように体勢を維持できず、ジャンは思わず円卓に寄りかかった。

「お前の魔方陣を破壊した。こいつは刻まれてる限り半永久的に魔術を作動させる一方で、一部でも破損すれば使い物にならなくなるっつー、脆弱な存在でな。一部を肉体ごと焼ききった。安心しろ、

怪我也治すし、魔方陣もお前にあわせて適度に強化しておいてやる」

「そ、それで、その目的は?」

「お前の肉体から力が抜けた。そういった自覚はあるか?」

言われてから、手を目の前に挙げれば無意識に震えてしまう疲労感と、全身にべったりとまとわりついた気持ちの悪い不安、無力感を認識する。

ジャンが声もなく頷くと、

「それはお前の身体から魔力が抜けた証拠だ。本来、肉体に潜む魔力が魔術の作動と共に爆発的に増幅されて肉体を強化するんだ。体内にあるだけで、発動時よりは程度も低いが、そういった影響は及ぼされている」

つまり、身体から魔力が失せた時点で、それが本来のジャンの身体能力となったわけである。

もったも、その疲労感はやけどのせいもあるし、魔力を体内から

排出するという事象に体力を随分と要した事が原因になる。それは自然な現象なので、それを抑えることはできないから、初めてであれば戸惑うのも仕方がない。

「……つまり」

ごくり、とジャンはツバを飲む。

喉が鳴った。

「今、その魔石を持てば……本当に魔法を持っているか、否かが、分かるんですね……？」

「ああ、その通りだ」

ウィルソンはタスクに魔石を手渡し、彼女は口を閉ざしたまま、ジャンの前にやってきた。

《——どうぞ、お取りください》

掌を上に向け、魔石はその上に鎮座する。一方的に渡すのではなく、手に取る、否、の選択肢を彼女は与えていた。

ここで取らずに、拒否して逃げることも出来る。腰抜けだと罵倒されても、まだ自分の中には魔法が存在するかも知れないと信じる事が出来る。それが僅かであろうとも。

しかし、意を決して取って、そこで真実を見て、これからの生き方を変えることも出来る。どのみち魔法を自覚し扱えるようになっていことが卒業の条件だ。魔方阵ではその存在を露呈してしまうし、隠し通して騎士になることはできない。

仮にその試験を合格して騎士になったとして、そんなインチキな存在で騎士になれて、自分が心から喜べるはずもない。常に自分で魂に刻んだその卑怯チートの烙印を抱きながら、ビクビクして生きていくことになる。

それでいいのか？

満足できるのならば——おれは、この魔石を手にとらない。

手をこまねく中でも、ウィルソンは、タスクは、ヴェンは、イワヤはそれを促さないし、煽らなかった。

鼓動が高鳴る。

頬が、紅く熱を持つのを自覚した。

「お、おれは……」

思わずタスクを見上げた。

誰かに背中を押して欲しい。この石を掴む、真実を見る勇気を、少しでもいいから分けて欲しい——無意識にそう考えた刹那に、ラァビの言葉が蘇った。

甘ったれるなど、彼女は言った。

きっかけは自分で作るものだとも。

その言葉で、ジャンは己の精神的な脆弱を垣間見た。認識した。理解した。納得した。自覚した。

——そうだ。おれは、もう自分で決めるんだ。

「頼む……！」

手を伸ばす。腕は情けなく、小刻みに震えていたが——それでも力強く、彼女の掌にある魔石を力強く掴み上げた。

## 帰郷？

「サニー、お誕生日おめでとう！」

それから数時間。観光から戻ってきたサニーらを迎えたのは、ホールに掲げられた横断幕に描かれたそんな歓迎だった。

円卓、長机には無数の料理が並ぶ。西洋、東洋、中華。種類は多様に、そして豪華絢爛に。ホールの中央に配置された円卓には、三段はあろうかという巨大なケーキがそびえ立っていた。チョコレートで出来たプレートには、ホワイトチョコレートソースで”ハッピーバースデー”と描かれて、ケーキ本体にはイチゴのソースでニコニコマークが彼女を迎えていた。

盛大な歓迎。鉦夫共の酒臭い「おめでとう」「おかえり」の嵐に困惑していたサニーは、暫くあっけに取られていたが、その全てが自身に向けられた好意だという事を理解して、思わず涙腺を崩壊させた。

クロコの胸に抱きつくようにして泣き、それから改めて始まる誕生会。

レイミイは興味津々に料理に足を運び、アオイはいつプレゼント披露会が行われるのか辺りをうかがいながらソワソワとあたりに目を配る。クロコはサニーと共にケーキを食べて――。

「やっぱり、大人ね？」

壁際で、ヴェンが強引に手渡してきた料理が山盛りになる皿を片付けていると、ふとクリスティンが簡単なドレス姿でやってきた。主役をとらない慎ましい、水色のワンピースドレスは、年甲斐もなく膝から下の生足を披露させていた。

「ええ、サニーも昔よりずっと大人っぽくなりましたよ」

ジャンは変わらず微笑んだまま、そう言った。

するとクリスは指を振り、違うわよ、と少し不平そうに否定する。「キミよ、ジャンくん。だってアナタ、すごくうれしそうな顔して

る。サニーちゃんのこと、自分のことみたいに嬉しいんでしょ？」

「ええ、妹がこんなに歓迎されてると嬉しいですよ。これまでがキツかった分、サニーには幸せになってほしいもんです」

「でも、サニーちゃんが年上になっちゃったわね。ジャンくんは兄じゃなくて、弟くんだわね？」

「はは、そこ言われると痛いですね。でもまあ、サニーが慕ってくれる限り、おれはどうあれ兄で居るつもりです」

照れくさそうに頭を掻くと、クリスは笑みを絶やさぬまま、じつとジャンを見つめる。

その視線に気づいたジャンは思わずどきりと胸を高鳴らせたが、それでも平常心を保って、疑問を呈した。

「なんです？」

「いやあ……わたしも、もうちょつと若ければっていう、ね。ちょっと本気でそう、思っちゃったかも」

「クリスさんは随分若いですよ。見た目なんて、まだ二十代前半もいいとこなじゃないですか」

「それじゃあ、もしわたしがジャンくんに迫ったら、いいの？ 責任取れるの？ 三八のおばさんなのにな？」

「おれはまだ未熟だし、自分のことで手一杯だから断言はできませんが……クリスさんなら誰だって大丈夫ですよ」

「うわー、なにげにスルーされたー」

子供っぽくそう嘆きながら頭を振って髪を振り乱し、喧噪の中に飛び込んでいった。

よくわからない言動にジャンは軽く肩をすくめてから、肉片を一つ口に含んだ。

——料理を咀嚼している時は良い。表情が無くなっても、誰かに取り立てて指摘されることが無いからだ。

ジャンはお祭り騒ぎの室内を眺めながら、一つ嘆息する。

どうにも食欲がわかない。舌が鈍くなっているのか、料理の味をよく感じられない。

やはり気にしないふりをしていても——どうやら心底ショックらしい。

——果たして魔石は輝かなかった。

鈍くすら、体内にほんのかすかに残っているだろうと考えていた魔力すら感知されていなかった。

ジャン・スティールは魔法を持たない。

すなわち、騎士になる資格がない。

それが判然とした。

他国へとわたり市民権を得ればまだ話は別だが、アレスハイム以外で騎士になるつもりはさらさら無い。

だから、この後自分はどうか……それを、自分で決めなければならぬ。

既に学校には二年分の学費を支払ってあるから皆が卒業するまでは籍を置くつもりだし、学べることは全て学ぶ予定だが、問題はその後だ。

ジャンはそこまで考えて、逆に、と思った。

かえって、早めにそれを知ることが出来てよかったかも知れない。覚悟する時間があって、せかされること無く、時間的圧迫感に迫られること無く自分自身で決められて、逆に良かったのだ。

意地汚く料理を頼張るウィルソン。変わらず酒を浴びるように飲む面々に、それにしかめっ面をしながらも笑う寮母。

少なくともこの空間は幸福に包まれているのだ。

個人的な感情で、自身の不満をあたりに振りまく自己満足で、これを台無しにするわけにはいかない。

だからジャンは頬の筋肉を張って、料理を飲み下すとすかさず微笑んでみせた。

——ヴェンが言うには、既にこの歳になれば魔法を持つ人間はそれを自覚し、ある程度は扱えるという話だ。

魔法を後天的に覚醒することは今まで例が無いらしいし、ヴェンは行く先がなければいつでも来いとも言ってくれた。

ジャンは背中の中のとどろく鈍い痛みを意識しながら、もう一度だけ深く嘆息した。

《その程度で落ち込んでいるということは、挫折を知らない小童ですネ》

無自覚にうなだれていたのだろう。気がつけば、自分の視線が足元に向いている事に気がついた。

顔をあげれば、グラスになみなみと注がれた黄褐色の液体。もしかしてオイルなのでは、と少し期待してみたが、香りからしてまず酒だった。

《蒸留酒は嫌いです。麦酒はもっと嫌いです》  
テキーラ

彼女は言いながら、手の中のグラスをジャンに押し付ける。

彼はそれに苦笑しながら受け取り、仕方なく半分ほどを一気に飲み下した。

胸が焼け、頭の芯がじんときつくなる。眼球が圧迫されたように息苦しくなると、血液の温度が数度ばかり高くなったかのように全身が熱を帯びた。

これがやけ酒か。

思いながら、タスクへと視線を戻す。

《ついでにこれも渡しましょう》

彼女は、ジャンの強張った笑顔が少しだけ緩んだところを確認してから、ついで鞘に収まったジャンの剣を手渡した。

「……なんです、これは？」

《一般にブロードソードと呼ばれる種類の剣ですね。幅広剣と呼ばれていますが、レイピアが主だった際に生まれた故に、レイピアよりは幅広だ。なら幅広剣だ、ということからそう名付けられたという説が主で――》

「違います、違います。この剣じゃなくて、これを渡した意図を聞きたいんですが……」

《ちよっと表に出る小僧試してやんよ》

低い声で脅し掛かるように、彼女は深く一歩踏み込んで睨みつけ



る。

そうしてまた退くと、変わらぬ無表情で背を向けた。

《というのが主人<sup>マスタ</sup>の伝言です。ステイル様の力量を再び推し量り、背の魔方陣を再構築するための情報を取得します》

「ああ、なるほど」

《念のために裏口から出ます。この騒ぎなら、少し騒いでも勘付かれないでしょう》

外は既に夜の帳が落とされていて、薄暗かった。何も見えぬ程ではないし、戦闘に支障は出ないだろうとジャンは判断する。

彼女が担ぐ木槌を巨大化させたようなそのトンカチは、槌の部分だけでゆうに一般的な樽ほどの大きさを有していた。

底の部分には”天”、その逆には”誅”と深く刻まれ、溝には朱漆が流されていた。

《――肉体制限を二〇パーセントに変更、自衛魔術の発動を全面<sup>ロッ</sup>禁止。……武器が大木槌なのはまず謝罪しますが、これが主人<sup>マスタ</sup>の要望です》

「見るかぎりでは、ヴェンさんの戦闘態勢<sup>スタイル</sup>の模倣というようですが……」

《鋭いですね。そのとおりです。行きます》

私語もそこそこに、まるでちよつとトイレに、とでも言わんばかりの軽快さで、タスクは力強く大地を弾いていた。

柄を肩にかけ、槌を担ぐ体勢で。

《下せ――天誅！》

大木槌は、ジャンの遙か手前で振り落とされた。その質量、そして腕力が根こそぎ大地に叩きつけられて――にわかな地響き。大地震よろしく、構えているジャンの足元を大地ごと鈍く揺るがした。

すると途端に、その衝撃面から大地が盛り上がり、もぐらが地表すれすれで這うかのように、ミミズ腫れのような起伏をまっすぐジ

ヤンに向けて走らせた。

高速度での機動。本能的な危機を認知して回避を目的に走り出す  
が、その起伏はジャンを追尾する。走りだしてもその速度を上回る  
ことが出来ずに、やがて飛び上がろうとした足裏に、その起伏が触  
れた。

爆発。

火焰はなく、硝煙はない。

大地が爆ぜて土や小石が吹き荒れる。同時に、大地に叩きつけら  
れた”あの衝撃”が、まるで足元から解き放たれたかのように接地  
していた左足に襲いかかった。

体勢が崩れ、にわかには背後へと押されるように吹き飛ばされる。

その最中にも、油断なく容赦せず、大木槌を横薙ぎに振るうタス  
クの姿が迫っていた。

「く——っ！」

発動しろ。

バイブレーション

「振動剣っ！」

戦闘開始前より待機していた剣の紋様が輝き、まもなく魔術が作  
動する。するとすぐさま刃は肉眼では捉えきれぬ早さで高速振動し  
——大木槌に対し、その刃を接触面に押し付ける形で対処した。

それは本当に木で出来ているのか不思議に思う。

振動剣に対し、木槌は鮮やかな火花を散らして押し寄せていた。

途方も無い質量に、解放された二〇パーセントのタスクの腕力。そ  
れが合計して、どれほどの威力になるのかわからない。

それでもジャンはそれになんとか耐えていて、踏ん張る足で地面  
を抉りながらも、撒き散らされる火花に身を焼きながらも、木槌に  
押し切られることはなかった。

——そして限界が近づく。

肉体は、考えるよりも早く行動を起こす。

接触面を刃から胴に変え、振動権を解除する。そうすると抵抗は  
瞬く間に弱くなって、剣はその勢いに飲み込まれるが、ジャンが構

えた剣に沿うように大木槌は流れていく。

ジャンは押し出される形になるが、それを利用して数歩分を一気に跳躍して後退した。

「穿て、大地の怒り<sup>アース・ビック</sup>」

着地と共に、柄を両手で握って刃を大地に突き刺した。

紋様が刀身に走り、輝き、命ずるままに魔術が発動。

まもなく、ほんの僅かな時間差の後に、数歩手前のタスクへと無数の針が大地から突き出された。

が――それは柔い土だ。ジャンには、土の密度を本来の素材以上に小さくすることは出来ない。

だがそれでも、タスクは大地から突き出た土を崩し、湿り気のある土に塗れて視界を埋めた。

ジャンが走りだす。共に下方から袈裟に剣を振り上げれば、それでもジャンの気配を察知して大木槌を振り下ろす。堅い接触面と鋼鉄の刃が触れて火花が散り、ジャンの足は思わず止まる。

怯まずに一閃。傍若無人な一打が対応する。火花が瞬き、衝撃が両腕に伝播する。肩に鈍い痛みが走り、疲弊に筋肉が悲鳴を上げた。全身が軋む。

構わず剣を振るえば、容赦なく大木槌が見出した隙を潰してしま

う。  
一閃、一撃。一進後退の攻防は、傍から見ればタスクが簡単にジャンをあしらっているだけに見えるだろう。

斬撃を振るう一定の間隔が、僅かに遅れた。

それ故に大木槌は頭上から、何の抵抗も無く障害も無く振り下ろされる。

「――っ！」

狙ったわけではなかった。

だが彼は気づいたのだ。

目の前には、両腕を振り上げて無防備になるタスクの姿が。

だから迷わず深く踏み込んだ。息がつまり、全身の筋肉が引き裂

けたかのような激痛が走るが。今更になって、あの衝撃によって剣に細やかなヒビが入っていることに気づいたが、彼は全てを素知らぬように無視して切り捨て。

幸運にも訪れた隙に、一撃に、全てを賭けた。  
が――。

「えっ……?!」

居ない。

迫ったはずのタスクの影が、そこには無かった。変わらず頭上から大木槌は迫っていたが、前方、そして左右の視界にも彼女の姿はもちろん、影も無いし、この迫る覇気からタスクの気配だけを察知することは出来ない。

そして衝撃。

腰に鋭く突き刺さる打撃。故に体勢は崩れて、ジャンは突撃体勢のまま背中を押された形で、前のめりになり、転倒。剣を振り上げる無防備な体勢のままで両肩を大地にぶつけ、そのまま顔面を打ち付ける。

素早く身体を引き起こそうと全身に力を込めるが――振り下ろされた大木槌が、優しく背中に落とされた。

《情報提供、感謝致します》

「いえ、おれの為なんでしょう？　むしろ、お礼を言いたいのはこっちの方ですよ」

《しかしお陰で新製品の具合も良く確認できました》

「……新製品？」

コレです、と大木槌の柄を手にとって示した。今では誅の字に斜め一閃の焦げ跡が付いているが、彼女はそれさえも誇らしげに頷いた。

ばちあたり

《天誅という名称で、魔術仕様。打ち付けた衝撃をそのまま物質を伝播して対象を被爆するまで追尾するという高性能です。ついこの間に協会からよこされた代物で、実験品なのですが、問題はないよ

ギルド

うですね》

呼吸は乱れること無く、ただ少しだけ声音に交じるノイズを目立たせて、彼女は続けた。

《そろそろ誕生会もお開きでしょう。予定では、プログラムプレゼントお披露目は終盤です。出遅れぬように戻りましょう》

「あ、はい」

暗がりの中で、彼女は大胆に衣服をまくり上げる。既にバストも、その引き締まった身体もあらわになっているであろうにも関わらず、先程より暗くなっているお陰か、彼女のその肢体を視ることは出来なかった。

だが、その腹部に闇よりも深い漆黒が生まれたことだけはよくわかって――そこに大木槌が飲まれたのも、奇妙な感覚だが良くわかった。

《おまたせ致しました。では》

「はい」

ジャンは改めて頷いて、裏口へと向かうタスクの後についていった。

八月二七日。

誕生日が終わり、その翌日もコロンの街に滞在したジャン一行は、その次の日に荷物をまとめて街を後にした。

最後までヴェンは心配気な様子だったが、魔術の施術をしてくれたウィルソン、そしてタスクはどこか含みのある笑みで別れを告げて、再開を誓った。

その際に手渡されたのが、白く濁った魔石――ではなく、それが加工された、透き通る水晶だった。丸いそれではなく、プリズム多面体。陽に掲げるだけでそれは鮮やかに陽光を反射させるが、それが目的ではない。

魔力を込めれば、それがプリズムを所有するウィルソンへと音声こえ

が繋がる仕様だ。簡易な通信装置というものらしいが、それはアレスハイムにはない技術だった。

彼はその際に「いい商売相手になってくれることを願う」と、これからのジャンの成功を祈る言葉を告げてくれた。それは未来を失ったに等しいジャンにとっては非常に嬉しく、また彼の知らぬ世界の人間故にどこか希望すらもたらしてくれる言葉だった。

「ねえ、ジャン？」

金貨二枚の価値が本当にあるのか定かではないペンダントを胸に提げるサニーは、上目遣いで声をかけてきた。ペンダントには、何らかの魔術仕様があるのを願うだけである。

「ん、どうした？」

レイミィも、アオイも、クロコも、どこか満ち足りたような表情で同行し、言葉を交わしている。今回の事が、どうあれ彼女らにもタメになったのだろう。

「これ、ありがとね？」

「ああ、気にすんな。そう高いもんじゃないし」

そう口にする、財布の重量を否応無しに最認識させられる。

ここに来る前に買っておいた、本当に安物の宝石はクリスティンに渡してきたが――妙にはしゃがれたので、なにやらかえって申し訳ないことをしたような気持ちだ。まさか、処分ついでにプレゼントされたとは思ってもいまい。

「大切にするね！」

「ああ、大事にしてくれ」

「私ね、もっともって頑張って、絶対一緒にジャンと騎士になるから」

「……ああ、そうだな。だけど、あんまり無茶はだめだぞ？」

「わかってるって。ジャンもだよ」

「そうだな」

――背中の魔方阵は元に戻り、そして右肘に小さな魔方阵を刻まれた。

それは、背中の魔術を制御するコツを教えしてくれるとウィルソンは言っていたし、右肘の魔方陣単体でも、使いようによっては持て余すとも言っていた。

それがどんなシロモノなのかは伝えられなかったし、試すヒマも無かったが……魔法を持たぬことを今更になって自覚したジャンに対する、ウィルソンなりの配慮なのだろう。

——腰の剣も、既にあの使い慣れた幅広剣ブロードソードでは無くなってしまった。

それよりも大型の、一メートル以上ある刀身に、長めの柄が特徴的な雑種バスタードソードの剣。魔石によって加工されたそれはブロードソード同様に魔術の使用を可能にしてくれたが、ブロードソードのように軽々とふることはできない。重さ故に、下手をすればそれに振り回される可能性があるのだ。

そして携える位置は腰から背中へ。

与えられたそれらはまるで、ジャンの心に開いてしまった穴を満たしてくれるようだった。そしてそれは非常に嬉しいことで、喜ばしかった。それだけで十分だった。

それでも、もう気にしていないと口にしても、胸の奥にある喪失感は拭われない。

漠然とした将来への不安が生まれたのだ。まず進路を新たにしなければ、その穴が縮まることはないかも知れない。

「一緒に、騎士に……か」

「ん？ なに？」

消え入るようなつぶやきに反応したサニーが顔を向ける。

ジャンは、なんでもないと首を振った。

——騎士に、一緒になると決めたから彼女がついてきた。

だが、ならばこれからどうなる？ 下手にジャンについてくるより、その資質を騎士になって活かすほうがかえって安全なのではないか？

騙してまで、彼女の本来の望みを利用して騎士という枠に押し入

れて——良いのだろうか。

「……っ」

駄目だ。その回答を、今の感情で出す訳にはいかない。

この件についてはじっくり考える必要があるのだ。

ジャンは大きく首を振って、胸いっぱいに息を吸い込んだ。

「がんばろうな、サニー」

軽く頭を叩いて撫でると、彼女はくすぐったそうに肩をすくめて、首をかしげた。

「うんっ！」

元気の良い返事は鮮やかに蒼く晴れ渡る空に反響して、それにレイミイたちは楽しげに笑って——。

夏休みのイベントは、結局その帰郷が最後となって、終わりを告げた。



## 転人生

（莊嚴、かな。やっぱり、見る立場が違うところも思う所が変わるものか……）

アレスハイムの門をくぐった少年は、足を止めて遠目にも見える城を眺めた。肩から提げるショルダーバッグは膨れるほど荷物が入っていて、また左手に握る革張りのスーツケースは彼の腕には過負担なほどに重かった。

ラック・アンは今日からこの国で暮らすことになる。隣国ということだが街の外観は大きく異なるし、文化も少し違う部分もあるだろう。もっとも、その多くは重なっている部分もあるだろうが——見知らぬ土地。母国の領内ですら無いここでは、孤立と同意義だ。

「騎士さん達にゃ話を通ってる。お前のフォローは頼もしいくらいにしてくれる筈だ。これからお前が世話になるのは、その地図にある通り。一人暮らしになるだろうが、慣れるまでは手伝ってくれるそうだ」

漆黒の外套を纏う男——ドラゴは気怠そうに言いながら、門の手前で白墨で魔方阵を描く。

そうして書き終えてから、一仕事を終えたように息を吐いた。

「学校は明日からだそうだな。距離が距離だけに、あんま遊びにこないが……年末には迎えに来る。年越しくらい、母国でやりたいだろ？」

「色々とお世話になります。ぼくの療養のために、こんなにわざわざ……」

「ま、大切な戦力だからな。今じゃそうでもないが、いつ大きな戦いがあるかわからんし。それに、”あんなこと”があるまでは大切な教え子だったしな？」

「はい。その節は——」

「いまさらいらねえよ。ソレじゃ、達者でな」

ドラゴは気さくに軽く手を上げると、まもなく彼が足元に置く魔  
方陣がにわかに輝き始めて……。

魔方陣が円柱状に光を放つ。彼はその中に飲まれて、

「さよならです、師匠……！」せんせい

その光が失せれば、魔方陣の中からはドラゴの姿は跡形もなく消  
え失せていた。

——転移魔術。彼が行ったのはその魔術だ。現段階ではその魔術  
の簡易化には成功していないために、詠唱か、あるいは魔方陣の形  
成でしか術を発動させることができない高等魔術である。

それは実戦段階では中々に使うのは難しいものだが、こういった  
日常生活の助けとするには十分すぎるそれだ。

そしてまた、その魔術を扱いきれるものもそう多くはないとされ  
ている。もつとも、エルフェーヌ国内に限った話だが。

「明日から学校、か。忙しい日程だな」

これから寝食をすることになるだろう共同住宅に、明日から通う  
事になる学校の制服やら教科書やらが準備されているはずだ。

となれば、今日は荷物整理で一日が終えてしまうかも知れない。

しかし、エルフェーヌでは既に騎士だというのに——養成学校に  
入学とは。

彼は短くため息を吐いてから、考えても仕方が無いと、石灰で刻  
まれた魔方陣を足で踏みにじってから街へと足を運んだ。

九月一日。それは残念なことに月曜日であり、夏休みが九月を飲  
み込んで始業式の日時を延長させてくれることはなかった。

——くそつ、夢であって欲しかった。

ジャン・ステイルは焦っていた。

そして走ってもいた。

隣にはサニーもいないし、トロスもテポンも、おなじみのメンバ  
ーは誰もいない。

夕べは、特に疲れていたというわけではなかったし、今日に備えて早く寝た。それ故にゆっくり眠ることが出来たのだ。そう、残念なほどゆっくりと、寝すぎてしまったのだ。

オクトに身体を揺さぶられて目覚めたときには既に全員が登校した時間であり、彼は完全に出遅れた形となっていた。

急げば遅刻は免れる。そんな時間に、ジャンはせめて胃に何かを入れておこうとバナナを一本啜えたまま、勢い良く家を飛び出した。「居候なのに寝坊って……そりゃあ無いよなあっ！」

自堕落にも程がある。

いくら雑務の手伝いをしているからとはいえ、裏で幾度ともなく渡そうとした家賃をオクトに何度も断られているとはいえ、それでもテポン一家に甘えていいというわけではない。

確かに帰郷もあったし、あれから新装備と魔方陣を試しても見た。その疲労があつたせいかもしれないが――。

「ったく、気を引き締めなくちゃ……」

――持っていくか迷ったが、やはり身につけていくことにした木彫りのネックレスを手に取りながら、緊張に高鳴る胸を抑えて一息を吐いた。

右腕の肘やや上の部分から、袖は少しの所作から揺れて中身がないことを目立たせる。もう慣れたことだが、まだ朝でも外に出て居る往来の人々は、それを見ては、見てはいけない物を見てしまったように顔を背ける。彼にとって、そういった同情まがいの視線ばかりは、未だ耐え難かった。

これではまるで、自分が弱い人間のようにではないか。

ふざけるのもいいかげんにして欲しいモノだ、とラックは思う。

弱ければ腕をなくして尚騎士としての再起を望まないし、わざわざ隣国まで来てそんな事をしようとは思わないはずだ。

木彫りのお守りには、剣と盾が掘られている。それは、妖精族エルフの“成功祈願”の紋章だと――幼少の頃から姉として世話を焼いてく

れた幼なじみが言っていたのを思い出す。

コレがあれば、いくら失敗したとしても最後には必ず成功すると、そう励ましてくれる言葉を思い出せば、少しでも元気が出た。

「にしても、どれくらいゆっくり行けば良いんだろう……？」

学校には、通常の登校時刻よりも遅めに来てくれれば良い。これから担任となる男は先日そう言ってくれた。だから彼は、本来ならばこの速度で歩いていれば遅刻確定となろう時刻に家を出ていたのだが、本当にこの時刻で良いのかわからない。

もしかして遅すぎたのか。そう不安に思うのも、ここが彼にとって未知の土地であるためという要素があるせいかもしれない。

——そのよそ見のせいか、不意に前方へと現れた影に対応できずに、

「うわあっ!？」

飛び出てきた影と、正面衝突する羽目となった。

衝撃。

視界は白に黒に明滅し、意識が混濁する。口の中に広がる甘くも鈍い鉄の味に、口内か鼻腔から出血していることを認識した。両手は腰より後ろで大地を掴んでいて、尻は堅い地面に座り込んでいる。どうやら、尻餅を付いているらしい。

「くっ、な、何が……？」

目を凝らして辺りを視認する。と、まもなく目に飛び込んできたのは小柄な影が倒れている光景だった。

状況を見るに、どうやらソレとぶつかってしまったらしい。

ここは曲がり角だ。まっすぐ進んだ先に学校があるところを——さらに、ソレが学校の制服を着ているのを見れば、どうやらこの少年も遅刻寸前で急いでいたのだろう。

同類が居たのに少しばかりの安堵を覚えながらも、彼は立ち上がり、少年に手を差し伸べた。

「大丈夫か? 正直すまん、急ぐ……っ?!」

「いつつう……ったく、ちゃんと前を見て走れよばか！　くっそ……」

悪態をついて立ち上がる少年の右袖には、その中身がないらしい。ぶらりとたれて薄っぺらく揺れるそれを見て、ジャンは思わず絶句した。

まさか。

息を呑む。

転んだ拍子に外れたのか。

「お、おい大丈夫——っ?!」

駆け寄ろうとする最中で、ふと足と石畳の間に異物を認識した。

それを理解したのはそいつを強く踏み込んだ瞬間であり、バナナの皮は思いの外石畳を滑らせて、ジャンの足は自分が意図する方向とは別の方へと滑って体勢を崩し、勢い良くすっ転ぶ。

後頭部を打ち付けて、再び意識が混濁。視界内に、極彩色の光点  
が蚊か何かのように飛び回った。

「ぼくは大丈夫だけど……ごめん、悪いけど先に行くね。バナナさん」

後頭部を抑えて痛みに喘いでいる中で、そんな声と共に足音は遠のいていった。

——ついてない日はとことんついていない。

彼は結局遅刻をして——学校に到着した頃には、既に息も絶え絶えで死に体であった。

「ったく、今日は始業式なのに、もう始業式は終わっちゃってんだぜ？」

相変わらずの派手なタテガミヘアーに加えて色黒になっているカールは、呆れたように言ってきた。不真面目な様相だというのに、しっかりと休まず来ている真面目な男——というのが、ここ最近の彼への評価だった。一度はいじめっ子だった彼だが、適度な距離を置いたお陰か、現在では良好な関係を結んでいる。

「確かに。だが、ジャンにしては珍しくないか？」

取り巻きとも言える黒い髪を長く伸ばした少年は、肩をすくめて言った。

ジャンは軽く笑いながら、まあな、と頷く。

「さすがに油断してたよ」

「——ったく情けない。俺に認めてもらいたいのなら、もっとシャンとしてほしいものだな。もっとも、選ばれた一人として流石にこの俺もお前を見捨てるわけにはいかんから……」

聞きなれない声が、まるで最初から会話に参加していたかのような気軽さをもって発される。気がつけば、ジャンの机に手について、カールらの視線を集める男がそこに居た。

鋭い目付きに、華奢な肢体。まるで似つかわしくないその風貌に、ジャンは奇妙な既視感を覚えていた。

おれはこいつを知っている——そう考えれば、すぐに答えは記憶から引揚げられた。

「えっと、お前は……」

確か、外から魔物が数百と押し寄せてきた際に共に”見学”をした一人だ。もう一人は隣で真っ赤に燃えるような長い髪を目立たせながらも、誰も近寄らせないように殺気立たせて頭を抱えたクリムだ。サソリの尾は、相変わらず元氣そうに逆立っていた。

「よもや、忘れたとは言わせねえぞ」

「てめー隣のクラスだろ、巢に戻って光合成でもしとけよ」

カールが、意地悪な笑みを浮かべながら彼を指さす。その先には緑色に染まり上がる短髪があって、彼はそれを葉かなにかに見立てていったのだ。

その指摘に、男は眉をしかめた。

「こっ……、まあいい。俺は、挨拶をしにきただけだ。実力の程は知らないが、名前は聞いているからな。ジャン・ステイル、俺はあのレイやクランと同じような関係を築きたいと思っている——さばだッ！」

妙に演技がかったセリフを残して、彼は結局最後まで名乗らずに勢い良く教室を出ていってしまう。

——ルーク・アルファという、どこかの特殊部隊の暗号名コードネームじみた男の名前を思い出すのは、それから暫くしての事だった。

今日の日程は、これから簡単な学級活動ホームルームを行なって終了だ。恐らく、後期も頑張れだとか、授業日程などの用紙を配って終わるだろう。

「えー、今日はちょっとしたお知らせがある」

だが作業服姿の担任は、ちょっと気だるげに教壇に立って告げる。「お前らの同志がもう一人増える。お隣エルフェーヌから遠路はるばるやってきた……おおい、入って来い」

声と共に、スライド式の扉が音を立てて開き始める。

不意の紹介にクラス内にはどよめきが走り、各々が期待にざわめき始めた。

——まず始めに、黒い革靴が教室内に侵入した。共にあらわになる、お揃いの詰襟の制服。肩肘を張る制服からでもわかるひ弱さに、肩まで伸びるやや長めの黒髪。その中性的な風貌に、おお、という感嘆が周囲から漏れた。

やがて担任の隣に立って正面を向くと、それとは別の感嘆詞が重なるように響いた。

それは、右腕の袖が不自然にひらひらと揺れていたからだ。故に、その右袖に中身がないことを知る。

やってきた転入生は、その反応に眉をしかめていた。

漆黒のように黒く暗い、吸い込まれそうな瞳。整った顔の造りは幼く、どうにも十八には見えぬ少年だ。

そしてそれは、見覚えのある顔で……。

「あっ、あいつは……！」

確か、今朝ぶつかった少年だ。

同じ遅刻少年だと思っていたが、まさか転入生だったとは。

考える間に、表情を消した少年は短く息を吐いてから、姿勢を整えた。

「今日から皆さんと同じ学び舎で勉学に励む事となりました、ラック・アンです。まだ知らないことも多くて拙い場面ばかりお見せることになると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします」

深くお辞儀をしてから、また元の直立体勢。まず第一印象は、生真面目な少年、というものだった。が、そうそう接しにくい人間というわけではない。ジャンだけは、なんとなくそう感じていた。

「質問はないか？」

ラックに変わって、担任が言う。彼は既に鉄パイプと質素なクッションで構成された折りたたみ椅子に身を預けて、足を組んでいた。しかしクリイムの時とは打って変わって、クラス内は静まり返ってしまっている。どうやら右腕がないという事に、異人種もヒトも同様に、自身とは違う異質な風貌、特徴に畏怖してしまったようだ。担任は察したように軽く手をたたき、

「ラック、お前の席は……おいジャン、手を上げろ」

指示された通りに手を挙げる。

そんな事にも既視感<sup>デジャヴ</sup>を覚えて、ふと左横を向く。クリイムが居るのは反対側の席には——気がつく、いつも本を読んでいる静かな少女はそこには居らず、空席になっていた。その彼女の姿を探せば、窓際の方で、おそらく友人なのだろう少女と少年について話しているようだった。

そしてラックも、それでジャンの存在に気がついた。

彼は驚いたように目を見開いてから、ああそうか、と納得するようにつく。

「あいつの隣だ。ジャンも、クリイムから良い評価をもらっている。転入生に優しくしてやれよ」

「ああ、はい」

ぶっきらぼうだった上に、少し付き合いも強引だったから嫌われているのかと思っていたが——ちらりと横を見れば、彼女は朱に染



めた頬を隠すように顔を背けた。

可愛いところもあるんだな、とジャンは微笑むと、促されたままにやってきたラックが隣に座った。

担任は教壇に戻り、そしてこれからの予定と、今後の日程などを掻い摘んで説明し始めた。

「まさか、キミと同じクラスだとはね」

頬杖を付いてジャンを眺めるラックは、誰にともなくそう呟く。  
が、それを拾ったジャンは顔を向けて、気さくに笑った。

「おれも意外だと思ったさ。ま、よろしくな」

「いや、むしろキミは——覚えていないのか？　ぼくは、あの日の事を、誰がいたかさえも良く覚えている。キミだって……」

——あの日。

それはラックが利き腕を失った時の事だ。この国に逃げ込み、自らの失態で多くの異種族<sup>モンスター</sup>を誘い込んでしまったあの日だ。この国の騎士達の協力のお陰で全てはまるく収まったが、このアレスハイムはあの出来事を教育に活用した。上級生は実際に戦闘に参加して、下級生は見学。その中の一人が彼だと、ラックは認識していたのだが、どうにも反応の薄い彼を見て、もしかして勘違いなのかと心配になった。

それに、騎士の話では期待の<sup>ルーキー</sup>新入生が居るとの話だった。そして見学に選ばれたのは、下級生の中でもその成績を高く評価されている者だと聞いたのだが——。

勘違いならば、一体誰の事なのだろうか。ここまでが全て取り計らいなのではなかったのなら、一体。

ラックの言葉の意図が読み取れずに首を傾げるジャンを見て、ラックは小さく肩をすぼめた。

「まあいいや。よろしく……えっと」

「ああ、ジャン・ステイルだ。分からないことがあったらなんでも訊いてくれ」

「ありがとう」

——ラックの人生が変わるきっかけは、”あの日”からこの出会いまで続く、彼にとっての非日常がそうだった。

## 触手プレイ　　学校の七不思議2

一日はまだ終わらない――ジャン・ステイールは、学校が始まったからまた組合ギルドに疎遠になるだろうからと一つ挨拶をしてこようと考えていた。

だからトロスの誘いも、依然として何かを言いたそうにしているクリイムに心を痛めながら無視して、軽快な挨拶と共に用事があるからと先に帰ったラックを見送りながら、廊下へと出たのである。

サニーは変わらずお馴染みのメンバーで寄り合い、今ではすっかりジャンはハブられてしまっていた。カールはカールで本当に心地よいほどに適当な距離を開けてくれるから帰りを誘ってきたりはしないし、それ故に、ジャン・ステイールは颯爽と昇降口までやってきたのだ。

在校生の総数が百未満だから、昇降口からバラバラと帰宅する生徒の数は決して多いというものではなかった。だが楽しそうに、夏休みの空白を埋め合うように騒ぎ立てて、あるいは笑い合って話せばざわめき喧噪がひしめくのはやはり必然だった。

――ジャン・ステイールはその瞬間、にわかに時間が停止したと認識した。

「おのれ、ジャン・ステイール」

数歩手前で、怨念深く呟く姿があった。

鮮血のような深紅に染まるワンピース。だというのに、彼女の腰まで伸びる髪は透き通るような銀髪だった。睨みつける瞳は琥珀。華奢な肢体は、それ故に少女然としていた。

「遊んでくれると、言ったのに」

反芻するように目をつむり、大きく息を吸い込む。そんな彼女の姿を、周囲はまるで認識はおろかそれ以前に――知覚すらしていないような風ですぐ傍を通りすぎていった。

まるで、ジャンと彼女、ノロとを繋ぐ直線上はまるで別の空間、

あるいは奇妙な隔壁によって隔てられ一切の干渉を許さぬ仕様<sup>ようじやう</sup>になっているのかもしれない。そう錯覚するほどに、辺りは彼らに一切の興味を持たぬように無視を決め込んでいた。

「うそ、つき……！」

「の、ノロ……？」

「ずっと待ってた」

喉元に刃が突きつけられたかのような、明確な殺意。彼女の瞳は鋭くジャンに突き刺さり――初めて人の殺意というものを受けた彼は、その異様な感覚に指先すら動かせず硬直してしまった。

まるで心臓を鷲掴みされているかのような不快感。それに勝る、無力感。息遣いにすら気を遣い、額から脂汗が吹き出るのを自覚する。

「許さないから」

彼女は笑った。

それは、悲しいことに初めてジャンがみた満面の笑みであり――その表情は、狂気以外の何物でもなかった。

ノロがそう告げた次の瞬間。

にわかに、足元の感覚が鈍くなる。固く踏みしめていたそこは黒く染まり、感触は腐葉土のように酷く柔い。

その感覚に、ジャンは思わずうつむいた。己の足元を確認する刹那、その地面から、不意に何かが付き上がっているのを彼は見た。鋭い四本の、棒状の異物。それはまるで各々が意思を持つように、身体にまとわりつき、その柔く軟体であるその身を最大限に活用して、ただ四本ばかりの触手は、瞬く間にジャンを簀巻きに仕立て上げた。

「な――っ!？」

「続きは、お部屋で」

そう告げる言葉を最後に、ジャンは地面の中に引きずられるのと共に、ひ弱な意識は間もなく途切れてしまった。

腐った肉を放置したような腐臭。それを部屋に撒き散らし埋め尽くしたような鋭い刺激臭が鼻腔に突き刺さり、故にジャン・ステールの意識は急浮上する。

「う……ここ、は？」

耐え切れぬ懐かしの匂いに、思わず口元を覆おうとして、両腕が何かによって拘束されていることを知る。顔を向ければ、その薄暗い空間の中で、空中に持ち上げられた己の肉体を認識した。四肢は四方から伸びる触手に掴まれ、強靱な力で引っ張り上げられている。「ここはわたしの部屋」

気がつけば眼下で、見上げるようにジャンを眺めていたノロが告げる。

「わたしの領域」  
テリトリー

続くように、別の方向から同じ声が聞こえた。

「わたしだけの空間」  
ぼしよ

同様に、その声は少なくとも視界内にいる彼女が紡いだ様子はない。

彼女の、外での活動制限時間は二時間だ。しかしこの部屋の中であればそんな制限は無いし——そもそもジャンが名付けたノロという存在が複数存在できる場所だ。否、外でもそれは可能だろうが、そうする必要は求められなかった。

少なくとも、現時点ではノロが三人いる。だが、その気になればこの部屋を埋め尽くすほどの数を出現させることが出来るに違いない。

「な、何をするつもり、なんだ……？」

『お仕置き』

声が重なった。

『わたしの気持ち、裏切ったお仕置き』

歌でも歌うように、声音は一寸の狂いも見せずにユニゾンしていた。

「おっ——おれが、何をしたって言うんだ？」

「黙れ」「小僧」「遊んでくると、言ったはずだ」

切り貼りでもするように、各々はそう続ける。

「遊ぶ？ そんな……」

そんな話。

そう言いかけて、そんなことを言ったような気もした——そう否定できない言葉に、ジャンは深く記憶に探りを入れた。

彼女と最後にあったのはいつだろうか。

図書館？ いや、それよりももっと最近は……。

視線を上により、右上により、キョロキョロと忙しく動かしながら夏休みの日程を思い出す。最初はまずギルドで任務に就いたはずだ。それから、タマとノロが、ラアビと一緒にいるところを追跡してきて……。

そして帰り際に、確かに約束した。

今度遊びに行くよ、とは確かにジャンの言葉だった。

ぜったい？ と彼女は念を押した。彼はそれに頷いた。

それから一ヶ月——音沙汰もなく、現在に至る。

「くそうなんてことだ！ 好きにしろ！」

おれとしたことが！ 心のなかでそう叫ぶなり、彼は全身から力を抜いてなすがまま、なされるがままの準備をする。

「喜んで」

ノロが微笑んだ。

そして眼下より遙か手前の地面から勢い良く突き出る触手の切迫感を覚えて——それは間もなく股間を強打。

衝撃が垂直に脳髓まで走り、意識は強引に、肉体から引き裂かれる形で失われた。

「うおおおお——っ!？」

足元に括りつけられた触手が命綱だった。

部屋を中心から伸びるそれは、勢い良く円を描く回転を行う。故

に拘束されたジャンはそれ故に力強く振り回されていた。同じような景色が目まぐるしく回転し、眼球が圧迫されるような感覚を覚える。臓腑はすべて腹から上方向に押しやられて、血液は余すことなく頭にのぼった。

「くっ……こいつは……!」

死ぬかも知れない。

気がついたときには既にこの状態だったジャンは、その可能性を捨てきれずにいた。

いかに命乞いをするか。果たして、彼女に至ってはその選択が悪い方向へとしか進まないのではないか。

可能性は飽くまで可能性としてだが、それでもそれが存在する限りジャンを慎重にさせた。

「もつと遊ぼう」

ノロのつぶやきと共に、不意に足を拘束する触手の圧迫感が喪失した。

そしてその瞬間、解き放たれたジャンの肉体は滑空する間もなく壁に叩きつけられて――分厚く形成された肉の壁は、彼の衝撃の全てを吸収してくれるクッションとなって、勢い良く引き裂いて突撃してくる彼の身体を優しく受け止めてくれた。

「う、ふう……ノロ、おれを、どうしたいんだ……?」

「悪は処断する。それが、わたしの正義」

次いで、他の方向からの声が紡ぐ。

「お前が悪だ」

「これまでの経験則が、そう、確信させる」

「お前たちヒトは、わたしを」

「わたしたちを、玩具か何かと、勘違いしている」

「嘆かわしいことだ」

「万死に値する」

――またヒトがどうかという話か。

ジャンはその話題に、少しばかり全時代のヒトに恨みがましい情

念を抱いた。

彼女が異人種なのは一目瞭然だ。そしてこの地下に幽閉されていた事実を考えれば、そしてその身なりを見れば——さらに彼女の言葉から察するに、何らかの実験や細工がなされたのはもはや確実とも言えよう。

ノロが元からこの身体なのか、あるいは元はよりまともな外見だったのか。

出会った当初、彼女は言語を学習していた。それ故に、その学習能力の高さを認識したが——言語が変わるほどの時代とは、いったいどれほどのものなのだろうか。

異人種が、異種族がこの世界に姿を現したのは約一五〇年前。もしかしたらその最初期、あるいは、もしかしたらその”溝”から出てきた存在ではない可能性すらある。この世界発祥の、未確認生命体。小説か何かのような話だが、空の上から落ちてきた、という可能性さえ否めない。

この学校で”呪い”と定義された彼女は一体——何者なのだろうか。

彼女については改めて、調べる必要がありそうだが、

不意に、身体に触手が張り付いた。それは肉体を埋める肉の壁から腸絨毛よろしくうねうねと出現した無数のそれらであり、それは器用に詰襟のボタンを外し、衣服を脱がしていった。

「な、何を」

「なに、この魔方陣」

なめらかな触手捌き故に、ジャンは瞬く間に下着一枚になってしまふ。四肢は再び縛られて肉壁から引きはがされた。

「肉体強化魔術……古臭い魔術。肘のは……ああ、そう。なるほど、理念は概ね、理解できた。すごい良い、面白い。これは、ジャンが？」

「あ、ああ、魔方陣の、ことか？　これは、ちょっと知り合いが刻んでくれてな」



「かなり出来る人。なるほど、古臭い魔術なのに、新しい考え方」

「そうか、なんだか、嬉しいな」

「ほう、なぜ？」

「おれもかなり信頼している人だからだ」

「……つまり」

右腕を掴む触手が泡立ち、ざわついたさわり心地となる。気色の悪い感触に思わず全身に鳥肌を立てたが、触手は構わず右手首を幾度ともなくさすり、そして目にも留まらぬ一閃を走らせた。

手首の薄皮が一枚引き裂かれ、鮮血が浮かび上がるようにじわりと滲んだ。触手はその患部をまたさすり、一部を隔離させ、傷口から内部へと侵入させる。

「ぐうつ?! な、ノロ、何を――っ!？」

薄皮一枚下を、まるで寄生虫が這うかのように腕から肩、そして深く沈んで体内へと潜り込む、吐き気を催す程の嫌悪感が全身から力を抜かせてしまう。

「わたしの魔術ちからを刻む――魔力でつながるから、ジャンはすごく、強くなる。それでわたしの、存在意義も生まれる」

「一石二鳥」

彼女はそう言って微笑んだ。

言葉と共に、彼が本来与えられていた魔力とは別の、より異質で刺々しいソレが混入するのが良くわかった。同じ魔力で、用途も同じだというのにこれほどまで明確に理解できるほどの魔力が存在するとは、ジャンも初めての感覚で、呼吸を乱し、鼓動を高鳴らせた。「わたしは魔法を持たない」

――異人種のほとんどは、魔法を持つ種族だと言うのが一般的だ。授業では聞かない話だが、誰に訊いてもそう答えるだろうし、だからといってヒトが不公平だのなんだのと喚くことは無い。なぜならば、魔法や魔術の類は異人種がこの世界に現れてから活性化したからだ。

魔石の存在は元からあったし、魔術や魔法という言葉もあった。

だが現在の<sup>いま</sup>のように、一般的に使用され利用されているわけではなく、古めかしい儀式や呪術のような、そういった存在であったのだ。

だから少なくともこの大陸では、そういった技術や魔術などの考えが文明に影響を与えている。

一方で、溝が無い大陸ではまるで別世界とも言えるほどに、別方向に文明を進化させていた。いつか”中佐殿”が手にしていた拳銃がその粋である。

「わたしの」

「魔術は、おそらく、図書館のようにある」

「だから」

と、もう一人が言った。

「わたしがあげるのは、一番簡単で、ジャンの名前に相応しい、魔術」

「盗む……『禁断の果実』を精製する魔術だけど、その効果は――」<sup>スタイル</sup>

身体の中が熱くなる。酷く熱を持って、頭がぼーっとし始めた。まるで身体が拒絶反応を起こして、体内に潜り込んだあの寄生虫を殺そうとしているようだったが、その甲斐無く、体内での動きは果たして停止した。

身体の上には魔方阵も何も浮かび上がらないが、それでも身体の中で、どこかに魔方阵は刻まれてしまったのかも知れない。

ウィルソンから与えられた肉体強化の術に、加えて右肘の――魔力を体外に放出する系統の魔術。これは、背中の魔方阵が否応なしに身体の中に魔力を取り込んでくる副作用を利用した画期的な魔術だった。

魔力を純粋な形で放出することはもちろん、その放出した魔力を剣に注いで魔術を強化することも可能。さらに今はまだジャン自身思いつかないが、その汎用性は高いとウィルソン自身言っていたし、彼が掌に刻んだ魔方阵と同様のものだとも言っていた。

ならばお墨付きだと、笑って答えたのが未だ印象的だったが――今、ノロによって与えられた魔術は明らかなまでに不明瞭で不安要

因他ならない。

体内に刻まれたのならば、その副作用が直接命を揺るがすことになることだってある。

だというのに、眼下のノロは恍惚の表情で、うわついた顔で、のぼせ上がったようにジャンを眺めて講釈を垂れていた。

「――飽くまで『禁断の果实』。」齧った”回数”はジャンの技量によって、変わる。おそらく、三度が限界。よく覚えておいて欲しい」「わたしと、ジャンはつながってる」

「もっと、信頼出来るようになったら、わたしの事も、ちゃんと話すから」

「わたしを、信じて」

「おねがい」

輪唱するように、懇願する声は多方向から聞こえてきた。

――しばらくすると熱も冷めて、体調は嘘のように元に戻る。

禁断の果实は認識<sup>み</sup>たものを理解<sup>み</sup>たままに――云々。聞こえたのはそこまでだったが、そのセリフをもう一度訊き返す余裕は無かった。体調は全快だが、疲弊は肉体に襲いかかっていたのだ。気分は既に布団の中。今にでも横になりたいという願望が、ジャン・ステイールの全てとなっていた。

だが、もう二度と適当な返事はできない。

ジャンは胸いっぱい臭気を吸い込んで、力強く頷いた。

「おれはノロを信じる。もう二度と裏切らない」

縁をきることも出来たのかも知れない。だがそうしなかった理由は――妙な魔術を埋めこまれたからということもあるが――やはり男として、少女の気持ちを裏切るということはしたくなかったからだ。

そのせいで現在の、こんな惨状を導いてしまったのかも知れないが……今は考えないでおこう。

「それなら、いい」

「禁断の果实は、ジャンの持つ最後の手段。ジャンは、魔法を持つ

てないから」

「――っ！ やっぱり、分かったか？」

「うん、でも、わたしだけ。普通はわからない。魔方陣で、身体に魔力を流してるし」

「そうか。……まあ、おれもこれから遊びに来るが、ノロも遊びに来てくれよ？ タマも最近寂しがってるぜ」

「そうする……御意。上まで送る」

「ああ、たの――」

む。そう口にしようにとするよりも早く、今度は勢い良く彼を拘束した触手はそのまま天井に衝突して、幾度目になるか、彼の意識は消失した。

「ジャン、おいジャーン！ 起きてよ！」

――夕方になっても帰ってこないジャンを心配して探しに来たタマは、学校の門前で横たわる彼の姿を発見した。身体に染み付く腐臭からノロの所に行っていたことはすぐ分かったが、共に滲み出る異質な魔力を感じた彼女は、彼の身にただならぬ事があったのをすぐに察した。

だからすぐに人型になって身体を揺さぶり、頬を叩いて意識を呼び覚ます。

その甲斐もあってか、瞼がぴくりと痙攣して、静かだった呼吸が大きく、そして胸も見えてすぐわかるように上下した。

おそらく、ノロが暴走したのだろう。

彼が夏休みの間も、たまに自暴自棄のように暴れまわることがあった。特に足を掴んで振り回されるのは――高所恐怖症である彼女にとっては、拷問以外の何物でもなかった。あれは良い思い出と言いか、もはやトラウマだ。

だが、それもこれもジャンがノロの所に遊びに行かなかったのが原因だ。呑気にギルドであのウサギといちゃいちゃしながら仕事を

して、帰郷なんかしているからこんな事になったのだ。

「ははっ、ざまあみろ！」

考えていると、不満が爆発した。

だから思い切り肉球で顔面を殴りつけながら叫ぶと、ぼふっ、と肉球に吐息がかかった。

「うう、な、何をするんだタマ……」

意識が回復。それを確認次第、彼女はすぐさまネコの姿に戻っていく。

「どうせノロに痛い目見たんでしょ。ざまあないわね」

何が起きているのか分からぬ顔であたりを見渡し、半身を起こす。彼はそれから何かを思い出したように身体を見回して、服を掴み、安堵したように息を吐いた。

それから体を起こし、近くに落ちている手提げかばんを拾い上げた。

「ははっ、身から出た錆ってやつだ」

「まったく、そんなんじゃ、ヘンな女に引っかけても知らないわよ？」

「もう引っかかってるけどな」

促すわけでもなく歩き出すと、タマはそのまま飛び上がって肩に乗る。

帰路につきながら冗談めかしく言ってみると、鋭い爪が走らずに、頬に突き刺さった。まるで強盗が人質にとって脅すような感覚だ。

「もう、あんたなんか知らない」

「――にしても」

最近はお自分の身体に、知らない力ばかりが与えられ始めている。  
パワー・ポイント  
肉体強化魔術に、アウト・ルック魔力放出。これは慣れれば一対として使いこなすことが出来るだろう。

だが新しくもらったバスタードソードも、いい加減稽古をつけなければ実戦で使えない。あの重さと間合いには戸惑うものばかりだ。加えて、ブロードソードより細身であるから魔力伝達も早く、慣れ

ていた”時間差”が大きく異なってしまう。予想より、遥かに早いのだ。

そして未知の力となる『禁断の果実』。これについては長らく触れずに生活しようと考えているが、理解程度はしておかないといけないだろう。本当に”奥の手”を出さざるをえない状況になった時に、せめてどう使うのか、どういった効果を及ぼすのかを覚えていなければ、それはかえって自分の足を引っ張り死につなげる。

使わずに生き延びる事も出来るかもしれないが――どうせ持っている力ならば、それがどんなじゃじゃ馬だろうと、その力を使って生き延びたい。

彼はそうとも考えて、胸に手を当てた。

「おれはこんな調子で、大丈夫かね」

騎士にはなれない――もしかしたら、王は全てを知っていて見守っているのかも知れない。そう考えられるが、出来るだけ樂觀はしなくなかった。

「大丈夫よ、ジャンなら。どっちにしろ、今考えて、頭の中がまとまる？」

「んー、そうなんだよな。でも、考えてないと不安でさ」

「まったく」

ふう、と呆れたようにタマは息を吐いて、その暖かく柔らかい毛をジャンに擦りつけた。細く目をつむり、軽く濡れた鼻先が頬に当たる。どうやら顔を擦りつけているようだった。

「頑張り過ぎなのよ。たまにはガス抜きでもしなくちゃ。学校でも、せっかくの夏休みでも、ほとんど休んで無かったじゃない」

「いや、でも楽しかったし」

「楽しくても身体は疲れるの。だから今日だって寝坊したんでしょ？」

「む……確かに」

「ま、明日も学校だから休めないだろうけど……たまには、他人<sup>ひと</sup>のことより自分の心配もなさってことよ」

「ああ、そうだな」

——その日がきっかけになったのかは、正直ジャンにも分からない。

だが少なくともその日以降から、放課後まれに、大地や床から触手が突き出てゆらめいているという噂が出始めたのだった。

そしてそういった日に、ジャンが地下へとタマを連れて遊びに行くのは、殆ど日課になっていた。

## 不穏な空気

「ステイール、どうした？ 今日珍しく、ご機嫌斜めか」

戦術学の授業中、担当教員が不在のため、その日は自習になっていた。課題は一枚の用紙<sup>プリント</sup>だけで、似たような状況下をいくつも連ねた所に、指定された装備や部隊を生還させる、ないし任務を遂行するためどう動けば良いのか——それを文章として綴るだけだった。

開始三〇分もすれば課題は終了して、ヒマを持て余した折に、クリムがそう話しかけてきた。

監督教員は既に十分も前に眠りこけている。だから、騒々しいというわけではないが、それでも教室内はいささかにぎやかだった。

「……？ 質問の意図がわからんが、特にそういったわけではないぞ。どうしてだ？」

怪訝な表情で返すと、そうか、と呟くように頷いた。

鮮血のような朱の髪を軽く払って、頬杖をつく。視線は依然としてジャンを捉えていた。

「いや、常より刺々しいような気がしてな。まあ、ここ一週間ほどがそうだったから、ただ虫の居所が悪いというわけではなさそうだったが」

「刺々しい？」

「ああ、そうか——知らないのか——。異人種がとりわけ魔術やそれらに秀でていることは知っているな？」

それは個々の能力が抜群に高いから、というわけではなく、本質的に備える潜在的な能力のようなものなのだ。それは現在、魔術、魔法の発祥や起源を”溝の向こう側”と規定しているからであり、事実、この世界よりもより濃密にそれらが関わっているからだった。

故に異人種の方が魔術、魔法の熟練度は高いし、魔力の活用法も、魔石などの魔術仕様の物品への加工もそれらの方が随分と上手い。ヒトが持つ限界と異人種が持つ限界とはそれぞれ異なるし、それは



仕方が無いことだった。

「まあな」

「勘違いされては困るんだが、お前は隣の席だから、常にその体内で息づいている魔力を感じていた。意識などしていない。私の研ぎすまされた意識が、高ぶり渦巻く魔力を感じするのだ」

彼女は平静を装っているつもりなのだろう。得意げにふふんと鼻を鳴らす彼女だが、その頬が淡く染まり始めているのが良く分かった。なぜ自分で墓穴を掘れるのだろうかと感心しながら眺めていると、彼女はひとつ咳払いをしてから、続けた。

「この最近は、その魔力がやや変わっていた。もともと、魔力の”質”なんてものはその日の体調や感情によって異なるものだ。そうそう大きく異質なものになるわけではないが……そういう事だ」

「——でも、ジャンの魔力は他より少ないし、感じにくくない？ それくらい抑えられてるってことだろうけど……意識しないと、ぼくでも難しいけど」

そういった無粋なセリフは、会話をしている反対方向からやってきた。

ラック・アンは他意なくそう告げて、ジャンが顔を向ければ愛想を見せるようにはにかんだ。

「お、おいお前。わ、私がステイールを意識していると言いたいのか？」

身乗り出すように、異議申し立てる勢いで彼女が訊く。白々しくラックは肩をすくめた。

「別に？」

「……なあラック、一つ訊きたいことがあるんだけどさ」

息巻くクリイムは既に尾を逆立たせて、その短気さを見事に表すように取っ組みかかろうとするのを遮るように、ジャンは口を挟む。視線はクリイムからジャンへと移り、彼はなんだい？ と頷いた。「やっぱり、魔法を持っていると魔力の絶対量には個人差があるのか？」

「まあね。魔法を使えば魔力を消耗するし、体外から吸収するのは効率が悪いし。だから魔力が回復するのを待つのが一番早いんだけど、それにも個人差がある。そしてキミのように、通常生活での体内魔力を抑えて生活することによって、戦闘と日常とのメリハリをつけられる。そうすれば、魔力の回復や、絶対量も増える兆しにある……と言われている。ま、ぼくも他のヘタなやり方よりは、効率的な方法だとは思うけどね」

「そうか……。ありがとう、参考になったよ」

「どういたしました。ついでに、ぼくも訊きたいことがあるんだ。この問題なんだけどさ——」

ただクリイムの怒りをいさめるだけだった会話は、いつしか波長のあった者同士での話し合いに変わってしまう。

転入してきてから間もなくこんな仲になった二人に、クリイムは短く息を吐いた。

最近は何んだか蔑ろにされているような気がする。特に省かれているだとか、無視されているというわけではないのだが——まるで普通のお友達のような関係だ。

いや、それでいいのだ。

そうでなければならぬのだ。

だが、妙な欲求が胸の中に渦巻いているのを、彼女は知っている。彼女が師と仰いだ者から受けた愛情、その個人にとっては自分が特別な存在で居られた、そういった意味で必要とされたあの感覚。長らく森の中の生活で忘れていたが、ヒトとの、異人種なかまとの生活でそれを思い出してしまったのだ。

自分が社会の歯車として生きる生活。自分が必要とされる世界。ここに来て、最近では上手くやっていけると自覚しているし、ジャンもそう認めてくれている。

だがそれだけだ。

それ以上がない。

しかし自分がそれを、ジャン・ステイールに求めているのかと言

えば――わからないし、仮にそうだとしても認めたくはない。彼に  
そうする理由がないし、惹かれる要因も無かった。

「まったく、不抜けている」

彼女は自戒するように、頬をつねってから首を振る。

「意識を変えねば、な」

いつまで続くか分からないこの生活を、少しでも自分にとって快  
適にできるよう。そして今では自身の保護者となるエクレルの思惑  
通りの生活を。

面倒な話だが、それができていなければ命はない。

こいつらが卒業するまであと一年と半分――果たして耐え切れる  
か。

彼女はにわかな不安を覚えながら、授業終了を告げる鐘の音を聞  
いた。

同時刻。

――アレスハイム領、エルフェーヌ領その境目で落ち合う二人の  
男が居た。

砂粒の地。常夏の地。色気のない黄色がかった灰色の世界で、二  
人は共に白い外套を頭までかぶって居た。

「わざわざこんな所に呼び出して、いったいなんのつもりだ？」

まだ若い男の声が、イラついたように発される。それにわざとら  
しく怯えたように、もう一人がたじろいだ。

「そんなに怒らなくなたっていいだろう。何も、ここで貴男を殺すと  
いうわけでも、脅すというわけでもないのですから」

「まったく。砂漠中にあるエルフェーヌならともかく、アレスハイム  
の気候は安定しているんだ。この暑さは慣れてないから、俺にとつ  
ては酷く厳しいものになっている」

外套をはためかせ、肌と衣服の間に新鮮な空気を送り入れる。だ  
が熱された大気は、それ故に熱風となってしまう。逆効果だった。

男は短く舌打ちをして、やれやれと立ち直る。目の前の、耳の長い男は可笑しそうに肩をすくめた。

「相変わらず、堪え性のない人ですね」

「そんな話をしにきたわけじゃ、ないんだろ？」

「まったく、貴男という人間は無粋ひとですね。久方ぶりに再開したのですから、まずそれを宿そうという趣はないのですか」

「このくそ暑い中で、何を言ってやがる。……お前も相変わらずだな」

折れたように息を吐いて首を振る。

腰に備えた革製の水袋を手にとって口につけ、一口分だけ水分を摂取してから大きく息を吐いた。

「さ、本題に入ろうや」

近くの木陰オアシスを親指で促すのを見て、男は頷いた。

「いくらか楽になった」

頭に被る外套をはずして、黒と黄とが混在する髪髪の男は、エメラルドグリーンエメラルドの瞳で色味のない景色を眺めてつぶやいた。

「なら良かった」

妖精族エルフの男は、その細身を包む外套を軽く広げるようにはだけさせて、短く息を吐いた。

「それで、本題なのですが――ヤギユウ帝国、というものを知っていますか？」

「ヤギユウ……ああ、この大陸の遙か北方にある海岸線の。良く知っているさ、連中は土足で人様の領内に踏み込んだ上に、村一つを壊滅させたんだ。はぐれた部隊の独断だっているのが公式的な発表で、金で解決した。だが連中は挑発したのさ、溝近くで最近国力を増大させている俺たちを。今のうちに植民地か支配下か、そういうのにしておこうとな」

「今我が国で来客として迎えております」

「――ッ!? まさか、貴様ら……?」

今すぐこの男を殺そうという意味はない。殴ろうというつもりさえない。だが反射的に作ってしまった握りこぶしに、彼は少しだけ気まずそうな顔をした。

歯を噛み締め、胸いっぱい息を吸い込む。昂ぶる心を落ち着かせて、腕に入れた力を、感情によって増幅した魔力を意識的に抑え込んだ。

「彼らは近々、アレスハイムに攻め込む算段をしているようです。協力しなければ排除する。出来れば戦線協定を結んで欲しいが、不可能ならば補給基地として役割を果たして欲しい、と」

「……随分と本格的だな。理由はやはり、”溝”による地理的なものか？」

「恐らくは。我々も無論、アレスハイムに協力を致しますが……この大陸で、どこまで根回しがされているかが不鮮明で。私もこれから忙しくなりますよ」

「連中の評判は悪い。軍事力は”あの時”を見るに中々にシンドそうだが……ったく、よりにもよってこんな時に、か」

「何か特別に都合が合わないのですか？」

「いや。ただ聞いた話だが、養成学校は豊作らしくてな。上級生下級生共に、期待できる者がクラスに一人は居るらしい。それに、お宅の騎士もウチに来ているらしいしな」

男はまたうんざりしたように肩を落とした。息を吐き捨て、厄介だと言わんばかりに顔をしかめた。

——国同士の争いなんて、いつ以来だろうか。

少なくとも、溝から異人種らが来てからはそんな余裕なんて無かったから、一五〇年は平和だったのかもしれない。

もつとも、この大陸では、の話だが。

しかしまさか、アレスハイムがよりにもよって狙われるとは——愚かな選択をしたものだ。彼は考えて、つくづくヤギユウに同情する。

モンスター  
まず異種族を相手にしてどれほどの部隊数が残るだろうか。

そして疲弊しきった所で、精鋭部隊たる騎士団が畳み掛ける。これで終わりだ。後はない。確実に、作戦なんて言えないくらいの簡単な段取りで終わる。

異種族という自然の異形なる雑兵が、異種族戦に慣れていない兵たちを叩いてくれる。ただでさえ血の気が多い愚かな連中は、異種族というものに対して付き合おうとすら考えなかった連中は、自然淘汰よろしく殲滅されれば良い。

だが問題は、国交についてだ。

恐らくその作戦が実行されれば、アレスハイムがどれほど取り繕うとも、ヤギユウは一方的な嫌悪感を催すだろう。当分は、まともなやりとりができないことを覚悟する必要があるそうだ。

「なるほどな。だが、確定していない以上、想定としてしか作戦を立てられないな」

「情報が入り次第、早馬を走らせます」

「ああ、助かる。というか——お前はこんな事をして、国家叛逆にはならないのか？」

男が言えば、彼は驚いたように呆然と男を見つめてから、気が抜けたように笑った。

何か、間違ったことでも言ったのかと妙な羞恥心に駆られて思わず視線を外すと、すかさず彼は口を開いた。

「いえ、エルフェーヌにはそんな法律が無いですし——残念ながら、ヤギユウには交友関係は無いんですね。アレスハイムには様々な支援をしてもらいましたが、距離的にもヤギユウは……」

言わずもがな、と肩をすくめる。

確かに、と男は背にしていた木から離れて、砂粒の海を眺めては、ため息をついた。

「……っ、ユーリアをよこせば良かったと、今更心底思っている」  
舌を鳴らして、首を振る。

男は外套を頭にかぶって、背中を見せたまま、エルフェーヌの外交官へと手をふった。

「お気をつけて」

——これで建前上、気安くアレスハイムと関われなくなったわけだ。

馬も無く魔術も無く、その身一つで歩いて帰っていく男を見ながら、彼は現状を認識した。

エルフェーヌはヤギユウに力添えする以外の選択がない。国力がそう強いわけではない上に、いくら騎士を実力重視で選んだとしても、国自体が小さければ立ち向かえない。

ヤギユウは、単純な軍事力ではアレスハイムを上回っている。この大陸では随一と言っても過言ではないのだ。

だから、いくらああは言っても、ヤギユウには協力する。もつとも、前線に出るわけではないからそう気重になるわけではないが、彼らの気持ちを裏切るように胸が痛いのにには変わりがない。

「まったく。少しは平和を、満喫しようとは考えられないのですかね」

やれやれと肩をすくめて、彼も自国へと足を向けた。

——そんな表面下のやりとりは、その後もあと”数度だけ”続くことになる。

## 再検査

ある日の昼下がり。

親しみなれた団長の言葉に、意味が分からないといった様子で肩をすくめるようにして翼を広げ、鳥人ハルビュイアのアエロは眉をしかめて口を開く。

「正気ですか？」

怒りをはらんだような声音は、狭い会議室に響き渡った。

それは少なくとも上官に対する態度ではなかった。睨みつけ、気をつけすら解いている気安い立ち方は国が国であれば処罰対象にすらなり得たソレだ。もし——ちようど話題に出ていたヤギユウ帝国のように軍事国家であったなら、即座に怒号と共に組み伏せられていたことだろう。

だが、このアレスハイムでの軍とは飽くまで自衛手段でしか無く、軍内部での取り決まりはそう厳しいものではない。

だから上官下官の違いといえば、その鎧や制服の胸につける称号くらいのものだろう。が、彼らが基本的に行動する場所ではそれすら身につけていないという現状を顧みれば、殆ど自由、というのが多くの者の見解だった。

動きにくく、実用性もなさそうな装飾だらけの華麗な鎧を着こむ男は、無粋な質問だと言いたげに眉をしかめ目をつむり、刈りこまれた短髪を撫でるように手を伸ばした。

「現在考え得る状況で、もっとも最悪の展開を避けられる作戦だ」

「そんなもの、そんなお馬鹿さん達は勝手にぶっ潰しときゃいいんですよ。」モンスター溝起源種”にぐっぷり喰われればいいんです」

それに、とこめかみに青白い血管を浮かび上がらせて、ライトグリーンライトグリーの髪を苛立たしく羽毛の先で掻き上げて、歯を剥いて食ってかかる。

「そんな実験部隊のような連中……そこになぜ”一年”が入って



るのです——ッ!？」

——既にヤギウウの一件が騎士団、さらに戦地での役割は戦闘支援を主とする警ら兵の部隊長に情報が通達された現在。各々には特別な命令が下されず、事態の進展までは通常業務を課されたままだったが、現在アエロは、己が所属する第三騎士団団長から一つの命を下されていた。

それは騎士養成学校で目覚しい成績を残す生徒を選別し、緊急事態の為の臨時訓練を行えとの事だ。さらに実戦に限りなく近い状況を作り出すために、異種族が巢食う森にて訓練を行わなければならないらしい。

あらゆる状況を再現し、少年兵が如き戦歴を与えよというのが、一番の目的だった。

そして、今回の予期される侵攻は、以前の異種族侵攻時のように”教育”に使用する。つまり先と同様に学校からの生徒で部隊を構成し、教育区域と割り当てた区画に前線で戦闘する騎士団が部隊数を調節しながらそこへと部隊を流し込む。

彼らの戦闘は、そこで行われる予定だった。

——と言っても、対峙するのは息巻いて駆けてくるヤギウウではない。

予定されている戦闘相手は紛れもなく異種族だった。

砂漠を渡りアレスハイムに来るためには、遠回りしない限り確実に森を通過することになる。

アレスハイムはそれを利用して、多くの異種族をその地点に集中させておく作戦を立てたのだ。そして早々苦戦し始めるであおるヤギウウに対し、なんだどうしたと素知らぬ顔で小隊規模で巡回する騎士団が応戦。つまり自分でかけた罠に嵌めた獲物を、自らで助けてやるのだ。

自作自演も良いところだと、アエロはつくづく思う。

だがアレスハイムは、ヤギウウの侵攻については一切の情報を与えられていないというのが相手の認識だ。あらゆる手段を用いて知

っている筈だと理解していても、証拠がない。

だから、ヤギユウは一方的にアレスハイムに”借り”を作ることになるだろう。

それが、現在拳がっている中で最も平和的な作戦だった。

次点に拳がっているのは、通常通り殲滅するといったものだ。しかしどちらにせよ、期待され部隊に所属することになる生徒の役割は変わらない。相手<sup>それ</sup>が人間になるか、はたまた異種族になるかの違いだけだった。

「将来、このアレスハイムに利となる人材は丁重に成長させる。機会があれば、戦争さえも経験したほうがいい。今回は、”あの村”の生き残りも体<sup>てい</sup>よく居るらしいしな」

「あの村……まさか、あのユーリアさんが珍しく、八つ当たりするくらい怒ってたって言う……ヤギユウの偵察部隊が襲った村の事ですか？」

「ああ。その生き残り二名が、騎士を目指している。嬉しいことではないか？」

「ジャン・ステイルにサニー・ベルガモット……その中でも、ジャン・ステイルは以前の異種族侵攻の際にも選ばれていました」  
「戦闘面では頭ひとつ抜けているらしいな。秘める魔法によって、その特性も、今後の成長も大きく方向性が変わってくるはずだが……ジャン・ステイル、名簿にはその欄だけ未だ”不明”の印が押されている」

もう半年が過ぎたというのに、だ。

団長は呆れたとでも言うように肩をすぼめる。

「少年のためにも、我々のためにも、もう一度検査をした方が良いのではないか？ 半年の間型通りの訓練を重ねてきて、環境に刺激されて、少しはその己と言うものがわかってきた筈だ」

「ええ、そうですね。検討しておきます」

頷き、一礼。そうして背を向ける彼女へと、嘆息混じりに団長は言った。

「出来れば近い内に頼む。これは君の個人的感情が左右できる場面ではないことを、良く理解してくれなければ困るからな」

授業終了の鐘の音が鳴り、担当教員が明日には特別何があるわけではないと告げて、一日の教育課程が終了する。カリキュラム

各々は気の抜けた声を出して席から立ち、荷物を纏めて教室を後にする。

ジャンも同様だった。

「なあスティール、一緒に帰らないか？」

と、クリイムが誘う。彼女も随分と素直になって、今ではそれに加えてラックとトロスとで帰り道を一緒に歩んでいた。

「ああ、喜んで」

「……喜ばれても困るんだがな」

気安く頬を赤らめて、横顔を見せる。

ジャンはそれに軽く笑い、間もなく二人も合流し、教室を抜ける——すると、対面の窓際に立っている甲冑姿の男を、ジャンは捉えていた。そして男もまた、待っていたかのようにジャンだけを見て、壁に寄りかかっていた身体を引き剥がし、立ち直る。帯剣したままであったが、敵意もなく、どこか使命感に駆られたような面持ちで、立ち止まるジャンへと一歩前に出た。

「ジャン・スティールで間違いないな。悪いが、少し時間をくれな  
いか」

言われるがままに連れてこられたのは、それでも学校の敷地内だった。

ちようど校舎裏にあたる、焼却炉や”ノロの地下室”などがある場所。そこから程なく歩いた所にある、小さな納屋のような建造物。小奇麗な鉄筋造りの白い小屋だ。

促されて中へと入ると、どうやら武器庫らしい。壁には無数の剣

や槍が並び、そして扉があるが、恐らくその向こう側には防具が同じように備えられているのだろう。

ジャンが中へ入るが、ここまで案内した警ら兵らしき男は出入り口で足を止めたまま。そしてその理由を知るのは、室内中央に置かれたテーブルに肘を置き、椅子に腰を落とした一人の女性が居たのを認識してからだった。

両手のあるべき箇所には鮮やかな緑の羽毛。それは鳥の翼であり、下半身さえも鳥のソレである彼女は鳥人族と呼ばれる異人種だった。

「アエロ……さん？」

「あら」

と彼女は驚いたように、そして嬉しげに微笑んだ。

「名前を覚えてくれてるなんて嬉しいわねえ……！」

「ええ、名前くらいなら。それで、おれを呼び出したってのは、またなんでですか？ 用があつたなら、また前みたいに飛んできてくれても良かったんですが」

「あはは、そんな事まで覚えてるの？ もう、恥ずかしいなあ……それに、今日は仕事でね」

「仕事？」

彼が席について問う間に、彼女はポケットをまさぐって一つの石を取り出した。

それはもはや見慣れた、白濁色の魔石だった。魔力伝導率がこの上無く高いとされている種類の鉱物であり、主に武器や装飾品に加工され、魔方阵を刻んだり、あるいは魔術の紋様を刻んだりして魔術仕様へと精錬する事で、戦闘用にも扱えるすぐれモノだ。

以前ウィルソンから渡された多面体も、それを器用プリズムに加工した一種である。

彼女はそれをテーブルの上に置くと、気軽に気安い彼女らしからず表情をしかめ、気まずいようにジャンから少しだけ視線を逸らしてうつむいた。

「別に、ジャンくんの資質を疑っているわけじゃないのよ。気を悪

くしたら、ごめんなさい。だけど上から——適性検査の再検査要請が出ていてね。再検査の場合は、君が持っている魔術の刻印か、魔方陣を見せてもらわなければならないんだけど……ある、かな？」

その言葉に、ジャンは呼吸の仕方を忘れたように息を止めた。

いつか来るとは思っていた。だがそれは、卒業間近だと無根拠にそう予測していた。

しかしそれは思っていたよりも早すぎたのだ。

自身が魔法を持たぬことを自覚してから、まだ一ヶ月と経過していない。まさか、同時に彼女らもそれを知り、確信を持ったために再検査などを行おうとしているのだろうか。

もしここで魔法の有無が判然として、その処遇はどうなる？ 入学を許可したのは学校側だ。国だ。だが、どう処分するかも学校側国だ。こちらが……ジャン・スティールが不正をしたと判断するに違いない。

ならどうなる。逮捕して、独房に押し入れて……この時点では、まだなんの機密も情報も手に入れられていない。ならばそう罪が重くなるはずもないだろう。だが、この学校を追い出されるのは確実――。

「……ジャンくん？」

そこまで考えて、止めていた息を勢い良く吐き出して、胸を抑えながら肩を激しく上下させ、呼吸する。

声をかけられて我に返った。

それに怪訝そうな表情で、アエロが続ける。

「どうしたの、体調でも悪かった？」

脂汗がにじむ額を拭いながら、ジャンは背もたれに預けていた身体を起こし、座り直す。

感づかれないように深く息を吸い込んで、アエロを見据えた。

「いや、今日は戦闘訓練があったんで、ちょっと疲れてただけですよ」

「あら……それじゃあ、また後日にした方がいいかしら？」

「ああ、いえ。大丈夫です、問題ないです」

「本当に？ 別に急ぎというわけじゃないから――」

「気にしないでください。ほんとに、ちょっとぼーっとしてただけなんで」

食い気味に遮ると、少し驚いたように目を大きくして、そう、と顔に微笑みを湛えて頷いた。

「なら、始めようか」

ジャンにはそれが、どうしようもなく死刑宣告に聞こえて仕方がなかった。

自己申告だったが、ジャン・スティールは思いの外素直に肢体を晒した。

腹には内なる筋肉が表面にまで浮かび上がり、六つに割れているのが良く分かった。図太いとは言えないが、がっしりと筋肉がついた対の腕。筋張った首に、衣服を脱げばあらわになる、割合に大きい肩口。

筋肉質な身体があらわになる一方で、同時に彼の肉体に”意外にも”刻まれていた魔方阵を、彼女は発見する羽目になっていた。

魔術は、そう詳しくない方である。だがそれは昔ながらの、古典的な魔方阵として有名なものであるのを、アエロは知っていた。

ジャンの背中に広く刻まれる魔方阵。小難しい魔法文字ルンに、特殊な配置の紋様。そして力の象徴たる剣が交差する柄。

それは見紛う事無く、分かる。

肉体強化魔術パワー・ポイントと呼ばれるそれは、肉体に魔力を流しこんで強制的に干渉、増幅し、肉体の総てを活性化させる強化魔術だ。本能的に制御している力を解放するに等しいそれらは、故に肉体に高負担となる。

だからと言えるが、その為に最近ではあまり見ないそれだった。しかし、経歴を見るに彼は六年ほど鉱山で働いているのだ。恐らく、崩落などから身を守るために、それを刻むことを義務とされて

いたのかもしれない。

「なるほど、ね」

彼女は頷きながら、次いで右肘に同様に刻まれる魔方陣へと視線を移した。

直立不動で、頷きさえしないジャンはただ目をつむり、瞑想でもしているかのように微動だにしない。

眠っているのだろうか——アエロは思いながら、軽く屈んだ。

「これは……？」

見たことのない形の陣だ。

どこかの魔術師のオリジナルだろうか。

しかしこんな箇所に、迷いなく魔方陣を刻むとなれば——これをしたのは、随分と手だれだろう。魔術については門外漢とまでは行かぬが、それでも他よりやや疎い彼女でもそう認識できた。

「これは、体内の魔力を体外へと放出するための魔方陣です」

つぶやきを拾い、ジャンが答える。

「そう」

納得し、そして背中のとそれと関連性があるのだろうか造りに、頷いた。

「それで」

彼女はそこで一度止め、咳払いをしてから続ける。

ジャンは思わず肩を少しだけ弾ませたが、アエロは構わず言った。「君は、魔法についての自覚はあるの？ あるのだとしたら——」

どんな系統の魔法かしら。

彼女は無情に口を動かした。

具現化系か。あるいは属性を持ったそれらか。転移か、分解・再構築系か、錬成か、はたまた未だ現れぬ未知の魔法ちからか。

ジャンはツバを飲み下し、喉を鳴らす。

額から流れた汗が頬を伝う感覚が、己の研ぎすまされた感覚を刺激する。

いつか——ラックは、ジャンの体内の魔力は抑えこまれているか

ら少ないと感じるのだと言った。

だがそれは間違いだ。

肉体強化魔術を使用しない限り、体内に残されている魔力は限りなく少ないのだ。だから、少ないと感じるのは当然だし、抑えこむ以前に絶対量がまず無いのだ。あの期待は、まっすぐにジャンの胸に突き刺さっていた。

「自覚は、あります」

「そう。それは、どんな――」

「おれには魔法がない。その自覚が、あります」

彼女の返しを許さぬように再び遮り、ジャンは振り返る。そんな不意気味の行動にあっけに取られたアエロへと、ジャンは再び見据え、悲観とも失意ともつかぬ感情の入り混じった表情で、繰り返した。

「おれには魔法がありません。魔石が反応したのは、肉体強化魔術パワー・ポイントが肉体に魔力を注いだからです」

逃げ場など無い。

ここで偽る意味はない。

仮に分岐点があったとするならば――おれにとってにそれは、今なんだ。

ここで逃げて、おれはまた選択を誰かに委ねて、誰かに促されて生きることとはしたくない。

おれはおれが決める。

無いものはないし、あるものはある。

だったら、おれはおれの中にある力だけで生きていく。

ただ突き進む――それだけだ。

汗はひき、表情には余裕が戻ってくる。

それとは対照的に、彼が発した言葉を、理解できぬといったように硬直するアエロがあった。

「魔法が、ない……？ ど、どういう事？」

彼女を横目に、ジャンは脱いだ服を着直していく。そうしながら、



簡単に答えてやった。

「そのままの意味ですよ。どんな処罰でも、おれは甘んじます」

「ちょっと待って、この学校は、魔法を持つことがまず受験資格の一つだったはずよね？」

「ええ」

詰襟の白い学生服を着こみ、ボタンを締める。

「だけど、魔法がない」

「魔石は、おれの持つ魔術によって体内に蓄えられた魔力に反応しただけですからね」

だが、それが妙に滑稽に思えてしまって、ジャンはホックまで締めてから、そのすべてを外して全面を開放した。すると中に着る、輸入品の綿生地ワイシャツがあらわになった。

「……前例が無いわ」

それは失望の意を孕んで漏れた言葉ではなかった。

単純な驚愕だった。

そんな事例もあるのかという、思わぬ発想に純粋なまでに驚いていた。

そうか、この魔術にはそういった使い方であるのか——という驚きと同時に、それをしれっと答えてみせるジャンに、不信感を抱く。

その様子はまるで、バレてしまったては仕方ないと開き直るそれに等しかった。

ならば、意図的にここまでを過ごしていたのか？ あわ良くば、魔法を持たぬまま騎士になろうと。その高い戦闘能力に驕って？

彼はそんな……それほどまでの”クズ”だったのか。

眉をしかめ、ジャンを見る。すると視線は交錯し、蔑みの感情を持つ視線を受けて、ジャンは肩をすくめた。

彼はそのまま、手提げのカバンを手に取り、ついで白濁色の魔石を手にとってみる。

それは相変わらず、何の属性もない、純粹に魔力だけを感じした

”透明の輝き”を放っていた。

短い嘆息の後、再びアエロへと向き直る。魔石を手渡せば、それは彼女の羽毛の中で淡い緑色の輝きを漏らし始めていた。

「おれは、国の選択に甘んじます。おれは、おれがしたこと責任くらいはとるつもりだから」

そうそう大げさな言い方になってしまったが——見ようによれば、国を騙したのだ。

なんらかの処罰があってもおかしくはない。

ましてや、この学校が国の軍事力に直線関係してくるような施設だからなおさらだ。

ジャンは飽くまで表情を消し、アエロの横を通り抜ける。その所作、顔つきには——初めて会った時のような気さくさや、あのこっちまで恥ずかしくなるような初々しさはない。それは既に、決意した男のものだった。

少年の部分は一切無く、青年としてもその精神は研ぎ澄まされていた。

——アエロの意識が己の思考から外れたのは、背後で扉が閉まる音が、小さくしてからだった。

## ガス抜き

アエロは、まるで突然重大な秘密を暴露されたかのように、詰所に戻ってもその頭の中では物事の整理がつかぬままだった。

だから一先ず報告書を書こうと思うが、混乱しているままではともに文章が成り立たず、彼女は心底困っていた――その折に、団長が顔を出してきた。

今日のうちに再検査を行うということは既に伝わっているから、彼女は彼女なりに、しどろもどろではあったが、相談でもするように総てを吐露した。団長はカウンセラーよろしく頷き、肯定し、受容する。そうして、状況を改めて説明して彼女自身も落ち着き始めた頃、同様に団長も事態の大体の全容が見えてきたのだ。

つまり、それはごく単純な結論で――ジャン・スタイルは魔法を持たず、つまり本来の受験資格を持たずに養成学校に入学したというものだった。

そしてそれが判然とした時、その問題は既にある一つの”事例”<sup>ケース</sup>として、彼らの間で取り扱われることになる。

――夜も更け、サニーにおやすみと告げて部屋を後にしたジャンは、そのまま自室に向かうでもなく、少も躊躇う様子も無く階段を静かに降りていった。

普段着のままで、足音一つ立てずに玄関の前に立つ。昂ぶる感情が、腕に伝播して思わず震えたが、彼は構わず強引にドアノブを掴み、ひねり上げた。

「どこかに出かけるの？」

背後から気配もなく声をかけられる。だが不思議と驚くことはなく、まるで予期されていた出来事のようにジャンは動きを止めて、自然に振り向いた。

暗がりの中にある小さな影。それはテポンのものだった。

「ええ、眠れないんで、夜の散歩でもと思って。テポンさんもうどうです？」

訊いたのは、本気で誘ったわけではない。

彼女がこれに乗ってこないと確信してのことだ。そして同時に、下手に勘ぐられないようにした配慮でもある。

「いや、もう寝るけどね。ただ明日も学校だから、あんまり夜遊びは感心しないわよ？」

「はは、わかってますって。一時間もすれば戻ってきますよ」

「そうなの？ ま、それじゃあいってらっしゃい」

「ええ、行ってきます」

軽く手を上げ、挨拶に応じた後、再びドアノブを捻って扉を押しかけた。

月明かりに照らされる石畳の往来は、昼間とは打って変わった物静かな様子に、ジャンは新鮮さを感じていた。人通りは少なく、またそのほとんどは警ら兵のそれである。

ジャンは足早になる己を抑えることは出来ず、そして気がつけば走りだしていた。景色が早送りになって背後へと流されていく。闇の中、不鮮明な視界の中で構わず突っ込んでいく無防備なままでありながら、ジャンは既に他者への配慮や己へ降りかかる危険など、その一切を無視していた。

「めざ……めろ……っ！」

胸の奥底から、感情のままに言葉が吐き出される。

体内で渦巻く魔力がにわかに膨張して、背中の魔方陣が熱を持つように、淡く輝き始めた。

「発現<sup>めざ</sup>、めろ——っ！！」

背部の衣服がはじけ飛び、それと同時に背後へと虹色の光臨が幾重にも重なって溢れ、魔方陣の輝きはその中心を貫いて——置き去りにされた。

ジャンは肉体の強化を自覚すると間もなく大腿筋を収縮させて、力強く大地を弾く。空間を切り裂いて垂直に跳び上がるその肉体は、いとも簡単に建造物の屋根へと至り、着地と共に膝を折り曲げて衝撃を殺す。

「くっ、そ……っ！」

屋根を弾き、他の建物へと。さらに次へ、次へ。風を纏い、闇の中に迸る一閃の輝きと化してジャン・スティールは宵闇を切り裂いた。

やがて目前に、その屋根よりもやや高い外壁が現れた。

だが止まる訳にはいかない。

止まれば、この壁を飛び越えられなくなる——決意する間に、その超加速した肉体は、百メートル近く離れる建造物の、最後の屋根の先端へと迫っていた。

「おれは、なんで——」

後悔するはずはないと思っていた。

だが実際に全てをさらけ出してみれば、なんだこの醜態は。胸を締め付けるこの苦しみに耐え切れずに家を飛び出して暴走するなんてのは、最早言うまでもなく始末に負えない。どうしようもなく精神は脆弱で、成長したと思っていた己は錯覚だったのだ。

「はじけろ……はじけろおっ！」

右肘の布がはじけ飛ぶ。暴走するように渦巻く体内の魔力は、まるで桶に貯めた水が小さな穴から吹き出るように掌中へと集中し、魔方陣が制御するように右腕に纏われた。やがて可及的速やかに体内の半分以上のそれらが体外へと放出された頃、ジャンの姿勢は限りなく前かがみであり、そしてその右拳は、既に屋根の端を狙って振り下ろされていた。

「——魔力放出……っ！」  
アウト・ルック

腕にまわりついていた魔力は、その言葉と共に拳に移行、集中。そしてそれが頑強な人造石へと触れるか否かの刹那、魔力は全ての存在を拒絶するように——爆発。人造石の一部は爆ぜて破片を宙に

弾き、拳と屋根とに圧縮された魔力の衝撃が、容易くジャンの身体を吹き飛ばした。

空高く、拳を振り下ろした前屈体勢のまま、無防備なまでに空を舞う。それはただ吹き飛ばされているだけだったが、再び右肘の魔方陣から魔力が溢れば、体勢を整えて推進する。それは確かな滑空となって、やがて眼下に迫った外壁に、ジャンは足を伸ばした。魔力放出を遮断し、体内に残った魔力で再び肉体を活性化させる。勢いによって、足裏にある確かな感触は、滑るようにして背後へと送られてしまう。だがジャンは構わず、そのまま僅かに腰を落とすと、それまでと同様に足場を蹴り飛ばし、空を切り裂き月に届かんばかりに、高く、己の理想とした己よりも遥かに高く、飛び上がった。

その瞬間だけは、ジャン・ステイルという自分を忘れることができていた。

「はあ……っ、はあ……っ——おれは、なんで、おれは……！」

街から遠く離れた草原で、ジャンは足を止める。全身の筋肉はズタズタに裂けてしまったように激痛を覚え、関節、骨は悲鳴を上げるように軋んでいた。

身体はもう限界だった。

立ち上がれば、生まれたての子馬のように膝がガクガクと小刻みに震え、体勢を維持できない。心臓は今にも破裂してしまいそうなほどに鼓動を繰り返し、汗に濡れた服は絞れる程に水気をはらんでいた。

どれほど走ってきたのか覚えていない。

もう魔力も無いから、歩いて帰っても朝方になってしまうだろう。だが、もうそれもどうでもよかった。

——腕を振り上げ、全身全霊を込めて大地を殴る。鈍い打撃音を鳴らすだけで、大地はえぐれず、拳に鋭い痛みが走るだけの無意味で虚無な行為だった。しかし、それでも腹の奥底で吐き出されるこ

と無く溜まっていた怒りが、にわかに緩和されたような気がした。

こんな八つ当たりは彼自身、初めてのことだったのだ。

今までは、何があっても耐えてきた。我慢してきた。そうすれば、いつのまにか忘れていくからそれで十分だったのだ。

しかし今は違う。もう我慢もできないし、耐えられない。

もしあの時、再検査を拒否して、あるいは誤魔化していれば……アエロならば、騙し切れていたかも知れなかったのに。

——なぜ口にした。

自問自答は、その行為に対する後悔の深さを表すように、既に幾度も繰り返されていたものだった。

——なんで、なんでおれは、自分のプライドなんかのために……！  
「くそっ！」

また地面を殴れば、小石が皮膚を裂いて突き刺さる。息を殺して呻くが、ジャンはそれでもまだ地面を殴り続けていた。

「なんでおれには」

村を壊滅させられて、それでも命を助けられたから必死に生きてきた。体を鍛えて、自分で金を稼いで、それでようやく念願が叶おうとしていたのだ。夢は既に、手が届く位置にまで迫っていた。

しかし、無に、水泡に帰した。最終的にそうしたのは、自分の手によって、だ。

「なんで、どうしてよりによって……」

あれほどの苦痛に耐えてきたのに。

おれだって、弱かったわけじゃない。自分だけが不幸だと嘆くわけじゃない。だが少しくらいは、せめて自分が目指した場所に立てる”権利”くらいは、平等にあっても良いのではないかと、思っていただけだ。

現実是非情だ。

たかが、魔法がないだけで。

それがないだけで、ジャン・スティールの夢は、望みは、救いはいとも簡単に潰えてしまった。

「おれには、魔法がないんだよ……っ！」

最後の一撃とも言える、体力の総てを出し尽くす殴打。大地はびくともせず、傷一つない。己の無力さを再確認させてくれるそれが、むしろ清々しくさえ感じていた。

——こんなに感情的になったのは久しぶりだ。

草原に横たえて、無数に星が散らばる夜空を見上げながら、胸いっぱいに吸い込んだ息を吐き出した。

外気に触れて蒸発する汗が、感じる冷気が熱した肉体に程良く心地よい。

静かに目を閉じて、何もかもが空っぽになった身体を感じながら、全細胞に針を突き刺したような痛みを覚えながら、されどそれさえも気持ちよく感じていた。

自分はどうしようもない。

他者からの期待や評価は、所詮上辺のものにすぎない。しかしそれは、誰しもがそうであるはずだ。つまり、他者の前で自分がどう取り繕えるのか、どう体裁を整えられているのかが、他者にとっての自分の実力だ。

もういい。

明日は学校を休もう。

アエロだって、まさか明日までに処遇を決定させるはずがない。

あの顔を見るかぎりでは、彼女自身も戸惑っている様子だったから、一週間位は待ってくれるだろう。

騎士になれないのなら——少し、世界でも回ってみようか。その為には組合ギルドの仕事で資金を貯める必要がある。

それに、サニーだってもう十九だというのに、独り立ちができていない。おれが居なくても大丈夫な位には慣らしておこうか——なんだ、思っていたよりも、騎士を目指さなくても忙しいじゃないか。ジャンは無自覚に、口元が緩んでいたことに気がついた。

汗だか涙だか分からぬ液体が蒸発して、顔の熱が引いていく。もう身体を鍛えた意味も、魔方陣を刻んだ意味もなくなった。



ジャンは静かに目をつむり、自然にその身全てをまかせて、闇の中に意識を沈め始めていた。

「――こっちの方か？」

「――ああ、確かに。少なくともオレはこっちから声を聞いた」  
静寂に支配されていた空間は、不意に紡がれたその声音によって破られる。

身体を起こそうとすると、既に始まっているその筋肉痛やにわかな関節症によって激痛が走る。痛みに喘いで身体は草原に沈み、足音は、気配は、話し声が、如実に近づいているのが良く分かった。  
今、ジャンにあるものは何も無い。

それ故に研ぎ澄まされた五感が、今更になって奇妙な二人組を捉えていた。

しかし、仮に一方的に相手を察知し構えられたとしても、動けなければそこに優位性などは存在しない。

「ん……、おい」

「ああ」

やがて、為すすべもなく、立派な鎧を着込む二人の男は低い声で示しあった後、ほとんど同時に剣を抜いて構えた。

草原に、半身だけ起こして横たえるジャンへと敵意むき出しで現れた二名の男に、彼は素直に両手をあげて無抵抗の意を示す。

見なれない鎧だと、ジャンはまず思った。

流線形の肩当ては外側に向かうほど細く伸びて鋭利になる。幾枚ものプレートを重ねたような甲冑はまだ新しく、脚甲の膝部には鋭く上がった棘が、そして足甲の先端も同様に尖る。

そして羽織る黒い外套の背には国章が刺繍されているが、ジャンの位置からではそれを見ることは出来なかった。

「何者だ？　俺たちがここに来ることを知っていて……そうか、罠か」

「ちよっ……な、なに言ってんだよ、あんた。罠？　こんな見晴ら

しの良い所で、待ち伏せなんてするわけないだろうが」

柄には見事な装飾の剣。月明かりに照らされる顔は、まだ若い男のそれだったが、表情に同様も何も無いのを見れば、やはり修羅を経験し場数を踏んでいることが分かった。

ならば軍兵か、あるいは騎士か。

しかし、どうみてもエルフェーヌのそれではない。だとしたら、こんな夜遅くにやってくるのはどこの人間だ？

「方角からして、アレスハイムの人間か。まだガキだな、こんな所で何をしていた？」

男が冷静に、冷徹に訊いた。

——熱していた意識が瞬く間に鎮静とした。捨てかけていた思考を掴み直して短く一呼吸を置いて、彼は自身の状況を再認識しながら、己の存在が如何に国に不利益を、迷惑を被らせるかを考えながら、口を動かした。

「ええ、そうです。少し嫌なことがあって、走って気分を紛らわせていただけですよ」

そこに嘘、偽りはない。

少し表情を引きつらせて、怯えているという様子を見せながら、内心では面倒な事になったと、胸の奥から息を吐き捨てていた。

「実は俺たちは隠密任務訓練でな。誰にも発見されずに街に戻らなければならなかったんだ」

（——声のした方向へと自分から近づいておいて何を言っていやる）

「そうなんですか」

しかも、訓練ならばそこまで闖入者に不審がる必要もない筈だ。客観的に見れば、彼らのほうが不審であるのは明らかなのだから、そのセリフが欺瞞であるのは明らかだった。

ならば、何者だ？ 隠密任務、というのは近いのか、恐らくそのとおりということなのだろう。

だとすれば、偵察か。

（敵国……？）

政治の話は得意ではないジャンは、そこいらについての察しは鈍かった。

現在、アレスハイムには敵対国家は存在しない。貿易や技術の共同開発などで多くの国と関わっているが、どれもこれもが建前上は少なくとも友好的であるし、面と向かって嫌悪を示す国は”今のところ”は存在しない。

それに近しい国とすればやはりヤギユウ帝国だが――やはりそれを、ジャンが知る由もない。

「ああ、だからお前に見つかったという事実を処理しなけりや、俺たちは教官からこっぴどく叱られちまうんだ」

「うわ、大変ですね。……処理っていうのは、具体的にどうするんですか？」

腰の脇に手を下ろして、力を込める。尻を浮かして足を折り曲げ、膝を立たせる。ジャンはそうして立ち上がると、全身の痛みに喘ぐ暇もなく大きく二度ばかり呼吸を繰り返して、草原から舗装された道へと降りた。

魔力は大体、半分程度は回復した。全力を尽くせば街まで戻れるだろうが……肉体は耐え切れるだろうか。今の状態を見れば、休めば治る程度の疲弊だ。だがこれ以上の無理を言わせれば、正直な所どうなるかわからない。それ以上の領域に、彼は踏み込んだことがなかった。

相手は他国の人間だ。しかも、偵察任務で来ているとすれば、無論、相手に対してみれば自分たちの存在を知覚した者を殺害することも厭わない。

一方で、ただの国民であるジャン・スティールは個人の私情で手を出すことは許されない。その選択で、どれほど国が立場を失うか、計り知れないからだ。

（くそ……せっかく、いい気分なのによ……！）

二名の男はそれぞれやや左右に別れて、剣を構えた。表情には、

不敵な笑みさえ湛えている。

余裕の表情だ。

そして眼光は鋭く、殺意に満ちていた。

「分かりやすく説明してやると……こうだよッ！」

深く踏み込み、縦一閃。距離が離れていたと認識していたはずなのに、気がつけばその剣先は肩口を通り越して肉を切り裂かんと閃いていた。

ジャンは慌てて地面を弾くように横に飛ぶ。そのまま草原に飛び込んで――肉体強化を発動。させようとした刹那、全身に電撃が流れたような激痛が走り、不発に終わった。

息が詰まり、思わず意識が飛びかける。眼球が圧迫されたように視界が狭まり、世界から自分以外の総てが排除されたかのような錯覚に襲われる。

背中は輝きすらせず、されど発動には十分なほどの魔力量はささやかなれど、肉体には戻っていた。

「くっ……限界、か……！」

「逃げてんじゃねえぞ、おら！」

素早く回りこむ男が、再び鋭い剣戟を払う。ジャンは大げさにのけぞって尻餅を付けば、剣先は僅かに頬を掠めただけで通りすぎていった。

（最悪だ――最悪すぎる！）

転がるようにして男たちから離れようとするが、彼らは駆け寄って離れない。受身を取るようになって何とか立ち上がるが、そうすれば逃げることもままならぬほど肉体が激痛に悲鳴を上げていた。

「走りまわってお疲れか？　なら楽にしてやるよ！」

「ふざ、けんな……！」

薙ぎ払う一撃。ジャンはそれを深く地面に沈むような進撃で避け、頭上でそれがすぎるのを感じながら、迷いなく男へと特攻した。

右腕を抱くようにして、肩を突き出して危険を顧みずに突撃。そ

して男は不意気味の行動に、避ける間もなく、ジャンの攻撃を甘んじた。

堅い衝撃がジャンの肉体にそのまま跳ね返る。だが少なくとも、男は反動によって大きくよろけ、その背後に並んだ相棒にぶつかってしまった。

「うわッ！」

「てめ、どこ見てんだ！」

よろけて無防備となる男へと、ジャンはさらに踏み込み、大げさなほどに右腕を振り上げた。

肘の陣が鈍く輝く。

残された魔力が、行き場を失っていた力が、本来あるべき手段に使われることを喜ぶように右腕へと集中する。

「解放だ——魔力放出っ！」  
フット・ルック

体外から背中 of 魔方阵に強制的に干渉させて、一時的に強化を行う。さらに物質を透過できぬ魔力は、街を出る際の屋上と同様に、鎧と拳に挟まれて高圧縮し——踏み込んで拳を穿てば、それ故に男の腹部の鎧は爆発と共にひしゃげ、足が浮かび上がり、凄まじい衝撃によって後方へと力任せに押し出されていった。

間もなく体勢を崩して転倒し、呻き、あるいは悪態をついて立ち直ろうとする。だが、攻撃を直接受けた男は腹部を押さえるばかりで、四つん這いから体勢を変えることができないようだった。衝撃は鎧を貫き肉体をなぶった。故に、それも当然の結果とも言えたものだった。

そしてまた、ジャンへの負担も限界を超えてしまったようだった。「っ……、まあいい。言えない、よな、あんたらは。こんなガキに、手ぶらのガキに、苦戦した、だなんて」

普通に考えれば、先の通りに下手に手を出せばジャンの行動が国を左右することになる。

だが今は、それ以前の問題だ。

敵は彼が言ったとおりに、子供だと侮った相手に苦戦している。

相棒などは不意を打たれて鎧をひしゃげさせて、ダメージを負ってすぐさま戦闘に再入できぬ程の痛手を負っていた。

これはつまり、命がけで逃げる事無く、命がけで戦えるということを教えてくれていた。

「くそがきが……、そんなに死に急ぎてえか」

剣を高く構え、切先をジャンに向ける。

男は嘲笑じみた声を漏らして、さらに続けた。

「本気でやってやるよ……発現めろ——」

剣が輝く。眩く、闇を白く塗り替えるほど眩く光るその反応は、魔術などの反応<sup>それ</sup>ではなかった。

魔法——ジャン・ステイルが本能的に察知したのは、それだった。

「付加属性」  
アトリビュート

輝きは、その直後に臨界点を突破したかと思うと、さらにバチバチと迸る電撃を纏って始めていた。

肩にまで引き上げた剣の、突きの構え。男はそれで構わず、十数歩ほどの距離を持っているのにも構わず、相手がまるで眼前にて待っているかのように踏み込み、剣先<sup>きつさき</sup>を穿つ。

と、その先から伸びた電撃が目にも留まらぬ速度でジャンへと向かい——反射的に横に飛べば、彼が居た虚空を電撃が貫き、その背後の大地を、まるで巨大な槌<sup>ハンマー</sup>で抉ったように地面が弾けた様子が、爆音と共に目に写った。

「ちっ、避けやがって」

さらに一閃。

下から振り上げる袈裟斬りは、その切先から増幅した火焰を伴って振り上げられ、大地を這う獄炎、加えて斬撃となって迫る業火が共に容赦なくジャンへと切迫した。

——肉薄する、純粹な魔力を伴った攻撃。

それに、指先がぴくりと弾けるように痙攣した。

心臓が、緊張や恐怖故か——あるいは高まりを覚え、期待をする

ように激しく力強く高鳴った。

意識が、僅かに肉体からブレる。意識が今まさに迫る火焰から、己の肉体へと移ってしまった。

もう避けられない。

為す術もない。

だというのに、ジャンは己の胸に手を当てて、魔力を集中させていた。

「覚醒<sup>めざ</sup>めろ」

口が勝手に動く。

身体が乗っ取られてしまったかのように、彼の意識とは別に、手は、喉は、そして魔力は自動的にとも言えるほど勝手なまでに動いていた。

胸の手前に、魔方阵が浮かび上がる。極彩色の小さなそれだったが、声と共に、大気中からの魔力さえも取り入れて高圧縮されて何かを”精製”し始めているのがよく認識できた。

（なんだ、これ。おれは、どうなったんだ……？）

魔方阵から姿を表しつつある球体。

それがなんであるか、そして火焰が肉体を焼き尽くすまであと何秒の時間が残されているのか——同時に考えながら、声は紡がれた。

「<sup>フォービドゥンフルーツ</sup>禁断の果实」

ジャンが精製されたその深紅の果实を手取るのと、巨大な火焰が足元から、そして眼前から共に迫り彼を飲み込んだのは、ほぼ同時だった。

## 初めての魔法

「ふう……眠れないなあ」

アエロは深夜になっても、やはりジャンのあの言葉が頭から離れずに居た。

団長の、「それでも魔石は輝いたのだろうか？」という言葉から、魔術作用の一切ない状態での再検査を再要請され、また後日彼の元に行かなければならないのだが――そもそも仮に、本当に彼に魔法がなかったとして、それは罪と相成るのだろうか。

それは明らかなまでに国の不手際だ。そしてあの時にわざわざ、隠し通せたであろうものを暴露したという事は、彼自身、魔方阵によつて魔力が供給されていた、という事実に気づいたのは近頃の筈だ。

知らなかったのならは何をしても良いというわけではないが……それでも王が自ら選別した人選だ。下手に退学になるわけじゃない。そして何よりも、今もつとも目覚ましい成長を遂げている少年だ。それをむざむざ、手放せるだろうか？

今日は思考が情報に追いつかずにフォロー出来なかったが、また明日にでも行って、早く彼を安心させてやろう。根拠はないが、それでもそう大事になることは無いのではないか、と彼女はそう考えていた。

なによりも、そういった中でも初めての事例<sup>ケース</sup>だから、何らかの配慮がなされても可笑しいことはないのだ。

寮を出て、夜風に当たる。

闇に散りばめられた煌く星が輝きを放ち、三日月が夜道を照らす。今日は久しぶりに、夜の散歩と洒落こもうか――そう考えた最中、タイミング悪く背後から迫る足音を聞いて、彼女は振り返る。

そこに迫っていた影は立ち止まり、背筋を伸ばした直立姿勢で軽く敬礼した。



「夜分遅くに、失礼致します」

りん、と鈴がなるような透き通る声音。彼女は月明かりに色素の薄い金髪をきらめかせ、私服姿でそこに立っていた。半袖に、いつもとは異なるパンツスタイルの彼女は第三騎士団副長となるアエロの部下だった。

彼女は答礼し、気軽に立ち直る部下へと、同様にいつもどおりの気軽さを以て口を開いた。

「どうしたの？　こんな夜に、あなたも散歩かしら」

アエロの言葉に、『クレア・ルーモ』は苦笑するように首を振った。

「私は、まだ実力面が不確かです。もしよろしければ、明日以降、副長のご都合がよろしい時で良いのですが、稽古をつけていただきたいという相談に来たのですが――」

彼女の夜は、そうして更けていった。

テポンは夢の中へ。

そして彼を取り巻いていた多くの友人らは、全てが眠る丑三つ時――。

爆裂音と共に塗りたくられた闇は一瞬、真っ白な閃光を上塗りし、やがて真紅の火焰の輝きが周囲を照らし始めた。その獄炎とも言える炎に飲み込まれたジャンは、長い間切っていなかった為に伸びた髪の毛の表面を焼いて縮毛し、そして衣服からあらわになっている肌を焦がして居た。

ジリジリと内部を焼き尽くす高熱に、また全細胞を死滅させる灼熱の中で、それでもジャンは何かにとりつかれたように握りしめた果実――リンゴとも、ザクロともイチジクともつかぬそれを口に運び、歯を剥いてかじりつく。

新鮮な果実は音を立てて一部を引き剥がし、ジャンは口の中に広がる、味もない、食感もない魔力の感覚だけを確かに覚えて……口

腔内の破片の消失と共に、手の中の果実も瞬く間に魔力と化して霧散した。

（こいつは……！）

体内に広がる特異な力の存在を自覚する。

そしてそれは、意思も思考も一切無視して、体内の魔力を伴って発動。瞬時にジャン・ステイルを中心とする暴風が吹き荒れて、つい数瞬前まで肉体を消し炭へと変えんとしていた炎は、くすぶる暇無く周囲に飛び散り、消火された。

周囲は再び闇に包まれる。

だというのに――身体は火照り、それまで身体を動かすのもやっとだった筈なのに、激痛は失せ快復。加え、肉体は何かを高揚するように、内から覚えのない原因不明の溢れ出る力を持て余していた。「なんだ、こりゃあ……？」

眩きが漏れるのと同時に、ジャンは相手がうろたえるのを見る。

「てめえ、やっぱ魔法持ちか……だが――」

「な、なにを」

「面白くなってきたじゃねえかッ！」

両手で構えていた剣を片手に持ち替え、男は意気揚々とやや前屈姿勢になってから、大地を弾く。修錬されたとも言える行動に、ジャンはその反応を鈍くする。

しかしそれまで、その魔術を発動にまで至らしめた彼の”無意識の部分”が、さらに肉体を駆った。

『付加属性――っ！』

声が重なった。

男の剣が淡く輝き、凍えて大地に霜を降ろす。そうしてその刀身は、月明かりを反射する氷の薄膜に覆われ、そこから周囲へと冷気を放った。

対するジャンは、その全身に火焰を纏う。表面に引火してしまっような姿だったが、肌は焼けず、焦げず、髪はあの独特の悪臭を振り撒かなかった。意識をすれば火焰が膨張し、爆発的に増大する。

それは意のままに炎を操る、さながら火炎龍ドラゴンのようだった。

「……てめえ、そりゃあなんの冗談だ？」

——認識みたものを理解みたままに”再現”する魔術。

それがジャン・ステイルの肉体深く、その心臓よりも深い最も行動に関連する位置に刻まれた魔方陣の効果だった。

「なんでてめえが、俺の魔法を使っただよっ！」

快活な笑みが消え去り、表情には憎しみしか残らない。

同時にジャンは——周囲に強い気配を覚えて、振り返った。

戦場で、敵に背を向けることは自殺行為であるのだが、男はそれでも襲いかからず、そんな妙な行動をするジャンへと罵声を浴びせる。

言葉にならぬ声を聞きながら、それでもジャンは感覚を尖らせた。見晴らしの良い草原だ。だが近くには森がある。そんな所で、ただの血肉の匂いでさえ集まる”連中”は、これほど派手に魔力を散らして戦っていればやはり当然のように”誘われる”はずだ。

そして小高い丘になる向こう側に、いくつかの動く影があるのを、彼は確かに捉えていた。

「おい、てめえ——」

既に背後にまで近づく男は、呆然とするジャンの肩をつかもうとした。だがそれよりも早く、彼は屈んで伸びる腕を掻い潜って後退すると、そのまま背後へ、男の真横へと回り込んだ。

「てっ……！」

「状況が変わった。あそこを見てくれ」

肩を掴んで指をさす。

——この状況で、こんな魔法を使う相手と取っ組み合いながら異種族ンスターとの戦闘なんて、到底できるはずもない。下手をすれば横から突っ込まれて一瞬にして全滅だ。それに手負いだって居る。そいつを庇いながらの戦闘だって、かなり苦労だ。骨を折る。

この男の実力は、戦ってみて分かったが——本気でやってくれれば、恐らくおれより遥かに格上だ。恐らく肉体強化を施したとして

も、行動を起こす前に潰される。その自信があった。

「……なんだありゃ。俺たちの直援なんていねえぞ」

「あんたら、北の国から来たな？」

大陸南端にあるアレスハイムは、そこより遙か南西に存在する”

溝”にほど近い。それ故に異種族の戦闘能力は他の国に比べて劣化すること無く最高精度の実力を発揮できていた。

溝より遠ければ遠いほど、異種族の戦闘レベルは低くなる。そしてその弱体化した異種族が住み着けば、そこに生息する異種族のレベルは落ち着き留まるのだ。

だから、同じ大陸内といえども、アレスハイムから遠ければ遠いほど異種族との戦闘には苦勞しないし、そもそも環境に適応していなければ異種族との関わりさえ薄いはずだ。

一見して”人間”と異形たる”異種族”とを、この状況で誤認するとなれば、彼らが他大陸か、あるいは少なくともエルフエーヌ：否、異種族を軍事利用した”ブリック”より遙か北方、あるいは東西のどちらかであるのは明らかだった。

「よく分かったな。俺は色白なのが自慢なのさ」

——となれば、その冷氣こそが彼の持つ”付加属性”の中でも最上であり本領であるのか。

考えて、思わず怖気が走った。

”認識<sup>み</sup>たままの火焰”であったなら、恐らく純粹に力負けしていたはずだ。

今回ばかりは、この闖入者の登場に感謝せざるを得なかったが、

「異種族<sup>モンスター</sup>だよ、お上りさん」

彼は、鎧ごと殴り飛ばした男が落とした、見事な装飾つきの剣を拾い上げて、なんの感慨もないように「そうか」と漏らす男に促すように先に出た。

「おれが見るかぎりじゃ十八体」

「多いのか？」

「ちよっと前は、五、六〇〇体相手に五人が圧勝した」

「なんだ、くそ雑魚じゃねえか」

「おれはこれまでで最大で三体までしか相手したことない」

「てめえがくそ雑魚じゃねえか。まあいい、倒しゃいいんだろ？」

手伝え坊主、異種族って野郎の殺し方をご教授願おうか！」

ジャンとの共闘にんの疑問も不快感も表さずに、むしろ喜ばしいとばかりに叫んだ男へと、ジャンは苦笑を漏らし嘆息しながら並んだ。

夜はまだ始まったと言わんばかりに、新しい戦場は構成された。

——見慣れぬ異種族の群れ。身体を包む剛毛に加えて強靱な骨格を持つ巨躯……それは猿人のような肢体をもつものだったり、表面を堅い甲殻で覆う二対のハサミを持つサソリともザリガニとも付かぬ、だが少なくともそれらより遥かに大きい異種族。あるいはお馴染みの強い酸性の唾液を持つ狼だったり——そういった纏まりのないのが総数五体。割り当ては、猿人が一体、サソリが二体、狼が二体。

そして残りの十三体は全て同種の異種族であり、ジャンが目当たりにした中で、最も異形なる存在だった。

「なんだあ、ありやあ……気ツ持ち悪イな」

石灰を頭からかぶったかのような白い肉体。四本の足は馬のように蹄を持ち、肉体は豚のように肥えている。前足よりやや高い位置にある対となっている両腕はしなやかに伸びて、三本の指は獲物を見つけて以降、わきわきと動き出していた。

そして腕が生える中央部に細い首が伸びて、楕円形の頭。歯並びの良いエナメル質の歯は先程からガチガチと音を立てて噛み合わされていて、その上にはいくつもの目を散りばめる顔があった。

——異種族<sup>モンスター</sup>とは、この世界に準拠した生物ばかりだと思っていた。だがそれは違う。

これまで見てきた、聞いてきた動物、昆虫に決して該当しないその異質な生命体は、本来の意味で”異形”だと言える代物だった。

(なんだ、こいつ……)

そしてそれはまた、ジャン自身知らぬ異種族でもあった。

聞いたこともない姿。見たこともない格好。色、気持ちの悪い目、肢体。その全ては、彼にとって未知でしかなく、それ故に畏怖の象徴ですらあった。

異種族の恐ろしさ、その強さを中途半端にわかに知っているが為に覚える恐怖を、彼は抱いていた。

対する男は――やはりジャンとは打って変わって、その緊張を程良く感じて、肉体を昂らせていた。

彼はジャンよりも遥かに実戦経験が豊富な男である。特に対人間が多く、そして人間は個体ごとにその実力を大きく変えてくる。だから対峙する敵は全て未知の力を持っていると言え、だからこそ、目の前の異形たらしめる気色の悪い生命体も、彼にとっては同じ未知の存在であり、外観以外、その戦闘方法や可動、機動、身体能力などの違いはあれど、今までの敵と大きく変わっているものとは思えなかった。

だからこそ平常心を保っている。

どんな攻撃をしてこようと関係ない。殺し、殺されるのが戦場の全てであり、唯一の帰結だ。

故に、今は目の前の敵を殲滅する。

明らかに、この手の敵には慣れているはずだったこの少年が怯えている様子は少し面倒だったが……。

「おい坊主、今ビビってるようじゃ、殺す価値もねえな」

前に出るジャンの頭を掴んで強引に後衛へと送る。

そうして、彼は切迫するように侵攻してくる十八体の異種族モンスターへと立ち向い――勢い良く、足元に剣を突き刺した。

「――食らい尽くせ、大地アース・ピックの怒り」

間髪おかずに大地が隆起したかと思うと、無数の隆起現象はさらに鋭く天へと突き上がる錐状に変形して、十数メートルにまで迫った異種族群を串刺しにする。

そしてまた、表面が凍り付いているそれはそれ故に流した鮮血を冷却し、凝結させて錐状の隆起に張り付かせた。

鼓膜を打ち破らんとする、轟く咆哮。

己の攻撃によって怯む異種族へと、男は構わず突っ走り——己が作り出した隆起ごと横一閃で両断する。だが綺麗に分かつわけではなく、砕き、そしてその中にいる異種族の肉体を切り裂いた。

断末魔さえも許さず、男は前線に立った二体の狼、そして猿人を倒した所で、隆起したその大地を乗り越えて、飛び降りる。冷気を纏う彼はそのまま、待機していたサソリの背中に刀身を突き刺す……が、甲高い金属音をかき鳴らして、その切先は硬質な甲殻によって弾かれてしまった。

背後から迫るハサミの一閃。

男は反射的、さらに弾かれた反動を利用して、振り返りざまの一撃でハサミの付け根を叩き上げる。

反響する程の硬質な打撃音をかき鳴らし、サソリは諸手を上げる。それが降参の意ならどれほど楽なことか——男は無駄に考えながら、嘆息混じりに魔力を増幅。氷の膜はさらに分厚く、冷気が増す。

そしてその膜が氷塊となって、剣からまるで水滴のように地面に滴った。

水滴は大地に触れば、その地面を凍りつかせる。波紋のように広がるそれらはただの数敵で、攻撃に転じようとしていた二体のサソリの足を飲み込み、地面に留めた。

「おい坊主！ 出番だ、”俺の炎”で焼き尽くせえッ！」

——そう声をかけられて、男がサソリを放置してさらに先へと迫るのを見て、ようやく自身が呆然と、己が畏怖した敵へと意気揚々と駆ける男に見とれていた事に気がつく。

肩が弾けたように跳ねて、それから息を吞む。

剣を片手に走りだし、己に——ごく限定的、一時的だが——宿った炎を剣に増幅させて纏わせる。

ジャンはその中で、胸の奥で渦巻く感情の全てを遮断し、ただ目

の前の敵にだけ集中する。そこでようやく、彼は本来すべき事をするべく、心は持ち直していた。

「今は”おれの炎”だっ、てっ！」

男の後を続くように隆起に飛び乗り、そこを踏み台にするように高く跳び上がる。

身体がやがてその重さを感じなくなる一番高い位置で、ジャンは剣を振り下ろす。まわりついていた火焰は放射されて一直線にサソリへと撃ちだされた。

凍りついて身動きできぬ異種族は、容易く火焰に飲み込まれて――ジャンはそこを飛び越えて着地する。膝を折るかがんた姿勢で、剣を握る手は放り投げ、そして眼前に掲げた手には、魔力が集中して再び果実が精製された。

「そしてこれが――あんたの――おれの雷だっ！」

大口で果実を齧り、そして魔力へと帰す。

放出しきった火焰の代わりに、今度は雷が全身から迸り――振り向きざまに剣を振るえば、その切先から穿たれる稲妻一閃が鋭く甲殻を抉り、弾き、砕いて……火焰の舌が内部を焼き尽くし、瞬く間に二体の巨大なサソリを打ち取って行った。

――それで、再び彼が”再現”した魔法が肉体から失せていく。凄まじい力の奔流を体験したジャンは、確かに魔術と魔法の違いを理解し、認識し、それで納得した。己には、本当に魔法というものが存在しないということ。

そして肉体が忘れていた激痛を思い出したように膝まずき、灼熱によって熱した肉体は全身から汗を吹き出させた。

意識が朦朧とし、そして一度心臓が大きく高鳴って――息がつまり、血管が詰まった感覚。意識が遠のき、視界がぼやけ、周囲の存在感が瞬く間に失せていき、だというのに、自分の中にある痛みや、奇妙なほどの孤独感だけが膨張して……。

力量を超える技術ちからの駆使に、肉体が、精神が耐え切れずに、ジャンはそのまま吸い込まれるようにして地面に倒れていった。



魔力の極端な減少に、男は背中越しにジャン・スティールの気絶を悟った。

「負けたわけではないだろう。おそらく、慣れていないのだろう」魔法”の発動によって力尽きたのだ。

ビビっていた割には随分と動いていたし、まだ若い。このまま行けばまだまだ強くなる……出来れば、万全の時に戦ってみたかったが。

男はガラになく考えながら、見上げる程に巨大な異種族へと駆けていた。

身にまとう冷氣は既に無い。

その代わりに、身体の周囲には常に風が吹き荒れ、

「きめえんだよ、てめえら！」

未だ十数歩分の距離がある。だというのに男は剣をなぎ払い——その動作の直後、剣から振り払われた衝撃が刃かぜとなって宙を駆ける。目に映らぬそれは、緩慢な動きの”白い何か”連中を瞬く間に切り裂いた。柔い皮膚を裂き、緑黄色の鮮血を周囲に振り撒いた。骨は砕けず、ただ筋だけは確かに切断して——それ以前に、異種族でも基本的な構造は同じなのだろう。頭を潰した時点でそれらは崩れ、大地へと沈んでいった。

目に痛い蛍光色に塗れる姿を送りながら、男はさらに接敵。肉薄、そして己へと振りかぶられた腕に対して剣を振り上げ、降ろしの手早い二連撃で切り落とす。さらに下方からの突き上げで眼前にまで迫った顔面を串刺しにして——蹴飛ばし、次へ。

ステップ混じりの移動と共に、円の機動で剣戟を薙ぐ。囲まれた男はそれで瞬時に数個体の首を跳ね、脊髓反射で襲ってきた蹄を腹下へと潜りこんで躲す。

崩れる前にその下から滑りできれば、顔のすぐ横に蹄が落ちて——その死角となった位置から腕が飛来。男の反応速度を上回る俊敏性で肩を掴み上げて、身体を引き上げた。

「こ、こいつら――」

剣を振るう。すると剣が届く位置より遙か先にある、肩をつかんだ一個体の頭が吹き飛んだ。

力が失せて、無防備な体勢で地面に叩きつけられようとしたが、男は無理に足で着地し、立ち直る。

「まさか、知能があんのか……？」

――残るは二体。

死骸の山は果たして出来上がり、その向こう側に待機する月明かりに光る白い影。それらは様子を伺うなり、やがて背を向けて、蹄を鳴らし……。

「に、逃げた――だとッ!？」

盛大な蹄音で素早く道を引き返していく奇っ怪な影は、瞬く間に見えなくなってしまう。

――あんな気持ちの悪い生物が、さらに頭が使えるなんて……最悪だ。

むしろ、あんな異種<sup>もの</sup>族を”飼って”いながら、よくこの国は国として保っていられて、さらに村や街を外壁も砦も無く、孤立できたものだ。

領内のあらゆる人種が集まってできた国で生まれ育ったからこそ、彼はそう、感心できた。

緑黄に染まる剣を振って血を払い、短く息を吐いて、振り返る。そうすると、隆起の手前で、ジャンから強引に剣を奪い取った男の姿があった。

彼は、自身に気づいた男に手を振りながら歩み寄り、苦しそうな顔で声を上げた。

「おい”クリード”、あのガキどうすんだ？」

このまま放置すれば、他の異種族が死骸を餌に寄ってくる。その巻き添いにあって食われてしまうだろう。

だが、そこで死ねばそれまでだ。

されど、クリードと呼ばれた男は、自らの手で彼の未来を終わらせようとは、もう思っては居なかった。

「将来に期待、つつう所だな」

羽織る外套を翻す。そこには、雄牛が二匹、その横顔を向かい合わせるような刺繍がなされている。

それはヤギウの国章だった。

「また出た。お前の悪い癖だ。どのみち、あのガキが騎士だったら、今度の作戦で死ぬだろ。あの程度の実力じゃあな。中途半端に強いと思ってるから、さらに確率は膨れ上がる」

腰の鞘に剣を収め、やがて二人はその場から離れ始めた。

大まかな”偵察”は終了した。まさか最終日にこんな出来事イベントがあるとは思わなかったが——異種族との戦闘は良い経験になった。

あの存在を知らなければ、下手な動揺が周囲に伝播し、対処しきれる場面を逃して最悪全滅する。あの程度の数ならば、恐らく強みと言えるのが”異形の外見”なのだろう。見た目で驚かせ、畏怖させ、隙を作り殺す。

事前の理解があれば、そう難しい敵ではなさそうだ。

「いいだろ、あんな国での唯一の楽しみだ。平和な国の強者くらいいいだろ……、ある意味で性さがなんだよ。あの国で理解できねえヤツあ居ねえ筈だ。自分の強さを再認識できる、そして戦いこそが自分の生きがいだってな」

——作戦の準備にはまだ時間がかかる。だが少なくとも今年中に実行されるのは確実、という話だ。

ならば、長くて残された時間は約三ヶ月……それまでで、どれほど彼が成長するか。そして己が強くなれるか。

彼は未来に思いを馳せて、やがて気配の失せた森の中へと歩みを進めていった。

## 保護

「ジャンが居ない！」

まず寝ているテポンの部屋に駆け込んできたのは、タマだった。  
午前三時の出来事である。

そんな彼女に布団を誘い、落ち着かせると共に散歩に言った旨を  
説明してやって、

「彼にも色々あるのよ」

そう、最近晴れない彼の表情を思い出しつつ、タマをたしなめた。  
「――ジャンが居ないんです！」

午前六時。

ようやく目が覚めて、制服に着替えていると、今度はサニーが扉  
を開けて入ってきた。瞳は潤い、今にも涙がこぼれ落ちてしまいそ  
うな程であり、またこの上無く不安な様子で、それを訴えていた。  
そして間髪おかずにオクト、スクイドもやってくる。

まったく、騒がしい朝だ――そう思いながら、並ぶ三人へと一喝  
した。

「あの子だって子供じゃないのよ、お腹がすけば帰ってくるわ。放  
っておきなさい」

わずか一言のうちに矛盾をはらませた台詞だったが、その点には  
触れず。

「……しかし、テポン様が最も動揺なされているのでは？」

見逃さない無粋なスクイドの指摘によって、テポンは初めて自分  
の手が震えて同じボタンをしめたり外したり、それを繰り返してい  
ることに気がついた。

「う、うるさいわね……でも居ないものはしょうがないわ。今日中  
に帰ってこなければ警ら兵にでも搜索願を出す。これでいいわね？」

「……うう……」

小さな呻き。それがジャン・スティールの存命証明であり、そして間もなく――夢も何もない、暗闇の中から意識が急浮上した。

――無意識が、本来鼻腔を刺激する筈だった腐臭や、あの独特な鮮血の錆の匂いが存在しないことに違和感を覚えた。筋肉を硬直させる堅い地面の上に、その肉体がないことを、次いで認識した。

まず疑問。

そこからは、ジャンの意識が確認事項を読み上げるように、多くを確認していった。

指先を動かし、そして両腕の筋肉、肩、首……共に損傷なし。上肢は無事であり、足を同様に確認。問題なし。つまり五体満足だったが――じんじんと、脈拍と共に激痛が肉体に残り続けていた。

もはや慣れたものだが、無理に起き上がれば耐え切れずに声が漏れる。

下手に近くに異種族がいれば、太刀打ち出来ずに死んでしまうはずだ――そう考えてから、ジャンは気がついた。

太陽光が鈍い。正確には本来頭上、寝転がっているならば目の前から降り注ぐその光源が瞼を隔ててもよく分かるはずだったが、まるでまだ日が出るばかりであるように、横方向からの鈍い光を流し込んでいた。

そしてこの体を包む暖かなもの……これは布団ではないのか？  
風もない、自然が周囲には確認できない。

ならばここは？　まさか、異種族の穴倉に連れ込まれたのか？  
胸の奥がざわめくのを感じて――ジャンは思わず目を開けた。  
視界がぼやけ、だが徐々に鮮明になる。

「……ここ、は――？」

まず目に入った天井は、板が立体的に貼りつけられていて、空へと高く伸びてゆくような錯覚を覚えた。そしてある一定の高さで壁と壁へ支えとなる棒を伸ばし、その近くには縄が垂らされていた。  
首吊り自害のようなソレかと思えば、その縄には加工された肉が連

なって括りつけられていた。保存食としての調理中なのだろう。

そして顔を横に向ける。ジャンが横たえる寝台の横には小さなローテーブルがあつて、その上には綿糸を粗く織った布と、包帯がいくつか置かれていた。その向こうには台所。薪がくべられている調理台の上に乗っている鍋はコトコトと静かに音を立てていて、僅かにずれて置かれる蓋の隙間からは白い湯気を漏らしている。

何の香りもしないところを見れば、それは単純に加湿のために行われているのだろう。

ならば、ここは乾燥地帯か——となれば、最後に居た地よりやや東や北方へと連れ去られたのか。

「いや……」

彼は言葉を言い直した。

連れ去られたのではなく、”保護”されたのだ。

明らかにこれは人智が及ぶ作りであり、納屋を改装したであろう狭い室内だったが、それでも生活するには十分な物品で溢れかえっている。台所の下に小さな蓋があるのを見れば、地下収納庫もあるはずだ。

そしてこの布団。衣服を縫い合わせたものの中には、恐らく羽毛か、綿か。それらが入っていて、敷き布団はシート、そして藁が敷き詰められている。

周囲は小奇麗で……集落や街ではない、おそらく好きでこういった僻地に済む道楽家や猟師といった所だろう。

異種族の毛皮や骨を採取して加工することは珍しくない。肉だつて、野草の選別のように食用として扱えるものとそうでないものがある。今回は残念ながら毛皮や骨格以外に”使える”ものは無かったが……それでも加工技術が確かならば、防寒具として、あるいは武器、ないし装飾品として商品に変えることができた。

この小屋ではこれから寒くなるにあたって、それを凌ぐ術が少ないから、そういったものを作るのに必要なはずだ。

「やっと目が覚めた。五時間も眠っていたのよ、人様の寝台で、あ

んたは」

足元から聞こえた声に、思わず心臓が跳ね返った。

息を止め、決してすまいとしていた愚かな行いを――彼は思わず反射的に、身体を起こしていた。

「――っ!!」

そして暴発する激痛の嵐。どうすればこんなに余すことなく緩急もなく痛みが全身に広がるのか、疑問になるほどの苦痛を覚えながら、ジャンはうめき声すらもらさずに、そのまま倒れこんだ。

「まだ薬も塗ってないんだから寝てなさい。いいわよ、こっちはお陰で睡眠不足だけど、いつかやろうと思ってた薬の精製ができたし」やがて目の前に現れ、木目調のローテーブルに腰を落とす影。

どこまでも冷静で、筋張ったような声はどこか頼れる風もあったが、しかし飽くまで澄んだ女性のそれだった。

毛皮のベストを着こみ、下には網目のシャツを。太ももまでしか裾がない短めのズボンは妙に光沢を持っていて、されど堅いというわけではなさそうだった。そしてシャツは全身一体のものなのだろう、ズボンの下から足先まで伸びていた。

彼女はそれを魅せつけるように足を組んで、それからその美貌に見とれるジャンへと屈み込む。

「元氣はありそうね」

言われてから、はっと彼女の肢体を見つめてしまっていたことに気がついて、すぐに視線を逸らす。

「あ。いや……すみません」

上気したように朱に染まるジャンを見て、くすりと笑う彼女は軽く肩をすくめた。

「いいわよ。ほら、布団どかさわ」

手に持った器を片手に、彼女は手を伸ばす。そういった所作と共に肩甲骨を過ぎる長い黒髪が揺れて、毛先が彼女の背中をくすぐった。

彼女は首元に置かれる布団の端を掴むと、力任せに足元へと吹き

飛ばす。

——闇に似た白目のない黒き瞳。それが柔和に細まって微笑みかける。顔に刻まれた魔術の紋様はいささか女性としては似合わぬ厳つさを見せていたが、彼がそれに畏怖することはなかった。

美女といえる風貌を持つ彼女だが——何かが引つかかる。ジャンはその違和感を覚えていた。

布団の下には、半裸の上肢。彼女はしなやかな指先で器の塗り薬を掬いにとって、まず彼の胸に滴らせ、手を伸ばし、摺り込むように広げる。

冷たい液体は彼女の手によって温められてぬるくなる。艶やかな手つきは胸から腹へ、そして脇、腕へと這いまわり、そしてくすぐるように渦を巻いてから、しつとりと触れ、押し付けられた。

粘度の高い樹液のようなそれを肌に摺り込んで、ついで重なるガ―ゼを数枚てに取って肌に貼りつけ薬液を吸い込ませ、包帯で固定する。

それを幾度か繰り返せば、上肢のほとんどは包帯に包まれることになった。

「筋肉の酷使が原因ね。幾つかの筋が切れてるみたいだけど、薬を塗ったから一、二週間くらいで完治するわ」

「すみません、助けていただいたみたいなのに、その上こんなことまで……」

ジャンの言葉に、軽く笑うように鼻を鳴らした。

「ふん、何言ってるのよ。こうするつもりが無かったら、そもそも拾ってこないってのよ」

テーブルから寝台に座り直し、退屈そうにつま先で包帯の表面を弾きながら、肩越しにジャンを見る。

「……あんたって、どっかで見たことある顔してるのよねえ」

「あ、おれもなんか、見たことがありますよ。アナタのこと」

瞳と同様に黒い塗料を塗ったように黒い爪を持つ彼女は、その指を唇に当てて思考する。果たして、最近は忙しくてまともにヒトと



会っていなかったから昔の話だろうが、それでも彼のような顔はまだ記憶に新しい。

最後にまともにヒトと会ったのはここより東に進んだ位置にある都市である。独立国家ではなく、領地の境目付近にある大きな街であり、コロンの街よりも加工品や武具の製造で有名な鉾山都市である。

日銭を稼いでのどかに暮らしていたが、その仕事で少しばかり面倒事があった、恒例となるアレスハイム襲撃ができなかったが――ああ、そうか。彼女の記憶はそこで蘇った。

彼は最後の襲撃の日に会った男だ。

見ない顔が正義感を奮わせて現れて、妙に頑張っていた。弱い、なんだか期待させられるような顔が印象的だったのだ。

だったら――口にしないほうがいいだろう。

襲撃の理由を話すことも面倒だし、なにせあの国では何人も殺している。せつかく助けたのにこの怪我で逃げられて、自分の目の届かない所で死なれても後味が悪い。

「全然思いつけないわ。ま、お昼を獲ってくるからそれまで寝てればいいわ」

彼女は立ち上がり、ジャンに布団をかけて背を向ける。扉の前で立ち止まって、そこに置かれるズボンの裾よりやや下まであるヒールが高いブーツを履いて、外へと出ていった。

残されたジャンは、言われるがままに目を瞑って、未だ肉体に染み付く疲労故に、瞬く間に意識は深淵を転がり落ちていった。

「ど、どうということッ!？」

「どういう事かと申されました……説明したとおりで、それ以外は調査中ですが――午後十一時以降の門の開扉は記録にございません。他の手段で街から出るなんて、外壁を飛び越える以外しか……」

アエロの怒号めいた言葉に、警ら兵はすくみ上がりながらも、調

査結果を再び端的に告げた。

——ジャン・ステイルの搜索願は、その日の正午に”タコ型の異人種”によって提出されたという。記録によれば、その人物はジャンが居候する屋敷のお手伝いさんだ。

そしてジャンが家を出たとされるのが午後十一時前後。

現在までで、既に十五、六時間が経過している。

情報では武器も何も持たず、そして現在街を搜索中だが、手がかりはなく、また今までで誰も彼の姿を見ていなかった。

「……ッ、面倒ね！　　ッたく！　自分の持ち場に戻っていいわ、この件は私が受け持つから」

「はっ！」

学校へと向かっていた足を早めて目的地へと急ぐ。

それを、わざわざ簡単な調査をしてから伝えてきてくれた警ら兵は敬礼をして、その姿を見送った。

「ジャンくんの友達は……」

既に門から多くの学生が吐き出され始めていた。

もしかしたらかえってしまったかも知れない。書類を探して、一軒一軒調べるのも良いが……時間がない。それに友人らが何も知らなければ完全に徒労だ。

わざわざ来てみたは良いが——来なければよかった。

アエロは己の思慮の浅さに腹が立って、短い舌打ちと共に踵を返す。

すると、

「あら」

視線の先に、見慣れた姿があった。

「アエロさんじゃないですかあ。どうしたんです？」

捻れた角を持つ牛人族の騎士——エクレルは気易い私服で立っていた。薄いシャツは胸元が緩く、故にそこをピンと張れば両肩があらわになってしまう。そんな衣服も、彼女のたわやかでありながら

も誇張なくその存在感を大きくしているバストにかかれば、胸元からずり落ちることなくそこにとどまった。

「なによ、乳牛ホルスタインのくせに」

歩けば胸が揺れる。動けば胸が躍る。アエロにとって彼女のイメージは、まずそこから始まった。

「つと、そんな悪態はいいのよ」

いつもの事だから、挨拶がわりのようなものだ。それにアエロのエクレルに対する悪口は、局所的な――主にその嫉妬対象である胸に対するものでしかない。

「エクレルはなんでこんな所に？」

「なんでって……今日は仕事が休みなので、”リサ”を迎えに来たんですよ」

「リサ？ ……ああ、あのはぐれの娘こね。学校では偽名を使ってるんでしょ？」

「そうですね。へたに”はぐれ”ってバレても可哀想なので」

「そうね。まったく、優しいわねー、胸も大きいし」

「かつ、関係無いですよそれ！」

そんな発言に思わず両手で胸を抱くようにしてそれを隠し、動揺混じりに、ソレより、と話題を転換した。

「アエロさんだって、なんで学校なんか……？」

「実は、ジャン・ステイルを探しているのよ。なんでも失踪したとか、なんとかで――」

「――え、エクレル！ な、んで……こんな所に！」

会話を遮ったのは、不意の闖入者。

それは尾を力なく垂らしているクリム――リサの姿だった。

真っ赤な髪は鮮やかだったが、同様に真紅の瞳は、されどくすんでいるようだ。それが感情と共に変わるのならば、やはり尾と同じに元気がなくなっているという事だろう。

「なんでって、迎えに来たんですよ。みんなして……そんなに私が迎えに来るのが不思議なの？」

「い、いや、そういう訳じゃないが……お前は？」

リサは、そしてエクレルは共に歩み寄って並ぶ。そうする中でリサはアエロの存在に気が付き、エクレルと話をしていたらしい事を思い出す。

声をかけられて、再び思惑の海に飛び込もうとしていた彼女はリサに目を向け、立ち直った。

「アエロよ。エクレルと同じ騎士団をやらせてもらってるわ」

「そうか。昨日の甲冑の男と関係があるのか？」

「昨日の甲冑？ ……ああ、まあね。ジャン・ステイールを探しているんだけど、知らない？」

昨日の甲冑の男はジャンを校舎から校舎裏の武器庫へと連れてきた使いつ走りだ。

と言うか、まだ昨日の事なのか——イヤなまでに長く感じる昨日と今日を振り返って、アエロは思わずため息を漏らした。

そしてまた、彼女の言葉にリサが眉間にシワを寄せる。右腕が、徐々にハサミへと変化し、尾がいきり始めているのをアエロは見た。

「ステイールが、どうしたんだ？」

「こつちが聞きたいわよ。学校には来てなかったんでしょ？」

「ああ。サニー……ヤツの妹の話では、朝起きたら居なかったと。心当たりも無いようだ。当然私も分からないし、他の連中も同様の反応を見せた。だからてっきり、お前らがどうこうしたのだと思っていたのだが……違ったのか？」

怪訝な表情で、疑るような声色で、彼女は言葉の裏でアエロを責めた。

しかし訊くまでもなく全てを説明してくれた彼女に軽く頭を下げてから、首を振った。

「知らないわ。彼の行動は単独で、そして突発的なもの。現在は、なんらかの手段で街の外に出たという事が有力とされている」

本来ならば一般人には与えない情報だが——この国ではそういった機密はごく重要でない限りは曖昧に流れ出している。それを取り

締まる法律はないし、注意する警ら兵も居ない。

簡単に言えば、このアレスハイムという国はごく限定的で危機敵状況こそで本領発揮できる法がなされていて、大した事件や事象でなければ、多くは警ら兵などが対処して終える。それは、この国が根本的に治安がよく平和な国であるからだった。

「じゃあ昨日、ステイルに何を吹き込んだ。精神的不安から暴走したんだろう。そのきっかけを、お前達が与えたんじゃないのか？」

「――仮にそうだとしても、もう遅いわ。彼の安全を祈るしかない」

「よくそんな口が利けたものだな？ 外から中に入ってくる者には厳しく、大切な国民が情緒不安定からの暴走で外に飛び出れば無關心か。だからムカつくんだよ、この国は。体裁よく”溝の連中”と”交友”しているみたいな事を演<sup>や</sup>っているようだが――」

「そんな話は知らないわね。そうやって”ひねた”考え方をしているから、はぐれなんでしょう？ どちらにせよ、そんな話を異人種<sup>異人種</sup>に語った所でなんにもなりはしないわ」

食い気味に言葉を遮り、高ぶった心が挑発的にリサに言葉を返した。

どちらも冷静とは言えない。生産的とは言えぬ言い合いに、エクレルは静観していたがなんとか止めようとわたわた動くが、どうすればこの事態を沈静化できるのか……彼女にはわからない。

そうして、各々の胸に渦巻くそれぞれの憎しみが火花を散らし、にらみ合いが続く。が、それを解いたのはアエロの方だった。

翼を広げ、大きく上下させれば――風を起こし、高く跳躍して翼を動かせば、間もなく風を起こし、風に乗り、彼女は空に舞った。

「悔しかったら強くなって、国を――あなたの理想を現実に反映できるようになりなさい。あなたは、それが出来るところを目指しているんだから」

彼女はリサに言葉を残し、さらに空高く飛び上がって、姿を消した。

残された二人は、それぞれ彼女の言葉に思うところを見出したの

か、だまりこくり、それから誰ともなく歩き出して、帰路についた。

「なに、これ」

門付近の建造物の屋上。平たい、家屋内からそこへと出られるようになっていて、さらに固められているちよつとした広場にも使える場所だ。そしてその末端部分はヘリとなっているのだが――その一部が碎けて、周囲に破片をまき散らしていた。

人為的な破壊だ。そして破片は、屋上の端まで飛んでいるところを見れば、さらにその先、地面にまで落ちていることは確実。ならばその破壊力は相当なものだった筈だ。

ここを殴り飛ばして、その勢いで高く飛び上がって……。

「いや、現実離れしすぎでしょ……」

どんな強靱な拳とでたらめな腕力を持っていれば、それが可能となるのだろうか。そう自嘲気味に考えて、ジャン・ステイルはそれが出来るはずだという理解に至った。

彼は肉体強化魔術パワー・ポイントを持っている。それがどれほどのものかは知らないが――わざわざ魔方陣としてそれを得ているならば、精錬されきった魔術と考えると間違いはないだろう。

可能だ。

自棄になっているなら、自暴自棄気味ならばその確率は格段に上がる。

「……もうッ、もうもうッ……物分りの良い子だと思っていれば、面倒臭い子ね!」

彼女は手ぶらで外に出た時の危険性を良く知っている。戦闘面での実力を持てども、それが未だ未熟であると判断されていれば尚更だ。

一般人ならば、異種族と接触して――五分以内に死に至る。基本的にはそう言われている。ある程度の戦闘経験があればその時間は伸びるが……魔術を持たぬ限り、異種族にもよるが、それに勝利し、あるいは逃げ切れる可能性は極めて低い。

彼女は再びそら高く飛び上がると、迷いなく外へと飛びさって行った。

西の空は、早くもその景色を朱に染め始めていた――。

## 保護？

「結局、おれの世話で一日が終わってしまいましたね……」

あのあと、どこからか獲ってきたイノシシを解体して、血を抜き、新たな食料とする間に、調理中だった干し肉を昼食とした。

その後は他愛もない話や、ジャンがどうしてあんな所で倒れていたか——その説明が終われば、既に時刻は夕方に。今度は野菜スープとパンがついた食事を終えれば、ジャンの整容へと移った。

包帯を外して身体を拭き、そして再び薬を塗って包帯を巻く。

今度は下着一枚になって足も同様に塗布——運良く疲労のために性的な反応はなく、ジャンは彼女の期待はずれなため息を受けながらも、平静を装うことができていた。

至れり尽くせりの一日で——最後は寝台の端にジャンは追いやり、すぐ隣に彼女が布団の中に潜り込んでくる。

鼻を掠める石鹸の香りは、外にあるという樽を用いた簡易浴槽での入浴が行われた結果を知らしめていた。

ジャンは相変わらず仰向け以外では寝られなかったが、彼女はそんなジャンを見つめるように横になる。

白目のない、どこまでも深い闇たらしめる瞳はどこか恐ろしげもあったが、彼は既に愛嬌さえも見出していた。世話焼きで、口は少し悪いが頼りになる姉御肌だ。締まった肉体や、素手で外に出て狩りが出来るのだから、その戦闘能力は極めて高いのだろう。獲物の刺創を見れば、周囲の障害物を即座に武器へと転換して使用したとすぐに察せられる。

つまり、遊撃戦<sup>ゲリラ</sup>であれば敵はないといえるほどのなのかもしれない。怪我が治れば戦い方を教えてもらえないだろうか。いや、それ以前にお礼をしなければならぬのだろうか……。

「まあね、覚悟はしてたけど……人様の世話なんてもうコリゴリよ」  
変な怪我しやがって、と彼女は冗談交じりにジャンを殴る。包帯



越しの衝撃はひどく鈍いものだったが、じんと響き、それでも和らぎ始めていた痛みが全身に伝播したが――大きく息を吸い込み、彼女に笑顔に向けた。

「そういえば、お名前を伺っても……？」

「あー、そういえばね、忘れてたわ。いいのよ名前なんて、好きに呼べば？」

「そんな。ここまでして貰って――」

言いかけた言葉は、彼女がジャンの唇に添えた人差し指によって遮られた。

顔を向ければ柔和な微笑み。月光に褐色の肌が照らされ、艶やかに潤う唇が静かに開いた。

「好きでしたのよ。あんたは、勝手にされただけ。帰りたいと思ってるのを無理やり拘束して、わけわかんない薬塗りたくって、身体を締め付けるように圧迫して、自分の料理を毒見させただけ。それでいいのよ。これが終われば私を忘れなよ」

「な――なんでそこまで……」

「こんな世界に居たって苦しいだけよ。あんたは、あんたの道を進めばいいのよ。騎士は……ダメだったんだっけ？」

「あ、ああ……はい。おれは、魔法がないですから。今回、暴走する羽目になったのも、それがきっかけでした」

彼女の言葉に思わず視線が泳ぎ、無意識に忘れようとしていた事実を思い出す。心地の良い、自分にとって都合の良い世界に逃避しかけていた意識が現実を直面させられて、それでも彼女の前だから気分は害さず、どこか気恥ずかしすら感じていた。

憎しみや怒りや、失望や絶望感は今ももうない。緩和されたのはあの八つ当たりに加え、魔法の体験、さらに彼女との接触が大きく影響されたゆえだろう。

「もう、ならあたしの魔法をあげたいくらいよ」

彼女から伸びる腕が、枕と頭の隙間に潜り込む。そうしてもう片方の手が優しく向こう側の肩を掴んで、優しく抱き寄せた。

身体が完全に密着し、たおやかな肢体を余す事無く感じられる。吐息が耳にかかり、鼓動は早鐘を鳴らすように拍動し始めた。

緊張や動揺によって顎が震え、焦点が定まらない。

女性とは普通に話せるはずだったが――こういった、一層深い接触は苦手だ。どうにも緊張して、頭が真っ白になってしまう。

ジャンは胸いっぱい息を吸い込んでから、横目に彼女を見た。

「あんたは今、成長しようとしているのね。自分の殻を破ろうとしている。だけど、”どう”破れば良いのか分からない……そんなトコね」

「……なんで、アナタはこんな所で生活をしているんですか？」

結局なんて呼んでいいか分からずに、そういったぶっきらぼうな呼び方になってしまう。

だが、藁をもすがる思いで手にした質問は、確かにジャンが疑問にしていたそれだった。

窓から見える景色は針葉樹の群ればかり。となれば、ここは林、あるいは森の、少し開けた場所であるのは明白だ。

いつ異種族が襲ってくるかも知れない危険地帯に、わざわざ住居を構えるなんて正気の沙汰ではない。

だから”なぜ”と考えた。暇な時間を使って考えてみたが、答えはでなかった。

――そして彼女、”ボーア”はその質問に、思わず言葉に詰まった。

こんな僻地に住む理由……それは割と現在までに至った問題の根底に関わるものだ。

彼にこんな話はしたくないし、気まづくなりたくない。こんな少年に同情されたくないということもあったが、自分の過去を誰かに知られたくなかった。

悲劇ぶっているわけではないが、この過去こそが今の自分を作っている。嫌な事ばかりだったが、それを一蹴されることは己を否定されることと同義。それがたとえ相手が正しいとしても、だ。

何も正論ばかりが、自分にとって正しい訳ではない。正しいことが正しいとは限らない。

綺麗なままの世界では生きて行けないのだ。

まだ純粹であろう彼には、まだ早い。せめて、この怪我が治って、もう二度と合わなくなる時にでも……。

「さあね、気がついたらこんなトコに住んでたから覚えてないわよ、んな事は」

「そうですか。街に来ようとは思わなかったんですか？」

「必要に思わないからね」

「色々あって便利ですよ？」

「その利便さを知らない者にとっちゃ、どれほど便利なものだろうと便利じゃないの。その生活に満足できれば万々歳よ、住めば都って言うでしょ？」

「あー、確かに……」

最初は鉱山も地獄だったが、一年経てば、二年、三年と経てば我が家のように振る舞うことができた。もう故郷がなくなった彼にとって故郷たらしめる要因は、そういった生活に深く関わった人間関係や、どんな悪環境でも慣れてしまったから、というものだろう。

今では夢のような環境で寝起きしているが、慣れてしまった今では記憶の中の劣悪な環境が浮彫のように浮かび上がって、目立ってくる。よくあんな所で満足できていたな、と思えることができた。

だが後悔など無い。

そして二度と戻りたくないと思うわけでもない。

ひたすらに懐かしく、まさにジャンにとって故郷なのだ。

「アナタには、故郷ってあるんですか？」

だから、つい思い出してしまっただけでそう口にしてしまう。

彼女にどんな背景があるかもしれないのに――もしかして同じような境遇だったかも知れないのに、そんな無神経な質問をしてしまった。

が、ボーアは飽くまで微笑みだけを湛えて、小さく首を振った。

「もう無いわ」

「……すみません、おれ、何も考えないで——」

「ああ、違うのよ。滅んだとか、そういうんじゃない……」

どう言うのかな、と彼女は少し迷ったように漏らしてから、そう、と続ける。

「縁を切られたの。もう帰れないって事。ま、ちよくちよく行ってるんだけどね」

「縁を……それはまた——あ、いや、なんでもないです」

「いいのよ、別に隠すことじゃないし。そうねえ、理由は……」

そう、理由。

アレスハイムを追放された理由。

当時となっては忌々しく腹立たしいものだったが、成長して、大人になって、政治というものがわかってきて、彼らのそういった選択は必ずしも間違ったものではない——国として生きるには、むしろ正解なのだと理解することができたから、その意識は薄れている。それはまだ、目の前の少年と同じくらいの年の瀬だったろうか。懐かしい。あの時いきがっていた多くの”老害”はもう居ない。取り分け、その中で誰よりも先に”送ってやった”あのジジイは、既に多くの者の記憶からも葬り去られているはずだ。

そんな話を言っているいいものだろうか。

いや、このうぶな少年はごまかせる。

——自分の過去を知られたくはない。

だが同時に、知っていてほしくもあった。

否、誰かに、自分のことを考えていて欲しかった。自分のことを、その存在を、ボーアという女が居ることを記憶に刻んで欲しかった。その欲求だけは、あの門から叩き出された時から消え去ったことはない。忘れたことなど無い。唯一、彼女を苦しませ続けているのが、その孤独感だった。

「ヒトを、殺しちゃってね」

胸に走る鈍痛——直後、痛みから解放されるような妙な快感、快

楽が全身に走る。心臓から末端のつま先まで広がる電撃にも似た衝撃。それが、脳髓に染み渡るほどの強烈な幸福感となって広がった。自分のことを、” 真実 ” を話したのは彼が初めてだ。

疲労からの眠気や、懐かしい人のぬくもり。緩和される孤独……それらがもたらした彼女の状態が、それを口にさせていた。

後悔はない。

だがこれで、にわかに依存欲求が強くなった。

下腹部に鈍い痛み。それは緊張による鈍痛だ。

言葉の後、ジャンの顔を見れずに布団に顔を埋めた後、暫くの間が経過したように感じた。

だが実際には、ものの二、三〇秒だ。

期待していたのは「冗談でしょう」や「はは、まさか」なんて否定的な言葉。それらは、今の告白を” 無かったこと ” にしてくれる魔法のセリフだ。今の、この状況を少し前までに巻戻してくれる。この気持も、感情も、全てはジャンから強制的に引き剥がしてくれる。

しかし、ソレ以外のセリフは——肯定的なそれは、無自覚にボーアを受容することになる。

それがもたらす結果は、ボーア自身未だ知らない。

だから、胸がにわかに膨らみ、喉が鳴る、その声が発される瞬間になると、ジャンを抱く力がにわかに強まってしまった。

「——そう、なんですか」

その言葉は、彼女が待っていたそれらに該当しない類の言葉だった。

そして最も——勝手なことだが——失望に値する反応だった。

それが意味するものはただ一つ、どう答えて良いものか分からずに流す事。

だから思わず、ある意味で爽快を得て、諦められたという意味で、胸がすくような気持ちになった。

「それは、どんなヒトだったんですか？ 話したくないなら構いま

せんが……」

追撃。

それは、そのセリフは彼女が待っていた否定、そして肯定ともとれない曖昧な表現だった。

しかしただ一つのその言葉で、彼女の得た爽快感は瞬く間に一蹴されて――胸を締め付ける鎖が緩んだような気がした。胸にぽっかりと空いた穴がにわかに縮まった気がした。

人の暖かさだ。

だめだ……欲しくなる。求めたくなる。

目の前に、自分と話して、自分を求めてくれる人がいる――どうしようも無く求めていたそれが、思わず爆発しそうになって、彼女は奥歯を噛み締め、寸でに食い止める。

もう胸の高鳴りは包帯越しに伝わっているだろう。高揚ゆえの体温の高さは吐息から察せられているだろう。高揚ゆえの体温の高さは吐息から察せられているだろう。高揚ゆえの体温の高さは吐息から察せられているだろう。

彼がバカな男なら、それを性的な意味で捕らえてくれるかも知れない。それで誤魔化したのだ。

だが、こいつは――未熟で、世間知らずだからこそまだ純粹で、まだ坊やなの……だからこそ、ボーアを期待させた。

「……ねえ、ジャン？」

「はい」

「――なんでもないわ。早く寝なさい。怪我の治りが遅くなるわよ」  
これ以上会話をしていれば自分が駄目になる。

自分という重荷を彼に背負わせるわけにはいかなかった。

今日一日を通して分かったが――仮に彼女が彼女を、あの時の”はぐれ”だと認識しても、嫌いはしない。むしろ何か理由があったのだと配慮してくれるはずだ。

彼は決して正義漢というわけじゃない。自分のできる範囲で、自分のしたい事をしていただけだ。結果的にそれが良い方向に向いているだけで、その根本的な行動意欲や真髄は、その現状を自分にとって居心地がいいものに維持するためのものに過ぎない。

周囲に取り繕いへつらって場を収める。なりふり構わなければそういうものだ。

ごく貧弱で、一人では何も出来ない種類の人間……。

そうだ。この気持は——この守りたくなるような気持ちは、彼がかつての自分と重ねているからだ。

以前も自分はそうだった。いや、今でもそうなのかもしれない。だからこそ、自分よりも弱い人間に近づきたくなる。

否定はしないし、それでいいと彼女は思っていた。

少なくとも、当分の間は彼によって心が満たされる——その後のことは知らない。どうでもいい。今は、今だけは他のことを考えていたくなかった——。

「ジャン、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

——間もなく、傍らで自身に抱きついてくる女性は寝息を立て始めた。

温かい人のぬくもり。そして柔らかさ。意識せずには居られないものばかりだったが……それを凌駕する彼女の過去。

ヒトを殺したという事実。否、それが彼女の勘違いをそう信じているだけかも知れないし、あるいは自分の中のそういった妄想が彼女の中では真実となっているだけかも知れない。

だがやはり、おそらくそれは事実なのだ。

そこから見る、今日一日の生活は、ジャンに対する世話焼きは、久しぶりの来客に浮かれているもの他ならない。

ヒトを殺したことによって街を追放された。それは彼女の意思でないとなれば、それまでを孤独にすごしてきたのだろう。

人恋しかったのだ。どんな過去があれど、それでも彼女は人間で、自分と同じ感情を持っている。どんなに強くても、一人の女性なのだ。

サニーの幼少期を思い出す。

あの時の彼女は、いつもジャンの手を握って離れなかった。それは最後まで、施設に送られるまで意識を保っていた彼女だからこそ、その全てを声押し殺して見守ることしか出来なかった彼女だからこそ、もう一人になりたくないという気持ちが強かったからだろう。目の前の彼女に至っては、今からその境地にたとうとしている。最後をはぐらかしたのは、自分の全てをさらけ出すことになるから。彼女はそれをすべきではないと判断したのだ。

(……おれは、どうすべきなんだろうな)

彼女を守りたいと思う。

それは、彼女が単純に女性として美人だからというわけではない。一人で孤独に生き抜いて、そして久しぶりに出会った人間に、それまで耐えてきた孤独を忘れようとしている。

強い女性だ。

強さの種類は違うが——ジャンがこれまで尊敬しつづけている、ケンタウロスの女騎士と同じに強い。

やはり、おれは強い女性に惹かれるのか……そう思いながら、彼はボーアを一瞥してから、眼をつむった。

(おれは、どうするべき……か)

街の生活。そしてここでの出会い。

街はともかくとして、自分を信じ、頼ってくれる人達がいる。それを切り捨てる選択を、思い切る勇気を彼は持たない。さらに、出来ることならばこの彼女にも、自分以外の人というものを多く得て欲しいとも思っていた。

もし、彼女さえよければ……。

考えても仕方がない思考を打ち切って、ジャンはそのまま意識を深淵の中へと踏み入れさせた。

——そうして、彼らの夜は更けていく。



## 搜索

「この地理に詳しい者、名乗り出なさい」

アエロはテポン、サニーを伴って、彼が雇用を登録していた冒険者ギルドへと出向いていた。

扉を強引にこじ開け、そして中の酒気にも動じず、玄関の前で声高らかにそう告げる。

そういった怒声じみた言葉に、中で酒を嗜む多くの男達は思わず息を飲み、そして彼女が騎士たる鎧を眼にすれば、一様に背筋を伸ばして酒瓶、あるいはジョッキから手を離してアエロへと向き直った。

——地理に詳しい者。

つまりここで高らかに手を挙げれば、瞬く間に拘束されて案内役となること請負だ。給金は得られるだろうが——そんな胃に無数の穴が空きそうな仕事など、どれほどの金を積まれようが嫌だった。

だから彼らは、ごく自然的に、そんな状況でもお構いなしで酒瓶を逆さにしてぶどう酒を飲み干す一人の女性に視線を送った。

あのずばらな女なら大丈夫だろう、と。

「こんな人居て、さらに冒険者も居る筈でしょう!？」

そして外界から来た冒険者だ。実力も申し分なく、それ故に幅広い仕事をこなしている。そうすれば、自然的に領内の地理は概ね把握できているはずだ。

そういった視線が、一様にまとわりつく。

——ラアビはそんな気色の悪い眼に思わず背筋に凍える不快感が走って、手を止め、辺りを見る。すると、それまで楽しそうに酒を傾けていた男たちは、何か縋るような目付きで自身を見つめていることに気がついた。

「な、なによう」

「騎士さまが道案内しろだよ」

「はあ、騎士さまあ？」

一つの空席を挟んで呑んでいた男が玄関を指さして伝える。彼女は言われるがままに視線を向ければ、確かに立派な鎧に身を包んでいる、鳥人の騎士が立っているのが良く分かった。

そしてその傍らには——最近<sup>ハルビュイア</sup>は信頼できるようになってきた相棒<sup>ジャン</sup>の妹分であるサニー・ベルガモットの姿。

最近音沙汰無い彼の事を考えれば……ジャン・ステイル関連か。彼女はその二つを適当に直結させると、

「せめて何とか言つてよ！」

泣きべそをかこうとするアエロへと、元気よく跳びはねるように立ち上がって手を挙げた。

「はいはい！ その仕事、あたしが請け負ったッ！」

「——ッて、ばっかじゃないの!？」

簡単な手続きを踏んでから、一行は外に出る。ギルド通りと名付けられる、無数のギルドの館が並ぶその通りを抜けて手近な喫茶店に入ると、さっそくアエロから詳細な説明が入ったのだが……。

「ば……ちよつと、騎士に向かってバカは——」

「手がかりも無し、既に何日も経つてる。それで、外に出てったジャンを探せ？ アンタ達はだからバカにされんのよ、給金の割には全然働いてないって！ 普通、そんななら人海戦術で探すでしょ!? 理由はいくらでもでツチ挙げられるっていうのよ!」

「そ、そんな人員は——」

「この平和な国で、あんたらは歩哨に何十人割いてるわけ？ しかも待機してるのだって相当いるでしょ？ 何のための軍事予算よ、ふざけんじゃないわ。来年から半分あたしが仕事するから、予算の半分をちょうだいね」

「あ、あんたね——」

「口答える暇があったら予測ルートと、あんただってその立派な翼<sup>デスクワ</sup>で調べたんでしょ？ なにか形跡。話しなさい。いっつも事務仕

事してなまってるあんたの仕事を、健気に働いて頑張ってるあたしが請け負ってやってるのよ。せめて必要な情報くらい提示しなさい」  
アエロはすっかり気圧されて、負けたと言わんばかりに肩をすくめた。

正直な所、ラアビの正論の嵐は今日まで一生懸命頑張ってきた自身に対する罵詈雑言にしか感じられなかったが――そしてまた正直な所、そんな発想があったのか、という驚愕が半分を占めていた。

追い詰められていた感覚ばかりで自覚はなかったが、そのせいで思考が一点にとどまっていた。そう言い訳をしたかったが、また責められるだけだ。騎士なのに、そしてもうこの歳でこんな一方的に怒られたくはなかった彼女は、素直に、机上に一枚の紙を載せる。

「なにこれ、ゴミ？　ゴミはゴミ箱に――」

冗談めかしく言いながら、近辺の地図が手書きで描かれている紙を手にとって、彼女はじつくりと舐め回すようにそれを見る。前側に垂れていた耳はピンと張って、耳でしっかり興味を持っていると返事をした。

「バツ印が、ここ数日間で大きな変化があった場所」

「一つしか無いけど」

「そこで戦闘があったとしか思えないのよ。道を塞ぐ隆起現象に、凍結現象。散らばる骨の破片から、異種族が居た形跡もあった。だけど今のジャンクンの実力で、正直あの隆起は再現できない……はず」

「なら無関係の他者による行為。あるいは、その場にジャンが居合わせたと考えられるわけね。それで？」

「……それで、とは……？」

アエロのとぼけた顔に、ラアビは思わず紙ごとその平手を机に叩きつけた。

盛大な打撃音と共に、みしり、と机が悲鳴をあげたのを、アエロの隣でオレンジジュースをストローで吸っていたサニーは椅子から弾むように驚きながら確かに聞いていた。

「ばっかじゃないの!?　なんでそんな重大な証拠を見つけといて——チッ!　まあいいわ、それで、この地形の変化はいつ頃見つけたの?」

「……ごめん」

心の底からの謝罪ではなく、少しおどけたように肩をすくめて、顔は半笑い。混乱しきった頭では、その態度が何を引き起こすか、彼女には予測できなかった。

「……この鳥頭。一回ぶん殴って治してあげようか?」

ラアビは珍しく満面の笑みを浮かべていたが、既に外套の袖に手を通して収納可能な鋭い鉤爪を突き出して眼前に引き上げていた。

「い、いや……だけど安心して!　かつ、身体が、身体がさ!　身体が覚えてるから!」

殺気によって正気に帰るアエロは慌てたように翼をばさばさ広げてわたわたと振れば、周囲に彼女の羽根が抜けて周囲に散ってしまふ。店主はカウンターの奥から心底迷惑気に思いながらも、彼女はそこまで気を回すことが出来なかった。

そして立ち上がり、銀貨を一枚机に残す。

アエロはそそくさと出口に向かいながら、

「ほら、ラアビ!　こっちこっち!」

額からだらだらと流れる脂汗をそのままに、彼女は素早くその場から辞した。

呼ばれた彼女はやりきれないといった風に肩をすくめて、後に続く。そうしてすぐ横に並んだサニーの頭を軽く撫でて、

「安心して、家に帰ってなさい。ジャンはあたしが連れ戻してくるから」

「……約束、ですよ」

「そうね。約束」

小指と小指を絡めあって、小さく握り合ってから手を放す。

彼女はそれで満足気に頷いて、喫茶店から外に出た後、ラアビに大きく手を振って家へと帰っていった。

「はっはー！ 爽快爽快っ！ って……あれっ？」

景気よく空を飛んでいれば、それまで足に掴まっていたラアビの悲鳴や悪態が不意に聞こえなくなっていた。

慌てて旋回。下方を見れば慣性に律儀に従って、これまで進んでいた方向にそれまで進んでいた同じ速度で落下しているラアビの姿が見えた。耳を澄ませば、絶叫さえも聞こえてくる。

急降下。その頭を虚空に突き刺すように斜め下へと向けて、翼を身体に沿わすように流線型に。風を流し空気抵抗を現象させれば、落ちる速度はラアビを容易に上回る。

馬車のように落下中の彼女に横付けし、背中を蹴飛ばすようにして強引に鳥足で身体を掴む。それから不意の拘束によって落下の勢いが四肢を力いっぱい外側へと投げて——身体はくの字にへし折れ、ラアビは喉から生気を吐き出しながら意識を手放した。

「——このくそバカッ！ あんた、本物よ、お馬鹿さん……」

先ほどまで呑んでいたぶどう酒を道の端に吐き捨て、口から鼻腔に物理的に突き刺さる刺激臭をまき散らしながら、口の端から垂れる唾液を拭う。四つん這いになりながら、素知らぬ顔で辺りをうかがうアエロを睨むが、話にならないと嘆息して立ち上がった。

「にしても、ここがそうなのね」

大きく息を吐いて周囲を見渡す。

そこから少し離れた道は、舗装されたばかりのように、異様なまでに綺麗だった。

ジャンが失踪してから三日……それほどの時間があれば、魔術の影響で変異した大地も、そう激しいものではないだろうからすぐに直せるだろう。そして直さなければ外からの来訪者が立ち往生してしまうのだ。

だから、この現状は仕方がないが……。

「三日か。誰かに保護されてればいいんだけど」

この付近に人里や村はない。ここからどこに行ったかを探すのはかなり骨だ。

これほどまで手詰まり感を覚えたのは久しぶりである。もつとも、やる気になれば虱潰しにでも頑張れるが――騎士がこんな調子では。再びアエロを一瞥して、また深い溜息。

「な、なによ!」

「バーカ」

「な、なん――ラアビ、あなたに言われたくないわよ! 騎士である以上、私の方が上なんだから!」

「あたしはこんなバカにもバカにされてるのか……死にたくなるわ」頭を抱えて髪を掻き耷る。

こんな事をしていないのはよくわかっているのだ。もしかしたら死んでいるかも知れないし、元気にどこかでやっているかもしれない。あるいは急げば見つかる場所で、困窮している可能性さえある。

だから、今は少なくとも彼が元気で無事である事を祈りながら、危機に瀕しない内に保護しなければならない。

仮にジャンが新たな生活を築き始めていたとしても、こんな周囲を不安にさせ心配にさせてから出来上がる生活なんて、個人的に許せるものではない。だから、何があっても、連れ戻してもまた外に出ていくとしても、一度は街に戻さなければならぬ――それが決定事項であり、最優先事項でもあった。

「まあいいわ」

彼女は首を振ってアエロのペースに飲まれぬよう意識を変え、短く息を吐く。

「あんたは道なり森の方に。あたしは西しゅちに行く。明らかに何も無さそうだったら東に向かって。あたしも向かうから」

「うん、了解……って、なんであなたが指示を出してんのよ!??」

「うっさい、さっさと行って」

向かってくる彼女の肩を掴んで方向転換し、そのまま背中を突き

飛ばして森に向かわせる。

それを見送ること無く、ラアビはそそくさと草原を突っ切るために走り出していた。

草原を抜けると、針葉樹の乱立する湿原が広がっていた。

野生動物がのどかに草をはみ、ヤギや小動物の姿が目立っている。異種族の気配は無く、また人が頻繁に立ち入っている様子もない。このまま西にまっすぐ進んでも街や村、集落があるという話は聞かないし、これ以上行っても無駄だろう。

だが、これほどまで野生豊かな地がまだあったとは——大切にしなければならぬ。

彼女は感心深く頷いて、少しばかりその光景をみつめていた。

近頃は、この世界でも野生と化して繁殖する異種族に自然が食い散らかされているのだ。弱肉強食に無理やり割り込んだその存在は、さらに辺りの生態系も一様に変化させている。もともと、殆どの野生動物が絶滅しかけているという話ではないが、これを看過すればいずれそれが実現することは確実だった。

単なる野生の動植物が、溝から向こうの力を持っている異種族に太刀打ち出来るわけがない。だから現在では溝に門扉<sup>ふた</sup>をして自由な行き来を防いでいるのだが、その間に世界になだれ込んできた異種族の数は予想以上に多かった。

ともあれ、早い内に対処しなければならぬ事柄だったが——だからといって早急に対応して、すぐにどうこうなるわけではない。

この問題には長き時間を置いて処置する、というのが国の方針で、確実だろうと彼女も思っていた。

「……あのバカも心配だし、もう戻るか……」

良く騎士なんかになれたと思いつながら、彼女は踵を返して草原へと足を向けた。

「……結局コロンまで行ったけど、ないわね。手がかり」

低空飛行で周囲をくまなく観察したが、夕方ということもあって人影はひとつもない。何らかの形跡すらなく、彼女は仕方なしに引き返していた。ついで空からさらに、指示された通りに西へ向かう。が、しばらくすればまた濃密な森があった。その遙か向こうには巨大な岩盤があつて、その岩盤は真ん中に亀裂を入れて――そこを中心に街が展開している。

そこは噂の鉱山都市だ。距離にして、飛んで一、二時間。歩けば二、三日というのが彼女の大雑把な計算の結果だった。

しかし、何の装備も無く森を抜けて何の支援も無しに飲まず食わずで向こうへと行くのはかなり困難だ。

近くに人里はもちろん、民家の一つもない。

ならば、やはり森に迷い込んで遭難しているのだろうか――そう考えて、草原を越えた先にある濃密な森に視線を向けた所で、彼女は木々の薄いすこしばかり開けた位置に、廃屋に近い外観の納屋を一軒発見した。

――ボロボロだ。

だが、近くに大きめの樽や、水を貯めてある巨大な瓶かめがあった。さらに納屋に吊るされるようにされているイノシシ。そして近くに、使用されたばかりなのだろう刃物が無造作に置かれている。

明らかに人が住んでいる様子だった。

ラアビに相談してから行こうか――そう考えて、上空を旋回しながらアエロは首を振った。

これでは行動の緩慢さからまた怒鳴られてしまう。あんなにバカバカと怒鳴られたのは初めてだから、もうイヤだった。

私はバカじゃない――心のなかで叫ぶのと同時に、彼女は先程の急降下よろしく円を描く旋回をしながら、徐々に地上へと近づいていった。

やがて着地し、大きく深呼吸をする。

「あの一、すみません！」



胸いっぱい吸い込んだ息を吐き出して声を張る。納屋に向かって言ってみるが、暫く待っても反応がない。

今は留守なのだろうか。

彼女は考えて、扉に近づいた。

コンコン、とノックを試みる。

が、やはり反応がない。

「し、しょうがないわよね……？」

肩をすくめてから、彼女はドアノブを捻って強引に中へと押し入った。

――そして視界に飛び込む空間。

いくつもの家財が並び、寝台や、テーブルなど、完全に人が住んでいる様子がそこにはあった。が、やはり本当に留守であるらしく、人は中には誰も居なかったのだが。

彼女は中に数歩立ち入ってから様子を伺い、それから何事もなかったようにそこを出る。

それから今度は周囲を見回して……首を振った。

「まったく、どこに居るのよ……もうっ！」

彼女は力なく肩を落としてから、高く飛翔。

そうして、間もなくその場を後にした。

「だめだめ、全っ然居ないわよ」

「ええ、こっちも同じく」

「まったくもう、あの子はどこ行っちゃったわけ？ 拉致でもされ

――」

アエロは嘆くように漏らして、そうして己が口にした言葉に、はたと気づく。

拉致。

近日中に、ヤギユウ帝国がこの国に攻め入るらしい。もしこれが真実であるならば、この地形を偵察に、どう攻めて来ようか調べに

来る可能性がある。」

もっとも、以前村を滅ぼした際に侵入した部隊がその役割を果たしていたならば話は別だが――その可能性は十分にある。

もしジャンが運悪くそれと接触して、口封じに殺害されていたら、あるいは情報を抜き出すために連れ去られていたら、

なぜ思いつかなかったのだろうか。

この状況下で、もっとも危惧すべきことはそれだったのではないか。

「……なに、どうしたの？　今言おうとしたことも忘れたの？」

「ち、違うわよばっか！」

神妙に冷え切った頭が、茶々が入って加熱する。

「あ、あのさ。これはたとえ話なんだけど――」

そうして、明らかなまでに見え見えであるたとえ話を、彼女はラアビに言った。

まだ確定したわけではないという念を押して、彼女が知る事と、伝えるべき事をしっかりと区分して、必要なことだけをラアビに渡す。

そうすると彼女の顔つきは見る間に変わってきて、そしてアエロの言葉が終わると共に、怒りとも嘆きともつかぬ表情でアエロを見つめた。

「そうね。もし接触した可能性っていうのがあるなら……」

自分の国だったら、まず”ただ”では済まないだろう。

彼女はそう思ったが、敢えて口にはしなかった。それはアエロとて重々承知なものだろうと思ったからだ。それを重ねるほど、口にして彼女を無駄に不安にしてやるほど、ラアビは無粋な女ではなかった。

「三日の時間は長いわね」

初日ならまだ見つかっただろう。

二日目だって希望は残っている。

だが三日となれば……休まず移動すれば国境まで辿りつける時間

だ。搜索範囲は広大で、そして彼が近くで隠れているとしても、誰にも見つからぬような場所を見つけるには十分過ぎる期間である。

「うん。……ごめん」

「いいわよ。ともかく、今日は帰りましょ？　日が暮れたら見つかるものも見つからなくなる。また明日、朝一で外に出ればいいわ」  
出会った当初よりも随分と幼く見えてしまうアエロの頭を撫でてやりながら、ラアビは様々な思惑に駆られて頭を動かした。

——彼女が見つけたという戦闘現場は、恐らくその”偵察兵”と戦闘した結果なのかもしれない。凍結と言うならば、そういった魔術が使用された証拠だ。

氷雪系の魔術は北方出身の者ほど得意とする。理由としては、弱点属性となる火焰でないのはそういった魔術を使用するに適していない環境だからだ。だから環境を最大限に活かして、本来ならば会得できない程の特性の魔術<sup>レベル</sup>を身につける。それが最も適当な判断であり、王道<sup>セオリー</sup>でもあった。

一撃で敵を打倒しようとするならば、自身の最高峰の力を以てして対峙するのはごく自然な事である。

もしそこで怪我でもしたならば、血痕を彼女が見逃すまい。だが、氷が残っているというのに、彼女は血を見なかった。魔術による氷の自然的な融解は約半日というのが一般的だが、”最高峰”となれば一日ほど保ててもおかしくはない。

そしてあの位置は、アレスハイムからそうそう離れた場所ではない。

状況説明によれば、彼女と”魔法の話”をした日に失踪したという話だ。ならばあれほど騎士という職、存在に夢見て憧れた少年があと少しでそこに至れた彼が、不意にその資格すらも失ったとなれば——そのショックは計り知れない。

ならば情緒不安定からの精神暴走によって街を出たのだろう。そして城壁に最も近い建造物の屋上を殴り飛ばして外に出たという推論から、もはや肉体強化魔術<sup>パワー・ポイント</sup>が使用されていたのは明白。

そして彼女が確認したあの魔術による肉体強化率を鑑みれば、街からあそこまではおよそ二時間。時刻にして午前一時に、偵察兵と接触したことになる。

アエロがその形跡を発見したのが午後として――接触から約十四〇十六時間後。

伺えたのは異種族のどす黒い血液や、見たこともない緑黄の液体というだけの話だから、ジャンの被害は無しと言える。

問題はその後だ。

その十五時間前後で、彼はどこに行ったのか、あるいはどこに連れ去られたのか。

――ようやく過程が見えてきたが、重要な結果ばかりは闇の中だ。「まったく、頭がいたいわ」

帰路につきながら、ラアビは嘆息混じりにそう漏らした。

なぜ自分が、こんな探偵まがいな事をしなければならぬのか。

居なくなってしまったものは仕方が無いのだ。形跡がなければ尚更、探す術がない。

だが――また今夜にでも外に出て、調べてみよう。

彼女はそう考えながら、また大きく息を吐いて、当分はゆっくり眠れなさそうだと、空を仰いだ。

空はすっかり朱にそまり上がって、季節的にも、夜の帳が落とされるのも時間の問題だと思われた。

## 保護？

ジャン・ステイルの肉体が、彼の動きに十分耐え切れるほどに回復したのは、ボーアの小屋に来てから三日目の朝の事だった。

――そして、あらゆる苦難や苦悩、自身を苛む現実から唯一守り安息させられる空間がやぶられてから三日目の朝でもあった。

断裂したいくつもの筋は結合し、焼き尽くされていた細胞はその多くを再生させた。今では自立行動を可能とし、単独での整容はもちろん、外出さえも可能だとジャン・ステイルは意気込んでいた。そして身体の”なまり”を訴えていたからだろうか。

いつものように葉を塗布し包帯を巻きつけた後、ボーアは今日に限って彼に上下のそれまで来ていた衣服を身に付け、靴を履いた。

「なら、狩りでも手伝ってもらおうかしら」

立ち上がればジャンの方が気持ち目線が高い。だが目立つほどの身長差はなく、ボーアがブーツを履き込めばその差は瞬く間に塗り替えられてしまう。

「狩りですか。懐かしい」

悪戯に、まるで突然幼子に一人でおつかいに行かせようとする、少し冗談交じりの声色は、そんなジャンの漏らしと共に熱が籠った。「したことがあるの？」

「まあ。最近はめつきりでしたが……大体半年くらい前までは当番でやってましたね。大型動物なら自力でシカくらいまでは」

自信あり気にジャンは鼻を鳴らし、へえと感心するようにボーアは頷いた。

この年頃の若者はそんなサバイバル精神はたくましくない。街や村に住んでいれば、自然的に加工された食肉などが販売されているのだ。金さえあれば、わざわざ危険を顧みずとも生活が出来る。食は安定する。

そしてまた、そういった生活に慣れきった者が狩りに初挑戦する

際は、その行為を悔いがちだ。ただ動いている、逃げるモノを仕留めれば良い——そういった、根底に軽視があり、根本たる命の尊厳、命に対する尊重の精神は置き去りにされている。

由々しき事態だが、所詮精神論だ。人それぞれという言葉があるように、そもそも狩りの本質にそれを重んじるものが少ないことは確かである。

果たしてジャンにはそれがあろうだろうか。

仮に無かったとしても、たかがそれでどうこうなるわけではないが……。

「趣味での狩りはやっていなかったの？」

引き締まる腰に両手を添えて、片足に重心を傾けて立ち直る。

ジャンは胸の前で両手を閉じ、開きを繰り返して調子を確認しながら答えた。

「飽くまで生活に必要な分ですね。深い意味もないし信条もありませんが、そうそう無駄に命を散らすのは好きじゃないんで」

「ははっ、そう！　そうよね、不必要に生きているべき生命は蹂躪すべきじゃないのよね」

「……でも、異種族との戦闘があるから——とやかくは、言えないんですけどね」

「何言ってるのよ、あれは蹂躪すべき生命よ。同じ命だから、なんて言ったら、命がいくつあっても足りやしない。それに野生動物だってそうよ、油断したらこっちがやられるかもしれない。襲いかかってきたら迷わず立ち向かう。知能もへったくれも無い連中に、倫理観を掲げて意味が無いわ」

彼女は親指で己の喉を掻っ切るようなジェスチャーをして、悪意を孕む笑みをみせた。狂暴な印象を残す顔には、どこかあどけなささえ残っているような風だった。

それから無邪気に笑って、ジャンの手を引いて外へと促した。

「武器は無いんですか？」

やはり小屋は森の中にあり、少し歩みを進めれば彼らは、木々生い茂る森の中へと入り込む事になる。

既にここがアレスハイムからどれほど離れた場所で、どこに位置し、どこに近いのかは分からない。まだ早い段階ならば推測も可能だったのだろうが、あの”偵察兵”との戦闘の場所さえも忘れてしまったし、あれからどれほどの時間が経過したのかさえも曖昧だ。

不安定な腐葉土を踏み鳴らし、蜘蛛の巣を避けながら森を進む。

ジャンの問いに彼女は、静かに頷きながら手を伸ばして眼前にあげた。

塗料を塗ったかのように黒い爪は、彼女の意識が集中すると共に瞬時に鋭く尖ってその長さを倍以上にする。それは鋭利であり、爪でありながらも決してヤワであるような様子はなく、まるで抜き身の刃のような危なげな雰囲気さえそこにはあった。

「魔術、魔法を使うまでもなく爪があるわ。それとも、ジャン？

あんたが必要なのか？」

「ええ、まあ……徒手空拳はやったことがないので」

「なら小屋の裏に剣があるわよ。あんたの身の丈くらいの大きさの」  
彼女はいつか”拾ってきた”その剣の外観を思い出す。

自身には扱えぬあの巨軀。巨岩をそのまま打ち砕いて剣の形にしたのかと言うような無骨さ。だというのに力いっぱい地面に叩きつけてもビクともしない頑強さで、そして持ち手の大きさから鬼族が元々の持ち主だったのではないかと推測された。

が、彼女が見つけたときには既に放置されていたのだ。岩の刀身にはコケが自生し、鋼鉄製の柄に巻きつけられる緩衝材なのだろう布にはキノコが生える。それは長い間、森の中で眠り続けていた証拠でもあった。

「あー、素手でなんとか頑張ります」

ジャンはさすがに男らしくがっしりとした体つきだったが、それでもあの巨剣を扱えるような筋力は持ち合わせていない。病み上がりなら尚更だ。

そもそも、あれほどの武器は大型異人種——鬼族や、そういった戦闘に種族の特性を重く置いている異人種が装備すべき代物なのだ。下手に、無理に扱おうとするべきものではない。

「あはっ、そうね。あんたはまず、あたしの言うとおりに動いていればそれでいいの」

——守ってあげるから。

言葉を飲み込んで、長年の間狩場となっている森の中を、まるで我が家の庭のように——実質的には本当にそうなのだが——歩きまわり、そして気配を感じると共に彼女は立ち止まる。即座に身体を伏せ、草むらの中に身体を隠した。ジャンをすぐ近くの木の影に隠し、そして人差し指と中指の二本を立てて、指し示す。

「シカが来るわ」

「鹿？　——ああ」

疑問を呈する間に、茂みをかき分けて果たして鹿はやってきた。

こんもりと盛り上がる丘の少し下、中腹辺り。距離にしておよそ数百歩という遠距離にして、僅かな気配と臭いという野生の感性を最大限に生かして、ボーアはその獲物を見つけていた。

「ここから少し進んだ先に小さな川があるわ。海に続くわけじゃないけど、それが小さな池を作ってるのよ」

「つまり、処理はそこで行うってわけですか」

「その通り」

——しかし、足の早い野生動物を前にして、弓も持たずに狩りをするなんてかなり”ホネ”だ。

だがボーアは嬉しげな顔で鹿を覗き、そして鹿は何も知らぬように数匹の雄鹿、雌鹿は群れをなして近づいてくる。そしてやや窪み地帯となるそこは当然のように風下であり、存在を察知されることはない。

「ま、狩りって言ってもそう難しいことじゃないんだけどね」

「いや、道具も何もないんじゃない——」

「しッ。ほら、見えて」



中腰になって指の腹でジャンの唇を押さえる。

その直後だった。

ぼん、という箆った爆発音が大気に伝播した。

——多くの鹿が一目散に逃げていく中で、一匹の鹿は糸か縄か、そういったものにがんじがらめにされたようにもがいて、その場から動けなくなってしまう。

「やっぱり、異人種は魔術を使わなくちゃね？」

彼の唇を抑えていた指で自分の唇に触れてみせてから、また彼の手首を掴むようにして、捕らえた鹿へとまっすぐ走りだした。ジャンのペースなんてお構いなしの猪突猛進——それは獣人族の中でも、イノシシ科に分類されるからなのだろう。

地面がもつともなれば、より早く、そして力強く攻めこむことが出来るだろう——そういったイメージに、再び彼女に対する違和感が過ぎつて、ジャンは考える。が、やはり誰だったのか思い出せずに、ただジャンは手をひかれるがままについていった。

ボアの説明に寄れば、魔方陣を刻んだ紙を罫として設置しておいたというだけの話だった。そしてそれを踏みつけた衝撃で魔術が発動し、ツルやら何やらで備えていた罫を起動させる。

今回の仕様は、魔方陣を中心にしてツルを四方八方に伸ばしておいて、魔術が作動した瞬間にツルが高速回転してまず足元を掬い絡め、そして転んだ所で全身にまとわりつくといったものだった。

——腹をかつ捌き、頭を落としてから手近なツルで近くの木に吊るし上げて血を抜く。水場の近くだから作業も滞り無く進み、食用に使える内臓を木の葉に包み、鹿の両足を結んで木の棒に引っ掛けて運ぶような時間になると、既に辺りは暗くなり、空は夜のとばりが落とされようとしていた。

「やっぱり、二人でもこんな時間になっちゃった」

「いつも家でやってるんですか？」

「いや、徹夜で作業して持って帰ってる。でもジャンが来てから時

間がなくてね」

「なら、おれも動けるようになってよかったですよ。あのイノシシもまだ調理中だし、今日は鹿の内蔵がありますしね」

「そうそう。ジャンは料理出来る？」

「い、いやー……そういうのはちよつと。住み込みで働いてた時もずっと寮母さんとかに任せきりで」

「そうよねー。でも、料理が出来る男って格好いいって良く言うけど、やろうと思わなかったの？」

「特別、そうは思わなかったですね」

ジャンは特に感情を込めず、そう流すように告げる。

ここでサニーの名前を出さなかったのに、特別な意味はない。だが少なくとも、彼女にそうした事をすべきではないように感じたから、という理由があるのは確かだった。

だが、それ以上の深い意味はない。

ジャンは、そういった事については求められぬ限りは話さぬようにしていた。

「――ふう、くたびれた」

やがて家の前について、ボアは雑に投げ捨てる。

最初は燻製にして保存しようという話が出ていたが、燻製器が出来上がっていない現状を見ればまずそれが不可能だった。だから、今日はこのままにして、明日辺りにさらに解体し、そして使っていない瓶に押し込めての塩漬けだ。

処理が終わって三日前後で完成するそれは、冬が到来してもまだ保つ。この量だから、むしろ食べきるほうが難しい。恐らくこれからも狩りを続けていくのだろうし、それに何年もそれを続けているのにも関わらずあの鹿の群れだ。居なくなってしまう、という可能性は極めて低い。が、冬眠の可能性はある。

冬が来るまでにあと二、三頭ばかり獲ってくれば十分といったところだろう。

これまで世話になったのだから、この位の恩返しは……。

そう考えている間に、不意にボーアの身体が垂直に弾むように跳ねた。

目を見開き、半開きにした口からは鋭い八重歯が見える。彼女は呆然としたようにジャンを見つめてから、我に返り、そしてふり返る。

そして、そうした瞬間から——彼女の顔からは血の気が失せ、それまでであった陽気さの一切は消え失せた。

「こいつ——あいつかッ！」

気配。そして魔術、魔法を持ち得ないのに本質的に孕んでいる魔力。それらが合わさった禍々しい雰囲気、異種族の気配というものだった。

だが、今回はその中でもとびきり嫌な気配のするそれらだ。

ボーアは脳裏に蘇る、一度だけ対峙したあの異種族——全身に石灰をかぶったかのような白い肢体に、豚の身体。馬の蹄に、二対の触腕。縦に長い楕円形の面には、鋼鉄製の並びの良い歯が常に噛み合わせを確かめている。さらには、あの全てを見ているかのような、気色の悪い散らばった無数の眼。

異形たる存在。

名前も知らないその異種族は、正直な所畏怖の象徴でしか無かった。

——そして現在は、ジャンすら感じられるほどの地響きがそこにはあった。

理由としては——考えたくないが——途方も無い数の”白いやつ”が迫ってきているのかもしれない。

ボーアはイラついたように頭を掻きまわし、そしてにわかには止まっていた思考をフル回転させる。

誰かと居ると楽だった。頭を使わなくて済むからだ。誰かが考えてくれるから、それに従えばよかった。身体が慣れた行為を、慣れ

たままに見せびらかすだけで良かったのだ。

が、もうそう言ったわけにはいかない。

「何体だ？」 以前の<sup>まえ</sup>地響き” から考えれば……一、二〇〇前後つてとこか……ッ！」

泣きたくなる。歯を噛み締めて、思わず目を細めた。

もうあんな気持ちの悪い敵と戦いたくはない。正体不明の、訳のわからない敵を相手にしたくはない。

膝が笑う。

脳裏にあの気持ちの悪い笑顔が浮かぶたびに、胸がぎゅっと締め付けられるように苦しくなって――。

「楽勝、楽勝！ あんなの、万全のおれとアナタなら、屁でもないでしょう！！」

――ジャン・ステイルは今何が攻めて来ているのか、正直な所判然としていなかった。だが少なくともそれは人ではないだろうし、彼女の怯えようからまともな異種族でもなさそうだと考えられた。となれば、あの”偵察兵”と共闘するハメになった際に現れた、未確認の異種族だろう。あの”白いやつ”だ。男も、随分と気持ちの悪いやつだと言っていた。

が、彼でも倒せたのだ。

十三体を相手にして、たった一人が。

「バカかッ！ 素手で、どう戦うっての？ ジャンは！」  
顎が震えて、ガチガチと歯が鳴る。

あれほどまで強く、優しかった彼女の面影はもうない。だが、その弱さは――ジャンだから見せてくれていた。少なくとも彼は都合よくそう解釈する。

たった三日ほど一緒に居ただけでそこまで信頼してくれる筈がない。しかし好意には思ってくれているようだ。

ならば、ここでの活躍で一気に距離を詰めるのもアリかもしれない。少なくとも、ジャンはこれから彼女に”街”に来てもらうならば、そうしなければならぬと考えていた。

「何言ってますか。あれがあるでしょう？」

ジャンは親指で、くいつと小屋を指し示す。そこには閉まった扉と、その手前に転がっている鹿の死骸しか無いのだが――ボアは察する。そして瞬く間に、表情を怒気に塗り変えた。

「あんなの使って戦えるわけ無いだろうがッ！　ただでさえ、はち切れた筋がくつついたばっかなのに――」

彼女が言い切る前に、ジャンはその頭を二度ほど優しく叩いてみせる。それから頭に手を載せれば、ジャンの腕の震えが、直に伝わってきた。

ボアがそれをきっかけに、良く彼を観察する。と、表情には余裕がなく、額から流れでた汗はその量をひどく多くしていた。不安を噛み締め、焦点が定まらずに視線が宙を泳ぐ。

そうだ。彼も怖いんだ。

ジャンは何も無茶を、その過剰な自信で通そうとしているわけではない。

彼は彼なりに己の可能性を、彼女に対して励ましとして語ったのだ。つまりは、こんな少年にさえ氣遣われていたのだ。

表面上だけは、彼を護る側でいようと思っていたのに――。

胸が高鳴る。

それは緊張していることもあったし、こと上無く不安で仕方が無かったが――今この瞬間はジャンと心が、意識が繋がっている。

その興奮が彼女の緊張を解いていた。

そうだ。そうなんだ。

彼がいてくれればいいと思った。それは、ただ一緒にいるだけでいいと思っていた。なぜ彼なのかは、彼女自身いまだよくわからないが――今は違う。

一緒に戦って欲しい。

一緒に生きて欲しい。

欲求は確かな形となって、新たにボアの胸に刻まれた。

もう、この戦いが終わったら、だめになってしまいかもしれない。

頭の芯がとろけるように熱くなるのに、力が、体の奥底から湧いてくるような感覚を覚えて――。

「あんたは家から油をもってきて。奴らの弱点はその柔な皮膚だから」

指示をして、ジャンが頷き、家の中へと駆け込んでいった。

ボーアはそれを確認してから――巨剣なんて目もくれずに、振動の方向へと走りだす。

大地を弾き、そしてそうしようとした瞬間、彼女の中から迷いや不安や、その全てが吹き飛んだ。

――依存するわけにはいかない。

彼に頼るわけにはいかない。

理性がそう叫んでいた。

だから一人で立ち向かう。死んでもいい、彼に自分という重荷を背負わせないためなら、どんな事だって――そうジャンに対する言い訳を正当化して、身体を駆った。

そして、悪夢とも言える長い夜が始まった。

## 保護？

ジャン・スティールならば、肉体強化魔術による副作用の影響で肉体の治癒が早い。朝にでもなれば、走って逃げるほどには身体が治っているだろう。

もっとも、完治ではないから無理はきかない。だが十分だ。

微笑みさえ湛えて、既に数十メートル先に見えた白い軍団を見据えながら、彼女はどうすべきか、どう立ち向かうべきかを考えていた。

先ほどのまでの心地よさは一変。胸の奥底から溢れでた不安、恐怖は既に全身を包んでいて、意識は既に現実を虚構と認識。故に彼女が今日の前にする大軍には現実感がなく、されど全身に伝播する畏れ故の震えは決して収まることがなかった。

——少しでも多く数を減らす。

それが当面の目標だった。

震動がやがて激震となって視線を体ごと上下させる。

その瞳の奥には何を思う——ボアは右額から目を抜いて頬にかけて刻まれる刻印を輝かせて、魔術の発動を準備する。

激動。

白い連中は既にボアへと進行方向を一樣に変えているようだった。

生命に反応して動いているのか。何を目的としてこの地に移ったのか。

知性さえ垣間見えないそれらを見ながら、ボアは一つだけため息を漏らした——直後に、掌に火花を散らせば、その火花は瞬く間に業火球と化して顔を飲み込むほどに、さらには頭上に上り、森を焼き尽くさんとする巨大な球体となった。その変化は時間にして、僅か数秒。

その数秒で、”連中”と彼女との距離は半分以下になった。

不安をかき消し、目の前のおぞましい光景を焼き払わんとするよう  
に振りかぶり、そして叫んだ。

フロークン・フレイズ  
「灼熱の牙ッ！！」

火焰は二対の槍と化す。灼熱は彼女の雄叫びと共に頭上から弾け  
——戦闘の数体に食らいつく牙となる。

それは大気を揺るがし震動する凄まじい爆発音と共に、直撃した  
幾つかの”白い連中”<sup>やつら</sup>が

吹き飛んだ。焼け焦げ、肉体から離別する四肢が、頭部が周囲に撒  
き散らされて、肉の焼ける悪臭が辺りに立ち込めた。また蛍光系の  
緑黄色が大地に塗りこまれ、炎はそれで大地にとどまった。

——恐らく見た限りでは六体がはじけ飛んだ。

だがそれだけだ。

にわかに勢いを停止したかに見えた連中だったが、列をなすそれ  
らは前面のみの被害で恐るるに足らぬと判断するや否や、蹄を高ら  
かに、再びボォアへと駆け寄ってくる。

距離にして二〇メートル。殆ど目と鼻の先だ。

彼女は指を鳴らし、今度は両手に火球を創りだす。それは同様に  
頭上にまで上ると、二対の牙が上顎、下顎となって構成された。火  
焰は大気を喰らって唸り、そして振り下ろされる腕と共に、再び爆  
炎となって白い連中を飲み込んだ。

敵は爆散。

だが焼き尽くされ爆ぜた仲間を踏みつぶして、それでも尚迫る敵  
は、未だ半数以上を残して——四分の一も減らせずに——大地を駆  
る。

周囲の気温は瞬く間に跳ね上がる。周囲を包み込んでいた木々は  
焼け焦げ火災を起こし、触れ合う葉に伝播して炎が広がる。バチバ  
チと乾いた木が爆ぜる音がして、そして帳が落とされたばかりの夜  
空を、眩いばかりの火焰の灯りが照らし始めていた。

「ふざけやがって——発現<sup>めざ</sup>めろ……」

既に、何の揶揄も比喩も無く、白い連中は既に眼前に迫っていた。



彼女の中に昂ぶる何かがあった。それは心情的なものでは決して無く、魔法発動によって強制的に肉体が干渉されるが故の、身体能力向上の証拠だった。

血湧き、肉踊る。彼女の身体はだからこそ、齒を剥いて笑顔で触腕を振るうそれらの腕を見切り僅かな足取りでそれらを避けることができていた。

二対の腕が大地を殴りつけ、そして脇から飛び出てきたそれらが虚空を穿つ。

「熱暴走ッ！」

諸手が真紅に染まり、加熱——その鋭く伸びた爪を含め、彼女の両腕は閃光たる輝きを放ち始めた。そして再び肉体ごと迫り来る無数の敵を認識<sup>みて</sup>、腕を一閃。そうすると、触腕の腹が彼女の指先に触れた瞬間に、瞬く間に細胞が焼き切れ、そして鋭さ故に両断される。見上げる巨体に飛び上がって迷いなく首を刎ね、そして着地と共に即座に後退。凄まじい物量に押し潰されぬように間隙を縫い、呼吸にあわせて足を動かす。

攻撃を避け、カウンター気味の一閃。触腕と共に肉体を袈裟に切り裂き、半ばから割れた肉塊からは見たこともない臓物が溢れ出し、緑黄の鮮血が周囲に飛び散る。高熱を帯びる両腕は更に踊り、軽い跳躍と共に喉元を焼ききり、かつ捌く。

その瞬間。

避けきれぬ、十を超える触腕が頭上から、そして同様に左右から彼女目掛けて襲いかかってきた。

「く——ッ!？」

両腕を振るい、同時に紋様による魔術を発動。同時に一対の触手を切断し、そして満足に増幅されない火焰は手のひら大のままでつかみかかってくる一本の腕を吹き飛ばす。

が、それだけだった。

彼女の抵抗は、その身一つで出来る最大限の攻撃は、それで精一杯だった。

「う……いやあッ!？」

両肩を掴み上げる腕があった。両腕を、両足を掴みあげられたボーアは、そのまま掴まれる箇所をぎりぎり握り潰さんとする腕力に襲われながら——連中はまるで己等に襲いかかった愚かな女を晒しあげるように、ただでさえ巨躯であるそれらより、さらに高い位置に持ち上げた。

「ぐッ……く、くそ……ッ！」

骨が軋む。

息が詰まる。

行動が止まったが為に高揚感が失せて、そして押し殺していた不安や恐怖が、再び髓の髓から肉体を支配し始める。全身が小刻みに震え、視線の焦点が合わなくなる。にわかに現実と認識できぬ現状を、それでも意識は現実だと、逃避を許してくれなかった。

心臓が、早鐘を打つ。今にも肉を突き破って飛び出てしまいそうな、あるいは破裂してしまいそうな程に鼓動が早く、力強くなった。——静かにのびた手が、緩慢な様子で頬に触れ、そして粘膜に包まれるその表皮でボーアの顔を撫で回した。

瞼の上から瞳を触り、鼻筋を確認して、唇に触れて——背筋が凍えるような思いを覚えた。まるで、盲目の人間が人の顔を認識するような手つきだ。

そして唇に触れた指先は、さらに強引に唇を開き、噛みあわせられた歯をなぞる。

「……ッ?!」

ボーアの唾液にまみれた指でそのまま下唇、顎を経て喉元。指は止まること無く胸元へ。そのたわやかな感触を覚えたのか、興味深く、そしてあらゆるモノを”触れて学ぶ”ように、その指先は優しく豊満なバストをなぞり、そして弾く。

気色の悪い、憎悪にも嫌悪感にも似た感情が腹の奥底で渦巻いた。今にでも叫んで抵抗したかった。いや、抵抗する以前に理性がこの状況に堪え切れずに全てを手放してしまいそうな感覚を覚えなが

らも——決して屈したくはない、この連中の好きにされたくはないというごく彼女らしい意地が、深淵の闇たらしめる瞳の奥底には宿っていた。

指先が衣服をつまむ。同時に、もう一本の手が同様につかみ、そして勢い良く引き裂いた。

小気味良い布の裂ける音と共に、網目のシャツに押し付けられて淫靡に形を歪めるバストがあらわになった。

「き、貴様ら……な、何を——ッ！」

言うよりも早く、指先は力強くそのバストの先端を摘み、ひねり上げて——。

「ああああああ——」

——怒号と共に空気を摩擦するような甲高い亀裂音が” 白い連中” ごと、真正面からその無数の腕を肉塊へと変貌させた。

それはおよそ、少年の肉体には見合わぬ巨剣だった。

手に握れば、それを構えただけで筋の断裂音が体内に響く。だが構わず、引きちぎればその度に結合した——肉体に過負荷たらしめる副作用の代わりに、肉体強化魔術は常識はずれな身体能力への向上と共に、驚異的な自己治癒能力の強化さえも可能としていた。

故に走りだす。細胞が死滅するたびに再生し、そして再生した先から死滅する。幾度ともなく繰り返すその中で、数分とせずにジャン・ステイルは目的地に到達した。

そして目にする、悪夢の光景。

およそ予測し得た事態。

だが最も回避すべきであり、そうであってほしくなかった未来がそこにはあった。

——無数の手によって祀り上げられているボーアの衣服が剥かれ、その手はまるでいかがわしい野郎共の汚らわしい手によって、今まさにその純潔を穢されようとしているようだった。

「——て」

息が詰まった。

岩盤から切り抜いたような岩剣を振り上げる。

関節が悲鳴を上げ、筋という筋全てが断裂する。

構わない。

目頭が熱く、視界が真っ赤に燃え上がる。

鼻腔に突き刺さる悪臭も、肌を焼き尽くす高熱も、その全ては彼の意識に介入することは出来なかった。

「てめええええええ——あああああああつ！！」

咆哮。

背中から吹き出る輝きが、真っ赤に燃える森の中で一筋の閃光となる。

距離半ば。そこでジャンは剣を勢い良く振り下ろす——が、僅か一秒にも満たぬ時間で距離を半分以下にさえ縮める速度にとっては、その反応速度が一番ちょうど良かった。

そして接敵。

やがて接触。

振り下ろされた剣戟は、最早斬撃たる破壊力を持つては居ない。

破裂音、爆撃音、共に弾ける肉塊に、爆風と共に吹き荒れる緑黄の血。真正面に捉えられていた一体の”白いヤツ”は振り下ろされたまま爆散して、地面にこびりつく影となる。

最早”爆撃”と化した一撃によって、ボアを拘束していた十数体はそれ故に一樣に吹き飛び、致命傷、あるいは即死となって肉体を崩壊させていた。

風が吹き荒れ、火焰が勢いを増す。無防備に空中に放り上げられたボアの周囲には、されど白い連中は居なかった。

ジャンはその異種族の脂に濡れた刀身を、近くの燻る木々の中に放り投げて——落ちてくるボアを両手で受け止めた。衝撃が両腕に流されること無く打ち叩いて、骨が軋む。大きな筋に亀裂が入った感触を覚えるが、肉体の損傷は随時快復された。

「なにやってんだ、あなたは一人でっ！」

一時的に、魔術を途絶。

未だ一〇〇体を超える数が息巻くその中心で、ジャンは無防備なその身を晒すが――今度はボーアとは異なり、その破壊力を認められた。戦術もクソもない直球な力比べに、敵は知性でも持つように足を止め、ジャンを観察するように停止していた。

「逃げる！ あたしはいい、ここは危険なのよ！ あんたの敵う相手じゃない！」

潤んだ瞳で、ボーアは力なくジャンの胸を叩いて、その手で彼の衣服を掴む。無力気にそうする様子は、言葉とは正反対に、行かないで、とでも言うようだった。

「逃げるわけがないっ！」

腕の中で、ついにはぼろぼろと涙をこぼし始める彼女を自立させ、そうしてから彼女の涙の意図さえも知らずに、ジャンは彼女の肩を力任せに掴んで見据えた。

「おれが目指した騎士は、こんな所で逃げるわけがない！ おれは、守りたい人を守るために騎士を目指したんだっ！」

ボーアが見つめるジャンの瞳には、一瞬だけ黒い何かが過ぎった。しかしそれが何か、気にする暇もなく、彼の登場、存在、それに安堵し溢れ出した涙は留まることなく、再び視界を濁らせた。

「だけどあんたは……、騎士のなりそこないじゃない！」

隠されること無い事実が叫ばれる。

だというのに、ただ一つのその真実が今を困窮、苦難たらしめる要因となっているのにも関わらず、彼はほんの僅かな動揺の色さえ見せずに頷いた。

「ああ、だからだよ」

「はあ!？」

「おれは騎士じゃない――だから、せめて今だけは、アナタの騎士でいさせてくれないか」

――肉体は既に破滅と再生を幾度ともなく繰り返している。これ

が示す、肉体強化魔術という支えが失せた先に待つ未来は、いくら魔術に明るくない者だろうとも容易に想像できる筈だ。

おそらく、まともに戦えるのは今日が最後かもしれない。

奇跡があったとしても、その肉体が快復するまでにどれほどの技術と労力、そしてどれほどの途方もない時間を費やすか知れない。

もう他の職業を目指すという問題ではない。

身体を資本として生きてきた彼の生き方というものを、大きく変えねばならぬのだ。

その先に待つものは――。

その覚悟を秘め、ジャン・スティールは全てを賭していた。己の存在理由も、己の強さも、無意味となり得ようとしたその全てを、この瞬間に。

ついこの間出会ったばかりの女性のために。

そして目の前に現れた、巨大な壁を突き破る為に。

――彼は静かに深呼吸を一度だけすると、近くの幹に突き刺さって炎に炙られていた巨剣を引きぬいた。その刀身は、従来の作戦通りに火焰を纏い始めている。

「あッ、あたしを、守るウ？ あんたが？ あ、あんたがア？」

手の甲で涙を拭い、あらわになるバストも構わずジャンの横に並ぶ。鼻をすすり、下がる口角を無理やり吊り上げた。

集団は未だ様子を伺っている。

二人は臨戦態勢で並び、そしてポーアが続けた。

「元”騎士のあたしが認めるわ。あんたは今、立派な騎士様よ。存分に、戦友と共に戦いなさいッ！」

ジャンは力強く頷き、思わずほころびる頬をそのままにして声を荒らげた。

「ああいいとも――連中の暴走は、おれが止めるっ！」  
認められた。

ただひとことだけでも、たとえそれが虚構だとしても。その言葉は、ジャンに力を与えてくれた。

血湧き、肉踊る。

ジャン・ステイルの肉体内から、強化魔法とは異なる別の力が湧いてくるのを彼は確かに感じていた。

あれほどまで”やられかけていた”ボアが今ではこんなにも頼もしい。

ただの重い荷物としか思えなかった巨剣が、まるで肉体の一部のようだ。

目頭が熱くなる。

闘争本能が昂り、吐き出す呼気は火焰のような熱を孕んでいた。

そして夜は――明ける様子すら見せずに、更に、更に深き闇へと誘い始めていた。

## 保護？

大剣はその巨大さ故に破壊力は魅力的であるものの、緩慢、鈍重であるイメージを払拭することはできない。それが身の丈三分の二などの大きさならまだしも、等身大などの大きさならば尚更である。

しかし、そもそも大剣とは巨軀を持つ者のための武器だ。その肉体に見合った剣を作れば必然的にそれは巨おおきくなり、また小柄であってもそれを扱える筋力さえあれば使用するのは無理な話ではない。

巨体が大剣を使えばそれは剣たりえるのだが——その大剣を中心と見て——小柄な者が扱うとすれば、それは剣たりえない。単なる巨大な近接格闘用の武器であり、それを飽くまで刀剣としての概念を捨てずに使用するならば重量や大きさから、足かせにしかならない。

「くそどもがあっ！」

本領発揮とは、まさにその事だった。

剣術という型に当てはめれば弱体化し生かしきれぬ巨剣は、力任せに振り回し、敢えてジャン自身が剣に振り回されることで脅威的な破壊力をもたらしていた。

さらにその重量ゆえの緩慢さは、遠心力に振り回されることによって解消。その勢いを孕んだ暴力はまさに疾風の如し。

——数十センチにまで距離を縮められたジャンは、それまでと同様に俊敏たらしめる勢いを殺さずに剣を振るう。故にその加速は、留まるところを知らずに速さをさらに求め続けていた。

眼前にその大口を開けて迫ってきた顔面に横薙ぎにして剣を振るえば、頭は吹き飛び、下顎は並びの良い歯を小刻みに揺るがしながら突撃の勢いを殺せずに、死して尚ジャンへと突っ込んでくる。彼は振り難いだ勢いと共に斜め後方へと勢い良く跳躍すれば、すぐ脇



を通り抜けて体勢を崩し、地面を挟りながら急停止した”白いヤツ”が視界を過ぎった。

着地点には、ジャンへと手を伸ばすソレが待っていた。

「はっ、くたばれっ！」

脇に構えていた剣を背後に振り下ろせば、その刀身に触れた手が半ばから袈裟に切り裂かれて吹き飛び、さらに身体に沿うように切迫してから振り上げれば、腹半ばから肩口にかけて肉体を切り裂き、一度抜けた刃は再び首を刎ねて空中に飛び出た。

蛍光色の鮮血が周囲に飛び散り、見たことも用途もわからぬ臓物が溢れ出る。辺りは腐臭に満ちたが、嗅覚は麻痺し、奴らの鮮血に対する補色か、瞬きの度に真紅の残像がチラついた。

ジャンは着地とほぼ同時に、左足を軸にして腰を回し、身体を大きく開くように捻りを加えた。足は半円を描くように開いて地面を踏みしめ、それに追いつかぬ大剣は、それ故に白い連中の全方位からの包囲を許してしまう——否、彼は余裕を持ってそれを”許可”していた。

そして捻りを解消するように力強くその巨剣を薙げば——深く食らいついた剣は下方から振り上げるようにして”白い連中”を切り裂き、その胴体を瞬く間に両断する。一体を切り裂けば、その横に並ぶ一体、さらに次を切り裂き、勢いは衰えずに肉体を吹き飛ばす——。

鋭い円の軌道が終える頃には、瞬時にして十以上の”白い連中”が肉塊と化した。

「はぁ……っ！ まだ終わらねえのかよっ！」

呼吸を乱しながら、ジャンは改めて辺りを見回した。

——敵の数が本当に一、二〇〇体程度ならば既に戦闘は終わっているはずだった。

一度に十体以上を屠るジャンの機動は、既に数十回と繰り返されている。随時行われる魔力供給から肉体強化が絶えることは無かったが、それでも自己治癒が鈍くなっているのは確かだった。

筋の結合が一瞬だったはずが、今では数十秒もの時間がかかっている。そして回復の為に時間を稼ぐが、その際に無理をして怪我が悪化し、またそのための時間を作り――悪循環の堂々巡り。

「くそつたれが」

吐き捨てるジャンは、怒りや憎悪から、本来口にするはずのない言葉を口にする。それは彼が、幼少期の”出来事”以前に持っていた本質的な性格であり、環境によって矯正されたより攻撃的な一面であった。が、彼にはもちろんその自覚はないし、多くの者にはあるだろうそれだ。

が、その性格こそが、彼を死を畏れぬ幽鬼とさせていた。そして本能的にそれを携えているからこそ魔術よりも近接戦闘よりなのであり、ジャンをジャンたらしめる、彼を受容するには知らねばならぬ部分である。

――周囲には白い連中は居ない。

先ほどの戦闘で習性と”力押し”を学んだボーアは、獣人族特有の”種族解放”と呼ばれる――タマの獣化のように、彼女の持つイノシシ系の獣を肉体に憑依させるようにして戦闘能力を強化した。全身に毛皮を纏い、その両手は蹄のように硬質化する。牙が太く鋭く伸びて野性味を帯び、そして彼女の本质を見せるように――真っ直ぐ一直線に踏み込む一撃が、彼女の身を守り、そしてしのぎを削った。

「なるほど、な。そういうことか――異種族<sup>モンスター</sup>の恐ろしさってのは」  
木々をなぎ倒してやってくる同数、あるいはそれ以上かもしれない”第二波”を遠目に見ながら、青年は考える。

――ジャン・ステイルの肉体強化から始まる驚異的な破壊力は、されどそのお陰で状況が有利になったというわけではなかった。

白い連中自体はそうそう戦闘能力が高い存在ではない。

まれに”学ぶ”知性を見せることもあるが、個体が学んだ所で周囲にその情報や知識が伝播するわけがなく、その知力を活用するよりも早く屠るが故にそういった異種族は本来持たざるだろうと考え

られていた習性は、苦にはならなかった。

ならばなぜこれほどまでに苦しまされているのか——理由は簡単であり、明快だった。

無尽蔵を思わせる敵を前にして、

「格好はついたが……生きて帰れるかな」

その独り言はどこか喜色すらはらんでいた。

異種族の脅威はその圧倒的なまでの物量であり、また痛みや傷に怯まぬ狂乱的な本能でもあった。

どれほど殲滅に尽力したとしても、いずれ疲弊し力尽きる。

敵は味方の多くを犠牲にしながらも、ただひたすらにそれを待っているようだった。無論、連中にそんな知性はないだろうが、彼にはそう思えて仕方がなかったのだ。

——戦闘能力が脅威などではない。

その無限を彷彿とさせる物量こそが、最大の脅威であり恐るるに値する”現象”たらしめていた。

そう、異種族の襲来はもはや現象である。彼は全てをひっくりるめ、そう理解していた。

「ジャン……、あたし……ジャン……ッ！」

硬化化する五本の指が瞬時にして白く染まりあがり高熱を帯びる。その手がさらに貫手となって、敵の肉体に横一閃を走らせていた。

焼ききられた肢体は為す術もなく内蔵を零して倒れ、されど執念深くボアをつかもうとする両の手を切り裂いては、足を振り上げて頭を打ち碎いた。

——体内の昂りは、最早抑えられはしない。

ジャンの登場によって爆発的に増幅した脳内麻薬が、彼女の戦闘能力をぐんと跳ね上げていた。コンディションは最上のものとなり、戦闘意欲はそれ故に彼女をより効率よく確実な生存へと導いていた。だからこそ、己の中で定めた規律は無自覚に破られ”種族解放”が行われた。

獣人族はその獣化、人型化は自由自在だ。他の種族は分らないが、少なくとも獣人族はそういった変身能力の向上が顕著であり、今のところ確認されている限りでは唯一と言えた。

そして彼女の<sup>パワー</sup>そうする戦闘態勢は、人型の臨機応変である柔軟性と、獣型の力、俊敏さという根本的に高い身体能力を併せ持った、彼女の全力たる形だった。

それ故に、最初期の戦闘とはまるで別人のようにその殺害<sup>キル</sup>数は跳ね上がり、ジャンのように一撃で数体を倒せぬ者の、地道な戦いで今では五〇をゆうに超えていた。

が、敵の数は一時消えたかに思えたが、肉塊の山の向こう側。未だ森の火災が及ばぬ、月光に照らされる薄暗い向こう側に、さらなる援軍を彼女は見た。

悪臭立ち込めるそこで、いよいよ体力的にも追い詰められ始めたかというところで。

首を回して背後を見やる。やや離れた位置で立ち尽くしているジャンを一瞥するが、彼はその視線に気付かず、大剣を杖代わりにして身体を支え、肉体強化魔術によって全身を淡い光に包んでいた。

表情には余裕があるが、おそらく無意識なのだろう震えは遠目に見ても明らかだった。肉体が限界を迎えようと、あるいは既に限界を超えているのだろう。そしてそれは、当然だった。

ただでさえ、肉体強化の限界を超えて治療中だったのだ。そこでさらに本来は扱えぬ超重量の大剣を簡単に振るい、そして一時間にも及ぶ全力全開の気が抜けぬ戦闘を続ければ、肉体がズタボロになってもおかしくはない。むしろ、彼がそうして立っていられる事自体が奇跡と言っても決して過言などではなかった。

が、ボーアもそれを当然として見ていた。

ジャンならそうして当たり前だ。

というか、彼ならばそうしなければならない。

にわかに失われた、もしかしたらまだ戻れるかも知れないという生半可な位置で燻るより――未来を一度失ってから、まだ戻るとい

う強い決意のもとで立ち直ったほうがいい。その成長性は別人のよう  
うに変わる筈だと、経験則上で彼女は考えた。

「ジャン……、あたし……あんたとなら——」

口にしようとした言葉を、はっと我に帰って飲み込んだ。

一時的にだが、敵も失せて落ち着いた所で心が弛緩したが故に、  
思わず零しそうになってしまった。

こればかりは、心に秘めなければならない。彼には背負わせては  
いけない。この戦闘が終わったら、彼に気付かれぬように退陣して、  
全てを忘れてもとの生活に戻るのだ——頭ではそう考えていた。

だが、彼女は知っている。もうジャンを忘れることはできない。  
そして、もうジャンから離れることができないことを。

心が彼に釘付けた。理由は知れないが、その状態でここに駆けつ  
けられたのが大きかった。

やはり危機を救われるというのは鉄板か——こんな状況での場違  
いな考えに思わず吹き出して、軽く頭を掻いた。

「一目惚れ、なのかな。だったらすごい情けないなア」

ひたむきさ、あるいはその弱さに魅了されたというのも恥ずかし  
い話だ。己自身の精神的な強さを誇っている彼女は、だからこそそ  
ういった軟弱な理由が嫌だった。

どうせなら運命的な何かで結ばれていたかったが……現実的では  
ない。

そしてより事実によく説明すれば、やはり眩いたとおりになるの  
だろうか。初めて対峙した時は何も思わなかったから——やはりそ  
うなのかもしれない。

——軍団は、再び距離を縮めていた。

「ビビってます?」

背後からジャンが声を掛けた。ついで肩に手をやると、驚いたよ  
うにボーアは身体を弾ませる。

「ああ? 誰に言ってるのよ、実力面では誰もが認めるボーア様よ

？」

「……ボア？」

——彼女から漏れた名前は、まるで電撃のようにジャンの中を走り、そして脳を刺激する。電撃はそのまま記憶の海に飲み込まれて……ボアという名前に関連する、全ての記憶を引き出した。

あのドワーフの女騎士が、街に襲撃してきた獣人をボアと呼んでいた。

鳥人の女騎士が、同様にボアの名を出していた。

そして、目の前の獣人たる彼女は己をボアと名乗っていた。

食い違う事実は、何一つとして存在しない。

そしてそれまで存在していた、たった今思い出した違和感は、それと同時に解消された。

「ああ——」

感嘆となって、その判然とした快感が思わず口から漏れた。

「あなたが、ボアだったんですね」

今まで、あれほどまで接していて思い出せなかったことを恥じるように後頭部に手をやって、はにかんだ。

「あ、あの……ジャン？」

「まあいいや。つもる話はまた後だ」

馴れ馴れしく肩を叩いて見せても、ボアは嫌がる様子一つなく、どこか気恥ずかしいように苦笑して頷いた。

「行くわよ？ ……発現めざめろ——熱暴走ヒートッ！」

言葉と共に、彼女の肢体は熱によって芯まで白く染まり上がる。

同時に発動させたらしい灼熱ブローケン・ブレイズの牙はその影響だろうか——既に頭上で上、下顎の二本で一对となる牙を構成していた。

「全力でな。覚醒めざめろ……禁断フォービドゥンフルーツの果实」

肉体の強化に充てていた魔力は、おおよそ魔術を主として戦闘する魔術師ほどの量になっている。つまりは近接戦闘を主体とする者にしては異様な程の量であり、そしてその全ては強化の為に増幅されているという現実が、その強化の程度を知らしめていた。

そしてその魔術によって、魔力の半分ほどが消費されて、胸に現れた小さな魔方阵から瞬く間に紅い果実が精製。彼は空中に投げ出された球状のそれを取り、流れる動作で一齧り。

口腔内に芳醇な魔力があふれたかと思うと――同時に全身へと熱が伝播し、間髪おかずに意思を剣へと送れば、その巨剣は瞬く間に熱を帯びて真紅、やがて融解する勢いで白く塗り固められた。

「そして、熱暴走――これがおれの、奥の手です」

ジャンのひと通りの所作を眺めていたボーアは驚愕し、言葉を失う。彼はそれを見ながら悪戯っぽく笑って、

「さあ、行きましょう」

肉体は既に死に体。思考は一辺倒で身体の反射的な機動に頼り切った戦闘方法。戦闘領域は剣の届く範囲までであり――破壊力は最上。速度は敵に反撃を許さず、その戦闘能力は圧倒的だった。

相棒たるボーアは体さばきの柔軟性の全てを捨てて猪突猛進気味の攻撃に転ずることによって、加速。故に敵に捕えられる可能性を低下させた。

そして――走駆。

切先を背後に向け、腰に引きつけた両手で柄を握り引きずるように走りだすジャンを確認しながら、ボーアは微笑を湛えて業火の二対の牙を敵の軍団へと振り下ろした。

前衛も後衛も無いその軍団の、最前列はボーアの灼熱の牙が吹き飛ばした。焼け焦げ体液を燃やし、全身を吹き飛ばすそれらの数は、されど見た目的に大きく減ったようには感じられない。

そしてい炎にさえも怯えず押し寄せてくる”白い連中”へと、ジャンは瞬く間に肉薄する。速度は明らかになまでにジャンが上であり、それ故に切迫し、接触するのにそう時間はかからなかった。

――地面に抵触する程の下方からの、切り上げ。右腕の下腕がすり切れて鮮血が溢れたが構わず力任せにその身の丈の巨剣を振り上

げる。

眼前に迫っていた気色の悪い”奴ら”は、先程までと同様に岩剣に深く食らいつかれて、柔く肉体を両断。切断面を焼き、肉が強制的に結合する。

肉体は二つの肉塊となって崩れ落ちる。

本来ならば、そこから先に続くはずだった――。

「く――っ!?　なんだ、こいつら……っ!」

いつものような後続は、周囲を囲む連中はそこには無い。未だ大気を消費する爆炎の中に身を置く白い連中は、皆が一様に歯を噛みあわせて斉唱するように音を鳴らしていた。まるで様子を伺うような、異様な光景。

ぞわりと全身が泡立ち、そしてそれまで無視していた”学習能力”が脳裏によぎる。

「ジャン、こいつら……」

「ええ、最悪、かもしれません」

今までは無闇に突っ込んできた。だからそれをなぎ払い、その破壊力と囲まれた際に発揮する最大限の戦闘能力で一度に多くの敵を屠ってきた。

しかし、その時点ですでに”第二波”が待機していたとしたら。奴らがそれを目の当たりにしていたら。

第一波と考える先ほどの連中が、いわゆる特攻隊のような存在だとしたら。もともと犠牲にする予定の軍団が予定通りに消化されただけだとしたら。

――異種族の脅威とは他に、この”白い連中”の本当の恐ろしさが”学習能力”にあったとしたら?

「ビビってんの?」

ボアの肘鉄が脇腹に食らいつく。だが勢いや力は無く、それが単なるスキンスリップであることくらいはわかっていた。

「誰に言ってるんですか?　おれは――」

何があるだろう。言いかけて、思わず口ごもる。



彼女のように戦闘能力で信頼を築いているわけではないし、現在の機動力や破壊力は、全て強化あつてのものだ。そしてこれが終われば、この肉体は使い物にならなくなる。

ならば何が残されているのか。魔術にだって秀でては居ないのに。

「おれは？」

後ろ向きに考えて、いや、と唸る。

そうだ、一つだけあつた。

「おれは戦闘もできる元鉱夫ですよ？ あんな連中、鉱山の崩落に

比べたら屁でもない」

「あははっ、なにそれ」

「唯一誇れる事です」

あの生活は、自分を支えてくれた人たちは未だに大切なものだ。現状は散々だが、それでも捨てたものではないし——しかし騎士でもなんでも無い今名乗るならば、それが最適であるように思えた。

彼女はジャンの真似をするように肩に手を置き、ガチガチと手拍子でもするようなかみ合わせ音を聞きながら、寄りかかってくる。

「——これまでの戦い方が通じなくなるのか、な？」

「ははっ、面白い事言いますね」

そう言って笑い、頭を叩くジャンを横目に睨む。彼は相変わらず無意識の震えが続いているが、それは決して恐怖故の畏れだとか、武者震いだとかいうものではない。全身の筋肉が既にズタズタに切り裂かれていて、ただの直立体勢が、彼にとって一番負担になるからだ。

「戦い方は確かに相手に理解されているでしょう。だけど、速度や力に、連中が一度でも対応できたことがありますか？」

そして同種族が、わずか一時間前後でそれに対応できるほどの成長、あるいは進化を遂げられるわけがない。ならば同じ身体能力で、同じ戦闘能力。学んだだけで代わり映えもない、その個体数だけで数的優位に立つだけの存在だ。

そんな連中が勝てるわけがない。

ましてや、

「おれたちに？」

「……確かな」

彼女は、どこか引きつったような顔で頷いた。虚栄たる微笑は無いのは、ジャンに下手な演技で心配や心遣いをさせないためだ。

「だが」

釈然としない。

彼女はその言葉を飲み込んでから、いい変えた。

「“学習”するとして、それまでを理解したとして、よ。よく考えてみて、もし本当に“知能”があるなら、その物量を利用した特攻が一番効率が良くてあたしらを倒せる確率が一番高い戦術って事に行き着かない？」

「つまり」

「そう」

ボーアは頷いた。

「罨、かもしれないわね」

「まさか」

にわかに驚いた、という様相を演じて目を開く。

頬、そして両腕、腹、背、引き締まるがやや肉付きの良い腰回り、筋肉質の腿、形良く伸びるしなやかに長い足……その全てに肌触りの良い毛皮を纏う彼女は、さらにその身を強く押し付けて首を振る。  
「信じたくは、ないわよねえ」

「だけど、良く言うでしょう？ 虎穴に入らずんば虎子を得ず……なんにせよ、相手が”待つて”いるんじゃない、動かなければなにも始まりませんね？」

「ああ、そうね。すごくイヤだけど」

「さて——行きますか」

まるでこれからどこかに出かけるような気軽さで。

ジャンの声を契機きっかけに、ボーアは四肢を、そしてジャンはその巨剣を真紅を経て純白へと熱し、駆け出した——その瞬間の事である。

軍団の横腹に盛大な花火よろしく爆発が巻き起こった。

肉塊が宙を飛び爆ぜて闇を蛍光系の緑黄の鮮血で塗り替える。森の火災はひたすらに拡大する一方で、再び爆発が軍団を襲った。

——もう歯の打ち鳴らし音は聞こえない。

大気を激震する爆発音に、さらなる爆発。一方でどこからともなく飛来する無数の真空波は一瞬にして木々と共に白い連中を刻み細かく分解していく。

「まったく、夜中に起こされてみたらこれだもんなア」

——白い連中は、己らに襲いかかる予期し得なかった方向へと転換して戦闘に向かう。もう、彼らには興味を失った、あるいは向かってこない連中を相手にしてられないというように、こちらに向かってくる様子は一切なかった。

背後から聞こえる、どこか聞きなれた声にジャンは振り向いた。

「や、ジャン。君はいつもこうなのかい？」

母国では新参ながらも確かな実力秘めたる騎士であつたラック・アンが手斧を片手に、そこに居た。

「まったく。学校では優等生然としていれば、まるでそれまでの不満をブチ撒けるように……情緒不安定と、貴様には二度と言われたくはないな」

そして、こことは違う森で生活していた”元はぐれ”のリサー——偽名はクリム——が、鮮血のように朱たる炎にその真紅の髪を照らして、腰に手をやり立っていた。口調は荒く言葉は暴力的だが、決して本心からの言葉ではなく、表情から見て取れるように、呆れ半分、安心半分のそれだという事が良くわかった。

——全身から力が抜ける。

無意識に『禁断の果实』が解除されて、そして次いで肉体強化が消え失せる。肉体内から魔力が霧散し、そして筋が断裂、細胞の死滅が回復する事がなくなつて……とても立っていられはしない、そもそも正気を保ってられない程の拷問じみた激痛が全身に打ち付

けられた。

手の中から零れた巨剣が、大地を揺るがす衝撃を響かせながら、そこに横たわった。

喉が詰まる。

視界がゆらぎ、ぼやけ、意識レベルが低下する。既に肉体の感覚は無いのにも関わらず、痛覚だけは鋭敏で……。

ほっと、どこかわざとらしくジャンは肩をすくめて表情を綻ばせた。

「まったくお前らは……なんでここが？」

そんなジャンの自然な顔にボーアは心底訝しむが、それ以上に”無理をしてでも無理をしていない”体裁を取り繕う彼に、心底驚き、そしてある種の畏敬すら覚え始めていた。

恋心とは似つかぬ感情。

そうだ、これは知っている。これは——母性だ。

「ラアビさんがね。ココらへんを探ってる時に火事になってる森を見つけて、消化の為に援軍を呼んだらこうなってたってワケ。ま、火事を見つけた時点で大方大変な事になってるって感じたから、ここに僕らが呼ばれたんだけどね」

「あの連中には今、ラアビ、そしてアエロ、エクレルがあたっている。話は後だ。帰るぞ」

リサが説明する中で、ラックはジャンに近づいて肩を組んだ。ボーアは慌ててもう片方を支えて、手持ち無沙汰になるリサは周囲の状況を確認しながら、ジャンが落とした巨剣を引きずり、極力異種族に接触しないよう気を巡らせて道を促した。

「ああ、悪いな……みんな——」

——夜は未だ更ける。だが彼らにとっての悠久とわに思えた悪夢は終わりを告げ、そして同時に、ジャン・ステイルの意識は眠りにつくような自然さで、ゆっくりと泥沼へと沈んでいった。

## 獣人オフ会

「ジャンがまた新しい女をはべらせて来た件について――」

穏やかな日差しが差し込む、柔らかな布団の上。そこでは三毛猫たるタマが、茶の毛皮を纏うウサギが、膝を抱えて座り込むノロが、そして――はべられた女という議題にさえなったボーアが、ウリ坊姿で寝台に寝転んでいた。

「懲りないわよねー」

あの戦闘で怪我一つないボーアを眺めながら、ラアビは無気力気に声をあげる。それは、先日から癒せぬ疲弊のせいであった。

白い連中を殲滅したのがちょうど昨日の朝っぱら。帰ってきてから、騎士を派遣した事による”報告書”<sup>レポート</sup>を提出させられ、また未確認の異種族との交戦ということから、そのことについても報告書提出の義務を課させられ。それが出来上がったのが、今日の朝だ。

今日はタマの誘いを断っても良かったのだが、せっかくのお誘いだからと来てみたがやはり疲れているのは仕方がない。獣姿で良いと言うのは、唯一の救いと言えるだろう。

――”白い連中”の総数は合計で五二八体というのが公式の見解だった。うち、実際に彼女らが交戦したのは二〇〇体あまり。つまり、まだ未熟なジャン・ステイルに、ボーアの連携もとれぬ殆ど単体と単体という二つの戦力が個別に行う戦闘で三〇〇体を殲滅した事になる。中でも半数以上が斬撃によって肉体を分別された死骸ばかりというのを考えれば……。

ラアビは部屋の片隅に、バスタードソードと共に並ぶ規格外な大きさの巨剣を一瞥して、軽く嘆息した。

今では無茶が祟って入院中だ。修道女の見立てでは”状況は深刻”らしいが決して治らぬものでもない、というのが一見してからの報告だった。

もっとも、運任せというのが殆どだろうが。

「まったくよ。まったく、起こしてくればあたしも行ったのに」「起こした」

座っているタマの頭をノロが叩く。といっても暴力的なそれではなく、ごく平和的なツツコミだった。

「うっそ、起こされた記憶ないけど……?」

「二度寝してたわよ」

ウサギ姿のラアビはそのつぶらな瞳を閉じたまま告げる。

「いびきもかいてた」

人型で、ジャンの布団の上に大の字になって寝ていた彼女を思い出しながら言った。

「まじでっ?!」

「割とマジで」

「うわー、恥ずかしーッ!」

タマは言いながらゴロゴロと寝台の上を忙しく転げまわる。そして断末魔と共に彼女らの視界からその姿が消え失せて――直後に、寝台の影から飛び上がってくるタマは、何事もなかったかのように飛び乗り、そして座りなおした。

「――あんたら、いつもこんな感じなの?」

気怠げにウリ坊が口を開く。うんざりしたような顔だが、どこかその平和的な光景を傍観し満ちたような微笑を湛えるのを見て、ラアビは頷いた。

「これからジャンの話になるから、もっと騒がしくなるわよ」

「まったく……。あんたらはみんな、ジャンの事が好きなの?」

「そうね。タマはヒトとして気に入ってる上にすっかり手懐けられてるから恋愛的な観念はないし、あたしはあたしで、仕事上信頼できる将来性のある相棒として見てるし」

「あの子は?」

顎をしゃくって、膝を抱えて座り込むノロを一瞥する。

ああ、と何やらを納得するような顔をみせてから、ウサギは首を傾げた。

「知らないわ。ただタマとジャンと仲が良いみたいってだけ」

「そうか」

「それで、どうなの？」

「何が」

「アンタの方よ。三日間ジャンと一緒に、あの戦いでも一緒だったんでしょ？　少しはどうこうなってもいいくらいだけど？」

「……知らないな。あたしそういうの興味ないし」

白々しく首を振ってから、彼女は体を起こして寝台の下へ。

その直後に鈍い輝きがあつて——イノシシの姿は消え失せた。その代わりとばかりに跪いていた”何か”が立ち上がる。

まず始めに肩甲骨まで伸びる艶やかな黒髪が垂れるのが見えた。ついでしなやかな四肢、網目のシャツに包まれた肉体。光沢を持つ革の腿があらわになる短いズボンに、網シャツの上にそのまま羽織られる毛皮のベスト。

それは確かな人の姿であり——それがボーアの人の姿だった。

「つか、なんでそんなかつたるい格好で居なくちゃなんないわけ？」

「まったく。アンタは風情つてものを知らないわね」

彼女に習うように、ウサギも人の形に——毛皮に包まれるウサギの下半身だけを残して、彼女は鋭い爪が収納されている袖のある外套を羽織ったままで、さらに頭に生える二本の長い耳は垂れていた。茶系の長い髪は外套の中に流れて長さは知れないが、丁寧な手入れがされているように、柔らかい外見を持っていた。

彼女はやや広めの寝台に寝転びながら、肘を立てて枕にしてボーアを見る。彼女は寝台に腰掛ける形になっていて——気がつけばタマも、同様に人型になっていた。

肘から先をネコの四肢に。塗料を塗ったようなしっかりとした黄金色の長い髪は背筋にまで伸び、彼女は尾を忙しく動かしながらラァビ同様に寝転がる。たわやかな肢体、特にその豊満なバストが自重と布団に挟まれて形が崩れ——。

その艶やかたる光景には、だが反応するような無粋な異端児は居なかった。

飽くまでほのぼのとした午後を満喫しているのであり、飽くまで女性同士という関係で、この時間を共有していた。

「んなこたぁいいのよ」

切り出したのはやはりタマだった。

「ジャンとお付き合いする確率が一番高いのって、誰？」

身近な男性陣で、そういった浮いた話に近い場所に居るのがジャンだけである。だからごく必然的に話題の中心になるのは彼だった。修道院で激痛に堪えながら療養中の本人のことなんて素知らぬ顔で、現状とはかけ離れた話題にうつつを抜かす。

ボーアは誰よりも早く、知らないわ、と肩をすくめて傍観に。ノロはただ場を見つめるだけであり、会話は必然的にラアビとタマのふたりだけのものになった。

「やっぱりサニー？」

とタマ。目を輝かせる彼女に、ラアビは短い嘆息で返した。

「な、なによ」

「ジャンはサニーちゃんを本当に妹としてしか認識してないわよ。そのうち、自立させるつもりよ？」

「じゃー誰？ あたし？」

「すつとぼけて。ジャンを異性として意識してるのなんて、誰かいる？」

「えーとね。レイミイでしょ？ アオイでしょ？ クロコでしょ？」

あとあのヘンなサソリ」

「もつと大穴が居るわよ」

「え？ だれだれ教えてー！」

心の底から楽しげに彼女は身を起こしてラアビに詰め寄った。彼女は鬱陶しげにタマの顔をわし掴みして一定の距離を保つと、指を一本立てて注視させる。



そして妙な”溜め”にボーアは”まさか”と思って胸を弾ませ、両者から少しだけ視線を外した。

それからラアビはゆっくりと、イタズラな微笑を持って口を開いた。

「騎士の――」

「へっくし！」

「……風邪ですか？ 今クスリを――」

「あ、いや良いんだ。気にしないでくれ」

――修道院の一室で、寝台にて包帯によって包まれるジャンを見守っていた一人のケンタウロスが、慌てて退室しようとする修道服姿の少女を引き留めた。

指先で鼻下をこすり、ただの噂だろう、とバツが悪そうにくしやみの言い訳をする。

彼女はそうですか、と頷いてから、

「ステイルさんのクスリを準備してきます」

そう言って、どちらにせよその場を辞した。

それが彼女の気遣いだったかは知らないが――下半身に馬の身体を持つ女騎士、ユーリアはドアが閉まる音を聞いてから、深くため息を吐いていた。

本来ならば何があっても、不必要な接触は避けるべきだと考えていた。理由はないし、それは彼女が勝手に作った自分ルールの中での規則だった。

だが来てしまったのは、とんでもない大怪我をしたと聞いたからだ。そして実際、彼は本当にとんでもない怪我を負っていた。

目立った外傷はやけど以外には見られず、またそれは治癒魔法によって癒すことができた。今はクスリを塗布して新しくできたばかりの皮膚を慣らすだけなのだが――最も酷いのがその表面下。全身を駆るために必要である筋系だ。

無茶な肉体強化に加え、それでさえも無茶だと言える超重量の武器を身体を気遣わずに使用したことが原因とされている。

身の丈ほどの大剣だ。さらに軽量化など考えすらなかったであろう、岩に鋼鉄の柄を突き刺しただけの造り。頑強で力強く、切れ味も関係のない凄まじい破壊力を誇るソレだが、欠点があるとすればその取り回しにくさや重さだった。

確かに身の丈ほどの武器は出回っているし、身の丈の数倍はあるうかという武器もある。彼と同じ体躯でそれを扱う者がいるのも事実だが――彼はそれに適した人間ではない。

故に現状に至ったのだ。

そして、肉体強化による幾度とも無い死滅と再生の繰り返しによって、いくらか神経も狂っている可能性がある、受け持ちの修道女は言っていた。正確な判断はジャンが目覚めなければわからないが、あまり樂觀視は出来ない、とも。

「変わっていない、と言うのかな」

ユーリアはジャンを見つめながら、ぽつりと漏らした。

そもそも、彼の過去は知っているが、彼がその過去でどういった人間なのかは詳しく知らない。それなのに知ったふうな口を利くのはいささかはばかられたが、思わずそう言ってしまう。

「全く――だが、私も変れたかな？」

十六歳の夏――彼と出会った日の事を思い出して、考えた。

あの時代はまだ騎士の適齢が十五歳以上というハードルの低かったから、彼女は持ち前の身体能力と魔法で騎士となることができた。あれから八年が経過して……戦闘面の实力は確かに上がっていると言ってもいいだろう。お陰で以前は精鋭部隊たる第一騎士団の特攻隊長を務めていたし、今ではその功績から前線を引くことが許可された。

だが人間的にはどうだろうか。

彼が尊敬してくれた自分のままで、あるいはそれ以上で居られただろうか。

しかし、ジャンも成長して見方というものが変わる。それでもまだ、同じ感情で居てくれるだろうか……。考えて、それが虚しいことだと首を振る。

「私という奴は」

最近はずにジャンを気に掛けているような気がする。

理由は、彼に魔法がない事が判明したからだ。

そして彼がこうなった理由は、そういった事が原因となる自暴自棄からの暴走……というのが推測だし、間違っては居ないように思える。そういった人間らしい部分がなければ、むしろユーリアは距離を置いているだろうと、彼女自身思っていた。

もしそうならば、自分より卓越した存在になっているからだ。もはや見守り世話をする必要など無い。

だが違うとなれば……。

「ステイル。これから、忙しくなるぞ」

彼の処遇に、さらにいつ来るか知れないヤギュウ帝国の侵攻。

一応、彼はその訓練部隊に編入される予定だったのだが、この調子では除名せざるを得ないだろう。少なくとも全身の筋肉が断裂しているようでは、魔法とクスリによる治療を続けていたとしても長い時間がかかるし、ケガをする以前のようにしっかりと治るとは限らない。

治ったとしても、その後はリハビリ生活だ。まだ九月だが、今年中に完治するような怪我ではないことくらいは、医療に明るくない彼女でも良く分かった。

——彼女はそれだけ告げると、修道女が戻ってくるよりも早く、その場を辞した。

「えー、ありえないでしょ？　だって、会ってる以前にすれ違ってるのすら見たことないけど」

タマは不敵なラアビの発言に、うっそだーと大きく身体を仰け反

らせて首を振る。今回の救出作戦に参加したアエロやエクレルならまだしも——と続ける。

だがラアビは頑固として彼女のセリフに首を振った。

「でも、ジャンが尊敬してる騎士は彼女だって言ってたし」

「——好きだった？」

そう口を挟むのはボーアだった。

ラアビは肩をすくめて、首を傾げる。

「恋愛感情は知らない。でも、騎士を目指した理由はそうだって」

「ははん、だからね。だから、”そう”なのね」

何かを納得するように、タマは顎に肉球をやってなるほどと頷いた。

「好きなのよ。だから、いくらあたしとか、他に魅力な女の子が居たって見向きもしない。純なのよ！」

「ただの奥手ってことじゃ？」

再びボーア。

タマは視線を移し、首を振る。

「ジャンが奥手？ んなワケないわよ。すっごいバカか、鈍感ってならまだわかるけどね」

「そ、そうなの、か？」

「そうよ、そー。だってあたしなんかさ、一回殆ど”誘われ”てんのよ。相手その自覚ないのに！ もー、信じらんないったらありやしない」

「ヘンな病気にかかるのがヤになって、やっぱりって考えなおしたんじゃない？」

「ちよっ、病気ってなによ！ ビョーキって！」

悪戯な笑みを浮かべるラアビへと、タマは思わず食って掛かってその顔面に肉球を叩きつける。

ラアビはそれに抵抗しながらじゃれあって、そのまま寝台から転げ落ちて行って——。

その始終を眺めていたボーアは、肩をすくめるように溜息を吐い

た。

——自分がこの国の中に入る事に何のお咎めもなかった事に驚いたが、しかし……平和だ。

彼女はしみじみそう思っ、頷いた。

これこそが幸福というものなのかも知れない。最早懐かしくあり、そしてもう二度と手に入れることができない、ごく普遍的なあの生活を思い出しながら彼女らを見守った。

「いいな、こういうのも」

顔を上げれば、寡黙を貫くノロと視線が交差する。

彼女はボーアのそんな言葉に同意を示すように頷いて、薄く微笑んだ。

ボーアもそれに頷き、微笑返して——。

あの死闘が嘘のように、穏やかな日々が、ごく自然的に、あの延長線上で開始した。

## 入院生活

学校が開始して四週間目。

しかし実質的に二週間しか登校していないジャンは、出席日数や成績ににわかな不安を覚えていた。

騎士たちからの処遇の通達は未だ来ないし、修道院に運ばれてきてはどなくして目を覚ましたジャンは暇ばかりを持て余していた。ちやうど眠っている時にユーリアが来たという話だったが、それ以降見舞いに来てくれる様子は無いという。

「……はあ」

「どうしました？ 溜息なんて」

包帯を取り替えてくれている、修道女見習いの少女がそう声を掛けた。

最後に腕の包帯を金具に引っ掛けて止め、拘束。彼女はそこで軽く腕を叩いてから、終わりましたよ、と告げる。そうして道具を片付けながら、言及した。

「どうせまた、学校だとか、他の人の事を考えていたんでしょう？」  
まったく、と腰に拳を当てて、呆れたと言わんばかりに肩をすくめた。前髪まで隠す修道服姿だが、澄んだ目元に潤う瞳が常に煌き、また顔の小ささや輪郭の丸さから幼さが強調されている。背丈が低く、色々と仕事をするのに大変そうだが、一生懸命なその姿に胸を打つ何かがあるのは確かだった。

応援したくなる少女だが――そんな少女の説教に、ジャンは苦笑しながら上着を羽織った。

「あのですね、ステイルさん。一言言わせてください」

そこから始まる一言は、実質的には二言にも三言にもなる長く続く説教だ。それは心から怪我を心配するが故の彼女の心遣いであり、またこの修道院の中でも最も歳が近いという事から妙なまでに湧いた親近感からの言葉だった。

そして世話をしている、という事からいつも妹扱いだったところを逆転的に年上然とした振る舞いをしているのだ。

「確かに誰かの心配をするのは良いことです。自分を省みないその真摯なる態度がステイルさんの魅力でもあります」

意外にも高評価だった。

しかし、が、と続く言葉に不安を禁じ得ない。

「今は正直樂觀できる状態じゃないんですよ？ 痛みを感じてないって言ってますが、それはマヒしていて、かつ神経系に異常があるという事です」

彼女が言うとおりに、目覚めてから痛みが完全になくなったというわけではないが、それでもその感覚は随分鈍くなっているし、全身も以前のような肌から感じる鋭敏な反応は無い。特に右腕の二の腕からが顕著で、動かすことはできるが、痺れているようにまるで自分の腕であるような感覚ではないのだ。

それは彼自身、無茶が祟ったと諦めてはいたが、修道院では皆が一様に口をそろえて「治らないことは決して無い」と説明したから、少しばかりは希望が湧いた。

もっとも、元に戻るという可能性は未だ分からないのだが。

「本来ならば他人のことより、自分のことをもっと心配して労るべきなんです」

枕元の壁に立てかけられている一対の松葉杖を一瞥して、彼女はまた一つ、肩を落とすように嘆息した。

「内臓系に負担や怪我が無いことだけが救いですよ。ご飯をいっぱい食べて、いっぱい寝て休むのが完治の近道ですし」

「あれってクリスの手作りなんだろう？ いやー、うちの妹には負けるけど、お陰で食欲は十分あるさ」

「修道院に居る限り、料理は自分でしなくちゃですし。でも、ありがとうございます……ちょっと、嬉しいです」

彼女はそう言って微笑んだ。

やはり大人ぶるより、歳相応に居るほうが十分可愛らしいことを

再確認してから、ジャンはゆっくりと上肢を倒して仰向けに寝る。

「ほらほらっ、食べてすぐ寝ると牛になっちゃいますってば！ 散歩いきましょーって！ お外！」

痛みが鈍い事を良い事に、クリスは包帯の上から力を込めて脇腹を掴み、前後に揺する。

ジャンはわざとらしく、くすぐったそうに身を振ってから「分かった分かった」と繰り返して、彼女を跳ね除けて身体を起こした。

「ったく、いくら患者が居ない上におれの担当だからって、そんなに面倒見なくなっちゃっていいだろ？ 学校が終わればサニーだって来るのによ」

「ダメですよ。筋系が結合したって弱ってたら、リハビリがもっと困難になります。わたしはですね、いいですか？ あなたの担当である限り、あなたの健康のために尽力しなくちゃダメなんですっ！

先輩方がそう力説しました」

「受け売りかよ」

「いいんですよ、だってわたし、まだ勉強中ですし」

開き直るように彼女は笑って、寝台から足を放り出し前屈みになって床に足をつくジャンの介助をしながら、松葉杖を手渡した。

修道院の中庭は、自然で溢れる心癒される空間だ。空気は澄んで、また周囲の喧噪から隔絶された場所。ジャンはそのベンチでくつろいでいた。

右腕の感覚の鈍さを確認しながら、背もたれに身体を預ける。

——痛みが鈍いということは、既に回復しているからではないのか？ そう疑問を呈しながら、クリスが雑務に追われて修道院内に駆け込んでいったのを見送りながら、サニーから持ってきてもらった多面体<sup>プリズム</sup>を取り出し、右肘の魔方阵を軽く意識して掌に魔力を込めてから、目の前の芝生へと放り投げる。

通信用の多面体は空気中の魔力に反応して、”通信”を開始する。



耳に当てて声を聞く、一般的な”電話”のようなものだと思っていたジャンは、初回始動時には驚いたものだ。

白い魔石は透明であり、太陽光を吸収して、広い角度で跳ね返す。そうして半透明の人型の影が、等身大で魔石の上に現れた。

人影にノイズが入り、ブレる。それが幾度かあってから、「テス、テス」と人影の中から声が響いた。

『聞こえるか、ジャン？』

気易い男の声。ジャンは頷き、肯定を言葉で示す。

男は肩をすくめるように、「そりゃよかった」と呟いてから疑問を呈した。

『どうしたんだ、こんな時間に……つとスマン。そっちは今、昼間か？』

「ええ、ちょうど昼下がりです」

『そうか。こっちはちょうど夜中でな。言ったっけ？ 今本国で、<sup>ギルド</sup>協会に戻った所なんだ』

「そうでしたか……すいません、迷惑なら——」

『いやいや、んなこたあねーよ。どうせ後は寝るだけだ。明日は魔術開発しか仕事ねーし、好きなだけ話してくれ』

男は笑い、直立姿勢から何かに腰を落としたように身を屈め、大きくのけぞった。足を組み、そしてグラスを手にして、随分とリラックスした体勢でジャンを促す。

彼はそれに頷いた。

「実は、ですネ——」

神妙な面持ち、と言っても影でしか相手には伝わらない。だが声色でそれを判断したウィルソン・ウェイバーは、両肘で膝を打ち、前屈姿勢で言葉を胸に止めた。

話すのは、現状としてどうしようもない怪我のことではなく。

まず始めに、今回問題になり、”未確認の異種族とされている”存在の特徴や、北方から来た”偵察兵”の存在。加えて、少しばかり気になった魔術開発の事を訊いてみる。

まず未確認とされている異種族だ。あれほど目立つ外見をしていて、さらに近辺の森に生息していたとなれば未確認である筈がない。ならば一体何者なのか……その存在を隠蔽されていると考えれば、最も適切かもしれないが、”なんなのか”という疑問に対する答えにはならない。そしてまた、この数日間考え続けては見たが、答えが一切見つからないものであった。

そして偵察兵。北方の出で、さらに氷雪系の魔術を得意とするとなれば……この大陸での最北端であるヤギウ帝国である可能性が高い。だが、その帝国がわざわざ少数精鋭で最南端たるこのアレスハイムを偵察に来たのか。

——今回の自暴自棄で得たのは、大きく考えてこの二つの疑問だ。『あー、そりゃあアレだわ。厄介だなんてか——異種族の専門家——お国柄なのに知らねえってなると、言っているもんかなあ?』ウィルソンはどうしたものか、と頭を掻く。もし国家的に隠蔽されているのならば、下手に漏らし、それが彼個人の仕業だと判明したら……彼は思わず身震いさせる。

「お願いします。おれの交友関係なんて、国が知るはずないでしょう? それにこの多面体プリズムの通信を傍受できる筈がない」

『いや、魔法で——ああ、いや。分かったよ、熱意に負けた。話してやるから耳かっぽじって良く聴けよ?』

「お願いします」

『今の一般的に生息している異種族は、動物の奇形みたいな連中だよな? 狼とかさ』

「……はい。確かに」

『そいつをおかしいとは思わないか? 異種族モンスターは基本的に”溝の向こう側”からやってきたとされてんだ。しかも、溝が出来る一五〇年前には一切繋がりが無かった筈なのに。だっつーのに、異種族と動物には、外見的に共通するものがある……なあ?』

「……、それは、どういう意味ですか?」

溝の向こう側とこの世界とは繋がりがなかった。

だが異種族には、外見的な共通点があった。

要約すれば彼はそう説明している。そして思わせぶりなもつたいぶる言い方に、ジャンは思わず食いついた。

『もし、お前が一般的に知っている異種族が、本当にもともとこちらの世界の生物だったとしたら？』

「……？」

『溝の向こう側に居る、本来の異種族と呼ばれるべき存在に』何らかの施術”をされた生物だとしたら？』

「それは——」

『つまりだ』

ジャンの言葉を遮るようにして、ウィルソンは”おそらく”不敵な笑みを浮かべ、グラスを傾ける。

『そいつらが、今の異種族共の始祖たる存在の”可能性”がある。溝の向こうの世界で生息する、本当の異種族ってやつだな』

——その予測とも事実ともつかぬ、妙なまでに説得力のある言葉は、されど妙なまでに現実離れしているように聞こえて仕方がなかった。

あの白い連中が固有能力で動物に”ある施術”をして”異種族化”させた……ウィルソンのそのセリフに、ジャンは思わず言葉を失う。

そんな事があり得るのだろうか。そう疑問に思い疑っても、それに反論するための情報がない。それに加え、ジャン自身に言葉巧みに扱う技術が欠けていた。

肉体ばかりを使う生き方だったから仕方が無いとはいえ、否定したい本能を言葉に出来ぬ、胸の奥に渦巻く気持ち悪さにジャンはどうしようも無く、うなだれた。

「……あの、白い連中が？」

『飽くまで可能性の話だ。ありえない、と否定することも出来る。めんどうだが、とりあえず分かっているトコだけ説明するならそういう事だな。俺たちの商業組合ギルドでも、そういった事を研究する機関に

口が利くから調べてみたりもするが……今んとこの有力説だ。期待すんなよ?』

「参考までに、考えさせてもらいます」

『そうそう、そうに物分りがいいところは好きだぜ』

しかしな——ウィルソンは困ったような声を上げて間もなく続ける。

『お前さんとこの国は、それどころじゃないんじゃないかねーのかつて、思うんだがな?』

「……どういう事です? まさか、あの白い連中の登場が、これからの侵攻を——」

そうじゃない。彼は食い気味に台詞を遮って、やや怒気孕む声音で興奮気味のジャンをいなした。

『落ち着け。こりゃ、第三者から見れば明らかまでに不穏でアブない空気だ。おそらく、事実に近い』

偵察兵の話だ——ウィルソンはそう切り出した。

大きく、胸いっぱい息を吸い込む。

ジャンはベンチに深く座りなおしてから、周囲から未だ人氣が失せていることを確認する。

『どこの国だかは知らねえよ、だがな、少なくともそいつらは目撃者のお前を殺そうとしたんだろ? つまり、奴らにとっちゃ、自分らがこの国に居ることがバレちゃまずいわけだ。そこから繋がることはそう多くはない——つまりだ』

最早おなじみとなる言葉に、ジャンは頷く。

彼は再びグラスの中の酒を呷ってから、口を開いた。

『侵略だろ、常識的に考えりゃ』

「——侵略、ですか?」

『そう。鉱山も豊富で海も近い。それに”溝”も近いから他国に侵攻される心配もない。武力も十分。お前はその国に住んでるから分からないかも知れないが、割と強国だぞ、アレスハイムって。ま、文化の違う”こっち”の大陸もすげえけどな。蒸気機関から発展し

てったわけだが、それだけじゃなく、魔術、魔力の観念を取り入れた科学技術ってお陰で、そっちの数十年先の技術を持ってるって話だ。実感はないがな』

侵略、と言う大それた事を言ってみせたウィルソンは、だというのに話をそらすように別の話題を振ってみせる。

——確かに彼が見せる理論は正しいような気がする。

軍事力も高いし、入念な訓練のお陰でいつでも戦闘を行うことができるし、物資の流通もなめらかだ。さらに鉱山に住み着くドワーフのお陰で武器の質は高く、また警ら兵のみでも異種族と対峙できる程の戦闘能力を有している。

特にこれといった特産物は無いが、国としては自立し、また国交も捗っているいわゆる”良い国”だ。

しかし、わざわざ遠征してまで攻めてくる理由というものが、ジヤンには分からなかった。挙げた通りの国を我物としたいという気持ちは分からなくはないが、より決定的な、多くの命を犠牲にしてまでも必要とするもの。

わからない——だがそれで当然であるような気もした。

理解する必要など無い。

攻めてくるのならば、受けて立ち、抵抗し、殲滅するのみ。

一五〇年前までの、人々の争いが一般的だった時代ではそれが普通だったし、そもそもこれまでそういった事が無いのが異常だったと言える。

『世界が平和だからな。異種族だって、被害に悩まされてるとしたらアレスハイム近辺だけだ。こっちにゃ、魔術の発展しか届いてないし。だから、お前も知ってるだろ？ こっちは紛争や冷戦が絶えやしない』

蒸気機関を発明したのは、ジヤンらが住むアレスハイムが存在する大陸ではない。大海を挟んだ遥か向こう側にある、同程度、あるいはそれより大きな大陸にあるどこかの国の発明家だ。今から約二〇〇年前の事であると、義務教育で学んだ覚えがある。

こちらでもそれを流用しようとしたが、異種族や異人種の出現に進展した文化が一度破綻した。それは溝の出現の契機きっかけとなる”大地震”による施設の壊滅や、慣れぬ異種族の侵攻、さらに異人種との対立による争いの為である。

今では異人種との共存を第一として考えられ、そしてまた、そういった科学技術ではなく魔術的要素をより強調し、そういった特色を持つ文化を進展させようとして――現在に至る。

向こう側では火薬を使用した無数の武器ができたというし、蒸気機関車や蒸気船などが生まれ続けている。そのせいで文化的な遅れを思わせるが、魔術的な技術は恐ろしく進展しているし、科学技術が一般的な向こう側とは対照的に、国民にまでそれらは一般化している。

また軍事力でも同様だ。

向こうではそういった魔術は確かに使用されるが、主ではない。騎士団という概念はなく、アレスハイムと言う警ら兵のみで構成されていた。

各々が火器類を装備し、ごくなめらかな機動と侵攻で敵を殲滅していく――同じ人同士の戦いだからこそ、そういった戦闘術が浸透していた。

――そして、そういった科学と魔術の粹を集めて造られたのが人型移動用武器収納庫と呼ばれる、人造人間ヒューマノイドだ。

ジャンらが一般的に知る”魔導人形”ゴレムという魔術によって使役する人型兵器をより高性能にし、人智を与えたような存在である。

『ま、科学があっても魔術も怠っちゃいけないってんで、魔術開発つつー仕事があるんだ。もとは”そっち”の生まれだからな、有望株の俺が行かなくちゃいかんってわけ』

会話はごく自然的に、ジャンの三つ目の質問に移行した。

「それで、その魔術開発って何をするんですか？　新しい魔術を作る、とか？」

『まあ、そんなトコだ。もったも、適当なモンを作りゃいいっても

んじゃない。軍事的に利用できる、戦略魔術だ——まったく、魔術師ってわけじゃないんだがな？」

### 戦略魔術。

それは読んで字の如し、戦略的な目的によって使用される魔術だ。戦術魔術と言うものもあるが——いわば大魔術。ジャンらが知り、また使用する魔術をより大規模だ破壊力を重視したものである。

知るかぎりでは都市を壊滅するレベルの破壊力を誇ると言われており、長い間、この大陸では『禁呪』として封じられてきているものだ。

「いや、ウィルソンさんは十分魔術師じゃないですか」

そしてまた、魔術師というのは文字通り、魔術を扱う者だ。

もっとも、魔術を扱えば誰でもそう呼ばれるかと言えば、そうではない。騎士団でも魔術を主力として戦う部隊があるように、ある一定のレベルがあり、そこに到達することで魔術師という”称号”を得られる。そしてその称号により騎士団の魔術師団もそうだし、冒険者ギルドでの特殊な仕事や、その他の”魔術師でなければできない専門的な仕事”をすることが出来る。

彼が請け負った魔術開発という仕事も、おそらくは専門的な仕事であるに違いない。

『ま、どのみちこの仕事は魔術師じゃなくても出来るんだけどな。連中は俺みたいだな”高名”な”元大魔術師サマ”を呼んで立派な仕事をしてくるって体裁を保ちたいのさ。今はただの”営業担当”だったーのによ』

「魔術師じゃなくても？ 既存の魔術を、新兵器ないし既存の兵器に加えて実用化させる、みたいな事ですか？」

『まー、そんなトコだな。つとーテメエこらおい、何をしゃがる……！』

気楽に背もたれにより掛かり、手酌で再びグラスに酒を入れた所で、闖入者がそれを奪い、力いっぱいウィルソンを蹴飛ばした映像を、魔石は写していた。

そして消え失せた彼の代わりに、今度は線の細い、タスクの影が現れる。

《お久しぶりです、ステイール様。その後いかがですか？》

「ああ、タスクさん。イヤ、まあ元気なもんですよ。元気すぎて逆に怪我しちゃいましたけどね」

《ステイール様らしい、しかし元気なようでよかった。こちらも、この不拔けた主人が古女房なぞにうつつを抜かして、現相棒たるこの私に目もくれないと来ています。まったく、ただの一度の過ちすらない女が、呆れますよ。それに訊いてくださいステイール様、この間なんて――》

――擬似脳は、基本的に製作者、あるいはモデルとなっている人物によく似た思考や言動を取るとされている。それは、機械的な人工知能では”おもしろくない”という現行技術を超越した力を持つ科学者の意向によっての仕様だった。

ジャンは、愚痴なのか惚気なのかよく分からない彼女の言葉を聞きながら、彼女がもし人間だとしてもウィルソンは大変そうだな――そう思って、静かに浅く座りなおした。

程なくして彼女は満足気にその場から退場し、そしてウィルソンも眠そうに大きく欠伸をして、挨拶もそこそこに通信が途切れる。

ジャンがそれを拾い上げると、タイミングよくクリスがやってきて――太陽は西の空を茜色に染め上げながら地平線へと逃げていく。そうして夜の帳が落とされようと、藍色が後を追い……十月ももう近い。昼が短くなり、夜が早くなるのを実感した。

「サニーちゃん、お見舞いに来ましたよ？」

「……ああ、今行く」

彼は見上げた空でそれを感じながら、肌寒く感じる外気に身震いをつして、松葉杖に手を掛けた。



## 体力づくり

「はぁ、はぁ、はぁっ——」

自身の体温で頭が沸騰しそうだ。

結合したばかりの筋が、房では無く小さな細い筋ごとに引き裂かれていく感覚がよくわかる。ふくらはぎがパンパンに脹れて、頭がどうにかなりそうなほど蒸し暑い密林の、まとわりつく不快極まりない環境でジャン・ステイールは走り続けていた。

薄暗い森。道という道はなく、足場はひどく悪い。下がったと思えばまるで崖のように上がる道。だがそれを回避することは出来ない。

彼が命じられたのは、”真っ直ぐ進んで密林を抜けろ”というだけの指示だからだ。

息が詰まる。

喉が渴く。

顎が上がり、自分が一秒間で幾度呼吸を繰り返したか知れない。男らしい歳相応の精悍な顔つきは、今やだらしなく半眼が開き、口を半開きにするばかりでとても原型が残ったものではない。開いた口からは喘鳴のみが漏れて、稀にあえぐ声が喉から溢れた。

——入院生活が二週間。怪我は順調に治療され、予定されていた退院時期を大幅早めた十月上旬に、彼は晴れて修道院を後にした、のだが……。

待っていたのは、リハビリというにはあまりにも過酷過ぎる”ブートキャンプ”だった。

いわゆる文化的に発展した”向こう側の大陸”譲りの新兵訓練法だ。

（誰も、誰も居ないのか……！）

自分が何故こうしているのかすら判然としなくなる意識の中、歩幅は無意識に緩くなり、走る速度は遅くなる。

（歩く、わけじゃない）

ただ走るのが遅くなる。腕が垂れ、大地を弾く体力すら既に尽きている。だから、仕方が無いのだ。こういった極限なまでに走るのが遅くなるのは、どうしようもない、本当に――。

「走れッてのよ！」

決定的なまでに身体が止まる、その直前。

彼は頭上から落ちてくる、正確無比な投石による狙撃が眼前に落ちたのを、確かに見た。

大地がにわかに震え、全身が慄<sup>ふる</sup>える。

「走れ、走れ、走れ――ッ！ まだ八マイルすら到達してないッ！ 気がつけば、昨日はあえなく脱落した地点を既に過ぎていることをその言葉で理解した。

身体はそれで活気づく。

本来ならば、もっと走れる。走れたはずだ。おれはそういう体だった。体力だけは一人前以上はあった。だから戦えたのだ。

白兵戦を主体とする以上、体力は不可欠な要因となる。何だかんだで、戦場で最後まで立っている者は一瞬で敵の背後を取るような暗殺者や、一瞬で数十、数百を殲滅する化物などではなく、体力がある者だ。

炭鉱でもそうだった。

だから今もそうであるべきだ。

みなぎる力を全て足に流し、ジャンは言葉に対する反応も無いままに、再び走りだした。

鈍かった視界がにわかに晴れる。ゴールは未だ無いが、少なくとも昨日よりは十分走れている。

肉体は、あんな怪我のあと故の過労で既に死に体だ。

だというのに今日はまだ走れる。

明日は、もっと走れるはずだ。

「ふざけるな！ 腹から力を出しなッ！」

怒号が頭から振りかかる。同時に眼下から振り上げられた短刀がジャンの木刀を撃ち上げ、諸手が無防備に頭上を超える。息がかかる距離に迫る彼女は、さらに鋭い瞳でジャンを射殺し、にわかに関く股下に深く踏み込んだかと思うと――自由になる右腕の肘鉄を、その水月に打ち込んだ。

胃の腑が悲鳴を上げる。肺から、全ての空気が吐き出された。

さらに無力化されたジャンの足は払われて天地が反転し、世界が廻った――にわかになんか認識した瞬間、その肉体は力強く大地に叩きつけられ、組み伏せられる形となった。

ジャンは怯みながらも腐葉土を転げて彼女――ボーア――から距離を取る。受身を取るように立ち上がると、彼女は再び距離を縮めていた。

「今！ この五分間で何回死んだッ!?」

「く――っ！」

逆手に握る真剣の白刃が閃き、瞬時に眼前を掠める。ただの勢いや手さばきだけで切り裂かれた前髪が宙を巻き、薄皮を切り裂かれた額に血がにじむ。

ジャンは即座に身を翻して一度背後へ退く。そういった”フェイント”を入れて、踏み込んできたボーアへと下方から袈裟に木刀を振り上げた。

「八回だッ！ 一分間に一回以上とは、随分と器用な事じゃない！  
？ ねえ、そう思うでしょうッ！」

切先が顎を砕く。そういった未来は果たして訪れず、その寸での所でどこからともなく現れた短刀がその横腹を叩き、弾く。軌道がそれた斬撃は彼女のすぐ横を掠めて、ジャンの両手は再び上へと挙がる。見てくれはさながら、降参の意を示す怯えた新兵といったところだろうか。

しかし教官役を買って出た彼女の容赦は一切ない。  
威圧的な切迫。

無駄のない足さばきによる、必要最低限度の歩数による肉薄。

そして修練された、滑らかなまでの所作。

相手の攻撃を防ぎ、あるいは弾いてから行われる必殺必中の反撃。カウンターそれらが、今ジャンを悩ませている要因であり、ボアが見せている全てだった。

だが——いくら何でも最大で一分間に三度も撃破されたジャンは、何も学ばぬまま撃墜されていたわけではなかった。

再び踏み込み、完全な零距离からの近接格闘——倭国伝来、と彼女が嬉々として説明したのを思い出しながら、ジャンは再び彼女の地面と並行に突き出された鉄拳を腹部に受けた。やや上ずり、衝撃の瞬間に僅かに落とした腰を挙げた故に、水月よりやや下の引き締まる腹筋に堅い拳が穿たれる。

彼女の表情がにわかに変わる。無表情から、僅かに口を開いただけの、どんな表情かはわからない些細なものだったが——勢いはそのまま、力もそのまま。故に、先ほどと同様にジャンの肉体は”くの字”にへし折れる。

諸手は頭上に振り上げられ、木刀を握ったまま”くの字”にへし折れた。故に自然的に、己の全力が為に止められなかったその力を強制的に、テコの原理が如く解除し、そして腕は振り下ろされる。

ジャン・スティールはそれを待っていた。

倭国伝来なら、同じ倭国伝来のことわざで返してやるまでだ。

肉を切らせて骨を断つ——果たして彼の木刀は、不意をつかれながらもジャンを突き飛ばし、また後退する彼女の肩口に、しっかりとその切先を叩きつけていた。

「はぁ、はぁ、はぁっ——さ、さすがに一分に、に、二回死ぬとか、平均的に出されたら、ヤダかべぼっ?！」

言葉もそこそこに、不意に眼下から気配と影が迫ったかと思うと、殆ど認識と同時に顎先を拳が突き抜けた。

ジャンは直立したまま顔だけで上を向いて、意識が白に染まる。疲弊と鈍痛の中で限界を超えていたジャンの肉体は、そこでよう

やく意識を別離させ、吸い込まれるようにして柔らかな腐葉土の上へと倒れていった。

「ったく——バカッ！ 氣絶するまで無制限マッチだって、自分でルール決めたクセにッ！」

油断してんじゃない！ 彼女は言いながら額から流れる汗を腕で拭い、それから木刀が力強く叩いた右肩を柔らかく撫でながら、静かに彼の横に寝転んだ。

まさか一週間で一本取られるとは——彼女は確かな成長を、そして最初に見た時とは遥かに顔つきや体つきはもちろん、その意気込みや、多くの彼を構成する要素が変わっている、あるいは大きく、力強くなっていることを認識した。

十五で騎士団に入団し、二十で追い出され——そしてまた、この国に戻ることはならない。

そしてまた、罪の償いとしてジャンの世話をすることが条件だというのには、裏のやりとりが見て取れたが……今は、考えても仕方がない要素だ。

「……っはあ、まだ訓練残ってるって言うのに——おい起きろッ！」

あたしはあんたの為に徹夜なんかしたくないッ！」  
数分の休憩の後、ボーアの平手は無情にジャンの頬を叩き、意識を呼び起こした。

狭い十三平米ほどの個室の中央には、楕円形の卓が鎮座していた。そして周囲を取り囲むような椅子の数は全てで六つ。それらに腰を落とせばすぐ後ろは壁になり、隙間も失せる。

上座に座る軍務大臣は、呼び寄せた幹部諸君らの話を聞きながら、丁度良いタイミングの所で手を打った。傾注せよ、と副大臣が無意味なまでに声を張る。

「気楽にしてくれ」

穏やかな笑みを湛えた中年男性は、その軍服がはちきれんばかりのふくよかな肢体の持ち主だ。それ故に外見的な人当たりの良さや、軍を統括しているような個人とは思えぬ穏やかさから、部下はもちろん、多くの人々からの支持を得ていた。

禿かけた頭は、近頃いつその事刺ってしまおうかと思っていたが、それでも名残惜しく残してある側頭部の髪を撫でるのは彼のクセだった。

「それで、今回の不祥事によって予定された作戦が水泡に帰したわけだが――あの”齧る者”<sup>バイター</sup>に代わる異種族<sup>モンスター</sup>は配備できそうにない。よって、ヤギユウ帝国との総力戦が予期されるわけだ」

「責任を取らせましょうか？」

問うのは副大臣。責任を追求する相手は、何も知らずに”襲われ”て”殲滅”してしまったあの少年だ。

「まさか、国が手ずから異種族を意図的、人為的に用意したなどと公言できんだろう。だが、お陰で一人釣れたじゃないか。戦力になりうる、かつて信心深くこの国に尽くしてくれた”元騎士”が」

「ああ、あの獣人の」

「だが――彼女はいささか問題が……」

「そ、そうですぞ。だからこそ、”あんな事”が」

どよめきが幹部に伝播する。ただでさえ少人数の幹部らが、一人の発言から不安にかられて焦燥する。

大臣は再び手を叩いて場を収めると、失礼、と手で示しながらポケットに無造作なまでに突っ込まれた葉巻のタバコを咥える。そうすると副大臣が火の灯るマッチを差し出し、火をつけた。

彼はゆっくりと味わうように紫煙をくゆらせてから、胸いっぱい

に吸い込んだ息を吐き出す。

会議室は、いささか小気味の良いタバコの臭いに満たされた。「不思議なことに、今回議題に上がる少年は養成学校の生徒であり、またにわかに話題となる”事例”であるらしい。そしてその”少年A”と彼女は失踪から発見までの時を共に過ごし、殲滅戦で背を合

わけて戦っていたという話だ」

彼が指摘するのは、今回でやたら話題の中心に渦巻く少年Aの存在。

養成学校に入学して、良好な成績を残し将来を期待されていた少年は、ここに来て魔法を持たぬことが判然とした。加えて街を飛び出し、“偵察兵”と接触し、またヤギュウ帝国の侵攻妨害の為に配置していた異種族を単騎で相当数殲滅するという偉業を成し遂げたのだ。

いくら肉体強化によってヒトならざる身体能力を持っていたとしても、それは単純に、そして明らかなまでに彼の實力ありきの結果だと言いがたい。いくら立派で強い武器をもっていたとしても、扱うのが素人ならば結果は火を見るより明らかであるように。そしてその少年Aと元騎士の現はぐれは意気投合しているらしい。彼女のそれまでの罪を、負傷している少年Aの世話で償わせる事で、当分の安置を保証してはみたが……不安要因としかかなりえない戦力に期待するのともうかと思う。

また、少年Aの治療も順調なようだが——それでも訓練部隊からの除名の決定は覆せない。将来有望であるなら尚更だ。

「私は考える。現在の”彼女”の抑止力たりえるのは、この少年Aなのではないか、と。今でこそ少年の世話をさせているが、いずれは立場が逆転する可能性をもたせようと思うのだが」

「……彼女を使うのだとしたら、私もそれが確実だと思う所存です。彼らの関係は良好で、心を許さぬ彼女が唯一、開き始めていると見えていますので」

「ならば決定だ——が、少々興味がある。この少年Aは、我が部隊の元”超精鋭”のお気に入りだね。少し、調べたいことがある……」

「な、何をでしょう？」

大臣の不敵な笑みに、言葉を返していた副大臣が怯むのがよくわかる。

彼はそれに気を良くするようにタバコの煙を吸い込み、そしてに

やりと笑う齒の隙間から、煙を漏らした。

「派遣した傭兵部隊から連絡が来てな。丁度来週辺りに来てくれるらしい。そこで一芝居打ってもらうことにした。騎士を目指し、少なからずその胸に正義を燃やす年頃の少年ならば我慢ならぬ芝居をな」

「なんとも……傷心の子には、いささか手厳しいのでは？ それに今はまだ、ベーシック・コンバット・トレーニング基本戦闘訓練でのリハビリの最中でしょう？」

「だからだよ、だからこそ、だよ」

男は笑う。

幹部に、再びどよめきが走る。

イタズラな、どこか悪意さえ孕んだ笑い。穏やかで温和な彼には普段、見られぬ一面に彼らは不安を呈する。

しかし大臣は、そんなことなど気にせず、鼻を鳴らし、また「だからこそ、さ」と続けた。

「己が勝てぬ、勝たなければならぬ悪との対峙。それこそが、彼の成長を促すと私は思うのだ。人には挫折が必要だとは思わんかね？」

「し、しかし——万が一、心が折れ二度と……と言った場合は……？」

「仮にそうなるのならば、いずれそうなるのだ。所詮その程度、切り捨てろ。私たちの目は節穴だったことの証明になる。それに、傭兵部隊が居る。ただ一人の戦力にすらならん”損失”など、我々は気にしては居られん」

「確かにそうですが……いえ、承知しました。当日の門兵に、そのように伝えておきます」

「くくく、頼んだぞ——それで、話は変わるのだが……諸君。いや、本題に入ると言うのかな。各々の、訓練成果の発表と行こうじゃないか——」

ヤギユウ帝国の侵攻に合わせた訓練内容の変更。一ヶ月の経過発表が、今回彼らが呼び出された目的だった。

大臣が手元に配られている冊子をめくり、「では」と意気込む一



人が立ち上がる。

彼らは大臣の言葉に緊張しながら、静かに紫煙の消え行くその先を、ただ為す術もなく見つめるだけだった――。

一閃、一閃、一閃――。

縦横無尽、変幻自在とも言える短刀捌きは、留まることを知らない。西の空が朱にそまり始めた頃、ジャンはそれでもその近接格闘に対応し、その全てを木刀で弾き続けていた。

が、終わりは唐突にやってくる。

「はあ、は――っ!？」

慣れたように後退、そして剣をいなして横に回る。だが今回は、周囲の確認が不十分だった。彼女の死角に回りこもうとした瞬間に不意の衝撃。身体がそこに最初から鎮座していた幹に衝突したのだ。ジャンはよろめき、それでも回避行動に全力を込める――が間に合わない。時既に遅し。ボーアの剣撃は瞬時にしてよろけたジャンの首筋に叩きこまれて、その冷たい刀身で優しく皮膚に触れた。

――六時間経過。無制限マッチの結果、ジャンはこの中で、既に三〇〇回近く死んでいた。しかし生き残れた最長記録は二八分であり、その記録を最後に成績は下降の兆しを見せる。

ジャンは思わずへたりこみ、座り込んだが、ボーアはそれを注意せず、同様にくたびれたと言わんばかりに顔をしかめて隣に腰を落とす。

「まったく。やられたわよ」

短刀を背にする幹に突き刺してから、彼女は肩をすくめた。

「五回も攻撃を許すなんて」

額の汗を拭い、彼女は肩、腿、横腹、小手、そして喉元に触れながら言った。その箇所は、油断や隙を露わにしたせいで穿たれた箇所である。

背もたれにする木に全力で寄りかかりながら、肩を上下させ、破

裂せんとする心臓を胸の上から抑えてジャンは言葉を漏らした。

「ご、五回くらい、いいじゃないですか……」

「一本も取られない自信があったのよ」

終始呼吸を乱さなかった彼女の言葉は、虚勢でないことをジャンはよく知っていた。

——あの”白い連中”との戦いでは撃破数がジャンより少なかったが、どれもこれもが確実に息の根を仕留める攻撃ばかりであったし、またジャンのように身を無防備に晒すような特攻ではなく、洗練された無駄のない動きでの戦闘だった。

どちらが強そうかと言えばジャンと答えるものが多いだろうが、どちらが生き残りそうか、と言えば大多数がボアと答えるだろう。そして一対一との戦いともなれば、その性格や戦闘方法はより顕著に現れる。

だからこそ苦戦したのだ。もともと、その多くは苦戦する暇もなく圧倒されていたのだが。

「全く、敵わないや——」

疲れすぎて、尻が腐葉土に癒着しまったようだ。起き上がろうにも、全身に力が入らない。

鉱山での仕事でも、これほど疲れることなどなかったのに。

思いながら、ボアに顔を向けた。

「でもまあ、見所はあるわよ？ 正直そもそも、この一週間で最後までついてこれるなんて思わなかったし。基礎体力のおかげだとは思うけど——学校じゃ、こんなトコまでやらないし。やっぱリセスは少しあるみたいよ」

「そりゃ、無かったら騎士になりたいなんて夢もいいところ、口にしませんよ」

「ま、そうよね。でも夢を持って、志すのはいいと思うけど」

「夢は見るものですしね」

「そうそう。夢が叶うんじゃないくて、もう叶えられる時点で夢は目標だしね」

「あ、なんかそれいいですね。明日から使います」

「使用料取るわよ？」

「ええっ、最近は全然、組合ギルド行ってないから金なんて——」

言葉を遮るように、彼女は垂れるジャンの手を握った。

やわらかな、アレほど硬くジャンを苦しめた手は一変して、女性らしい柔らかで暖かな皮膚が彼の手を包み込んだ。

思わず、どきりとする。

汗まみれであるはずなのに、ことボアに限ってはそれが良い匂いであるように感じられた。

ジャンを見つめる顔が近づく。黒しかない瞳が、まるで愛おしく感じられた。

「ねえ、ジャン？」

「は、はい——」

「立たせて」

「は、はい……？」

恥ずかしげに、眼を伏せがちに彼女が続ける。

「なんか、訓練が終わったら安心して、腰が抜けちゃったみたいなのよ」

だから、と握る手に力を込めた。

「立たせてちょうだい」

ジャンはあざとく上目遣いで頼んでくる彼女に根負けして、動かぬ肉体にむち打ち、全体重を掛けて彼女を起こして——手はそのまま、帰路へとついた。

空は既に夜の帳が落とされていて、密林はそれ故に深淵たる闇に包まれている。だが不思議と不安はなく、むしろ高揚さえあったのは——ボアには秘密だった。

## 対傭兵

「まったく……魔力を流して、初めて痛みが現れたということは、そもそも魔力供給による自然的な”副作用”による回復は行われていなかったということですね？」

医務室で右腕に包帯を巻きながら、クリスは嘆息を漏らしてからそう言った。その傍らでは、細長い診察台で足を組みその様子を見守る、修道服を着こむ妙齡の女性が興味深げに頷いていた。

「つまり、あと少し遅かったら壊死していたかもしれないというわけね」

——まるで筋肉痛……など比にはならぬ、まるで筋肉に剃刀の刃を埋めこまれているかのような激痛がある。腕を動かそうとする以前に、力を込めたり何かが触れたりした時点で全身が硬直してしまうような痛みが走るのだ。

そうなったきっかけは、ボアの”肉体強化魔術を使いこなすための訓練”によってだ。

体内の魔力を増幅してそれをそのまま肉体に充てるだけではなく、体内の魔力を体外に放出し、魔力量をある一定の均衡で維持する。そうすれば肉体を強化するために本来必要である魔力が足りずに、体内にあるままの魔力で肉体が強化される。それ故に効果は薄いのが、今回の目的はそこにある。

魔力量を調整することにより、効果を変容させる——そうすれば、常にヒトを遥かに凌駕し諸刃の剣となりうる魔術を、己に対して適切に運用できるというわけだ。

そしてその際に右腕に魔力を通した瞬間に……このザマだ。

「怪我だらけてのが格好いいと思ってるのは、男の子だけよね」

「ですよー。女の子としては、いつでも元気な人の方が安心して隣に居られますし」

「せーっかくのいい男が、台なしよ」

「ほんとです」

ジャンは”壊死”の言葉に思わず顔をひきつらせてから、指先すら動かせない右腕を流しみて、そうして垂らして立ち上がる。

彼女らの、褒めているのかけなしているのかよく分からない言葉を受け流しながら、軽く頭を下げて踵を返した。

「はあ……ありがとうございます」

今日はお陰で訓練は休みだ。このまま家に戻るのも忍びないから、久しぶりに街をぶらつくのも良いだろう。

最近、特に癖になりつつある溜息を漏らして、ジャンは修道院を後にした。

「——っと、言う手筈になっている。大臣の催しだ、良ければ頼まれてやって欲しいんだが……」

正午からやや時間が経過した頃、甲冑姿の門兵は来客にそう告げる。

外套のみを羽織り、腰には剣を、あるいは手ぶらで——防具を何一つ装備しない簡単過ぎる格好の住人に満ちたぬその集団は、門兵の言葉に対して一様に顔を見合わせた。

そうして、戦闘に立つ左目に黒い眼帯を当てる男は頷く。その所作に、途端に上下関係が見えた彼らは押し黙り、隊長たるその男の判断に全てを委ねるように視線を送った。

「……一つ、聞きたいんだが——オレたちちゃんナガキの対戦相手として為に呼ばれたのか？」

「いや——」

否定しようとして、門番は大臣から託された対処法を思い出す。もし拒否された場合、あるいはあまり色の良い返事をもらえなかった場合。彼は男の目を見据え、頷いた。

「お試し期間だ。あんたらを使うか否かは飽くまで我々が判断する。こちらの要望が聞き入れられないなら好きにしろ。だが、”得体の

しれない武装集団”を中には入れられないがな」

——傭兵は金で仕事を請け負っている。主な仕事は命をかける戦闘だ。戦争の代行や、さらに教導なども行うことがある。そして彼らの組合では主に後者の方が圧倒的に多いのだが、教導の場合、軍で言う精鋭部隊レベルの戦闘能力が必須であるために、彼らの実力が確かであるのは門兵さえも知っている。

傭兵組合”ブラックオイル”は世界でも実力者集団で有名なギルドである。それはこの”対異種族戦”であっても、銃火器を使用する”現代戦”であっても十分に通用する戦術や魔術、魔法、そして圧倒的なまでの機動や的確な行動などのおかげだった。

その中でも戦闘訓練を行う部隊は、さらに精鋭を極めていた。

「そうか。そういうやそうだったな——まったくムカつく国だ！オレたちをこんなに侮り信じなかった連中はここが初めてだ！その”ジャン・ステイル”とか言うガキは、本当にそんなに強ェんだろうな！？この国はそんなに強ェんだろうな！？」

「軍を統括する男が、そう認めている」

「はっは！おもしれエ、野郎ども！ここはやらなきや男が廃るぞ！いっちょ、芝居でも鉄砲でもうってやろうか！」

男——左目に眼帯を持つ目立つ”デリライラ・ホーク”は力強く右腕を上げれば、控えていた部下が雄叫びと共に活気づく。彼のすぐ背後に控えていた眼鏡の男は、そんな様子にやれやれと言った風に肩をすくめた。

「さて、案内してもらおうか！」

両腰に携える一対の剣を揺らして門兵に歩み寄るホークは、力いっぱい甲冑の上から彼の肩を叩いて、門の開扉を促した。

——大地が揺れる。火焰を伴った岩石が宙を舞い、そして再び大地を穿つ。地は揺れ、屋外訓練中だった生徒たちは皆一様に身を屈めて縮こめていた。

そうして、一拍おいてやってくる阿鼻叫喚。女性の甲高い悲鳴に、

男性の低いどよめき。そして突如の事態にすぐさま避難の指示を出している教官は、されどその言葉を聞き入れる余裕を失った生徒たちさらに怒声を響かせて……僅か一度の魔術で、養成学校は瞬く間に混沌の海に蹴落とされていた。

「はっはっは！ 野郎ども！ まず話を通じて無さそうな教官共に事情を説明してこいッ！ オレはここで道化師<sup>ビエロ</sup>を演じてるぜ！」

「隊長がんば！」

「応援してるぜ、隊長！」

部下たちは、手際の悪すぎるアレスハイムに呆れて溜息を漏らしながらも、いつもの調子で誰もいない方向に火焰を放ち大地を抉り続けている隊長の肩を叩きながら、集団のままで教官へと向かっていった。

——そうして、また呆れ顔で教官が静止する。

もっとわかりやすい状況が良いと、ジャンと同じクラスであるらしい少年少女らの要望から彼らを縄で縛り付けるのは、それから間もなくの事だった。

そして門兵の指示通りに、被害者を装ってジャンをさりげなく学校へと呼び出すことに成功するのは、それから数分後のことであつた。

傭兵の仕事は早い。

聞き及んではいたが、初めてその存在を見た戦闘教官はそれを再認識した。

「た、大変だー！ 養成学校で不審者が生徒たちを襲っているぞ！」  
目の前を通りすぎていった外套姿の男は、ジャンの前で一際大きな声でそう叫ぶと、瞬く間に彼の視界から失せて走り去っていった。それ以降の声は聞こえず、まったくもって珍妙な男だと考えたが——言葉がもっと違う台詞であったならば、彼の存在を切り捨てることができたのだ。

養成学校の不審者。

そして以前会った偵察兵。

疑念が渦巻く彼の中で、この大事と以前の経験と憶測とが直結した。

それは見当違いも甚だしいのだが――ジャンは動かずには居られなかった。

「学校が……連中、先に”これからの脅威”を潰しとく気か……！」  
怒りが燃える。

走りだせば右腕の激痛が息を止めたが、ジャンは構わず、その意識を全て前方へと差し向ける。本屋へと向けていた足を、すぐさま学校へと差し向けた。

痛みや、不安や、焦燥や……それらを全て切り捨てて、ジャンは走りだす。

向かう先は、およそ想像できぬおぞましい光景が広がる養成学校。それを防ぐため、守るために、正義を二の次、因縁を晴らしにジャンは向かう――。

「だあ――らっ！」

木剣が弧を描き、武器すら構えぬへと襲いかかる。

ディライラ・ホークは舌打ちと共に軽いステップを踏み、それが眼前を落ちて行くのを見送った。

が、相手の動きはそこで終わらない。さらに身をぶつけにかかるタックルが如く踏み込んだ青年は、横に飛び回避行動を取るホークへと、小刻みに大地を蹴り飛ばして対象を追尾する。故に、どれほど遠く、あるいは相手にとって死角となる位置に飛び込もうにも、その細やかな機動が許可しなかった。

また、短く舌打ち。

射程距離内ぎりぎりに深く踏み込んだ青年は、陽の光に煌く緑の髪が軽やかに揺れ、汗が宙に舞う。そうしてその引きつけを最後に、



彼は振り下ろした剣を、袈裟に巻き上げるように振り上げた。

（ガキってやつぁ、自己顕示欲の強いこって）

避けることはできた。だがここで、己の持てる力を全て使って相手を完膚なきまでに倒してやるのは、どうにも無粋な気がして――ホークは敢えて距離を保ったまま、勢い良く振り上げられた木剣の切先が額を擦り上げるのを甘受した。

ヤワな皮膚が摩擦で焼かれ、引き裂かれて鮮血が飛び散る。

目の前には、歴戦の勇士を相手にそうした偉業を成し遂げた青年が、ただそれだけの機動で肩で息するように立ち止まる。もしこれが真剣であったならば相当な痛手を与えていたであろう現実に、ルーク・アルファは不敵な笑みを浮かべていた。

が、やはり呼吸は整わない。

それが殆ど実戦じみた戦闘での、慣れぬ緊張や、そこから伴う調整しきれぬ無駄な動き、不必要に入ってしまう力が急速に体力を奪っていくのだ。

いくら訓練などで好成績を残していたとしても、実戦ではその経験の不足から本来持つ力を十分に発揮できぬことがあり、また新兵の場合ならば殆どがそうである。

対人はもちろん、対異種族であっても相手は容赦してくれず、故に兵士の多くは養成学校や訓練課程を終了した後、主に初めての实战で散っていく。だからこそ、この国ではより実戦に近い形での戦闘訓練を要求するのだが――。

「へえ、中々やるじゃねェか」

左目の眼帯を軽くさすってから、親指を額の幹部に押し付けた。流血はそう激しいものではなく、暫くそうしていれば血は止まる。ホークは嘆息してから片足に重心を移動させて、片手を垂らし、もう片手を腰に当てた。

「どうだ、このオレを相手にして一本取った感想は？」

「ふざけるな、あんた――本気にすらな<sup>なめ</sup>ってねえ！俺を侮蔑<sup>なめ</sup>てんのか？　せめて剣くらい――ッ！」

「ガキを相手に本気になる大人なんぞ立派じゃねえよ。それに、オレアお前さんの相手をするような仕事を請け負った覚えはねエ。追加料金を払ってくれんならまだしもな」

どこかで見ているはずだ。

これから試されるであろう青年、ジャン・スティールの戦いぶりを――何かを秘めていると判断されたからこそ、こんな大事にまでして力を試される少年を。

だが、だからといってそこでも本気になる予定ではなかった。理由は先のとおりだし、それに本気になるほど高揚するようには到底思えない。

目の前の青年だって、上手く見事に精錬されている。歳の割にはやっていけるだろうし、これから徐々に力をつけていけば目覚ましい程の実力を持つことになるだろう。先ほどの機動や剣撃の流れから、ほのかに才能が漂<sup>センス</sup>ってきたのは確かだ。

しかしなれど、まだ未熟だ。

熟してすらいらない果実を、齧<sup>か</sup>ってやるいわれはない。どうせならば熟した”食い時”という所がいいだろう。

訓練中の、しかも鍛え始めてまだ半年という子供を相手になどは尚更――。

ルーク・アルファが再び剣を構えるのに、うんざりとしたように肩をすくめて吐き出す溜息で返した。

「いい加減うぜエよ。ジャマだ」

「だったらもう一回だ！ ジャン・スティールばっか、優遇させてたまるかよ！」

「……ああそうかい、なら後悔――すんなよ」

飽くまで笑みを浮かべようとしたが、結局は口元が痙攣するように引きつっただけだった。

やはり、ふざけていない限りは笑えないな――下手な戦闘をしていつくるか知れぬジャンに目撃され、そこから推測、自身が試されていることを知られる、なんて事はしたくなかった。予定では飽く

まで純粹に、正義漢が感情のままに突っ込んできてそれに対応するのだから。

だから、手早く終わらせる。

ホークは迷いなく腰の剣を一本だけ抜きルークに対して斜めに構えて、切先を相手につきつけるように構える。剣を持つ右腕はややしなやかに曲がり、柔軟性、伸張性を孕むのを外観で見せていた。それを見て、ルークがやや怯むように足を止める。距離が殆ど無いような近接戦闘を得意とする彼にとって、やや相性が悪い戦い方であったようだが――実戦ならばその畏怖が生死の決め手になる。

――先手を取ったのは、それ故にホークだった。

大地を弾くように切迫。

意表をつかれたルークは慌てて剣を対応すべく構え直す、根本的な速さが足りない。

そうして気がつけばホークの動きは止まっていて、そうして気がつけば、己が喉元には、構えを掻い潜った白刃が冷たくその切先を突きつけていた。

ジャン・ステイルが学校に到着した頃、見覚えのある緑頭の青年が、正眼の構えのまま硬直しているのが見えた。グラウンドの端では教官ともども縄で簀巻きにされた生徒たちの姿があり、それを取り巻くのはくすんだ黄土色の外套をお揃いで身につける、妙な男たちの姿。

そしてその”ルーク・アルファ”の向こう側には、左目に眼帯をつけた男が腕を伸ばし――そこから伸びる剣で、ルークの喉を突き刺していた。

「な……っ?!」

理解不能。

現状を視覚で認識するが、この光景が意味するところを彼は理解出来ない。

なぜルークが刺されているのか。なぜクラスメイトたちが拘束されているのか。

この連中の目的は？ わざわざ、こうする理由は？

わからない——そうだ、ならわからないままでいい。

相手を理解する必要なんて無い。

それを理解したはずだ。ついこの間、新愛なる友人ウィルソン・ウェイバーとの会話でそう認識したのだ。

敵が敵としているならば、その理由や心情や背景は無視するべきである。

敵が敵としているならば、己も敵にとっての敵として対峙するまでだ。

唾棄すべき対象は目前。

ならばどうする？

（おれはどうする？）

「どうすればいい？ 答えは——簡単だ」

背中の魔方阵が、衣服越しに輝きはじめる。もうその圧倒的な勢いによって服ははじけ飛ばないし——右肘の魔方阵を発動させるにあたって脳髄に勢い良く釘を打ち付けられたような激痛が電流のように走ったが、本能はそれを抑えつけた。と彼は己の中で、痛みを極力無視しようと尽力する。

「く……いつてえなあ——っ！」

右肘からの半永久的な魔力の放出。それゆえに、中途半端な魔力量での肉体強化。お陰で右腕の回復は不十分になって、拷問とも思しき激痛は絶え間なく、また脈拍と共に全身に伝播する。

「だけど、良い感じだ」

緊張と不安と、怒りと憎悪がよい具合に混じり合う。

脳内から分泌された麻薬にも似た成分が、痛みを徐々に和らげる。

「いい気になりやがって。おれが、ぶっ潰してやる……っ！」

ジャンはそれまでの訓練の成果か、肉体強化の具合の良い配分のおかげか——およそ人生で最良なコンディションで、走り出してい

た。

「来たか」

既に恐怖に飲み込まれてしまったルーク・アルファを横になぎ倒して、剣を収める。

すると直線上にて走りだしたジャン・ステイルは、既に数メートル手前の距離にまで迫っていた。

「来てやったさっ！」

漏らした言葉は聞こえていたらしい。咆哮混じりに、ジャンは何の工夫もなく真正面から拳を振り上げた。

「もっと来いッ！」

「黙って待ってろっ！」

深く踏み込み、大きく振り上げた拳をホークの顔面に叩きこむ――が、それは寸前で現れた掌が防ぎ、拳を力強く弾く。しかし同時進行で左半身を捻るようにして肉薄すれば、無防備な脇腹にジャンの肘鉄が見事に突き刺さった。

――衝撃の反射に、右腕の神経が力いっぱい弾かれたような激痛。脳を素手で握られているかのような苦痛に、ジャンは思わず顔をしかめる。が、不意を突かれた、妙なまでに”実戦慣れ”している攻撃に意表をつかれたホークは同様に表情を歪め、僅かに数歩分、距離を取った。

まだ相手は、ただ”突然だったから攻撃を受けてしまった”と考えているに違いない。しかし、その判断こそがジャンにとって丁度良かった。侮られているならばまだ勝ち目がある。相手が敵を舐めている時点で、格下だと判断している時点で好機はゆうに存在する。だが……。

（あいつじゃない……？）

敵が、あの時の偵察兵でないことに疑問を覚えた。

加えて、外套も随分と様子が違う。武装も貧弱だし、まず鎧すら装備していない有様だ。

そして目的すら判然とさせぬように、こんな所で待機をしている。さらに、ジャンの登場に”来たか”とまるで待っていたかのような発言。

何者だ？ ジャンはそうに、彼らはおそらくヤギユウ帝国からの先遣隊ではないのではないか、と考え始めていた。

だが、彼の無意識とまではいかぬが、反射的に続く行動が思考を遮断する。

——ジャンはつま先で地面を蹴り上げた。するとつま先に掬われた土や砂が巻き上がり、ホークは思わずそれを右腕で防ぐ。共に、視界は封じられた。

大地を弾き、大きく左側にステップを踏んでフェイントを入れる。音に反応して、ホークはその方向に構えて、ジャンはそこから力強い跳躍で目を覆っていた腕を引き剥がす瞬間に、懷に潜りこむように飛び込んだ。

男が目を剥く。

ジャンはそれでも無表情のまま、強く固めた左の鉄拳を男の水月へと叩き込み、さらににわかにひるんだところを右の拳で追撃。顎を横方向から穿ち、勢いをそのままに身体を捻り、腰を落とし、身を翻し相手に対して上肢を横に向けた状態で、再び肘を腹部に打ち込んだ。

振り難いだ足でさらに足払いをかけようとして、嫌な予感を彼は覚えた。背筋にぞわりと悪寒が走る。そうして気がつけば、本能が身体を駆り、男からその身を引き剥がした。

「ったア——もう引いたのか、面白くねエな？」

機嫌の良さげな、笑いを含む声。

そこでジャンは改めて男を見れば——腹部には左手が、そして右手は顎を保護するように構えられたままだった。彼が水月を打ち抜いていたと信じていたが、それは飽くまで防御のために置かれていた腕を叩いていただけであり、顎は同様に手の甲を殴り飛ばしているだけにすぎない。

故に、怯んでいた筈の彼は僅かに腰を落とした体勢のままで固定されており、アレほどの猛撃を受けて尚微動だにしていないことを認識した。

強い——ジャンは相手をそう評する。ただ強いわけではない。相手の動きやその法則性を、僅か二度ばかりの接触で理解する強さだ。並々ならぬ実力でないことを、そして男は最初からジャンを”侮つてなど居なかった”ことを、彼は察知した。

「だけどよオ、今の。避けただろ？ 退いただろ？ それをお前さんは本気で理解したわけだ」

男は腕を交差させるようにして、両の腰に備える刀身が波打つ”フランベルジュ”と呼ばれる種類の剣を、対にして引きぬいた。

刀身が特殊な仕様によって波打っているせいで、肉が引き裂かれ、治療が困難になる。故に失血や破傷風などの直接的な死よりも、その後の苦痛が大きいとされている剣だった。

それを一對にして、男は構えた。

「お前は割と、動きはいいぜ。その右手がまともならもっと面白かったかもしれないが、いや、歳の割には中々——かなりやる。やりやがる。ああ、いいな。期待してなかった分、いいぜ、お前さん」嬉しげに、楽しげにその口元は釣り上がった。先程は失敗してしまった笑みが、この青年を前にしては容易に成功してしまった。

ふざけている自覚はなかったが——ディライラ・ホークはこの状況を楽しんでいた。

先ほどの青年とは同年代であるはずだ。だがこの、ルークよりも激しい運動の直後だというのに息すら上がっておらず、また相手の隙を突いた攻撃も中々に上手い。学校以外にも自己鍛錬を行なっている証拠だった。

だがそれだけではここまでの成長は望めなかっただろう。が、軍務大臣からの手紙で与えられた情報によれば、肉体強化魔術を使用した——単体で異種族を、相当な数殲滅したという話だ。

彼はその言葉を思い出して、なるほどな、と頷いた。その所作に

ジャンは眉をしかめるばかりだが、ホークは気にせず”助言”する。彼ならば会得できる領域への成長を促すための言葉を。そしてそれを自分のものにすれば、初見でもホークを倒せるほどの台詞を。

彼は短く息を吸い込んだ。

ジャンは、律儀に彼の言葉を待っている。それに仄かな笑みを浮かべて、

「今度は理屈で理解しろ」

——その助言から、ディライラ・ホークによるジャン・スティールの戦闘試験は開始した。



## 対傭兵？

「しまった」

ディライラ・ホークとジャン・ステイルの戦闘が始まるにつき、まず始めにそう漏らしたのはノロだった。

彼女は、校舎の屋上で単眼鏡を片手に観戦する軍部の関係者二人を見下ろしながら、ジャンに対してにわかな驚きを覚えていた。

それはまず——というか、単純に一つの事実について。

ジャン・ステイルという男は魔術の才能はさほど無いように見えていた。そして実際、彼自身が”覚えていて”——身につけているとも言いかえられる——魔術は、事実上存在しない。彼が使用する魔術は己の肉体に刻まれた魔方阵によるもの、あるいは武器に刻まれた紋様を用いての魔術のみだ。

だから、その代わりとばかりに白兵戦では目覚ましい成績を残しているし、現に世界で活躍する傭兵の一部隊長にさえ見初められ始めている。魔術的な才能がないために、彼が個人として魔術を身に付けないのだろうと、彼女はそう認識していたのだが、それはどうやら違ったらしい。

「まさか、魔術の才能も……？」

彼女が与えた『禁断の果实』という魔術は、この国のどこの図書館を探しても魔術書として残されていない遥か古代の魔術であるし、意図的に葬り去られた”禁呪”でもあった。

魔術の適性が殆ど無いような青年が、その禁呪を扱えるわけがない。だから彼女の”意思”を持つ”破片”<sup>かけら</sup>を彼に与えて、魔術使用の補助をしてやった。初回の使用時には肉体をわざわざ動かしてまで”コツ”というものを教えてやった。

だから、それ以降は不器用ながらもなんとかそれを流用して、”見たものを再現”するレベルにまでは自力で到達できた。もちろんそれは禁呪としての『<sup>フオービッドウンフルーツ</sup>禁断の果实』では最低限度の効果であり、ジ

ヤンにとっては活用できる最大限の効果だと思われていた。  
だが違う。

ノロは、図書館に備え付けられている時計塔の屋根の上からそれらを見下ろしながら、そう確信した。

彼女だからこそわかる。そしてまた、彼に埋め込んだ細胞は自意識は無いが、それが感じる反応を、遠隔的に彼女自身も感じる事ができていた。

——今では、背骨に刻んだ魔方陣は移動してしまっている。それはより効率的に、本来の能力を発揮するために自発的な動きを見せていたのだが……今ではその動きを、ジャンの肉体が無意識に操作していた。

最初は瞳に留まるものとばかり思っていたのだが……。

「いやまさか」

彼女はやはり驚きを湛えたまま、されど無表情を貫き通して口にする。

「すごい逸材」

にわかに信じられない事だが、この短期間でその境地に達するのはおよそ将来の”大魔導師”の地位を約束されているといっても過言ではないだろう。加えてあの白兵戦での実力ならば——世が世なら、恐ろしい男へと成長を遂げるはずだ。

しかし、ノロにはどうしても彼がその境地に辿りつけるようには思えなかった。

だからこそ、素直に驚く。

なぜそれほど”中途半端”に極められる才能を持っているのか、と。

故に漏らしたのだ。

「しまった……まいったな」

自分が強いと錯覚して、死んでしまわなければ良いのだが……。

「お前さん、素手でいいのか？」

意気込んだ所で、不意にディライラ・ホークはそう口にする。まるでヤル気を削ぐような言い草に、ジャンはわざとらしく舌打ちをしてから首を振った。

「いらねえよ。今日はなんだか、調子が良いんだ」

言葉とは裏腹に、ジャンはいまいましげに肩をすくめる。

屋上で光に反射する何かを睨みつけたかと思えば、そこからさつと消え去る影が見えたのだ。

つまりこれは――ヘタクソな演技に、まんまと乗せられたという事になる。試されたのだ。おそらく、たった二人きりであの異種族の群れから生き残ったから、才能か何かがあるのではないかと魅入られたのだろう。

かまうものか、とジャンは再び構えた。

「そうか――なら」

ホークは右腕を振り上げ、左腕を前方に突き出すように構えた。ただそれだけで威圧が増す。故に、ジャンは瞬時にして攻めの手を拒まれてしまった。

「今度はこっちから、行かせてもらおうッ！」

――踏み込めば横と縦からの攻撃が襲いかかる。ならばどうすればいい、どうやって”突き破れば”いい？

鈍い痛みを携えて唸るように筋肉を痙攣させる右腕の感覚を認識しながら、強く踏み出したホークに相對するように、ジャンも足を動かした。

直後に、間髪おかずに頭上から切先が落ちてきた。同時に脇腹から切り裂く斬撃が現れる。

正に神速――思わず息を飲み感心しそうになる意識を奮い起こし、その状況で最も適切である”後退”をまず始めに選択肢から切り捨てた。

この状況での最適な行動は、それ故に相手にとっても予測し易い。だからそれはある意味で、否、本来の意味で誘導されているという

事になる。

ジャンは攻撃と殆ど同時に前方へと大地を蹴った。

肉体強化故に増強されている動体視力、伸びる主観的時間を存分に使って振り下ろされる一対の剣の機動を推し量りつつ、その懷に潜り込む。だが——ジャンが肉薄するのと同様に、ホークの身体は後ろへと退いていった。

「っ！」

嵌められた。裏をかいたと思ったが、それさえも見透かされていたのだ。

既に斬撃は肌からさほど離れているわけではない。

時間がない。

どうする、どうする、どうする——。

——斬撃は左の肩口に食らいつくと同時に、右横腹へと襲来。肉を切り裂き、抉るように通過する中で鮮血を撒き散らし、そしてその一対の剣は交差した。

縦の鋭い一閃に、横の狡猾な一撃。十字からなるその一連の動作に、逃げ場などは存在しない。

「く……ぐあっ……！」

思わず身を引こうとすれば、波状の刃が肉に繊維に引っかかる。

ジャンは呻き、さらに攻撃が肉体を切り裂いて過ぎるのを確かに感じていた。

剣が腹部から股を通り、その刃から剣先までを血のりで濡らし鮮血の尾を引いて過ぎ去り、また難いだ剣は同様に血で弧を描く流れの軌跡を描いて、その勢いを伴いホークはやや後方へと距離をおいた。

ジャンの肉体に深い切創が施され、新調したばかりの麻の服が見事なまでにボロ布へと変わり、また激しい流血によって赤く染まる。咳き込んでも血はでなかったが、患部の燃えるような痛みや——それまで覚えの無かった肉体表面に対する想像を絶する激痛に、ジャンの思考は瞬時に白く染まりあがる。

「や、ろう——っ！」

——こんな下手な芝居を打たれて、何者かに試されて。まだ病み上がりだというのに、おそらくこの後に魔術による治療などがあるとも、こんな致命傷に近い傷を負わされて。

そんな理不尽を被って、自分だけが傷つくのだから構わない——そんな風に笑って許せるほどジャンは寛容ではなかったし、そもそもこの間の異種族戦での一件でむしろ血生臭くなっているほどだった。

だからもう退こうという本能からの撤退命令や、これ以上は危険だと頭の中で鳴り響く警鐘などは全て切り捨て。

理性が痛覚の悲鳴を無視し、真っ赤に染まる視界の中の影を、鋭く睨んだ。

「てめえ……ぶっ潰してやんぜ」

「凶悪な顔貌つらだな。そいつが本性ってわけか？ お前さん」

「っせえよ、イラつくんだ——おれが何したってんだ！ ふざけやがって……っ！」

「この不条理が気に食わねえってか。ま、年頃の少年ガキがしょうがねえかもしれないが……」

「ああ？ 誰がガキだって？」

「お前さんだよ、たかが自分を傷つけられる事だけにイラついてどうしようもねえ、ちっちゃええガキさ」

ホークの台詞に、ジャンは小さく舌を鳴らす。

それに、彼は意外そうにしかめていた表情を消し、口笛を吹いた。口元は依然としてにやにやとひきつっている。

「なんだ、今度はオレが試されてたってわけか？」

器の小ささを指摘しあわよくば矯正せんとするばかりで”のって来なかったという事実

に肩をすくめるジャンに、ホークは思わず噴きだした。

笑い声は立てずに押し殺し、それからくつくつと肩を震わせてジャンを見据える。

「てエしたもんだ」

というのが、その後の開口一番だった。

飽くまで自分にとって有利な状況を作り出そうとは――それまでの、演技には見えぬ怒りの演出にホークは思わず舌を巻く。これならわざわざ騎士なぞを目指さずに、俳優か何かでもやったほうが良いのではないか。

あの状況でさらに叩き潰そうと向かっていたら、ジャンはどのような反撃に出たのだろうか。少なくとも今回が試験のような形でなければそうしていた筈だ。大怪我をしたねずみが、万全の態勢であるネコにどう噛み付いてくれるのか。ホークはそこに、少しばかり興味が湧いた。

そして己のプライドなどはかなぐり捨ててまで、相手を油断させる隙を狙おうとする狡猾さを彼は認めた。

こいつは強くなるかも知れない。

そう思うと、少しだけ肉が踊る。血が沸き、心臓が力強く跳ねて全身にその弾みが伝播する。

「お前さん、武器は何を使ってる？ 弓か、槍か？」

「剣だよ。ドワーフ特製の立派なやつだ」

「ああそうかい。なら急場しのぎ、おざなりですまねエが――これでも使えや」

言うが早いか、ホークは手にしていたフランベルジェを投げ捨てたかと思うと、それは空高くに飛び上がって数度ばかり回転し、落ちてきたかと思えばジャンの眼前を通過し、地面に突き刺さった。

ジャンは迷いなくそれを引き抜き、構える。同様にホークも今度は剣を両手で構えていた。

「今度はそれで、オレを本気にさせてみる」

ド派手な流血沙汰は、それ故にそう長く続くものではないように思えた。

もって数分。激しく行動するとなれば、その寿命とも言える残り

時間は刻々と減っていくばかりだ。

理屈で理解しろ、オレを本気にさせろ——今や試験官としか見えなくなった眼帯の男に対するジャンの苛立ちは確かなものだった。

命令ばかりだ。

しかも的確に足りないものを言い当てている。さらにいまましい事に、奴は本気にさせろと言ってきた。剣まで抜いているのにまだ本気でないと来ている。その斬撃を受けて今にも死んでしまいそうなクソツタレな待遇を受けているのにもかかわらず、本気でない生半可の攻撃によってそうなってしまったという事実を突きつけられていた。

そんなこと、許してたまるか。

これ以上、されてたまるか。

怒りがふつふつと沸き上がる一方で、酷く冷たく沈んでいく一面を彼は理解していた。

鼓動が落ち着く。全身の筋肉が痙攣するように震え始めるが、それが畏れなのか、武者震いなのか彼には分からなかった。

興奮はする。あわよくばその首を刎ねてやろうという意気込みさえある。それは真剣を渡した相手の不注意だから、だと殺した際の言い訳さえも考え始めている。が、相手がどう動くか、相手が持つ魔術は、どこまで速く、どこまで鋭く動くことが出来るか——考えられる、想像できる範囲内で彼は思考する。

だが時間がない。

男は既に走りだしている。

長く長く伸ばされた主観時間の中で、ジャンは唯一辿りつけた一つの手段を念頭に置いて、行動を開始する。

——理屈で理解しろ。

まったくもって難しいことを言ってくれる。

（理屈ってなんだよ）

殆ど本能的、直感的に戦いそれを骨の髄にまで染み込ませているから、その言葉にピンとこない。来たとしても、下手に考えるより

己の察知できる範疇内で考え行動したほうがまだ安全なのではないだろうかと思えた。

（理屈で考えろって……まるでおれが単細胞みたいじゃねえか）

理論的、あるいは論理的な思考を根本に根付かせろと言っている事はよくわかつているつもりだった。簡単にいえば、相手の行動からどう動くか、思考を読むが如く理解しろと言っているようなものだ。つまり必要となるのは注意力と経験だ。あるいは想像力か。

——やがて男がジャンに対して斜めに構え、片手で突き出した切先が鋭く切迫し始めた頃。

ジャンは短く嘆息して、腰を捻って腕を振るった。

勢い良く襲いかかってくる白刃の横腹を、剣で叩き上げる。軌道はジャンの喉元から外れて宙を穿つ。鏢迫り合いの要領で刃を外さずにジャンはそのまま肉薄し、剣を両手で握り直して相手のフランベルジュを腕ごと、対角線にたたき落とした。

左腕はそれによって自然に封じ込まれ、ジャンの構えた手元によって下半身からの追撃は許されない。

「こいつア……ッ！」

「うるせえ！」

にわかに驚く顔のホークへと、ジャンは鋭い頭突きを撃ち込んだ。衝撃が頭の中身を激しくゆらし、視界を歪ませる。ノイズのかかった景色を映し出す中で、目の前の男のうめき声だけは確かに聞こえた。

さらに身体をぶつけて距離をとり、剣から離れた腕を振り上げてその顔面に肘を叩き込んだ。

通った鼻が歪む。皮膚が切れ、鮮血が漏れた。

ジャンは行動と共に襲いかかる激痛に堪えながら、肉体強化の影響によって徐々に痛みが薄れていくのを実感した。

さらに追撃。死角となる足元を払えば、ホークの身体はいとも簡単に——崩れない。力強く踏み込まれた足は、重心が落とされた肉体はローキックごときの威力ではビクとしなかった。



これに、ホークはいやらしい笑みを浮かべる。対照的にジャンは再び、舌を鳴らすばかりだった。

言葉はなく、ホークの斬撃。

ジャンは応対し、それを受け止める。が、瞬時に刃が翻り、甲高い音を鳴らすのとはほぼ同時に次が来た。

落ち着き払った対応。数瞬の間に降り注ぐ無数の剣撃を、それでもジャンは打ち払う。だがそれが彼の限界速度での対処だった。

だから次の刹那に下方から隆起する大地が如き切迫を見せる切先には、思わず息を飲まずには居られなかったが――ならば対処しなければいいだけの話だ。

そしてそれが、最も最適<sup>ちようてき</sup>いいタイミングでもあった。

切先が顎に触れる。その鋭い刃先が肌を容易に引き裂いて肉を抉り、骨を削ろうと言う所で背を反らした。刃は喉元に滑らずに頬へと向かう。緊張する頬の筋肉が力づくで引き千切られる一方で、再度足を振るった。

身体全体で反動をつけるように反らしたを戻し、それ故に顔の傷がより深くなるが構わず行動を進める。腰を捻り、その反動で膝を上げ――軸足を回して一氣に対象へと衝撃をぶち込んだ。

手堅い衝撃<sup>インパクト</sup>。ジャンのスネがホークの膝を打ち碎き、見る間に体勢が崩れていく。ジャンは手早く後退すると、虚空を切り裂く白刃があった。完全に出遅れた剣撃は間隙を抜くことすらできずに無様に舞う。

ジャンはそれに確かな手応えを覚えてほくそ笑んだ――が、刹那の撃墜から蘇るホークの表情<sup>かお</sup>に、未だ嬉しげな微笑があるのを見て、思わず笑みが引きつった。

全身に燃えるような激痛が走る。

もはや息も絶え絶えで、左目などは視界が赤すぎで何がなんだかわからない。それ以上に緊張が下腹部を痛めつけ、腸の中は空っぽだと言うのに腹を抱えたくなった。

「ははっ、悪いな。足癖が良すぎて上手く行かなかった」

虚勢。

当然として、心情を映し出す顔でばれだっただが。

「確かに。お陰で膝が砕けずに済んだ」

彼はにやにやと笑いながら膝を叩いてみせる。そこには余裕の態度が見て取れて、だというのにこの男はまるで戦意でも失せたと言わんばかりに握っていた剣を左の鞆に収める。中々の長さである為に鞆の先は地面すれすれで、口は胸元に届かんとする勢いであるのだが、手馴れたような手つきで収納する。

ジャンは握ったままだったフランベルジュを返そうと差し出せば、彼はそれを手で制す。

「……どういう事だ。むしろやる気がなくなったってわけか？」

「いいや、まさかさっそく一撃はいるとは思わなくてな」

しかも足止めされるほどの一撃を。

彼は厭味ったらしく、だがどこか嬉しそうに呟いた。

「いいぜ、次で最後にしてやる。見てろよ、オレの本気だ——」

当然の帰結として、両者の間に試す試される、あるいは憎しみや怒りなどの、今回の騒動に至る根本的な理由が失せていた。

そこに残るのは実力者同士の、己の力を押し付けあう、己の力を見せつけ合う——つまり己という存在<sup>もの</sup>をぶつけ合う闘いだ。

だが、戦いと言っても、両者の距離ははるかに離れ、今では校庭の端と端と言わんばかりの距離があいているのだが。

「発現<sup>めざ</sup>めろ……」

肩幅に足を開き、右手を前に突き出す。左腕をその支えにすれば——にわかな光が掌を包む。それが魔法による反応だというのは、さしものジャンにも理解できた。

光が長大に伸びて形を作る。およそ等身大ほどの大きさになると伸長は停止し、剣にしてはいやに細い、そしてどこまでも起伏の失せた外見<sup>フォルム</sup>、握る部分の高さに、それがただの剣ではない事を彼は認識する。

ならば槍か。考える間に、ホークの声がその輝きを確かな武器として具現させた。

「無限射程の長槍ッ！」  
シューター！・オフ・ボイス

——それはおよそ、見たこともない機械的な外観だった。

メタリックな質感。長細いそれは槍などではなく、その先端にはウイスキーボトルのような黒い箱型の、その側面に穴が空いた道具がついている。金属製の部品を組み合わせたような長大な武器ではあるが、思ったよりも細くはなく、わしづかみしたとしても指が届くようには思えなかった。

その長い鉄骨のようなものから、取っ手のような部品がありホークはそれを掴んでいる。さらに小さな突起があり——その下部の対面たる上部には箱状の部品が不自然に飛び出していた。

ある一定の部分からはパイプのように細くなって先端へと伸び——そのすぐ手前には、彼が掴む取っ手を長くしたようなそれは、短いコンパスのような二脚となって生えていた。おそらくは地面に伏して使う際に、安定させるためのものなのだろう。

確かに鈍器として使うには不自然な形をしているし、無駄に大きく扱いにくそうな武器である。槍や剣としてもまともに機能はしないだろう。

——ディライラ・ホークは握る取っ手のすぐ近くにある金具を手に取り、起こしてひきつけるように引っ張る。ガチャリと何かが”込められた”ような音がして、彼はその金具を定位置に戻した。

その形。

構え方。

握る部位の、不自然な突起。そこにかかる指。

金属で構成される、どこか砲筒を思わせる鉄パイプのような円筒。妙な既視感——それを覚えると同時に、いつの日かに訪問した本屋を思い出した。手のひらサイズの、火薬を使用した武器。それは決して近接用武器などではなく、立派な”向こう側の大陸”から輸入された遠距離武器である。”拳銃”と言う名のついたそれは、そ

の筒状の先端から弾丸と呼ばれる主に鉛で構成される道具を発射する。

彼には、それに関連した何かにしか見えず……またそれ故に、その危険性を大いに理解した所で走りだそうとして――。

破裂音。

先端の箱状器具から眩い火花が瞬いたかと思うと、遙か後方で盛大な衝突音が鳴り響く。ふり返るまでもなく鉄門がその門壁ごと破壊された様子がよくわかり……その”射撃音”と呼ぶべき空気を引き裂いたかのような音は、大気を激しく揺るがし、未だその余韻を遠くに残していた。

それがいわゆる、彼の本気だった。

瞬間的に崩壊した門は、彼の超能力でもなんでもなく、純粹なまでの物理的攻撃が要因だった。それはその巨大で長大な銃から発射された、拳銃とは似ても似つかぬ大きな弾丸で打ち碎いたのだ。剣撃がどうだとか、蹴りが、込めた力がどうという次元の破壊力ではない。そしてまた、その衝撃は計り知れないレベルのものだ。

「……ッ!？」

だから息をするのも忘れて、ジャンはその銃――”狙撃銃”を睨みつけた。

ホークは依然としてニヤニヤと、あるいはやっとジャンを驚かしてやったと喜ぶような笑みを浮かべて口を滑らせる。

「やっぱ傭兵おれたちの本分は鉄砲こいつだろオ!？　だよなア!　大長槍ラハティだとかバレット銃でも良かったんだがな、大見得きらせてもらったぜ!」

なめらかになる口元は、その魔法に種類があることを教えてくれる。おそらくは”火器類”を出す固定効果があれば、出現できる種類はいくつかあるということだろう。

再び金具を引けば、中身のない弾丸の入れ物である”薬莖”が押されて吐き出される。同時にその薬莖を押し出したのは弾薬であり、その行為が終える頃には既に次の弾丸たまが込められたことになる。

「だが、良くこれが危険だってわかったな。走ってなけりゃ、割と

マジで死んでたぞ？」

顔も、胸も腹も、その全てがそれまで覚えていた、苦しませていた痛みや傷を忘れてしまっていた。

背筋が凍えて、流血も相まって意識がはつきりしない。

戦慄が走り、こいつにはどう勝てば良いのか——そればかりが頭の中で繰り返された。

いや、まだだ。

まだ終わらない。

まだ終われない。

——肉体強化の魔力が全て、瞬時にして消え失せた。その効果が無くなった瞬間に傷の痛みが増幅して全身を燃やしたが、最早関係ない。

だから口にする。

だから魔力も、自然に胸よりやや高い……喉に集中した。位置が以前とは変わっているということには気づいたが、気にしている余裕など、無い。

フォービドゥン

「禁断の——」

「——しかし、参ったな」

だというのにホークは、いとも簡単にその長槍ボーイズを消し去ったかと思うと、まるでわざとらしく困ったというように肩をすくめた。

顔はいつもどおり、にやにやとしたいやらしい笑顔のままだ。

「想像以上にやりやがる」

最初の猛攻は中々だった。もし相手がホークでなければ勝負はついていただろう。

次は助言を与えたばかりだというのに、その学習の良さを示していた。大怪我を負ったばかりだと言うのに挑発する余裕を残し、さらには諦めすらない強い精神を見せてくれた。また適切な判断から、相手の思考を読む流れは驚かされた、とホークは評した。

最後は、ぎりぎりです外す予定ではあったが——引き金を弾く直前で回避行動を取ったことには正直驚いた。殺気や雰囲気などおおよそ

彼が察知できそうなものの一切は排除したつもりだったのだが……。

「お疲れさん」

言葉と共に、集中させた魔力が霧散する。

胸に当てた右手は力なく垂れ落ち、左手から失せた握力が握ったままであるフランベルジュを滑り落とした。

緊張から解き放たれた肉体は、存分に与えられた激痛の海に飛び込んで……。

精神、肉体の疲弊は、病み上がりである青年にとっては既に限界であつたらしく、

「ま、ゆっくり休めや」

昏倒するように前のめりに倒れるジャンを受け止めると、副長と

——妖精族らしく耳が長い少女が走り寄ってくるのを確認した。

## 療養

その後のことは、想像に難くない。

——せっかく肉体表面下、つまりずたずたに引き裂かれていた筋肉がまともに結合して、通常通りの生活はもちろんリハビリ代わりとなる訓練を行うには差し支えない程度に治癒したと思えば、今度は深い、致命傷足りえる切創に、もはや致命的となっているほどの失血は、落ち着いたばかりの修道院にまた波乱を呼んでいた。そしてそれが一段落する頃。

目が覚めたジャンに対して、今度はクリスのみならず、多くの修道女からの説教や同情の目などを向けられる事になっていた。

また、右腕の怪我が悪化したのは言うまでもない。

「なんか悪イことしちゃったかなー？」

「いや、仕方がなかったことです……と言いたいところだが」

ジャンが自室呆然として寝台から窓の向こう側を眺める一方で、眼帯の男と丸メガネの男が困ったように言葉を交わしていた。どれほどの罵詈雑言を浴びれば廃人になれるのだろうか——冗談でありながらも、どこかの的を射ている話題の中で、眼帯の男ディライラ・ホークのそう漏らした言葉に、副長”スミス・アーティザン”はその丸メガネを中指で押し上げてから、息を吐いた。

「やりすぎです。お陰で部下の士気もあがってしまいましたし、この国に対する見方も彼の健闘のお陰で良い方向に転じましたが……」

「当の本人がこれじゃあなってトコか？」

「少しは責任を感じてもらいたいところですよ」

「確かにア。てめエの尻くらいてめエで拭けてことだ」

「ディライラ、あなたって男は——いや、むしろいつもの調子で安心しましたがね。私はこれから一先ず軍部に顔を出してきます。ディライラ、あなたは王への挨拶が終わったので、今日は好きにしていってください。部下たちにも、この国の法のもとで好きにするよう

伝えてあります」

まだまだこれからが忙しいんだ——スミスはこの遠征から今日まで休みなしで裏方で働き続けている。ようやく昨日の試験じみた闘いが終わったと思えば、部下たちに指示をして校庭を舗装しなおさせ、宿の手配、加えて当面の計画の再修正。

今日は今日で実際に派遣要請を出した大臣に当面の日程や仕事を仰がねばならぬし、長い間を金のかかる宿屋にたむろするわけにはいかないから、国に衣食住を用意してもらおう交渉もしなければならぬ。用意してもらっても木賃宿であった場合は部下の士気にも、体調にも関わることだから時間がかかるだろう。

隊長としての役目は、王に顔を見せて挨拶をする程度だ。さすがにこればかりは代わってやれないので頼んだが——僅かな空き時間に彼と一緒にジャンの見舞いに来たスミスは、手首に巻きつけた腕時計を確認した後、忙しそうに病室を後にした。

「まったく働き者だなア。もう一部隊くらい来ればまだ話は違ってたんだがな……」

彼らの部隊は隊長、副長を含めて十人前後で構成される。

そんな人数が基準の部隊で構成される傭兵組合だから特に問題はないのだが、その問題がないのは主に戦闘面だ。政治的に関与する必要がない存在だからそうそう裏方で忙しいことになるわけではないが、それでも裏で指示を受け取り伝達する役目がひとりきりでは、とホークは思った。

が、自分は動きたくないときたものだから、解決のしようがない。

困りものだ。

ホークが悩んで唸っていると、ふとそんなノイズじみた声に気がついたらしいジャンが顔を向ける。

「うっせえ」

「んだと？ 目上には敬語を使えって学校では教えてねエのか？」  
ツナギのような服の胸ポケットから、この国には無いタバコを取



り出し、手馴れた手つきでオイルライターで火をつけ、紫煙をくゆらせる。

ジャンはその煙を忌々しげに睨みつけながら、まるで入院する羽目になった怒りをぶつけるように悪態をついていた。

「バカでも生きてりや目上になれるから良いもんだよな」

「てッ、ためエ言ってくれるじゃねえか。ンな事に頭使う前に、オレとの時に頭使ったほうが良かったんじゃないか？」

「いちいち返し言葉に頭使うかよ。こんなもんで頭使ってるって思われるほどおれが馬鹿にされてんのか——それとも、あんたの頭の程度が知れたってわけか？」

売り言葉に買い言葉。その応酬はとめどなく、そのうち握りしめて腿に押し付けたその拳が、いよいよ相手に向けられようとした所で……何かが破裂したような音をがなり立てて、扉が開いた。

「怪我人は黙って寝ててッ！」

怒りを湛え、その幼い丸っこい顔に精一杯の怒気を孕め青筋を立てるクリスに、両者の勢いは瞬時に霧散した。

昼食を終えた所で、ホークは世界地図をジャンの膝下に展開した。

「地理のお時間だ」

いやらしい笑みに、紙巻たばこの匂いがふれ回る。

そういった要望をしたのは確かにジャンの方だったが、やはり——この男からモノを教えてもらうのは気に食わない。そう、非常に癪に触るのだ。

「オレたちの居る大陸を指してみろ」

寝台に腰をかけるホークは、肩と肩、腕と腕が密着しあうような近さで訊いてくる。吐息が、その呼吸がかかる程の距離で、ジャンは大げさに首を捻って顔を背ける。そうしながら、指で示した。

——世界地図は基本的に、造られる国の大陸を中心に描かれている。これはおそらく”向こう側の大陸”で造られたものらしく、くびれがある縦に長い大陸がやや左側に寄せられている。

海を挟む向こう側には、その大陸よりも遥かに大きい、地図の半分よりやや小さいという程の大陸。倭国はその大陸に寄り添うように存在するが、それでも地図の最も東という位置だ。

その他にも様々な列島や大陸があるが、大きく分けてこの世界にはそれら二つの大陸が中心となっていた。

ジャンが指し示すのは、その巨大な大陸。

ホークは満足気に頷いた。

「そう、ここが『ヴォルヴァ大陸』で、地続きの最南端にあるこの国がアレスハイムだ。大体この半分位までを領地として占めていて、だいたい半分くらいからある広大な砂漠地域に食い込むかたちでエルフェーヌがあり、この橋みてエに唯一繋がらせてる細い陸地の手前から向こうが『ブリック共和国』だな」

縦に伸びるナスのような形の大陸をすぎれば、横に広がるそれよりも広大な大陸。それらの総称は彼が言うとおりのヴォルヴァ大陸であり、その知識のほとんどは義務教育で与えられるものばかりだった。

ホークは続ける。が、彼が頼んだ説明は中々語られずに、既に得ている情報ばかりが垂れ流された。

——曰く、その”向こう側の大陸”と呼ばれているのは『ディアナ大陸』であり、彼らの本国となる『ガウル帝国』はその中ほどに存在する。

これから侵攻してくるらしいヤギユウ帝国はヴォルヴァ大陸の北方、アレスハイムから真っ直ぐ北に進んだ最北端に存在する。さらにヴォルヴァより海を渡り北へ向かえば”氷の大地”なるものがあるらしく、また南にも同様のものがあるらしい。規模は未知であり、そこに異種族が生息しているかは不明。

「んで、まア地形的にブリック、エルフェーヌを抑えられてるとしたらかなりキツイ所だろうな——と考える。普通はな」

ようやく本題に入ったかと思うと、ホークはそこで言葉を止める。「普通は？ 溝がある分、そこを配慮した考え方をしないのか？」

彼はそういったジャンの疑問を経て、頷き、促されるように先に続けた。

「いいや、違うな。他国はアレスハイムが溝と上手く付き合っているとは思ってない。異種族にすげえ迷惑かけられて、自国のことで精一杯だと思ってる。実際、オレらもこの国に来るまではそう思ってたしな」

「……ヤギユウはそこまで含めて、ここに侵攻する価値があるって？」

「その通りだ」

「理由は」

「知らねェし、興味ねェよ。それを探るのはオレたちじゃなく、この国の仕事だ。オレたちはただ兵を育てて、前線で敵を蹴散らすだけだ。ま、この国がその調査を怠ったりや、勝てる勝負も勝てなくなるがな。少なくともオレやお前みたいな駒は無駄なことを考える必要なんざねェのさ」

「そう、だな」

力なくそう頷くジャンは、ホークから視線を外して世界地図を凝視する。そんな殊勝なジャンが珍しかったのか、ホークは目を丸くして彼を見つめた。

「どうしたんだ？ 気持ち悪い」

そんな挑発じみた台詞にも、ジャンは反応せず、ただ小さく首をふるだけだった。

「いや、早く怪我を治さなくちゃなって……ヤギユウの動きがアレから無いってなると、そうとう準備してんだろ？ 学生のおれがどうこう出来る話じゃないだろうけど……」

「そうだな。二年ならまだしも……だがよく考えろ。ちょっと気にしてみろよ。なんでその二年生よりも、一年のお前が注目されているかを——」

「――して、演習の結果は？」

大臣の部下から手渡された資料に視線を落しながら、スミスは中指で滑り落ちる丸メガネを押上げた。以前から考えていたが、いよいよ買いなおさねば戦闘に支障が出てしまうだろうと考えながら、促されるままに読み上げる。

「記録されている成績に見合った動きがなされていると考えてまず間違いはない上、単純な戦闘能力で言えば十分新卒生レベルだと言えるでしょう。右腕の負傷をカバーする機転の良さや、観察力、柔軟性など場慣れしているように見えます。ただ、魔術が肉体強化や魔力解放しか持たないことが不安要素ですが、部隊での行動ならばそれをカバーすることができます」

――概ねそのとおりだとは言えるが、やや大雑把すぎやしないか。スミスは思いながらそれを読み上げ終えて、机の上に下ろした。

卓を挟んだ向こうに座る大臣は葉巻を咥える齒の隙間から煙を吐き出しながら、訊いてくる。

「して、君の評価はどうだね？」

わざわざ他を追い払った理由はこれか。

狭い会議室で、彼と大臣の二人きりで開始された会議に抱いていた疑問はそこで解消される。

スミスは大きく息を吸い込んでから、小さく頷き、口を開いた。

「この報告書<sup>レポート</sup>はやや誇張気味ではありますが、将来性があるのは確かですね。正直、ディライラー――隊長も気に入っていることですし、このまま勧誘して本国で訓練させたい所です。現在の戦闘能力は、上位を占める学生の戦闘能力が分からないので判断材料に困りますが……確かに、異種族の群れを単体で薙ぎ払ったという信ぴょう性はあります。限界まで肉体を強化した場合につきますが。しかし、センス自体はあると思います」

「ほう。簡単に、強いのか、弱いかで言えばどうなるのかな？」

大臣は飽くまで簡潔な答弁を好んでいた。

スミスは頷き、失礼と、机の上に出されている紅茶を口に含み、

飲み下す。

「今は”強いでしょう。あの歳で、所属している学校では。ですがこれから——例えばヤギウ侵攻での掃討戦に実際に投入する、となれば弱いと判断せざるを得ないでしょう。それほどまでに、ある一定の実力は持っているでしょうが、不安定で、断定しきれない強さがあります」

鼻から抜ける芳醇な紅茶の香りを嗜みつつ、大臣が優雅そうに椅子の背もたれに身を預け、楽しそうに首を縦に振るのを見守った。

「ただの優等生だ、と？」

言葉に、ただ頷く。

ガラスでできた灰皿に葉巻を押し付けて大臣は続けた。

「私の期待は外れたのかね？」

そうは言い切れない。

スミスはそういう意味で首を振った。

「二年制の学校でしょう？ 彼にはまだ、あと一年半の時間が残されている。成長する時間は存分にある……でしょう？」

「いや——」

自信満々の、されどそういった様子をおくびにも出さないスミスに、残念そうに大臣は首を振った。

そして彼の脳裏には、スミスの言葉の直後に過ぎった”事例”があった。

ジャン・スティールには魔法がない——この事実が、ジャンの学校生活を大きく揺るがしているし、実際、それが判然としてから以降、怪我が治癒し完治とまではいかぬが日常生活が可能なレベルにまで立ち直ったのにもかかわらず、彼は学校に通おうとはしていなかった。

リハビリと言う名の基礎訓練に明け暮れ、それ故にその肉体はより実用的なものに練りこまれていく。

これほどの逸材を、たかが原則的な決まり程度で捨ててよいモノか……これを例外的にして、決まりに穴を作ってしまうか。その決

定権を持っていない大臣でさえそれほど混乱するのだから、実際に判断し下す者はどれほどのストレスに襲われるのだろうか。

将来有望な少年少女は多くいる。その中での、より突出した男だ。この国が望んでいた、超精鋭たる特攻隊長やそれに類する重鎮的人物となりうる存在。

強き者は士気をあげ、敵を打ち砕く。士気はさらに上がり、敵を屠り――その軍の理想的な在り方に、必要なものだ。

いずれは海軍にも、騎士の手を回したいから軍力はさらに増強せねばならぬし……。

「ジャン・ステイルは――彼の明日は未だ分らない。魔法を持たぬという事実から、彼が在校できる可能性は皆無だが、その実力から考えれば決して捨ててはおけぬ男だ。私に決定権がないことが、心底悔やまれる事例だな」

「なるほど……憲兵に留めておくという考えは？ 他にも、彼を活用できる組織を創設することだって出来るのでは？」

「その価値があるか、試したのが今回の演習だ。だが騎士においておくのが安牌だったのだが」

「そういうわけですね。なら今回の紛争が終えるまで、彼の身を貸して”貰えませんか？”

「……どうするつもりだ」

新たな葉巻に火をつける大臣は、悪戯に微笑むスミスの、その丸メガネの奥の瞳が鋭く細まっているのを見た。まるで悪魔の微笑みだ――そう思いながら、見慣れた悪代官の面に煙がかからぬよう、口の端からそれを吐き出した。

スミスは飽くまで落ち着き払う大臣を見ながら、小さく、まるで痙攣するほどに小さく頷いた。

喉が鳴る。

自分の言葉が青年の人生を変えることになるかもしれないが――どうせ騎士を目指しているのだ。変わらないだろう。

「我々が育て上げて見せましょう。ヤギユウ侵攻戦で、ともに戦

場に立てる程度には」

自身あり気にスミスは鼻を鳴らす。

が、大臣は疑うような目付きで彼を見つめる。スミスはただくゆる紫煙だけを眺めながら、決め手となる言葉を叩きつけた。

「もともと、我々は教導隊です。ネコはおろか、ライオンでさえ噛み殺せるネズミを育てて見せましょう——ですから」

続く言葉に、大臣は思わず苦笑した。

自身の望みとも言えることを無償で請け負ってやる”代わり”に、と彼が突き出した交換条件に、大臣は快く頷くほかなかった。

——正直な所、ジャンは己の実力に自信があるし、また無いとも言えた。

戦えることは戦える。そしてある程度の強者にも打ち勝てる自信がある。

だが、相手がホークやボーアなど、歴戦の勇士とも言える実力者が相手となると、より燃えるのに対して、その行動がどこかなげやりやくそ気味になっているように思えて仕方がなかった。

それには明確な理由がある。

ただ一つ、それは——彼自身が、魔術である肉体強化に頼っていることである。これは使い方を間違えれば諸刃の剣にもなる魔術であり、そのお陰で無数の異種族を薙ぎ払って生き残ることができたのだ。技術や判断は確かにジャンのものだから、生き残れた要因はただそれだけというわけではないのだが、言い換えれば肉体強化も生き残れた一つの要因だという事になる。

つまり、そういった外的要素を除いた素の己は、本当に強いのだろうかという疑問が残るのだ。

昨日の演習——試験だってそうだ。あの時点では既に肉体強化を発動させていた。そしてまた、その魔術がなければとてもホークの攻撃に対応しきれなかったし、仮に頭が働いていたとしても身体が

思考に追いつかなかったのだ。

つまり……本当は、自分は弱いのではないか。

生身では、魔術やら何やらがなければ誰にも勝てないのではないか。

不安が思考させ、その結果がさらに不安を募らせる。まさに悪循環たる落ち込みは、ホークが帰宅した今では誰も止めてくれはしない。

「強く、なりたい……」

もれる言葉を、誰かが聞き止めてくれることはなかった。

「力が欲しい……っ！」

魔法はもう良い。

だが、ならばせめて、誰にでも通用する、もっと強い力を――。病み上がりで負った大怪我によって、彼の精神状態は不安定になっている。今こそ、誰かがそばにいてやる必要があったのだが、今回に限っては誰もいない。窓の外はもう暗がりになり飲み込まれ始めたばかりであり、これから始まる孤独な夜は、その長さ故に彼にとって絶望でしか無かった。

立ち直れそうだったところを挫かれた……意図的でないにしろ、タイミング的には的確なまでにそうであったこの現状に、ジャンはただうなだれるだけであって……。

為す術もなく、夜が更けると共に、彼の肉体も静かな闇に飲み込まれていった。



## ラッキースケベ

自身の悲鳴と共に目覚めてみれば、ふさがり始めた傷を覆う包帯や衣服は汗でぐっしりと濡れていて、酷く不快な状態になっていた。何の夢を見ていたのか、上肢を起こして考えてみたが思い出せない。どちらにせよ、思い出せないのならば大したものではないのだろう。

「どうせ夢だし」

鬱陶しそうにシャツを脱ぎ捨てて包帯を外し、そうしてシャツを着る。縫糸がまだ患部から抜けてはいないが、こっそりシャワーを浴びるくらいはいいだろう。

窓の外は未だ闇に包まれていて、それが早朝の暗さなのか深夜のそれなのか判然としない。

「ま、別に関係ないか」

明日、あるいは今日はもう土曜日だが、当分は学校に行けず、また行くつもりもないジャンには関係のない話である。

彼は胸いっぱいに息を吸い込んで立ち上がると、溜息混じりに肩を落として病室を後にした。

廊下の壁に一定の間隔で備えられる燭台には、燭台らしくろうそくに火を灯しているわけではなかった。そこには魔石を置き、魔術を利用して電灯に使用しているのだ。故にろうそくなどよりも明るく、廊下はまるで昼間ほどの輝度を保っている。

人気がないところを見るとやはり深夜か――考えながら、病室が並ぶ廊下を裸足でぺたぺたと歩き続けて、病棟と呼ばれる区画を抜ける。

その先は修道女の休憩室や、簡単な会議室、そしてリネン室に洗濯場、共にトイレや簡易シャワー室が設えてある。彼女らは寮住まいであり、また寮はここからやや離れた敷地内の端に追いやられて

いるから、居るのは夜勤担当の二、三人だけだ。

よって、誰かがシャワー室を利用しているはずがない。

確固たる自信と、ホークから与えられた論理的に思考するというヒントから導きだされた答えはそれであり、またおそらく揺るぎようのない事実であると思われた。

だからシャワー室という白いプレートが貼りつけられている扉のドアノブを、迷うこと無くひねったのである。

――途端に吹き出る、水気をたっぷり吸い込んだ空気の奔流。白く濁る湯気はそれ故に暖かく、明るい室内にもやをかけた。

そして目の前には影があるのを認識する。片足を上げて、両手に持った何かにその足先を通してと奮闘する姿だ。思わず頑張れ、と応援したくなるが、次に気づいたのはその身体が何も見につけていないことである。

たわやかな胸……は存在せず、膨らみかけのそれが腿に押し付けられて形を歪める。だというのに少女らしい足はどうにも肉付きが良く色っぽい上に、やや赤らんだ全身からは色気が溢れ出していた。くすんだ金髪は頭の後ろで一括りにされていて、水気を含んだやわらかな髪は背中から横腹にかけて張り付いている。

そして足を上げているために、局部はにわかにならわになっていて、そのもやの中でもジャンの寝ぼけ眼は少女らしいそれを認識した。

「なんだ」

故に、その幼いという情報からこの修道院に居る女性の中で該当する者が、すぐさま脳裏によぎった。

「クリスカ」

つかつかと、片足に桃色の可愛らしい絹のショーツを引っ掛けたまま歩み寄れば、それ故にたわやかと言うものとは縁遠い小さな双丘が揺れることすら忘れて彼女の胸に張り付いた。

やがて近づけばそんな掛け声と共に突き出された二本の指が、ジャンの眼球に突き刺さる。

「せいッ！」

「目がっ！」

「ばかっ！ スティールさんのばかっ！ ばかばかっ！」

さらにショーツをひっかけた足を胸に引きつけて力を溜め、脚力を開放すれば踵が鋭く水月を穿つ。両手で目を保護していたために無論防御など出来るはずもなく、彼は為す術もなく後方に吹き飛ばされた。

ジャンはその網膜に焼き付けたあらゆるアングルからの少女の裸体を、走馬灯よろしくよぎらせながら――壁に後頭部を叩きつけ、二度寝へと洒落込んだ。

ジャン・スティールは囲まれていた。

屈強な、警棒をにぎる男たちがニヤニタした笑みを浮かべながらこの肢体を眺めているわけではなく。ごく薄着といえる女性たちが、呆れた顔で椅子に座り足を組み、あるいは腰に手をやり、あるいは壁を背にして座り込んだジャンの対面に屈んで睨みつけているなどの様相だ。

紅いキャミソール姿のクリスに、黒いベビードールにガーターベルトのどこか娼婦然とした格好の担当医。もう一人は修道服姿ということは、彼女ら二人はこれから仮眠につくところだったのだろう。「だから言っているでしょう、おれは純粋にシャワーを浴びたかっただけで、あわよくばシャワーを浴びているあなた達に出くわさないかなんて青少年にはありがちな邪な考えにたぶらかされたわけでも、そんな淡い期待に駆られたわけでもないんです」

彼は決して墓穴を掘っているつもりは無かったが、その台詞の当然の帰結として彼が本来持っていた説得力や信頼というものは瞬く間に霧散していった。

汗が引いてきたせいもあって、いくらか肌寒くなってくる。遙か南方の国だからこの季節でもまだ暑いほうなのだが、やはり夜更けともなると気温はぐんと下がってくる。

十月も半ばだから仕方のないことだ。

ジャンは自己主張する己の分身を、やや前屈みになることで隠蔽しながら論弁を続ける。

「冗談はやめてください。なぜおれがそんな不純な動機で動かなければならないんです。おれがあなたたちにそんな好意を持っていたならば、ごく自然的に事が動くよう努力します。おれだって男だ！」  
目の前のクリスの半眼は、まとりつくような視線を流し続けている。

弁解も済んだ所で彼女に構ってやろうと声を掛けた。

「なんだよ」

「ステイルさんのどスケベ！」

「おいおれの話聞いてなかったろ！」

「べらべら口が回りすぎ！ 絶対考えてきたんだよ！ ね！ だよ ね！」

キャミソールが身体に張り付き、立ち上がればそのスタイルを浮き立たせる。ギン、と一層力強く吠える己を無表情で押さえつけながら、事の成り行きを見守った。

その言葉に修道服の女性”コレット”は困ったような笑みを浮かべ、またスケスケのベビードールにガーターベルトという、殆ど裸の格好をしている彼女”レイラ”は艶やかな黒髪をかきあげながら、短く息を吐いた。

「つまり」

と口を開くのはレイラの方だった。足を組み、テーブルに肘をついて手の平に顎を乗せた彼女は、気怠げに続ける。

「相手をして欲しいんでしょう」

「な、なんの！？」

クリスがいかにも動揺したように声を上げる。レイラはごく冷静に、言い方を変えれば、と続けた。

「構って欲しいのよね？」

ジャンは毅然とした態度で頷いた。

この状況をやり過ごす、もとい突破するにはこれに乗るしかないと判断する。

「その通りです」

そうして立ち上がり、諸手を広げる。そんな折に股間に奇妙なまでの違和感と窮屈さを覚えて視線を下に向ければ、また己の本能、もとい煩悩たる部分もタチ上がっていた。

「ホークに打ち負かされた事があまりにも衝撃的すぎて、一人では寂しかったんですよ」

屹立とする我が相棒。

飽くまで毅然とするジャンの姿は、それにあいまって最早変態と形容するべく現れた男のようなものになっていた。

そして襲いかかる、軽蔑したような視線に、どこに目を向ければよいかわからずに瞳を見つめてくるもの、そして好奇心に満ちて相棒を凝視するもの。

ジャンはそれにうろたえて退避を試みようとするが、体はすぐ壁にぶつかった。

ドン詰まり——まさかここで毒牙にかかるのか。確か修道女は患者のわがままやその過酷な勤務体制から酷くストレスが溜まっていると良く聞く。まさか、こんな所で彼女らのストレス発散に付き合わされて”散らす”のか——。

そんな事を考えていると、ふとレイラから酒瓶を投げられた。それを胸で受け止め痛みに喘ぎながら、手に取り、凝視する。

それは飲みかけのぶどう酒だった。

「さすがにいかがわしいことはできないから、それで機能不全させなさい。それと私たちに付き合うのよ」

「えっ、あの……夜廻りは？」

「患者がここに居れば問題ないでしょう？ 他には誰も居ないわけだし——いいわね？」

レイラの不敵な笑みに、コレットは大きなあくびを噛み殺しながら頷く。夜中の巡回を免れたらしいクリスは、純粹にその事実だけ

を喜んで……。

「ていうかさー、ただ酒癖が悪いだけでこんな美人さんを逃すってわけわかんなくない？　ありえなくない？　なくなくない？」

地べたに座り込むジャンの膝に腰を掛けたレイラは、肩を組んでそのたわやかで豊満でたわわに実る豊乳をジャンの頬に押し付けながら愚痴を饒舌に垂れ流す。

クリスは情操教育上よろしくないとの事で眠りに付いているが、すぐ傍らで座り肩に頭を乗せて、コップにぶどう酒を並々と注いだまま眠ってしまったコレットは、眠りにつく前までは穏やかな見た目とは裏腹にノリノリだった事に衝撃を受けていた。

「いやー、酒癖って結構アレじゃないですか。どんな美人でも中身クズだったらアレじゃないですか」

またジャンも三杯目になるぶどう酒で言語のリミッターが解放されているせいか、普段なら心の内でとどめている言葉がすらすらと漏れてしまう。

「あー？　ふざけんじゃないわよ！　私の絶技魅せつけるわよ！」

「修道女のくせに」

「……そうよ！」

彼女は何かを思いついたように、握ったままの酒瓶をそのままに腕を天高く突き上げた。

「そうなのよ！　美人だけど酒癖が悪くて、さらに処女ってトコで”重い”って思われんのよね！　分かった、今分かった！　あんた偉い！」

ご褒美よ、と言って彼女の酒に濡れた艶やかな唇が、喉の奥から吐き出される生温かい酒気混じりの呼気と共に頬に押し付けられた。やわらかな皮膚が少しだけ濡れて、幸福な感触を与えてくれる。僅かに頬が紅潮するが、既に酒がめぐったせいの上気した顔には特に目立った変化はない。

レイラは何事もなかったかのように酒瓶へと手を伸ばし、その瓶

を逆さにして直接口をつけた。

「っはあー！ もう二六よ？ あたしより小さい頃から頑張ってる元特攻隊長さんだって二四なのにさ。やっぱ女って、二五を超えると変わるもんよ？ しかもあたしヒトだし！ ケンタウロスで二四でかなりひよっこじゃない！？ うらやましッ！」

「恋愛に歳はあんま関係ないですよ。でも、子供欲しいなら早めに生んだほうがいいと思いますけど」

「もーさー、君って空気よめないとか言われない？ 普通さ、その後半入れないでしょう？」

「事実です」

「じゃあ君、私と付き合ってくれる？」

「いやあ……ははっ！」

「うー！」

酒乱とまでは行かぬ彼女は、膝の上で両手を振り回して好き放題に暴れて回る。空になった酒瓶はそこらへんを転がり、ジャンの肩をたたき、また抱き寄せ、その顔を意図的に胸に押し付ける。が、アルコールのせいで相棒の反応は鈍かった。

「いや、まだ二十歳前ですし？ 大人の階段絶賛上昇中ですし！」

「言い訳が多いのよ！ だからモテないの！ せっかくだいい男なのに……実際、彼女とかいた事ないの？」

腕を腰に回し、頭と頭を沿わすように首を傾ける。たれてくる髪からほのかな石鹸の香りが、酒とは対照的に控えめに漂ってくる。そんな女性らしい一面に胸が高鳴って、それがきっかけになったのか——頭の芯が、どうしようもなく熱くなって、緊張してしまう。

「いや、ないっすね。元々鉦夫で、そんな時間も無かったですし」「甘えね。娼婦くらい呼べるでしょう？」

「サニーが居る宿なんかに呼べませんよ。他の連中は売春宿とかには行ってみたいですけど」

「でも、興味はあったってわけね？」

「ビビりなんで、行動には移せませんでした」

「その気がないだけでしょ？」

「ま、今の自分には贅沢過ぎるって勝手に決めつけちゃって、自然と自分から離してたって事実があります」

コレットが握ったままだったコップを奪い取り、その半分ほどを一気に飲み下してから頷いた。

ジャンは做うように、もう半分もないぶどう酒を全て飲み干し、空になったそれを床に置きながら続ける。

「今も、自分のことで精一杯で、未熟だし、恋愛なんてって考えてますけどね。でもそんな理由、自分で論破できちゃうくらい拙いし」  
「言い訳だって自分で分かっているわけね」

首肯。

どこかカウンセリングじみて来ていることを自覚しながらも、彼は彼の胸の中に渦巻く何かを吐き出さずには居られなかった。

「だからせめて、強くなろうと頑張ってたんですよ。魔法がなくなつて、リハビリのお陰で精神は保たれてたんです。でも、まだ完治してないって言い訳しても無駄なほど完敗しちゃって……それに、肉体強化をしたから——これが無かったら、おれはどのくらい弱くなるのかなって」

おそらく、学校の連中に辛うじてついていけるレベルではないか。これまでは肉体強化によってどこか優越感すら覚えていたが、それがどれほど滑稽な姿だったかを理解する。

「自信が無くなっちゃって」

「そう、不器用なのね」

「イヤ、むしろ器用にそれを如何に周囲に伝えないかを——」

「——違うわよ、バカ」

レイラが無防備に両手を広げる。殆どあらわになっている胸をそのままに、彼女はそこへと促した。

確かに彼女は酒乱だし、愚痴は垂れるわ暴力を振るうわで中々に酷い。美人だが、そういったガサツな点が大きくマイナスされるらしい。



しかしそんな彼女には確かな母性があった。それらを覆い隠せる、誰かを守り支える強さがあった。

ジャンは吸い込まれるように彼女に抱きつき、両手を背中に回す。レイラは拒否することも抵抗することもなく、彼を優しく抱擁した。「人と人とは助けあって生きていくものなのよ。困ったら誰かに助けてもらえば良い。その代わりに、困っている人がいれば助けてあげればいい。君は、人に甘えるのが苦手なだけ。そのせいで自分の中に、ずっと外に出せない悩みだけが詰まっていて、どうしようも無くなっちゃってるのよ」

この感覚は懐かしい――この間の帰省の際にクリスティンに抱きしめられたことを思い出す。目の前の女性の腕の中で他の女性の事を思い出すのは至極失礼に思えたが、今のレイラは女性というよりも、母の感覚に近かった。

全てを託せる。

全身の力を抜ける。

そんな感覚。

気がつけば、瞳から零れた熱い液体が頬を伝っている事に気がついた。

彼女の言葉によって奮い起こされた悩みやあらゆる感情が、落涙という手段によって発散されて行く。

胸の奥が熱くなる。男の腕力で強く抱きしめても尚、彼女は強く抱きしめ返してくれた。

「困っても誰かがいる。君は一人じゃないのよ？」

まだ幼き頃に全てを失った常人に至れぬ成長過程が、今まさにこの瞬間を持って解消されていくような気がした。

「お、おれは……自分が、強いと思ってました」

「うん」

「でも、全然強くなかった……ガキなんです。当たり前なんです。大人になったつもりでも、ただ背伸びしたガキでしかなくて……恥ずかしくて、情けなくて。おれ、自分をどうしたらいいかわかんない

くて、漠然ともってた騎士になるって夢も、なくなっちゃって」

「大変だったわね」

この悩みの解決法は未だ見つからない。だが他者に、彼女に自身の口から初めて告げてみれば、なんだか肩が軽くなったような感覚に陥った。まるでそれがどうでも良くなっていくなような気がして、胸の中にぽっかりと空いた孤独感が、徐々に狭まっていくのを感じた。

「人はそうして成長していくのよ。悩んで、絶望して、それ乗り越えて立ち上がる。君はいま立ち上がろうとしているの。成長していくのはそういうものよ。今度立ち上がれば、君の視界は今よりもっと開けるはず。何も、悩みを解すことだけが立ち上がる方法じゃないってことだけ、覚えておいて」

それが酔いによる行為なのか、あるいは母、姉として、抱擁者としての行いなのかはわからないが――また、今度は軽く頬に口付けをしてみせる。また驚いてレイラを見つめてみれば、彼女はにこやかな笑顔で片目を瞑った。長いまつげが踊った。

「唇はお預けよ。初めてを奪うほど、私は無粋じゃないし」

彼女はそういつて立ち上がると、肩に頭を乗せたまま眠るコレットを静かに抱きあげて簡易寝台へと移動させる。それから戻ると、今度はジャンに手を差し伸べた。

「ほら、おねんねの時間よ。今日は特別に、お姉さんが添い寝をしてあげる」

冗談で言っているのか本気なのか、それがジャンには分からなかったが、否定する理由はない。むしろ頼みたいくらいだった。

ジャンはその手に己の手を重ねて、あまり負担にならぬよう自力で立ち上がる。

気がつけば窓の向こうでは既に薄明るくなりつつあり――真っ赤に充血する目から溢れる涙を拭って、ジャンは手を引かれて休憩室を後にした。

## 新たなる日常

もう十月も残り数日と言う所で、ジャン・ステイルは修道院を無事退院した。嵐の過ぎたような修道院にはもう定期的に来てくれる患者くらいしか居ないために、各々はにわかな思い出話を語るように雑談を交わしていた。

ジャンは憲兵、騎士団の訓練に合流するだとか言って街の外に連れていかれたから、もしかしたらまた暫くして戻ってくるかも知れない――期待と言うわけではないし、彼の怪我を望んでいるわけではないが、明かりが消えてしまったような本来日常的であった静けさが不自然に感じられ始めた折に、訪問者があった。

「わ、私をここで働かせてくださいっ！」

サニー・ベルガモットはそうして、ジャンの知らぬところで決意し、成長し、己の道を歩き始めた。

ジャンがスミスに連れられるままに外に出れば、そこには見慣れた褐色肌に露出度の高い服装のボーアと、袖に爪を備える外套を羽織るラアビの姿があった。加えて傭兵団の隊長たるホークに――現騎士団特攻隊長である鬼族のシイナというそうそうたる顔ぶれに、ジャンは思わずたじろいだ。

「騎士団、及び警ら兵の主な訓練は我々が引き受けます。今日付けで傭兵見習いとなる彼に、皆さんは稽古をつけてください」

――ボーアとラアビはギルドの請負から、ホークは傭兵団の責任者として、そしてシイナは今後の紛争で戦力となる彼の實力を見守るため。そういったでっちあげた理由のもとで、あらゆる実力者が彼を鍛え上げようとしていた。

不安気にスミスをみやれば、彼は終始穏やかな笑顔で、ジャンの肩をぼん、と叩く。

「大丈夫ですよ、怪我は完治していますし」

結局”あれ”から二ヶ月ほどが経過したのだ。筋肉の断裂はもちろん、その後の深い切創なども治らぬはずがない。しかし見当違いな励まし方にジャンは肩を落とさずには居られず、

「——おおい、俺は遅刻か？」

背後からかかる声に振り返れば、そこには頭を丸めた巨漢が居て、それが警ら兵の総隊長である事を思い出すのに、少しだけ時間が必要だった。

そうして、ジャン・スティールの地獄が生ぬるく感じる悪夢の日々は、果たして開始したのである。

「だっ……から、てめえ！」

振り下ろされた剣を頭上で受け止めたと言うのにも関わらず、常軌を逸する暴力がその構えを破壊してジャンを背後に吹き飛ばした。木剣がその半ばから悲鳴を上げるように亀裂をいれて、だというのに目の前の丸坊主の男、エミリオはさらなる追撃をかけようと下方から袈裟に切り上げんとしていた。

「いなせ”って言ってんだろうがッ！」

「くそっ！」

まさに猛威。一撃一撃が嵐が如き暴力であり——対応。言われたとおりに肩肘から緊張の力を抜いて構え、振り上げられる木剣を一度受け止めてから、軌道を逸らすように上方へ流す。だが安心する暇もなく、勢いを腕力でねじ伏せるエミリオの第三撃が間髪おかずに降り注ぐ。そこに時間差<sup>タイムラグ</sup>なんてものは存在せず、まさに刹那の間だけが空けられる。

咆哮を上げる暇もない。

全身の筋力を全力で稼働させ、”本来ならば”既に離れている筈のその地面を蹴り飛ばして……前進。腰の位置で力を溜めるように構えた剣を突き出して、振り下ろされる木剣を握る手元を狙う。

——肉体強化がなされていない身体が故に、行動にはまず思考が

優先される。だからこそ今までしてきた本能的な動きは失われていて、より効率的でより生産的な行動のみが許される。ゆえにその行動は彼にとって行われない筈であるものであり、また肉体強化がなされていれば当然としてジャンはそこに存在していないはずだった。だから、この流れはジャンにとっても初めてであり、故に、

「なまっちよろいわアッ！」

剣を握る指先だけの力で切先を掴まれ、絡みつかれて木剣の動きがとれなくなるなんて常軌を逸した行為は当然として初めての体験であり、行動自体が失敗につながっても仕方が無いことではあった。有意義であり生産的であるのは、己にとって未知である事を知り、身につけること。近接戦闘を主とするジャンならば、得手不得手以前に基本的な行動からその理念を理解し、己に合わせてそれを再構築する力が必要になる。

果たして剣は振り下ろされずに、瞬間的閃きによって素早く後退し始めるジャンの腹部に蹴りが叩きこまれた。

地面に力強く踏み込んで摩擦、ブレーキとして勢いを殺す。そして目の前から再びエミリオが迫ってくるのに対して、背後から強烈な殺気混じりの気配を感じ取った。

無言の襲撃。ジャンは背筋が凍えつく思いで転げるようにしてその場から退避すれば、直後に彼が居た大地に何かが落ちてきて――大地が揺れるほどの衝撃と共に、その地面に拳を突き刺すボーアの姿があった。

今回の訓練はより実戦に近い形を再現するために、バトルロイヤル形式の戦闘となっている。最も、現在では明らかになまでに一對五という不条理極まりなく、また勝利できるはずもない状況では、やはり勝利が優先されるというわけではない。

求められるのは、彼がこの現状でどのように生き残り、どれほどの時間を生き延びることが出来るのか。

環境は障害物のない平原であり、それ故に交戦中以外の者は己が

いつ出るか、そのタイミングを図っている。その為にジャンの休憩時間はなく、緊張と恐怖と、そして随時消耗される体力、加えて瞬間的な判断や論理的な思考がその肉体を蝕んでいた。

さらに、手加減しているせい——三時間もぶつつづけでやれば、いずれは限界が来る。常に全力での機動を行い、さらに隙を見ては攻撃に移るのだから、実力は別にして割合で考えればプロだとしても、それはかなり無茶とも言える訓練だった。

彼がなまじ実力があって経験もある程度備えているアマチュアなればなおさらだ。

それ故に、その対峙の際のさじ加減が上手く出来ずに、本気で食ってかかる者が居るのも、また彼を苦しめる要因の一つだった。

「違う！ もっと細かく動くのよッ！」

振り上げる、という予備動作を失くした拳は鋭い突きの連撃となってジャンに襲いかかる。彼は振り抜かれる瞬間を視覚で理解し、予測し、回避行動へと移す。共に攻撃後の隙を狙い剣を薙ぐが、彼女の高速機動が刹那の攻防を可能としていた。

振り薙いだ剣を、適切な後退で腹部にかするか否かの距離でやりすこす。そうして退いた反動を利用してジャンに飛び込み、即座に応酬。変幻自在たりえる高速の拳がジャンの顔面を穿とうとして、脊髄反射とも言える早さで首を逸らし、紙一重で避けてみせる。が、それを予期した左拳がその位置に飛来した。

ジャンはすかさず剣を振るって牽制するが——刹那、彼女の姿が消え失せた。眼前から、その影が上方へと伸びる残像だけを見せて消失したのだ。

ただでさえ疲弊故にあがる顎は、そのまま顔を上を向かせる。と、そこには太陽を隠す人影があつて……そこから伸びる鋭い蹴りが、ジャンの首を掬い上げるように蹴り飛ばし、負担を相殺するためジャンが攻撃方向へと飛び退けばその身体は勢い良く吹き飛んだ風となる。

木剣を地面に突き刺して、そこに全体重を掛けて吹き飛んだ勢いを止める。

すると未だ前方から襲いかかってくるボアの姿があり、そこに並ぶ紅い影は、ジャンには悪魔に見えて仕方がなかった。

「だから、最低限一対一にしてくれて——」

息も絶え絶えに剣を引き抜く。すると半ばからぼっきりと逝ってしまった木剣は、為す術もなく半分以下の長さになってジャンの手の中に収まり、そして構えられた。道具もこんな姿になってまでも扱われるとはジャン様様と言ったところだろうが、彼の選択は勇気や蛮勇などといったものに類することはなく、飽くまでがむしゃら、やけくそといったそれだった。

腰を落とし、やや前屈姿勢に上肢を崩す。伸ばした右手は快調なまでに神経を鋭敏にし、あのしびれなど忘れ去ったように指先に触れたささくれだつ木剣に触れ、さらにその刃を掴み上げる。

そこから、ぎこちないながらもホークから教わったにわか仕込みの二刀流が開始される。もっとも、間合いは限りなく狭められているために、教わったもののすら活用できぬ可能性さえあるが。

「言ってるだろうがっ！」

眼前から左右に別れた二つの影が、弧を描くような遠回りをしてから、ジャンの左右へと真っ直ぐ肉薄した。

振り下ろされる剣に、突き出される拳。挟み撃ちをされるジャンは、視界の端で捉えたその行動に対して忠実なまでの対応した。

正直な所退いて、彼女らが自滅するのを促すこともできたが、もしそれを狙っていたのだとしたら。そう考えられたし、何よりも出来ることをやらずに退くという選択をするのは、酷く癪に触ったのだ。

故に——拳が、あるいは剣が刃に触れて、凄まじい衝撃が手首ごと弾き飛ばそうとする。ジャンはすかさず構えを解いて力の奔流に逆らわず、流れのままに手首を捻り足を捌いて立ちまわる。すると彼女らは、滑らかなまでにいなされ、彼の背後へと軌道を逸された。

両手に鈍い痺れ。さすがに近接戦闘特化の二名による直接打撃を受けて無事で済むはずがないが――手加減をしているおかげであるからこそ、その程度で済んでいた。

ジャンは即座に前方へと転がるようにして避ければ、頭上に脚、あるいは剣が飛び出る。

立ち直り、腰を落とした体勢で振り返れば――その場からすぐさま飛び退く二人の姿。そしてその前方から仲良く走り寄ってくる、二つの姿。

両手に構えた拳銃が火を吹き――立ち上がらんとしていた足元の地面が爆ぜたように土を巻き上げた。

地団駄を踏むようにジャンは慌てて飛来する鉛の弾を避けようとして、それを許さぬようにいよいよ目の前から迫った一つの影が腕をふるう。そうすれば、対処せんと立ち直るより早く胸元に一閃が走り、その外套の袖から滑り出た三本の鉤爪が器用に衣服だけを切り裂いた。

さらに滑らかな足取りで彼女は背を向け、そして気がつけば向き直る最中へと動きは代わり……振り向きざまの裏拳が、ジャンの側頭部はもちろんその顔面へと直撃した。

幻惑とさえ思える踊るような動き。されど、それに魅了される暇もない殴打がジャンの足取りを臍気なものへと変えて――。

そして不意に、足元が掬われたかと思えば、世界が反転。身体が地面にたたきつけられ、何がなんだか理解できぬままに衝撃の渦に飲み込まれる。

「第一回バトルロイヤル第一脱落者――ジャン・スティーレル。今回はこんなモンか」

倒れこんだジャンの額には、冷たい無機質な感触が伝わった。それが拳銃の銃口だと理解するよりも早く、ホークの無情なまでの台詞はごく単調に、訓練の終了を告げていた。

「正直な所、思ったより中々やるってトコ。そりゃ私とか、第一騎



士団レベルじゃないけど——主戦力程度の力はあるんじゃないの？」  
シイナは藍色に染まりはじめた空を眺めながら、両手を頭の後ろに回してそう評価する。

続けて、ラアビも喜色混じりにジャンの肩を抱き、口の端から零れた酒を拭いながら口にした。

「夏休みよりもずっと強くなってるわよ」

「ああ、確かに魔術ナシだから全然かと思っただけ……自己評価がかなり低めなんじゃないか？　ねえ、ジャン？」

続けて、その横についたボーアが訊く。そんな質問に、どう答えれば良いのかと詰まっていると、シイナと共に先を行くエミリオは振り向きさえせずに頷いた。

「それに、アドバイスすればすぐに自分のものにする。まったく、こんな優秀な部下が俺ンとにもいたらなあ」

「オイオイてめェら、このガキあんま褒めてっと、つけあがって調子こくぞ？　お前らは甘々で、アメの割合が多すぎんだよ」

「じゃあディライラ、あんたはどうだったのよ？」

ラアビが流し見るように、しんがりを努めるホークへと問う。

彼は得意げに鼻を鳴らして、外套を翻して腕を組んだ。

「頭だけで考えるんじゃない。全身で思考するんだ。知識を細胞に引き落として、反射的に適切な行動がとれるようにする。コレだろ」

「……あんたって、そういうの好きだよなあ？」

妙なまでに理屈や論理を引き出そうとするホークに、思わずジャンは呆れたように声を上げた。

「つたりめェだろが。本能で戦う奴なんざ獣か馬鹿のどっちかだ。思考を放棄して戦うことなら誰でも出来る。だが考えたから、自分で判断したからこそオレたちやこうやって強さを認められてんのさ。どれほど身体能力が優れていようと、関係ねェの。問題はココだよ、ココ」

彼は機嫌がよさそうに指先で頭をつついてから、  
「オレたち傭兵は筋肉バカだって偏見を持たれがちだけどよ、馬鹿

じゃこの家業は務まらねエ。擁護するってわけじゃねエが、少なくとも鍛えるにあたっててめエに馬鹿にされんのはだけはムカつくから、言っておくぜ」

また機嫌がよさそうに微笑んだ。

それを受けて影響されたのか、シイナは横目にジャンを見ながらそれに続く。

「ま、でもホークの言葉は正しいよ。特攻隊長だって、一点突破の力さえあればいいってわけじゃないし。学校では二年で使い物にしようとしているから、今君が基本的なことを知らなくても仕方が無いことだが――これから君が覚えることは、している事と出来る事を理解して、出来る事を身につける。出来ることはそれで拡大するのよ。んで、それが君の潜在能力……という大げさだけど、君がこれから学び得るはずだったモノを短期間で叩きこむって事」

なんでもないように彼女は言うが、最長で約二ヶ月の期間がある。この時間で、彼が一年半の刻ときを利用して身につけようとしていることを、覚えさせるということだ。

ジャンはそれがあまりにも途方も無い事すぎて衝撃はおろか、疲弊した頭は既にそれを話半分で聴き始めていた。が、決して聞き流すわけではなく、言葉はなぜだか、胸の奥に突き刺さったように、鼓膜に張り付いたように残り、高揚感を得た。

ただ一人の青年のために、多くの者が手を貸してくれる。

今までではありえなかった事だ。そしてどこの馬の骨とも知れぬ、この青年に騎士団はもちろん、傭兵団の隊長さえも力を貸していた。まったくわけがわからないことだが――ここまでされて、期待に応えぬ不孝者では無かった。

完全に期待に応えられるわけではないが、彼らがこれほどまで力を認めてくれているならば、今はそれを全力で伸ばすだけだ。そう、今はただ前だけを向いていれば良い。将来なんてあさっての方向は今は関係ないのだ。

「おれ、がんばりますよ」

そう言えば、後ろから力いっぱい尻を蹴り上げられた。

「つたりめエだろうがよ！」

「そうだそうだが、俺も仕事があるから毎日来れるわけじゃあ無いが、極力手伝ってやる。だから憲兵をあんま消耗させないくらい、強くなってくれよな！」

「ま、ジャンナりの速さでね」

「困ったときはお互い様。今度はあたしの番ってこと」

「――そう、強くなって、”あの娘”に追いつかなくちゃだしね」

「……あの娘？」

激励に胸を打たれて思わず目頭を熱くしていた所に、シイナのそんな台詞が疑問を浮上させる。

あの娘って誰だ。

サニーか？ いや、サニー自体が既に弓の腕がかなり上達しているからそれはないだろう。ならば他には……いかん、わからん。

彼が首を捻って、シイナに応えを求めるが、彼女は片目を瞑って首を振る。

「ひみつ。というか、言ったら彼女に殺されるから」

空を覆っていた藍色は西の空へと追い込まれていて、空はすっかり濃厚な紺色に飲み込まれていた。澄んだ空には煌びやかな星が散らされていて、見つめていけば、己がどれほど矮小な存在なのかを徹底的に思い知らされてしまう。

そしてごく自然的に旅愁に駆られるのだが、そんな情緒的な反応が気に入らなかったのか、口に強引なまでにねじ込まれたウィスキーボトルが苦手なウォッカの、あの独特な香味が鼻から抜けて――共に、鉄の味が口の中に広がった。無理やり押し込まれたせいで口の中を切ってしまったのだ。

「っだあ！ ラアビさん、やめてください！」

手を払って、肩にかける腕をどける。彼女はしかめっ面でジャンを睨んでから、無言のまま再びボトルを口に押し込んだ。

「うっさいのよ！ 仕事の後は酒！ これ鉄則よ！ これでジャン

の訓練に付き合うだけで日給金貨一枚だし、言うことないわね!」

「はははッ、話の分かる獣人ついでだな。その酒、オレも付き合うぜ」

「ちょッ、ならあたしも!」

かくして街についた三名は嫌がるジャンを巻き込んで冒険者ギルドへと足を向けて――。

それを見守るシイナ、エミリオは脱力したように肩を落として息を吐いた。

「いいわね、暇な人たちって」

「まったくだ」

彼らはこれから残された事務仕事を片付けなくてはならない。部下ある程度任せた部分はあるのだが、最終的な確認をしなければならぬ立場である両者は、どうあがいてもその仕事を避けることは出来なかった。

また、気楽な四名が過ぎ去った路地へと再び視線を送ってから、また嘆息。

考えても仕方ないさ、とエミリオに肩を叩かれて、両者はいい加減に夜の帳が落とされた街路を静かに歩んでいった。

## 休日謳歌　く束の間の休息く

休みのない訓練漬けの日々。毎日のように持ち帰っていた過度の疲労は気がつけばある程度緩和されるようになっていたのだが、それを告げるにつき、その瞬間から訓練内容がさらに酷なものになったのはさすがのジャンも閉口した。あの、嬉々として告げた直後に凍えた己の表情を、彼自身忘れることはないだろう。

そんな新たな日々の中、公認で学校にさえ通わなくなったジャンに一日の休みができた。十一月半ばの事である。

「私たちは仕事で、ホークも作戦会議に参加しなくちゃならない。ラアビとボークだけじゃ」ただの訓練”になるから」

というのがシイナから伝えられた理由だった。

そういうわけで、今日ばかりはゆっくりと床に就いたのだが――意識が覚醒した頃、時計の針は午前五時丁度、つまり訓練が予定通りに行われていれば目をさますべき時刻に目を覚ましたのである。

そんな事もあってか、ジャンは久しぶりに早朝のランニングに出かけ、己の快調さを――そして怪我也痺れも無い右腕に巻かれている包帯の具合を確認して、その成長を再認識した。

やはりこの国に來た時よりも強くなっている。全力疾走したのにも関わらず息一つ切れるどころか、自身が本当に走ったのかと思われるほど身体が温まらない。そして筋肉も増量したせいかな、この国に來る前に着ていた服がいくらか窮屈になっていようだった。

やや肌寒くなってきた空気を感じながら、ジャンは噴水のへりに腰を落とす。

「でも、まだまだか」

剣術は要らない――シイナにそう言われた。ココに来て今更下手に固定概念を植えつけるよりも、彼なりの戦い方で剣さばきで戦い続けたほうが良い。だが覚えることは未だ山ほどあって、その中で

も剣の扱いに関するものは約半分を占めている。

いずれはあの五人とそれぞれ一対一で、混じりっ気のない全力でのぶつかり合いを予定しているという。またそれも勝利が目的というわけではなく、最終確認というもののだが……無論、最初から勝利を諦めて戦うわけもない。

「全然、むしろ丁度いいくらいさ」

身体がより冷え込んできそうな所で、いよいよ家に帰ろうと腰を持ち上げようとした所で、仕事場へと向かうまばらな人影の中に、大手を振って歩み寄ってくる甲冑姿がひとつあった。

警ら兵の一般装備らしく、腰にはサーベルを携え、小脇に兜を抱える男の姿。おそらくこれから傭兵団主導の訓練に向かうのか、あるいは歩哨組かのどちらかだろう。

その背後にある姿はさらに屈強な、禿頭が特徴的な男。今ではもう見慣れたエミリオだ。

「少年、朝っぱらから精が出るな」

「目が覚めちゃったんで。そちらは、これから訓練ですか？」

立ち上がって目線を合わせると、男は困ったように笑って肩をすくめた。

「訓練から逃げようとしたら捕まっちゃってな」

「……大変そうですね」

これまで平和だった国の憲兵が、突然屈指の実力を持つ傭兵団に、これまでとは大きく異なる厳しい訓練を強いられれば確かに逃げたくもなる。職がなかったり、特に好きで憲兵になったわけでもない若者なら尚更だ。

少しばかり気持ちがわかったために叱責する気にもなれず、また年上そうだからそうするつもりも毛頭なかったのだが――振り上げた拳を、彼の頭に落としたエミリオは構わず怒鳴りちらしていた。

「どわっ！」

「少しは反省しろ！ お前はな……スティールの垢を煎じて飲ませてやりてえ位だ！」

「お、俺だって頑張ってるんすよ隊長！ 才能がないんですよ、才能が！ 天才なんかと一緒にしないでください」

「天才？ 世辞なんぞ、通用すると思ってるのか？」

目の前でさらに怒気を増して掴みかかるエミリオに、男はぶんぶんと首を振りながら否定する。そこを全力で否定するのもどうかと思ったが、ジャンはどうにも蚊帳の外に追いやられたような空気を感じて、静かに噴水のヘリに座り込んだ。

が、警ら兵は力強くジャンを指さす。

エミリオは促されるように彼を見た。

「ステイルのことが」

そうして禿頭は僅かにゆれると、困ったように彼を見てから――言わんとしていることを察して、ジャンは頷いた。エミリオは心底すまなそうな顔をしてから男を睨みつけると、やや声を抑えて低く唸るように告げた。

「こいつはなあ……学習能力は高いが、別に天才ってわけじゃないぞ。そりゃある程度の才能<sup>センス</sup>はあるだろうが、少しは見所がある程度だ。お前とそんな変わりやせん」

「それなのに英才教育やってんすか？ 別に嫉妬だとか、ムカつくだとか言うわけじゃありませんし、俺たちの為に頑張ってるっつーし、歳も近いから応援だっと思ってますが……そんな事まで隠す意味は――」

「――隠しちゃいねえつつうの」

エミリオは食い気味に遮り、やれやれと首を振った。

ついでに溜息を吐いた。

「こいつは誰よりも努力してんだよ。普通なら血反吐吐いて泣きながら勘弁してくれって請うくらいの訓練でも平気なツラ装って、圧倒的な実力者を相手にしてもビビらねえで立ち向かって――そもそも天才なら、ここまでやる必要はない。シイナを見てみる、あんだけ強くて正直ステイルほど訓練を積んでるわけじゃねえ。ただ試験<sup>テスト</sup>で圧倒的な結果を見せつけたただけだ。あれこそ天才ってんだよ」

真っ向から褒められているようで気恥ずかしくなって、ジャンはヘリに手を置いて軽く上肢を反らした。

周囲が言うほど才能は無い——と言うか、周囲はそれほど才能について言及しているわけではないし、そもそもそういった能力を持っていると認めているならばこれほどまで徹底的に訓練を組もうとしないだろう。つまり、あの屈指のメンバーが揃いも揃って訓練に打ち込もうとしている事実が、彼が天才ではない証明でもあった。

そもそも魔法というある意味での才能が無いのだから、せめてこういった面での才能もあっても良いものだとは思っていたのだが、どうやら無い。神はサニーに色々と二物以上を与えている代わりに、ジャンには何も与えないことでバランスをとっているらしい。なんと憎らしきことか。

魔術に至っては触れさえしない。

努力をものを言わせているだけまだマシであろうが——考えてみればなんだか釈然としないながらも、これがいつも通りなのだと自分を無理に納得させた。

——男も、その言葉と共に”英才教育”を、その本質を理解したのだろう。

気まずいようにうつむいてから、まるで子供の喧嘩の終焉のように、蚊の鳴くような声で口にした。

「……悪かった、少年」

「気にしないでください。お陰で、自分というものを再認識できたみたいだし」

そういった些細なやりとりの後、彼らはその場を辞して街の外、訓練場へと向かっていった。

ジャンはそれを見送り、暫くその余韻に浸るように噴水を眺めてから帰路へとつくのであった。

——まるで戦争の”噂”が嘘のように、外の訓練を除けば平和そのものだった。



「なんか、最近のジャンつまんない」

タマはあぐらをかくジャンの膝で寝転がりながらそう言った。

ボーアは相変わらずの、毛皮のベストにレザーのショートパンツ姿で勝手に寝台に寝転がり、ラァビは外套を勝手にクローゼットに引っ掛けて、寝台に腰をかけている。まるで手馴れた生活感溢れる行動は、タマの話によれば一ヶ月近くなる快適な溜まり場として機能していたお陰だという。

現在、ボーアはラァビの部屋でお世話になっているらしい。そういった事もあって冒険者ギルドに雇用登録を強制的にさせられて、今ではジャンの代わりに一時的な相棒として仕事を共にしているという話だったが、特に最近はジャンの訓練で手一杯らしく、またそれで十分な報酬を受け取っているという事で、ギルドには酒を呑みに行くという、酒場代わりにしか利用していなかった。

「仕方ないだろ。おれだっていつまでもへらへら出来るわけじゃないんだし」

首を指先でくすぐり、ごろごろと喉を鳴らすタマの頭を撫で回す。  
しかしタマの不平は終わらなかった。

「訓練訓練って、前だってしてたじゃん。ダメなの？」

「足りないんだよ。しかも、今までは独学だったけど今じゃお偉いさんが直接指導してくれるんだ。比べ物になりやしない」

「みんな寂しがってるのよ？ 学校だって行ってないし……」

「んな事言っちゃって、おれがいたっていなくなっちゃって何が変わるわけでもなし。居ないなら居ないで相応に対処するだけだろ」

「ジャン冷たい。冷たい人間になったわね。冷酷よ」  
フリザード

「人の事まで気にしてる余裕がねーんだよ。おれだって、完璧ってわけじゃないんだし」

気分的にはタバコを吹かしたかったが、どうにもあれは趣味じゃない。だからそういった所作をして大きく息を吐いてみせた。

「ま、一緒の時間を過ごせるだけ良かったと考えてあげなさいよ。  
休みの日に女の愚痴聞かされちゃ、参っちゃうわよ？」

ラアビはそんな光景を微笑んで眺めながら、場を沈めようと参戦する。ボーアは適当な蔵書を手にして読みふけていた。

「むう……」

「これから起こる大事さえ終われば、また元に戻るわよ。ねえ、ジヤン？」

「そうそう。だから、な？」

肉球を両手でぷにぷにとマッサージしてやりながら説得するように言う。彼女はしばし唸った後、それまで言いたかった文句を飲み込んだように渋々頷いた。

「でもさあ、ヤな予感がするのよねー」

「なら安心だ」

不安気に目を瞑る彼女の肉球を揉みながらジヤンは微笑んだ。

「どうして？」と首を傾げるネコへと、頷く。

「タマの勘ほどあてにならないもんはないからにやうわっ!？」

迸る一閃は、目にも留まらぬ速さでジヤンの膝下から飛び上がったと思うと、鼻筋に三本の鋭い爪痕を刻んでいた。薄皮が引き裂かれ、そこから鮮血が浮き上がるように漏れ始める。共に燃えるような痛みが、ジヤンのスマートな語尾を間抜けなものへと変えていた。思わず顔を抑えて悶えるジヤンに、タマはわざわざ人型へと変身して、立ち上がり、指をさして高笑いをした。

「にゃははは！ たまの休みだからって、エッラそうにしてるからよ！」

「た、タマあ！ おしおきだ！」

溢れんばかりの涙を浮かべて、ジヤンは立ち上がりざまに飛びついた。不意を突かれたタマは避ける間もなく襲い掛かれ、バランスを崩して倒れてしまう。ジヤンはそれに覆いかぶさるようにして――。

手の中に、独特な柔らかさと心地よさを持つ感触が、確かに伝わった。

顔は鼻先が触れ合う程の近さであり、タマはその現状に、眼を見

開いて丸くする。そしてこの状況を理解できぬように硬直していた。ジャンはここぞとばかりに指先、掌を動かして存分に揉みまくる。気分は既にマッサージ師だ。追加料金でどんなことでもしてやれる自信がある。

「ん、ちょ、ジャン……！ や、やめ——」

「おしおきだつてんだろ？ おれも最近、全然タマと構ってやれなくて悪かったと思ってるし、こんな時にこんな事で悪いとは思うけどさ」

繊細な指使いは、武器職人よりも細やかで絶妙だ。そのたびにタマは息を殺し、紅潮してしまう顔を一生懸命に背ける。だというのに股下に置いた膝を両足で挟み、尻尾でばたばたと床を叩く。

「ははっ、身体は正直ってわけか」

「ば、ばか……そんなんじゃあ……ッ！」

「そうか、ここが良いのか？」

輪郭にそって流していた指で、構わず力いっぱい握りしめてやる。途端にその形は歪み、痛々しいまどとなるのだが、彼女は既に人間であれば耳がある頬の先まで顔を赤くしていた。頭の上にある耳をピンと逆立てるようにして、また尾も、四肢の毛が空気を含むように逆立ってもふもふとしたさわり心地の良さが倍増した。

「乱暴にされるのが好きなんだ？ あんだけおれに偉そうにしてたのによ」

「ち、ちがう……これはっ！ んん！」

そつと顔を近づける。

琥珀の瞳に映る自分の顔が分かるほどの距離で、じっと見つめた。タマはそれまで顔を背けていたというのに、近づけば見返し、焦点を合わせる。彼女の眼には既にジャンしか映っておらず——。

「時と場所を考えろ」

спан、とジャンは己の蔵書で頭を叩かれた。

タマから離れて顔を上げれば、どこことなく頬を上気させたような顔のボーアが立っていた。

「好きにするのはいいけど、せめて二人っきりの時にして欲しいものね」

ラァビが続く。

ジャンは抗議した。

「別にイヤラシイこととしてたわけじゃないんだし」

未だ手の中に残る肉球の感触に思いを馳せながら言った。

「揉んでただけです」

「言葉を選べってのよ」

今度は本の背表紙を垂直に振り下ろす。その威力たるや、鈍器の如し。

眼窩から目玉がこぼれ落ちないように目を抑えて甘んじれば、衝撃が頭蓋骨を透過して直接脳を殴打したような力が襲いかかった。

思わずめまいを覚えるが、しつかりと踏ん張って立ち直る。ポーアは再び本を振り上げた状態で待機していた。

「こんな所で死ぬのはさすがに勘弁ですよ？」

頭を両手で抑えながら、やや引け腰になる。次の攻撃は避けてみせる、という態度の現れだったが、ポーアは興味が失せたように本を下ろし、寝台に飛び込んだ。

「……ジャンの馬鹿が」

そっと呟くポーアの言葉。彼女はおそらく誰にも聞こえぬような声で漏らしたのだろうが、獣人二人は耳が良い。さらにジャンも、耳と目がいいのは少し自慢なもので、聞こえては居た。反応に困ってスルーするのは当然とも言えたが。

タマに助けを求めようと振り返れば、彼女は意外にも人型のままで、自失呆然としていた。片手で胸を押さえるように、片手はみだらに放り出されていて、身体は無防備な体勢のまま。豊かなバストは、それでもその双丘を保っていた。

再びラァビに視線を戻せば、彼女は寝台に腰をかけて居る。下半身のウサギたる部分が妙に愛らしく感じられた。

「愛されてるわね」

「……ありがたい事です」

ジャンは慈しむような視線を受けながら、一仕事終えたように一息を吐いて床に腰を落とした。

せつかくの休みだというのに、休む暇もない。

だが、ヘンに気を使わないお陰で、いつもの、それまであった日常を再現してくれるおかげで心は随分と癒されていた。

——戦争なんて、デマだったら良いのに。

この平穏を噛み締めながら目を瞑れば、自然にそう願っている自分が居た。

その戦争に向けて訓練をしている。だが誰だって、その力が役に立たない日ばかりであることを祈っているはずだ。

ならばせめて、そんな彼らが一日でも長く生きながらえるように頑張らなければならない。

その為には訓練だが——休むことも、また訓練だ。

「でも、ジャンはいい加減いろいろな人に色目を……」

ラアビが何かを話しかけてくるが、眼を開けていても意識はまどろみ、声が届かない。

重力に逆らえずに眼を瞑れば、彼に対する全てが遮断されて——。

——ラアビはそんな彼に一つため息を漏らして、布団の下に敷いてある毛布を引きぬいて、彼に掛けてやってから、静かにその場を後にした。

## 休日謳歌　く束の間の休息く　？

「魔術師団で一掃した後にくさび型の陣形で突撃、憲兵の第一から五、六から十までが左右に別れて突撃……要約すればこういった感じか？」

横柄に背もたれにもたれかかり、腕を組んでディライラ・ホークはそう告げる。

狭い会議室の中にはいくらか葉巻の匂いが程よく充満していたが、その場にいた誰もがそれを嫌っている様子はなく、またホークの前に差し出された灰皿には彼が口を付け灰と化した葉巻が一本横たわっていた。

隣のスミス・アーティザンは先日購入した色のついた丸メガネの具合を確かめるように中指で押上げ、その丁度良さに微笑みつつ頷く。

対面の大臣は傍らの副大臣に、そしてエミリオ、次いでシイナに視線を巡らして反応を促せば、それぞれが一樣に首を縦に振る。

ホークは満足気に、にかつと笑い、紅茶が注がれたカップを手に取り一口含んだ。

「問題はソコだ。話によれば本来魔術師団の役割をするはずだった”異種族”が倒されたんだってな。しかも生息させた筈の森とは違う場所だ」

「その通りだ。ジャン・スティーラの証言から推測するに、知能を持つが故にこのままでは殲滅されると踏んで大移動したのだろう」

「ま、んなことあどオでもいいんだけど……問題は魔術師団だっつつてんだろ？」

アレスハイム王国立第六騎士団——通称魔術師団は、その名の通り魔術ないし魔法を主戦力として戦闘を行う部隊であり、後方支援を主とするのはもちろん、その圧倒的な火力故に前衛に躍り出て戦場を乱し殲滅する程度の実力は携えていた。

魔術師団団長はその中でも魔術師として極めて高い実力を持ちあわせており、またそれを務めるに当たる最低限の条件は、戦略級魔術を所有しているということだった。

「その団長さんは、何が使えるんだ？」

ストーム・ルイン  
「破滅の嵐のみ、となっている」

「ああ……なら完全詠唱でなんとかなるか。んで？ 訓練部隊への穴も開けろってんだろ？」

ホークの呆れたような声色に、だが大臣は嬉々として頷いた。

「これより軍力を増強するには学習が必要となる。今でこそ根本的な身体能力の違いで異人種が頭となっているが、いずれはヒトと異人種とがバランス良く背中を合わせられるようになれば、と考えている。それこそが共存だ、とも」

ああそうかい、なんてホークは投げやりな返事をして大きくのけぞった。

これで作戦会議なんてものは終了したも同然だ。あとはあらゆる場面に対応できるように訓練しつつ、ブルートフォース・タック”総当り攻撃作戦”と名称する事となるその訓練を主として行わなければならない。

エルフェーヌからの情報によれば、ヤギユウ侵攻は十二月末に予定されているという。残り時間は一ヶ月半程度しか無く――傭兵団のみでもどこまで戦えるのか、といささか不安になった。

死ぬのだけは勘弁だ。

こんな腑抜け共の先駆けとなって。

いざとなれば逃げ出すのもやぶさかではないが――あそこまで世話してやったジャンが気がかりだ。どうせなら連れていきたい所だが……。

複雑な心境に陥るホークをよそに、一つの要因について先程から気になっていたスミスは大臣に目配せをし、発言の許可を得る。

おほん、とわざとらしく咳払いをして、彼は口を開いた。

「現時点でのヤギユウの軍事力に対抗すべく策はここまでにして、ですな――ヤギユウの背後関係を独自の機関を用いて調べさせまし

た」

なんでもないようにそう告げるスミスに、意外そうな顔をしたのは大臣だった。

彼が訊くよりも早くスミスは続ける。

「我々はこの仕事に誇りを持っています。より確実に仕事を為すために、その下ごしらえはごく当然のものとして動かしてもらいたが……」

「いや、構わない。正直な所、そこまでしてくれるとは思わなくてな。貴殿には、どれほど感謝してもしきれぬだろう」

「相応の報酬さえ頂ければ」

「ふ、金の亡者め——それで、報告を聞かせてくれ」

新たな葉巻をポケットから出す。副大臣が差し出したオイルライターからの火で煙をくゆらせるのを見ながら、スミスは一つ息を置いて、飽くまで淡々と告げた。

藍色に没する空を見上げながら、ジャンは散歩へと洒落込んでいた。

うたた寝を終えた後、気がつけばボーアとラアビは部屋から消えていて、居るのは未だ人型のまま膝の上に頭を乗せて眠っているタマのみとなっていた。

サニーはサニーで、休日だというのに朝から家にはおらず、テポンやトロスもテストが近いからか忙しそうにしている。それを邪魔しないようそつと家を出たのは良いものの行く宛など無く——気がつけば、最近はめっきりご無沙汰となった本屋の前にたどり着いていた。

ぽっかりと間抜けに開いた入り口から覗く内装は、ある程度片付いて小綺麗な様子だ。が、変わらぬ薄暗さが相も変わらぬ不気味さを醸し出していた。

「ん……なんだ、少年か。どうしたこんな時間に」



本の整理をしていたらしい男は、その入り口付近を横切ってから、後退してそこに立ち尽くすジャンを凝視し、記憶の中から彼のそれを引きずりだした。

「そうしてなんでもないような顔でそう訊きながらも、”中佐殿”は中へと促す。」

——この本屋の店主、通称中佐の本名はわからないし、訊いても彼が教えてくれることはなかった。だから中佐で通っているし、他の常連客も好き好きに適当な名前で呼んでいるらしい。

カウンターの向こう側に腰かけ、ジャンはそこに寄りかかるようにして立つ。その上に叩きつけるように置かれた本はいずれも装丁やページがボロボロになってしまっているものばかりで、どうやら売り物にならないモノを回収していたらしいことが伺えた。

「ヒマなもので」

「訓練はないのか」

「良く知ってますね」

「あまり私を舐めるなよ。本国ではごく優秀なエージェントとして活躍していたんだ」

中佐は鼻を鳴らす。だが愛称からして明らかまでに軍人だというのに、エージェントとはどういうことだろうか。

そういった疑問が顔に出ていたのか、彼は苦笑したように頬を歪めた。

「元々退役軍人でね。若くして中佐の階級を得た後はそういった機関に引きぬかれたのだよ。これも才能のお陰としか言い用がない。」

コネもあったがね——そして、仕事の基本は情報収集。うわさ話から政治の裏話まで、全ての情報は揃っている」

「……ここでの商いとしているわけですね？」

「さあな。何を言っているか、私にはわからないが……少年、君も必要があったら訊いてみるのもいいかもしれないな。合言葉は”ハツキソウ”だ」

彼はそういつて片目を瞑ってみせる。

そういった中佐の姿はまだ若い、二十代後半のようにも見えたし、四十代前半の紳士然とした男のようにも見えた。割合に個性的な風貌だというのに、不思議や謎が多い人物だ。ウィルソン・ウェイバーと同じガウル帝国の出だというのに、彼はまったく掴みどころがない。

「ハツユキソウ？」

「ああ、ディアナ大陸北方の雪山の頂上付近に生息すると言われている花だ。花言葉が『好奇心』と言う」

「なるほど」

「紅茶はいかがか？」

話題もなく、会話も続く兆しが見えぬ。

そう判断したのはジャンだけではなかったらしく、中佐は話が途切れる前にそう提案した。

「いや、そんなに居座るつもりじゃ……」

「構わんのだよ、この時間帯に客なんぞ来んし、そもそも本屋は飽くまで趣味で営んでいるだけだし」

「ああ……じゃ、お願いします」

だというのに、意図せず長居する羽目となった。

苦味と酸っぱさの向こう側に、舌にこびりつくまた別の苦味を覚えさせるコーヒーを飲み下した後に、ジャンはあからさまに不味そうな顔をしてみせた。

「どうした、不景気な顔をして」

瓶入った砂糖を匙で加減などせず己の行く道が如くカップに入れる、というよりは最早こぼすに等しい所業を繰り返していれば、いずれは砂糖が下の方でどろどろに溶け残ることになる。彼はそれをいかにも美味そうに、コーヒーというよりは既に砂糖水というようになった生ぬるい濁り汁を飲み干して彼は言った。

アレほどになれば根本的な味などは関係ないのだろう。

ジャンは一つ、肩を落とすように嘆息した。

「いえ」

カウンターの前に置かれた椅子に腰をかけたジャンは、家を出る前に遅くなると声を掛けておいて良かったと思った。

そうして、そういえば最近はみんなで顔をあわせて食事をしていないことを思い出す。殆ど国の主導とも言える訓練は回避することなど出来ず、またするつもりもなかったのだが――それ故に学校に行くことはなくなり、生活する時間帯が変化し、すれ違いが殆どとなる。

テポンらより早く起きて、彼女らより遅く帰り風呂に入るなり、床に伏してしまうのだ。食事は訓練帰りに否応無しで付き合わされるために、腹具合の問題はない。

ただでさえ居候なのに酷く申し訳ない話だったが、「ある意味で国の仕事なんだから」と皆は気にするなと言ってくれた。

たまに学校が懐かしくなるが、時間さえあれば友人らとは会えるのだ。特にラックは、訓練を興味深げに見学しに来ていることを知っているし、その影にクリム――もといリサー――が居るのも彼は知っていた。

またテポンやトロス、サニー経由で聞く話によればここ最近、ルーク・アルファが躍起になって己を追い込んでいるという話だ。一説によれば、ホークにボロ負けしたことがきっかけだという。

「酒のほうが良かったか。まったく、ませた少年よ」

「いや、そういう話じゃ無いんですが……別にいいです」

「そうか。何か気になる事があれば遠慮せず言ってくれたまえよ？」  
「善処します」

ついにはカップの底、というよりは半分近くまで残っている砂糖を匙で掬って舐め始める中佐に、病気になるってくれるなよ、という憐憫の視線を浴びせながら不味いコーヒーを呷る。どうせなら出がらしのほうはまだマシだったことだろう。

中佐はそんな間抜けな所作の中で、ふとまるで己の天敵を発見した小動物のように顔を天井に上げた。そして無造作にカウンターに

手を突っ込んでから滑るように背後の書棚にぶつかる勢いで後退すれば、実際に衝突し、その衝撃によって書棚の上に積まれた様々な書籍が落ちてきてカウンターに直撃し、その震動からカップが揺れて転げて落ちて、その身の崩壊と共に見る堪えぬ茶色いどろどろとした砂糖の塊が床にぶちまけられるのを、カップが割れる鋭い破壊音と共に見送った。

何事ぞ、とコーヒーを飲み干しながら本棚によって造られる通路に身を隠せば、丁度ジャンが先ほどまで居た椅子の頭上——その天井に、魔方阵が展開した。

朱の瞬き。

読めぬ魔法文字<sup>ルーン</sup>がその輪郭を赤く染める中にとろ狭しと並び、また理解不能な図形が無造作に配置されているのを見る。それは見たこともない魔方阵であり、また魔方阵が術者の居ない所で発現することを彼は知らなかったから、その現象は酷く難解で畏怖すべきものであった。

が、その中心点が眩く真っ白に輝き始めて——。

「きゃああ——あああッ！」

そんな甲高い亀裂音じみた、空気を切り裂くような女性の悲鳴と共に、何かが床に落ちたような凄まじい衝撃が小さな本屋に襲いかかった。

本棚が鈍く揺れ、カウンターに飛び上がった中佐は”小銃”を構えてその銃口を床に向ける。

ジャンは何があったか分からぬなりに本棚に見を隠していたが、やがて聞こえる、

「いたたた……」

「まったく、無茶をしすぎです！」

なんていう内輪もめの声から、なんだか危険は無いように思えたので、そつと顔を覗かせた。

天井から——正確には魔方阵から落ちてきたのは、一人の少女と

一人の男だった。

少女の方はまるで人形のような美貌を持つものの、やはり少女然とした女の子だ。フリフリの黒いドレスを着て、黒と白のストライプ調の長いソックスを履く格好。前髪は切りそろえられて、もみあげは結われて三つ編みに。長いその黄金の髪は大きな房となって、同様に三つ編みにされていた。

きりりとした細い眉に、勝気な性格を表すようなやや釣り上がりがちの碧眼。

男のほうは黒の背広姿であり、首元には蝶ネクタイが飾られている。うんざりとしたような顔つきには苦勞が伺え、やや老けたような顔ではあったがまだ若いのだろう。

「でもここに居たのを、見たのですもの。わざわざ離れた位置に降り立って移動するのも面倒じゃなくて？」

「少しは動いてください。だから太るんですよ」

「ふ……ッ！」

「しかし——この状況は芳しくないですねえ」

男は立ち上がるなり両手を頭の後ろに回して、膝立ちになった。

彼女も状況を察して慌てたように辺りを見回してから、何も言わぬまま銃を突きつける中佐に無力と無害を示す。

「……ッたくもう！ あの男はどこなのですか？！」

「俺に聞かんでください」

銃の恐ろしさを知る両者。加えてその近代的な服装から、ディアナ大陸の人間であることは明白だった。

ならばあの魔方陣は転移魔術のものだろう。

最も、大陸間ほどの遠距離移動が可能であるなんて事は聞いたこともないのだが。

「——内輪揉めはもう済んだかな？」

中佐の言葉に、少女は長い睫毛を踊らせるように目をぱちくりさせながら、小さく頷いた。

「およそ常識的な人で良かったですわね？」

「“お嬢様”を基準にすればおおよそ殆どの人間が常識的にはなりませんかね」

「あ、あんたって人は――」

「――悪いが後にしてくれないか」

静かな怒気を孕んだ中佐の言葉に、お嬢様と呼ばれた少女は怯えたように頭を小刻みに上下させる。

中佐は頷き、口を開いた。

「貴様らは何者だ。何を目的にしどこから来た。装備を放棄し、所属、階級を述べよ」

「装備といっても、私の美貌はどうか捨てたら良いのでしょうか？」  
わたくし

「その得意げな鼻っ柱をへし折って差し上げましょうか？」

「あなたは少し黙りなさい！」

その整った顔を力強く歪めて、彼女は男を睨みつける。

中佐は短く息を吐いて短く舌打ちをしてやれば、再び二人の間から緊張が迸った。

そうして顔を見合わせてから、少女は頷き、男は仕方が無いように口を開いた。

「魔術師組合から派遣された者です。今日は遣いとして派遣されたまでであって、特にあなたに目的があつてきたわけではありません」  
ギルド・ウィザード

「魔術師組合……ガウル帝国か」

「はい。水晶からある青年の姿が見えたので、転送座標をココに指定したのですが……」

「ある青年……貴様らは、そいつと何の関連がある？」

「我々の兄弟子たる男の友人……と聞いています」

「名は？」

「私はマリー・ベルクールですわ」

「貴様じゃない。その兄弟子だ」

「う、うう……」

マリーは分かりやすく顔を赤くしうつむいた。

「ウィルソン・ウェイバー」

そんな機能不全に陥るマリーを放置して告げる男の言葉がきつかけとなって、驚き跳ねたジャンの身体は思わず本棚にぶつかって音を立てた。

その場にいる者が一様にその方向へと顔を向ける。中佐だけはその存在を知っていたために銃口を向けることはなかったが――その反応から、確かにジャンとの関係を見ぬいたのだろう。彼はカウンターから飛び降りると、そのままカウンター下に小銃をしまった。

「少年、彼らに害はない。出てきても構わないぞ」

依然としてカウンター上に屹立する砂糖の瓶の蓋を開けた中佐は、気が抜けたような声でそう言った。

再び通路に身を隠したジャンだが、その行動の無意味さを知り潔くそこから躍り出る。

と、共に、マリー・ベクレールと名乗ったお嬢様は「あ！」と声を上げてジャンを指さした。

「居ましたわッ！」

「見りゃわかります」

「ちよつと！ 出てきてくださいませ！ ジャン・ステイツール！」

マリーの悲鳴にも似たヒステリックな呼び声に、ジャンはそれ以上そこに留まる理由が見いだせずに出れば、その直後にさらに出てこいと呼ばれて戸惑った。

そして同時に、彼女は前を見ていながらも、周りは無縁として前すらも見えていないことが判明する。感情を熱しすぎているのだ。

「出てきてますが」

と男は軽くマリーの頭を叩いた。明らかなまでに判然としている上下関係から考えれば彼が下であるのは明確であるのにも関わらず、こんな仕打ちは果たして許されるのか。疑問に思うが、マリーはひたすらにぷりぷりと頬を膨らませながら怒るばかりで、権力的な制裁に至ることはない。

「ちよつと――ウィルソンさんの遣いって、どういう事です？ そ

んな連絡ちつとも聞いてませんよ」

再びもみ合い、というよりは叩き合いを始めた二人を制するように声を張り上げる。カウンターの奥に引っ込んだ中佐は手早くゴミ箱に割れたカップと砂糖を拭いた紙を投げ捨てて、そのおかわりを用意する。

今度は匙を使うのも面倒になったのか、瓶を傾けてそのまま流し込んでいた。

「先輩」はアナタが心配になって、コレを持って行ってやれって、わざわざ渡したのですわ」

マリーは言うなり、床をきよろきよろと見回してから見つけたバッグを手に取り、おもむろにその中から一冊の本を取り出した。革張りの仰々しいその表紙には魔方阵が刻まれていたが、それが一体なんのもののかは分からなかった。

「詳しい話は良くわからないのですけれど、この”魔術書”<sup>グリモア</sup>が必要になる状況は少し、説明いたしたいのですわ」

凜とした目元を軽く撫でて、彼女は優しく微笑んだ。それを両手で差し出す彼女に、ジャンは応じて受け取る。

「お嬢様。こちらはもう夜なんですから、適当な宿でもとって出直しましょうや」

男の言葉に促されたように開け放されている出口へと顔を向けて、迷うこと無くマリーは頷く。

「そうですね……。ではスティールさん、私たちはここで。そちらの説明も兼ねて、また後日、この場でいかがでしょうか？ あなとも、同じガウルの者として聞いておいたほうがよろしいのではないですか？」

ちらり、とマリーは中佐に顔を向ける。

「貴様、私を知っているのか」

驚くでもなく、砂糖をすすりながら中佐が訊いた。

彼女は少女らしいあどけない笑顔で頷いた。

「ガウルでの有名人ですもの。変装もしないでこんな所で呑気に生



活していると訊けば、抵抗軍がどう出るか——彼らにとって、あなたは悪魔にも等しいのですから」

「まったく、脅しかな？ 勝手に巻き込んでおいて貴様らは……だから魔術師という連中は嫌いなのだ」

中佐は心底うんざりしたような顔をして肩をすくめる。そんな彼にマリ―は意地悪なまでに天真爛漫そうに笑って、再びジャンへと向いた。

「すいません、異存はないんですが……訓練の関係で、会うとしたら今より遅い時間になるんです」

「ああ、でしたらあの白い魔石で連絡を下さいませ。使い方は、分かりますわよね？」

一応、と頷くと、マリ―は身を翻した。

そうして男とともに扉付近まで足を向けてから再び踵を返し、

「失礼しますわ」

スカート裾を軽くつまんで持ち上げるように一礼して、本屋から離れていった。

それから程なくして、ジャンも本屋を後にした。

そんな帰宅途中に、奇遇とも言えるタイミングで、帰路についていたサニーと出くわした。

「あ、ジャン」

というのが、割合に久しぶりに感じる彼女の開口一番だった。

「サニー、こんな時間までご苦労様」

「うん。でも、好きでやってることだしね」

やや伸びたせいか、肩より下まで髪は流れ、またその毛先は不揃いになっている。最近はまだよく見ていなかったせいか、身長は変わっていないというのに少しばかり大人っぽくなっているような気がするの、気のせいではないだろう。

「自分のやりたいことが見つかって良かったじゃないか。これじゃ、一足も二足も先に行かれちゃったかなあ？」

「そんな事ないよ。だって、私はジャンの背中を見て決めたんだもん。ジャンが居なかったら、今の私なんて居ないよ」

「ははっ、嬉しい事言ってくれるなあ」

相変わらず甘え上手な言葉に、ジャンは懐かしくなってその頭を撫でてやる。彼女はくすぐったそうに首を傾げたが、寄り添ってきたりはしなかった。

やや依存傾向は薄れているように見える。

ならば、徐々に自立してきているのだろうか。

選択できず否応無しに距離を置かれたせいで、彼女に自発的な成長を促せたのだろうか。まさに結果オーライというものだろう。

これならば、彼女はいつでもどこでも上手くやっていけるはずだ。ここ八年以上付きっきりでの付き合いだったが、これほどまで安心できたのは初めてと言えよう。

「でもね」

「ん？」

「強くなるのはいいの。傷つくのも、私が治してあげるからいいの。でもね……絶対に、ね？」

彼女は意を決するように立ち止まる。

手を胸に当て、一生懸命に言葉を紡ごうとする表情はうつむいているせいで窺えない。

声が震えているように感じるのは、やはり気のせいではないはずだ。

ならば、彼女はつまりそれまで隠していた、あるいは秘めていた心情を告白するという具合なのだろうか。

ジャンが頷く。

と、サニーも表情をこわばらせた。どうやら微笑んだらしい。

こわばった顔で、口元はまるで今にも泣き出しそうなように歪んでいた。

「黙って、どこかに行ったりしないでね？」

果たして彼女が決心して口にするのは、そうだったものだった。

そんなことか——軽々しくそう吐き捨てることはできたし、受け止めた上で流してやることもできた。

だがそんな事をするべき言葉ではないことを彼は知っている。

同じ境遇だからこそ、今まで通りに居た人間が突然居なくなってしまう事を恐れている。それがどれほど大事な者であろうとも運命は容赦なくその命を散らしてしまうことを知っている。それに抗うすべなど無いことを知っている。

故に、彼女はそれに怯えていた。

ただ思っているだけならば己の中で、そんな事はないと完結できる。

だが他者へと告げた時点でその可能性は可能性として存在することになる。そのただ一言のみで、恐れている可能性は倍以上に成り得るのだ。

だからこそ、ジャンは彼女にある種の尊敬の念すら抱いていた。

いつもならば付きっきりで甘えてばかりの甘えん坊さんが、いつの間にか自分で選び、自分で決め、自分で行うほどまでに成長していたのだ。

一方で己はどうであろうか。

人に流されるまま訓練し、ただ力をつけて駒になろうと尽力する。ただそれだけだ。力はあれども、成長などは一切していない。

されど虚しくなることなど無く、むしろより活力を得られたような気になった。

ジャンはサニーのぎこちない微笑みに微笑み返し、肩を叩いた。

「約束する。おれは、サニーの前から勝手に姿を消したりしないさ」最早彼女を子供扱いする必要など無いだろう。

そう言ってやると、ぱあっと途端に明るくなる彼女の笑顔はまるで華が咲いたようだった。

サニーは肩に置かれた手を手に取ってぎゅっと握り、指を絡めて固く掴んだ。横に並び、妹と言うよりはもっと別の、親しい異性のような表情で頬を上気させたように桃色に染め、寄り添った。

「約束だからね！」

近づけば、ややゆるい襟元から首から下げるネックレスが見えた。それはかつて、というか数カ月前に彼が彼女にくれてやった誕生日プレゼントである。

まさか日常的に身に付けてくれているとは思っていなかったために、なんだか嬉しくなった。

——空は藍から濃厚な紺色に移り変わっていて、そこに散りばめられる星の屑はキラキラと弧を描く三日月と共に大地を照らしていた。されどもその灯りは太陽にまでは至らず、ごく慎ましく、そして情緒的なものであった。

空気は冷え切り、最早季節は完全な冬になりつつある。

だが、サニーと触れ合う腕や握られる手ばかりはしっかりと暖かく――。

明日から始まる学校や訓練の合間となる、つかの間の休息は、やがて終わりを告げた。

## 焦燥

鋭い連続する突きを剣で受け止めるが、その激しい勢いに圧され後退。反動をバネにさらに勢いづいて襲いかかってくる連撃を、再び防ぐが――それまで線で捉えられていた攻撃がわずか数センチとなる点へと変わるのは、酷く恐ろしく、対応に難しいものだった。

甲高い金属の衝突音が響き渡り、大きく振りかぶった突きが刃の下に潜り込み、振り上げるようにしてジャンの剣を上方へ弾いた。

「そこで踏み込んでこい！」

ホークの言葉が早いのか、ジャンは退くことを忘れた身体を深く落として重心を低くとり、相手と共に無防備になったその肉体を懷に忍び込ませた。

「んで、剣技はここで封じられたも同然だ」

言われたとおりに拳から二本の指を第二関節まで折り曲げた形で突き出して、喉元を穿つ――フリをする。

ホークは大げさに呻いて後退し、ジャンはそれに対して追撃として、弾かれた衝撃が失せた剣を袈裟に振り落とした。

――肩に触れた刃を軽く振り払い、ジャンはそこで促されるように剣を退いて立ち直る。ホークも同様に距離をおいて、頷きながら腰に手をやった。

「お前の強みは剣に拘らない体さばきだ。剣を封じられた時点で、相手は”剣”でトドメを刺されると覚悟するはずだ。だがそれを上回る速度での戦闘を可能とするのが、体術による追撃。相手は覚悟した死からさらなる死に至らぬ攻撃を受けることになる。しかも敵は格上である場合が多いから、切り返そうとする連中が殆どな筈だ」

つまり、封じられた剣をどうやって救出しようかまず考える。ジャンはそれを防ぎ、かつ相手にダメージと大きな動揺を与えられるように、その剣技と体術の組み合わせを強化しなければならないのだ。

ホークはそう説明してから、

「今のをもっと早く。んで、かつ柔軟にな。次——行くぞッ！」

真剣同士のぶつかり合いは、それ故にそれが訓練だとしても途方も無いストレスとなるし、緊張感は思考の鈍化に繋がる場合もある。ホークが相手では容赦がないし、隙を見せれば本当に身体を斬りつけてしまうから油断はできないし、判断ミスは許されない。

今回はフランベルジュでは無く、サーベル同士であるわけだが——それでも本物の殺し合いに近い状況を作り出せている。

この訓練は、そういうった”慣れ”の要素も組み合わせられていた。

ジャンに対して斜に身体を傾けて、切先だけを敵につきつける。突きを主体とする彼の機動は素早さを重視としている上に滑らかであり柔らかだ。縦横無尽の鞭のような攻撃を放ち、それを弾いて反撃に移ろうとしても大きく飛び退く後退にはついて行けず、それに追撃を行えば即座に突きが応対する。

——そうして第二回戦となるその戦闘でも、同様にホークは容赦せずジャンを圧倒した。

突きの一閃、圧され、後退しつつそれに対処するが、鼓膜を震わせる甲高い金属の衝突音とその衝撃に、じりじりと下がり、だがその中で反撃の間隙を狡猾に狙う。

今度は突きと共に触れた刃がその時点で力強く下方へと落とされ、それに対応したジャンの剣が手首ごと下に叩きつけられる。同時に大きく飛び込んできたホークは動揺するように剣の行方に視線を向かわせたジャンの顔面へと腕を振りかぶった。

剣は封じられ、如何に反撃しようと考える中での拳——それは彼がそれまで教えてくれていたことであり、当然としてこれからの敵が想定しない筈がない攻撃手段だ。

今度はその対処こそが求められる上、そういうった攻撃を身につけるにあたって覚えなければならぬものでもある。白兵戦は主に攻めと返し、あるいは受けの技術が伴うものだ。騎士や軍兵などは主

に型がある剣術やらを武器とするが、ジャンは違う。故に、一見必殺こそが彼の強みになりつつあるのだ。

——拳の機動は、放たれた時点でそのおよそが認識できる。だからその攻撃自体にそう怯える必要などはないのだ。問題は、自身の武器を押さえつけている剣の所在である。

その攻撃を避ければおそらくは剣が追撃として突き出されるだろう。無防備な横腹に突き刺さること請け合いである。

そして避け、あるいは受け止め追撃に転じればその柄尻が反転し、体幹を捉えて肉体に突き刺さるだろう。

ならば、とジャンは考え、即座に手元を翻して柄を持ち上げた。

刀身は滑らかな坂となって地面へと伸び、それを押さえつけていたホークの剣は滑るように下へと落ち始めた。

体勢はやや崩れ、見極められた拳はいとも簡単に頬の脇を通過する。

「なるほど……！」

さらに左腕で拳を放つ腕を弾きながら、それを放つわけでもなく彼の進行方向の眼前へと置く。すると、彼の顔は吸い込まれるようにしてその拳へと切迫して——己の勢いだけで、彼は自発的に殴りつけられることとなる。

が、結局はただホークの鼻頭が優しく触れただけなのだが。

「いや——今のは正直、ヤラれてたわ」

剣を翻し、再び元の立ち位置で元の構えに戻るホークは嬉しげに告げる。

「その判断が良い。いいぞ、だんだん成長してきていやがるな？」

「おれだって、いつまでも突っ立ってはいられませんからねえ！」

第三回戦——誰が告げるわけでもなく、ジャンの言葉の直後にそれは開始した。

——十一月も半ばが過ぎてから、そういった剣術、体術が主とな

る訓練が殆どになっていた。

だからこそと言うべきか、訓練の多くはホーク、あるいはボーアとのものとなっていて、そういった方面の技術を精錬させられていたわけである。

月日は驚くほど迅速に流れていった。

そして、やがて学校に通っていたならば後期の中間試験が開始される頃合いにまで過ぎていったある日。

「まったく……連絡が付かない、すれ違いが多いにも程がありますわ！ 私半月も待ちましたの。油も切れかけましたのよ！」

再び都合がつかず、午後が丸々休みとなった日があった。

ウィルソンから渡された魔石で、幾度と無くマリーに連絡を取ろうとしたのだが、ノイズばかりでうまくいかない。また訓練終わりに訪ねてみれば、「お嬢様は眠ってしまった」と紳士然とした男が申し訳なさそうに頭を下げた。

そんな事を繰り返していれば半月近くが経過して――優雅にアフタヌーンティーを楽しんでいたところを突撃してみれば、今度はそんな怒号に晒された。

男は首元の蝶ネクタイを垂らした形でソファ―に横になって居る。夜中は徹夜で警備に当たっているために、日中はそうやって少しでも長く身体を休めているらしい。しかしまったく、このヒステリックな叫び声中でも眠りにつけるのはいささか羨ましくあった。

――既に中佐への話は終えているらしく、今回の接触を誘った際には断られてしまった。

だから彼が持参したのは、自室の机に放置されていた魔術書が一冊だけである。

「油……？ い、いや、すみません。なに分、些細な時間すら無いもので」

「お昼休憩はないのです？」

「野戦食のスナックバーを口に詰め込んで、十分休憩したら再開してしまうので……」



「うわあ、それ奴隷よりも酷い扱いでなくて？」

今となってはすっかり慣れたのでどうという事はないが、最初の方はさすがに戸惑った。動揺しすぎて口の中の水分をスナックバーに持っていかれて、パサパサになったそれを無理やり飲み込もうとして喉に詰まったこともあった。

しかしやはり、言葉で聞けば彼女のような反応になるのは仕方がないだろう。

マリーは整った眉をしかめて、目を薄めた顔で――指を鳴らし、「そんなことより！」と今度は忙しくテーブルを叩いた。

「先輩から託された魔術書についてですわ！ まったく、いつになっても帰れませんわ、これでは！」

今日は気軽なグレーと黒のボーター柄のセーターを着こみ、やや大きめであるのか袖が手の甲を隠しているようだった。下にはショートパンツを履いているらしいが、セーターによって隠され、すらりと長い足には黒いタイツ。さらに膝丈のレザーブーツを履き込んでいる。

以前のようなお嬢様といった格好ではないものの、随分おしゃれなものだとジャンは思った。

この国にはあまりない服装だから新鮮だし、少女らしい可愛らしさも上手く引き出されている。その中に隠れるちょっとした大人っぽさが、彼女から謎の色気を見出させていた。

「転移魔術があるんだから帰ればいいのに」

「二度手間ですよ！　せつかくだからゆっくりしたいし、異国情緒溢れるこの国の観光もしたいのです！　昨日はちょっと遠出をして、教会まで行って来ましたわ！」

「堪能してますね」

「あ、もちろん組合ギルドにも顔を出しましたので、連絡はついておりますわ。『頭の具合が残念な方なので、時間が少々掛かりますわ』って」

彼女は勝気にふふんと鼻を鳴らして、鮮血を水で薄めたような液

体を口にし、味わうように目を瞑って飲み下す。

ジャンは頬杖をつきながらそれを見守り、目を開けた所でテーブルに両腕を置いて腕を組んだ。

「まあ、ともあれご迷惑をおかけしました」

「いえ、お気になさらずに。では、はじめましょうか——」

「戦術級ではなく、レベル・ミリタリー戦闘級でもない……レベル・タクティクス戦術級ですわ」

——その分類を、ジャンは辛うじて知っていた。

学校での魔術学の授業で聞いていたのだ。随分と興味深い内容だったから、ノートに残したことさえも記憶している。

つまり戦闘級魔術は、一般的に使用されている『大地の怒り』やレベル・ミリタリー『肉体強化』などの個人レベルで戦闘に活用できる魔術だ。その威力のほどはどれほど極めたとしても集団を飲み込む程度であり、それ

だけでは決して屈強な砦や門などを破壊するには至ることはできない。つまり、対人間用の魔術というわけだ。

レベル・ストレージ戦術級魔術はそんなものなど比にならぬ、それこそ“戦争用”とも言える魔術だ。下手な魔法よりも強大であり、その発動を見たものは一様に——『街を消しされる』と口を揃えたという。現在ではその戦術級魔術というものの自体を戦争での使用を禁止している国が殆どであるのだが、その多くはディアナ大陸のみであり、このヴォルヴァ大陸では”溝”の問題で手一杯であり、その条約を結ぶまでには至らなかったのだ。

そして件の戦術級魔術とは、その二つの中間に位置する魔術だ。前者は個人に対する攻撃、補助を含めるあらゆるものが該当し、後者はその全てが攻撃、そして殲滅するレベルのものとなる。

だが戦術級というものは妙なまでにトリッキーなものが多く、それ故に作戦級レベル・オペレーションと言われる事もある。規模で言えば戦闘は個人、戦術は部隊、戦略は都市や大隊というものになるが——ジャンが知る唯一の戦術級魔術というものは、“転移魔術”のみである。

だから、漠然とスゴイという事は知っていても、それがどの程度

のものでどうスゴイのかは分からない。

彼はもちろん、戦場に出ているもそうそうその発動に出くわさない多くの兵士や警ら兵の認知度はそういったものだった。

「戦術級……ですか」

「ええ」

彼女は再び紅茶を含み、頷いた。

「ジェームズ……中佐殿から概ね状況は聴かせて頂きましたわ。そこで、先輩があなたにコレを託そうという理由に納得がいったのですわ」

「そのまえに……一つ、良いですか？」

中佐の名前が何気なしに判明した中で、ジャンはそれとは全く異なる疑問を呈した。それは彼女と初めて出会った時から気になっていたもので、

「ウィルソンさんは、商業組合に所属していると聞きましたが……魔術組合のベクレールさんが、なぜ彼を”先輩”と呼ぶんですか？」

ジャンの素朴な疑問に、そういえば、と彼女は手を打った。

「説明していなかったのですわね。端的に言ってしまうえば、彼の友人の祖父が魔術師組合の創設者で、そういった関係で数年前まで魔術師組合に在籍しておりましたの。現在も離籍はしておりませんが、本業は武器商人となっているので、中々お会いする機会はないのですけれどね」

「そうだったんですか」

——なぜウィルソンがそんな魔術師協会を離れたのか、それは彼女にも分からないらしい。だが稀に顔を出したり、組合に付き合っ  
て魔術開発に携わっているところを見れば何らかの原因が会ったというわけではなく、単に商業組合に引きぬかれたところだろう、とマリーは推測した。

彼女はお茶請けとして皿に並んでいるクッキーを一口齧ってから、話を続ける。

「ともかく、始めてよろしいでしょうか？」

「ええ、お願いします」

言うなり、彼女はその皿をどかしてテーブルの中央に魔術書を滑らせた。

「この魔術書を、アレスハイム王国ではなくジャン・ステイールに渡すのには理由がある……先輩はそう仰っております」

先ほどの薄ら笑いに近い微笑みは既に消え失せ、神妙な顔つきでマリーは告げる。

「この程度の戦術<sup>レベル</sup>級は魔術師団でも扱えるでしょう。ただ、”この魔術”は存在していないでしょうが。それに、多くの者がこれを身につけるとしたら時間がかかる。ステイールさんならば、肉体強化<sup>パワー・ポイメント</sup>を扱えている辺り、少なくとも魔術を扱うに当たる障害はないようだから最低限は扱える筈だ……と。それに加えて——これをステイールさん以外に渡すのは”気に食わない”というのは、人型武器倉<sup>タスク</sup>庫さんの言葉ですわ」

「タスクさんまで一枚噛んでるって事は、ウィルソンさんの独断であるワケですね？」

——何かを隠しているとすれば、彼女はここで頷くはずだ。

ただの独断で魔術師組合の人員をわざわざ割いてここの使いっ走り<sup>ク</sup>に使うはずがない。

ならば、その魔術というものが”実験的に”ジャンに使わせる可能性がある。以前の魔術開発から暫く時間が経っているから、戦略級魔術の改変の他にもまた新たなものが生まれていておかしくはない。一般に才能があり溢れていると認知されているウィルソンだからこそ、そう確信できた。

加えて判断するならば、それをジャンに渡してきたということだ。国に差し出す程のものではない以前に、試用試験すらクリアしていないのだとすれば、この現状には理解できるし納得も可能だ。

ならば、どうでる？

ジャンは顔色ひとつ変えずにマリーを見つめれば、彼女は鼻を鳴らして軽く肩をすくめた。

「分かりましたわよ、正直に説明いたせば良いのでしょうか？」

「……お願いします」

「でも正直、嘘は一つも言っておりません。これから隠そうとしていた一つの事実を申せば――この魔術書はつい先月に先輩によって完成したばかりの魔術書である、ということですよ」

「折り紙つきですね。ならば、向こうでも実用レベルとして存在していてもいいものでしょう？」

「いえ、これは先輩の趣味として以前からこそそと作っていたものですわ。だから誰も知らないし、組合の連中には先輩の取引の使いつ走りだと説明して来ましたし」

「隠す必要は？」

「さあ。先輩は気まぐれ屋さんですし、私には判りかねますわ」

そう説明して、マリーは再び微笑み、表紙をそのしなやかな指で摘んだ。

「それでは、この説明を致します」

「軍需産業が活発になりつつあるらしい。ヤギユウ付近では、既に武器の量産体制に当たっていて、それ故に割高だったそれらが手に入りやすくなっている」

再び会議室で落ち合ったいつもの面々は、最初のそういった言葉から話し合いを開始した。

「つまり、そろそろってわけかア？」

「ディライラ、一応この国の大臣の前だという事を再認識してください」

テーブルに足を乗せて反り返り、頭の後ろで手を組んだ大勢になるホークを注意するようにスミスは睨んだ。彼はそれに小さく舌打ちをしてから座りなおし、テーブルに肘を立てて頬杖をつく。

エミリオはそれに対してほっと胸を撫で下ろし、シイナは特に表情を変えずそれを見守った。

「――軍事訓練は捗っているのかね？」

大臣の問いに、一同は頷いた。

しかしその後につなげるのは、実際に訓練に当たっているスミスである。

「元からの練度が意外にも高かったお陰で、そう苦勞する必要はありませんでした。基礎ができていたので、実戦を模した訓練を基本としていますが、滞りなく進んでいます。一介の軍として考えれば十分と言えるでしょう」

「それは良い報告だ。傭兵団の方も、いつでも動けるのか？」

「ええ、問題はないです」

大臣は満足気に頷いて葉巻をふかす。

そうしてから、今度はホークへと視線を流せば、つい先ほどまでジャンの訓練に付き合っていた彼は促されるように口を開いた。

「ジャン・スティー爾だが……あいつは、そうだな」

困ったように額に指を当て、それから言いにくそうに続ける。

「もう二ヶ月近く経つんだが……あいつ、なア？」

そんなホークはシイナへと目配せをすれば、彼女は腕を組んで視線を逸した。

あからさまなまでの芳しくない様子を伺わせるホークに、大臣は思わず疑問を呈す。

「どうした、それほどまでに期待外れだったのかね？」

「そんな事はない。むしろ――見違える程だ。だからこそ、少しだけ心配になった」

「心配？ たかが二ヶ月で貴殿に認められるほどとなったのにも関わらず、かね？」

「ああ、ヤツの正確ならそんな事は無いと思うんだが……奴は強くなっている。そしてそれを自分でも自覚し始めている。だからこそ、思い上がりすぎて、死んじまわねエかな、とな。正直惜しい人材だ。多分、今回の戦争に参加すればより成長すると確信できる」

ホークはそこまで言って、テーブルに置かれたグラスを口にする。

中に入っていたのは水だが、今日は下手な酒や紅茶よりそっこのほうが好ましかったために、乾いた喉はそれを求めて並々と注がれていたそれを飲み干していた。

「それは貴殿ら傭兵団の判断だ。集団行動させるも良し、個人戦を挑ませるも良し。その代わりとして軍事訓練と戦争での助っ人を頼んでいるのだ。しっかりと頼むよ」

「ああ、そいつは全力を以て勤めているが……」

「やはり、残り時間が心配かね？」

「そこが肝要だな。時間がねえなら、明日から来週か……ともかく十二月の中旬に入る前に”仕上げ”をしちみたいからな」

「了解した。ならば今夜にでもエルフェーヌへと偵察を送ろう。まさかこれで三度目だから、ヤギユウに気付かれることもあるまい」

大臣はそう言うってから嫌らしく口角を釣り上げて、灰皿にタバコを押し付けた。

「ならば早速命ずるとしよう。諸君、今日はわざわざ集まってもらい、感謝する。次回はまた同様にシイナに言伝を頼むから、頼んだぞ」

——短いながらも充実した、とは言えぬ、だが緊張感、焦燥感の漂う会合は比較的早く終了し、そして事態は可及的速やかに展開していく事となる。

## 総仕上げ

マリィ・ベルクルの出会いから約二週間が経過する。

彼女から受け取った魔術書に刺激されたためか、訓練の前後は自己鍛錬する時間がないからそういった肉体を鍛えるものではないのも仕方がなかったが――魔術書を読み解く事はできていた。

魔術書はその名称こそ堅っ苦しいが、言ってしまうえば研究論文のようなものだ。

そしてその内容は、研究機関こそ一、二年と短いが、随分と興味が惹かれる内容であったし、その魔術も応用に利いたいかにも戦術級らしいそれであった。

だから訓練をこなしつつ、それを身に付け、詠唱を覚え、試用する日々が続いていたのだが――。

気がつけば、十二月も半ばに入ろうとしていた。

魔法を持たぬことを自覚して約二ヶ月。

訓練が開始して約一ヶ月半。

確かに訓練は厳しかった。最初期は死さえ覚悟したほどのものであったもののいずれは慣れ、最終的に行き着き先は技術の精錬。

本当に自身は強くなっているのか。周囲はその実力を認め、褒めてくれているし、ある程度の自覚はある。だがそれが本当に戦争で通用するものなのかは分からない。戦闘の専門家ばかりを相手にしているせいで、そういった面でいまいち自信を持てないのだ。

だから――。

「今日は本気でやろう、ジャン？」

ボーアが真剣な眼差しでそう告げた時は、少しだけ嬉しかったが同時に、いよいよその日が来たのかと緊張もした。

――それが総仕上げである事を理解したのは、いつもの訓練場となる平原にボーアが一人でやってきた際であった。そして戦争までの期間もそう長いわけではない事も察知できていた。



それを認識した瞬間——それまで会得した、身に付けたあらゆるものが頭の中を駆け巡っていった、気がした。

依然として右腕に巻かれる包帯の下が熱くなる。胸の奥の高揚に、呼応するように魔力を注いでいるようだった。

「さあ、行くぞッ！」

ボアの強みは一概に、その肉体一つで敵に当たる素早さだけと言える。攻撃手段は四肢、故に混戦ではなく単一との戦闘を得意とするのはもちろんであり、だからこそ複数を相手にするのは難しいのだが、それ故に彼女が得意とする一対一の場面では、彼女の強みが余す事無く発揮されることになる。

——走る一閃。その身軽な身体は容易に空中に浮かび上がり、その無防備とも言える肉体からは隙一つ見いだせぬまま振り下ろされた拳は、紙一重でジャンのすぐ脇の大地に落とされた。

その鉄槌の及ぼす効果はおよそはかりしれぬ破壊力を持つ。故に大地には亀裂が入る間もなく爆ぜ、轟音と共にその破片を周囲に散らした。

打撃を凌駕する爆撃——彼女はその体勢から軽やかに四肢を駆動して転じ、その地面に突き刺した拳を軸に身体を回転させる。足を突き出せば簡単にジャンの足へと超低空の蹴りを放つことが可能となるものの、されどジャンは、ただ何も考えず間抜け面で対処を待っていたわけではなかった。

無防備となるその背中。にわかな跳躍と共にその背に襲いかかって——彼女が流れるように立ち上がり対応しようと拳を突き出さんとした所を通過。頭上を通り過ぎ、ジャンはその向こう側に着地する。

虚を突かれたボアは振り向きざまの肘鉄を顔面に打ち込んだ。が、それを腕で受け、乗せ、対峙するまま身体を反転。彼女の股下に足を流すように深く踏み込み、背を向ける。そうするとジャンの右肩には彼女の左腕が乗せられ、顔を横切るその腕を彼は肘、そ

して手先をしつかりと両手で拘束していた。

深い前屈姿勢。ボーアさえいなければ目上の者に対する屈服の辞儀がごとき姿勢は、背に彼女を持つが故にその肉体を背負う事ができ——その勢いを利用して彼が眼前に振り落とす。が、ボーアの両足はジャンの腹に巻きついた。

故に拘束される側はジャンへと移り、緩んだ腕力から抜けた腕はそのまま首に巻き付き氣道を締め上げ、血管を圧迫させる。

間もなく視界が黒く染まり始めて、四肢に伝播する力が鈍る。

が即座対応。その生命を刈り取る拘束は勢い良く後頭部を振り上げ、彼女の顔面を殴打することによって解除される。すぐさま腕を掴んで振り薙げば、まるで赤子に遊ばれる人形のようにボーアの肉体は投げ飛ばされた。

一進一退。

決して状況がどちらかに向いたわけではない。

——握り締める剣を投擲。

当然の対応として、彼女は横に跳び避ける。

その回避の間に、ジャンはその機動を予測して肉薄していた。

彼女は軽く飛び上がり、振り上げる肉感あふれる腿から撃ちだされる膝で顔面に襲いかかる。ジャンはそれを寸で避け、横方向に回避すると共に地面に突き刺さる剣を握り、拾い上げた。

振り向きざまに、彼女の着地点を狙い、再び投擲——。

着地と共に彼女は踵を返し、切先を己に向けて迫ってくる木剣を肉眼で捉えた。

短く呼吸を繰り返し、ジャンが走り寄ってくるのをその白身の無い深淵を思わせる黒のみの瞳で見つめていた。

木剣の投擲には合わせぬ大きさが持つ軌道が妙なまでにゆっくりに感じられた。

集中力が高まり、意識がただそれのみに集中する。

手を伸ばし、黒く染まるそのつま先でやがて眼前へと迫る木剣の刃に触れてみせて——。

やがて彼女は、己に向かってきた木剣の柄を掴んで持ち直すと、握り直したその勢いを利用してジャンへと投げ返した。

ジャンの動きは、それまでとは大きく異なっていて驚きに満ちた表情に塗り替えられていて、横に跳ぶ動作は大げさで、それ故に跳躍は大きくなる。着地点はその場より遠く離れることになって、ボーアは身軽に走ると、その場で彼が落ちてくるのを待った。

「こな、くそっ！」

ヤケクソ気味に放たれた拳は着地と同時にボーアの脇の大地に穿たれ——予期し得た着地故に、彼女は無情なまでにジャンの横腹を力いっぱい蹴り飛ばした。

鈍い音を立ててジャンの身体はふわりと浮かび上がる。共に勢いに飲まれて宙を滑り、彼は文字通り”吹き飛ばされた”のだ。

そのまま、まるで何かの冗句のように数メートルを滑空した後に大地に叩きつけられ、為す術もなく幾度か弾み放り投げられたおもちゃよろしくゴロゴロと転がり、やがて止まる。

激痛が、脈動と共に全身へと拡散する。息が詰まり、大地をつかむ腕は震えっぱなしだ。

「冗談じゃない——」

あれほど血反吐を吐いたのに。

あれほど痛みを負って、力加減をしてボコボコにしてくれたのに。

——まだこれほどまでに力の差があるというのか。

まだ己は未熟という地点にすら立っていないのか。

ならば何故褒めた。

なぜ励ました。

なんで、おれになら出来ると希望を——。

「ふざけんな……おれは……」

元々、それは勝てる勝負などではなかったし、彼自身、勝利をつかむことは出来ないなりに努力しようと考えていた。だが興奮に煽られ、高揚し、気がつけば己は勝負に勝てるのだと錯覚していた。その思い上がり、ジャン・スタイルを憤慨させる要因となっ

ていた。

己は強い。そう潜在下で認識するがゆえに起こる、虚栄心の崩落。プライドそれを阻止せんとする精神的な昂りは、男としてはごく正常な反応だと言え、

「おれは、アンタに勝つつ！」

『負ける要因は騙してきた相手なのだ』と己に対して虚構を創り上げてからの憤慨から、自身に怒り奮い起こすという方向へと転換できたのは、ジャンの新たな成長でもあった。

「ああ、その調子よッ！」

——再び切迫。

交差するボーアの拳の速度は、それまで放たれていたものと比較できぬほどの最大限度に練られた速さであり、手負いの格下が反応できるものでは到底なかった。

故にその拳は勢い、体重、速度を伴う凄まじい威力を誇ったままジャンの腹部に突き刺さり——くの字にへし折れた肉体。落ちる顔面へと太ももまで伸びる革のブーツに覆われた膝が叩きつけられる。さらに脚が伸びて身体を蹴り飛ばし、ガラクタのように吹き飛んで大地に蹴り尽くされた——。

翌日。

「今度はあたしか」

ラアビは珍しく、外套を羽織らぬ格好でやってきた。

タンクトップ調の下着なのかインナーなのか分からぬ薄い衣服一枚は、その下にある豊かな双丘によって押し上げられ、また腰から下は茶色い毛皮に包まれていた。頭には半ばから折れる長い耳。うさぎらしい特徴が見える彼女は、それでも両手に物騒な武器を嵌めていた。

ジャマダハルと呼ばれる腕に装着する系統の武器は、その腕を防護するように立体型の刃を腕の先にまで伸ばしていた。むろん、そ

んな武器の訓練用は無いために実際に相手を殺せる代物だ。

斬ることより刺すことに特化した武器であるから彼女には似合わぬと思ったが——この総仕上げは”本気”でぶつかり合うこと。

つまり彼女は、通常は手を抜いて仕事にさえかかっていたという事になる。

また、そういう配慮もあって今回は真剣を持つことが許され、その真剣もいつか親代わりのドワーフから渡されたバスタードソードであったのだが……。

「ま、行くわよ」

不安の中で、戦闘は開始する。

簡単な言葉が火蓋を切った。

共に、ボアと同様に高く飛び上がったラアビだが、彼女の跳躍はボアの比にならぬ。それはウサギ故の常軌を逸する跳躍力が為せる技であり、同時に彼女の経験、そして判断力とその無防備な体制からの脅威となる攻撃に転じさせることができた。

——落ちてくる彼女は地面に上肢を向け、その両手を槍の切先が如く頭上に揃え、落下する。そんな彼女に対応するすべなど無くジャンは付近で落下、着地する彼女を待てば、

「なーに、呑気に見てんのよ？」

着地とほぼ同時に、巻き上がる砂煙より早く飛び出た影は即座に背後に回りこんで——後ろから伸びたジャマダハルは喉元に優しく触れ——ず。その切先が刃に引っかけかり、ジャンは反射的に喉元に迫ったその刀身を勢い良く弾くと共に後頭部でラアビの顔面を殴打した。

ジャンはそのまま振り向きざまに剣を薙げば、彼女の武器と衝突して甲高い打撃音をかき鳴らす。

——まさに一見必殺。

ただの反射神経や直感のみで構えていれば、確実に太刀打ち出来なかった一撃だ。

「へえ、やるじゃない」

勝気な笑顔。

ジャンの連続するしなやかな斬撃に、ラアビの力強い対応が衝突時に火花を散らす。

一本の剣に対して二本の腕だ。それ故に対応すべく撃ち出す斬撃は威力はともかくとして高速度を保たねばならぬのだが——幾度目かの衝突の後。それらの全てを凌駕するように、ジャンは弾かれた剣とは裏腹にラアビへと無防備なその肉体を肉薄させた。

それに疑問を抱くよりも早く、彼女の突きが反射的に心臓を狙う。そんな必殺に特化した攻撃を得意とするからこそ、誘いやすい。

ジャンはそれでも表情を一つ変えること無く、剣を振り上げる中でそれ掬い上げるようにして防ぎ、懐に潜り込めばもう片方の腕を叩き落とし——剣の柄尻をラアビの水月に叩きこむ。

が、その衝撃は虚空を打ち、彼女が流れるような動作で後退していくのを見た。

そうしてジャン自身の攻撃動作が完了した直後に彼女は大地を弾き——。

「でもまあ、こんなモンでしょ」

腕と一体化する刃の切先が、冷たく鋭く、その額の薄皮を切り裂いていた。

さらに翌日。

「ま、そういうことだから」

そう言ったのは——身の丈の数倍はあろうかという大剣を肩に担ぐ真っ赤な女性。黒いボディースーツにサンダルのみという気軽というにはあまりにも気軽すぎる軽装は、それ故に彼女の見事なプロポーションを浮き出させていたのだが、

「……りよ、了解です」

その超重量級とも言える特大装備に目を奪われるばかりで、ジャ

ンはシイナの滑らかでありながらもたわやかで、引き締まる肢体に視線を向けることが出来なかった。

彼女が大剣を振るえば、肉薄することが出来ずにただしゃがみ、やり過ごす行動しか残されていなかった。

振り下ろせばその衝撃が大地を揺らし、それに乗じて走りだせば再び薙がれ、飛び上がり――その横っ腹を打ち払われて、ジャンの身体は遠くに吹き飛んだ。

大剣のイメージはその緩慢さ、鈍重さであり、それらを引き換えに破壊力を得るといったものだ。

だがそれは実際には違う。

しっかりと等身大の大剣を扱った経験のあるジャンが言うのだから間違いはなかった。

――振り下ろされる大剣はその質量故に落下速度が早く、また薙げば勢いを増して走るだけでは容易に追いつかれてしまう。つまり彼女を倒すには少なからずともその懐に潜り込む必要があったのだが、大剣に似つかわしくない高速度での連撃がジャンを打ちのめした。

横薙ぎで彼を吹き飛ばし、そして振り下ろす衝撃で足止めをする。また薙いで蹴り、足を止め、蹴る。

一方的すぎるその戦闘は、間もなくジャンが膝から崩れ落ちる結果で終了する――かに見えた。

「一泡、吹かせてやる……っ！」

しかし、ジャンには人並み以上の体力があるのだ。それは以前からの、自身の誇りとも誇れる部分とも言える特徴であり、今回の訓練で徹底的なまでに鍛え上げられたものだった。

だからそういった体力的な余裕と激痛による腹の底に据えかねていた、一方的な攻撃による怒りが覚醒し、せめて負けるのならば一度くらいは攻撃を成功させたいという意欲が彼の胸中で爆発していたのだ。

それ故に――。

「……ッ!？」

振り難いだ大剣から、もはやおなじみとなって吹き飛ばされるジャンの姿がないのは彼女にとって驚きであり、

「こなくそおっ!」

そしてまた、勢い良く彼女の背後へと振り上げられる大剣から転げ落ち、未だ大剣が頭上に至らぬというのにも関わらずダメージを度外視して肉薄してくるジャンの行動は全くの――想定内の出来事であった。

「くらっ! え――っ?」

突き出す剣。だが穿つ切先にはシイナの姿など無く。

軽いステップによって脇、というよりも遥か横方向に移動した彼女の両腕は、既にジャンの頭上に恐ろしいまでの圧迫感を覚えさせていて――その木でできた大剣の刃がジャンの頭部に触れた時点で、彼の敗北は決定した。

エミリオはその両手に手甲を嵌めていた。さらに言えば鎧に付属するものではなく、拳の形に造られた本格的な近接格闘用の武器であったのだ。

加えてそれは指まで精巧に造られたその手甲は、まるで素手であるように拳を作ったり、また掌を見せたりすることが出来る。

そうして彼は現れるなり――簡単な挨拶も無しに、襲いかかってきた。

硬く握られた拳は、握る以前に鋼鉄である。だが固められれば鋼はより強靱な武器となる。

彼の姿が辛うじて認識できる。そういった位置で、ジャンは確かにエミリオが跪いているところを視認した。

その刹那である。

大地が激震する。そう理解した瞬間に、エミリオから直線上に大



地が隆起し、そう認識した直後に――ジャンの足元から針のような鋭さを構成する大地が虚空を貫き、ジャンを穿つ。

「ふっ――ざけんな！」

咄嗟に地面に剣を突き刺し針を砕く。同時に前方へと走りだせば、そのおよそ人智を凌駕した速度で迫りつつあるエミリオの姿があった。

一秒ともたずに肉薄した男の一撃。既に拳が当たらずとも、亜音速に近き速度より押し出された大気が空気の弾丸となって襲いかかる。反応速度を遥かに上回る一撃がまず腹部を強打し、怯んだ隙に本体とも言うべき鋼鉄の砲弾がエミリオの、心臓を止めてまでやり過ぎたくなる威圧的な姿と共にやってきた。

腕を振り上げ剣で応対。

バスタードソードが火花を上げてエミリオの拳を受け止め、また力強く腰を落とせばその勢いによって肉体が背後へと押し出される。剣が悲鳴を上げるように軋み、それをいなそうとするより早く、第二撃が容赦なくジャンの顔面を捉え――。

肉体はごく柔らかく、ふわりと浮かび上がった。

顔面を基点にして身体は弧を描くように空を飛び――永久に感じる浮遊時間の直後に襲いかかる強烈な大地の衝撃は、それから十数メートル彼の身体を引きずり横転させ、ボアの時よりも遥かに大げさに廻り続けていた。

無論としてジャンの意識は第二撃の着弾時に根こそぎ奪われており、エミリオは言うまでもなくその時点で今回の戦闘の終了を認識し、背を向けて帰路へとついていた。

最終日。

いよいよ、本当に心の底から負けられないと思う相手の順番がやってきた。

「よオ、ご機嫌いかが？」

左目の眼帯をさすりながら、ホークはシャツに麻のズボン、革のブーツという気軽な格好でやってきていた。もちろん腰のベルトには、対となるフランベルジュが装備されている。

「良いウォーミングアップのお陰で良好だよ。全員にボロ負けしたけどな」

「そりゃそうだ。律儀に肉体強化パワー・ポイントも使わねえそうだしな」

「せっかくそいつを使わないで訓練してきたのに、ここでやったら意味ないだろ。それ」

「関係ねえよ。どのみちエミリオは魔術使ってきたんだろ？」

股下から迫る針を連想して、ジャンはわざとらしく背筋を震えさせて――剣を抜いた。

「なんにしろ、おれはこの身体で全力でぶつかる。それだけだ」

「ま、全力ならオレも全力であたるのが礼儀ッてもんだ。なら、行くぜ」

――こいつには一度負けた。

その上で、丹念に訓練してもらった。

だが、未だ胸から腿にかけて、さらに顎したから頬に掛けての傷は薄く残っている。そういった恨みや辛みがあるわけでは決して無いし、今ではこの目の前の男を一人の戦士として尊敬すらしている。だからこそ、勝たなければならない。

己の中の、一つの壁だと彼は認識していた。

あらゆる方向に伸び始める未来への選択肢。その道は全て高く頑強な壁がそびえ立ち塞がれている。

何かを選ぶにも、その選んだ後に突き破る力を持たなければならない――つまり、前に進むためには、このディライラ・ホークに勝たなければならない。

だからこそ彼は昂っていたし――。

「……なんだ、ありゃあ？」

ホークが空を仰ぎ、その明らかに鳥よりも遥かに大きく、素早く空を跳ぶ黒い影を捉えた時には、爆発的な怒りさえも抱いたものだ

った。

その鳥は、およそ鳥とは言えぬ格好だった。

鳥人<sup>ハルビユイア</sup>といった風体でもないその姿。黒い外套<sup>マント</sup>に身体を包み、その背中にはコウモリの羽根のようなものが生えている。頭にはつばが長く、円筒型の黒い帽子が被せられていて――そういった姿の中に抱かれる、もう一つの人影があるのをジャンは捉えていた。

グレーと黒とのボーダー柄のセーターに、デニム生地ショートパンツ。黒いタイツに、膝丈のレザーブーツ……その服装は、いつの日か誰かが着ていたものそのものであり、

「おいあんたらッ！ あいつを追ってくれエッ！」

老け顔の男が短い黒髪をなでつけるようにして前髪、横髪全てを後ろに流した髪型で、首元の蝶ネクタイを強引にはずして握り締めながらそう叫ぶのを見た瞬間、記憶の中の判然としなかった人物像が浮き出し、一致する。

「あいつは、ベルクールさんか！ なあ、ホーク――」

「お嬢様が”攫われた”んだッ！」

「――しち面倒臭エな！ しかも奴<sup>ヴァンパイア</sup>ア吸血鬼くせエぞ！」

空を飛ぶその姿は、男の全速力も虚しくやがて森を越え、空の彼方に消えてゆく。

まだ日は高く、その姿はそれでも点となって認識できるが――その飛行速度は、肉体強化を使用しても追いつけるか分からぬ速さだった。

紳士然とした男はやがて立ち止まり、肩で呼吸を繰り返しながらジャンの両腕に縋るようにつかむ。

その表情は怒りに飲まれたソレであり、青筋が立ち、外見年齢は既に中年男性よりやや若いと言ったものとなる。

「あのお嬢<sup>バカ</sup>様が魔術師のクセに無知でな。招き入れちゃったんだ」  
整った髪を苛つようにかき乱し、大きく息を吸い込んで立ち直る。

そういう彼の言葉、そして外見は冷静そのものであり、視線は依然として空を飛ぶ吸血鬼に向いているし言葉の中の感情に焦燥や怒りが孕んでいることはうかがえるものの、態度は釈然と、現状の説明を続けた。

「訳がわからないまま誘拐された。ただ単に目を付けられただけだと思いたい……お嬢様が居る限り、こいつも使えない」

背広の胸元に手を突っ込んで引きずりだすのは、一丁の拳銃だ。銀の光沢を持つそれは柄から程ない位置に”レンコン”のような円筒が差し込まれている。その拳銃はそこに弾丸を仕込んで撃ち出す仕組みだ。

一般に、回転式拳銃リボルバーと呼ばれるものであり、多岐に渡る弾丸や、高威力の弾薬を使用できる上、その構造の単純さから不具合を起こしにくく、信頼性の高い武器だ。

それを無力げに下げて、さらに男は深く頭を下げた。

「傭兵に、その見習いだということは聞いている。そして俺自身も手伝おう——時間がない、手伝ってくれないか？」

男の言葉に、二人は目を見合わせる。

後、肩をすくめるように苦笑して、ホークは腰に手をやり、ジャンは手を差し伸べた。

「オレはディライラ・ホークだ。傭兵だなんて物騒な名前で呼んでくれるなよ」

「おれはジャン・ステイル。これでも騎士を目指した身。正義は人一倍あると自覚していますよ」

二人の言葉に、咄嗟に顔を上げた男は光明を見たと言わんばかりの顔で、歳の割に情けない顔でジャンの手を強く握り返した。

「あ、ああ！俺はハンス・ベランジェ、よろしく頼む！」

## 救出作戦

「吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>には基本的に物理攻撃が効かない……となると、どうすつか」

体力の分配など考えずに、ただ進行方向に走り続ける三人は、それでも気軽そうに会話を始めていた。

「ベルクールさんが目を覚ますか——いざとなったら、おれが覚えてたての魔術で行くか」

「なア、ハンスは魔法はねエのか？」

「あるっちゃあるが——吸血鬼如き、魔法を使うまでもねえな」

「物理攻撃が効かねエつつつてんだろ。分かってんのか？」

森を抜け、草原地帯。脇に目を向ければ水たまりが目立つ湿地帯。そして目の前には、たむろしていた野生の狼——異種族だ——が、登場と共にジャンらに視線を向けていた。

察知。

そして僅かな時間すら置かず、野生の赴くままに——同時に、襲いかかる。

三者三様。

跳び上がる狼に、走り続ける三人。

故に切迫する時間は切り抜かれるように短くなり——間も置かずに交差。

刹那に抜いた剣に、瞬時に引きずりだした獣の右腕が肢体を切り裂き、

「……たく、あのさア」

彼らの遙か後方で着地した三匹の肉体から鮮血が噴出し、あるいは四肢のいずれかが欠損した上で頭部が碎かれ、地面に崩れていく。ホークは気がつけば既にフランベルジュを納刀しており、またジャンは鞘に収めながら軽く嘆息した。が、その溜息は己の実力に昂ぶる精神を抑えこむ息吹であった。

「弁えろってんだ。雑魚共が」  
わきま

「全くだな」

鋭い爪を持ち、青白い毛皮に包まれる右腕を抑えながらハンスは短く頷いた。

「雑魚は雑魚で群れていればいいのにな——ステイル、どうした。恍惚とした表情をして。そんなうれしげな顔はお嬢様に見せてやれ。勘違いして勝手に浮かれるぞ」

「……ベルクールさんは自意識過剰なのか、単なるアホなのか？」

「あれはアホだ。底抜けのアホで……お人好しだ。だから騙され、攫われた」

「気持ちのいい娘だなア？」

「ああ、ここ二年の付き合いだが、不思議と徐々に惹かれている。滾るのは父性なのが悲しい所だが」

それは不謹慎なことに笑顔だった。

ハンスはそう言うってから、はっと我に帰るように表情を戻し、前に向き直る。

そんな彼を、ホークはにやにやと眺めながら、ジャンをどかし彼の横へと陣取った。

「お前、幾つだ？」

「ああ？ あー……に、二八……だ」

「へえ、老けてんな。三五くらいには見えたが——近いな。オレア二五だ」

「あんたら——もっと緊張感もたないか？ ベルクールさんの危機  
ピンチ  
なんだろう！？」

走りながらも、既に十数キロは過ぎているのにも関わらず息一つ乱さずに会話は徐々に和み始める。そんな状況を少しでも変えようと怒鳴ってみれば、ホークはわざとらしい溜息と共に肩を叩いた。

「力んだって、そのベルクールとやらが見つかるわけがねェし、緊張しすぎてたら注意力が散漫する。オレたちにや、適度なリラック  
ス  
スっつーのが必要なんだよ。確かに、肩肘張って”雰囲気を出す”」

のは良いかもしれねエが……必ずしも、それがいい事だとは限らねエってこった」

「そうそう。考え過ぎたら即座の対応に遅れが生じる」

「考えても仕方がねエことだってあるしな」

「ステイール、お前はもっと柔軟に考えたほうがいい。そうじゃないと、到着する前にしんどいぞ?」

「――どこに行きや良いんだ……?」

コロンの街の遥か手前の森を抜けた所で、ホークは呆然と立ち止まる。

空を飛んでいた黒い点は大分前に見失ったが、その影がどこかに降り立ったことだけは確かに認識していたのだ。だからこそ真っ直ぐ、このままで大丈夫だと漠然ながらも進んできたのだが――森という、方向さえもわからなくなるような障害物だらけの場所を抜けた時には、思わず呆然とした。

「……なア、少し考えようぜ。他に探す方法は無いのか? 相手だって、飛ぶだけじゃねエだろうが」

「確かにな」

「んんー、そうだな……」

ハンスは顎に手をやり、空へと目をやる。

「……ひとつ走り、行ってこようか? パワー・ポイント 肉体強化で」

「なら手分けで行くか……いや、この人数じゃ分が悪すぎる」

「……おれが失踪した時の気持ち、少し分かったような気がする」  
ふと思いついてみれば、彼女らはこんな苦難の中でなんとか見つけてくれたのだろうか――なんだか申し訳ないことをした。

もし機会があれば恩返しにかでもしてやろうか。

そう考え、ふと思いつく。

「そういえば、吸血鬼の目的ってなんなんだ?」

「目的、か。アレだろう。『処女の血はンマイ!』みたいな」

「やっぱ吸血か。だがなア、わざわざ街に……しかも城下町にまで

来て、そんな事をするか？」

「やはりソコか」

逆に、もし吸血鬼側ならば——ジャンはそう考えてみる。

本当に吸血が目的であったならば、適当な街や村から生娘を攫うだろう。極力目立たないようにすることが重要だ。下手に目立っても良いことなど無い。

ならば、他にわざわざ”目立って”かつ”問題”になるようにせざるを得ない状況があるとするれば？

「……いや、まさか」

そう漏らしてホークに視線をやれば、彼はどうしたと言わんばかりに首を傾げた。ハンスも同様だ。

「まさか、とは思うんだけどさ……もし吸血鬼が、誰かに命令されて居たとしたら？ 吸血鬼が本能の赴くままに行動したとは思えないだろう、明らかに」

「あア、オレも今それ言おうと思ってたんだわ」

「嘘つけ」

「——命令って、俺たち”転移魔術”で”建物の中”に出てきたんだぞ！？」　まず俺たちがあの街を訪れたことさえも知らねえ筈だ！」

「協力者の存在だ」

ホークが言った。

顔はいつになく冷徹で、言葉はいつになく冷静で。

「国情的に考えてヤギユウの手先と考えてまず間違いねエな」

「……他国の、関係ない民を犠牲にしなければ投降しろって？

そりゃどこの強盗だよ」

「スパイの目星は」

「ンなもん後回しだ。このまま北に向かわれちゃ厄介だが、さっき落ちたところを見ればそう遠くまで移動したようには見えない。近くて……コロンの東、か。なんかあるか？」

「いや——ああ、あった。ひとつだけ」



ジャンは頷き、そうして指を一本立てる。

そんな彼に、再び視線が集中した。

「廃鉱がある」

「あれは確か……五年前、人手不足だからって派遣されたことがある。かなり寂れてたし、鉄鉱石はもちろん、魔石すら無くて——だから引き上げる為に、荷物の整理やら後片付けの手伝いについて寄越されたんだ。鉱山の中には入ってないけど、一般的なものだったと思う」

「一般人はな、一般的な鉱山なんざしらねエーの！」

「まあ、確かにな」

「まあ、狼男——<sup>ヴェアヴォルフ</sup>ホークが冗談交じりに言えば、ハンスは軽く鼻をさすって臭いを嗅いでみせた。

そうして暫く動きを止めて嗅ぎ分けるように首を捻ってから、頷く。

「あの外套<sup>マント</sup>にくるまってたから臭いが薄いが——この奥に居そうだ」

「……わけがわからねエな。国と取引したいんじゃないのか？　ならなんでこんな所に引きこもって……」

「単なる罠かも。おれたちも一緒に捕まえて……っていう魂胆だとも考えられるし」

「まあ、行ってみなくちゃわからないからな。行こうぜ」

ぽっかりと口を開ける坑道の入り口へと足を踏み入れる中で、ジャンは妙なまでに嫌な予感、と言うよりも確信できる、予期できる未来に不安を抱いていた。

——これは罠だ。

それはおそらく二人も知っているはずだ。だが何を誘ったものなのかは分からない。それはジャンも同じである。

だからこそ不安なのだ。マリーの身が危機に晒されている事ももちろん不安に違いないのだが、今まさにとんでもない事をしているのではないかという、漠然とした不安感。今ならまだ引き返せる。

援軍を呼んだほうが良いのではないか、と。

腰に備えた剣の柄に、手がのびるのは仕方が無いことだと自身に言い聞かせながら、燭台に放置されていた松明に火を灯して進む二人の背を追った。

坑道はやはり坑道らしく、岩肌がそのまま露出しているものの、長らく使われていないために大気には粉塵が少ない様子で、壁には等間隔で油が染み込んだ松明が燭台に突き刺さっており、ホークはそれに火を灯しながら前へ。

足元にはトロツコ用のレールが続き――。

「なア、ジャン」

松明は、行き止まりとなるその壁を照らしている。

否。

それは壁などではなく、

「鉋山に”扉”がついてても、そこは一般的なのか？」

人が三人並んでもまだ余裕があるその坑道を遮るのは、木製の両開きの扉だった。楕円形であり上部はその扉でしっかりと塞ぐが、下部、大地に面した部分はセメントなどで土台を造り固められている。

こんな所に扉があることはとても普通などではない。それはこの場にいる全員が、たとえ鉋山に無知であろうとも理解できるものだったが、そんな奇妙なこの状況、現状にホークはそう言わずには居られなかったのだ。

「そんなわけがない。山を無理やりぶち抜いてるからちよつとした震動でも坑道の形が、微妙にだけ変動する。だっていうのにこの不変を確信した物体を置けるわけがない。わざわざ障害物を作るよなもんだよ、これは」

「なら、この向こう側への侵入を拒んでいると考えられるが」

「そおいう事だろうよ。つまり、この向こう側に隠れてる」

「意味がわからない事ばかりしやがって――行くぞ、二人共！」

咆哮と共にハンスの右腕が膨張したかと思えば、今度はその腕に

毛皮は纏われず純粹に筋肉が以上発達した形に留まる。手首から先はまるでグローブでも嵌めたように黒く染まり、その指先を余す事無く硬質化させ、また鋭く尖らせる。

そういった変化は、やはり獣人によく見られる”種族解放”と呼ばれる己の種族の最たる”獣化”を効率的に及ぼして戦闘を有利に運ぶ手段だが、彼のしたソレは少し違う。しかしそれは異常というわけでは決して無く、さらなる高みとでも言うべきものだった。

つまりは、彼は獣人として一段階上に立っている。

それはつまり――戦闘に関して、大いに信頼して良い証拠であった。

その拳を振るい、乾ききった分厚い木の扉を打ち破れば、そこから溢れた木くずが煙となつて空間に充満する。炸裂音と共に向こう側の景色があらわになって、まず感じたのが――鼻腔に突き刺さる、錆びた鉄の臭いだった。

しかしその湿り気に、扉の破片が立てる水の音がそれを否定する。それは血の臭いだ。それに加え、不純な油の臭いも混じっている。おそらく扉の向こうには、血溜まりが出来ているのかもしれない。

――その向こう側にマリーは連れ去られていた。

「……ホーク！」

引きつり、最悪な状況を想定するホークは苛立ち、扉の向こうに松明を投げようとする。が、ジャンは咄嗟にその腕を掴んで行動を引き留めた。

――気化していない為にその臭いは”手前にある血だまり”によってごまかされているが、その油の臭いに親しみ、懐かしささえも覚えているジャンは狡猾に理解した。

そこには灯油が撒き散らされている。そしておそらくは爆薬さえも用意されていてもおかしくはないはずだ。

敵は、今回の誘拐事件に大隊で押し寄せているとも思っているのだろうか。否、たかが”旅行者”一人の誘拐ならば憲兵はわかるが、それが大隊を、ましてや騎士団が出てくるわけがない。

ならば本当に、何が目的なのだろうか。

単純に国との取引が目的ならば、さっさと自国に戻ってその準備を整えれば良い。

わざわざ敵国の廢鉞に引きこもって、さらに罨まで張る意味などない。ましてや、こんな扉まで――。

「……聞いてくれ、二人共」

考えれば、もしかしたらという予測はいくらでも出てくる。

その中でも一等最悪なもので、またなんとなく整合性がありそうなもの。それがピンと、彼の脳裏に閃光として過ぎった。

ジャンの真剣な声色に、ハンスは扉にかけた足を止め、腕を掴まれたままだったホークはそのままジャンを見た。

「あの吸血鬼は既にヤギユウに戻ってるかもしれない」

「……ステイール、どういう事だ」

「扉はかなり昔に造られたものだ。だから木は、この乾燥しきった空間で乾いてる。そして血は、地面や壁にこびりついているからこそ”錆びた鉄の臭い”を放っている。奴らはここに来ることを予測しているから、真新しい灯油をそこに撒いたんだ。そうじゃなきゃ、扉を破った時点で火が引火して爆発を起こしている筈なんだ」

「要領を得ねエな。簡潔に、至った答えだけを伝えろ」

「連中はこの向こう側に”転移魔術の魔方陣”を刻んでいる筈だ。そこからこの国とヤギユウとを行き来している――だからこそ、奴らは最初からこのアレスハイムを乗っ取るつもりだったし、その水面下での行動は大分前から行われていた事になる」

そう考えれば、この扉はその来るべき侵攻される時のための罨として設置された事が分かるし、地理的にも領地の中央よりやや東側という場所は充分過ぎる。

ならばどうして堂々と偵察兵が出歩いてたのか――それはこうして遠くからわざわざ偵察にやってきたと知らせる事によって、相手にとってこの地が未だ未知であると教えている。が、よくよく考えればアレは明らかになまでに不審だった。

アレスハイムからヤギユウ帝国は歩いても数十日の行程だ。そんな彼らが、馬も無しにあんな場所まで歩いてこれるはずがない。

まず”偵察兵”という部分にばかり目を奪われていたが……。

「……この国は馬鹿だ。大間抜けだ……っ！」

広い領地なのだから、各地をさらに小分けにして領主を置けばよかった。使わぬ魔鉱を活用するか、無駄となるならばさっさと塞いでおけば良かったのだ。入り口すらそのままという時点で、誰かが不審に思うべきだった。

軍事力ばかりを鼻にかけて、知略に至っては途方もなく間抜けだ。どうしようもない。

この戦は——負けるかも知れない。

「くそ、なら少しでも数を減らしてやる！」

魔方阵が向こう側に繋がっているならば、そのヤギユウの本部で暴れまわれば——そう走りだした所で、今度は腕を捕まれ行動を制された。

そして同時に、頬を力強く殴られる。身体が思わず吹き飛ばされそうになるほどの威力は、種族解放されたままのハンスによる攻撃だからだった。

「少し落ち着け」

彼の言葉に、

「あアそうだ。それに考えてみる——」

——作戦とは弱者に残された一縷の望み。相手をいかに騙し、いかに術中に嵌めるか。力なき故にせめて自身に有利な状況を作り出し、相手を弱体化させる唯一無二の手段。

つまり、相手にここまでさせるということは、アレスハイムがそれほど強国だと認識されているということ。

加えて、その魔方阵の向こう側には敵が勢ぞろいしていてもおかしくはない。

未だに攻めて来ないということは、予定通りでさらに潤沢過ぎる準備に自己満足し、既にアレスハイムを舐めきっているからだと言

えるだろう。

ならば、とホークは、

「――今度は、こっちがハメる番だってな」

この上なく意地悪そうに、そして純然たる悪意に基づいた笑顔で、ジャンの焦燥を飲み込んでいた。

## 救出作戦？

「兵隊の配置は終了したのかね」

無然と淹れたての紅茶をすすする軍部大臣は一息ついた所で、葉巻に火を点けながらそう口にする。

アールグレイを飲みながらタバコをふかすその姿はとても趣味が良いというものではなかったが——対面で、疲れきったようにテールブルに伏せる小柄な少女は、慇懃無礼とは全く逆の態度で顔だけを彼に向けていた。

彼女はドワーフ族の娘『ミキ』であり、王立第二騎士団——つまり偵察団の団長を務めている。

「泳がせておいた”お陰で、なんとか。しかし連中も、こっちもこっちで”交渉”しているとは思わないでしょうな」

「なに、あちらさんもブリックにエルフェーヌと、無数の国との協定を結ぼうとしているのだ。お互い様で済むと思うがね」

「しかし、相手方にとっては本命だが」

「知った話ではない。なにせ、我々はヤギユウがここに侵攻してくることさえも知らないのだからな。いつも通り国際——いや、異世界交流をしているだけだ」

くゆらせる紫煙が揺れて膨張し、そうして大臣の口が丸くなると思えばそこから煙が輪を作って吐き出された。

ミキは嘆息してから紅茶で喉を潤し、退屈そうに頬杖をつく。

「国防部隊に元特攻隊長のユーリア……ま、もしもがあっても、これなら対抗できることは出来るけど」

「そして”予測通り”彼らも、ヤギユウ本国に侵入した頃合いだろう。となれば、そろそろ向こう側も進軍開始、と洒落込むか」

ここ何ヶ月か、彼女は単体で国中を歩いて回っていた。それは既にこの国内に侵入したと予測されるヤギユウ帝国本隊を探すためであり——およそ一ヶ月ほど前に発見した時、その数千からなる大隊

規模の兵隊たちは、コロンの街付近の廃鉱に集合していた。

その後の探索によって、その最奥に転移魔術の魔方陣が刻まれていることが確認され、そこがヤギユウに繋がっていることも判明した。

ミキの魔法によってその行動の全ては、彼女の報告を受けた大臣以外知るものは居らず、故にアレスハイムにとっても大隊規模が”溝”へと行進した事には不意打ちを受けたことだろう。

そうした事は無論、情報漏洩を心配したことであり、彼らは事実それが正しいと思っていたし、指揮官クラスの連中はそんな突拍子も無い命令でも、大臣を信頼して行動を起こしてくれた。

「おそらく、今回は数日で終える戦闘だ。下手をすれば一日ともたない。さらにわざわざ自ら国内に”猛獣”を招き入れたのだ。援軍とてままならない筈だし、そもその主要の戦闘でさえも敗北する兆しもない」

「それなら良いんだが。問題は、あの三人組か。こちら忙い身で、応援に行かせる人でもない有様だし――」

考えても仕方が無いことがある。

ミキは言葉を切って嘆息してから紅茶を飲み干し、未だ残る己の仕事に戻っていくのを、大臣はただタバコをふかしながら見送った。

「ここが、ヤギユウ帝国か」

坑道は、本来奥へと続き道を分かつはずなのだが、その半ばが崩れ落ちてふさがってしまった。が、それは随分と前からその状態であつたらしく、魔方陣はその手前に刻まれている。布に、血で描いた魔方陣は依然として妖しい輝きを放っていた。

そこを踏みしめ魔力を込めれば、輝きが周囲を包んで――。

視界に飛び込んだ光景は、凄絶としたものだった。

血で満たされた、寒々しい空間。そこらかしこに肉片、千切れた四肢、零れた臓物が撒き散らされていて、あの狭い会議室の一回り



ほど広いその部屋の壁沿いにコを描いて並ぶ机は、その上に無数の生首を飾っている。

——そこは恐らく、拷問室だとか牢屋、あるいは処刑室、死体安置所などのそういった部屋なのだろう。

目の前には、扉のない唯一の出入り口。足元には、血の池の中で魔方阵が輝いてその形を示している。

「ほうほう、貴君らがアレスハイムからの使者かね？」

燕尾服姿の男が、そんな出入り口の闇の中からぬうつと姿を現した。口元に生えたささやかなひげに、ニヤリと笑った際に覗かせる鋭い犬歯が特徴的な、円筒形のツバの両側がそり返った帽子をかぶる男だ。

彼は水音を鳴らして空間内に入るやいなや、黒い外套を翻して革張りの茶色いスーツケースを彼らの前に投げ捨てる。

溜まる血が飛沫をあげて彼らを濡らし——口元を抑えていたジャンは、いよいよ堪え切れなくなって胃液を口から吐き出した。

「貴様、あの吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>で相違ないな」

「ふむう、なにゆえ狼<sup>いぬ</sup>ところなぞが紛れ込んでいるか理解できかねますが……ま、ま、細かいところは置いておきましょう。これで心置きなく、進軍は開始したわけです」

——ミシミシという繊維の悲鳴が聞こえたかと思うと、間もなく断末魔が響き、ハンスの両腕が図太く変異する。指先は黒く染まり、尾てい骨あたりから毛を膨らます尾が生えてきた。

「やはりな……、ジャン。こいつは罠だ。オレたちを、国から離すことが目的だった。そしてまんまと引っかけたわけだ——オレたちが主戦力なんかじゃねえっ——誤算を除けば、正しい判断だな」

「ほうほう、何を仰ります。貴君らは戦闘的な面で不安を抱いて強制離脱を促したわけではないのです。いわば戦略的、取引に使わせていただこうという腹ですな」

紳士然とする吸血鬼の言葉に、苛立ちをぶつけるハンスは勢い良く壁を殴り、砕く。壁には大きな穴が開いて崩れた破片が机を砕き、

そうすると吸血鬼は「おやおや」と困ったような声を上げる。

彼は巻き上がる煙を吸い込まぬよう、外套で口元を抑えた。

「そんな事はどうでも良いんだ、貴様——お嬢様<sup>マリー</sup>をどこにやった！？」

「そんな私情で私の収集物<sup>コレクション</sup>を壊されては困りものです」

「私情」だと？ 貴様……マリー・ベルクールはただの道楽家の娘なんかじゃない。名だたる資産家の孫娘だ！ 魔術師組合創設者の孫だぞ……世界を、敵に回す覚悟があんのか？ その貴様の性器ほどに小っせえ肝っ玉でよお！」

「我が判断は我が主の判断——が、遅すぎましたな」

ハンスの怒号に、素知らぬ顔で男は血溜まりに浸るスーツケースを指さした。

「肉体<sup>コト</sup>はこの中にございます。貴君らが来た時点で、既に人質としての役目は終えられたのでね」

「貴様……ッ！」

ならば交渉の余地なし——そう判断したハンスは瞳を細い楕円形に形を変え、瞳を暗い茶色から琥珀色へと変色させ、すると途端に彼の中に孕む魔力はその量を爆発的に増幅させた。

音を立てて彼は走り、息をつく暇もない鋭い一閃。その予備動作を見せぬ故にタイミングが図れぬ右腕の一撃が男の腹部に食らいついた——誰もがそう認識した状況で、しかしその事実は覆る。

指先が突き刺さった確かな手応えはなく、その男の姿は影となり黒く染まって霧散する。霧は瞬く間に彼らの背後に移動すると、再び人の形を作り……男は帽子を脱いで胸に当て、微笑んだ。

「無知とはなんとも恐ろしく愚かしいことですな。私はいち早く、そのケースの中身を見て脱力するあなた達が見た——」

言葉を遮る一閃が男の顔面を切り裂いた、が。やはり顔は一瞬だけ霧状になり、すぐに戻る。

男は不快そうに剣を抜いた青年、ジャン・スティールを睨みつけた。

「騎士見習い以下のお子様が、私に手出しできるとでも？」

「なんなら、てめえは騎士だったのかよ」

「ええ、無論わたばっ——」

さらに一閃。ジャンの耳に憎らしくこびり付く声は、そんな奇妙な悲鳴にも似た声を残して顔を両断される。

「なにが騎士だ、クソ野郎！」

ジャンの咆哮に、男は帽子を目深にかぶり直す。

彼にとってはその所作すらもその心を苛立たせた。

——いかにも偽物らしいスーツケースを投げ込んで、誰か知らぬ死体をいかにも本物だと言うように見せつけて、驚き嘆く姿をせせら笑いながら見る。悪趣味だというのは、彼の”私室”を見るだけで容易に理解できたが、それは悪趣味を通り越して下衆だ。

気が長い方だと自称しているジャンでさえ、ハンスには同調せざるを得ない。

驚きなのはむしろホークの方だ。

彼はここに来てから口数が少ない上に、既に気配を絶ち切って周囲を伺っている。出入り口の前からこの吸血鬼が消えた時点で松明をその向こう側に放り込み、様子さえも伺っていた。

さすがは隊長と言うところだろう。彼になれば、マリーの搜索を任せられるかも知れない。

「貴君、騎士を愚弄するつもりかね」

男の、底冷えするような声は明らかになまでに怒気を孕んでいた。

ジャンは睨み返し、ツバを吐き捨てて剣を構える。

「誰が騎士をバカにした？」

「ぬう……？」

「おれがバカにしてんのは、てめえ一人だけだ気狂い野郎！」

「貴君——」

「二人共、ここはおれに任せろ。悪いがハンスさんは、抑えて先に行ってくれ！ ベルクールさんは、あんたが助けるべきだ！」

ジャンの言葉に二人はにわかに顔を見合わせると、声もなく頷き、

そのまま向こう側へと走り去っていく。血溜まりを鳴らす足音はやがて確かな大地を叩くものに代わり、しばらくして扉を蹴破る轟音。そうすると間もなく、気配もろとも音は消え失せた。

その気にさえなればジャンなどからは容易に逃げ出せる男は、それでも立ち尽くしたままでジャンと対峙している。

最早緊張など無く、怒りと、それとは裏腹に沈んでいく腹の底が彼を満たしていく。そして同時に、右腕に込めた魔力が、それ故に包帯を透かして魔方阵の存在をあらわにしたが、男はそれを気にした様子はなく、

「ウラド・ヴァンピール」

男は指を鳴らすと――刹那。ジャンの足元にあった転移魔術の魔方阵が一瞬消え、そうして今度は”別の”魔方阵が展開。彼が足元の輝きの明滅を知覚した瞬間、新たな魔方阵は瞬時に魔術を発動させた。

床を浸す血だまりが波打ったと思うと、それは磁力に反応する砂鉄のように奇妙に動きを変え、そして無数の水が細い柱を作り――その先端は鋭く、彼が新たな魔術の反応に意識を向けた瞬間。

上下左右、四方八方から血液が鋭い針となってジャンの肉体を突き刺した。濃厚な血の色がジャンの姿を飲み込んだが故に認識できず、

「貴君を殺した者の名だよ……といっても、やはり”遅すぎた”かもしれないがね」

ウラドはようやく、微笑を取り戻したのだ。

僅かばかりの幸福感を胸に携えて。

そしてそれが崩壊するのも、本当に僅かな時間を置いてからだっ

た。

「おれはジャン・スティール」

声はすぐ背後――そして頭上から聞こえた。背後は壁、それに沿って配置されている机しか無いはずだが……いや、それ以前に、あの無数の針の襲撃から逃げた影を見逃すはずがない。

ウラドは胸に沸き立つ嫌な予感ばかりを気にしながら、振り向いた。

「あんたを殺す男の名前だ。なあ覚えておいてくれよ、伊達男さん」  
彼が背にする壁は、妙なまでに明るい。まるで月にでも照らされているような明るさであり、また包帯に包まれている右腕も禍々しいまでの魔力を放っていた。

——ジャンがここに残ったのには、理由がひとつだけある。

本当ならばハンスに任せても良かったのだが、以前本で読んだことがある。それは小説だったが、ドラキュラの物語だ。その物語の中で、ドラキュラは狼男を仕えていた。たったそれだけの理由だったのだ。つまるところ、ハンスがこのウルド・ヴァンピールに勝てるか否かで考えた場合、そういった縁起の悪さから、ジャンはそれを未然に防いでいた。

それ以降はごく私情だが、やはりアレほどマリーを想うハンスなのだから、彼が助けるべきだと思った。彼らがそういった恋愛感情を抱かない仲だとしても、やはりそういったものがベターであり王道なのだ。

そして最後に一つ。

彼が騎士であるということ。それもとびきり、騎士道精神を無視している外道男だということだ。武勇にも程がある。

肉体強化パワー・ポイントによる運動能力は、瞬間的にジャンの限界を容易に越える。

さらに動体視力は鷹や鷲など目ではなく、故に彼は最低限の針の破壊から抜け道を作り、薄暗いこの空間を利用して壁を蹴り、素早く彼の後ろに回りこんだわけだが——今度はそれは通用しない。そしてまた、こんなものばかりを使ってもこの吸血鬼ヴァンピールは倒せない。

「大きく出たな、貴君。英雄にでもなったつもりかね、小僧が」

「騎士の出来損ないが、偉そうにしゃしゃり出てどうしたんです。そんなに誇る実力で、見栄を取り繕わないと害虫駆除も出来ないくらい肝っ玉が小さいんですかね？」

——騎士は子供の頃からの憧れだった。そして英雄<sup>ヒーロー</sup>でもあった。

どこぞの軍事に詳しい者や、その力を政治的に利用する政治家たちばかりが注目していた存在ではない。多くのものがその存在を崇めたし、憧れた。勇気や希望さえも与えてくれた。

そんな騎士は、少なくとも個人的な趣味に則って人を残酷に殺したりしないし、好き放題に解体して最終的に生首ばかりを並べたりなどしない。それはまず人間として異常であるし、それ故に、騎士を名乗って良い存在などではない。

「つまり」

ジャンは、平静を装っていたが、いい加減限界になりつつあるのを、奮い立つがゆえに全身が小刻みに震えるのを確認して、理解した。

「御託はいいから、さっさとかかってこいよ！」

右腕の包帯を引き剥がすと同時に、あらわになるのが右下腕を包むように刻まれた魔方陣。それはまるで胎動するように、脈拍に合わせて明滅した。そして肘の魔力解放<sup>アウト・ルック</sup>もまた魔力を吹き出し、背中の肉体強化<sup>パワー・ポイント</sup>は適切な加減で肉体に活力を与え続ける。

それからもう、吸血鬼が微笑みを見せることは無くなった。

## 救出作戦？

「あの『ジャン・ステイル』という少年は、何者なんだ」

扉をぶち破れば、薄ら寒くなる通路に出る。先ほどの空間は背筋が凍るような惨劇の場だったが、ここから先は実際に気温が低く空気が冷たいために、言葉のまま背筋どころかその滾る血潮さえも凍ってしまいそうだった。

一本道の通路は右に左にと、直角な曲がり角ばかりを作っていた。壁には一定の間隔で鉄格子が存在し、その向こう側には白骨した遺体や、未だ鼻腔に突き刺さる腐臭を振りまく腐乱死体などが。さらにその首や四肢に鎖を食い込ませるものばかりが目立ち、生存している者は誰一人としていないようだった。

中には錆びた斧を自らの首に当てたままの死体さえもある。それはまだ新しく、”辛うじて”性別が判然とするものであり、その奥には首を切り裂かれた三人の男女の遺体が放置されている。

たまに、薬物の臭いが凄まじく臭った牢獄があった。その鉄格子の向こう側には、壁に血で幾何学的な落書きや、文字とすらなっていない文章がところ狭しと綴られている。壁に抱きつくようにして死した男の指先は、既に第一関節までが減摩していた。

終わりの見えない地下牢獄にうんざりとしながら、ホークは寂しくなった口を慰めるためにポケットをまさぐるが――愛用の紙巻タバコを忘れてきた事を思い出し、短く舌打ちをしながら、クセのように、己を落ち着かせる為に視力を失った左目を眼帯越しに指先で撫でる。

「みんなのお気に入りさ」

「みんなの？」

「ああ、特に――現在ではアレスハイム王国最強とされている『元・第一騎士団で特攻隊長のユーリア』ケンタウロスにな。んでその人馬は軍を統べる大臣に気に入られている。そういうことだ。彼女とは、小耳に挟

んだ話によれば因縁だか怨念だか、忘れたがとにかくそういうものがあるらしい」

「物騒な話だな。いずれ成長したステイルと一騎打ちでもするつもりか？」

「どうだろうな。魔法もねエ小僧にあそこまで目をかけるんだ。ただ戦闘センスはあるが、騎士向きじゃない。あの近接戦闘の才能は馬にのったり槍を振ったりするためのもんじゃねエな。傭兵<sup>オレたち</sup>とか、強盗、盗賊だとか、そういった連中のもんだ」

——アレスハイムでは騎士になるためには魔法を持つことが絶対条件とされている。そうして騎士至上主義であるためにわざわざ養成学校なんてものもあるのだが、魔法を持たぬ一人の青年にあそこまで人員を割くのは確かにおかしな話だった。

現在の特攻隊長に、わざわざ他国から呼び出した”名高い”傭兵組合の一教導団の団長、そして軍の中枢たる警ら兵を統べる隊長までも教育係に遣う有様だ。

その待遇はまるで一国の王子が如く。

だが出自は一般層よりも底辺とも言える——戦災孤児で施設育ち。辛うじて義務教育課程を終了するが、高等教育を受ける事無く鉱夫となり鉱山、炭鉱などで働き続け、やがて騎士の入試試験の受験資格の一つたる十八歳を超えた所で、アレスハイム王国へ。

少なくとも平穏とは縁のなさそうな出所ではあるが、彼は彼なりにその中で穏やかな日常を作り成長してきたのだろう。ともあれ、その事にともかく口を挟めるものなど誰もいないのだ。わざわざそれを指摘するなど、無粋以前に品性を疑われてしまう。

「一騎打ちはわからんが、それに近いことはするんじゃないのか」  
「恐ろしい国だな」

とは言うものの、ハンスはホークが冗談で言っていることはわかっているし、そうするのは彼自身答えられない——純粹にわからない——質問だったからということも理解していた。

だからこんな状況でも笑い混じりにそう返せば、



「ま、アレスハイムは特にな」

ホークは肩をすくめながら、狭い階段を駆け上がり、ハンスを先導する。

そうして足を止めて、短く、胸の奥から勢い良く息を吐き出した。  
「言ッてる間に、もう出口だ。優秀な奴の辛いところだな」

――鉄の扉に近づくにつれて空気は凍り、壁には霜が張り付き、はく息は煙のように白く染まる。

やはりここは遙か北方の土地だ。

扉の先に広がる銀世界を想像しながら、ハンスは脇のホルスターから抜いた拳銃をドアノブに引っかかる南京錠に照準し、発砲。澄んだ空気に三度ばかり鋭い破裂音が響き渡った後、ほのかな硝煙の臭いを残し、南京錠は甲高い金属音を鳴らして床に落ちた。

次いでホークは扉を蹴破れば――凍える暴風が全身を襲う。

思わずその身を抱くようにして外に踊り出れば、目に痛いぐらいの眩い輝きがあった。

そこら一帯は雪原であった。

小屋ほどの大きさの建物一つ。そこは彼らが出てきた地下牢獄の入り口だ。

辺りには何もなく、また昼間らしく燦々と降り注ぐ太陽光はその銀世界を余す事無く照らし、そして反射する輝きは思わず目を細めてしまうほどであり――。

眼前には一軒の民家。

そこは、彼らが出てきたレンガ仕立ての小屋に対して中を見せびらかすように一面を寒々しいまでのガラス張りにして……。

「そういうワケか――発現<sup>めざ</sup>めろ」

ホークが嘆息混じりに、魔法を唱える。共に彼の下げる右手には、槍を摸す長い輝きが出現した。

「ディライラ。もう俺は我慢ならん。行くぞ！」

「ああ行ッちまえ！ オレが全力で後方支援する――無限射程の長<sup>サポート</sup>銃<sup>ライズ</sup>」

その民家の中には、多くの男達が居た。少なく見積もっても十人以上の野郎どもだ。十数メートル離れている、息をするだけでも鼻の粘膜が凍りついてしまいそうな空気の中でも、吐き気を催すような濃厚で醜悪な男の臭いがする。

そうして彼らが前にするのは、首元がゆるく胸元があらわになる、グレーと黒のストライプ柄のセーター姿の少女だ。彼女は床を這い、怯えた形で後退する。足を忙しく動かしているようだが、彼女の足は、両腿の半ばから存在していなかった。

逃げられないように切断されたのか——最初はそう思った。

セーターの裾から、動く度にあらわになる桃色のシルクのショーツを見る度に、男たちは口笛を吹き、にやにやとどす黒い笑いを漏らす。

だが、どうやらそれは違うらしい。

まず切断面が綺麗過ぎる。魔術や魔法による治癒でも、あそこまできれいに皮膚は繋がらない。ならば、それは元々存在していなかったことになる。

ホークはその冷たい雪の上に身体を伏せた。長物の狙撃銃の二脚を深々と雪に突き刺すことによって安定させる。

——付属する照準器を覗き込み、そこに刻まれる十字を、レクテイル今まさに毒牙と化す腕をマリー・ベルクールに伸ばす男の頭部に合わせ、

「ふう……」

押し殺した短い嘆息。

引き金は、慣れた手つきで弾かれた。

開かれた広大な空間に、気持ちがいままでの破裂音が響き渡り——後数歩ばかりでガラスを突き破ろうとしていたハンスを遥かに上回る速度で、その分厚い鉄の壁さえも打ち破る徹甲弾は障子紙でも破るようにガラスを砕き、それが粉碎する音さえも置き去りにした。直後に、その男の頭部は爆ぜたように吹き飛んだ。

顎から先が喪失し、鮮血が直角方向へと扇状に撒き散らされ、その肉体はワテンポ遅れて転がり、その血の中に倒れこむ。むき出

しになる食道から、蛇口を捻るように血が溢れて池を作り、一様に動きを止め驚愕する男たちの中に、鬼神たる憤怒の表情を携えたハンス・ベランジェは飛び込んだ。

振るう一閃が無防備な男の胸に深く突き刺さり、逆袈裟に切り裂けば心臓はことごとく破壊される。

さらに蹴りが首筋へと撃ち込まれれば頸髄を碎き、拳を作れば胸を貫通する。どれもこれもが必殺の一撃足りえるほど洗練されていて、故に彼に立ち向かえる者など誰一人として居らず——故に、彼から逃れられる者も誰一人として居なかった。

あわや慰みものになろうとしていたマリーはガラスを一身にかぶりながらも頭を抱えた形で丸くなり、動かない。

惨劇と化す民家を眺めながら、一先ず一件落着か——ボイス長槍の柄を砕くように握りつぶせば、その狙撃銃は瞬く間に霧散し魔力の塵となる。

すっかり凍えてしまった身体を起こして短く息を吐けば、民家の影から黄土色の外套を羽織る、立派な装飾の鎧を纏う一人の男があらわれた。

——民家の奥の部屋から、武装した男たちが数人現れる。が、ハンスなら何の問題も無いはずだ。

また銃を出さなければならぬのか、と面倒さに思わず溜息を漏らせば、男は静かに腰から剣を抜く。

促されるように、ホークも腕を交差させるようにして二本の剣を振り抜いた。

「坊主だと思えば、どうしたことか。俺の予想ってのはこんなもんか——いや、その眼帯に、二本のフランベルジュ……まさか」

男の声が聞こえる程の距離に近づけば、失望から歓喜へと声の色が変わるのをホークは感じた。

短い金髪の坊主頭をなでつけるようにしながら、そのホークに勝つとも劣らぬ屈強な肉体を持つ男はにわかな笑顔を作ってみせた。

「傭兵組合『ブラック・オイル』教導隊のディライラさんじゃない

か！」

——傭兵組合はそういった名称を掲げるために、いくら組合と言えども、組合ごと<sup>ギルド</sup>にその名称は異なりまた慣れ合うこともない。つまり、組合とは名ばかりの民間企業だった。

その中でもガウル帝国発祥の『ブラック・オイル』は現在世界で最も有名な傭兵組合となっており、その仕事は戦闘の代理や戦争の助っ人、また戦闘訓練を行う教導や、武器の買い付け、横流し、あるいは保管、貸出……。さらに荷物運びや護衛、さらにはお使いなど、殆ど”何でも屋”のように仕事の幅を広げており、それ故にその年商は金貨一〇〇億万枚を超えるという。

またその中で、戦闘を請け負う部隊は組合の八割であり、さらにその上位となる教導部隊は八割の中の一割。教導部隊はいくつかあるがやはり、戦闘訓練を行える人員の数は限られているためそう多くはなく——その中の一つの部隊を統率する男ともなれば、有名なものも仕方がない話であった。

一般人や軍関係、あるいはそういった世界の裏たりえる部分に精通しないものならば知らぬのも無理は無いことだが、一国家の騎士として、それを知る者は多い。

「悪ィな、オレはあんたの事は知らねェし——興味もねェんだ」

「いや、構わない。坊主の代理というにはあまりにもレベルが高すぎる相手だ——全力で相手をさせてもらおう！」

かつて偵察兵としてジャンと対峙し、クリードと呼ばれた男は、そういった咆哮と同時にホークへと特攻した。

正直なところ、ウラド・ヴァンピールの戦闘能力はそう高いわけではなかったし、その攻撃速度は適度な肉体強化で避けられる程度のものでもあった。

が、攻撃はやはり霧散する故に当たらず、捉えても彼へのダメージになるわけではない。

「貴君！」

背後から呼び声が、狭い空間内に響き渡る。と同時にジャンは深く身を屈めれば――前方で構えた大型の自動拳銃が火を吹いた。虚空を穿つ弾丸は、その直径が13mmにもなる大型だ。思わず食らえばただではすまないだろうが……主に知略のイメージにある吸血鬼にしては、その戦術はあまりにも”おざなり”だった。

だから剣を振るえばウラドは霧散し、対面へと逃げる。ジャンはそこへと右腕を突き出せば、魔方陣が輝くその右腕は、確かにその胸ぐらを外套ごと掴んでいた。

「くッ!？」

フオービドゥンフルーツ

「禁断の果实」

指はぬるりと、服を通り抜けて男の体内へと潜り込む。

――その魔術の魔方陣を刻まれた腕は、既に魔術干渉をされているとみなされ、つまり彼の右腕は魔術的存在となっているのだ。故に吸血鬼である彼はその腕による拘束は拒めず、またいくら霧や煙となろうとも、まるで実態があるように捕えられてしまう。

そして基本的には白兵戦を得意としない為に力ではジャンに勝つことが出来ず、またその強化された動体視力や運動能力から、吸血鬼ヴァンピールによる魔術はことごとく避けられてしまう。

密室ならば簡単に倒せる――そう余裕綽々だったことが仇になる。まだその領域に限りさえなければ、抗う手段もあったのだが。

指先が飲み込まれ手首までが体内に届く。そうする間に、息が詰まったように顔をしかめるウラドは腕の震えを抑えながら、ジャンの頬に長方形の箱に取っ手をつけたような拳銃を押し付けた。

「退け、下流……!」

引き金を絞れば、13mmの銀の弾丸が――先程までジャンの顔があった場所を撃ちぬいた。今では彼の顔は、既にウラドの頬に触れるか否かの距離にまで迫っていた。

彼の肉体が具現化している隙にジャンは素早くバスタードソードを男の腹部に深々と突き刺し、気がつけば確かな手応えの中で、そ

の刃は背へと貫通し、鏢までしっかりと切り裂いていた。

ウラドは口から鮮血を吐き出し、目をうつろに、それでもまだ拳銃の引き金に指をかけ、またジャンの側頭部にそれを押し付けた。が、今度はその腹部を蹴り飛ばして剣を抜き、その切先は鮮血で尾を描き――発砲音。弾丸は幾度目ともなるように壁に叩きつけられ、ジャンを捉えることができない。

そうして引きぬかれたジャンの右手には、確かな”リンゴ”の形をする果実が握られていた。

迷わず齧れば、瑞々しい果実が果汁を迸らせて溢れ始める。が、それが血溜まりに垂れて波紋を作るよりも早く、また口腔内で咀嚼され嚥下されるよりも早く、その全ては魔力となり霧散した。

「し、知っているぞ……貴君。それは、禁呪だ……怒りにかまけて理性を失ったな。あるいは、単純に使いこなせていないか……ふ、ククク――だから言ったらう、無知とは恐ろしく、愚かしいことだ、と」

男は苦しそうに言葉を紡ぎながら、その間に吐血する。

実体化した際の傷は霧散しても戻らないらしく、男は壁に身体を打ち付けて支えにして、その手を患部に当てて回復魔術をかけるが、ジャンの鋭い視線がそれを許さない。

――いつも通り、身体から魔力が、あの高揚感が溢れ出す……事はなかった。

この右腕は強制的に相手の魔法を奪えるものだとはかり思っていた。だから、実際にそうしてみたのだ。事実、取り出した果実の反応はそれまでと同様だったのだが――どくん、と胸が大きく高鳴った。

それをきっかけにしたように、頭を中心からじわりと鈍い痛みが溢れ出し、すると共に脳みそを鷲掴みされているような不快感と、堪え切れぬ激痛が襲いかかった。

記憶が過る。

嬉々として己が少女を解体する映像。

嬉しそうに高笑いしながら首をナタで切断し、机に並べる映像。  
牢獄で男を犯す男を撃ち殺し、安堵し泣きながらすがってくる男に、さらなる屈強な同性愛者たちを複数人差し入れた映像。無論、女性の場合などはその倍以上の数がある。

悪夢だった。

その中に、圧倒的に数が少ないものの、網膜に焼き付くように残像を残すものがある。

それは己が膝まずき、敬愛する誰かに深々と頭を垂らしているものだ。おそらくは主人たる者なのだろう。

が――生首やこの濃厚な血の臭いに嘔吐したジャンに、それが耐えられるはずなど無い。

気がつけばその身体は膝まずき、両手で頭を抑えて、その頭は半分ほど血溜まりの中に浸っていた。

「ク、ははッ！ 愚者を見下すのはやはり良い！ 知恵の実の味はどうだったかね？ はははッ！」

それまでの鬱憤を晴らすように、ウラドはその革靴の底でジャンの頭を踏みつける。そうした後には身を弾ませて、恐る恐る屈んでから血溜まりの中に沈むバスタードソードを取り上げて、出口の向こう側に放り投げた。

「ち、知恵……？」

ジャンの消え入りそうな声を高らかな笑いでかき消しながら、男は告げる。

「そうだと、貴君は知らなかったのかね？ 知恵の実には知恵を授ける。貴君が口にしたのは私の記憶だ。無論、その中に私の息の根を止めるヒントさえもあったはずだが……どうやら他人の記憶は肌に合わないらしい」

そして、とウラドはこの上なく楽しそうな笑顔を作った。

「先ほどの弾丸で、五芒星は完成した」

指を鳴らせば、空間に五芒星が浮かび上がる。そうすると同時に、床からも小難しい魔法文字が刻まれた魔方陣が展開する。その中心

点に、跪いたジャンが位置した。

「身体能力のみで驕り、圧倒していると錯覚したがための誤算。愚かしい、脳筋にありがちな敗北だ——我が記憶を噛み締めながら、地獄の怨嗟に飲み込まれるが良い」

「……っ！ ウラド・ヴァー——」

彼の名を呼ぶより早く、彼のつま先がジャンの顔面を蹴り飛ばす。声は言葉にならず、ただ息だけを吐き出してジャンは大きくのけぞった。

地面には深淵たる穴が空き、飲まれるというよりは落ちる彼は、ウラドの空間に響き渡る笑い声をききながら——紡ぐ。

「天駆ける馬の翼よ、空間せかいを統べる者よ、我が声を聞き、我が言葉に耳を傾け、我に力を貸し給え——変則転移シフト・チェンジっ！」

肉体が輝きを放つ。

下から風が起こっているのか、己が大気を乱して風を起こしているのか定かではない。吐き気がするほどの浮遊感が全身にまわりついた。だがそれも、さほど気になりはしない。

詠唱したのは、マリーから与えられた魔術書に刻まれた一節だ。魔術刻印を刻んでは居ないし、魔方阵もない。故にそれらの代わりを為して世界と繋がり魔術を発動させてくれるのが言葉だ。だからこそ大気中の魔力が反応してジャンを包み、その肉体自体が光っているような錯覚をもたらした。

そうした直後、臓腑が全て浮かび上がるような気色の悪い感覚は消え失せて——血で湿る床の上に、ジャンは無防備な体勢で叩きつけられた。

「……ふう、はぁ……」

血は、砕かれた机は、飛び散っていた死体の一部はジャンが飲まれかけた穴の中に全て落ちてしまった。

あのウラド・ヴァンピールも同様だ。己が作り出した穴に飲み込まれていった。

「……勝負には、負けたよ」



ジャンは己の不甲斐なさを嘆くように、魔方陣の輝きが失せた右腕を力いっぱい床に叩きつけた。

——あの魔術は『何かと何かを入れ替える』ものだ。今回はジャン・ステイルとウラド・ヴァンピールを入れ替えた。位置関係はそのままであり、故にジャンは彼が居た場所に、彼はジャンが居た場所に移り変わる。無論その指定は術者によるものだから相手の承認など不要であり、ウラドは未だ理解不能なうちに絶命しているかもしれない。

「試合には、勝ったけどな……」

ジャンは酷く居心地が悪くなりながら、息を吐き出した。

——今回は完敗だ。

ウラドが言うとおり、自分が敵を圧倒しているという事に酔っていたのかも知れない。だから相手が無駄だと知っていながら撃ち続ける銃に疑問を抱けず、またいつもと形状が違い、引き出し方も違う『果実』に不信感を覚えられなかった。

記憶は魔術の発動を停止したと同時に消え去り、今では何に對して苦しんでいたかもわからないが……ともかく、今回の勝利は幸運他ならない。つまり負けたと同義だ。

純粹に喜べぬ勝利に、また自分には決して無いと思っていた驕りに、彼は少しばかりの間呆然として——遠くの方からけたたましい銃声が三度ばかり続いた所で、身体を起こし、先を行った二人の後を追うように歩き出した。

無気力そのものだが、今はそんな感傷に浸っている暇はない。

そういった唯一の目的が身体を駆り、有り余る体力がそれを実行した。

「……ありがとよ、ヴァンピール吸血鬼」

今回は良い体験になった。

この気分が戻ることは当分後のことだろうが——これでまた、成長できる。

ジャンは力なくそう告げると、床に転がるバスタードソードを拾

い上げて鞆に収めた。

## 救出作戦？

『溝』より遙か手前に二十人からなる小隊が待機し、そのすぐ後方に成績優秀者たる養成学校から来た三名の騎士候補生。内二名は上級生であり、一名のみが下級生だ。本来ならば下級生はもう一人いたのだが……。

「な、ジャン・ステイルって知ってるか？」

安価な薄い鎧に身を包む白髪の男は、くくれば尾長鶏のようになる後ろ髪を翻しながら、傍らの赤髪の男へと声をかける。『レイ・グリーム』に肩を叩かれた男、『クラン・ハセ』は気怠そうに顔を向けた。その背後では驚いたように目を見開く、濃い緑色の髪の青年が彼らをじっと見ていたが、二人はそちらに視線すら向けない。

「ああ、今回の”訓練部隊”に居たはずの、もう一人だろう？」

「そう。今どこにいるか、ちよいと小耳に挟んだんだ」

レイは快活な笑みを浮かべて、ポケットから手のひら大の楕円形で薄い白い魔石を取り出した。

「また盗聴か。火傷をしないうちにやめておけ」

「いいだろ別に。んで、話は戻るが――どうやら、傭兵隊の隊長と一緒に、ヤギユウ本国に乗り込んだらしい」

「……どういう事だ？」

クランは怪訝そうに眉をしかめる。レイは楽しそうに、まるでうわさ話好きの女の子のように結果を先に口にしたい衝動を抑えながら、分かりやすく答えてみせる。

「ちらりと前方の”お守り”のも小隊の動きがないことを、そしてそこから地平線に近い位置で待機する本隊の様子を確認してから、頷いた。

「元々、ヤギユウ帝国はこの国にこっそりと魔方陣を刻んでたらしい。転移魔術らしい。んで、なんやかんやあってそこに踏み込んで、向こう側へ。今はその魔方陣があったらしい魔鉱は無事らしいが、

その魔方阵自体が消えちゃまっているということだ」

「……人質として取られたら不利になるな」

ああ、とレイは求めているものとは異なる反応に少しばかり萎えたように返事をして、

「だけどよ」

この訓練部隊に推薦されるような青年だ。加えて、ジャン・ステイルは騎士の間でも良くうわさ話を聞く名前であり、その中の一つではどうやら特攻隊長に警ら兵隊長に傭兵隊長長などから二ヶ月に及ぶ訓練をみっちり行われていたという話だ。にわかになんて見に行ったが、それは事実だった。

となれば、クランが漏らすような危険性はあれども——確率はそう高いわけではない。逃げに徹すれば少なくともそうではないだろうし、傭兵隊の隊長がついているのだ。

だから、

「これで敵さんの援軍が無くなるって話になったら、面白くねえか？」

クランの胡散臭げな視線を受けながらも、彼は一度ばかり、校庭で彼と行った戦闘に巻き込んだ青年こそがジャンであることも知らずに、未だ見ぬそんな勇猛で期待できる男の姿を想像した。

「おい、そろそろ覚悟を決めておけ」

小隊隊長が首だけを後ろに回してそう告げると——それから程なくして、遙か遠方から鬨の声があがった。

鎧を纏い、一様に剣を振り上げる連中の行動はどうにも緩慢でいけなかった。

俊足で肉薄すれば相手は反応する暇もなく、紙でできたのかと見紛うほど容易に板金<sup>プレート</sup>はひしゃげて破壊され、肉体はそこから侵入した腕に突き刺され、武装兵は容易に死滅する。さらにその男を突き飛ばせば背後に控えていた者が怯み、奪った剣で殺害した男ごと串

刺しにすれば、吐血し、血の泡を吹いた。

さらに残る一人は頭を掴んでしまえば混乱するばかりであり、いよいよ溜飲も下がってきたハンスは指先でその首を搔っ切るだけで終わらせた。

血飛沫を上げる男を投げ捨て、涙や鼻水に塗れて呆然とハンスを眺めるマリ―へと彼は歩み寄り――膨張した筋肉を戻し、全てを傷つける鋭い指先は、弦楽器を奏でる者よりも柔くなる。

「お迎えに上がりました」

血まみれだったが、それでもそこから穏やかな雰囲気は醸し出せていた。それは未だ残る背広の効果であつたのかもしれないが、ただ微笑むだけで彼女の表情は――また崩れ、潤う瞳からはぽろぽろと涙がこぼれ始め、片膝を立てるハンスへとにじり寄ってくる。

「ばかッ！ 遅いわよ！」

「申し訳ございません。いやしかし――足をどこに落としてきちまっただ、間抜け」

「あんたが昼間から寝呆けているからよ！ あそこの部屋の向こう側に持っていかれたの！ 取ってき――」

いつもの調子でのやり取り。視界の隅から見えるホークの命のやり取りは、それを認識していても彼らが干涉するわけではない。後方支援を任せろといった彼だが支援される程の状況でない以上、今はともかく早いところ彼女の足を持って装着。逃げなければならぬ。

そう思考するが早いか、音もなく……否、音を超える速度で飛来した柔軟な殴打が側頭部を殴り飛ばし、ハンスの肉体はひしゃげて部屋の奥へと吹き飛ばされていった。

にわかに何が起こったか理解できぬまま、

「全知全能なる神の御心のままに――治癒促進ッ！<sup>メデイク</sup>」

祈り叫べば、床に衝突すると同時にハンスの肉体が淡く輝き――ハンスは己の無傷を理解しながら着地し、ふり返る。肉体はそれと共に筋肉を発達させ、先ほどと同様に戦闘体勢へと移る。

彼女の放つ魔術は治癒魔術であるが、そう言っても無条件にあらゆる傷を治してくれる代物ではない。飽くまで自己治癒能力を促進させ、脅威の速度で傷が回復するだけである。仮に機能停止をした臓器にその魔術をかけたとしても回復しないし、心臓が止まっていればその効果は望めない。

しかし簡易な詠唱でもへし折れかけた首が治癒されたということは、少なくとも魔術の即効性のお陰ということもあって——つまり、彼女が優秀な魔術師という証であった。

「あら……残念。随分なコンビネーションね、羨ましいわ」

深い闇を思わせる黒髪が、風もないのにその腰付近でざわついている。琥珀色の瞳がぎょろりとハンスを、そうしてマリーを舐めるように眺め——そして何かを投げる所作をする。と、その手から放たれた黒い影は彼女の近くで弾んで転がり、手元に来るのは二本の足だった。丁寧にもタイツとショートパンツが穿かせられたままである。

「アレスハイムから来たんだって？ ご苦勞様……というにはまだ早いかしら。お相手をお願いしたいのだけれど」

しなやかな腕を腰にあて、胸を反らせばその豊満なバストがつんのめる。首につけたネックレスのような装飾から伸びる絹がハの字を描いてバストを掬うようにしてから背へと向かう。故に露出度は高く、女性的な魅力は充分だったが、

「でも、一撃を素直に喰らっているようじゃあ、期待はできないわねえ。雑魚を倒して喜んでいるようだし。外の彼のほうが、まだ良いんじゃないかしら」

へそのやや下あたりから、深い緑色の鱗で覆われる長い尾があった。今でこそとぐろは巻いては居ないが、つい先ほどハンスの首をへし折ろうとした尾は愉快そうにパタパタと床を叩いている。

彼女は蛇族だ。近接格闘に秀でており、またその尾から放たれる殴打は先端に向かうにつれて速度を早め、最大で音速を超えるとまで言われている。故に鋭く細まる尾先は斬撃となりうるのだ。つま

るところ、鞭としての役割を果たす。

一方、獣人で狼であるハンスには近接格闘を得意とするがソレ以外になく——先程のように、一方的にヤラれる可能性がある。

「貴様が最後か？」

「どうだろうね。でもこの家の中にはもう居ないとだけ言っておくし……ああ面倒。この裏に待機してる援軍が確か五〇〇人くらい居たかしら。体力無くなるから襲うなって言っておいたんだけれど、やっぱりダメだったわね」

肌は血色が悪いのか、青白い。というか殆ど薄い紫だ。いかにも、といった異人種であるが、ヒトはマリーしか居らず、彼女は彼女で義足を装着すると早速部屋の隅に移動を開始し、そういった外見的特徴に注目する余裕はなさそうだった。

「指揮官クラスは」

「三人だけ。ねえもういいでしょう？ 寒くて困ってるのよ、せめて運動くらいには楽しませてくれるでしょうね？」

「ああ、問題ない——俺が最後になるわけか。あまり時間をかけても居られないようだ」

視界の隅では既に決着がついてしまっている。その奥には顔面蒼白にしたジャンが出てくるや否や跪いて嘔吐し——。

急がなければならない。

彼女の言葉が真実であれば、早いところ五〇〇人の援軍要因を潰しておかなければならない。

しかし、となればアレスハイムには一体幾万の兵隊が投入されたのだろうか。アレスハイムの戦力は多く見ても二万弱。純粹な軍事力としてはこの国の方が上であるのは確かだから、まずその時点で不安なのだが……考えても仕方が無いことだ。

ほくそ笑むラミアに、ハンスは短く嘆息して首を振った。

本領発揮など、見ている暇など無い。

一気に終わらせよう。

「発現<sup>めざ</sup>めろ——」

口唇が前に突き出るように伸び、顔全体が青白い毛皮に包まれる。顔はそのまま狼と相成り、大きく開けた口は鋭い牙をむき出しにした。

「ハウル・モーター咆哮迫撃」

喉を絞って吐き出す声音は光を帯びて、前方に虹の光臨を創りだす。間もなくその中央を突き抜けるように走る一閃は火焰というよりは光線となって、空間内に満ち満ち反射する、鼓膜を突き破るほどの高温と共にラミアへと切迫し、

「——ッ?!」

知覚する間などない。

彼女の尾先の速度など比ではない。

その閃光は彼女がハンスの行動をようやく理解した直後に下腹部に叩きこまれて——肉体がくの字にへし折れ、身体がにわかに浮かび上がる。その百キロを超える重量の尾を凄まじい勢いで引きずりながら、彼女が飛び出した部屋の扉を突き破り、その背中がさらに家屋の外壁に叩きつけられて、幾重にもなり、また敷き詰められた断熱材や柱を力任せに打ち破る。

盛大な破壊音が辺りに響き渡り、家屋の横っ腹に巨大な穴が開く。銀世界に躍り出て雪原に横たわる女性は白目を向いて大口を開け、諸手を広げて気絶。どちらにせよ全身は壁を突き破ったことにより、あらゆる箇所骨折、軽度でも打撲を負い少なくとも先ほどのような、勇猛な戦闘が可能な肉体ではなくなったという筈だった。

「やれやれ」

威力を抑えたが、やはりあの反動に耐えるのはいくらかしんどい。彼は首を抑えて捻り、気怠げに息を吐きながら顔を戻す。

「次の機会があれば相手をしてやろうか」

部屋の隅で耳を抑えるマリーへと合図をしながら、やがてハンスはその家屋を飛び出した。



その少し前。

クリードの鋭く素早い一撃は、精錬しきったものだというのは素人は勿論として、傭兵を長年努め仕事の度に前線に出るホークが見ても明らかだった。そしてそんな彼に認められる実力は光栄であるもののなのだが――それが通用するかは、また別の話となる。

だから振り下ろされた斬撃は一本のフランベルジュに受け止められて、それを払うと同時にもう一方の剣がクリードの喉元につきつけられる。

これで勝負は終了だが……、

「ま、まだだ！ もう一回だ！」

トドメを刺さぬのを良い事に、彼はそう言っただけで闘いを挑んでくる。

ホークはいよいよ面倒くさくなって――模倣して突き出してくる剣を沿うように差し出した剣で手元を打ち、にわかに緩んだところを力いっぱい弾いて剣を強制的に放棄させ、間もなく肉薄。

鎧の接合部分につま先をねじ込み、蹴りと共に彼の体勢が豪快に崩れる。そうして俯せになる彼の首筋に剣を突き立て、その薄皮を素早く切り裂いた。

「うざッてエんだよ。確かにお前は強いだろうがな、オレには通用しねエ。いつまでも一つの土地で粹がってるお山の大将が、勝てるわきゃねエだろオッ！」

腰骨辺りを強く踏みにじり、横っ腹を蹴り飛ばして身体を横転させる。

彼は無念そうな顔をして呆然と空を見上げ、小さく頷いた。

――純粋な剣術ですらコレなのだ。魔法を使用したとしても結果は分かる。まず攻撃が通用しなければ、魔法の効果も与えられないし……先ほどの彼の魔法を見たのだ。

遠くからの射撃。そして決して外さず、頭という小さな的を狂いなく撃ちぬく正確さ。その魔法を持つ彼に、近接格闘でしか活用できぬ魔法が通用するだろうか。

否だ。それは、誰が見ても明らかだ。

クリードは紫煙よろしく口から白く染まる息を吐き出して、剣を拾い上げる。

「……これが世界って奴か」

「自信を持つのはいい。過信は良くねエがな——見るところによればお前はまだ若い。将来性はあるだろうし、その実力はまだ他には通用する域だ。頑張れよ」

「殺さないのか？」

「ああ、こうも狙われてちゃ殺——」

振り向こうとする最中に、民家の方からけたたましい爆発音が鳴り響いたと思えば、その横方向から凄まじい煙があがる。顔を向ければ、ガラス張りの向こう側に狼の顔をしたハンスが、大口を開けて光線の余韻を残す姿があった。

「——おええええ……」

忙しなく背後から、びちゃびちゃと嘔吐の水音と喘ぎ声が混じり合って聞こえてくる。鼓膜に残るきいんとした咆哮を余韻に彼が振り向けば、小屋の手前で四つん這いになるジャンの姿があって……。

「おやおや、これはまた……大変な事になりましたねえ？」

——つい先ほど、『殺すに殺せない』と言いながら睨みつけようとした影は霧散し、そうしてクリードの傍らに現れた。

燕尾服姿に、円筒の帽子をかぶって黒い外套を羽織る男だ。口元に生やすちよび髭がいかに胡散臭い吸血鬼は、先程と変わらぬ不快極まりない笑みを浮かべているが、寒いのかそれとも陽光を遮っているのか、外套で強く身体を締めていた。

「こりゃアどうも。さっきの弟さんかい？」

両腰の鞘に剣を収めながら、けらけらとホークは笑いながら訊く。  
ヴァンピール  
吸血鬼は微笑みながら小さく頷いた。

「ええ、彼は己の魔術で処刑用の棺桶に閉じ込められ、蓋に付属する底まで伸びる凶太い無数の針で串刺しにされてしまいましたから。決定された勝利を確信せぬまま、絶対的な死を与える魔術を行うと

はなんとも、愚かしいことです。次いで言えば、銀の弾丸による魔術効果の増幅ばかりを考えて、その反作用によって己が拘束されるなどはもってのほか——とでも言えば、納得していただけるかね、御仁？」

家屋から、マリーを横にしたまま抱き上げ飛び出てくるハンスの姿がある。

男はそれを横目に見ながら指を鳴らせば、澄んだ空氣にその音は良く響き——整った、雪原を踏み鳴らす音と共に、民家の脇から軍隊が現れた。横に並び列を成す、無数の兵隊だ。

ざっと見るかぎりでは数は百を簡単に超えているだろう。

「私は今も昔も、変わらずウラド・ヴァンピールにございます。」  
交渉手段”として、手早く戦争を終わらせるために少しばかりの痛い目は我慢してもらえると、助かるのですが——」

振り抜いたフランベルジュは、目にも留まらぬ速度でウラドの首を刎ねた。

彼の頭はその勢いを伴って放物線を描いてから地面に叩きつけられ、確かな質量を伴った音を立てる。かと思いきやすぐさまソレは霧散し、

「無駄にございます」

催促するように差し出された手に乗った頭は、切断面の首から闇の煙をくゆらせながら言葉を紡いだ。

「だから、貴君は——」

「——覚醒<sup>めざ</sup>めろ」

消え入りそうな声が、魔法を紡ぐ際の、ほんの僅かな詠唱にも似た口上をした。

そんな言葉に、まず吸血鬼は無駄な行いだと鼻を鳴らしながらホークを眺める。が、彼の口は一文字に硬く閉じられたままであり、その表情は変わらず、根拠不鮮明な余裕を湛えていた。

ならば、と思ってふり返る。が、そこには両腕を図太くしたハンスは壊れ物を抱くような柔らかかさと、決して離すまいとする力強さ

を伴った姿でこちらに近づきつつ、背後の援軍を警戒していた。そしてその姿は明らかになまでに、先ほどの魔法を放つ格好ではない。次に見るのはクリードだったが、そこに顔を向けた瞬間に、どうにもなぜここまで頭のめぐりが悪いのだろうかと自分自身に腹が立った。振り返って横を向く際に、視界の隅には決して無視できぬ、仁王立ちする姿があったのだ。

それはつい先ほど、己を打倒した青年の姿であり――。

その”先ほど”の後を思い出すが――あれは大変だった。もし棺桶に二度と出られぬよう魔方陣を”設定”して置いたら棺桶自体が『魔道具』になってしまう。つまり、ジャンの右腕のように魔術的存在になるために、全身を無駄に串刺しにしたあの針は余す事無くその肉体を貫いたはずだ。

もし本当にそんな事をしていたら、今ここには居ない。間抜けなまでに、本当にあそこで死んでいた。

せめて勝負か試合か、あの状況ならばどちらも得られるだろうと思っていたのだが――勝負には負けてしまったのだ。この吸血鬼が勝利を確信したというのに、名も知らぬ他国の騎士見習い以下の男がそれを覆したのだ。

今となっても、アレばかりは予測し得ない状況だ。

だが少なくとも、今は全てを出し切った状態であるはずだ。肉体強化に、その調整が未熟であるために使用する魔力解放、そして禁呪足りえる禁断の果実に、そしてまた未熟な変則転移。妙な組み合わせだ。彼が近接戦闘を主とするのは明らかだから、その後者二つは蛇足となるのだが――。

ともあれ、ウラド・ヴァンピールは不思議なことに縮こまっていた。それは何も陰囊の話だけではないし、それが寒さ故のことではない。

恐怖によって、全身の筋肉が萎縮し、硬直したのだ。

反射的な反応故に理性ではどうにかなるものではなく。

「――咆哮<sup>ハウル・モーター</sup>迫撃！」

己の額から引きずりだした、リングともイチジクともつかぬ果実を齧ったジャンは『見たものを見たまま』に再現する。つまり、ハンスがつい先ほど行った魔法を、彼は再現することができる。

彼が開けた大口の手前には光臨が幾くつも重なって、喉の奥が高速で震えて耳が痛くなるような高音を解き放つ。それと共に、およそ口蓋垂付近が焼けるほど熱くなったかと思えば、目の前の光景を全てかき消すような閃光が出現し――握りこぶしほどの直径を持つ光線が、

「――アッ!!」

咄嗟に屈み込むホークの頭上を通過し、声にならぬ叫び声を上げたウラドの顔面に叩きこまれた。

彼は身体を勢い良く回転させるように吹き飛び、すぐさま地面に触れたものの、その勢いを殺しきれずに雪に埋もれながら大地に引きずられて民家にまで到達する。手の中から零れ落ちた頭は肉体よりも先に、民家の中に転がり込んでしまう。

その咆哮はさらに民家の中心――奇跡なのか、狙ったものなのか――大黒柱を打ち砕き、貫通する。そうすればただでさえ長い年月により老朽化していたその建造物は、加えて先ほどのゴタゴタによる衝撃、ハンスの咆哮迫撃による破損によって朽ちており、崩落するのは最早必然といえた。

意識が途絶したが故に実体化したままのウラドを意図的に下敷きにするように、その家屋は滑るように真ん中の空間を押しつぶして屋根を、地面に叩きつける。

暴風、衝撃、そしてけたたましい崩落音が辺りに響きわたって――援軍の足が止まる。

ジャンはくたびれたような半眼でそれを見ながら、レンガ造りの小屋に背を預けた。

「だと思ってたよ、馬鹿野郎」

先程までの無力さはどこへやら、不意打ちという形ではあったが、彼が得た混じりっ気のない勝利にジャンは微笑み、恐らく未だ生き

ているであろうが声は届かないウラドへと吐き捨てた。

「仕切りなおしだ、かかってこい」

ホークを先頭に、その傍らにハンス。後衛はジャンとマリーとな  
っているが、ジャンは単なるお守りといったところだ。

相手はクリード率いる五〇〇名の援軍——となっているが、今では  
本国の本隊だ。彼ら四名がいるばかりに、今のところ指示は来て  
いないが、いざという時に援護に迎えない。

もつとも、どちらにせよウラドは下敷きとなってしまうている為  
に転移魔術が使えないのだが——。

ホークの言葉をきっかけに、そういった戦闘は開始する——かに  
見えた。

「これは何の騒ぎだ、クリード」

いよいよ最後の仕上げだと意気込んだ隙に、ざわざわと声を立て  
ること無く兵隊が横に広がっていく。そういった作戦なのかとホー  
クが剣を手にかけるが、最終的には中央に道が空いた。

それに眉をしかめてみれば、間もなく、そこを通って現れる男が  
あった。

彼はいかにも偉そうに、そうに口を利く。

「こッ……！」

最初は、軍部大臣からそこいらの階級の人間だと思った。

まだ若そうな男は、色男のように整った顔立ちで、透き通るよう  
な金髪、そしてリゾート地の海を思わせる蒼眼を持っていた。また  
肩幅の広い鎧を着こむが、そこに装飾はなく、また分厚い板金とい  
うわけではない、実用性を重視した軽量ながらもある程度の硬度を  
持った上等なものだった。

腰には一振りの、控えめながらも装飾を施され、鰐に一つの半透  
明の緑色の魔石を埋め込んだ騎士の剣。そして手には程よく長い槍  
が握られていた。

無論、外套を羽織る彼は、クリードと同様の国章を刺繍していた

が――。

「皇帝ッ！ な、なぜこのような場所に！？」

――ヤギユウ帝国の皇帝『ロメオ』は、そういった武装のもとで現れたのだ。

彼の存在が明らかになるや否や、待機していた血氣盛んな兵士たちは瞬く間に跪き頭を垂れる。同様に、さしものホークらも一応は跪いた。

「様子見だが……あの三人がいて、このザマとはな。正直、驚きだ」  
ゆつくりとした口調なれども、その端々に孕む威厳は、ジャンにも確かに感じる事ができていた。

それが何から放たれるのか、なぜそういった威圧感をこの男から感じるのか、彼にはわからない。だが少なくとも、この男が皇帝たる存在なのだということは、恐らくその名を、肩書きを聞かなくとも察知できただろう。

ロメオが一睨みすればクリードの背筋は伸び、そうしてホーク、ハンスを並んで眺める。

「……ブラック・オイルか」

「皇帝、オレの提案というわけではないとだけ説明しておこう」

「ふん、構わぬ。知った事ではない。重要なのは結果だ――そう思わぬか」

「気が合いそうだな」

ふふふ、くくくと不気味に畏怖せず笑いあう二人を、ジャンは見えず目を細めた。

やはりホークは根本的に自分とは違う。器以前に、その度量やその他もろもろが規格外なのだ。いくら国際的に活躍しているとはいえ、一国の王に迷うこと無く軽口を叩けるような者は、そうそう居ないだろう。見るかぎりでは、面識すら無いというのに。

「ともあれ、我が国を戦場にしないでくれるかね。多民族国家だが、領土は猫の額ほどなのでね」

「だからアレスハイムを戦場にしたらってことかい？」

「否……ここは寒い、城に戻ろう」

「こ、皇帝。こやつらを、どういたしましょうか」

「――客人として招こう。私がわざわざ出向いてから捕らえた者の中に騎士すら居ないとなれば、いよいよ汚名がつくからな」

「りよ、了解致しました……。貴様ら！ ミアとウラドを回収して医療班に回せ！ 残りはここで……。いや、城に待機だ！ ウラドが目覚まし次第、転移魔術を再構成させろ！」

『了解！』

てきぱきとした判断、命令のもと――命のやりとりをした敵の中に混じり”来客”として、体の良い人質なのかも知れないが、彼ら四名は為されるがままに城へと招かれることになった。



## 衝突

魔術というものは割合に、感情というものが重要であるとも言われている。

主に精神力を削り魔力を駆使する術なのだから、まず資本となるのが精神だ。怒れば増幅し、悲しめば減少する——とまでは行かぬ、そう単純なものではないが、そういった理由もあってか、女性の使い手が世界的な割合から見ても多かった。

魔女という言葉もあるように、それは昔からそうであつたらしく——。

「すげえ……」

つまるところ、アレスハイム王立第六騎士団——魔術師団の団長の實力は、己の肉体のみを信じる第三騎士団以下警ら兵らの予想以上の威力を発揮していた。

——ブリック地方に住まう、加齢を極めて恐れる大魔導師が居た。その力は多くの人々から恐れられ、人里離れた森の中で生活しており、”彼女”は異種族からさえも畏れられていたと言われている。

そんな大魔導師——人々は彼女を魔女と呼ぶ——の一番弟子であつた『ルーナ』は、彼女からの破門をきっかけにアレスハイムに流れ着き、その實力を認められて騎士へと就職した。

数年の努力が実つて今では立派な魔術師団を統率する団長とまで上り詰め……、

「なんて威力だ……」

そうざわめく仲間内の声を背に受けながら、彼女はつい先ほどまで目の前にいた軍勢が消失したのを確かめ、頷いた。

——薄手の長袖シャツはびったりと身体に張り付いて、そのスタイルを浮き上がらせる。が、首からその胸元を伸び、へそよりやや高い位置までがむき出しになる格好は、むさ苦しい戦場ではよく目立っていた。加えてタイトスカートは動きにくそうに足にまとわり

つく。その上下は限りなく暗い黒であり、彼女はさらに、太ももでその口が大きく広くなる革のブーツを身につけている。

最後にツバメの羽根のような外套と、腰と左腕へのファッショベルト、頭にとんがり帽子を載せれば彼女のファッションはおしまいだ。

とにかく淫靡で、誰に襲われても仕方がないと言える格好の彼女は、だがしかし途端に周囲から恐怖を抱かれた。

——数分前。

目の前に迫っていた軍勢は多く見積もっても二万ほどであっただろうか。

彼女は作戦通りに、禁じられてもいないごく正当な手段として、戦略魔術を紡いだのだ。たつぷりと、三〇秒はかけてその全てを口にし、およそ個人では扱えぬほどの魔力量が集中し始めるのを実感しながら、その全てが目の前の二万人を虐殺するのだと想いながら、  
唱えたのだ。

ストーム・ルイン  
「破滅の嵐っ！」

晴天は瞬く間に、暗澹たる分厚く灰色に濁った雲に覆われた。

増幅、膨張する魔力が辺り一帯を——少なくとも目の前の軍勢を飲み込んだのを理解した時、ルーナの意思のままに雲が円形に割れて晴天が、そこから降り注ぐ太陽光が垣間見えた。

が、次の瞬間。

その約二万の軍勢を飲み込むほどの巨大な雷が、なんの脈絡もなく振り落とされた。

——轟音と共に目の前の大地が蹂躪されていく。その衝撃が大地を激しく震わせ、それを予期し得なかった者は一様に尻餅をつくほどだ。また暴風が吹き荒れ、さながら嵐のごとく……容赦なく、辺りの全てのものを吹き飛ばす静電気を伴った風が大地を広く舐め回した。

故に、陣形は一度崩れたが——術師たるルーナだけは、その最前

線で微動だにしない。

雷はされど辺りに伝播することなく、見事なまでに彼らだけを焼き尽くして大地に巨大な穴を穿った。

火山の噴火口にも似た巨大な穴だ。

既に死体の跡形もなく、灰と化して地に帰る。が、その大地は未だ帯電状態にあり……。

まるでそういったことが嘘のように、雷は失せ、空には晴天が戻る。

——敵の残る軍勢は、既に残り少ない。ざっと見ても、一万に届くか否かの数だ。

ともあれ、それでもこの世界ではその軍事力は割合に高いと言える。そもその人口が少ないのだから、兵に三万も割けるというのは中々に頑張っている証拠だ。ヤギユウの数倍の領土を誇るアレスハイムでさえ、人数では勝っていないのだから。

しかし、今のを見たが為か——”この程度”の戦略級魔術すら持たぬのか、遠目にでも相手の動揺は良く分かった。

もったも、この戦略級と冠する魔術は扱える力量に至る者がそもそも少なく、さらに多くの国で”禁じ手”とされているために廃れてきているのだが。

だが結局はこちらも同様で、一様に今の威力を目の当たりにして、目の前に立つ、酒場にいれば迷わず声をかけていたであろう女性に恐れをなしていた。仲間だということを忘れてしまったのか、あるいは”裏切り”を恐れているのかは定かではないが、騎士でさえも団長の声を耳にいれていない。

やれやれ、と彼女は肩をすくめた。

「どうなっているの？」

傍らに迫る気配に振り返れば、真っ赤な肢体を持つ一人の女性はボディースーツ姿で、同様に肩をすくめていた。

「通信兵から」

シイナはそうぶつきらばうに前置きしてから、告げる。

「相手は本国と連絡がつかない状態で、さらに今の魔術によってすっかり士気が下がってしまったらしい」

「そう。それで、どうするの？」

「これから侵攻を開始する。体勢が整わない内に叩き――」

「た、隊長！」

言葉を遮るのは、首から白い魔石をネックレスとして下げる一人の男だった。

それが先ほどの”通信兵”と言うのはルーナにもすぐに分かり、彼女は頷き、促す。

彼は失礼します、と先に置いて口にした。

「や、ヤギユウ帝国の皇帝から……」

男は言葉を飲むように台詞を留め、喉を鳴らしてつばを飲み込む。視線を外そうとする彼に、シイナは眉をしかめた。

「どうした？ 続けて」

「……ディライラ・ホーク以下四名を捕らえた、と。交渉の余地があるのなら戦線を退いてもらおう、との伝達が――」

「はったりだ！」

大臣が、その穏やかさを切り捨てて吠えた。

「ブラフも過ぎる！ そんな虚<sup>こ</sup>仮<sup>け</sup>威<sup>い</sup>で怯<sup>おそ</sup>むな！ 進軍せよ！」

『し、しかし、仮にこれが事実だとしたら――』

「仮にもクソも無いと言っているだろうがッ！ ここで敵を殲滅しないでいつする！？ 敵にむざむざ時間を与えてどうするつもりだ！

！ 貴様、私の部隊を殺すつもりか！」

『そっ、そういうワケでは……』

「ならさっさと敵を蹂躪しろ！ 判断は私がする！ 責任は私が取る！ ならば気が済むまで言ってやろう……仮にこれが事実だとしたら連中は死ぬだろうが、この戦闘でのもっとも大きな被害は敵の

軍勢が『溝』に到達することだ！ 一度でもあの大渓谷を攻略されてみる、この国は大変な事になる！」

『国のために、民を捨てろ、と？ 他国の者も居るといふのに？』

——とんでもない阿呆だ。

そう吐き捨ててやりたかった。今にでも目の前の魔石を、その上に浮かび上がる真つ赤な姿もろともたたきつぶしてやりたい衝動に駆られながらも抑えこみ、口から垂れそうになったよだれを拭いながら葉巻を投げ捨て、灰皿に押し付ける。

騎士というものがこれほどまで扱いにくいものとは……ディアナ大陸出身の彼にとっては、それが信じられないくらい苛立たしい要因となっていた。

敵の事情や心情を鑑みて、わずか数人の”悲劇”にすらならぬ損失のためのその多くを犠牲にする精神。子供ならば偉いと褒めて頭をなで飴玉でも褒美にくれてやることだろうか——国を護る者が、ソレでいいわけがない。

騎士とは飽くまで神と契約するだけであり、軍や国とは書類上のやりとりでしかないと聞いた。学校では、自国の状況が芳しくなければ敵国に寝返った例さえあるとも言っていた。そしてそれが真実だと思っていたのだ。

この国に来てその考えは変わり、連中は”強く逞しい、己を貫く立派な兵士”だというものになったのだが——ココに来てまた一変する。

奴らは阿呆だ。

なぜ敵は信頼できて、自国の大臣を欺けるのだろうか。

連中は売国奴か。ふざけるな。

乱暴に軍服のポケットをまさぐって葉巻を取り出し、口に咥える。——仮に、本当に本国に侵入した四人が死んだとしたらどうなるだろうか。少しばかり思考してみる。

敵は提案をしているわけではなく、言葉のまま威嚇してきているのだ。が、無断で毒牙にかけられるわけがない。人質は生きていな

くは価値がないのだ。つまるところ、彼らは人質であるかぎり”命”の保証はされているわけだ。

ならば、せめて目一杯時間を引き伸ばしてやろう。

向こうに、無条件で時間をやるのは癪過ぎた。

まずディライラ・ホークだ。

これはまず傭兵組合の上層部に酷く怒鳴られそうだ。その上で、被害総額を思い切りぼったくられるだろう。そしてまた、この”取引”の未熟さから、今後の付き合いを改められるかも知れない。

ついでマリー・ベルクール。

彼女は魔術師組合創設者の孫という話だ――聞いた所によれば養子だかなんだとか聞いたが、定かではないが。

これもまた、魔術師組合からの信用を無くすはずだ。これは手痛い事になる。まず技術の進展がさらに遅れるだろうし、それ故にデアナ大陸の技術に頼らざるを得なくなる。

ハンス・ベランジェも同様だ。

そしてジャン・ステイルは……これはこれで僥倖か、あるいは全てを失うか。

彼が墓地に埋まる事になれば、彼に執着していたユーリアがようやく目的通りに動くことができるだろうか。少なくとも戦場に居ない彼女は、この事を知る由もない。

が、風説の流布――否、真実だが、大臣が彼を見捨てたということが耳に入れば彼女はこの国を後にする可能性が極めて高い。

もっとも、彼らが捕えられたということなど決して有りはしないだろうが。

「……正直なところ、なぜそう信じられるのだ？」

対面で、この馴染みとなる会議室で、唯一戦況が確認できるために待機していたミキはそう口にする。

「信じる？ そんな陳腐なこと、私がすると思っているのか」

「ほう、つまり？」

老齡の女性のような言葉遣いのミキは、悪戯っぽく笑う。言葉は、

そのままシイナまで伝わっているだろうが、大臣は構わず口にする。

「勘だよ。彼らを信じるくらいなら、私は私を信じる——尤も」

彼は不恰好なまでに口元を歪め、口角を釣り上げた。

「連中の”取引”以前までは、私が手引きしたのだからな」

「——そういう事か」

ミキは、その悪代官しながら——否、それ以上の悪たる大臣を眺めながら、クツキーへと手を伸ばす。

「ああ、連中はここで我々が無条件降伏すると思っている。”予定”には無いからな。だから勝ち目のない戦闘だとわかっていながらも、馬鹿正直に正面から全軍を投入してきた——が」

『今の言葉、本当かッ！ 貴様……！』

続けようとする前に、シイナが叫ぶ。

『わかった、現場は現場で判断する。言質は取った、死にたくなければ今の内に国を出ること——』

そうしてぶつり、と通信は途切れてしまった。

「ッ？！ くそッ！ あのクソ鬼がッ！ 先走りやがって——」

ふざけるな、冗談ではない。

ここで本当に無条件降伏をすれば、相手から人質と引き換えに『異世界』と交渉する手段を与えてしまう。

本来ならばここで首を振り、そのまま敵を殲滅。そしてヤギユウを植民地化する予定だったのだが——あの阿呆の女が先走った。

駄目だ、今止めなければ手遅れになる。

遅くなる。

全てが気泡に……いや、ソレ以下の、泥中に飲まれることに。

魔石に魔力を込める、が反応がない。恐らく向こうで連絡用の魔石を叩き潰したのだろう。そうしたのはこちらだというのに。

「ミキ！ ここから間に合うか！？」

「冗談はよしてくれ。転移魔術も無しに、半日かかる」

「クソ、すぐにシイナを止めなければ——」

『あー、少し事情を聞かせてもらえませんか？』

近くについてかつ信頼できる者は誰だろうか。およそ生涯の中でそうしない思考の回転で考える間に、魔石は輝き、声が響く。目を向ければそこには、白髪の青年の映像が立っていた。

「……訓練部隊の、レイか」

『ええ、状況によっちゃ、一番簡単なやり方で止めますが』

「ああそうか、なら頼んだ――」

雑であるものの、大臣は焦る声を抑えつつ掻い摘んで伝えてやった。

アレスハイムは、殆ど大臣の独断で事に及んでいたということが判然とする。

つまり『溝』への交渉権を渡す代わりに、戦争行為を起こして軍需による利益をもたらし、その後傘下に下るという作戦内容が両者の間で行われたのだ。その結果として、現在までで多くの武器などが生産され、今までで武装など考えていなかった小さな村々にまでそれらが行き渡るほど潤沢になったのだ。

経済は回り、豊かになる。

その引き換えに、独占している溝への交渉を許可するのだ。

無論としてアレスハイムは溝への交渉権すら渡す予定はないので、侵攻してきた敵軍を余す事無く殲滅する予定だった。人質として”攫わせた”四人組だが、その作戦内容を告げていない以上無作法に暴れまわるはずだ。つまり、彼らが人質としての役割を務めるはずがない。それに加え、現時点で八から九割方の軍力をこちらに差し向けているのだ。敵うわけがない。

また、ヤギユウも彼らの作戦を鵜呑みにしているわけではない。すっかり信頼してしまっているわけではない。だからこそこで『人質ありきの交換条件』というものが飛び出したのだが――ともあれ、そういった背景を知るのはヤギユウ帝国皇帝と、アレスハイム軍部大臣の両名のみであった。



だが、ここで皇帝の話に頷けばヤギユウの思惑——ヤギユウとの立場を、最低限でも主従関係に移行するというものが台無しになる。「……ったく、面倒臭えな」

確かにシイナも、騎士団のトップにしては話を聞かなすぎだ。

だが大臣も、情報漏えいを恐れて伝えなさすぎだ。それ故に信頼関係がともに築けず、シイナとのいざこざが生まっている。

——これまでに、戦争の下ごしらえもすべてが無駄、というか戯言じみたものだったのだ。

だが、たかが溝への交渉を許可されるだけで、二万もの軍勢を無駄にするか？ 殆ど、主要な戦力だったはずだ。

アレスハイムの裏は全て現れたが……ヤギユウにもまだ裏がある。この取引の提案は、その序章に過ぎないはずだ。もっとも、一章が最終章たりえる短い物語かも知れないが。

克蘭・ハセは興味がないと言っていたが、やはり戦争というのは戦闘だけではない。それを思い知らされたレイ・グリームは短く息を吐きながら槍を地面に突き刺し、魔力を固形化、糸を創りだして弓を成す。そうして弓を作り、弦を張り詰めた。

この時点では本当に、例の四人の安否はわからない。

どうしようか、この攻撃が彼らの命を結果的に散らすことにならないだろうか。

小隊を説得して無理に前線に出てきた彼は、空へと弓を傾ける。

一万よりやや多い友軍を超えた先には、半径一キロに及ぶ巨大な穴がある。その向こう側に——戦闘に、豪華絢爛な鎧と外套に身を包む指揮官クラスの兵士。

——敵を目視し、座標を設定。目視した地点への強襲を決定。槍に刻まれている魔術紋様が鈍く輝き、それを受け入れる。そうして弓矢となるそれは、手を離れた時点でおそらく干渉がない限り、敵を射抜くだろう。

仮にシイナが既に連絡を終えていたとしても、こういった謀反が敵を逆上させ、先の取引を台なしにしてくれる。

緊張感漂う空気の中。張り詰めた大気が肌に触れ、下腹部に鈍い痛みが走る。

迷っているのか……レイは思わぬ自身の弱さに、思わず傍らのクランに視線をやる。と、彼は腕組みをしたまま、小さく唇を動かした。『やるなら、やれ』と彼はそういった。

やると決めたのならば、さっさとやれということだ。  
なるほど、クランらしい――。

レイは頷いてから、張り詰めた弦を開放し、音を立てて、赤く半透明の矢は空を舞った。

## 交渉

「貴様らは随分と恨まれているようだ」

魔石による通信を一言二言で終えたロメオは、短く吐き捨てた溜息の後に、哀れそうに告げた。

——そこは客室だった。広い空間に、対面するように並ぶ二つの大きなソファ。その間にはガラス張りのテーブルがあり、そういったものの奥にはバルコニーへと続く窓には、薄いレースのカーテンがかかっている。

テーブルの上には人数分のティーカップ。なみなみと注がれたのはコーヒで、中央にはコーヒポット、シュガーポットが並ぶ。

扉を背にするジャンたちの対面には足を組んでふんぞり返るロメオが降り、ソファ背後の両端には槍を構える二人の近衛兵による護衛。

「どういうことだ？」

左からマリー、ハンス、ホーク、ジャンという並びであるが故に、必然的に多くの受け答えはホークが行うこととなっていた。だがその台詞にはそういった事とは関係なしに、殺気を漲らせた彼が言葉を返していた。

「貴様らをダシに前線を退かせる交渉は一度は承諾されたものの、その直後に部隊の総指揮を任せておいた騎士を狙撃された。ある者は銃弾、ある者は矢だと言っているが、物的証拠は無いらしい——つまり貴様らが生きていると、誰かが困るのだろうか」

狙撃……。ホークはそう漏らしてから、足を組んで肘置きにし、コーヒをすすするロメオへと訊く。

「そいつは死んだのか？」

「——いい加減思っていたのだがな、貴様。いくらブラック・オイルの教導隊とは言え、仮にこのわたしより実力があったとしても、貴様がこのわたしに馴れ馴れしく友達口調を使って良い謂れなど無

い。次は無いぞ」

ロメオは冗談でも何でもなく、睨みつけて口にする。そして護衛の二人に、にわかな緊張感が走った。顔は勿論、視線さえ動じないが、皇帝の指示より早く、口にした事全てを真に受けて行動しようという態度が見て取れた。

ホークはおちゃらけたように肩をすくめ、

「ああ、すみません。気をつけますよ、” 皇帝殿”」

基本的に、殿という敬称は目下の者につける。皇帝という役職の場合は敬称を付けない場合がほとんどであり、仮につけたとしても様あたりが妥当だろう。

だがしかし侮蔑というわけでは決して無く、また意味合いとしてもただ失礼程度で収まるのだが――護衛には気に食わなかったらしい。

即座に槍を突き出したまま特攻する両名。それは流れるように、無駄のない動きでソファアの近くにまで躍り出る護衛の腕から槍が振るわれるが……それはまるで、脅しのように喉元に止まった。柄はぶるぶると小刻みに震え、畏怖、あるいは怒りを抑えているようであったが――それは違った。

ホークが切先を指先で挟むようにつまめば、敵の攻撃はそこで止まっていたのだ。震えは感情の抑圧から漏れ出した反応ではなく、純粹に力を力で押し返されているが故の反作用だ。そしてたったそれだけの行動で、護衛の二人は、二人がかりでも敵わぬという実力の差を見せつけられた。

思わず皇帝に目を向けて指示を仰げば、彼は面倒くさそうに嘆息して、退くに退けなくなった両者に「控えろ」と吐き捨てる。

――人質は四人いる。そして一番厄介なのがホークで有るがために始末をしておきたいところだったが、ダメだった。

皇帝のホークに向ける視線は、厭味ったらしい「しぶといな」というものであり、またそういった水面下のやりとりにただ緊張するだけの三名は、恐らく本人よりも高鳴る心臓を必死に抑えていた。

「すみません、そういったやり取りは相方に任せてるもんで。学校も義務教育で打ち止めだったし」

「だろうな。教養の無さが伺える」

「ともあれ、その指揮官はどうなったんです？」

「死んだ。治療の暇なく、首を刎ねられたらしい」

遠方からの狙撃で、首を刎ねる程度の威力と凄まじい精度――となれば、それは魔術の仕業であることは明らかだった。現在は弾薬にそういった効果を持たせるのは実用化していないし、現段階で使われているものの中で『必ず当たる』ようなものはない。

となれば矢だ。

そして証拠がないと言うところを見れば、魔力によって構成した武器となる。

「そうか。それで？」

「戦闘が再開した。戦況はこちらの不利のままで、白旗を上げるのも時間の問題らしい」

「で？」

「考え中だ。貴様らをどう使えば、どう動くのか……いよいよ、貴様らの国の大臣が信用ならなくなってきたからな。いや、予測の範疇だが」

「大臣？ ……ああ、そういうことか。キツたねえな！ 汚えよ、政治家ってやつアよ！」

そうして自身が置かれる状況を大まかに推測し、それがそうそう外れたものではないことを確信したホークは投げやりにソファアに深く座りこみ、振り上げる両脚をテーブルに叩きつける。ガラスは割れはしなかったが、如何にも危なげな音を立てて揺れ、その振動によってティーカップはことごとく倒れてしまう。一口もつけられなかったコーヒーは無残にも零れてテーブルに広がり、そうしてその端から垂れて純白の、高級そうな毛皮の絨毯に染みをつくった。

それに、ぴくりとロメオはこめかみを弾ませる。

また近衛兵が動き出そうとするが、それよりも早く彼は両手を出

して行動を制した。

「ホーク、どういう事だ」

ジャンが久しぶりに口を開く。

「分からねエのか、間抜け。気づけよ」

「……敵国の皇帝が自国うちの大臣に”信用ならない” って言ったのが重要か？」

「そーいうこった」

ホークの短い、適当な返事。

その言葉によって、台詞や確かな言語にすらならなかった”違和感”や”予感”が渦巻いて、それらがまともに形成される前にジャンは口にする。だがそれは、声に出してみれば妙なまでに簡単な結論となって吐き出された。

「つまり、ここまですでに予定調和だったってことかよ？ おれたちが、本来人質としてやり取りされるってことまでが！？」

「——正確には、そのやり取りは計画にはない。私が独自に謀反したのだがな」

「そして大臣はそれを無視した。このまま本隊を殲滅して、圧倒的軍事力を誇示して飲み込もうツツウ思惑か。なら皇帝殿、あんたの目的は何だ？」

ホークの睨みに、皇帝は嘆息する。

どちらにせよ、ここでなんだかんだと地団駄を踏んでも戦況が変わるわけではない。

何の用心も無しに挑んだのがバカだったのだ。まさか、戦略級レベル・ストレンジま  
で出してくるとは思わなかったが——少なくとも、あの時点で気づいておくべきだった。

暇つぶしにもなるだろう。その間に、名案でも浮かぶかも知れない。

どちらにせよ、失脚は決定したものだ。せめて、国民の反旗によってギロチンを落とされないことだけを祈っておこう。

皇帝は観念したように、大臣の提案に乗ったその理由を話し始め

た。

「貴様らが『異世界』と呼ぶ場所を、我々の国では『魔界』と呼んでいる」

「なあ、お前らんとくろって異世界って呼んでんの？」

「いや、まあ……公式では。学校でもそう呼んでるし、だからこそ”異”人種だとか、”異”種族って呼んでるって話だけど」

「――出鼻を挫かんでもらえるかな」

「ああ、すまねエ」

護衛の一人が倒れたティーカップを片付けた後、ロメオは一人だけコーヒーをすすりながら告げる。

「あの世界は瘴気に満ちている。本来ならば人間が肺に吸い込めば死に至る不治の病に侵されると言われている。この世界の大気と混じり合い薄まれば、毒は薬となった――つまり、この大気中に広がる微量な魔力は、向こう側の瘴気だということだ」

そういった解釈は、世界的なもので一般論であるのだが、研究者や興味がある者以外は存外に知るものは少ない。学校でも触れることはないのは不必要なことであり、またそれについて詳しいことが未だ判然としてないという理由があるからだ。

無論、ジャンも知っている。いつの日かタマとノロで遊んでいる時に、ふと気になってノロに訊いてみた時に小難しい言葉が並んでいたのを思い出す。”瘴気”という言葉が、確かその中であつたはずだ。が、それを理解できたのはまさか敵国の親分による掻い摘んだ説明によって、とはなんとも複雑な心情を抱かざるをえない。

「そして、その登場が、今までカルト教団や宗教くらいしか知らず、使わなかった――無論、現在のようなものではないごく原始的な”祈り”のような儀式である――魔術が、一般的になった。そして世界は本来とは違った進展を遂げる」

「本来とは違った、とはどういう意味だ？」

皇帝の、当たり前のように吐き出された台詞に、ホークは食いつ

いた。

「分かるだろう？ あの大地震による大溪谷、通称『溝』の出現。そして異世界へと繋がる、明らかなまでに人工的な扉。あれがなかった場合の、世界だ。あの登場こそがこの世界に於ける変則的事象イレギュラーなのだよ」

「だがオレたちは、この世界こそが基本で生きてきた」

「それは構わないし、貴様ら……いや、一般的にわたしの考えこそが異常だと思ってくれて構わない。だが、一時的に……いや、溝が現れてから数十年、そういった者たちの干渉を一切受けぬ環境を作ってみた」

——その結果が、ディアナ大陸とヴォルヴァ大陸の文化の差である。

もともと考えられていた銃火器の構想や、蒸気機関が発達した。一方で、異人種との戦争によってあらゆる文化が滅び無に帰そうとしていたところを、異人種らの文化と兼ね合い併せる事でまた別の発展をもたらした。

現在では、さらにディアナからヴォルヴァを繋ぐ、海上を走る蒸気機関車が造られている。これはディアナの蒸気機関とヴォルヴァの魔術要素を組み合わせた結果であった。とは言うが、現在魔術面での発展は、それさえもディアナの方が上となってしまうているのだが。

ロメオはそう説明してから、指を鳴らす。

護衛は一本の、火がついたパイプを差し出した。

皇帝は美味そうに紫煙をくゆらせてから、横目に背後を確認する。外の銀世界は、その地平線に落ちかける真っ赤な太陽より放たれる太陽光が世界を紅く染め上げていた。もう夜は近い。東の空からは早くも、藍色が太陽を追いかけているようだった。

「この海上機関車は、本来ならば造られなかった代物だ。つまり、ただ魔術というものがあるだけでそれが可能となったのだ。おそらく、この世界にあの溝が無くとも、この魔力というもののさえあれば



世界は変わったのだろうか」

「差別はあろうが、この世界にはもう異人種は馴染んでいる。本来だとかなんだとか、言っても意味ねェじゃねェの？」

「ああ、わたしもそう思う」

彼は穏やかにそう口にして、

「だがここからが本題だ」

胸の奥底から煙を吐き捨てる。

ロメオはそうしてから、続けた。

「あの溝がアレスハイムにあるという配慮を見れば、奴らに研究に専念させて、また優先させるのは当然と言える。異種族からの進軍もあるだろう。向こう側が気変わりし、この世界を侵略せんとすれば真っ先に被害を被るのがアレスハイムだ」

それを主体と考えれば、アレスハイムが溝への交流や協力を行なってくれるのは世界の外交官として大いに助かることでもあり、また元々の評価の高さから信頼におけるものだった。

が、アレスハイムはそれ以上をしない。なぜならば、彼らは明らかなまでに受容体だからだ。

溝からの刺激のみで反応し、己からはそこからさらに深い追求や探求を行わない。まだ見ぬ文化の発展が望まれるのにもかかわらず、そうしないのは同じ大陸にあるヤギユウにとって苛立たしくて仕方が無いものであった。歯がゆい、という言葉が最も適切であろう。

だから提案した。

「溝の中への探索は危険極まりないものだろう。だから、許可さえ貰えれば我々がそれを請負い、見たもの入手したもの、全てを開示し受け渡そう。その代わりに、我が国の研究グループの参入を許可してくれ——だが連中はそれを頑なに断った。ヤギユウ帝国からの提案が気に食わぬのだろうと思い、他国からの委任状を送らせてみたが反応は同じだった。再三に渡る交渉も全てが無駄となった」

その反応から推測されることは、つまり。

「連中は既にそれを成し遂げている。その親交の深さを良いことに、

さらに深く溝への探求を行なっている。未だ魔力という概念しか判然としていないこの世界で、奴らだけがそれを、その技術、知識、情報——その全てを得ていることを、ひた隠しにしている。それが分かったのは、つい半年ほど前の事だ」

つまり、この戦争行為の提案が行われた、その日の事である。

彼ら、アレスハイムがついに折れたのは、ヴォルヴァ大陸屈指の軍事国家たるヤギユウ帝国が、その傘下に降るという提案をなしたからだ。もつとも、そういった証書は無論無い。むざむざ国家を転覆させるやりとりの証拠を残す必要などない。

そうして様々な下準備の結果として、ヤギユウからは約二万の軍勢を向こう側に派遣し、進軍。拮抗した所で、“白旗”を上げる予定だった。

が、そこで四人組がこの国に来たのは明光とも言える。

この四人をダシにし、本来降るはずだった傘下には降らず、正式な交渉として溝への侵攻権を奪う……というのがこれまでの作戦の変遷だった。

だが意外な事に、アレスハイムは止まらない。そして当初とは異なる戦闘方法で、被害は大きくならぬ筈だったのにもかかわらず、多くの者が死んだ。恐らくは今頃、生きているものが圧倒的に少ないだろう。

女兵士を向かわせなかったのが、あの戦闘を惨憺たるものにしなかった要因となってくれたら良い。

恐らくアレスハイムは力づくでヤギユウを支配するだろう。

そして交渉権などは無論、与えるわけがない。

むしろ——なぜここまで馬鹿正直だったのか。なぜこの歳で、ここまで純粹になれたのか。ロメオは自分で自分がわからなかった。

このまま全軍投入して本格的に戦争へとしゃれ込もうか。数で言えば、残存兵力は未だ圧倒的に上なのだから。

「……一体、何万居るんだ、あと？」

その言葉の後に、ホークは恐る恐るといったように口にする。

ロメオは自嘲気味に笑った。

「言っただろう、わたしの国は多民族国家。その多くが流浪の民だった――軍としての数は残り二万だが、すぐに全勢力を吐き出そうとなれば国民の半数が剣を握る……つまり、その他に四万はくだらない」

「このご時世に、随分な大軍だな」

「それが軍事国家たる所以だ」

吐き出される紫煙を眺めながら、脱力するようにロメオは言った。

「さて、そろそろ始めるか」

まるで夕食に向かうように、パイプを護衛に手渡し、膝を支点に立ち上がる。

彼は伸びをするようすもなく欠伸を噛み殺して、ただジャン・ステイルだけを見下ろしていた。

一応、訊いてみる。

「何をだ？」

そんなホークの言葉に、ロメオはにやかな笑みを零した。

「安心しろ、アレスハイム以外への被害は及ばん」

「……つまり？」

「頭を使え。貴様らの待遇は一応客ではあるがな、理解できていないわけではなからう。貴様らは、我がヤギユウ帝国にとっての捕虜人質だ」

ロメオはさらに護衛から手渡された剣を流れるように抜いて、そして振るえば――誰もが反応するよりも早く、そして恐ろしいまでの自然さで、ジャンの胸元を突き刺した。

「アレスハイムの国民の惨殺体を送る。次は他国の人間だ、と脅すついでにな」

ぷっ、と吹き出すようにジャンが声を上げれば、その口腔から溢れた鮮血が噴きでてテーブルに水玉模様を作り出した。心臓ではなく肺が破壊されたのか、それ以降の血は呼吸と共に泡を作り、同時に胸から溢れる血流がソファア、そして足元に溜まり始めた。

ロメオは剣を振るう。

それに応じたのは、ハンスだった。

鋭い爪が剣を弾き、その背後では咄嗟に回復魔術を詠唱するマリ  
ーのソレが、ジャンの傷口をふさぎ始める。

——が、ハンスの行動はそれで終わる。

二方向から襲いかかってきた鋭い突きが、敢え無く両脇を射ぬか  
んとして、肌に触れたのだ。

傷は出来ない。だがいつでも殺してやるぞ、という威圧が、護衛  
の二人からではなく、目の前の皇帝から発されていた。

「退<sup>ど</sup>け、雑魚<sup>ど</sup>が」

「マリー！ ジャンの容態は！？」

「傷は塞げる！ だけど、潰れた……破壊された肺胞は元には戻ら  
ない！」

「つまり！？」

「ああ、もうお馬鹿さん！ 酸素がともに吸収されないと、どう  
なるかわかりますわね！？」

「ッ、治せねエのか？」

「できる。私なら！ でも、時間が必要ですわ！」

言うや否や、ホークはジャンを抱き上げてソファから飛び降り  
る。

共に、なにやらブツブツと唱え始めたマリーは、ホークの服を掴  
むと同時に振り向いてハンスを睨み——。

「盗み見して、ごめんなさい——変則転移<sup>シフト・チェンジ</sup>ッ！」

彼女の唱えた魔術の直後に、輝きも、そういった予兆もなく——  
彼ら四人の姿が瞬時にそこから掻き消えた。

剣を収めたロメオは、忌々しげに血溜まりを睨みつけ、舌打ちを  
した。

「探せ！ 所詮、転移魔術の応用だ！ 国外に出られるはずがない。  
まずは医務室だ！」

「了解！」

ロメオの怒号によって、近衛兵の二人は即座に踵を返して室外へと出ていく。彼はそれを見送りながら、怒りに震える己を落ち着かせるために大きく息を吸い込んだ。そこに血の香りが乗っているのが気に食わなかったが、気にせず、深く吐き出す。

そうして空を仰ぐように天井を見上げた。

「……これ以上、アレスハイムにしてやられるわけには、行かぬ」  
アレスハイムが人質に畏怖しなかった理由はわかっている。

ソレは、向こうがまず軍事関係の事情をすべて把握しているからだ。そこで、実戦で二万ほどこしか居ない本隊を見て、まずこちらを疑った。故に結果だ。

どちらにせよ、あの提案どおりに行くとは思わなかったし、どう考えてもこちらが不利になるのは明らかだったが――まさか、ここまでとは。

自分の不甲斐なさもそうだが、あのガキどもにもしてやられるのは何よりも気に食わない。

ロメオはいよいよじつとしていられなくなって、バルコニーで火照った顔を冷やそうと外に出て――夜の帳が下り、藍色に飲まれ始める世界を見ながら、認識する。

そこから見下ろせる中庭に、その木陰に身を隠そうと手に救急箱を提げながら走りこむ四人の姿を。

## 交渉？

「くそっ」

いつその事、意識でも失っていればまだ楽だったのかも知れない。無自覚に漏れる悪態をそのままにして、ジャン・ステイルは走り続けていた。

結局、まともな治療もできないまま――気管の太さが半分ほどになっってしまったのかと錯覚するくらいの息苦しさを覚えながら、ジャンは背後からの無数の兵士から逃げ続けている。

仲間はもう居ない。

なぜ、こんな事になってしまったのか――右腕の、鈍い輝きを放つ魔方陣を視界に収めながら、腰のバスタードソードに手をやることでいくらか心を落ち着かせた。

中庭に駆け込んだ理由は、あわよくばそこで一刻を過ごして治療を終わらせること。そして主な目的は、ロメオを誘い出すこと。

そして後者はまるで思惑通りに、木陰に入ると同時にバルコニーから落ちてくることで完遂した。

「愚者が！」

そうと知ってか知らずか、皇帝は危険を顧みず単体で四名へと剣を振るう。それに応じるのは、やはりハンスだった。

「まんまとアレスハイムに乗せられたお前が、何を言うッ！ 利益ばかりを重視して国民を蔑ろにしやがって！」

叩き落される剣を手の甲で受け、その射程距離の短さを利用して深く踏み込む。が、それを逆手に取られて返しの刃が突き出て、頬に突き刺さる。思わず顔を背ければ耳元まで深い切創が伸び、顔面に燃えるような激痛が走った。

されど攻撃の手を止めずに下方から拳を突き出せば、それに応じるように横に回りこみ、柄尻を鼻筋に叩きこむ。じんとする痛みに、

視界がちかちかと明滅する。思わず怯めば足元を掬われ——首筋に、冷たい鋭利な刃が突き立てられた。次いで胸元に足が叩きつけられる。

——強い。

ハンス・ベランジェはそう認識した。

彼は決してそう剣術に秀でているわけでもないし、戦闘能力が極めて高いというわけではない。ただ純粹なまでに注意力、觀察力に優れているのだ。故に攻撃を避けられ、それを利用される。隙にながれば、やむを得ず攻撃を受けるしかなくなるわけだ。

その結果が、コレだ。

自嘲気味に笑い、

「なぜ殺さない？」

いまだ来ない死の所在を、ロメオに訊いた。

「最早無礼は抜きにしよう。貴様に一つ問いたい……貴様の母はヒトか？」

ヴェアヴォルフ

「それがどうした。我が父は勇猛なる狼の民だ」

「やはりな。異人種とヒトとの交配の結果、これまでで全ての場合<sup>ケース</sup>で子に種族としての特徴が強く現れている。もつとも、種の生命力として強いことからそれが当たり前の事なのだが——これがどれほど恐ろしいことなのか、貴様には分かんたろうな？」

「少なくとも、我が種族を愚弄しているということではないな」

「その程度には利口か……いかんせん喋りにくい。立て」

足をどかし、剣を抜く。

それを提げたままだったが、ロメオは依然として冷静そのもので、城内の喧騒を背にしながら、立ち上がろうとするハンスを眺めた。加えてその背後に控えている三名は硬直したまま、ただその様子を見守っている。

まったく、治癒でもしてやればいいものを——思いながら、言葉を続けた。

これは暇つぶしに他ならない。そして自己満足でもある。

だが、何も知らぬようであるこの連中には伝えておきたいという所存があった。恐らく、年は越せないであろうという漠然とした直感のもとの、未練なのかもしれないが。

「人類と異人種の交配によって生まれるのは、より生存し易い、つまり強い種の特徴を備えた生命体。ゆえにヒトは排他される——いずれ、この世界からヒトは去り、その姿を持った者たちが大地を占めるだろう」

「それがどうした。動物でさえ”絶滅危惧種”があるんだ。ヒトだってそうだったって不思議ではないし——気が遠くなる話だ」

「わたしは、その気が遠くなるような未来を危惧しているのだが。常々思っているが、貴様ら”異”のつく生命体の繁殖力は異常だと言える。異種族のオリジナルを見たことがあるか？」

「……オリジナル？　ただでさえ異種族の少ない土地に住んでいるからよく分からないが……あの動物を狂わせたような、あの連中の事じゃないのか」

ロメオの言葉に、ハンスは素直なまでに反応する。

同時にジャンは、鋭敏な部位に触れられたように肩を弾ませる。

その語句を”理解して”反応したのは唯一、ジャンのみであった。

そしてロメオは狡猾にそれを見抜き、されど注目すること無く短く息を吐いた。

「知らぬのか。あれが貴様らにとっての最たる姿であり、また本来の肉体でもあるというのに」

——ロメオが欲しがったのは、『異世界』に関するものだ。あらゆる者に活用し、この文化のさらなる進展に導ける可能性にある情報、知識、技術……それら全て。

そして異種族のオリジナル……ジャンが殲滅したあの白い異形『齧る者<sup>バイター</sup>』を始めとするこの世界には元来生息しない、そして生態系としてまずありえぬ形の異種族<sup>モンスター</sup>についてもそうであるはずだ。

ならば、交渉の余地はあるだろうか。

いや、さらに信ぴょう性を高めるには、まずウラド・ヴァンピー



ルと接触する必要がある。

「……なあ、ホーク。考えがある——」

それから程なくして、ロメオの目を盗んでマリーの変則転移によって城内に移動した。その後の喧騒から、皇帝がまたジャンを探しだしているのは想像に難くないのだが。

「くそっ、どこだ、あの吸血鬼！」

薄暗い廊下は耐え難いほどに冷え切っている。それは、全ての窓が開け放されているからだ。

広い空間には絨毯が、そして一定間隔で燭台が並んでいるのだが、風のせいで全てが消えてしまっている。おそらく、城内の地理に詳しくない闖入者対策なのだろう。

マリーには激しい運動は控えるようにと注意されている。下手をすれば酸欠で倒れてしまうそうだ。が——。

「ほうほう、お呼びになれましたかね？」

開け放された窓から吹き込む、凍える吹雪がごとき寒風と共に流れこむ黒い霧が人の形をとったかと思うと、瞬く間にお馴染みの燕尾服姿の男が現れた。が、痛々しいまでの、頭に包帯を巻き、首から提げる三角布に右腕を入れて固定している、満身創痍な姿だったのだが。

「決着と、行きましようか？」

だが吸血鬼は、そんな痛ましい格好もどこ吹く風で、鋭くジャンを睨みつける。

「違う——お前、この禁断の果实について何を知っているんだ……？」

右腕を胸の前にひきつけて、鈍く明滅する魔方陣を見せつけた。それに吸血鬼は意表を突かれたように目を丸くして、なるほど、と頷いた。

「この私に、弁護をしてもらいたいと言うわけですか？」

「……その通りだ。おれが生き残れて、何も残らないこの国の唯一

の得になるものだ、信じてい」

「そうですか。だが私にはその義理はない、と言いたいところだが――」

「――おい、いたぞ！」

「あ、だけどアレ……ヴァンピール殿じゃ!？」

一本道の両端から、けたたましい足音と共に兵士たちのざわめきが耳に届く。

それだけで、この身を抱きしめたいほどの殆ど気温と同じ室温の中で、どっと額から汗が噴きでた。脈拍数が跳ね上がり、呼吸が苦しくなる。傷はふさがっているが、間に合わせに過ぎないのだ。

「禁断の果実は消費魔力は一定で少量なのにかかわらず、熟練度によってその効果は幅広くなる。貴君は魔方陣を持っているが、それ知らないだけだ」

「……こいつは何なんだ？　ただの魔術じゃ……」

「禁呪とされているものの全ては戦略級。そして禁呪とされているものは、魔術書グリモアとして残されどこかの国の図書館最深部に封じられているという話で、それを扱えるものは現時点では存在しないのですかね」

「なら、なぜアンタはこれを知っていた？」

「魔術をかじっていれば、誰もが通る道です。幾多の戦略級魔術が生きるこの中で、同じ戦略級でもその危険性から封じられている魔術……これに興味がわかないわけがない。まして魔術師となれば、それをいかに入手するか、あるいは再現するかが人生の目標となる。その中で最も汎用性に富んでいるのが、その魔術なのですよ」

「もし軍隊にこれを持つ者がひとりでも居たら？」

「確実に後手にまわる魔術ですが、相手が戦略級を放ってきた場合、それを先ほどの貴君のように”再現”して逆転することが可能ですね」

背後、そして前方の兵士たちは立ち止まったまま。その中で連絡をとる者がいるが、おそらくは皇帝を呼び出しているのだろう。と

なれば、これは僥倖だ。

「おれはこいつを、多分――異種族のオリジナルから与えられた」

「……理解に困りますな。異種族は基本的に魔術を持たない。無論、魔法も。それが、人智に等しき知能で魔術を駆り、さらに与えた、とは？」

「その異種族を、アレスハイムが百年以上かけて保管していたとしたら？」

「興味深い」

吸血鬼は、素直に信じこむようににんまりと笑顔を作ってから、筋肉の硬直によって引き起こる痛みに喘ぐ。

「確かに、貴君がそれを扱えるというのは純粹に魔術の適性が高いということですが、だからといって詳しいわけでも、秀でているわけでもない。つまり初心者というわけだ――となれば、貴君が個人的にその魔術を手に入れる事はいえぬ。どうあれ、他者から与えられたという話は確かなようですが……与えられたというのに、詳細に知らぬというのはいささかおかしい話ではないかね？」

「あんた、熟練度によって効果の幅が広がるって言ったな？」

「ええ」

こつくりと頷く男に、ジャンは額から流れる汗を拭いながら、喉を鳴らした。

「その異種族は多分、おれがここまで使いこなすとは思っていないかったはずだ。あくまで哀れみを持って、最低限引き出せば良い程度の考えだったはずだ」

「そんな、不確かな者にわざわざ禁呪を与える理由は？」

「んな事、こっちが知りたいくらいだ！」

「まあ、良いでしょう。こちらも転移魔術を再構成しなければならぬ身。一時的に搜索の任に任じていましたが……おやおや、丁度よい」

吸血鬼が振り向く。そうした所作の中で、ジャンはようやく気がついた。

周囲のざわめきが失せている。

そして彼が向いたその先に目を向ければ――酷く疲れきった顔をしたロメオが、つかつかと音を立てながらこちらに近づいてきていた。

ホーク達に足止めを頼んでいたのだが、やはり殺さずに足止めだけを目的とすると、やはり戦闘能力は発揮されないのだろう。あれから十分と経っておらず、また兵士たちの奥のほうから騒がしいまでの悲鳴が聞こえ始めていた。これは、彼らが追ってきているということだろう。

程なくして、その三人はロメオの背中を見つめる形で、立ち止まった。

ウラドが膝をつき、頭を垂れる。

皇帝はその傍らについて剣を構え――ジャンはその右腕を無防備に、ロメオへと突き出した。

「……何のつもりだ？」

「何のつもりだ」

魔術の発動を警戒するロメオは、そのすぐ後にウラドからの言葉を聞いた。

あの魔術は世界的に禁呪とされていて、さらに最も有用性があり汎用性に富む、戦略級魔術だということ。ジャンの右腕のそれは、異種族のオリジナルによって刻まれたものだということ。

そしてジャン・スティールはその右腕自体を、取引材料としてしようとしていること。

それを全て聴き終えたロメオは、再びそう口にしていた。

「おれはまだ、おれの命が惜しい」

「所詮は己の保身か」

「だけど、この右腕は皇帝にとって、良い研究材料になるはずですよ。言っていたでしょう、魔力は異世界発祥だが、魔術はこの世界に來てからだって」

「言っていない」

「だけど、異世界で魔術っていう力が発展してないんでしょう？  
魔法だけで」

「わたしの研究ではな」

「なら、このヤギウ帝国はこの本来手に入らない魔術ちからで、周囲に脅威を与えられる筈です。もちろん、アレスハイムに対して切り札としても」

ジャンの必死な説得に、ロメオは肩をすくめるように嘆息する。  
そもそもの、彼は言った。

「わたしは貴様を殺そうとしていたのだぞ？ そんなもの、殺した後にも回収すれば良い」

——ここだ。

ジャンは直感的に、勝負時を理解する。

ここで行かなければならない。嘘だろうと事実だろうと、ここでロメオを、一国の王を手玉に取らなければ命はない。

そんな折に、ロメオは眉をしかめるようにジャンを見た。気がつけば、無意識の内に口角がつり上がっていたことに気がついた。

まあいい、丁度良い。

ジャン・ステイルは口を開く。

「その吸血鬼から聞かなかったんですか？ この魔術は、異種族から与えられたものだって」

「それがどうした？」

「なにも、従来通りに魔方陣を刻まれたわけじゃないんですよ。この身体に、異種族の細胞を埋め込んだんです」

「つまり？」

「おれの意味に反してこの魔方陣が肉体から離れて、それがまともに形を維持しているか——おれは保証できませんね」

これはその異種族ノコとジャンとの契約のもとで行われた行為だ。ロメオは少なくとも、その言葉でそう理解したらしい。

また禁呪を手にした経緯はそういったものでなければ説明に難し

い。またアレスハイムならば、そういった存在を”飼って”いても不思議ではないという事から、その流れには納得がいった。

だがそもそも、魔術の受け渡しなんてものに前例がない。

つまるところ、ロメオはジャンの言葉を否定できない。

異種族の細胞を肉体に埋め込んだことさえも。そんな、常識はずれの行いにさえも、彼は、この国を統べる男は口一つ挟めない。特に『異世界』に固執し独自に研究を進めた一人の男としても、それは屈辱的であったのだろう。

わなわなと腕を震わせて――目に見えぬ肉薄のうちの、一閃。

刃は鋭くジャンの右腕の付け根に触れたかと思えば、動きがそこで止まった。

重さすら感じさせないのは、ロメオがその重量を腕で支えているからだろう。

彼はジャンのすぐ隣で、脅すように最確認する。

「貴様は、騎士を志したのではないのか？」

それは、意外なまでの台詞だった。

確かに右腕を失うことは、騎士生命を断つことに等しい。仮にこの後に実力をつけて騎士になれたとしても、腕一本が無いという事から上を目指すことができなくなるのだ。まず国が、そんな不安定で脆い存在を、腕を失うほどの不甲斐ない者をトップに君臨させるはずがない。

が――関係のない話だった。

「アレスハイムでは、魔法が無くちや騎士になれないんですよ」

魔法もなく、右腕も喪失<sup>うし</sup>なう――残酷な話だ。

ロメオはどこか憐れむように鼻を鳴らす。

「貴様だけか、まともな敬語<sup>くち</sup>を利けたのは」

褒められたのだろうか。もし、そうなら、

「光荣至極です」

「貴様は取引というものを知っているな。無知を良い事に、もっともらしいことを叩きつける。そして相手は反論できなくなる。また

持っているモノは本物であるだけに、我々は退くことができない――  
―なによりも、ここぞという時にその笑顔だ。まんまと、乗せられ  
たと思わされた」

氣に食わん小僧だ――ロメオはそう吐き捨てた後、劍を勢い良く  
振った。

銀の煌きが宙を踊り、やがてチン、と金属音を鳴らす。華麗な劍  
さばきはただ劍を鞘に収めるだけで終わり、ジャンの右腕は依然と  
して健在だった。

「人として完結したに近い者よりも、やはり発展途上を見るのはい  
ささか楽しいな。貴様――名は？」

ロメオは、始めて笑顔を見せた。まだ若そうなその顔を快活な笑  
みに飲み込ませて、他国の一般人たるジャンの名を訊いていた。

「え、あ……ジャン・ステイルです」

「ジャン・ステイルか。わたしはロメオ。ロメオ・ヤギユウだ。  
聞いている通り、わたしの祖先は倭国人でな」

「――それで、どうするんですか？」

「そう慌てるな。部隊は既に一時間以上前に退避させているし、故  
にアレスハイムでの戦闘は既に終えている。が、貴様はともかく、  
あの大臣が氣に食わん。被害も甚大だ。わたしの首も危うい。だか  
らせめて――戦争には勝たせてもらう」

「溝は良いんですか？」

「何も機会は今回だけではない。追々やるさ」

ロメオはこの上なく悪そうな笑顔を見せて、

「“客人”に部屋を用意しろ。今夜は泊まってもらう。ククク、楽  
しみだな。やはり勝敗を分かつ戦争よりも、ただ個人を叩き潰すほ  
うがいささか、楽しい」

だがそうする姿は、いささか、見るに堪えない。

ウラドは短く息を吐きながら小さくそう呟いて、指を鳴らす。そ  
うするとすぐさま兵隊は散って――先ほどとは裏腹に、ウラドは丁  
寧なまでに頭を下げた。

「さ、ご客人。ごゆるりと」

皇帝は単身で玉座に戻り、残された四人は程なくして、個別の豪華な部屋をそれぞれあてがわれることとなった。



## 復讐

「面倒くさい。ああ、面倒くさい」

深夜、客人は全て寝静まった頃。

ロメオ・ヤギユウはそれでもいまだ明かりが灯る玉座で、魔方陣を展開しアレスハイムからの生き残り約五〇〇〇名を帰還させたラウド・ヴァンピールにそう漏らしていた。

「どう致しました？」

夜勤の近衛兵は扉の前で出張っている。本来ならば中で待機しているのに外にいるということは、彼がわざわざ追い出したということだろう。

「今回の客人で唯一の名の知れぬジャン・ステイルについて調べてみたのだがな……これがまた、とんでもない曰くつきだった」

「曰くつき、と申しますと……？」

外套で身を包むようにして跪くウラドは、顔だけをロメオに向けて首を傾げた。

ロメオは頭を振って、短く舌打ちをする。

「確か八年ほど前に、いただろう。このわたしを陥れようとした愚かな男たちが」

「八年前……となれば、確かアレスハイムの、どこかの村を壊滅させたと言う——クリミア率いる特攻部隊の？」

ラウドの台詞に、彼は頷いた。

——きっかけは、その八年前に創設した特別攻撃部隊というものだった。

通称『特攻部隊』は、かつて倭国で提案された『カミカゼ』という計画から引用された部隊だ。生存確率の極めて低い、捨て身覚悟での特攻を主とした”使い捨て”の部隊。それを創設したときは、まだついに今回行われた戦争の、具体的な案が生まれてきたばかりの頃だった。

が、そういった部隊は割合に民からの反対はなかった。

元々、犯罪の経歴を持つ者を主として集めた部隊だったからなのかもしれないが、その中でもクリミアという男は騎士という身でありながらも私的な理由で事実上の強姦や軽犯罪者の行き過ぎた拷問による殺害などを幾度となく繰り返し返していた。

だから、そんな彼が特攻部隊長に選抜されたのは最早必然とも言えるのだが――そんな彼が勝手に部隊を駆り、起こした行動がアレスハイムの適当な村を襲い、最終的な責任者である皇帝に全ての責任をなすりつけるという行動は、さしものロメオでも想像の範疇を逸脱していた。

結果的に村は壊滅。

アレスハイムの騎士団が駆けつけた頃は全てが遅く、生き残りは二人の少年少女だけだったと言う。

――クリミアを処刑することはできた。だがそうしなかったのは、一概に皇帝の甘さ故だった。

五年の懲役のみを課し、特攻部隊は解散。

アレスハイムには多大なる謝罪と賠償を行い――五年後、クリミアとその部下はその後適当な部隊にあてがわれることとなった。

「その部隊が壊滅させた村の生き残りの一人が、そのジャン・ステイルだったというわけだ」

「それはまた……」

ウラドは気の毒そうに、言葉をつまらせる。

「奇遇なことですな」

「これを知れば、奴は真っ直ぐ殺しに向かうだろうか」

「……彼と直接関わった私が申しますと、おそらくは」

こくりと頷く部下を見て、ロメオは苛立たしげに頭に爪を立てて髪をかき乱した。

「くッ、もう面倒だ。わたしはどうすればいいんだ？　好きにさせてやればいいのか」

「アレスハイムと言えばあの悲劇、という者も少なくはありません。

それを知るのはもはや必然かと。となれば、その行動は自然にそこへと移行することでしょう」

「……ならば監視しておけ。手を出すな……だが、随時報告を」  
「了解致しました」

事態は好転し、戦争は事実上の休戦状態へと移行した。

捕虜や人質としての待遇はなく、またあそこでの肝の据わった取引が功を奏したために、右腕の魔方陣も模写だけに終わり、その存在はいまだしつかりとくつついている。

またヤギユウ帝国皇帝にも気に入られたのだが――。

「……嘘、だろう？」

ヤギユウ帝国に来て二日目。つまり部屋を用意された、その翌日。ジャンらはこの国での実質的な被害をもたらしていないために兵隊や騎士から恨まれることはなかったが、それでもハンス、マリーの警戒心は解けていない。だが一時的な休戦だから、個人的に少しは溶け込もうと話している折に、にわかに信じられぬ情報が飛び込んできた。

それは、この国のとある部隊が『カミンの村』を壊滅したという事。

カミンの村は、アレスハイム領内のやや北東にある、どちらかと言えば鉱山都市マイン・アバンにほど近い村だ。

そして――ジャン・ステイル出生の村でもあった。

「本当だよ。ありゃあ俺もやり過ぎだとは思ったな。だから、今回は正直、ボロ負けしても仕方がねえと思ってたし。大きな声じゃ言えないがな」

目の前の男は、口をすぼめて手を添えた。

「そもそも士気はそう高くなかったんだ。その上、あんな”大魔術”なんか見せられたら、よ？」

――にぎやかな食堂は、昼時故に休憩中の兵士やら警備兵やらで

多く賑わっている。並ぶ長机の間に入って空になるコーヒークップを気にする女中は、忙しそうにパンやコーヒーなど、おかわりの品物を配っている。

ホークは暇つぶしに外に出払っていて、またハンスとマリーは一緒の部屋にいたのだが、個別の部屋で食事をとっている。あれほどの事をされたのだから仕方がないだろうと言えた。

「目的はなんだったんだ？ その部隊の」

「元々は戦争を吹っかける予定だったらしいんだが、それに手をこまねいている皇帝の指示を待たずに勝手に暴走した結果だ。結果的に、その行為が今回まで戦争を長引かせただけだな」

「そいつらは、今回参加したのか？」

「その事で部隊は解散。部下は全員、例の大魔術に巻き込まれて死んだが――確か、隊長の方は、アレだな。援軍の方に入ってた。ほら、あの騎士だけで構成された五〇〇人の」

「へえ……そいつの事、詳しく聞かせてくれ」

ジャン・スティールの目は据わっていた。

このまま探しだして、皇帝の許可をもらって決闘をするのもいい。夜道を狙って惨殺してやるのも良い。

だが、他にもっと良い方法が思いついたのだ。

どちらにせよ、皇帝はじつくりと思念にふけている。作戦の実行までまだ二、三日かかっていることだろう――もっとも、ジャン・スティールを殺害したという情報は、昨夜の内に送っているらしいから、逆にアレスハイム側から先に動きがあるかも知れないが。

「お、おう……どうしたんだよ」

「いや、そんな勇猛な騎士さんの事を知りたいなって」

「……でも、あんま評判良くねえぜ？」

願ったり叶ったりだ。

最終的にはどうしてやろうか。

ああそうか――皇帝のあの微笑は、この感情によるものか。

ジャンは納得しながら、躊躇いがちにもすべてを話してくれる男

の声を、一字一句聞き逃すこと無く頭に叩き込んだ。

思い立ったが吉日。

ジャンの行動は、思い切ったものでありながらも的確であった。

「クソっ！ ああ、胸糞悪い！」

近くのメイドに頼んで新調してもらった洋服は、まさかのウラドとおそろいの燕尾服だった。腰から二つに別れる裾は、さながらつばめのよう。円筒の帽子がないのが、まだ救いだろうか。

しかし、だからといってそのことに苛立っているわけではない。着替えている途中。

あるいは眩いばかりの雪に覆われる街を眺めれば、あの日の事が脳裏に過るのだ。

「そ、そんなに気に入らないなら脱げば良いのではないかねッ!？」  
なぜかついてきているウラドは、見当違いに怒鳴る。

「わ、私の基本的な服装がこれだから――」

「違うよ……なあ、あんたも知ってるだろ」

目の前で多くの人間が虐殺されていた。

友人さえも、まだ年端もいかぬ子供さえも遊ばれるように殺され、犯された。

ただそれを見ていることしか出来なかったが――この事実を知ったのが、今日でよかった。

もしこれがこの国に来る以前や、あの皇帝と交渉する以前であったならば、とても平常心ではいられなかった筈だ。

「ああ、もう三度は聞いた」

「ならおれから離れててくれ」

「そうは行かぬな。武器も持たぬで一応敵国の人間が国内をぶらつくのだ。護衛につくのは至極当然」

「二回もぶっ倒されたのか？」

「貴君、それを言わないでおいでくれたまえ」

立つ瀬が無くなるぞ――ウラドは気まずげに笑う。ジャンはそれ

以上、ついてくることに口出しはしなかった。

——この国は、既に配置からして背水の陣を敷いていた。

城下町、その城の背後には断崖絶壁。海が広がる。

城の門から伸びる跳ね橋を渡った所で街があり、そこを行き来する住民はまるで戦争など知らぬような日常風景を作り出していた。最も、本当に知らぬのだろうか。ジャンたちとて、訓練の総仕上げの最中に巻き込まれたのだから、アレスハイムも同様かもしれない。

暖かそうな毛皮の外套コートを羽織り、耳あてまである毛皮の帽子を被る。肌は恐ろしく白く、目は利発そうな蒼眼。また服の上からでも分かるほどスタイルは良く、また長身だった。男性は男性でやはり身長が高く、顔立ちが整っている。

無自覚なコンプレックスを抱きそうになるのを抑えながら、ジャンはウラドの案内のもとで男から聴きだした酒場の近くにある、パン屋を目指した。

人通りの多い道路は雪がはけてあり、また溶けた水は溝へと流れているために、通路が水浸しになることはなさそうだった。

やはり北国の知恵というものか——そう感心していると、傍らのウラドが小瓶を差し出した。

「正直、貴君の行動に賛同はできないがな。だが、個人的に私も奴はあまり好きではないし、聞いた所によれば妻子が居るというのに他の女をはべらせているらしい。この際だ、がっちりやってしまえ」「これは？」

「媚薬効果のある香水だ。私特製でな。下手に男が反応しないよう、女性にのみ反応するようになってる。あと、貴君はある程度顔立ちがいいのだから、犬を威嚇するような顔はやめておきたまえ。にっこり笑顔の優しさに、女性はすべからく堕ちるものだ」

——かくして、城からそう遠くはない位置のパン屋の前で立ち止まる。

人通りが多い、大通りの一等地。ここなら随分と商売がしやすいだろうと思いながら、ジャンは小瓶の蓋を開けて液体を数滴、手首

に垂らしてこすりつけ、それを服にもなすりつける。

「手馴れていますな」

「ま、うちの妹が身なりに気をつけろってうるさいもんで」

「できた妹さんだ。今度戻る時に紹介してくれると嬉しいですなあ」

「いや戻るってか帰るからな。二度と来ないから。つかお前歳幾つだよ」

「……ははっ、細かいことは気になさるな」

乾いた笑い声をあげて、ウラドは軽くジャンの背中を叩いて出入り口の扉に押し付ける。

仕方なく扉を押し開ければ、来客を知らせるベルがちりんちりんと音を鳴らした。

「あ、いらっしやいませー」

元気な女性の声。

店内は、昼下がりということもあって閑散としていた。

背後の扉が閉まる。が、ウラドの姿はそこにない。

やはり紳士、空気が読めている。

ジャンは心の中で彼を褒めちぎりながら、店の壁に沿って――あのウラドの悪趣味な趣味部屋のように並ぶ机にトレイが並び、その上に並ぶ無数のパンを、適当にトングでかつさらい、適当な空のトレイに乗せる。

カウンターへと向かえば、そこにはまだ三十前くらいの若い女性が店番をしていた。バイトかと思ったが、左手の薬指に嵌められている金のリングを発見し、間違い無いと理解する。

「これ、お願いします」

「はい！ ありがとうございます！」

丁寧な挨拶。声はやはり若く、顔にはシワひとつ無い。

綺麗なブロンドは長く、それを首あたりで纏めて、その髪を肩から前に流している。エプロンを着込んでいるためにスタイルはよく分からなかったが、それでも子持ちとしてはすらりとしたものだった。

「あー、あと」

「はい？」

「お姉さん、少し良いですか？」

相手がそうしたから、まったく同じ手段でやり返すというのは正しいやり方だとは言えなかった。

だが最終段階では殺害の計画まで立てている以上、彼にとってはそれまでを如何にして精神的に傷つけるかが肝要となっているのだろう。

どこからどう見ても普通の青年だ。むしろ、グレていないことだけが奇跡的に見える。人当たりの良さから善人に見えるから、こういった選択や思い切りの良さが随分と悪人らしい一面に見えて仕方が無いのだが――もし、今回で彼が初めて人を殺すのだとしたら、本当に計画が最後まで行きつけるかが不安だった。

「複雑だ」

ウラドは、店に暫く滞在してから手ぶらで肩を落として出てくるジャンを見て、短く息を吐いた。

彼はこれから、昼間からろくでなしが集まる酒場へと向かう予定だった。あの媚薬の効果が継続している彼女をそこに連れていけば、およそろくでなしにとっての天国、今回ジャンに目を付けられた男にとつての地獄が見えるだろう。

加えて、それが始まりであるのは、想像に難くない。

あと二、三時間もすれば義務教育から帰ってくる娘がいる。彼女も、母同様に弄ばれるのだろう。

こう考えればジャン・ステイルは混じりっ気のないクズだ。どうせなら出生からこれまでを語ってお涙頂戴したほうが幾分かマシになる。カルト教団に推薦するのでもいいかもしれない。

が――結局は、その始まりにすら着手出来なかった。

それが単なるビビりの結果なのか、良心によって悪意が押しつぶされたのかは知れない。



「やれやれ、どういう事だか」

皇帝は今頃、いかに大臣を失脚させようか、幾通りもの案を吟味している頃だろう。下手にあの時に気に入ったからと、ジャンを身内に誘いたがったりしないことだけが救いだっただけだ。

報告に行こうかと思っただけ、まずはジャンだ。

彼はそう考えて――空を飛ぶその身を、勢い良く滑空させた。

「どうしたと言うのだ」

ウラドはその傍らに降り立つと同時にそう訊いた。

ジャンは先程まで息巻いていた姿はどこへやら、喉からひゅうひゅうと高い音を鳴らしながら、口を開いた。

「ここ二、三年、奴は一週間に一度戻るかどうかの生活を繰り返しているらしい。家に金も入れないし、戻ってきたら戻ってきたで呑んだくれて、身体を求めるだけだよ」

「あの奥さんだと大して精神的なダメージにならないから、か？」

「ああ、それもあるが――あの奥さんは駄目だ。良い人すぎて、おれには……とても」

やはりビビった結果だ。

ウラドはこれみよがしに嘆息してみせたが、ジャンは微動だにせず、柄にも無く呼吸を乱したままだった。

これでは、本当にあのクリミアを殺すことはできないだろう。

できることなら出会うこと無く、そのまま国に帰って欲しいものだが――この調子だと、対峙しても勝てるかどうか、対等に戦うことすら危ういかも知れない。

クリミアは人間的にクズだが、実力は割合に高い。無論として吸血鬼であるウラドに勝つことはできないが、それでもその戦闘能力は軍でも上位に食い込むほどだ。

彼が生かされた理由には、そういった要素も含まれている。

「それで、どこに行くつもりかね？」

「奥さんが言っていたのは、行きつけの酒場にいるって事だ。今日は

訓練も休みだから、そこに居るかもって」

「武器も無しに突撃か？」

日差しを気にして外套をきつく締め付け、帽子を目深にかぶり直すウラドは、説教でもするように威圧的に言った。

が、ジャンは依然として前を向き足を進めたまま頷くだけだった。

「……好きにしろ」

彼とて、この国を信用したわけではないし、好きになったというわけではない。

こんな喘息に似た症状になったのは、ロメオの攻撃によって肺が破壊されたせいだ。マリーに治療してもらおうにも、道具が足りないから国に戻ってから、と言われている。だからこそ派手な運動は厳禁とされていたのだが、もはや構うものか。

人質として殺されかけて、だが妙に皇帝に気にかけられた。

心情的には、今まで威圧的だった上級生が優しくしてくれたようなものだ。安堵できても、気を許すには至らない。

またウラドも同様だ。

彼に至っては、感情移入さえしないから”どうでもいい”というところだった。今日はロメオの指示でわざわざついてきているが、ここで死のうがどうしようが、正直なところどうでもいい。最も、死ぬのは国として困るから危なくなれば止めざるを得ないが——ここまで粹がり驕っているガキは、少し痛い目を見なければ分からないだろうと考えていた。

少し入り組んだ所に、その酒場があった。

建物と建物に挟まれて出来上がる路地の奥地。大通りから外れたそこは薄汚く、また壁には塗料での落書きが豪快に行われていて、どこか怖気の走るような場所だった。

また、どこからともなくすえたような腐臭も漂ってくるが、気のせいだと信じたい。

「ここはスラムに近い場所だ」

ウラドの要らぬ説明に、されどジャンは構わず酒場の凍えたドアノブを捻り、押し入った。

蝶番が錆びた音を立てて、扉が開くと共に中の満ちた酒気が風を起こしてジャンの全身を撫でて行く。薄暗い赤灯によって照らされる室内ににわかな灯りが差し込んで、扉が閉まれば、淀んだ暗さに空間が満たされる。

軽快な音楽が、微量な音量で響く。

どこの酒場もそうなのか、やはりここもいくつもの円卓に、カウンター席という一般的な内装だった。

客は意外にも多く、そしてその殆どの客の身なりは薄汚かった。麻の衣服は薄汚れて、近くを通りすぎればすえた臭いがする。また酒を瓶ごと煽り、酔って寝てしまっている者も居る。

どうあれそういった連中の目付きは一樣に悪く、その格好からはずさんだ背景が見えてくるようだった。

ここが、スラムという場所か。

ジャンはそう改めて認識してから――カウンター席壁際で、壁を背にして座る男を発見する。それはそう難しいことではなく……むしろ、それを見つけたことを、ジャンは後悔した。

男の隣に座っている女性は彼と向い合って、上肢を深く下げている。おじぎをする格好だ。が、その顔は男の股間に埋もれていた。また耳を澄ませば、水音を立てて――その顔は上下している。それがとてもなく卑猥である淫猥な行為であることは、年頃であるジャンにはすぐに理解できた。

「なあ、あいつがそうなのか？」

正装である彼らは周囲から目立ちやすい。だから空間の隅の円卓を陣取って眺めれば、ウラドはどこから出したのか、蒸留酒を煽り始めていた。

「ええ、彼が何を隠そう、クリミアですな」

「なら、隣の女は？」

肩をむき出しにする派手なドレスは紅く染まっている。足はふと

ももからむき出しになっていて、屈めばその深く開いている胸元からたわやかなバストが零れてしまっていた。

「ああ、娼婦でしょう。スラムは、寒ささえ凌げればどこでも事に及ぼうとするのでな」

「下衆が」

心底むかつくようにジャンは吐き捨てる。

ウラドがおちよこのようなグラスに蒸留酒を注いで差し出せば、ジャンは迷うこと無くそれを受け取った。飴玉でも放り込むようにその琥珀色の液体を口腔内に流しこみ、燃えるようなアルコールを飲み下す。

——それから五分ほど監視していれば、ついには本番行為にまで移行していた。

カウンターの向こうにいる主人はまるで日常茶飯事であるようにポルノ雑誌を手に読みふけているし、客はその光景を気にすらない。

程なくしてそれが終わると、カウンターに金貨一枚を叩きつけてクリミアは席を立った。

娼婦の女は息も絶え絶えにカウンターにへたりこみ、垂れてくる液体にハンカチをあてがう。ジャンはそれを一瞥してから、追うようにして酒場を後にしたクリミアの背についていった。

——扉を開けて、左右を確認する……までもなく、目的の男はその正面の壁にもたれかかっていた。

襟を立てるコートを着こむ男。黒髪は額の真ん中から分けられていて、肩まで伸びている。

細い眉に鋭い目付き。顔つきはいかつく、そのいで立ちはマフィアの若頭つげのようだった。

「俺を尾行つげてるのは、てめえか？」

ポケットに両手を突っ込み、その長身は見下すようにジャンに言葉吐き捨てた。

背後にはウラドの姿はない。

だが構わず、彼は頷いた。

「だったらなんだったんだ」

「俺を誰だか、分かってんのか？」

「ああ、知ってる」

ジャンは底意地が悪そうな笑顔を作り、歯を剥いて頬肉が攣りそうなほど吊り上げた。

「随分な早漏野郎だってことはな」

「てめえ！」

コートを翻して、男は腰に刺さる短剣を、流麗たる動作の中で抜き、そして深く踏み込む――鋭い一閃。それはジャンの反応速度を上回るほどの速さで鋭くその喉元へと飛来した、が。

ジャンもただ流されるままに二ヶ月間訓練を受けていたわけでもなく、また白兵戦能力はホークに認められているほどだ。故に、短剣は虚空を貫く。

肩口の遙か上を流れる腕をそのままにして、ジャンは片手でその腕を払い、掴み――下方へと力いっぱい引きずり落とす。するとクリミアの身体はいとも容易く姿勢を崩し、

「ッ!？」

その顔面に、ジャンは力の限りで振るう拳を叩き込んだ。

## 復讐？

「お、俺が……な、何をしたって——」  
うろたえる男の顔面を、ジャン・スティールは容赦なく蹴飛ばした。

いつ首の骨が異音を立ててへし折れてもおかしくはない威力であり速度である蹴りだったが、クリミアはそれでもしぶとく、顔面を原型無く腫らすだけだった。

「くッ、てめえ……どこの者だ。<sup>モン</sup>俺は騎士だぞ、てめえなんぞ、俺を探しにきた連中にぶっ殺されちまうぜ！」

だが、クリミアの意気がるその声はとどまらない。

彼は依然として己の死を理解できぬようだったし、また自身の絶対的な生存を疑う事を知らないようだった。

これまでもが、そういった生き方だったのだろう。弱者を挫き己を強者とする人生——故に、失敗や挫かれることを知らぬ。故に恐怖すら、抱くことを理解出来ない。

怖いもの知らず、勇猛と言えることができるだろうが、彼は違う。ジャンは知っている。

すなわち蛮勇。

向こう見ずだ。

「なあ、アンタ……八年前って言われれば、何を想像する？」

——人気のない裏路地。その突き当りに座り込んだクリミアへと、ジャンは訊く。

男はそんな言葉に、当惑の顔をした。八年前と言われて思い出せぬというよりは、突然の事で何を言われているのか理解できぬようなものだった。

「はあ？ 八年前だあ？ んな昔のこと——」

言葉を遮るように、短剣がその柔い皮膚を切り裂いて深々と太ももに突き刺さる。

「がああああッ?!」

耳に障る悲鳴。

ジャンはそれに苛立ち、腹部に鋭い蹴りを入れた。

呻き、男はやがて吐血する。さらに横腹を蹴り飛ばせば、男は力なく横転し、びしょぬれの路面へと叩きつけられた。

上等なコートは血と雪解け水にまみれて汚れ、いい男と言えた傲慢の面は既に見るに堪えぬほどに歪んでいる。が、それを見ても、ジャンの胸の中に高揚が生まれることはなかった。

広がるのは怒り。

生まれるのは私憤。

いまいましてにクリミアを見下ろし、ジャンは己を落ち着かせるために冷え切った大気を胸いっぱい吸い込んだ。

ここは日陰だから、他よりも一層冷え込んでいる。指先などは、すでに感覚が失せていた。

が、それを気にするほどの理性や思考は失せている。今は、自分自身目の前の男をどうしたいのか――その疑問に駆られ、口は自然に言葉を紡いでいた。

「なあ、てめえ! アレスハイムのカミンの村って、知ってつかよ!?」

「ぐうう……いてえ、いてえよ……くそっ、なんで、どうして……この、俺が……ッ」

「質問に答えろ」

無情な一撃。

顎を蹴り上げられ、男は空を仰ぐように首を仰け反らせた。後頭部はすぐ後ろの壁に叩きつけられ、鈍い打撃音が気味の悪い音となって反響する。

「うう……」

「なあ、てめえが焼き払った村だよ。知らぬ存じぬつつーワケには行かねえだろうがっ!」

怒号を撒き散らし、また幾度か腹を蹴り飛ばし、踏みにじる。

だが依然としてクリミアはこの状況を理解できていないようであり、まともな返答を得られない。

——しかし、ここに連れ込む前に取り上げた首の真鍮製のネックレスは認識票となっているらしく、その氏名やら生年月日が刻まれているのを確認した。それはウラドから聞いた情報と確かに合致していたのだ。

だからこいつで間違いない。

つまり、やはり思考が追いついていないだけか——あるいは純粹なまでに、その記憶を失っているか。否、ただ忘れていただけだ。己にとって取るに足らぬことだったから、なのだろう。

やはり忌々しい。

許せるはずがない。

——ジャンはクリミアの太ももから短剣を抜く。切先は鮮血で弧を描くように尾を引いた。

「まあ良い、おれは、てめえを——」  
殺す。

口にしようとして止められたのは、今更になって怖くなり実行を中止したからではない。

その腕を、力強く引き止められたからだった。

「何をするんだっ！」

腕を振り払い、憎らしげに背後のウラドを睨みつける——が、そこに居たのはウラドなどではなかった。

「……今、お前は何をしようとした？」

落ち着き払った口調。鋭い視線は確かにジャンの瞳を見据え、掴み続ける腕は未だ力強くその指先を食い込ませていた。

ディライラ・ホークは底冷えするような声で、ジャンへと問うていた。

「おれの……家族の、みんなの仇だ。こいつが、おれの人生を滅茶苦茶にした！」

ヒステリックな絶叫に、されどホークは顔色ひとつ変えずに頷く。



「だから殺そう、と？」

「そうだよ、おれは善人でもなんでもねえ！　ただのガキなんだよ。こいつを、許せるはずがない！」

「別に許せだのなんだのって、いうわけじゃねえんだが……」

ホークは困ったように後頭部あたまを掻く。

それから気づいたように手を離し、寒そうにズボンのポケットに手をつ込んだ。

「こんな無抵抗のやつを殺して楽しいか？」

「楽しかねえよ。そもそも、楽しい敵討ちなんぞ、無えだろうよ！？」

「そう興奮すんな。オレだって別に、文句をつけてエわけじゃねえんだ」

「だったら、なぜ止めた？」

「さあな。気がついたら、つてのが正確か」

「人殺しのエリートが、善人ぶって？」

「ほっとけ」

やるせないように肩をすくめる。

ジャンは、責めるべきでない相手まで責めてしまう自分にさえも苛立って、またそれすらも押さえ込めずに湧き上がる、というよりは既に噴き出ている怒りをあらわにした。

それから這いずって逃げようとするクリミアの手を力いっぱい踵で踏みにじり、その声帯が潰れたような鈍い悲鳴を聞く。

「こいつを生かしておいて、なんの得がある？」

「擁護するわけじゃねえんだが、命つてのは損得であるモンじゃねえだろ？」

「じゃあよ、例えば――農業を営んで、害虫を駆除しない農夫が居るか？」

「居ねえな。商品がダメになっちまう」

ホークはなんでもないように答えてみせる。

ジャンは、ウラドが言った、犬でも威嚇するような顔で、目の前

の男を睨みながら言った。

「さしずめ、おれは駆除業者。こいつは害虫だ」

「……なあ、ジャン——」

明らかなまでの殺意。そしてその仇を既に人として見ておらず、子供が無邪気に虫を惨殺するような危うさを垣間見せた。

このままではいけない。ホークが直感的にそう理解して、止めようとする。

が、ジャンの行動は物理的に、彼が考えたものとは異なった方法で止められた。

「発現<sup>めざ</sup>めろ、俺様<sup>アロガント・ロウ</sup>の法」

建物の壁に黒点が生まれる。かと思えばそれは瞬く間に展開し、やがて腕が飲み込まれそうなほどの大きさに広がった。

その数は四。壁、そして地面に位置するそれらは、そこから瞬時にして——何かを鋭く勢い良く吐き出した。

「——っ?!」

手首から絡み付いて肩口まで、足首から飲み込んで太ももまで力強く締め付ける鎖。ぎりぎりと肢体は締め上げられて、少しでも気を抜けば骨は外れ、あるいは聞きたくもない音を立ててへし折れてしまいそうな暴力で、穴の方向へと引っ張り上げていた。

息が詰まる。

状況が理解出来ない。否、理解などしたくなかった。

「ははッ、糞ガキッ！　だあれが害虫だ？」

背後から、力強く肩を掴まれる。だが、もうそれに対して振り向くことは出来なかった。動けば鎖は肉に食い込み、全ての自由を掠め取られる。

が、目の前のホークはいっしか、脇から抜いた自動拳銃を構え、ジャンの肩口から背後の男に狙いをつけていた。

「くそっ、ホーク！　やめろ、こいつはおれが……」

「黙れ」

「——内輪揉めは良くねえな！　糞ども、てめえも動くと、俺の鎖

で絞め殺すぞ？」

容赦無く引き金を引こうとしていたホークだが、視認された時点  
でその行動は易くなくなる。短く舌打ちをして、彼は照準を外した。

「ああ、それでいい」

ヒュー、と口笛を鳴らし、クリミアはごきげんに頷く。

「俺の能力は俺の意思が強ければ強いほど、その力を強くする。つまり、その気になれば――」

フォービドゥンフルーツ  
「禁断の果实」

間髪おかずに言葉が響く。

僅かな時間すら置かず、それは発動した。

その場にいる全てのものが、ジャン・スティールを中心にして魔力が集中するのを理解した。またその背、クリミアにとって正面の肉体が鈍く輝いたのを認識する。だからこそ行動を起こそうと、その拳を振り上げたのだが……その認識があまりにも遅すぎた。

パワー・ポイント  
肉体強化が鎖を引きずりだす。肉体はよりきつく締め付けられるが、ジャンは己に対する配慮はしない。額に右手を押し付けられすぐさま引き摺り出される真紅の果实。そうして言葉と共に、彼はその果实を大きく一口、齧り――。

アロガントロウ  
「覚醒めろ、俺様法っ！」

魔力の塵と消えた果实に倣うように、ジャン・スティールを拘束していた鎖が光の粒子となって薄暗い空間に飛び散り空气中に溶けていく。

同時に背後の男を肘で突き飛ばすように振り返れば、そのクリミアの四肢の位置に穴が広がり――凶太い鎖が、ジャン同様に抵抗の暇も無くその四肢に絡み付いていた。

その力は、ジャンの時の比ではない。

まずその鎖の太さからして二倍は軽く、その力とて、四肢を縛り上げた瞬間に異音を立ててばきばきと骨をへし折っていた。

男は目を剥いて言葉にならぬうめき声を上げ、間もなく、その首をだらりと垂らした。

意識を失ったのだ。

指を鳴らせば、先程と同様に鎖が消え失せて、力なく四肢を垂らす男はそのまま地面に叩きつけられる。

ジャンは嘆息し、それから手にしていた短剣を男のもとに投げ捨てた。

「馬鹿か、てめえは」

唾を吐き捨て、最後に横っ腹を蹴り飛ばす。

だがもう男は微動だにせず――。

「動くなッ！」

背後から響く、騒がしいまでの静止の声が、二人の行動を制していた。

無数の足音がジャンらを包囲する。どこからともなく現れた男たちは皆剣を構え、殺気を漲らせてその切先をジャン達に突きつけている。

と、共にその無数の男たちは割れ物でも扱うようにクリミアを抱き上げると、路地にとこ狭しと言わんばかりに集まった連中は即座に退避していき……やがて、残った一人の巨漢がジャンの胸ぐらを掴み上げた。

「今は見逃してやる。だが、我々は総力を以て貴様に悪夢を見せてやる。覚えておけ」

「あれは、聞いた所によると『スモース・クリミナル』と呼ばれる犯罪組織らしい」

昼下がり。

近くの喫茶店に寄ったジャンは、ホークと共にラウド・ヴァンピールの言葉を聞いていた。

――彼はあの時なにをしていたかと言えば、ただ傍観していただけだと言う。手を出す必要はないからと見ていて、ジャンの命が危機に晒されればある程度は動くつもりだった、と述べた。

そんな彼に何か口を挟む理由など無く、ジャンは素直に頷いた。  
ウラドは満足気にコーヒーを啜り、そうして語り始めたのだ。

「連中はクリミアが二年前に摘発した麻薬密輸グループでな。責任者は禁固刑として牢屋にぶち込まれたが、その部下はそのまま――弱みを握られている為にクリミアの傘下に降る。その後の目覚ましい活躍は、誘拐、暗殺、薬物売買……とりあえず悪そうなことならなんでもござれ、といった所ですな」

スムース・クリミナルは現在、スラムの全域を仕切っている犯罪組織だ。その統率された行動は軍にも匹敵すると言われており、また事実、軍出身が何十名か在籍しているらしい。数こそ負けてはいるが、この国の民が基本的に戦闘を得意としている奇異な体質故に、相手にするのは困難であり、クリミアによる隠蔽によってその全体像は未だ闇の中にある。

つまり、狙われれば一卷の終わり、ということだった。

「オレはお守りはゴメンだぜ？」

ホークは肩をすくめて首を振った。

「あんたにお守りされるほど、おれはそんなに雑魚じゃない。だいたいクリミアがトップだったんだろ？　ならそいつをぶちのめした今、おれに敵なんていねえよ」

「物量で、という考えがあるのだがね……驕るな。死ぬぞ」

「別に、そんなつもりじゃ無い……大体だ、あん時にホークが止めなければ、おれはアイツを殺せていたんだ！」

「おい、私の行きつけでそんな物騒な話はやめたまえ」

穏やかなアフタヌーンティーを楽しんでいた客が、一様に不快げな顔でジャンを睨む。

ジャンは肩をすくめて、悪かったと嘆息した。

「だけど、これはおれの問題だ。なんだったら、組織をぶつつぶして奴の息の根を止めてやる」

「オレはまだ観光<sup>みて</sup>みたいところがあるからな。一抜け、だ」

「私に同僚殺しは出来ぬのでな」

「あ、だが一人、この国に居る知り合いを呼んでいるんだが――」  
言ったそばから喫茶店の玄関が、小気味の良い鐘を鳴らして来客を知らせる。

その影は立ち止まってあたりをキョロキョロと見渡し、すかさずホークが手を挙げれば、一度だけ目を見開いて頬の肉を釣り上げてから、無表情に顔を戻した。

カツカツと足音を鳴らして、四人がけの席の前で、彼女は立ち止まる。

「久しぶりにきたと思ったら、あんたっていつも仕事の話しかしないのよね」

腰に手をやり、片足に重心を移す。

右腕には装甲のように分厚い真紅の鱗が手の甲から肘あたりまでを覆い、それとは対照的な薄い水色の長い髪は首元で一括りにされて、それは左肩から垂らされていた。

「お前さんも、久しぶりに会ったと思うが……変わらねエな」

胴を覆い尽くす白金の板金鎧に、肘あて、そして下半身はスカートのような佩楯はいだてにおおわれており、白金の脚甲は太ももまで伸びていた。

リザード  
蜥蜴族の娘だと、最初は思ったが――その体中から溢れる、堂々とした雰囲気や、どこか高尚な、上品な態度がその違和感の原因だった。

「それで？ その妙な連中ってのは何？」

ウラドから勧められるままに席に着いた彼女は、頬杖について言葉が続ける。ウラドやジャンには、一瞥しただけであった。

ホークは言いにくそうにたっぷり苦笑してみせてから、先程ウラドから受けた説明をそのまま口にした。

「スムース・クリミナルだ」

「……ッ、冗談でしょう？」

「連中は、総力を以てこいつを潰すとよ」

親指でぐいっとジャンを指してやると、彼女は憎らしげに彼を睨

みつけてから、大きく息を吐いた。

この街で生活をする彼女にとって、街の裏の顔たる連中を相手にするとなれば――最終的にはこの街を出なければならなくなる。

せっかく慣れてきたのに。幾度か舌打ちをして漏らした言葉は、ホークの要請を否定するようなものではなかった。

「んで、その小僧は何をしたの？」

「クリミアをばこぼこにして、両手両足をばきばきにへし折ったんだ」

「……はあ？」

ホークの言葉に、彼女はなにを言っているのか理解できぬように眉をしかめる。その、薄く赤みがかかった瞳の奥で、喜色が見えた。徐々にしかめっ面は緩んで、やがて彼女は強く目を瞑る。

「ぶっ……あはは！ また、思い切ったことをしたわね。なんか、恨みでもあったの？ お気に入り玩具を壊されたとか？」

可笑しそうに大きく笑ってから、彼女は目尻に浮かんだ涙を指先で払う。

これまで散々と迷惑をかけてきたクリミアは、その職業が騎士であるがために下手に手を出せず、また組織の規模が大きいために個人では立ち向かえなかった。だからこそ今まで辛酸を舐め続けているのだらう――ざまあみろ、と吐き捨てた彼女は、嬉しそうに頷いた。

「まあ、近い」

詳しいところは本人から訊けと言い含めたのを、彼女は理解する。

「ま、別にいいけど。でもそのかわり、この仕事が終わったら連れてってよね？」

「勝手にしろ」

「そう――じゃあここからは傭兵としての仕事の話。さすがにあたしと、その小僧だけじゃキツイと思うけど？」

彼女は微笑みを打ち消して、真剣な眼差しでジャンを見つめてから、ホークへと視線を移す。

が、彼は首を振って、ジャンの頭を無造作に掴んでみせた。

「ンなこたアねェよ。こいつは、オレのお墨付きだ」

「へえ、珍しいこともあるのね」

「ま、発展途上だな」

「そう。でもスムース・クリミナルは今夜にでも襲撃に来るわ。準備できるなら、今の内にしておきたいんだけど――」

彼女はそうして、ホークの言葉を疑うこと無く、またジャンの實力に不安を抱くこと無く淡々と話を進めていった。

規模も兵装もわからぬ敵を相手にするというのに、たった二人の、その内一人は實力は勿論素性すら判然としないのにもかかわらず、彼女はなんでもないように作戦を立てる。

ジャンは口も挟めず、ただ呆然とその光景を見守ることしか出来なかった。

そうしてそこに一区切りがつくと、彼女は小さく嘆息した。

「ま、所詮寄せ集めだし。何人かが軍人上がりだとしても、結局は実戦不足の素人集団でしょ？ 雑魚同然。種族開放するまでもないわー」

「身近にいるお前がそういうなら安心だな」

「そそ。どんと戦艦にでも乗った気持ちでいればいいわ……つと、ジャン・ステイルくん、だったっけ？」

彼女はそこで、思い出したように向き直る。顔は、体ごとジャンに向けられ――差し伸ばされた手は、握手を望んでいた。

「ええ」

頷き、それに手を返す。力強く握り、あるいは握り返されて……見据える視線は、何かを図るようなものがあつた。

それからややあつて、彼女はにっこりと微笑む。

ギリ合格、と口にした彼女だが、その言葉に対する説明はなく、

「あたしはクラリス。竜人族よ」

「ああ、ジャン・ステイルです。よろしく――」

なるほど、蜥蜴に似て非なる――加えて伝説とも謳われる竜の血



を受け継ぐからこそ、あのごく自然的に溢れた品位なのか。ジャンはその自己紹介から簡単に納得した。

また、そういった完結な挨拶を経て、彼らは一時的なコンビを結成することとなった。

## 復讐？

男は、いい加減にしてほしいと思っていた。

転移魔術というものはすこぶる絶好調で、移動には勿論、軍隊の侵攻をするのにも便利であるのだが――眩い輝きの中、腹の臓腑が浮かび上がるような不快極まりない無重力感を経て再び大地を踏みしめた男は、うんざりとしたように首を振って嘆息した。

シワが目立つ顔は、されど短めの白髪頭を整髪料で全て掻き上げ後ろに流すようになでつける。もみあげから伸び蓄える顎鬚も同様に真っ白だったが、歳の割にはまだ若く見える。といっても、実年齢の五八から五〇歳前半、あるいは五〇手前に見える、程度の誤差の範囲内だったのだが。

「まったく、わしはアレか。幼子か。これはアレだな、はじめてのおつかいといったところか？」

柄にも無く、本来の丁寧な口調を崩して毒づく。

その身体は歴戦の勇士を思わせるようなガタイの良さであり――ディアナ大陸かぶれのこの『ヤギユウ帝国』に合わせて見繕った背広は、座る際にはボタンを外さねばそれが弾けてしまいそうなほど、ぴっちりと身体のラインを浮き立たせていた。

これが甲冑姿で剣を手にしていれば、どこかの騎士団長だと誰もが誤認するだろうが、実際のところ、彼には実戦経験は一度もなかった。

いらつくようにグググチと言葉を漏らす一方で、呼気と共に浮かび上がる白い蒸気を楽しげに見ていた。鼻は寒さ故に真っ赤に染まっていたが、稀にしか無いこの寒さを、彼は意外にも楽しんでるようだった。

辺りの銀世界も風情あふれるものであり、街の景観もいっそ荘厳と言ってしまっても良いかも知れない。

振り返れば巨大な山が雪化粧をしていて、目の前の街には屋根に

雪をたっぷり積んだ街並み。一様に厚着をする国民は誰も彼もが肌が透き通るように白く、幻惑的な美しさを醸し出している。

もう十、いや二十年も若ければ仕事そっちのけでたらしこんでいたかもしれないのだが……。シワが目立つ手に視線を落として、彼――レヒト・アレスは肩を落とした。

「わしも老いたなあ……」

「あまりはしゃがないでください」

「醜いとな？」

「卑屈すぎます」

隣の、護衛として唯一ついてきてくれたケンタウロスの女騎士は、毅然とした態度で切り捨てる。

相手が『国王』だろうとこの調子なのだから、皇帝相手でもどう出るか、甚だ楽しみになってきた。

レヒトは顎鬚を撫でながら、片手をズボンのポケットに入れて、一本の紙巻タバコを引っ張り出すと、手馴れた様子で口に咥えた。指を鳴らせば、その何もない手の甲に浮かび上がる複雑な魔術紋様が大気中の魔力を必要な分だけ……。つまり本当に微量なだけ集中させて、タバコの先端に閃光を瞬かせた。それに合わせて思い切り息を吸い込めば、吸い慣れた紫煙が肺を満たしていくのがよくわかる。

いかにもうまげに紫煙をくゆらせれば、鼻や口から吐き出されるそれが蒸気なのか煙なのか判然としなくなった。

「軍部大臣も、少し信頼しすぎたか……。わしも老いたな」

先ほどの冗談交じりの下心丸出しの、王というにはあまりにも下世話すぎる言葉とは打って変わって、その台詞はどこか自嘲気味だった。

ケンタウロスの騎士――ユーリアは肩ほどの高さにあるレヒトの頭を見下ろすように一瞥してから、短く、押し殺すようにため息を吐いた。

――今回の訪問は、ヤギユウからの報告にあったように、殺害さ

れたジャン・ステイルの死体の回収と共に、妥協案を提示して、この戦争というにはあまりにもおこがましい程の、私的な理由で国を巻き込んだ争いを、早くも終結させるというものだった。

大臣は現在、自粛して自宅謹慎中である。彼の処遇はこの取引の後に判断される予定だ。

なし崩し的にユーリアがその後継を務めるという噂があがる一方で、今回から大臣の代わりとなる副大臣の補佐となったエミリオも、割合に評判がいい。

そう考えれば、アレスハイムはトップよりも部下の方が優秀なのが多いのかも知れない。

良いことだ。

レヒトは満足気に頷くが、ユーリアは、本当にそれどころではなさそうな顔だった。北国生まれかと思わせるような白く透き通るような肌は、今ではそれを通り越して青ざめている。

クソでも我慢しているのか――緊張を和らげるために国を出る前にそう言ってみたが、無視された。なんとなく察しはついていたが、ジャン・ステイルのことについて気に病んでいるのだろう。

レヒトとて、彼のことは知っている。

かつての『カミンの悲劇』の生き残りであり、最近では騎士の中でも噂になっている『騎士適性の無い、最も優秀な騎士候補生』と言うのが彼であるのは、世俗にそう詳しくはない彼でも理解はあった。

大臣の独断で、騎士の特攻隊長に警ら隊長、そして傭兵隊長などを彼一人の訓練のためにあてがっていることも、その為に軍事予算から彼らの給与分を削っているのも知っていた。たまに来ては嘆く副大臣を慰めていたのは、何を隠そう彼だった。

が、その青年はもう死んだ。

気分的には、友人がちよいちよい自慢してくる手塩にかけて育てていた子猫が馬車に轢かれて死んでしまったのを聞いたような心情だった。可哀想に思うし、慰めてはやりたいが、なんと声をかけれ

ばいいのか分からない。そんなところだった。

「さて、行くか」

フィルター近くまで灰に飲まれたタバコの吸殻を指で弾いて空中に飛ばす。そうして指を鳴らせば、刹那に魔術紋様が鈍く輝き、閃光。瞬間的な高熱と共に、それは灰にすらならず、ススを散らして常に吹いているそよ風に撫でられ、どこかへと流れていった。

「はい」

ユーリアが頷けば、頭の高い位置でくぐられる金髪がりん、と揺れる。

彼女は先を歩くレヒトの数歩後を付き添いながら、その肉体に巻きつける絨毯のような衣服の下に身につける、タイツ状のボトムスをチャリズムで通行人に見せつけるが――どこかの貴族か、お偉いさんか。そういった考察にばかり熟考するものばかりで、彼女の個人的な魅力に目を奪われるような物好きは居なかった。

それが、およそジャンたちが裏路地で一悶着起こしていた頃合いで――彼女らが本格的に皇帝とやりとりをしている時間帯、ジャンらは、哀れだと泣いていた。

「……大丈夫よ、ジョネス、あたしが手伝ったげる」

正確には、クラリス一名のみだったのだが。

「ジョンです」

囁んだ。

「ジャンでした」

「ジャンでしょ？」

「はい」

クラリスはあれから、場所を変えて適当に武装を整えている間に、今回の発端となることを適当に掻い摘んで話してもらっていたのだ。――ジャンが彼女を、理屈屋の屁理屈な女だと認識していたものを一蹴するほど、彼女は感情に素直で従順だった。

楽しければ笑い、悲しければ泣く。

だから意図せず同情を誘い、今ではすっかりと乗り気になっていた。

が、彼女が提案した作戦は、作戦というにはあまりにも雑多な戦術であつた。

つまりは一進一退戦法<sup>ヒットアンドアウェイ</sup>。追ってくる敵をその度に蹴散らしてから逃げ、相手に誘われるままに逃げ道を誘導され、それを幾度か繰り返した所でおそらくは最終的に囲まれる。そこを突破した際に、一人からアジトを聞き出し……といった具合だ。

ホークいわく、彼女の実力、その純粋な戦闘能力だけで考えれば、ホークを凌駕すると言われている。ただ頭の巡りはそうそう良くないらしく、戦闘時は常に誰かと組んで戦闘するらしいから、実際にホークと対峙してみても彼に勝つことはできないらしい。

これまでで、八二戦八二敗というのが、彼女の戦歴だった。

ともあれ、今回は頭を使う必要など無い。

敵を蹴散らし、アジトを壊滅させ、敵を殲滅し、最終的にクリミアを潰せばそれで満足なのだ……なのだが、どこか引かかる。

その違和感は、あの時ホークに止められてからずっと胸の奥底で渦巻いていた。

「まあいいけど……それで、クリミアの事なんだけどさ」

クラリスはジャンの注目をひいてから続けた。

「ただ殺すつていうのは、やっぱりダメだと思う。ディライラが本能的に止めたのは、それが理由なんじゃないかな？」

「……どういふことです？」

今ではすっかり頭が冷え切っているために、クリミアの話題が出ても頭に血が上ることはなくなった。だからといっておとなしくできるといふわけではないので、他の事を考えて気を紛らわせていた。そんな折に、クラリスがそんな事を言ってくるのだから――ジャンは純粹に、疑問を呈した。

彼女は、自分自身でも曖昧なその思いを言葉に変換する事に苦戦

しているのか、あー、だとか、うーと唸りながら、指を折りつつ口を開く。

「仇を自分の力で叩きのめすことは、もう実質成功してるわけよね」  
「うん」

反射的な反応故に敬語は失せたが、彼女は気にしない。

「なら、今度はその精神を屈服させるのよ……あのー、あれね。心の底から、本当に申し訳ないと思わせるってこと」

「そんな良心を持っていたら、そもそもこんな事になってないんじゃないか？」

——そもそも、外見的にそう歳が離れているようには思えなかった。

だから、それを機にごく自然的に口ぶりを、ホークと言葉を交わす際と同様にする。

彼女はやはり構わないといった様子で、首を振った。

「ならアレよ」

「拷問か？」

「うん、なんかそれ的なやつ。心の底から、ジョネスを敵に回したことを後悔させること。やり方はどうでもいいの。相手に負の感情を——負の感情って言ってもアレよ、糞野郎が！ とか、ぶっ殺してやんぜ！ 的なんじゃないくて、怖い、悲しい、みたいなやつね」

「……ウラドを呼んできたほうが良いんじゃないか」

「あー、ダメダメ！ 絶対、ダメだから。あたしアイツ嫌いだし」  
「へえ」

——適当な相槌を打って、ジャンは大きく伸びをした。

窓の向こう側の雪原は既に紅い輝きに飲まれ始めている。動くとなれば、この時間帯が最も適切だろう。

自分に用意された私室で、ジャンはこれから戦闘するにあたって明らかなまでに場違いな燕尾服姿に、その腰のベルトの上に、帯剣用のベルトを重ね、バスタードソードを提げる。

ジャンに倣うようにしてクラリスは、今回限りの相棒が投げ捨て

た外套を最利用するように羽織り、その裾が床を擦るのに気づいて、首元を幾度か折り曲げ長さを調整する。

「さて、行くか」

ジャンの毅然とした――そして覚悟し、冷め切った視線を受けながら、クラリスは言葉も無く頷き、その傍らについた。

馬車一台通るのがやつとであろう通りは、閑散としていて不衛生的であり、また壁に走る塗料での芸術的な落書きが、より一層この区画の雰囲気能不気味に仕立て上げていた。

そこを歩いていた折、既に顔が割れているジャン・スティールが、恐らくスムーズ・クリミナルなのであろう連中に囲まれるのは、そう難しいことなどではなかった。

瞬く間に、十人近くの集団が二人を囲む。

洗練されたムダのない動作。背中合わせになる二人に対して、それぞれ二人が対応する。

だがそれも所詮、私設軍隊もどき――国の最高峰たる戦力を訓練に当てられた青年に、そして飲み込みの、学びの良さを認められた青年に苦戦を強いる事はできない。

突きと大上段からの袈裟斬りが同時にやってきた。

それに対する判断は、直感と、彼らの立ち位置から咄嗟に脳裏によぎる。共に身体は、殆ど反射的に駆り、その後は意識的に指先の感覚すらも意識して剣を振るう。

速度の早い突きを避けて、即座に剣をふるって敵の剣を叩き上げる。大きく”バンザイ”でもするように片手を上げた男の刃が、大上段からの真っ直ぐな斬撃に否応なく対峙した。甲高い金属音を聞き鳴らし、無防備たる男の首を、ジャンは刎ねる――そう行動したはずだった。

「ぐああ……ッ！」

男の二の腕に深く刃が喰らいつき、筋肉が断裂。骨を半ばまで切断し、力任せにへし折るほどの鋭い一撃が、突きを放つ男に振り込



まれた。腕がひしゃげ、切断面に新たな関節を作るようにそれを折り曲げた。

一名撃退。

おかしい——考える間に、その大柄とも小柄とも付かぬ己の肢体は翻る。

立ち直る、騎士と言うよりは倭国の『サムライ』然とした男は、既に追撃を放っていた。

が、速さが足りない。狙いが甘い。その行動は訓練されその身に染み付き反射的に振るわれるほどに精錬されてこそその剣術だった。素人が扱えば、それはただ棒切れを振るう猿だ。

故に、その心臓に刃を突き立てて切り抜ける——そうしたはずなのに、ジャンの斬撃は横腹を鋭く切り裂いただけだった。

男が呻き、剣を落として腹を抑える。地面に叩きつけられる金属音と共に彼は膝を崩した。

一名、撃退。

何か、おかしい。

おれは奴らを殺すはずで剣を振っているし、実際にそれが狙った通りの箇所を撃ちぬけば目的通りの破壊力を持って敵を殺害してくれるはずだった。

右腕を咄嗟に見てみるが、今は鈍く輝いてすら無い。

高揚もない。

敵と対峙すること自体、早くもなんらかの作業と化しているようだった。

おれは、何をしているんだ——何と戦っているんだ？ おれは、まだ己すらも統率しきっていない、未熟者だったのか。

考える間に、新手がやってくる。

味方が散ってもまだ次が。それが倒されてもその次が。せめて一度の対峙で一撃でも、決定的でなくとも傷を与えられれば良い。最終的には勝ちさえすれば……そういった行動理念であるのは、仲間の負傷を気にもとめない様子から理解できた。

そしてまた、それがジャンと同様であることも。

また、対峙しようとして――腕を掴まれる。反射的に鋭い肘鉄を食らわそうとして、すぐ後ろにいるのがクラリスだった事を思い出した。

「作戦通りに！」

彼女が叫ぶ。

作戦は確か、一進一退。ヒットアンドアウェイ

「了解！」

叫んで返し、ただ凌ぐ事を目的に襲いかかってきた一閃を打ち払う。

その間にクラリスが、己に対峙する連中に対してむちゃくちゃに突っ込んで、道を作った。ジャンは、そこを逃げて逃げ出すクラリスの背に襲いかかる連中を力任せになぎ払い、後を追う。

彼女が進んだ先は、その区画をさらに進む方向だ。

無論、無茶苦茶であるが故の選択ミスなどではなく、予定通りの行動である。

背後からは油断なく男たちが追ってきている。建物によって造られる路地を通りすぎれば、その度にそこから飛び出てくる伏兵が、戦闘員の総数を徐々に増やしていく。

「ジョネス、大丈夫？」

クラリスは呼吸一つ乱さずに訊いてきた。

一方で、こんな距離など無論として余裕綽々であるジャンは、されど喉からひゅうひゅうと甲高い呼吸音をかき鳴らしながら、激しく息を乱して尋常でないくらいの鼓動を繰り返していた。

――ロメオによる左肺、そして気管支の破壊による後遺症は、この時にまで支障をきたしていた。

肺胞の減少により、血中の酸素濃度が低減し、気管支の未熟な回復によってその直径は小さくなり、必然的に呼吸は苦しくなる。

肉体は元気だ。体力はまだであると自覚できる。だが、やっではない。すぐにでも足を止めて呼吸を整えて、適当な酒場にでもよ

ってぶどう酒を飲みながら落ち着きたい。すぐにシャワーを浴びて、髪を乾かしてからベッドに寝転びたい。タマの肉球に押しつぶされたい。

その欲望を、理性で切り捨てた。

やはり理性は、あらゆる感情を排他してくれた。

「勿論！」

親指を突き立てて、ジャンは前方に力強く跳躍しながら、空中で振り返った。

それがやせ我慢であることなど彼女はすぐに見抜くだろう。だが危ういのは、そういったやせ我慢すら出来ない状況だ。

——無数の敵を前にして、ジャンは地面に着地すると共にバスタードソードを地面に突き刺した。舗装された硬い、石のような大地に、浅く刃がねじ込まれる。同時に右肘の魔方陣を展開。辺りに、体内からの魔力が吹き出されて、度合いが濃密になる。

剣の刀身に紋様が浮かび上がった。そうして眩く輝き、発動する。

アース・ベック  
「大地の怒りっ！」

地響きもなく、その予兆もない。

大地は瞬時に隆起し、鋭く尖る錐状の地面が集団を襲う。が、それだけに終わらず——バスタードソードは意気揚々と、その輝きをさらに増した。

この感覚は……。

柄を強く握りしめ、その可能性に応じるように、その先を夢想した。

「いけるか……大地の激昂っ！」

レベル・ミリタリ

——戦闘級魔術は基本的に、その威力や規模から下位、中位、上位の三段階にわかれている。

彼が今まで扱っていたのは、才能がなくともある程度の者は使用できる下位魔術。

次は魔力の流れ、その扱いを繊細に利用できるようになって初めて発動できる、中位魔術。

最後は洗練された白兵戦と同様に、血のにじむ努力を経て魔力の利用、そして魔術についての知識、経験などの多くのものを得てようやく扱える、上位魔術。

彼のソレは中位であり――その直後に、大地に鈍い震動と共に、大地の隆起に襲われていた連中にはさらに、前後左右の地面からごく低空飛行で飛び出す、角張った長方形の石柱が、瞬く間に肉薄した。

衝撃。

響く悲鳴。絶叫。悪態。

多くの者が集まっているために潰される者は居らず、どうにも死者は出ていないようであるし、命に関わるほどの重傷者も居ない様子だったが、それでも戦闘に参加できるものは、ごく僅かな数へと減っていた。

ジャンは剣を抜き、鞘に収める。

（強く、なってる……よな？）

にわかな不安。

剣同士での戦闘では思うとおりに動かないのに、魔術だと予想以上の力を発揮する。求めているものとは大きく異なるちぐはぐな結果に、されど酸素不足故に深く考えられなかった。

「上出来！ さ、行くよ！」

空は藍の色に没し、薄暗いその通りは既に闇に飲まれ始めている。急がねば、誘われる以前に道に迷ってしまいそうだった。

ジャンは手を引かれるままに、ぜえぜえと呼吸を繰り返し、今にも死んでしまいそうな拍動の中、クリミアを思い出すことによって強く意思を持ち直した。

木箱は、テーブルの上に置かれていた。ちょうどツボでも収まっていそうな、上等な桐の箱だった。

窓の外は暗くなり始めている。だがそれでも構わず、客室でレヒ

ト・アレスとロメオ・ヤギユウは対峙していた。控える近衛兵はラウド・ヴァンピールのみとなるのは、彼の背後で待機するユーリアに対する評価といったものだろう。

彼はその趣味を除けば、この国で最上位に近い実力を持っている。その一番上に上れない理由は、純粹に白兵戦が驚くほど弱いから、というものだった。

「わたしは残念ですよ。こんな事になってしまって」

「そりゃあこっちの台詞だ、小僧。貴様がまだガキだった頃、散々言っただろう。わしの国に手を出したら承知しないぞ、と」  
年齢は約二〇歳ほど離れている彼らは、それ以上に顔見知りといったところのようだった。口ぶりから見れば、歳の差以前の上下関係があったらしい。

「それを、貴様……こんな――」

テーブルの上の木箱を手にして、フタを開ける。すると、鼻腔に突き刺さる腐臭が空間内に溢れ始める。中には血にまみれ、青白く変色する青年の頭が無造作に突っ込まれていた。原型はなく、無数の傷から拷問の様子が見て取れる。

が、甘い。

レヒトは無造作にその髪を掴むと、強引に木箱から引きずりだして、目の前に掲げた。

「……ッ！」

背後でユーリアの押し殺した悲鳴。ロメオの奥で、機嫌がよさそうな口笛が聞こえる。

「わしを愚弄するつもりか？　なんだこれは」

まぶたを指で開けようとして、そこが”開かない仕様”になっている事を確認する。また首の切断面を見て、そこが紅く塗りたくられているだけなのを見る。顔に近づければ、吐き気をもよおす腐臭の中でゴムの臭いがした。

「雑すぎる。もっとまともな造形師でも雇えば、わしも騙せたのだから」

その偽物を燃やしてやろうと思ったが、部屋の中でそうするのはいささか気が引ける。喚起するにも、夜であるために空気が冷たすぎるだろう。それには、あまりにも堪え切れない。

レヒトはそれを桐箱に納めてからテーブルに戻した。

「やはり、衰えていませんね。わたしは正直、騙しきれると思っていましたが――」

「そんな話はいい。貴様の妥協点はどこだ？」

ロメオが褒めた還暦に近い男の瞳が、狡猾なまでに鋭い眼力を持つて睨んだ。

全く、久しい再開だというのに――漏らして、嘆息気味に肩をすくめた。

単刀直入に。ロメオはそう頭に置いて、告げる。

「『異世界』探索の結果の提供です。技術でも、情報でもいい。そちらが隠蔽している情報の開示を求めます」

「いいだろう」

レヒトが頷く。

微笑はない。冗談だ、という様子は一切ない。

まるで、買い物に行く際について何かを頼まれた時のような、快いまでの気軽さ。

それに、罠か、とロメオが警戒する。

「どうした。目的の値段より高くふっかけたのに、それを了承されて驚いているのか？」

「い、いや……」

否定しようとして、ぎらりと嫌らしく輝く眼光に、全てを見透かされているような気分になった。

「ああ、その通りです。なぜ、これまでひた隠しにしていたそれを、そこまで簡単に？」

「……なにも隠してきたつもりなど、無いのだがな」

「だが、わたしが探索の要請を出した時、断ったでしょう。他国も」  
「あれは既に行なっているから、不必要だと言っただけだ。貴様ら

は、それ以上は関わって来なかった。つまり、聞いて来なかっただろう？」

——国の一つの財であるそれらをわざわざ自ら公言するわけにも  
いらない。

レヒトは困ったように片手で頭を抑えて、わざとらしく大きく息  
を吐いた。

「もっとも、寄越せと言われて素直に手渡せるものでも無いが」  
ならば人質の価値が、それに値するとも言うのか。

確かに他国の人間がいる時点でそれを渋ってもいられないのだろ  
うが。

それで、とレヒトはつづけた。

「これに際して、一つ条約を設けようと思うのだが」

「ほう、条約……ですか？」

「うむ。まずこの情報開示は原則的にアレスハイム王国、ヤギユウ  
帝国間でのみ行われ、そこで得た情報、そこを元にする技術の他国  
への提供や開示の一切を禁ずる」

「ええ、構いません」

「なら明日にでも書類を送らせよう。わしはもう帰りたいんだが……  
あの連中はすぐに呼び出せるか？」

重い腰を上げて、やや前屈み気味だったから腰にキたのだろう。  
拳で腰部を申し訳程度に叩いて、大きく背中を反らせる。

そんなレヒトを見て、ロメオは思わず、といったように背後のラ  
ウドと顔を見合わせた。

「どうした。まさか、本当に拷問まがいな事をしているわけでは――  
」

「ああ、いや、そんな事は、決して」  
「だったら何だというのだ？」

顎鬚を撫で付けながら、もう片方の手は苛立たしくポケットをま  
さぐる。だが長居する予定ではない故に、ストックしていたタバコ  
はもう底をついているようだった。

忌々しげに舌打ちをすれば、ロメオは言いにくそうにレヒトを見上げ、

「ジャン・ステイルの事なのですが……」

——またその名前か。

うんざりしたように嘆息して、レヒトはそのふかふかの上等な革製のソファアに座りなおした。浅く尻を置いて、その背もたれにふんぞり返る。

「現在、この城下町のスラムの地区を統率する大規模な犯罪組織『スミス・クリミナル』に命を狙われているようで……」

足を組もうとして、されど太ももにがつりついた筋肉がそれを邪魔する。足首を膝にひっかけるようにして、体勢を維持した。

「経緯は？」

「そのスミス・クリミナルのリーダーが、クリミアという騎士団の一人で——八年前の、あの悲劇の実行犯ということが、知られてしまっ」

「その事実を隠蔽しよう？」

「いえ、それが」

ロメオ自身、それを実際に口にするのはいくらか屈辱的なことだった。

まずクリミアの素性を知っておきながら放置している己の不甲斐なさ。それは事実上、加担しているとしか言い用がない。国のトップが、この有様なのだ。

加えて次は——まだ騎士ですらなく、歳も一回り以上したである青年に、四肢をばきばきにへし折られて失神してしまった男が、この国で上位に食い込む実力の持ち主であるということ。

恥だ。

今ならば、迷うこと無くあの男を処刑するだろう。むしろ、あの時の自分はどうかしていたのだ。いくら、まだ軍事力がさほどなく不安が残っていたとはいえ……。

ええい、ままよ。どちらにせよ、ここままで大まかなところは察



せられているのだ。むしろひた隠すことこそが恥だ。先ほどの言葉を、そのまま返されてしまう。

「どうにもその連中は、そんな男に随分な忠誠心を持っているらしく、ですね」

息を呑む。

部屋の中は温かい程度の室温だったが、気がつけば額にびっしりと汗をかいていることを自覚した。

喉を鳴らして、乾いた口の中で無理やりツバを飲み込んだ。

「皮肉なことに、リーダーの仇討ちと相成っているようです」

## 復讐？

呼吸が大気に触れた瞬間に凍りつきそうなほど、辺りは冷え切っていた。

燕尾服一枚で意気揚々と出てきたものだが、だんだんとクラリスの外套が恨めしくなりつつ——なかった。

もはや、ジャンにはその余裕すらない。

過呼吸を疑うほど呼吸は矢継早に繰り返されて、心臓は何かの冗談のようにドクドクと全身に血液を異常な速さで送り続けている。

唇は乾いてしまったのか感覚が鈍く、手足に強い痺れがある。頭もぼーっとして、既にまともな思考は行えない。視界は既に暗闇を映しているから、それが正常なのか否かの判断は出来なかった。だが、眼球を圧迫されるような感覚からして、それさえも鈍っていることだけはなんとなく察することが出来る。

「くそ……っ！」

既に背後から、また新手の足音が迫っている。腰の剣に手をやろうと意識するが、その行動はいつになっても実行されない。頭の中ではそれは既に幾度ともなく完遂されているものだったが、現実には反映されていない。

やがて、頭の中と現実との境界がわからなくなってきた。

「ちよっとッ!？」

自身の呼吸音の最中に、怒号にも似たクラリスの呼び声が届く。それと同時に、肩を力強く掴まれた。

彼女の足は止まっている——そして前方から、多くの足音が迫っている事に気がついた。

「ここで連中を潰して、一人からアジトを訊く。作戦の最終段階よ」クラリスは心配げにジャンを見る。だが、既に人数と距離からして、悠長に彼を気遣っている暇などなかった。

紅い鱗に覆われる右腕が、やがて鋭い鉤爪を持つ竜の腕へと変異

した。種族開放なぞしてやる必要もないと吐き捨てていた彼女は早速そうしていたのだが、先程はそうではなかった。

つまるところ、それはジャンに対するフォローをするつもりだったのだろう。

それを見て、ジャンは思わず、頬を緩ませて――。

「後ろを頼む」

ふり返る余裕など無い。

ならば、このまま正面突破をしたほうが早い。

フォローなんて、ふざけやがって――これは、おれの闘いだというのに、人にまかせて何になる？

自分の体調や具合など二の次。負傷なぞしていないのに、身体が動かなくなるなんてことは、ない。

自分に言い聞かせて腕を動かす。肘から先の主導権は依然として己のものであるが、その強い痺れからまるで他者の手であるかのような錯覚を覚える。それでもしっかりと剣を抜けば、それは先ほどとはおよそ倍以上の重さに感じられた。

心臓が頭に移動したのかと思うほど、拍動に合わせてその鼓動の音が良く聞こえるほど響いている。髄液が一時的に増幅しているのか、酷い圧迫感だった。

「なんだてめえ、そりゃ舐めてんのか？」

眼前にまで迫ってきた男が、今にも倒れてしまいそうなジャンを見て挑発する。

「ああ、面倒くせえ――フォービドゥンフルーツ禁断の果実」

既に体力など無い。

だが、代わりとばかりに魔力は大量にある。まず大気中のそれら。そして、背中の魔方陣が生み出した加えてくれる体内のそれら。

ジャンはようやく反応してくれた右腕の魔方陣に促されるようにして額に爪を立てれば、指先に硬い感触を覚える。そいつを引きずり出し、一瞥すること無くその真紅の果実を齧った。

「アース・ビック大地の激昂」

——大地はなんの干渉もないまま、ジャンの一步先から隆起させた。それは恐ろしいまでの速度で石柱を構成させ、間髪おかずに肉薄した男たちを正面から穿つ。彼らにしてみれば、壁が突然現れて迫ってきたような感覚だったのだろう。

轟音と共に、衝撃が盛大な音と伴って大気に伝播する。肌にピリピリとした凄まじいその光景を、されどジャンは静観する余裕はなかった。

先ほどと同様に、四方から集団に対する攻撃が襲いかかり、数秒と持たずに十人を超える連中を再起不能に仕立て上げた。

石柱は攻撃を終了させると共にボロボロとその身を崩して山となる。スムース・クリミナルの彼らは、その下敷きともなっていた。改めて考えれば、やはり禁断の果実なんて魔術はとんでもないものだ。

本来ならば大地に魔術的干渉をしなければ発動しなかった今の魔術を、ただ果実を口にするだけで再現できるのだから。

抜いた剣を杖にして呼吸を整える。だが、悪化こそしないが、落ち着く様子は未だにない。むしろ立ち止まればその分、その苦しさを意識せざるを得ずに余計しんどい有様になっていた。

「はあっ、はあっ、はあっ……そっちは大丈——」

なんとかふり返る余裕を作って後ろを向き直る。

すると、そこには無数の男たちが大地と抱擁する姿と、

「ほらほら、さっさと白状しないとこの爪が綺麗に大動脈だけ掻っ切るわよ——」

胸ぐらを掴み上げ、一人の男の首筋にその鋭い指先を突きつけるクラリスの姿があった。

そのガラス管は器用なまでに折曲って文字となっている。化学反応によって輝くそれは、『酒場』という名称をそこに掲げていた。ネオンと呼ばれるそれは嫌らしくきらきらと光っていて、スラムの

中で最も大きいらしい酒場はそんな風に、過剰なくらい自己主張をしていた。

そこは通路の突き当りにあって、そのやや手前には一回り狭い通路が交差する地点がある。

大きな両開きの扉の前には、先ほどの追ってなど比にならぬほどの戦闘員。

それらの先頭に立つのは、ジャンに宣戦布告をした巨漢だった。肌を黒く染め上げ、ネオンサインに禿頭を照らす男は、彼らの姿が見えるなり、にやりと笑った。

彼らにとっても、ジャン達がここに来るのは予想内であったのだろう。

「あれが総力のつもりかしら」

ざっとみて百人は簡単に超えるだろうそれを見て、どこか呆れたようにクラリスが漏らした。

もっとも、聳肩目なしに見ても事実として一騎当千の実力を彼女は持っているのだから、確かにそう考えれば敵の数は足りないと感じても仕方がない。

が、これまでで既に、この同数またはそれ以上を倒してきているのだ。このアレスハイムのように城壁のない街はそれ故に広大であり、特に集中している城下町でもその人口は数万に至るだろう。その一部のスラムともなれば、数千といってもおかしくはない。

そう考えていれば、交差地点に迫る多くの気配を感じられた。

間もなく、そこには酒場の手前で待機する連中の数倍……あるいは十倍に近い戦闘員が、列をなして集合していた。

戦闘には、ホークが持つような長方形の長い銃火器——小銃と呼ばれる飛び道具を構えている。5・56mmの弾丸が数百メートル先の敵を殺傷してしまうような、まるで常識はずれの武器である。

軍事国家たるこの国のスラムを統べる連中だ。ディアナ大陸のどこからか、そういったものを密輸してもおかしくはない。そもそも麻薬なんてものはディアナから伝わった違法薬物だ。その武装は必

然といえるだろう。

さすがのクラリスも、短く舌打ちをした。

「ま、こうなるってわかってたけどな」

「予想した中で一番、最悪な事態だけどね」

クリミアはあの酒場の地下で療養しているらしい。現時点で意識は未だ回復していないと聞いたから、いささか不安だった——彼が意識を取り戻すまで、その怒りに堪えられる自信はもうなかった。

「そういえば、喘息はもう大丈夫なの？」

「まあ、一応。落ち着いたってところかな」

剣を抜いて、痺れが切れた腕で構える。

傍らのクラリスは、頼もしく両腕を真紅の鱗に覆い——。

「かまってやる必要はないわ。たとえ数千、数万の軍隊だろうとあたしはこんな所で死ぬ訳にはいかないし——こんな連中に時間を使ってやるほどお人好しでもない」

ジャンはさきほどと同じく、剣を地面に突き刺した。

これからの戦闘を考えるに、やはり禁断の果実よりこちらのほうが魔力消費を抑えられるからだ。

——地属性の魔術は、割合にマイナーであり、この魔術を主として扱う魔術師はあまり見られない。それは大地を動かすほどの術である故に基本的に使用魔力が他に比べて大きく、またそれに見合った働きがないことから、そうになっていた。

だがジャンは違う。

まずその派手な錐状の突出は、とにかく威力を度外視して、外見が気に入った。それが高威力となるのは術者自身の成長によるものだが——初っ端からの派手さは、あらゆる魔術を武器を介して行なってみたが、これが一番だった。

故に気に入った。

彼がこれを使い続ける理由は一概にそれだけであっただが、禁断の果実の魔力消費は、肉体の魔力を根こそぎ持っていく。大地の激昂はそれ以上のものを、大気中から瞬時に消費して行う術であっ

たが——中位魔術としては、あらゆる属性から見て最高位の物理的威力を誇る攻撃魔術だった。

「んじゃ、あたしは雇われ傭兵らしく一番大変な方にいくから。そっち頼んだわよ」

くるりと踵を返した彼女は、ぽん、と軽くジャンの肩を叩く。

そうしてから千に至ろうとする戦闘員へと無防備に走りだして——直後に、凄まじい熱風が背中を煽ると共に、背後が眩く輝くのを知覚した。

振り向かずとも、彼女が火焰を吐き出したのが良く分かった。

同時に響き渡る絶叫と悪態。

それをきっかけにするように、酒場の前で待機していた百人に近い連中が、隊列を保ったまま動き出した。

「まったく、バカなんだか執念深いだか……」

純情というには妙に物騒かも知れないが、それが適当かもしれない。

クラリスはその身軽さを武器に本隊よりはるかに多く、挟み撃ちを目的に構成された遊撃隊の先頭で小銃を構える列に肉薄。そうしてタタタ、と乾いた発砲音をかき鳴らしてとんでもない衝撃を与え、弾丸を、その分厚く頑強な装甲たりえる鱗が、全てを弾き跳ね返す。

そうして種族開放——右腕は瞬間的にその拳を本来の、竜としての大きさに変異させる。故に人数人を鷲掴みできるその巨大な手が鉤爪を伴って振るわれ、一度で十数人の鎧を引き裂き、その肉体をズタボロに切り裂いた。

回りこんでくる連中には容赦なく灼熱を吐きつけてやれば、その鎧は赤を通り越して白く染まり、ドロドロとその形を崩して溶け始める。また皮膚を炭にされた男たちは悲鳴を上げながらその場に崩れ、間もなく息絶える。

——これほど人を殺したのは久しぶりだったが、何の感慨もわか

ない。

彼女はそう思いながら、心から自然に溢れて漏れる感情を口にした。

「ざまあみろ」

この街で知り合った幾人かの友人はむりやり麻薬を摂取させられるなり拉致されて、数日後に人気のない雪原で倒れているところを発見された。その数時間前に不特定多数の連中との性交の形跡があり、また全身はアザだらけで骨折、打撲などの怪我也多数見られ、胃や膈内には精液が確認できた。

つまりは拉致って強姦だ。搜索の結果は、犯人を突き止めるに行かなかったが――そう公言を控えた憲兵ですら、数日後に駐屯所に首だけの状態で送りつけられていた。

これだけで、犯人は判然としたようなものだ。

だが、国の対処は未だ無い。おそらく、クリミアがリーダーであると発覚することを恐れているのだろう。もしそれが全国民に知れ渡れば、皇帝がそれを黙認していることが知られ、すぐさま暴動が起きるだろう。国が破綻するのは目に見えている。

クラリスは己の実力に自信を持っている。その気になれば、スミス・クリミナルをたった一人で壊滅することができる、とも。

だがそうしなかったのは、一国民である彼女が国すら黙認するその組織を崩壊させたその後を恐れたからだ。壊滅させることはできたととしても、一人残らず殺しきるのはさすがに難しい。それに規模を把握しているわけでもないから、必ず”漏れ”がある。つまり、生き残りはあるということだ。

恐ろしいのは、その連中がまた新たに組織を創設すること。

自分が狙われるのはまだいい。だが、連中は確実にこの国の民を狙うはずだ。不特定多数の善良な民を惨殺し、そうしておびき寄せ、クラリスを血祭りに上げる。最終的にはその死体を晒し、気がつけばスミス・クリミナルは復活しているという具合だ。

だから、これについては国が対処しなければならなかったのだが



——ジャン・スティールは個人的にそのリーダーを憎んでいる。  
そこからクラリスが望んだのは、その恐ろしいまでの執念深さを、  
連中が胸に刻む事だ。

暴れれば、悪さをすれば狡猾な青年にどこまでも追われて殺される。その恐怖さえ抱かせられれば、連中は静になる筈だ。

つまり、この状況での彼の登場は僥倖だったと言える。

これでクリミアの死亡、そして組織の壊滅に、そこから現れる麻薬や銃器の流通経路が明らかになれば、国も動かざるをえない。最終的には、城の目下であるのにもかかわらず最も治安の悪い街となっていたここが、平和になるはずだ。

——鉄を溶かす業火。そして爪撃<sup>そうげき</sup>。

一度で十数人を叩き潰すがゆえに、気がつけば——。

「どうしたの。怖いのか？」

既に本隊よりも数がなくなった男たちは、周囲に広がる、痛み  
に喘ぐ仲間たちを見下ろしながら、傷一つ内クラリスを前にする。  
が、その全身は小刻みに震えていた。

まるで子羊だ。

これで、少しは被害者の気持ちもわかってくれただろう。

「もう、しょうが無いなあ」

こういった気持ちさえあれば、まだ更生の余地がある。

だから彼女は、己が作り出した死体の山を乗り越えて、彼らの前  
へと突き進んだ。彼らは飛び道具など無く、剣のみの装備だ。さら  
に鎧すらもない。

だから、一閃。

容赦無く、目の前の数人の四肢が切り裂かれて宙を飛ぶ。さらに  
突き出せば、爪が肉体を貫通した。

——だからといって、生きて返すつもりなどさらさらない。彼ら  
が涙を流してその額を地面にこすりつけたとしても、彼らが手にか  
けた被害者は戻ってこないのだから。

「来たか、糞ガキ！」

「ああ、随分豪勢な出迎えだな」

「黙れ、発現<sup>めざ</sup>めろ——」

男は早速、腰だめに置いた拳に意識を集中させた。興奮の最中だと言うのに、それを抑えつけてのその選択は、おそらく正しいのだが——ジャンの場合、その感情の昂ぶりは相手を効率よく殲滅するための起爆剤となっていた。

つまるところ、最初に言葉をかけたという選択が、まずミスだったのだ。

「大地<sup>アース・ビック</sup>の激昂」

幾度目かになる発動は、その為に随分とスムーズなものになっていた。

轟音と共に隆起するのは敵の眼下。故に、彼の拳が光を帯び始めたその直後に——石柱が男を殴り飛ばし、その表面に張り付けて後衛に控えた仲間を薙ぎ払っていった。

耳につんざく絶叫が、背後の騒音にまけじと響く。

四方から襲いかかる石柱は、その断末魔すらもかき消して、その数を少なくさせる。

ジャンは剣を引きぬいて走り——いとも容易く、アレほど威圧を与えていたというのにもかかわらず戦闘不能になった百人に届かんという連中の脇を超えて、正面の玄関口を蹴り開けた。

「おらあッ！」

けたたましい音と共にひしゃげた扉の向こう側から影が動く。叫び声と共に閃く斬撃は、鋭くジャンの頬を撫でるように、切り裂いた。

傷は浅く、薄皮一枚程度の負傷だ。血がぷっくりと膨らむようにして溢れ出すが、大した傷でも痛みでもない。

だが……。

「くっ！」

剣を振り下ろせば、敵の刃に”引っかかる”。

薄暗い空間で目を凝らそうとしても影としてしか映らぬその男と、その武器は、おそらくは”櫛状”に細かく間を開けているのだろう。つまりは『ソードブレイカー』仕様だ。

なるほど、選択は正しい。ジャンは心中で、褒めるように頷いた。ここにたどり着く敵は、少なくとも圧倒的な物量を前にしても突破してくるようなやつだ。つまり、そういった大雑把な筋肉バカであるか、とんでもない格上であるか……ともあれ、数が相手でも通用しないということになる。

となれば、次に待機させるとすれば純粋な技巧派。己の力のみで生き抜いてきたような要員だ。

さらに相手が近接戦闘を得意とするのが判然としている今回の場合、それを相手にできるような者を残しておけば良い。

——剣が意思に反して、手の中で強く捻られる。握力を弱めても柄の回転によって摩擦が皮膚を焼くだけであり、体勢を崩し掛け、そうして気がつけばバスタードソードを失っていた。

先ほどの、口だけの巨漢とはいかぬものの、それでも男は大柄だった。ジャンの一回りほどの巨軀は、それでも彼よりも素早く滑らかに身を駆っていた。

体勢を立て直すよりも早く、猿臂が鋭く額を叩く。

姿勢は崩れ、思わず跪く——その勢いを利用して前転。ジャンは男の脇をすり抜けて立ち上がり、首元を狙って振るわれる刃を、後退して避けた。

脇を締めて、拳を構える。後ろ足で床を蹴るようにステップを踏む、拳闘士の構え。それは以前、イヤというほどエミリオに叩きこまれたものだった。

武器を失った場合、魔術を持たぬものは逃げるか死ぬか、あるいは死を覚悟して素手で立ち向かわなければならない。エミリオの合は既に最初から素手であったからそんな恐怖や不安を抱く必要などなかったが、個人である程度の実力を持つ者は、個人での仕事をこなすことになる。だからこそ、そういった技術を身につけなければ

ばならない。

まさか、こんな所で使う羽目になるとは思わなかったが――。背中の魔方陣が、体内の魔力を一時的に増幅させる。魔力は全身に伝播し、全ての神経系を鋭敏に、そして筋肉を膨張させた。

「ふっ」

短く息を吐いて、肉薄。

振り薙がれる刃は、その過程を止めたように動きを遅くしていた。実際には彼の動体視力が異常なまでに跳ね上がっているだけなのだが、それ故に、その間をかいぐる。

一撃で仕留めるために、僅かに腰を落として右腕を振り上げ――顎下に鋭い一発を叩き込んだ。

男は為す術もなく天井を仰いで大きくのけぞり、身体を浮かび上がらせたと思えば、そのまま近くの円卓を巻き込んで倒れこみ、吹き飛ばされた。

そんな騒音の中でジャンは床に転がるバスタードソードを拾い上げ……。

「よう、ごきげんか？」

酒場のカウンターの手前で、両手両足にギプスをつけたクリミアの姿がある。

その手前には、最後の護衛らしき三人が居たが、先ほどの闘いぶりを、あの圧倒を目の当たりにして意気消沈、戦意を失ってしまっているらしかった。

それもそのはずだ。仮に自分が逆の立場だとしたら、同じ気持ちになる。

たった一人の、しかもこれほどの組織を持つ男の為に、まずあの人数をたった二人で苦戦すること無く飽くまで余裕を持って切り抜け、そして一度は危ういと思わせた敵を、一撃で打ちのめした敵が目の前にいるのだ。

とても頭がまともなやつだとは思えない。あるいは、それほどの執念を持った男を敵にして勝てるか――いや、生き残れるか、正直

自信がない。

そう思われていれば光栄だ。最も、こんな連中に尊敬されてもちつとも嬉しくはないのだが。

ともあれ、クリミアが起きているようでよかった。

ついでに、部下の恐れを共有してくれていればさらに良いのだが……多くは望まない。そう貪欲でも無い、慎み深い男なのだ。

「くっ」

歩けば、近づけばクリミアの表情が歪む。そうして漏れた苦々しいような声は、怒りゆえだろうか。

「死にたくなきゃ失せろ」

無表情で言っただけで、肩を大きく弾ませた三人組は驚いたように顔を見合わせてから、一様にそそくさと出口を目指して逃げている。足音が失せた頃、また外から近い位置で悲鳴が聞こえた。先ほどの三人を、クラリスが始末してしまったのだろう。

「くっ……」

「どうした？ あんだけ粹がっついておいて――」

「来るな……」

目の前までやってきた途端に、口から吹き出るようにクリミアが言った。

「来るな……た、助けて、くれ。い、命だけは……」

今にも泣き出してしまいそうなほど、その表情は恐怖に飲まれていた。いい年をした男が哀れなくらい目を細めて眉をしかめて、口角を下げて小刻みに震えていた。その中で、鼻につんと突き刺さるようなアンモニア臭が臭ってくる。どうやら失禁しているようだった。

――あれほどの組織を統率し、あらゆる犯罪行為に手を染め、だというのに軍隊でもエリートとされる騎士団に属した男。どれほどボロボロに殴られても、決して己の死を認めず生き残ることを信じてやまなかった男。そして、ジャン・ステイルの人生をどうしようもなく滅茶苦茶に蹂躪しつくした男。

それが目の前に居る。

その仇は、己を見て恐怖し、プライドなどかなぐり捨てて失禁してまで生にすがり付いている。

見ていて楽しいものではない。醜く、見るに堪えぬ光景だった。

——こんな事のために、今日は苦悩し決死の覚悟でここまでやってきた。

確かに仇討ちは楽しくなど無い。それは当たり前だし、今だってこの姿を見て高笑いできるほど怒りが湧いてきている。

だというのに……。

（おれは、何をやってんだ？）

その一方で、虚しさすら感じていた。

自分の行いが正しいことだとは決して思わない。相手がやってきたことを、そのまま返してやるのが最上であり理想だと思っていた。だが、なんだろうか。この理解不能な寒々しさは。

「部下から、聞いている……組織はもう終わりだ、悪さもできねえ……もう、足も洗う。騎士も、辞める。だから、い、いのち、だけは——」

その言葉で、ジャンは悟った。

なるほど、どうやら同じやり方で相手を屈服させただけではなく——くそ忌々しい事に、この姿はクリミアそのものになってしまったらしい。

つまり、少年期に見たあの悪魔とも見えた騎士の姿に。

——思えば、長いことこの憎しみを滾らせていたように思う。

国情が分かる青年期は、というかついこの間までは、この連中が帝国の人間だと知って、仇討ちを諦めていた。個人が立ち向かえる相手などではないと。ならばせめて、自分が騎士となって偉くなり強くなり、弱き者に手をさしのべてやろうとさえ思っていた。

だが、今はどうだろうか。

偶然であるがその帝国に来て、皇帝に交渉までして己の命を確保し——そして個人の動きで、仇討ちを成し遂げている。

数ヶ月前ではとても考えられない事だ。

また、この数カ月で随分と強くなった。

色々な経験もした。色々な人とも会った。充実した日々を送れたと自覚できる。

また、そんな人達は自分の帰りを待っていてくれるだろう。心配だっただけでくれる。そんな優しい人達だ。

「……お前ってやつは」

力が抜けたように、嘆息した。

この男は、ジャンを何者かを理解していない。

つまりその執念深さを恐れているのではなく、純粋なまでに高い戦闘能力に怯えていたのだ。

「ふざけんな……いい加減、思い出せって言ってんだろがっ！ 記憶喪失だって悪い冗談はやめてくれよ？ なあ！？」

剣を投げ捨て、その胸ぐらを掴み上げる。力強く前後に揺すれば、クリミアは為す術もなく頭を揺らすだけだった。

「な、なにを、思いだせて……」

「八年前、カミンの村だ。てめえがぶっ潰したアレスハイムの村だ！」

「し、しらね——」

言いかける言葉を遮るように、ジャンは力の限り右腕のギプスを殴りつけた。

空間を引き裂くような大音声での絶叫。ジャンは構わず、さらに既に腫れ上がっているクリミアの顔を殴りつけた。

「こんな所で嘘なんぞ、賢くねえな」

「あ、分かった！ 言う！ 言うから、もう、やめてくれ……！」

クリミアが吐露したのは、ただの不幸自慢だった。

国に捨て駒部隊の隊長にされたこと。それを取り消すように上申しても取り合ってもらえなかったこと。自暴自棄になって治安の良いいアレスハイムに行って、極めて安全で危なげのない村を交渉材料

にしようとしたこと。だが、そうする前に部下が手を出して、そのまま勢いで村を壊滅したこと。

飽くまで”自分は”悪くなく、”被害者”であることを主張しているようだった。

愚かだ。

屑だ。

どう罵倒しても、煮えくり返ったハラワタはおさまりそうになかった。

それに、特攻部隊長に任命された理由を、彼自身自覚していない。その実力に物を言わせて好き放題にしてきた過去を、彼はまるで当たり前のように受け入れているのだ。

「ま、まさか、生き残りが、いるだなんて――」  
まるで念入りに殺して回ったような言い草だ。

目撃者を一人足りとも生かさずに、隠蔽しようとしたような背景が見えてくる。

「な、なんで、お前みたいなの……ヤツに」

ここまでされなければならぬんだ。クリミアはそう続く言葉を  
つぐんで飲み込んだ。

「悔しいか？」

「あ、ああ……」

「まだ生きたいと思うか」

これまでさんざん好き放題に生きてきたのに。

「もちろんだ。俺は、まだ……」

「もう二度と、悪事に手を染めないと誓うか？」

「もうしねえ……さすがに、懲りた。もういい、貯金で、どっか越して、ひっそりと暮らすさ」

「てめえ様が殺した連中に足を向けて眠るわけだな。のうのうと生き残って、てめえのわがままのために人を殺した過去を、いつかは武勇伝として語る訳だ」

犯罪者が死刑を免れて生き残っているようなものだ。



まあ、良い。

ジャンはにっこりと微笑んで、屈む。捨てた剣を拾えばクリミアは怯えた顔をしたが、それを鞘に収めた途端、その表情はにわかに驚いたようなもの変わった。

「お前は随分と痛い目にあっただ。これからは、もう精一杯報われなくちゃって考えてんだろ？ お前をこんな目に合わせたおれが言うのも、なんだが」

「いいさ、気にしねえよ。自業自得みたいなもんだし。だが、夜道は気を付けろよ？ ははっ」

「あははっ、おっかねえな！ おっかねえから——」  
なぜここで笑えるんだ。なぜここでまだ生き残れることを確信できる？

頭がオカシイのか。しかもなぜ、くそつたれな冗談なんぞかませる余裕がある。

貴様が迎える夜道など、もう存在しないのに。

「——今の内に殺しておくか」

「え——っ?!」

笑顔をかき消す。同時に全ての感情をかき消したジャンは、男がその意味を理解するよりも早く、両手で、筋肉のついた太い首を力いっぱい締め上げた。

鶏の首を絞めた経験はあるが、やはりそれとは大きく異なった感触だった。

首の筋がこわばり、気道を確保しようとする。浮き出た血管が、その脈動を教えていた。鼓動は次第に早くなり、暗がりの中で、激しく首を動かしていたクリミアの動きが鈍くなってくる。

声はない。

その顔が苦しみから絶望へと移り変わっていくのが良く分かった。そうして口が、ぱくぱくと何かを紡ぐ。

その瞬間——。

「があっ?!」

四肢が、何かに掴まれた。

そう認識すると、直後、それらは意思に反して力強く外側に開かれる。ジャンは仁王立ちしたまま、大の字になっていた。

筋肉に酷く食い込む鎖がそこにあった。骨が軋み、右腕から、ぼきんと嫌な音がした。

全身に激痛が伝播する。

思わず叫びそうになるのを必死に抑えて、息を吞む。視界がぼやけるのは、瞳に涙が滲んでいるせいだった。

――目の前のクリミアは激しく咳き込んだ後、一つ口笛を吹いてみせる。

すると、瞬く間に空間は光に満たされて――酒場に眩いまでの照明が灯ったと思えば、すぐさま、カウンターの奥の扉が勢い良く開いて盛大な音を掻き鳴らした。

無数の靴の音。カウンターを飛び越える着地音。多くの影。鋭い金属音。

そうした連中はおおよそ二十人近くいて、余す事無く、皆が皆一様に剣を抜き、ジャンを取り囲んでいた。

「がははッ！ 俺の演技はなかなか”サマ”になってただろう？ ジャン・ステイル！」

演技と言ったが、怪我はほんものなのだろう。依然として椅子に座ったままだったが、その態度は一変していた。元通りのくそ野郎に戻っていたのだ。

「貴様の素性は既に洗っている。確かに言ったとおり、『あの悲劇』の生き残りなんだろうがな……」

まるで他人ごとのように、彼は部下がつけたタバコを口に咥えた。「てめえの事は勿論、んな昔のことなんぞ、ろくに覚えてねえよ！

ま、一度抱いた女の感触ならいつでも思い出せるけどな！ 俺は専門家だからよ！」  
ソムリエ

ガハハ、とまた下品な笑いに、物騒に剣を突き立てる男たちは同様に低い笑いを漏らしていた。

「ま、俺も忙しいから貴様にかまってやれる時間もねえ。このクソ野郎が結構な部下を殺してくれたからな。どっちにしろ、こんな騒ぎがあっちゃ、さすがに俺も国を離れなくちゃならねえし——」

胸いっぱい紫煙を吸い込み、肺は勢い良く半ばまでを灰に変える。

クリミアは唇からタバコを噴きだすと、たっぷり味わうように煙を吐き出した。

「てめえら、殺<sup>や</sup>っちまえ」

それが丁度よいタイミングだった。

フオービドゥンフルーツ  
「禁断の果実」

背中の魔方陣が眩く輝く。腕は吸い込まれるように引き上がり、指先は体内の魔力の結晶たる果実を引きずりだした。

一齧り。

空気中に溶け始める、煌く魔力の残渣を眺めながら、剣の刃が迫ってくるのを理解しながら、口にした。

アロガント・ロウ  
「覚醒<sup>めざ</sup>めろ、俺様の法」

——虚空に黒い穴がぽっかりと大きく空いた。床にも同様だ。ジャンがそれを認識した直後に、クリミアの部下は動きを止めた。

穴から無数に吐き出される凶太い鎖の束が、小器用に全ての連中の四肢にまとりつき、何も無い空間に磔<sup>はりつけ</sup>にしてみせていた。

「ジャンは力任せに」意思の強さによって威力が変わる鎖”を引きちぎり、床に立ち直る。

すると、クリミアは目を見開き、口をあぐりと開けていた。

これは演技だろうか、それとも本心だろうか——正直なところどうでもよかったが、さすがにこれは後者だろう。

「あんたは学ばねえな。さっきもこうだったじゃねえか」

さっきはこの後、仲間が突入してきて助けてくれた。だが、その仲間を先に出してしまった彼にとって、もう為す術はないはずだ。

「く、い、命だけは——」

さすがにもう、この男が窒息するまで待ち切れない。そんな時間

首を占め続けていれば、怒りのあまり高血圧で倒れてしまうかも知れない。

だから剣の柄を握り、腰だめに構えてみせた。

「そうやって、あんたはこの世界を生き抜いてきたんだろう。立派な処世術だと思うよ」

だがな――。

続きの言葉は、もうクリミアの耳には届かない。

鞘から吐き出された滑らかな一閃。そこから閃く全てを置き去りにする鋭い剣撃。流麗な動作から薙ぐ斬撃がクリミアの首に吸い込まれるように放たれて――。

肉を切り裂き、骨さえも断った。

刃は初めて思いのままに目標を切り裂いて、クリミアの腫れぼったい顔面は肉体から刎ねて宙を舞い、弧を描いて、鈍い音と共に床に弾んだ。切断面の首からは鮮血が噴きでて、その返り血がジャンにも降りかかったが、最早それはどうでもいい。

先程まで生きていた男が死んだ。

もう二度とクリミアには会えない。彼にも家族はいたし、彼を信頼する者だっているかもしれない。

愛していた者も。彼が無くてはならぬ存在であった者さえも居たはずだ。

しかし、もう取り返しがつかない。

クリミアは死んだのだ。

改めて理解してみても、それは妙に現実感がなく――そして爽快感も、やはり高揚もない。

一仕事終えたような、重荷から解放されただけの疲弊感だけが残っていた。

ああやって、嘘や強引な力任せの行動で生きてきた男だ。

そういった生き方は、正直立派だと思う。その行動力や、人に好かれる、人を操る能力がなければなかなか出来ない事だ。

だが。

「その愚行に、二度目はねえんだよ」

やり方さえ間違わなければ、彼はまだまっとうな人生を歩んでいたはずだ。

出会い方さえ違えば、彼の死を素直に悲しめたはずだ。

——ジャンは剣を振って血糊を払うと、そのまま鞘に収めた。短く息を吐き捨てて、指を鳴らして鎖を消し去る。

「面倒かけやがって——」

思えば、人を殺したのはこれが初めてだったかも知れない。

だが、なんというか……。

「こんなもんか」

罪悪感の破片かけらもない。何の感情もない。それが、この”人殺し”のショックを和らげるために精神が、あの過呼吸の時のように感覚を鈍らせているだけかも知れないが、それでも、これは呆気なさ過ぎた。

まあいい。

目的は達成したのだ。

踵を返して、クラリスが待っているであろう交差点へと向かう。

武装した連中は、そんな無防備に背を見せるジャンに襲いかかることも出来ず——ただ呆然と、彼を見送るだけだった。

それが、この国を数年間悩ませてきた犯罪組織『スムーズ・クリミナル』の、あっけない最期だった。

## 邂逅

正直なところ、自分に被害が及ばぬ遠方での、自国と敵国との戦争よりも、身近にある危機のほうが国民にとっては重要であるらしく、『スモース・クリミナル』が一晩にして壊滅したことは次の日からさっそく話題にのぼっていた。

というのは、ロメオ・ヤギユウが密かに雇った者による号外がきっかけであったのだ。

そしてその内容は、ついに政府が動き出してこの国を侵す不屈き者を成敗した——という、清々しいまでの手柄の横取りだった。

最も、そんな事もあってかロメオは幾度目かになる尻拭いに、ついにアレスハイムに頭が上がりなくなり、数日に及ぶジャンの治療を請け負っていた。

『治療魔術』は基本的に成長を促進するもの。だから、治らぬ傷、というものは”前の状態”に戻さなければ元には戻らない。それには術者にもよるが、多大な魔力を消耗することになり、またそれを持続しなければならぬことから、様々な準備が必要となる。

魔力増幅の効果がある触媒だったり、魔術作用を効率よく与えてくれる神聖な空間であったり、その目的によっても異なるが、ジャンの場合は下手に傷がふさがっているため、またその患部を開いてからの治療が必要となったのだが——ともあれ、ヤギユウとマリー・ベルクルの協力により、それは丸二日の行程を経て終了。あの死ぬほどに苦しい喘息症状は、今のところ出なくなったのだ。

が、一応は安全を期して、少なくとも一ヶ月は激しい運動を厳禁とされることとなる。どちらにせよ訓練課程は終了したのだから、そうそう動くこともないだろうな、とジャンは快く承諾した。

その実、アレほどの施術と時間を使っても完治はしていない。

運動はもちろん可能だが、彼の戦い方を見ていれば、いつ再びあの症状が起こるか分からない。そんな状態だった。

——ヤギユウ帝国を訪れて五日目。

「今回は、随分とご迷惑をおかけしました」

王座の間で、ロメオは揃った一同に深々と頭を下げた。

それもそうだろう。不必要な戦争をふっかけ、その上人質を殺そうとして、その人質に大規模な犯罪組織を叩いてもらったのだから謝礼の一つもくれて然るべきなのだが——どうやら一国の主の頭は、そんなものよりもはるかに価値が高いらしい。

白々しい態度にジャンは鼻を鳴らす、その様子を咎めるようにハンス・ベランジェが肘で脇を小突いた。

王座の横にはウラド・ヴァンピールを始めとする騎士団長が並び、皇帝同様に深く辞儀をしてみせる。これが、彼らの精一杯の誠意というもののだろう。

嘆息すれば、きつと鋭く、疲れた様子のマリーがハンス越しに睨んでくる。

——皇帝らの対面には、レヒト・アレスを始めとしてユーリア、ディライラ・ホーク、そしてその傍らには何故だかクラリス。反対側のレヒトの隣にジャンが並び、次いでハンス、マリーといった具合だった。

ジャンがやや中央に立ち並ぶことになった理由としては、やはり私的な理由であったにせよ、独自の働きで犯罪組織をクリミアごと屠ってくれたという功績があるからだ、と考えられた。というよりも、それ以外には考えられなかったのだ。

この中で唯一、なんの職にもついていない平民であるのに。

いや、確か学生だった気もするが——。

「この度は一概にわたしの独断による先行がきっかけとなり、アレスハイムの被害がそう大きいものでなかったにしろ——」

（ま、気長に考えるか）

わざわざ居候させてくれているテポンには悪いが、もう学校に行く理由もない。知的欲求がたまにあの講義を求めるが、それでも適当な本屋で該当するジャンルの本でも漁れば事足りる。

また、知り合った連中は殆ど何かしらの専門家だ。そこを当たるのも良いだろう。

（しかし、疲れたな……）

目の前で長々と謝罪、感謝の意を述べ始める皇帝を一瞥してから、視線を空に彷徨わせた。

二日間の治療は悪夢だった。それを思い出して、今度は悟られぬように細く息を吐き出した。

痛みで眠れぬし、麻酔の効きも鈍いし、その為に酷い寝不足だ。息苦しくて何度も呼吸ができなくなったこともあった。そのせいで、体力や筋肉が大幅減少してしまったような錯覚を覚えていた。

「――後日、またわたしの遣いと共に謝礼を含めた諸々の件をお送りさせて頂きます」

王座の手前の、幾つかの段差を降りて、ロメオはレヒトの前にやってきた。

「国王、この度は……ありがとうございました」

真摯な態度。だが、その間には言い含めてある何かがあって――レヒトは、それまでのジャンの印象とは大きく異なるほどあくどい笑みを浮かべて、差し出された手を力強く握り返していた。

「わしは、貴国と良好な国交を結びたいと思っている。くれぐれも、よろしく頼むよ」

多くの企業を装って裏社会で暗躍する、あのクリミアなどとは比にならぬほどの大きな器を持つ首領のような顔で、一国の主は微笑んでいた。それに多くのもの思わず、本能的に心のなかで無条件降伏する。

ただでさえ、今回で充分なほど有能な部下の活躍をみせつけられたのだ。騎士以下の青年でこれなのだから……そう考えて、軍事国家を冠する彼らは、いたたまれなくなった。

握手を終えて、今度はジャンの前にやってきた。

同様に手を差し出すのに、彼は対応。軽く握り返せば、また口を開いた。



「貴君には世話をかけたな」

「勝手にやったことです。むしろ、大事な騎士さまを殺してしまつて、刑に服さないだけでも充分なんですが」

調べてみれば、スムース・クリミナルには騎士を除名された、あるいは憲兵を辞めさせられた、いわゆるドロップアウト組が数多くいた。それらがいわゆる『軍出身の連中』ということだった。

そういう事もあって嫌味に言つてやると、ロメオは頬肉をひきつらせた。

「その胆力が正直うらやましいな。一応、この国の王なのだが……貴君は腕が立つようだが、もう少しそういった方面で勉強すれば、そののアレス王の手助けにもなるのではないか？ 外交などの、国交にはそういった人材が必要だ」

「そうですね、考えてみます」

簡単な交差。皇帝に対して敬愛も何もない無情な言葉のやりとりは、だがロメオにとってはそれが良かった。下手に尊敬されても、妙なまでに憎まれても困る。だからこそ、この距離がちょうどいい。もつとも、それは少なくとも皇帝と他国の平民といったような、そんなしがらみのある関係には見えなかったが。

ロメオは離れて、また玉座の前へ。

「ラウド」

「御意」

呼ばれた燕尾服姿の紳士は、布の手袋の上から指を弾き、乾いた音を鳴らした。

すると、国王を中心にして大きな魔法陣が展開されて――。

「せめてお送り頂きます」

「――ジャン・ステイル！」

ウラドが叫び、腕を振るう。すると、その手から離れた何かが弧を描いて投擲される。手を伸ばしてつかめば、それがおよそ刃渡り四〇センチ程の短剣であるのが分かった。

控えめであるものの、威厳さえある立派な装飾が施されたそれは、

素人目に見ても逸品だ。店を探しても見つけることはできないだろう。

「特殊な魔鉱石を使用した短剣です。この間、私の”私室”を整理していたら誰かの私物らしいソレが見つかりましてな。特殊な効果は……ともかく、使えば分かる。餞別だ」

「ありがとうございます」

「構わない。だが、次は負けぬからな！」

「ええ、今度は対等な条件で」

「それと、貴君の――」

言っている間に足元の魔方陣が、ウラドの意思に反して眩く反応し始めた。

もう転送がほぼ開始している事を示しているのを理解しながら、薄れ始める外界からの影響に、ジャンはそれでも何かを言っているウラドへと耳を傾けた。

「カミンの……調べ……時……ち……や……くそ――」

が、その要領も得ぬまま、空間は光に満たされて――。

目の前には巨大な門。

周囲は、緑生い茂る平原が広がっている。気温は心なしか暖かく、吐息は白く染まらない。

そこがアレスハイム王国の城門であることを理解するのは、それだけで充分だった。

「ふう、やれやれ……」

背広を着崩し、腹のボタンを全て外したレヒト・アレスは、一同の前に居直って諸手を広げた。

「今日は疲れただろう。まだ朝だが、まあゆっくり休んでくれ。あー、ステイールは学生だったが……まあいいだろう。どうせここ二、三ヶ月行っていないのだろう？」

そんなあまりに砕けた言い草に、先ほどのウラドの言葉が吹き飛んだ。

ジャンは思わず苦笑する。

「いや、まあそうですね……」

「細かい事や些細な倫理はこの際いらぬ。それに、お前も今更行く気にはならぬだろう？　たとえば、魔法を持たぬ事も許容されたとしても」

——その言葉に、レヒト分空いた隣の向こう側、そこに立っているユーリアから視線を投げられた。

いろいろなことはあったが、結局強くなろうと、騎士になろうと思えたのは彼女のお陰だった。命を助けられた恩もあるが……だからといって、彼女もジャンの意思を無視してまでそうしたいわけでもないだろうし、何よりも、もう彼女の敷いたレールを歩く必要もない。

未来は未知だ。

道は切り開くものだ。

誰かに促されるわけなどではない。だから——まあ、これから何をしたい、なにをしようという考えもないのだが。

「そうですね。冒険者ギルドで働きながら、気長に考えますよ。とりあえずこの街を出ようと思っても、今の同級生がどうなるか……見守ってから、ですけどね」

「ふむ。好きにしろ——とまあ、なんだかんだでわしのミスなんだよなあ。わしが、あの魔石の反応を見抜けなかったからだし」

「でもすごく感謝してますよ。あのまま学校に通えてなかったら、今のおれは絶対じゃない。こうやって死にかけたり、この戦争に関わることも、なかった」

この街に来てから一年も経っていないが、随分と濃厚な日々だった。特に、ここ最近は。

「僥倖、と言ったところだな。ともあれ、わしはまだ仕事がある。

行かせてもらおうぞ」

「はい」

ジャンは深く頭を下げて、門へと歩いて行く国王を見送った。

それから簡単な挨拶のあと、クラリスはホークと共に、ハンスはマリーと共にそれぞれの宿へと戻っていった。

ジャンも同様で、居候しているテポン家の前にやってきたのだが……。

「……なんか、胃が痛い」

無断外泊をしたのだ。心配は勿論、怒ってもいるだろう。

国が説明しているとは到底思えないし——とはいっても、ヤギユウ帝国よりはずっと良心的な国だ。下手に情報が流れぬよう配慮に加え、 unnecessary 心配を促さないための措置に違いない。

だから、なんとも……開けにくい。

「いや、だけど」

考えていても仕方がない。

この燕尾服を茶化されても構わない。似合わぬ帯剣用のベルトにささるバスタードソードの場違いさを笑われてもいい。ベルトに挟まる短剣をバカにされてもいい。ともあれ、怒るのは心配してくれている証だ。下手に無視されるよりははるかにいい。

だからドアノブに手をかけて、回して押し開けた。

「た、ただいまー」

わざとらしく、いつもより少しだけ声を張り上げる。

静かな空間に、自分の声が良く響くのがよくわかって、なんだか気恥ずかしくなってきた——どたばたと騒がしい足音と共に、居間から一つの小さな影が飛び出してきた。

「ジャン！」

少女の甲高い、悲鳴のような声と共に、胸に飛び込んでくる小さな衝撃。小回りのきく小軀は、そんな見事な素早さを見せて、ジャンの胸に抱きついていた。

四月より長く伸びた栗色の髪は、今では肩甲骨に届かんとしている。その大きな瞳は涙をこぼしながら、まだ新しい——二着目の燕尾服のワイシャツを、さっそく涙で濡らしていた。

「ジャン……もうっ、遅いよ！ 何日も、帰ってこないで……すごく、心配したんだから……」

こう来たか。

クリミアなどよりはるかに手強い相手だ。

ジャンはしばし言葉に詰まってから、優しくその頭へと手を伸ばす。柔らかな髪を撫で、できるだけ穏やかな笑みで、口を開けた。

「ごめん。ちょっと、色々あってさ……」

声を発せば、サニー・ベルガモットはさらに強く身体を抱きしめてくる。

いつかは、今回のことを彼女にも話してやらなければならないだろう。カミンの村での唯一の生き残りである二人なのだから。

「でも、連絡の一つくらい……ううん、ジャンが帰ってくればいいの。私ね、ジャンが頑張ってる間にね、私も頑張ったの。私ね——」  
「ジャン——」

今まで溜め込んでいた何かを、自分なりのペースで吐き出そうとしているサニーに、小さく相槌を打ち続けていれば、そんな全てをぶち壊しにしてくれるような声が響き——どん、と身体は衝突と共に押されて、玄関の扉に背中を叩きつけられた。

肺腑から空気が吐き出され、息が詰まる。

そんな苦痛の最中に、サニーに脇から弾力のある柔らかな感触が押し付けられるのを知覚した。

「ジャン、あたしをほったらかしてどこに行ってたのよ！」

大きな肉球で顔面を容赦無く殴り続けるのはタマだった。

独特な感触。硬さの向こう側に垣間見える、クッションのような柔らかさ。だが、無自覚の高速打撃により肉球の外皮は——つまるところ、水面に凄まじい速度で突っ込んだような感覚だ。簡単に言ってしまうそれは凶器だ。鈍器である。

尻尾をばたばたと振って足を叩き、耳とひよこひよこ動かして——催眠術にでもかけようとしているのだろうか。

ともあれ、タマからの一方的な嗜虐はその後数分間に及び——。

最終的に前屈みでは収まらなくなった己の欲望がのっぴきならなくなり、四つん這いになることになって事無きを得た。

その頃になると二人の興奮はいくらか収まっていて、同様に待ちわびていたのだろう、テポンを始めとして、トロス、オクト、スクイドが、玄関先に集まっていた。

「話は聞いてるわよ。レイとクランからね」

タマを比較対象にすると少しばかり哀愁ただよう肢体をもつ……言い換えれば、全身から無駄という無駄を全て剥ぎ取った流麗にしてしなやかな肢体のテポンは腕を組んでそう言った。

徐々に落ち着いてくるのを理解しながら、ジャンは大きく深呼吸をしてから立ち上がる。

「ああ……なんか、ごめんなさい」

「いいのよ、だって巻き込まれたんでしょ？　むしろ、良く生きて帰ったわね」

「ま、おれを殺せるやつなんかそうそう居ませんよ」

「ははっ、スティールらしいな」

トロスが笑う。

そうしてから彼は、仕草だけで居間へとジャンを促した。

果たして——ジャン・スティールの日常は、ようやく戻ってきた、ということだった。

程なくして、三人は朝食を終えて学校へ。

残されたジャンは、久しぶりの余暇を、燕尾服のままでもだらりと過ごしていた。

膝の上のタマはゴロゴロと喉を鳴らし、椅子に背もたれに体重をかけていれば、やがてオクトとスクイドが紅茶を手にしてやってきた。

——そして、まったくもって珍しいことに、どこからか帰ってきたらしいパスカルが、気怠げに頬杖について居た。

「坊主、ガッコーどうした？」

「ああ……休みだよ」

「てめっバレバレなんだよ！ お嬢さん方行ったじゃねえか！？」

「王様が休んでいいって言ったんだよ」

「今日びガキでもんなこと言わねえぞ！」

「マジなんだってー、聞いてくればいいじゃんか」

久しぶりに会ったというのに、その三人目のお手伝いさんは簡単な挨拶すら無く頭ごなしに言ってくる。

「ま、お前のことなんかどうでもいいんだけど……せっかくの休みに、俺の他に男がいるってことが気に食わねえ」

短髪を掻き上げるように頭をなでつけてから、嘆息。それから紅茶に手を伸ばす。

隣りに座ったオクトは、あからさまに面倒くさそうな視線をパスカルに送った。

「まあ、一人で仕事に行かせてるのは申し訳ないと思うけどお」  
スクイドは、それに続けた。

「疲れているのなら部屋で休めばいいでしょう？」  
責められて、パスカルはそっぽを向いた。

「お気に入りか」

そう吐き捨てた言葉に、悪意はないようだった。突っかかるのはいたずら心からだろう。

「けどまー、実際のところ、浮いた話とかないのか？」

紅茶を啜って、パスカルが言った。

「いや、実際そんな余裕ないですよ」

「けどさあ、もう八ヶ月だぜ？」

とは言うが――まともに学校生活を送っていたのは半年に満たないのだ。まだ女性と多く知りあってはいないし、そもそもそういった面で親しい女性など、数えてみればサニーか、数に入ればタマくらいだ。

ラァビは仕事仲間だし、ボーアは命の恩人だが……。

意識したこともないことを言われて、ジャンは、そういえば自分

がそういった色事で充実していないことを思い出す。

鉱夫時代は仕事に明け暮れ、汗臭い男たちと仲良くやっていた。それ以前は、近所の男友達とわいわいやっていた。隣の家に住む女の子と随分仲が良かったが、もう居ない。

その後となるこの生活だが――息をつく暇もない。

学校生活に慣れたと思えば、夏休みの帰郷と共に発覚する魔法を持たぬ事実。

自暴自棄による暴走。そして死にかけ、異種族『齧る者<sup>バイター</sup>』の殲滅。そこから受容的に訓練に巻き込まれて――今回の戦争だ。もっとも、戦争を彷彿とさせる戦略魔術の発動はあったが、それは聞いた話だし、それに主に活躍したのは戦争後の、しかも敵国での話だ。

「……くっ！」

よくよく考えれば。

そうだ、気づいてしまった。

平和になって、自分の気持も落ち着いて、騎士という道も失ったがそれが結果的にこの身を自由にさせて……。

「彼女が欲しい……」

気づかなければよかった、こんな気持ち。

「ふん、悪いやがって」

パスカルは鼻を鳴らし、そうして紅茶を飲み干した。

――人恋しい。

誰かに強く抱きしめて欲しい。

血肉なんぞいらん。あの甘酸っぱさが良い。

膝の上で背中を撫でてやるタマはもう眠りに就いていて、動くに動けなかったが、もし自由であったなら街に出ていただろう。

「まあ、時間はあるんですし、今度は自分のことを考えてみたら？」  
オクトはまるで人事のように言ってきた。

事実人事なのだから仕方が無い。

「そうですね。ベルガモットさまだって自立しかけていますし、テポンさまも、ステイールさまがここに居さえすれば文句もありません



ん。居候と言う立場はそうですが、ステイールさまも一人の人間なのですし、ね？」

スクイドがそこに重ねる。

確かに、言われてみれば――不幸自慢をするつもりなど毛頭ないが、自分というものを蔑ろにしてきた……つもりはなかった。逆に自分のことしか考えてなかったのだ。

いかにして強くなるか。どれほどの期間でどれくらいの筋力がつくか。そういったことばかりに費やして、己を鍛えてきたのだ。確かに女っ気というものはなかったが、自分を気遣わなかったと考えれば嘘だ。

それなのにそう言われて、思わずいたたまれなくなった。

「でもまあ、あれじゃねえ？」

そんな折に、パスカルは茶請けのクッキーをかじりながら口にする。

「随分といろんな連中から、もう一押しでさらに深みにいけるって所で行かねえってなるとき――お前、ロリなんじゃねえの？」

「あー。だからサニーちゃんを大事にしてるわけね？」

「ちょ、ち、違いますよ！ お、おれはどっちかって言うと、年上の人が好きですし！」

「あら、口説かれちゃった」

「口説いてねえよ?!」

あらら、と口元を抑えるオクトに、思わず興奮気味に叫んだ。

「いや、こいつにそんな度胸ねーだろ」

「ほっといてくれ……」

「でも、実際どうなのですか？」

「えっ」

スクイドはそのぎょろりとする単眼を半目にして、覗き込むようにして顔を見てくる。

これまで会ってきた女性はどれもこれもが大雑把でおおっぱいな女性ばかりだったから、そんな控えめに訊いてくる所作におもわず、

ぐさり……いや、どきりと来てしまった。

そして突然そんなことを言ってくるものだから、思わずテンパってしまふ。

「あ、いや、そうですね。スクイドはすごい可愛らしいと思いますよ」

「なっ……そ、ち、違いますよッ、その、小さな女の子が好きとか、そういう方の話で……」

ぼっ、と音がなりそうなほど、彼女はゆでダコ、否、ゆでイカのように真っ赤に染まる。もっともイカは茹でても紅くなどならないが。

彼女は受けた言葉に恥じるようにうつむいて、膝の上で指を合わせてもじもじする。そんな様子に、ジャンも気恥ずかしくなっていて、紅茶を一気に飲み干した。

「でも、ジャンくんはどっちゃかって言うとお姉さんじゃない？ さっきだって、タマのおっぱいで反応してたし」

「いや、さっきそう言いましたけどね」

「ははん、判ったぜ。つまりお前らは、単純に魅力不足ってわけだったか」

「うるさいわねえ、お子ちゃまにはわかんないだけよ。これだって、街に出れば良く言われるのよ？ 街角一番の美人さんだって」

「随分と局所的な美人さんだな」

「後ろ姿が可愛いとか」

「もうやめてくれ。目からしょっぱい汁が溢れてくる」

自分で言っとうつむき始めるオクトに、それをなんとかフォローしようとして流すことしか出来ぬパスカル。

ここから巻き返すことはできないだろう。

ジャンは人知れず破綻したお茶の間を眺めては嘆息し、優しくタマを抱き上げてから、その場を後にした。なぜだか勝手に意気消沈とするお手伝い三人衆に、それを止めようとする者は誰一人として居なかった。

## 見送り

冒険者ギルドに行っても、そうそう都合よく適当な仕事があるわけでもなく。

暇を持て余したジャンが、街をぶらぶらしていると、

「おっ、第一街人発見」

噴水の前で、アイスの屋台を指さしてなにやら話し合っているハンスとマリーの姿を見つけた。

——ここに戻ってきてからまだ二日ほどしか経過していないが、それにしてもまだ本国に戻っていない彼らを見て、ジャンは嘆息する。が、まだまともなお礼もできていないことを思い出して、丁度よいと頷き、近づいていった。

「よっ、お二人さん」

そう声をかけると、驚いたような様子でマリーが肩を弾ませて、恐る恐るといったふうに戻り返る。それから顔をひきつけて、それに応えた。

「あ、あら……ステイルさんじゃありませんの」

「おっ、良い所にきたステイル！ 聞いてくれよ、こいつったら、ウィルソンたちのお土産にここのアイスを——」

「お黙りなさい！」

小気味の良い破裂音を響かせて、ハンスの顔面に拳が食い込んだ。彼はその頬にくっきりと拳の形の跡を残して広場に吹き飛び、ぴくぴくと身体を震わせて動かなくなる。一方で、マリーは何事もなかったように口元をおさえて、優雅に「おほほ」と笑っていた。

「は、ハンスが何か血迷ったことを口にしていたようですが、ついさっき、どこぞのレストランで出されたキノコを食べましてね。アレギー反応なのですわ」

「いや、さすがにそんな……」

「アレギーなのですわ！」

「さすがに……」

「アレルギーっ！」

顔を真赤にして、必死になって押してくるその主張に、ジャンは気圧されて何度も頷いた。

（この娘、結構……）

魔術師は頭の回転が早く発想も柔軟で、つまり頭がいい者ばかりだと思っていた。特に、魔術師としてかなりの実力を持つマリール・ベルクールは自分など足元にも及ばぬと、そう思っていたのだが……。

「バカ？」

そう口にするのと、間もなく深く踏み込んだマリールの拳が、眼前に迫ってきて――。

「フォーチュン・ブレイク不可避の攻撃っ！！」

肉体が硬直する。全身の筋肉が、否応無しで張り詰めて指先すらまともに反応できずに、拳がその鼻筋に突き刺さる。そして女の子とは到底思えぬ凄まじい衝撃に、大きくのけぞり、足は地面から引き剥がされて宙を滑空。為す術もなく地面にたたきつけられ、幾度か転がり、アイス屋台にぶつかって動きは止まった。

意識はある。痛みも思ったほどではない。

だが、身体は筋肉の無意識の痙攣のみが支配していて、それ以上動かすことは出来なかった。

――おそらく、それはマリールが構わず放ってきた魔術の効果だろうが……無防備な知り合い相手に、なんてとんでもない事をするのだろうか。

いくらアイスでも、氷雪系魔術で凍らせれば問題ないだろうと考えているようなヤツだ。おそらく考えなしだったのだろうが。

寒そうなノースリーブの白いつくりセーターに、レザーのタイトスカート、ひざ丈のブーツを合わせた格好は、むしろこの南方の国ではちょうど良いのかもしれないのだが――。

「おじさま、それぞれ全種類二つづつお願いいたしますわ！」

屋台のすぐ手前に倒れ込むジャンの前に立てば、不可抗力的に、そのスカートの中の黒タイツ越しに白と水色のストライプ柄のショーツが丸見えになって……。

「た、棚ぼた……！」

口にした瞬間に、ブーツが顔面を踏みしめた。

凜と、後頭部の高い位置で括り馬の尾のようになる髪を揺らして、マリー・ベルクールは深く頭を下げていた。頭を下げて過ぎてテーブルにごん、と嫌な打撃音を鳴らして、彼女は涙目になって額を抑えた。

「こ、興奮のあまり……」

「お、おれも興奮のあまり……」

萎縮しきってあらゆる意味で縮こまるジャンとマリーを睨みつけて、ハンスは苛立たしげに腕を組んでコーヒーを口に運んでいた。

なぜか付け合せに頼んだ野菜スティックをしゃりしゃりと咀嚼しながら――近くの喫茶店、そのテラス席でグチグチと説教をしていたのだ。

あのあと、さっそくの平和ボケかわからないが、ジャンの一部がのっぴきならぬ事になっているところをマリーが発見し、その後幾度ともなく『不可避の攻撃』を受けて意気消沈。

ここまででハンスに怒られる理由など無いのだが――なぜだか一緒にあって縮こまっている状況だ。

テーブルの上には先程マリーが購入したアイスが収まっている紙箱が。そしてそれは、寒々しいほどの冷気を放っているところを見るに、中は大きな氷塊となっているのだろう。

「むやみやたらと魔術を使うなッ！」

「はいっ……！」

「スカートを見上げるな！」

「ひいっ……！」

「で、でもっ！」

うちのめさんとするハンスに、マリーは元気よく手を上げて発現許可を得た。

「アイスだって、どうせ転移魔術ですわよ？　溶けるわけ無いじゃないのよ」

「アイスなんてどこでも買えるって言ってるんですよ」

それにこの季節は寒すぎる。

なのになんでアイスなんだ。

ハンスのそういった言葉に、彼女は早くも「ぐぬぬ」と言葉に詰まっていた。

そうして彼女は早速、他力本願にちらちらとジャンを見つつ足先で小突いてくる。

「ステイルさん、助けて」

そっぽを向いて無視していると、やがてそう声をかけられた。小さい声で、消え入りそうな困窮する声音だ。不覚にも少し可愛らしいと思いつつ、大きく息を吐いて座り直す。

「ハンスが正しい」

「ステイルさん?!」

驚くように目を見開いて、その宝石のような蒼眼を丸くする。にわかに見える絶望の色。

「別にアイスの産地ってわけでもないし、繁華街でも土産屋があるだろうに」

正直な感想に、彼女は「ぐぬぬ」と苦しんだ。

「だって」

「だってじゃない」

「アイス美味しいじゃない」

「土産である必要ないだろ」

「タスクさんアイス好きだって言ってたもの」

「タスクさん飲食しないって、ウィルソン言ってたぞ」

「ぐぬぬ」

大きな溜息。

ハンスは肩をすくめて、

「まあ、別にどうでもいいんだが……」

「どっ、どうでもいいのにこんなに怒ってたの？」

「大人になる前に、せめて論理的な考えができるようになればいい  
と、思っているんですがね」

「何その言い方」

彼女はぷいっとそっぽを向いた。

「まるで私がバカみたいなの言い方じゃない」  
わたくし

「おお、わかってくれましたか」

「そこまでバカにしないでよ!？」

怒った顔から一変、泣きそうな顔になってテーブルにすがりつく。  
そんな様子にジャンは苦笑し、ハンスは「騒がしいだろう？」と  
表情で言ってみせた。

——確かに騒がしい。サニーはいつも物分りの良い子だったから  
こんなに騒がないし、こんなバカな一面もない。少しおっちょこち  
よいなところと、そのミスが明らかであっても隠すクセはあるが、  
その程度だ。

彼女といて楽しくないというわけではないが、こっちもこっちで  
飽きなさそうだ。

やはり女の子は明るい子の方がいい。それに、どう責められても  
彼らは信頼しあっているために、冗談だとわかって受け止めている。  
良好な関係だ。

少しだけ、うらやましい。

いつしか苦笑が微笑みに変わっていることに気づいて、それをマ  
リーに見られ——彼女は頬を膨らませたまま毅然と吐き捨てた。

「なにニヤニヤしてますの？ 気持ち悪い……おえええ」

「そんなに?!」

「うふふ、冗談ですわ」

——そういったやりとりの中で、不意に喫茶店の前に一台の馬車  
がとまった。

御者台に座る一人の男が、そのテラス席に座るマリーとハンスを見るなり手を上げ、合図をするように手を振った。

それを見て二人は立ち上がり、ハンスは私物が入った大きめのバッグを、マリーはアイスの紙箱を手にして馬車へと向かう。

「私たちはこれから、ここより南へ移動しますわ。そこに魔方阵を用意していますの」

「じゃあな、ステイール。また」

「ああ、二人共。またな」

「ごきげんよう！」

軽く手を振るジャンに、マリーは大きく手を振ってから馬車へと乗り込んだ。

馬蹄の音をひびかせながら、それから間もなく南の正門へと馬車は向かっていき――やがて見えなくなるのを確認してから、ジャンはどこか満たされたように息を吐いた。

本当にうるさい連中だった。

だが、楽しかった。

彼女らの魔力はおおよそ把握できたから、これから魔石による通信もできるようになるだろう。もう会えないわけではないのだから、寂しいという感情は一切無く――。

「さて、帰るか」

席を立ち上がり、テラスから中へ。そして玄関へと向かった所で、見知らぬ男が腕をつかんだ。

「お客様、御代金のほうが……」

背広姿の男は、どこか申し訳なさそうに告げるのに対し、

「……あ、ええ」

ポケットをまさぐるジャンは、その手に触れた財布となる布袋の薄さに、深いため息を漏らしていた。

喫茶店の帰り。



噴水広場で縁に座り、一人寂しくぼーっとしていると、城の方から集団がぞろぞろとこちらに向かってくるのを視認した。

そしてその先頭に立つ、紅い腕を持つ少女が大きく手を振ったかと思うと、勢い良く走りだして――。

「ジョネス！ 奇遇ね！」

水色の鮮やかな髪を振り乱した白金の板金鎧と脚甲に身を包む彼女は、ヤギユウ帝国で犯罪組織殲滅の際にコンビを組んだ相手だった。

「クラリスさん」

名前を呼んで、立ち上がる。

すると、それに追隨していたディライラ・ホークを始めとする傭兵部隊も群れをなして、私語を慎むこと無くざわざわとジャンの前にやってきた。

「もう、帰るのか？」

「ああ、マリーたちと帰る場所が一緒なもんでな。ついでに送って貰おうってエ算段だ」

「なら急いだほうがいいんじゃないの？ さっき、あの二人馬車で帰ってたぞ」

「待ってくれてるだろ」

「マリーが覚えてたら、な」

「……だ、大丈夫……だろ？」

「いや訊かれても」

ホークにしては珍しいほどの不安げな顔に、ジャンは気の毒そうに視線を向けた。

どちらにせよ、マリーが動く前にハンスが止めてくれるだろう。彼が居なければ彼女はポンコツだ。下手に魔術の才能がある分、なおさらたちが悪いくらいである。

そうに話していると、ホークの脇から丸メガネの男が出てきた。クラリスは依然として、ホークの傍らにいる。

スミス・アーティザンはホークの右腕だ。彼が居なければ、部隊

はただの戦闘集団としてしか機能しないと聞く。また、訓練の合間に、良く彼がスミスを褒めているのを聞いていた。

そしてまた、そういえば彼とは挨拶もまともにしていなかったことを思い出して、ジャンは手を差し伸べた。

「お久しぶりです。ろくな挨拶もなくて、すみません」

「いえ、こちらこそ。とまあ、不躰で申し訳ないのですが……一つ提案を。ジャン・ステイル、君は我々と共に来るつもりはありますか？」

スミスは穏やかな笑顔で、まるでただの挨拶の一環であるようにジャンを勧誘する。

だが、それが意外であるようにも思わず、ジャンは驚くこともなく素直に首を振った。

「まだ、その世界はおれには早いですから」

「そうですか。残念ですが、もしその気になったらいつでも来てください。ヤギユウ帝国にいつでも居ますから」

「ありがとうございます」

強く握手し、そして頭を下げる。

そうしてから、待ちわびていたようにクラリスが口を開いた。

「ねえジョネス、あたし、あんたにすごく感謝してる」

「ジャンです」

「あたしは、あんたが居なければ多分いまもずっとヤギユウの傭兵組合で細々とやってたわけよ。あんたが来なければ、あたしがホークと合流することもなかった。またブラック・オイルに来ることも……だから——ああ、ついできてわけじゃないんだよ？ ジョネスは充分強かったし、だからこそ、一緒に来て欲しいって思ってたんだけど」

顔が火照っているように頬が紅潮しはじめて、あの堂々とした様子とは一変、指先をあわせてもじもじし始める。そういった、如何にも女の子らしい所作から、不意に彼女の華奢な肢体が随分と女の子らしいものに見えてくるのは、決して錯覚ではないだろう。

よく見れば容姿端麗だ。そして接し易い性格でもあるし、人を気づかえる。だからといって気を使うような疲れる相手ではなく、多分、一緒にいても自然と気にかけてくれるだけだろう。

そんな女性に、どうやら気に入られたらしい。

その事実には純粋な喜びを呈しながら、ジャンは頷いた。

「そうね。ジョネスにもジョネスの道があるんだし」

「ごめんな」

「いいのよ。別に、これが今生の別れてわけでもないんでしょ？」

「そうだな。おれも、そうそう並大抵のことじゃ死なないし」

「あたしも……っと、どうせジョネスは暇なんだろうけど、あたしたちは行かなくちゃ」

彼女はそっと周囲の連中の様子を確認して、それらが余す事無くニヤニヤ薄笑いを浮かべていることを理解する。クラリスは気まずいように微笑みながら、顔の近くに手を寄せた。

「じゃあ、またね」

「ああ、また」

彼女は指先を前後に振って別れを示し、ホークの後ろに隠れてしまふ。

そうして改めてホークがジャンの肩を叩いた。

「んじゃな、達者で」

「ああ、ピンチになったらいつでも呼んでくれよ」

「はん、頼りにしてるぜ」

――この二ヶ月間の出会いは、瞬く間に過ぎ去っていた。己を鍛えた傭兵たち。

友人からの遣いであり、また巻き込んでしまった二人組。

そして戦場で出会った友。

学園生活よりも遥かに短い期間だったが、その影響はこれまでの何よりも遥かに大きかった。

自分を鍛えてくれた連中だ。その結果、肉体的にも精神的にも大きく変わったような気がした。が、それは気のせいなどではない。実際にジャン・ステイルは成長していた。

この訓練、そして戦争を経て、身近に居る者でも気づかぬほど些細だが――最も重要な部分が。

肉体は確かに、衣服のサイズが変わるほど無茶な訓練方法によってその成果となっている。だが目に見えぬ、その精神――心とも言うべきものは、その肉体に見合うほど大きくなっている。

考え方。瞬時の思考。判断。

そして、今回の戦いで生まれた自信が、ジャンに余裕を与えていた。

つまり、人間的な成長。

年齢的には青年であっても、その精神は未だ少年であった。

だが、もう彼は大人と言っても差し支えはない。

それはジャン・ステイルの人生の、大きな変遷――その、変わり目に到達したことを意味していた。

これまでは流れるままに受容してきた人生。

これからはそうは行かない。自分で決め、自分で進む生き方。

――ジャンは彼らが去った道を呆然と眺めながら、それを確かに自覚していた。

## 武具メーカーの展示会・見本市

その街並みは、巨大な一枚岩の人為的な崩落によって出来上がった人工的な谷の中にあるが為に、最奥の採石場まで真っ直ぐ伸びる大通りが特徴的な、広々としたものであるはずだった。

が、今ではその面影すら無い。

道の端、民家や商店のやや手前に構える屋台テントはところ狭しと採石場まで延々と並び、その店頭には様々な銃器を始めとして、流麗で見事な輝きを放つ剣や、弓、ボウガン、斧や槌などの武器、そして全身鎧など、そこには物騒な武具が展示されていた。

その狭くなった往来を、また狭苦しそうに多くの人々が行き交う。頭上には、街の端から端まで伸びる無数の国章が並ぶ万国旗。見ているだけで、息が詰まりそうな光景だった。

「ほう！ ウォンチェスターにグロック、スミソ&amp;ウオッソン、ベロツタ……ペネリ、イザカまで！？」  
「なんと……興奮で私を高血圧にして殺す気か！？」

ジェームズ……通称『中佐』は、立ち並ぶ屋台をざっと眺めては手元のパンフレットに視線を落とし、そうして幾度ともなく呪文のように銃器のメーカーを呟いては、胸を抑えてはしゃいでいた。

その傍らでは、同様のパンフレットに紅いペンで印をつけるサニ―が居る。ページは丁度、この広い街の一角を占めるフードコーナーの紹介が取り扱われていた。

もう片方ではタマが不安そうにジャンの腕にしがみつき――ついてきていたテポンやトロスを始めとして、学友らはすでに喧騒の中に走り出していた。

辺りは鬱陶しいほどの人混みに塗れており、ただ立っているだけでも通行人のジャマになってしまいそうな程の流れがある。

そのお祭り騒ぎは、年に一度――年始にのみ行われる、世界各国

からあらゆる武具メーカー、そして料理人を呼んで催される『武具メーカーの展示会・見本市』であり、世界を代表するメーカーはもちろん、そういった方面に精通しなければ名前しか聞いたことがないような企業や、名前すらも知らぬ企業などがこぞって参加するイベントだ。

見せ合うのは従来の武具に加えて、この一年間で技術を高め作り上げた新作。後者は見本であるものの、企業にとって前者の売買も重要な目標にもなっている。

料理屋台の方は完全におまけであるのだが、それでも呼ばれるのはその国で認められた代表だ。

これはアレスハイム領内の『鉱山都市マイン・アバン』で催される、世界的なイベントであった。

「なんで、こんなことになった……」

あらゆる訓練のお陰で屈強な肉体を得たジャンのお陰で、人混みの中に紛れるいかがわしい輩がサニーやタマに襲いかかることはなかったが、それでも目の間の中佐は、既にゴツゴツと帯剣の柄が痛々しいまでに当たりまくっていた。

——そもそも、人混みは嫌いだったし、こんなイベントがあっても参加なんて考えもしなかったのだが……。

サニーが動き出すまで、ジャンは現実逃避とばかりに記憶をたどり始めた。

「今年は行こうよっ！ お祭り！」

その言葉は、夕食後にまどろんでいるジャンの鼓膜に突き刺さった。

ささやくように口を耳元に近づけて叫んだのだから、それもそのはずだった。

ジャンは椅子から転げ落ちるなり、勢い良く後頭部を床に叩きつけ、立ち上がろうと肘を支えにすれば軟骨がぐりんとひねられて、

肘から先の神経をジン、と痺れさせた。頭の中はきーんと甲高い音が鳴り響いていて――。

苦痛に堪えながら、ジャンが立ち上がる。

「お、さすが筋肉ダルマ」

テポンの無情な声が襲いかかった。

「せめて心配してくださいよ……」

「いや、だって」

テポンは手にしていた本から、床より這い上がり座り直すジャンへと視線を向けた。

吸血鬼を彷彿とさせる黒髪は吸い込まれるような艶やかな闇の色を持っていて、彼女はそれを払って嘆息する。

勝気に釣り上がる目元に、悪戯に微笑む口もと。

太ももまでの黒いソックスを履き、過ごしやすいショートパンツ、そして家の中ならではの白いタンクトップ姿の彼女は、その鋭い犬歯を見せて言った。

「それで死んじゃったら、その筋肉無駄じゃない？」

「無駄ってか、頭打ち付けたの見てたでしょう？」

「脳も筋肉でしょ」

「脳筋じゃないよっ！」

――確かに、この家に来た時より身体は遥かに発達している。服のサイズは、筋肉のせいでワンサイズほど大きくなっては着れなくなったくらいだ。そもそも、それまでも体つきは割りとしっかりしていたのだ。いわゆる、『脱いだらスゴイ』程度には。

だが一時的な集中訓練のせいで、今では『脱いでもスゴイ』ことになっている。

そんなこともあってか、テポンはやたらとそれをいじっていた。

「あー、でも……」

テポンの隣でお茶を飲んでいたオクトは、テポンと似たり寄ったりな格好で頷く。頭はタコの脚が髪のように房となって流れていて、その肌は塗料の白よりも透き通るように白い。美肌だが、タコのそ

れだと思うと扇情的な気分にもなれずにいた。

「たしか、そのお祭りって他国から色々な食材や料理も来るんですよー。武具だけじゃなくて、文化自体が」

「そういやそうだな。結構な国が参加するらしいし、だから軍事視察に来る連中も多いらしい。このアレスハイムだってなあ……あー、代表が失脚したし、どうすんだろうなあ」

テーブルからやや離れた、ソファアが対面する位置で横になるパスカルは、手元でジャンから預かった短剣をいじくり回しながら口を挟んだ。

——あれから聞いた話だと、というかわざわざ国王が手紙を寄越してまで教えてくれた話だが、軍部大臣はやがて責任を追及した結果、彼の辞任が決定した。その後の話はわからないが、下手な動きをしないように監視付きで国立図書館の管理・運営の見習いとして働くことになっている。

その後継は元よりその堅実さから支持が高かった副大臣が晴れて大臣を務めることとなり、副大臣の位置は未だ空白。警ら兵隊長であるエミリオと、ユーリアの二名に絞られていて、現在は後継の見たたらないエミリオが不利であるとされている。

また、パスカルが言っていた視察の件はもちろん国からの人員を割いて——ユーリアを始めとして、他一名を専任する予定だと国王は言っていた……もといそう記していた。

まったくもって、ただの平民であるジャンが直筆の手紙をもらっているということは光栄甚だしいのだが、彼としても一つの『借り』を他国に作ってもらったのだから、その程度は充分計らうのだろう。

「まあどうでもいいが……お前ら行きたいのか？」

見事な装飾が施してある短剣は、どこからどうみても儀礼用のソレであるようにしか見えないのだが、もし儀礼用であるならば特殊な鉱物は使用するはずなど無い。ただの真鍮でもつかえば充分なのだ。

が、それは鉱物も鉱物、魔石によって造られている。しかも加工



用などの小さな、いわゆる一般的な魔石というものではなく、確かな鉱物として使用される魔力を孕む、鉄鉱石のような――通称、魔鉱石と呼ばれる類のもので造られていた。

持ち手には上等な牛革が巻きつけられていて、手によく馴染む。

こういった武器は、『異世界』に良く見られるのだが――どこで、こんなものを入手したのだろうか。

パスカルは口に出さずにそう疑問を抱きながら、静かに短剣を鞘に納めて身体を起こした。

六人がけのテーブルに座る面々、その四人に加えて静観していたトロスとスクイドは、パスカルの言葉に一樣に頷いていた。が、その内スクイドとオクトは、しばし思惟するように顎に手をやってから、改めて首を振った。

「やっぱりパス。年明けまでにあと十冊残ってるし」

「私も。人混みは苦手なので」

引きこもり体質を隠すこと無く告げる彼女らの言葉に、パスカルは一つ頷いた。

「そうだな。俺も年始は『向こう』に顔出さなきゃならんのだが」

「じゃあ、あなたは行かなくてもいいんじゃない？」

「お嬢様！俺もディアナの飛び道具に興味があります！」

「やだ、女の子の前でそういう事言わないでくれる？ほらサニー、パスカルと目を合わせちゃダメよ」

「何と勘違いしているんです！？と、飛び道具って……装填にそんな何分も掛かる汚らしいもんなんざ……俺は男より女ですよ！」

「やれやれ、と肩をすくめてパスカルは短剣をジャンの前に置き、「よく分からねえ。その祭りに専門家がこぞって参加するんだし、そこで見てもらえばいいんじゃないの？元々マイン・アバンはそれ専門だしな」

「ああ、悪いな。ありがとう」

嘆息と共に再びソファーに腰を落とし、足を組んで大きくのけぞった。

「とりあえず十人乗りの馬車を手配しておく。どうせ学校のお友達も呼ぶんだろ？」

「さっすがパスカル。僻み根性を出さないところ、好きよ」

「全然嬉しくないんですが」

――それが約一週間前の出来事だ。

そして、ジャンが参加せざるを得なくなった理由が――。

「……マジか」

三日前に家に届いた一通の手紙。それは国王からの手紙同様に、裏側を特殊な魔力を帯びた蠟で封をされていて、一度でも開封すれば蠟を溶かして再度くっつけたとしてもその痕跡を隠し切ることができない仕様のものが届いていた。

開けてみれば、簡単な文面。

読んでみれば――ひどく憂鬱な内容だった。

掻い摘めば、今回の『展示会・見本市』の視察にユーリアと共に参加しろという事だった。

あの時に記してあった一名とは、まさか……そう思ったが、そういえばユーリアとまともに話すこともできなかった分、むしろ僥倖に思えた。

現地集合で、その時刻は正午。詳細な集合場所は、採石場で行われる『ガウル帝国』の新兵器発表会場だ。

ガウル帝国は技術開発や科学技術において、世界で最先端と言えるほどの技術力を誇っている。

来年のうちに出来上がると言われている、海上蒸気機関車は、発案こそ他国のものだしガウルは協力にすぎないが、その協力なしには決して実現することのなかった代物だった。

それ故に、その国の新兵器発表は否応なしにあらゆる国からの視察団が注目する。となれば、一番目立つ場所だ。

そしてまた、一般人が立ち入ることのできない場所でもある。一応は機密事項となっているのだろう。他国からの視察からの質問を

心待ちにしている時点で、機密もくそも無いと思うのだが。

ともあれ、そんなことがあって、ジャンの参加は決定し――。

「少年！」

サニーが袖を引っ張って合図をするのと同時に、中佐はそう叫ぶようにして振り返った。肩から提げる棒状の袋を腕から抜けぬように掴みながら、恨みがましい視線を向ける。

「今回、もし予算が足りなかったら――少年、君がお客としてまともに来なかったことを恨むぞ！」

「恨みがましいにも程があるわ！」

中佐はアレスハイム王国で本屋を営んでいる。古本も扱い、また守備範囲が広いことからあらゆる新刊からマニアックな小説まで揃っていて、故によくオクトやスクイドのおつかいを含めて訪れるのだが、個人的に訪れる理由は主に世間話だ。だから、ジャン自身が彼の店に落とした総資産は金貨一枚――まともに戦場で使える一振りのブロードソードが購入できる程度の金額だ。

しかしそれでも、本屋にしてみれば充分なのだろうが……今年の売上の殆どを予算にしている彼にとって、そして主に剣よりも遙かに値の張る銃器を目的としている彼にとっては、それさえも死活問題なのだろう。

しかし、銃器ならばガウルの部下からの貢物で随分と保持しているはずなのだが。

それに本国の過激派から命を狙われていることも、忘れないほうが良いと思ったが、言うことだけ言って意気揚々と人混みの中に埋もれていくのを見ると、なんだかどうでも良くなった。

「ねえ、ジャン？ このね、春巻きにチイーズを入れたのが美味しそう」

「ネイティブな発音だな」

「ねえジャン、あたしにもなんか買ってよね？」

「……まあ、何かしらな」

時刻は午前十時をまわったところだ。

だというのに、フードコーナーですらそこは繁盛していた。

——壁を挟り作り上げた広大な空間。おそらくは集会所やらあるいは製造した物品の保管庫として使用していたのだろう、広々とした開けた場所。その壁に沿うように屋台がところ狭しと並んでいるのは、武具の展示会と同じだった。

そしてその中央には簡易テーブルが縦長につながり、パイプ椅子が適当に配置されている。そしてその椅子は余す事無く埋まっていた、今ではその空間の外に出て皿を片手に立ち食いする姿も多く見受けられていた。

「さすがは世界の料理市ってとこだな。別の期間にやればいいのに」  
いくら武具の展示会に乗じてその客を横流しにしようという魂胆だろうと、この朝っぱらからこの動員数だ。料理だけでも充分勝負出来ているというのに期間と場所をあわせる必要もないだろう。

混雑が増して、それを鬱陶しそうに嘆息するジャンの袖を、サニーが引いた。

「でもほら、文句ばっか言っても始まらないよ？　せっかく来たんだから、楽しんだもの勝ちだよっ！」

楽しげに笑うサニーの表情は、久しぶりに見たような活き活きとしたもので——人混みをかき分ける鬱陶しさなどどこ吹く風、気分はいくらか紛らわされて、

「もうっ、無理い！」

叫んだタマは猫の姿に戻って、ジャンの肩に乗り直した。

——まず向かったのは、サニーが先ほど言っていた『チーズ春巻き』なるものだ。

サニーはその小軀を軽やかに踊らせると、瞬く間に人混みの中に姿を消して……。

数分後。

「ふう、勝った！」

紙袋から揚げた春巻きの先が三本覗くそれを天高く突き上げて彼女が高らかに勝利宣言した。

「テンションたけーな」

「次はディアナ大陸で流行ってる、変なサンドイッチ！」

「普通の買ってね?!」

「ほらお兄ちゃん、行くよ！」

「お、おう」

完全に主導権は握られていて、ジャンは彼女に促されるままにその小さな尻を、もとい背中を追っていった。

しばらくした所で、親子連れの客が占拠していたテーブルを空けたのをすかさず座り、そのテーブルにどっさりと料理を載せてすぐさま陣取る。

空いている席を見つけるより遥かに効率的な作戦は予想通り簡単に行って、すぐに人型になったタマは遠慮も無しにチーズ春巻きにかぶりついた。

餓えた猫は人混みのストレスもあってか、食事によってその解消を求めているようで――ガツガツと感想も無しにチーズ春巻きを咀嚼し飲み込んだあとは、そのまま円形のパンにハンバーグ、ピクルス、チーズ、ケチャップなどを挟んだサンドイッチ、いわゆるハンバーガーに噛み付く。

――世界のシェフとは言ったが、見る限りではいかにも豪華な料理が立ち並ぶというわけではない。

手軽に買えて手軽に腹を満たせる、ジャンクフードコーナーだった。

もったも、それでもやはり値段は手軽で、味のレベル自体も高い。料理自体は簡単なものだが、やはり料理人自体は国を代表して来ているのだろう。

確かにこの混雑を考えれば、下手に手の込んだ料理を出すよりは

ジャンクフードを提供したほうが賢明だ。

などと思いながら、サニーから手渡されたハンバーガーをもぐもぐと味わいながらその新鮮な食べ物を楽しんでいると、うふふ、と不敵な笑みは隣から聞こえた。

「もうジャーン？ ほっぺにケチャップ憑いてるゾ！」

「まるで亡霊のようだな」

と、言いつつ。

なんの恥じらいもなく、まるで仲間の猫の毛づくろいをしてやるように、そのザラザラな舌で頬、というよりも唇に近い位置に付着したケチャップを舐めとった。

「……っ!？」

生暖かく、そして柔らかでありながらも刺激のある感触。

吐息。

甘い香り。

驚いた顔でタマを見れば、恥じらうように顔を赤くして、眼が合えば微笑んだ。

頭の前から末端まで、電撃が走るような衝撃。不意に胸がどきどきと弾んできて、それまでそうそう無かった出来事に、胸が高鳴らざるを得なかった。

——なんて卑怯な。

そしてそう思わざるを得なかった。  
が。

「ふぐあふあっ?!」

そう思っている中で、不意に前方からの影。気配。接敵。肉薄——そして間抜けに開いた口に、ねじ込まれるケチャップ、マスタード共に盛りだくさんのホットドッグ。

最早口の横に付いているところの話ではなく、赤子だ。それもその色使いから、嘔吐直後のようだ。

ジャンは眼を見開きながらも、小気味の良い音を鳴らしてソーセイジを噛み千切り、噛めば噛むほど口の中に溢れてくる肉汁を味わ

つていれば、

「じゃ、ジャン？　く、口の周りに……もうっ、ついてるよ？」

つけたんだろ——口いっぱい頬張った今ではそう言える余裕はなく。

そして、目の前のこいつも随分と狡いんだなあ、とジャンは理解した。

そうして頬を赤らめて、目を閉じて唇をつきだしてくるサニーの肩を掴んで動きを制止させる。

咀嚼し、飲み込み、喉を鳴らす。詰まりそうになったが、ジャンの嚥下は並大抵では止まらない。

「サニー……悪い、初めては——好きな人にとって決めてるんだ」

口の周りにケチャップとマスタードを塗りたくっている男の言うことではないが、言わずには居られなかった。というかマスタードの影響か口の周りがヒリヒリしてきた。

言ってやれば、なぜだかサニーは嬉しそうに頷いた。

「うん、ありがとうジャン。私もなの」

「あれっ？」

何か違う。

「ちよっと待てよどんだけポジティブシンキングっ!？」

「えっ、どういう事？」

「こっちの台詞だよ?!　告ってないから!」

——まったく、ヘンに積極的になりやがって。

とはいえ、そんな眼で見られていたとは。うすうすしか感じ取れなかったが、この感覚は間違いではなかったらしい。

でも兄妹だから、断らざるをえない。

年齢的に言えば姉弟なのだが。

さらに言えば血縁関係も無いし。

——あれ？

何の問題も……。

いや、というかサニーはそもそも修道院の連中にそそのかされて

いるだけだ。連中はなによりも色恋沙汰が好きだ。その方が酒が進むらしい。修道女だというのに、不純な連中だ。

ナプキンで口元を拭きながら一息付けば、サニーはここぞとばかりに頬をむつつり膨らませて睨んでいた。

「なんだよ」

「なんでその家畜はいいのっ!？」

「ひっでえ?!」

「畜生よ!」

「プライドはないのか!!」

そんなこんなで、騒がしい『世界の料理市』を堪能することになった。



## 視察

——蒸気機関が発達し、蒸気を利用したエンジンが発明されようとしていた時代。

破滅的な大地震は、突如として世界を襲い——大きく分ければ二つに数えられる内の西方にある大陸の最南端に、巨大な渓谷が出現した。その最奥地には底が見えぬ程の亀裂が走っており、またその亀裂には不思議なことに『階段』がこしらえてある。階段を降りれば巨大な『門』が鎮座しており、その向こう側には『異世界』が広がっている。

異形の生物たちが住まい、またこの世界で利用されるエネルギー源の一つである『魔力』発生之地。そしてそれをきっかけにして、世界中に鉱石と共に存在する魔力を帯びる特殊な石、鉱物『魔石』が注目され始めた。

門から押し寄せた異形の怪物たちはその西方の大陸『ヴォルヴァ』を襲撃。それ故に『異世界』からのあらゆる影響から隔離された東方の大陸『ディアナ』は、壊滅しかけるヴォルヴァとは対照的に”それまで通り”の文化を築き、ヴォルヴァが異世界より誕生した人と似て非なる『異人種』、そして動植物と似てに非なる『異種族』<sup>モンスター</sup>と共存を始めたことをきっかけに、異世界由来である魔力、魔石の利用に励み、文化共存を図った。

それが今からおよそ、一五〇年前。

それまで宗教内での儀式の一環でしかなかった『魔術』は、今では人を殺め傷を癒すなどの多目的で実用的な効力を誇る程に成長し、また異人種は少なくともそのヴォルヴァ大陸では、ヒトと同じように生活を営んでいた。

遺伝子情報は明らかに異なる存在であるのにもかかわらず、子は生まれてその特殊な異人種としての特徴は引き継がれる。

世界はそうした『進化』を迎えるのだが、一部ではそれを『侵略』

と呼ぶものも居た。

事実として、客観的に見れば『ヒト』としての種は異人種の遺伝子に侵されつつある、と判断できるのだが、それが世界のあり方ならば、人為的にそれを排除する必要もない。理解する者たちの結論は、そこに至っていた。

ジャン・スティールはその異世界の扉のある大溪谷の亀裂、通称『溝』を保有する国家『アレスハイム王国』に住む平民だった。

かつては騎士を目指していた彼だが、『魔法』と呼ばれる魔術とは異なる特異能力を持たぬがゆえに条件をみたすことが出来なかったが、平穏とは程遠い問題ごとに巻き込まれながら、その国家に深く関わり――。

「まったく、そろそろ時間か」

今では、国から派遣されて、世界的な催し事である『武具メーカーの展示会・見本市』の視察を任されていた。

近くを通りかかったサニーの友人ら、下半身を蛇にする藍色の髪が特徴的なレイミィ、植物族であり腰あたりから葉のスカートを生やし、側頭部にハイビスカスを咲かせるアオイ、そして右半身を緑の鱗に多い右手に鋭い鉤爪を持つ蜥蜴族のクロコー―その三名に任せて、ジャンは足早にその空間を後にする。

そうして向かうのは、あのうんざりするほどの人で往来が埋まる、その向こう側の採石場だ。

息が詰まるほどの人混み。歩くだけでも身体は多くの人とぶつかり合い、その窮屈な隙間を見つけては入り込んで先に進む。少し進めば、すぐに自分の位置が把握できなくなる。進んでいるのか下がっているのか、主観的には判断出来なかった。

往来を蠢く人々。その一人ひとりに何らかの目的があって、その目的を果さんとして多くがここに集まっている――アレスハイム王国の人口に到達しそうな動員数だ。憂鬱になるのも仕方がない。

肩を押され、誰かの剣の柄に服が引っかかり、足を踏まれ、ざわざわと津波が如く押し寄せる人、人、人。

十数分かけてゆっくりとそこを抜けた後、ジャンは思わず膝に手をやって前かがみになり、大きく息を吐いていた。

――屋台がなくなる往来は、それ故に人通りが極めて少ない。

顔を上げれば、少し先の通りには二人の警ら兵らしき姿。手に持つ大きな看板には、これまた大きな文字で『関係者以外立入禁止』と書かれていた。

そしてその二人組に抗議をするように、身振り手振りを大げさにする一つの影。傍らにはあるもう一つの影は、されど微動だにしない。

時刻を確認しようとしてポケットに手を伸ばして、そういえば時計なんてそもそも持っていないことを思い出す。

空を見あげれば、燦々と澄んだ大気を煌めかせるように大地に明かりを降り注ぐ太陽の位置はおよそ真上。

ガウル帝国の展示会開始時刻は十二時三〇分、だが就業時間は十二時ちょうどだ。

ならば、急がなくてはならないだろう。あの抗議している姿はどう見てもケンタウロスなどではない。

大きく息を吸い込んで、解き放たれたその開放感に浸りながら先に進む。

やがて風が、抗議の声を乗せて届けた。

「――だから、頭の堅え連中だな。俺は関係者だつての！」

「だから言ってるだろう、こちらら仕事なのよ。ここ通った連中は身分を証明できる物を持ってんの。で、あんたは？」

闇のように深い黒の髪を翻して、どこか怒気の籠る声で男を責める。深淵たる黒い瞳は凜として目の前の男をにらみ、肌寒い中で網目のシャツに毛皮のベスト、そしてレザーのショートパンツにオーバーニーブーツ姿の女性は、どこか見覚えのあるものだった。

「まったく、お役所仕事が！俺は開発に携わってんの！ガウルの

開発部長呼んでこい！」

「でも、聞いた話だと今回の展示会は開発部長くらいしか、ガウルからの来賓は居ないらしいけど……」

傍らには、袖の部分が”しゃもじ”のように広くなって塞がっている妙な外套を羽織る女性。頭には長いうさぎの耳を生やし、下半身は毛皮を纏っていた。

男が苛立たしげに頭を掻けば、今度はそれを静観していたもう一人が口を開いた。

《申し訳ございません、お二方。確かに我が主人は<sup>マスタ</sup>その威厳のなさからどうしようもなく平民——いえ、下賤な民草にしか見えないでしょう》

透き通るような、金糸のような黄金の髪。紅い宝玉のような瞳は凜として彼女らを見据え、どこかの令嬢のような風貌は、それに見紛わぬ丁寧な口調によってより確かなものになったが——その声音には”ノイズ”が入り込んでいた。人の声でありながらも、それを模倣した機械のようなもの。蓄音機で流しているような不自然さが、そこにはあった。

服装は至って一般的。どこぞの町娘が着ているようなワンピース調の洋服だ。さらに重ねるように、胸の下から足元まで前掛けがかかっているため、その格好はより平民的だった。

《ですが、私が証明しましょう。彼は確かに開発に携わっています》  
「……色々言いたいことはあるが、たまにはいいことするなあ！」

男は感動したように、食い入るように彼女を見た後、

「証拠は？」

《ありません》

「なら」

と、うさぎ耳の女性が指を交差させてバツを作った。

《ダメでした》

「役立たずッ！」

——遊んでいるのだろうか。

一見すれば、そういった感想を抱くような状況だった。

（というか……ここに入っていくのやだなー）

巻き込まれたら面倒だ。が、ここから先に進むにはこの道しかない。

そもそも、あそのこの四人はなんとも奇遇なことに知り合いだ。その全員が頼りにしてくるだろうことは、自意識過剰でなくとも理解できた。

（急いでるのに……）

ジャンは嘆息混じりに首を振って、腰の剣の柄を撫でるようにして前に進んだ。

ジャンが声をかけるよりも早く、その気配を察知した男が振り返った。

そうして思考停止でもしたかのようにその顔を凝視してから――はっと、我に返ったように目を見開いて口を開けた。

「おお、おお、ジャン！ なんつーか、お前っていつもタイミングいいよなあ!？」

男――ウィルソン・ウェイバーはボサボサになった黒髪をそのままに、愛用している小汚い外套を翻して迫ってくる。やや緑味がかった瞳を輝かせて、彼は諸手を広げて抱擁にとりかかった。

ジャンはすかさず迫ってくる手首を掴んで動きを制し、それ以上の接近を許さない。いくらなんでも、男に抱きしめられるのは嫌だからだ。

「お久しぶりです」

さらなる力を込めて、ウィルソンはどうしてもジャンを抱擁したかった。ぷるぷると腕を震わしながら迫るのに対し、少しばかりさらに力を入れれば、その腕は容易に押し戻っていった。

彼は、どちらかといえば技巧派だ。さらに言えば、純粹に肉体を鍛えたジャンに、これまで魔術にばかり頭を使ってきた男が敵うはずもない。

最後に力いっぱい弾けばウィルソンは後退し、短く息を吐いてから、何事もなかったように立ち直った。

「ジャン、言ってみてくれよ、この頭のお堅い雇われ警備員どもにさあ！」

《ですが、実際に主人が手を出した部分といえば、主要の魔方陣を刻む作業と改善点を挙げただけではないですか。それだけで開発に携わったと言うのはおこがましいのでは？》

「あれ、それ一番重要なところじゃねえ？」

《なにを血迷っているんだか》

彼女はいわゆる人造人間だ。擬似脳と呼ばれる、人工的な脳を埋めこまれ、また全身に人工的な筋肉、その上には人工皮膚を。見た目そのものは人間だが、その用途は武器庫として——その腹の内部に刻まれた魔方陣が亜空間を展開しており、その中から様々な商品を出し入れするのだ。

また自衛の為に様々な魔術を心得ており、『大魔術師』、あるいは『大魔導師』——意味合いとしては同じ——という称号を得るウィルソンに勝るとも劣らぬ魔術師としての実力を持っていた。もっとも、それを教え込んだのはウィルソン自身なのだが。

「タスクさんも、相変わらずですね……っと。すいません、おれもこの先に用事があるんですよ」

彼らをかき分けて先に進めば、『冒険者ギルド』での仕事仲間であるうさぎ耳の女性『ラアビ』が驚いたような顔でジャンを見つめていた。次いで、いつの日か死にかけたところを助け、色々なことがあってラアビのもとで下宿している『ボーア』も同様の様子だ。見る限りでは、ウィルソンが言ったとおりギルドからの要請でこの警備の仕事を請け負ったのだろう。

彼女らの実力なら、確かにウィルソンほどの実力を持っていてもある程度の時間は稼げるはずだ。もっとも、それでもウィルソンは倒せない——雑に扱っていても、ジャンの評価はそれほど高かった。

「ジャンも関係者？」

ラアビの言葉に、小さく頷いた。

尻のポケットに突っ込んである便箋を取り出し、そのしわくちゃになった紙を開いてみせる。

「兵器の視察ねえ……随分と出世したじゃないのよう」

「確かに、そう言われてみれば、何か、変わったような――」

「ジャン待ってくれ！ 分かった素直に話すから！」

ボーアの言葉を遮ってすがりついてくるウィルソンの頬を、肘で押し返す。

「ったあく、やかましいです。おれ、急がなくちゃなんですよ」

「やかましい！ 俺もだ！」

「大体、ウェイバーさんなら不正で中に入れるでしょう？」

「っ！ ……ばっ、んなこと……で、出来るわけ、ねえだろうが」

ジャンのバカヤロウ不親切男。

抑揚なくそう叫んだウィルソンは、恐ろしく素直で迅速な行動で、タスクの腕をひいて人混みの中に飛び込んでいった。

先程までいたあの騒がしい――そして何よりも信頼できる昔ながらの知り合いであり友人でもあるあの男は、その人混みの中で魔術反応よろしく一瞬だけ眩く輝いてみせると、その気配を喪失させた。風に流れてくる魔力の残渣を感じてみるが、それを垂れ流している本体は、やはりここから居なくなっているようだった。

「……んじゃ、そういうことだから。お疲れ様」

手紙をたたんでポケットにしまい、二人に軽く手を上げてから、その場を足早に後にした。

「遅れてすいません！」

採石場には、既に多くの関係者が集まっていた。

誰も彼もが背広姿で、大体が二人組。恐らく軍部関係者と、その護衛といった具合だろう。ざっとみても、二十組ほどは居るだろうか。中央の開けた空間を囲むようにして、彼らは野次馬のように集

まっている。

ジャンはその中で一番目立つ、馬の肢体を持つ女性の元へと走り寄っていった。

その言葉に反応したケンタウロスの女性——ユーリアは、後頭部の高い位置で括った金髪を揺らして振り返り、頭に生える馬の耳をぴくりと揺らした。

優雅さを彷彿とさせるほどに、彼女はゆっくりとふり返る。

——彼女がかつてアレスハイム王立第一騎士団の特攻隊長だったことを、そして現在でもいまだその実力は健在で、最強の名を欲しいままにしている事を知っている者は、意外なことにあまり居ない。彼女が活躍した期間はごく短いものだったことに加え、その力を発揮する場が未だに数えるほどしかなかったことが原因だといえた。

「あ、ああ……気にするな。私も、今、来たところだ」

ブラウンのとっくり首のセーターに、どこかの民族衣装のようなスカートを馬の肢体に巻きつける格好。やはりこの場につかわしく無いものだったが、ジャンも私服だったことも相まって、逆に馴染んでいるようだった。

セーターは少しサイズが小さいのか、胸は形がわかるくらいに浮き出ていた。ヘソは見えずも腹がやや裾から覗いていて、どこか寒そうな格好だった。

だが、なんにしろ——彼女とまともに話すのは、これが初めてかも知れない。

そう改めて思い直すと、なんだか緊張してきた。

何を話せばいいのかわからなくなる。いつもならスラスラと適当なことが口をつくのにもかかわらず、今では綺麗なまでに頭の中は真っ白だ。

（いかん）

せめて、仕事のことを考えねば——。

考えている中で、その静寂を司る空間に破裂音が響き渡った。

ぱん、と澄んだ空気に伝播する。衝撃が、冷えて張り詰めた肌を



叩くのが良く判った。

「――予定より五分早いが、さっそく始めたいと思う。異論はないかね？」

拳銃を提げた、背広姿の男。白髪頭を掻き上げるようにして周囲を見渡す彼は、辺りの注目を得るその広場の中心に立っていた。

男の問いに、答えはない。

還暦を思わせる風貌の老夫は、その反応に頷いて振り返る。彼が向くのは採石場で――その手前に待ち構えていた二人の男が、背後の巨大な何かに被さっている布に手をかけていた。

「今日は、我らが開発・研究部の発表の場。足をお運びになられ、誠に光栄である。これより発表するものは、世界初の『移動兵器』であり、『車両』を改装したものだと考えてくれれば良い。そしてこの兵器の誕生が、世界、いや、戦争を変えるだろうと私は踏んでいる」

簡単な挨拶。

なし崩しに始まったようなその言葉に、されど周囲は緊張した。

ガウル帝国の開発・研究部。

連中が作り出したものは、代表的なもので言えば銃器だ。そしてその出現が、確かに戦争というものの形を変え始めている。今までは剣と剣、あるいは弓矢や槍での応戦が殆どだった。が、今では――主にディアナ大陸での話なのだが、塹壕に隠れては銃で撃ち、爆弾を仕掛け、敵を包囲し、その鉛玉の応射で一網打尽だ。

そういった前例がある分、その男の言葉は脅威でしかない。

緊張が下腹部を刺激する。神経が鋭敏になったようだった。体内を走る電気信号が、全身に痛みを与えているような錯覚を覚えて、ジャンは己を落ち着かせるように大きく息を吸い込んだ。

隣のユーリアは、飽くまで平静のまま、じっと成り行きを見守っている。

そうして、男は空手を空高く突き出して――指を鳴らした。それを合図とするように、男たちは勢い良く布を引き払い――。

あらわになる、その巨体。

鉄板を張り合わせたような、箱型の兵器。

二段重の箱を重ねたようなそれは、その二段目に鉄パイプのような砲筒をつきだしており、また一段目の両側面には車輪が幾つも突き出ている、板を繋げて作ったような輪をその外側に嵌めていた。

いわゆる『無限軌道』<sup>キャタピラ</sup>と呼ばれるものだった。

おおまかに見れば、そのフォルムはそんなものだった。

さらに二段目の箱の上部から円形の蓋が金属音を鳴らして開け、中から人が現れる。よく見れば、その近くにも細いパイプ状の筒が備えてあった。

——駆動輪が回り、無限軌道が道を踏みしめる。

その巨体は、エンジンの駆動音を大地に響かせながら、前進し始めた。

やがてその二段目の箱が回転するように動き出して……。

その場にいる、全てのものがそれに呆気に取りれていた。

思い思いに、それを眺める。

曰く、ありそうでなかった兵器。

曰く、思いもつかなかった発想。

そして、それを実現してしまうほどの技術と軍事費。

見る限り、そうそう安い兵器ではないだろう。あんな特殊車両に剣などは通じないだろうし、銃器だって殆どが豆鉄砲同然だ。

もし、仮にこれが量産に成功したら——思うと、その存在に実感が未だわかぬジャンですら背筋がぞつとした。

魔術で勝てるだろうか。

いや、敵として来るならば勝つしか無いのだが……自信はない。

そうこうしている内に、男は一つ咳払いをして、口を開いた。

「私はこれを戦車<sup>タンク</sup>と名付けた。戦闘馬車<sup>チャリオット</sup>と差別化するためだ。そして――」

にやにやと、男は嬉しげな笑みを隠すこと無く告げる。

「代表すべきこの試作機を、私はオックス？と名称を決定した」

——オックス……雄牛は、ガウル帝国の国章にも描かれている。  
つまり、その彼らが新たに創りだした戦車というものは、国の象  
徴とも足りえるのだろう。

ジャンはそれを聞いて、ただただ、茫然とするばかりだった。

## 視察？

オックス？重戦車。

それはまだ概念実証レベルの不確かな試作機であり、それを戦場に出すにはあまりにも致命的なまでに脆弱である部分が存在する。

だが、この世界に初めて生まれた戦車というにはその完成度は極めて高い。

これに時間と資金を余す事無くかけてまともな状態に仕上げれば、どのような戦争でも乗り切ることができるだろう。

だが問題は、これを作成した理由が軍事的に有利である云々ではなく——純粹なまでに商業的な思惑からであった。

この他にも様々なタイプの戦車を構想しているという。

その中で、開発・研究部長はその後、オックス？重戦車の仕様をスペック次のように述べていた。

全長は約八メートル。車両長は約六メートル。重量は五〇トンであり、整備されている道での最高速度は、時速三五キロメートル。それ以外では時速二〇キロメートルが限界だ。

原動機は外燃機関の一つである蒸気機関ではなく、内燃機関であるガスタービン機関を利用。

主砲には8・8cm高射砲を持ち、副武装は二対の7・62mmの機関銃。

複合装甲によって、すでに対戦車用の攻撃に備えている上、その他の戦車に流用している75mm主砲の至近距離射撃でも貫くことはできないらしい。

——しばらくしてから我に返るジャン・ステイルは、それでも彼の説明をまともに理解することはできない。そもそも、それが可能である者自体が少ないだろう。

漠然と恐ろしい兵器だと思う。

だが、ピンと来ない。

それは戦車というものを知らないからだ。殴られる痛みを知らぬものに拳を振り上げてみせても、なんの反応も見せないことと同様。無知故の反応だ。

が、それを一概に無知という事はできない。

なぜならば、その兵器がこの世界に誕生したばかりであるからだ。今はまだわからないだろうが、いずれ世界が保有し、それを扱うことが当たり前になる時代はいずれ来る。その時は——果たして、騎士はまだ生き残っているだろうか。

「——というのが、我々の研究成果である。今年中には量産機の製造に移れるだろう」

何か、質問は？

男の言葉に、ややあってからまばらに手が拳がった。

指された男はおもむろに口にするのは——予定する販売価格について。

あるいは追加武装の有無について。

その他の戦車について。

そして、ジャンがその言葉すら理解できぬ専門用語による質問も、いくつか出た。

だがそう質問するのはごく一部の何組かのみで、他の連中はみな置いてけぼりにされている。

アレスハイム組も、漏れること無くその中に入っていた。

「……また、予想を上回るものが出てきましたね」

「まったくだ。銃器ですら、いまいちよく分からないと言うのに……」

傍らのユーリアは嘆くように首を振った。

殆ど蚊帳の外のみまで、やがて質問もなくなり——。

「諸君、今日は遠方より足を運び、感謝する。また来年会おう」  
簡潔で無駄のない挨拶。地響きと共に戦車は退いていき、男は踵を返す。

——およそ一時間に渡るそのお披露目会は、予想とは大きく異な

る展開を以って終了した。

ガウル帝国、軍内部の開発・技術部による発表はその日一日のみであるが——今回の『展示会・見本市』自体は三日間続く催し事だが、三日目は午前までしか行われず、また二日目の夕方には多くが撤収してしまう。

だからジャンの仕事は、その二日目の夕方まで続くのだが——その日、つまり戦車の発表以降の予定は皆無であり、また明日の午前十時まで、自由時間となっている。

まだ昼下がりがだったが、ジャンたちが来るよりもさらに早く到着していたらしいユーリアは、欠伸を噛み殺して、予約しておいた宿へと戻っていった。彼は次の日のことまでは考えてなかったが、ここ最近はずっと運動していないことを思い出して、どうせなら明日は朝早くから走ってこようかと考えていた。

肉体強化の魔術を使えば、さすがに六時間ほどで到着するだろう。——そんな事を考えて、いい加減うんざりする往来を前にすると、

「ひっ」

小さなうめき声と共に、破裂するような音が大気に伝播した。

痛々しい打撃音だ。音のする方向、その背後へと振り返れば——先程は居なかった、三人組の男が一人の女性を囲んでいた。

派手な化粧に胸元を大きく開けたブロンドの女性だ。対する三人は立派な外套に正装姿の、ガラの悪い連中。”いかにも”といった様子で取り囲んでいる風景は、最近ではなかなかお目にかかれないものだった。

「いっ……か、顔は、やめて……」

「はん、小生意気に。娼婦風情が、糞ほどでもプライドがあるのか？ それとも言葉がわからなかったか？ 俺はお前に、ここで”しろ”って言ったんだ。まだ分からねえか？」

「だ、だから——」

拳が女性の腹を穿つ。

彼女は呻きながら腹部を抑えて、跪いた。せつかくの化粧が涙や鼻水によって汚れていて――また往来やその近くを通りかかる者もそれに気づいてはいたが、近づかない。

ジャンは短く息を吐きながら、また大きく腕を振り上げる男をにらみ、

「天駆ける馬の翼よ、空間せかいを統べる者よ、我が声を聞き、我が言葉に耳を傾け、我に力を貸し給え」

言葉と共に、空気中の魔力が周囲に集中し始める。

それを確かに感じながら、ジャンは最後に口にした。

シフト・チェンジ  
「変則転移」

肉体に輝きがまとわりつく。その視界が、瞬きに埋め尽くされて――全ての感覚が遮断された。

自分が、その瞬間どこに居るのかわからなくなる。

全身がにわかな浮遊感に飲み込まれていて、胃の腑が浮かび上がるような不快感が渦巻いていた。気持ちが悪い。早く大地を踏みしめたい……そう思考するよりも早く。

男の怒号と共に振り下ろされた拳が、ジャン・スティールの頬に鋭く突き刺さった。

――やや離れた位置で、わけがわからないような顔で周囲を見渡す女性の姿がある。そしてまた、その女性を取り囲んでいたはずの男たちは、不意に女性とジャンとが入れ替わったことに理解が追いつかぬ様子で、困惑に表情を塗り替えた。

ジャンは背中では壁をたたき、鈍い痛みを頭の中にまで浸透させる衝撃に、首を振る。

さっきまでややこしい説明やらで憂鬱で、こんな事も理解できなかったことに心中へこんでいたが……やはり単純な方がいい。

おれにはこれがあっている。

「なんだお前、今、何しやが――」

最後まで発言は許さない。

男が理解するよりも早く、先程彼がしたように腕を振るう。が、それは彼のように大きく振りかぶるものではなく、構えから素直に伸びるノーモーションの一撃だ。

そして鋭利に急所たる水月を撃ちぬかれた男は、息をつまらせて足元をおぼつかなくさせ、よたよたと後退する。さらに追撃として裏拳で側頭部を打撃し、足を払って地面に叩きつける。

流れるような攻撃。そして、まるで力カシを相手にしているかのような手応えのなさ。

さらなる二人に対して構えを向けたが、その連中にそれ以上のやる気はないらしく、

「て、てめえ、俺達を誰だか知ってんのか？ 手を出して、ただで済むと……」

そういったセリフと共に、すっかり伸びてしまった男を二人で抱え上げて立ち上がらせた。

「調べはついてる」

「……っ!？」

言葉が続けようとして、それさえも遮られ——そして予想だにしない言葉に、男たちは驚いたように顔を見合わせた。

「これ以上こんな所で下品な暴力に訴えるっていうなら、そうだな……今日は見逃してやろうと思ってたんだが、仕方ねえよなあ？」

そこに本心など欠片もない。

だがわざとらしく不敵な笑みを浮かべながら指の骨を鳴らせれば、男たちは途端に怯えたように顔をひきつらせて、振り返り……そして背後に迫ろうとしていた一人の男を見て、足が止まった。

「なにやってんだ、こんな所で？」

「あ、兄貴……!」

寒そうに外套で身体を覆っていた男は、声を掛けた二人に抱えられるようにして気絶している男を見るやいなや、瞬く間にその状況を把握したように大きく息を吐き、そして壁を背にするジャンを睨みつけた。



「お前か？ 俺達が誰だか――」

「その台詞はもう聞いた。おれはただ、あんたらがどこぞのヤギウの連中みたいに、娼婦おんなすら暴力でどうにかしようとしてたから止めただけだ」

「へえ、お前はウチの娼婦事情を知ってるってわけか？」

男は鼻を鳴らし、そして詰め寄る。それ以上の言葉はないが、全身から滾る殺意がその後どうジャンを扱おうとするのか、容易に想像ができた。

「だったら、知ったかのお前に一つ教えてやるよ。ヤギウを知ってんなら聞いたことあるだろ？ 俺達はスムーズ――」

不敵な笑み。それは近づき、そして手を伸ばせば触れられるほどの距離にまで肉薄した。

そして同時に、気がつけば腰に備えられていたダガーが抜かれ――行動が開始するよりも早く、その手を蹴り飛ばす。

鋭い刃が回転しながら弧を描き、そして誰もいない地面に軽い金属音を鳴らして叩きつけられる。滑るようになってからその身を止めて、それを横目で見ていた男は、また驚いたようにジャンを見た。

ただ近づいただけでダガーから注意を逸らせたと思ひ込んでいたのだろう。思っていたよりも遥かに未熟である男に、ジャンは失望の色を隠し切れない。

「スムーズ……なんだ？ クリミナルか？ あの壊滅した？」

――『あの時』以来、時たま体中に言い知れぬ興奮が広がる時がある。不完全燃焼なのだろうか、それとも欲求不満なのだろうか、誰でもいい、自分より強い相手に全力を尽くしたい……そういった欲望がたまに膨張する。

今回、先ほどの娼婦を助けてやったのは純粹なまでの善意によって良心が突き動かされたから、というわけではない。裏にはそういった不純な動機が、少なくともあったのだ。

わざわざ三人でつるんでいるだけのチンピラなら、追っ払うだけである程度は自己満足して納得できる。背後関係があるならば、い

ずれそれと出くわすだろう。その中に、楽しませてくれる敵がいるかもしれない――本性とも言うべきそれは、それを見つけた途端にうずいていた。

カマをかけてまで男どもを言い伏せたのは単なる場を静める為だったが――まさか、本当に知っている連中だとは思わなかった。

そしてまた、己が壊滅させた大規模な犯罪組織の残党だったとは。兄貴と呼ばれた男は、わけがわからないといった様子でジャンを、そして先ほどのチンピラへと視線を移す。

半歩下がり、身体を射に、襲おうとすれば恐らく少しばかりやりづらいであろう体勢に移行。

男はばつが悪そうな顔で、口を開いた。

「ヤギユウでしか活動していない犯罪組織の壊滅を、なぜお前が知ってんだ？」

「さあ、なんでだろうな」

説明してやるのはなんだか癪だった。

白々しく肩をすくめれば、男は短く舌打ちし――地面すれすれになるバスタードソードの鞘を、そしてジャンの顔をまじまじと見つめる。

男にみつめられるのがこれほどまでに気色悪いものだったとは。

思いながら、閉口したままの男に声を掛けた。

「クリミアの後継は出てきたか？」

「っ！！ お前は、やっぱり……」

「ま、どっちにしろ興味はないけどな」

クリミアさえ殺せればそれで問題はなかった。結果的に犯罪組織自体を潰すことになったが、それは己の身にふりかかる火の粉であったからだ。むざむざ、それに身を焼かれてやるほど自分に無頓着ではない。

その言葉が決定的だったのだろう。

男は立ち直り、依然として直立したままのジャンから離れ、やがて背を向ける。

「帰るぞ」

「な、どうして……」

「死にたきゃ残れ。俺はこんな所で死にたかねえ」

男たちが逃げ帰った後、女性は化粧がとれたすっきりとした顔で近づいてきた。

空きすぎた胸元を気にするように手を当てて、乱れたブロンドの髪を指先で軽く梳かすようにして目の前へ。

「ありがとう」

澄んだ声でまず感謝の言葉。

娼婦であるのが嘘のような恥じらいの仕草に、穏やかで落ち着いた雰囲気。どちらにせよそういった世界の人間だから雑に対応して逃げようと思っていたところを、意表をつかれて思わずたじろぐ。

「ああ、いえ」

「ちょうど良かったわあ。一人くらいは、こんな典型的な正義漢が欲しいと思ってたしい」

唇に指の腹を押し付ける彼女は、そんな間の抜けた声で言った。

「……？ なんの話——」

遮るように、その指をジャンの口に押し付ける。

間接キスだ。

女性特有の、あの柔らかさが少し乾いた唇に触れる。突然の行動に、だが悲しきかな——頭の中から熱がにじみ出て沸騰しそうになる。頬が熱くなり、紅潮するのが良く判った。

その間に、彼女はかすかな声でなにやらを呟いたかと思えば、片目を瞑り、にこやかな笑顔を見せる。

リストリクト  
「魔術制限」

大気に伝播する、透き通った鮮やかささえある声音。それは鈴の音を思わせた。

そしてまた、魔術の発動を意味するようにその言葉は彼女の穏やかな表情と共に網膜、脳裏共に強く深く刻み込まれて——だが、そ

れ以上の何かがあるというわけではなかった。

制限を意味する言葉。しかし、それについての魔術に知識があるわけではない。ピンとくる事さえもない自身に、先ほどの視察を思い出して、少しばかり勝手に居心地が悪くなる。

――しばらくして、腹の底から深く息を吐いて脱力したように、力が抜けていくのを感じた。

立っていらなくなるような力の喪失ではなく、少し気を抜いた程度のそれだ。

そしてそういった体験は、以前に一度だけあった。

それは、体内の魔力が抜けた時……体の中の魔力が無意識に、無自覚に、誤差程度に肉体を強化してくれるという効果が失せた時の事だ。今の自分の状況は、それに良く似ていて――。

そして、それが意味するところを、ジャン・ステイルはようやく理解した。

彼女はいたずらっぽく首をかしげて、一步退いた。

「ごめんね。魔術も魔法も使って欲しくないから――それ、と！」  
右足を軸に、左足を少し引いて身を翻す。

ふとももがあらわになるような短いドレスは、それ故にショーツが辛うじて見えるか否か程に閃いて、

「仲間思いの皆さんも、集合してくれるかなあ？」

まるでペットでも呼ぶように手を叩く。ばん、と小気味良い音が響いて……。

彼女の言葉に応じるように、最後尾の屋台の影に、そしてそこから採石場方向へやや進んだ物陰に隠れていた男が、観念したように歩み寄ってきた。

「まったく、妙なことに巻き込まれそうだな。どうしてくれる、少年。私はまだ個人的な買い物が終えたばかりなのだが……」

細長い袋を三本程を肩に、大きな箱がいくつも入ったような紙袋を手に提げる男。気難しそうな顔で口ひげを撫でる『中佐』は、そう言って嘆息した。

一方で、女性を一人連れた二人組は、どこか楽しそうな顔でやってくる。

《ずいぶんと珍しい顔ぶれですね。ジェームズさん、お久しぶりです。こんな所で会えるとは》

人形のように美しい風貌の『タスク』は、村娘のような格好のまま深々と頭を下げる。

ジェームズはどこか気まずげに後頭部を掻いてから、適当な返事と共に軽く手をあげた。

有名人なのだろうか――そう思いながら、ジャンはもう一人の男へ顔を向ける。

『ウィルソン・ウェイバー』は相変わらずの小汚い格好で、だがその服装すらもサマにしてしまう出立ちでやってきた。

「嫌な予感しかしねえんだがな……」

ウィルソンの言葉に、そして集合した四名をそれぞれ一瞥して、女性は「うふふ」と落ち着きのある女性よろしく口元を抑えて微笑んだ。

「その予感、的中よ」

## 爆弾魔

「まず先に説明すると、私は城砦ブリックからやってきた『クロア』よ。目的はとある男の捕獲」

城砦ブリック——それはアレスハイムより北に進んだところにある、砂漠の中の国家『エルフェーヌ』よりさらに先に向かった先にある頑強な城砦だ。領地自体はそう広いものではないが、巨大で全ての村や街をまとめて一つにしたような城塞都市を持つ国家である。「そして」

その地形や軍事的に何か特徴があるというわけではないが、一般的な魔術師より、少しばかり特異な、奇術めいた魔術を用いる事が多い、というのが特徴といえば特徴だった。

攻撃や防御に秀でるわけではないゆえに、補助系統に特化する。そういう具合だった。

「その男がこの祭典で仕掛けたと言う四つの爆弾の発見」

「ちよっと何言ってるかわかんないです」

しれっと告げるクロアに、ジャンはわけがわからないと肩をすくめた。

「つまりい、あなた達には私の手足になってもらいたいと思ってるのよう？」

「ふざけるな」

「失せろ」

憎々しげに吐き捨てるジェームズに加え、ウィルソンは親指で喉元を掻っ切るような所作で切り捨てる。

クロアはむくれるように頬をふくらませて、それから視線を逸らして小さく舌打ちをする。

「うわ、こいつ最悪だ」

「おい、性格の悪さがにじみ出てるぞ」

「もちろん、謝礼はたっぷりしますよ？」

途端に白々しく思えてきた笑顔は、それから周囲を無視して何も言わぬジャンにのみ向けられることとなった。

彼女はわざとらしく少し前屈みになって、その大きく切りこまれ開けた胸元を、そのたわやか故に谷間を作り出したバストを見せつけた。触れれば吸い付くほどの柔らかで心地の良い肌なのだろう。その感触たるや、筆舌に尽くし難い。

熱を帯び始める己を静めるために大きく深呼吸をすれば、彼女はさらにこれ見よがしに身体をくねらせた。

「クロア、と言ったな」

ジェームズは弾薬の詰まった箱を複数収めた袋を地面において、肩に担ぐ『散弾銃』『小銃』『狙撃銃』をそれぞれ立てるようにして置く。凝ったように肩を回して、彼は一つ息をついて続けた。

「明日はバローニング・アームズ社からハイパワー、ロミントン・アームズ社からデリンジャーが発表される。先着二〇〇名には販売さえ行われる。しめて金貨五枚。だが私の手持ちはすでに二枚を下回っている。絶望的だ。貴様はこれをどう思う？」

「いろいろと残念ね」

「貴様よりはマシだと思うが」

「……じゃあ金貨五枚。それでいい？」

「爆弾を発見するのだろう？ 命がけの仕事だ。傭兵組合でも冒険者組合でも、もう少し値が張る仕事だお思うが？」

「金貨七枚。それ以上出せないわ」

「ふざけるな、十枚だ」

「ふざけてるのはその頭じゃないの？ 七枚」

怒鳴ったり喚いたり、そういったふうに声を荒くすることはないが、その語調は酷く乱れる。

それから幾度かの応酬による交渉は、忌々しげに舌を鳴らすクロアによって終結した。

「八枚。これが正直、限界よ。手持ちの問題で」

「ならばそれで手を打とう」

意気揚々とごきげんに鼻を鳴らすジェームズに対し、どこか疲れた顔で肩を落とすクロアは典型的なまでに対照的だった。頭の具合が悪いというわけではないのだろうか、今回は相手が悪すぎたのだ。立場的に下であることも、敗因だろう。

また、唯一味方をしてくれる――勝手にそう思っているジャンへと向き直ろうとする中で、今度はウィルソンが声を掛けた。

「おいクロア」

「ひっ……な、なにい？」

「その犯人の目的はなんだ？　それが分からなくちゃ、探すにもアテがないだろうよ」

「あ、ああ……ごめん、今話すわね」

彼女はどこか安堵したように立ち直って、大きく息を吐く。崩れて固まった表情を元に戻してから、ジャンを一瞥し、それから語った。

「ブリックに送られてきた犯行予告は、『大勢を巻き添えにしなければ、明日の午前〇時までには爆弾を解除してみろ』というものだったわ。爆弾は魔術に反応して信管を作動させるみたい……もちろん衝撃や熱にも」

「愉快犯か」

「たぶんね。でも、ブリックにしかそれを寄越さないところを考えると、問題の責任をウチに擦り付けたいのか、それともウチに恨みでもあるのか。問題を、爆発が起こるまで大事にしたくないのか。私は前者だと判断するけど、どう？」

《興味無いですが、そもそも情報不足でなんとも》

「ともかく、愉快犯の線で考えよう。大勢の人を巻き込むと考えれば――」

ウィルソンは顎に手をやり、深く考える。頭の中に浮かべるのは、この街に来る前に叩きこんできた街の地図。

この祭典は夜の二一時まで行われることを考えれば、おおよその狙いがわかってくる。



まずは人通りの多い場所。そして、武具が多く流通している場所。要求がないところを見れば、爆弾は本物なのだろう。が、よく分からないのは口止めがないところだ。

その気になれば祭典を中止にしてまで犯行を防ぐことができる。まだ半信半疑であり、自力で解決できる上——制限時間が、人が居なくなる時刻だ。

何がしたいのか、よく分からないが——。

世界のすべての音が、その瞬間にかき消された。

最初に耳にするのはけたたましい爆発音。次に知覚するのは凄まじい暴風を伴った衝撃波。

大地が上下に、前後に激しく揺れる。視界がぶれて、外界からの情報を受け取った頭が混乱した。

——何が起きたんだ？

理解するよりも早く、その結論はジャンの中で生まれていた。

「爆発……っ!？」

吹き飛ばされそうな身体を大地につなぎとめるように腰を落として、ジャンはゆっくりと背後を振り向いた。

凄まじい震動によって全身が痺れを催す。

砂の砂塵が周囲を飲み込むのを見ながら、やがてそれが己へ襲いかからんとしているのを理解しながら、屋台が半壊し、往来で将棋倒しに巻き込まれている人々を見た。

耳の奥で爆発音が繰り返される。それが余韻なのか、現在進行形で発生しているのか理解出来ない。

だが少なくとも——今ちょうど問題に出ていた『四つの爆弾』の一つが作動してしまったらしい事だけは、理解できていて、

「……サニーっ!」

脳裏によぎる血なまぐさい光景。

己の過去を彷彿とさせるそれが、再現されるのではないか——そういういった最悪な予感に、

『その予感、的中よ』

先ほどのクロアの悪戯っぽい囁きが、ジャンの背筋を凍りつかせた。

「おいっ、少年!？」

ジェームズの制止も虚しく、ジャン・ステイルは走り出していた。

背中の方陣に魔力を込めようとして――反応がない。そして先ほど、クロアに魔術を封じ込められたのを思い出して苛立ちを覚えた。

人の少ない屋台の裏を疾走する。倒れこむ店主を飛び越えて、ジャンの全力疾走は素早く景色は怒涛となって流れていく。

あわや衝突寸前となるところを、腕を伸ばして弾き倒す。

このまま壁や障害物があつたら止まれずにそのままぶつかってしまいかもしれない。思わず動けなくなるほどの痛手を追う可能性がある。

もしかすると、敵がこれを予期して突然剣を目の前に突き出してくるかもしれない。もしそれが首の位置なら自主的に首を刎ねることになる。

そう恐れがあるほど、心臓に鋭い痛みが突き刺さるほどの緊張があった。

だが足は止まらない。

意識しても、それは止まることはないだろう。

胃の腑が浮く。

胸が痛くなる。

息が苦しくなる。

頭の中で、鼓動が鳴り響くようだった――。

「くそっ!」

自分の不調に苛立ちが増す。

なんでこんな時に……考えていると、やがて長い往来を突き抜け、ジャンは目の前の谷の入口、都市の門たる位置を前にした。

——そして、そこに溜まる大勢の来客に、握りしめた拳が軋んだような音を立てた。

が、そこで認識する。

入り口から向かって東側に進めば、サニーと行ったフードコーナーがある。

あった筈だった……のだが。

「どういう、事だよ……っ！」

何が起こったか理解できぬように立ち尽くす連中をかき分けて、自ら人混みの中を突き進んでいく。

進んだすぐ後ろから悪態が聞こえ、止まれと怒鳴られるが、その言葉に素直に従ってやる余裕など無い。

そして、やがてその先頭でジャンは立ち止まり——否、巨大な瓦礫が散乱とする大通りを前にして、思わず立ち止まった。

——時刻は二時に近い。お昼下がりで、フードコーナーは賑わっていたはずだ。

そこで爆発。

この瓦礫の惨状、未だ立ち込める砂煙を見れば、その爆発がどこで起こったのか、否が応でも理解させられる。

爆発はあのフードコーナー内部、そしてそこがより効率的に崩落するように爆弾は設置されていたのだと。

「……サニーは」

声に出せば、思わず目頭が熱くなる。

「タマは……」

それに、あそこにはまだ彼女の友達も居た。昼時だから、一緒に来たほかの連中も合流したかもしれない。

「みんな……うそ、だろ……?」

手持ち無沙汰になった手で、どうにかなくなってしまいそうな頭を抑えつける。

息が詰まる。

喉に蓋をされてしまったように、呼吸ができなくなった。

いや、でも彼らから別れて一時間以上が経過している。  
ここを、離れた可能性は――。

「なあ、このフードコーナーに人はどれくらい居た!？」

隣で呆然とする男の肩を掴んで、叫ぶように訊いた。

男はその威圧と痛みに顔をしかめながら、驚いたように、また動揺したように答えてくれる。

「あ、ああ……結構、いたな。大賑わいで……俺、見ちまったんだよ。崩れた岩に、下敷きになった女の子とか、悲鳴を上げながら、あの穴倉の中に閉じ込められる人たちを」

「あんたはその時、どこに居た？」

「俺は、ここから少し向こうに行ったところだ。だって、この大通りから、そう離れてないだろ？　よく見えて……それで、ああ、見ちまった」

男は手のひらで視界を覆い隠し、短く唸ってから肩を落とした。

――呆然としていたのは、精神がこの現状に追いついていないせいだ。

今の問いによって今を整理し、そしてその衝撃が押し寄せたのだろう。口元を歪め、呼吸を荒くして、間もなく男は膝から崩れ落ちる。

悪いことをした。

そう思ったが、いずれはこうなる。

今日という日がトラウマにならなければ良いが――。

「ありがとな。ゆっくり休め」

大きく息を吐いて、深く吸い込む。粉塵は気管に入り込んで思わずむせたが、その苦しみが己の生を実感させた。

このまま脱力して打ちひしがりたい。その思いを切り捨てて、ジャンは辺りを見渡した。

「サニーっ！　居たら返事をしてくれえ！」

ざわめきに紛れる怒号。喧騒にかき消される叫び声。  
踵を返し、叫びながら人混みをかき分ける。

「サニー！ タマ！」

怪訝そうな顔を通り過ぎ、今にも崩れてしまいそうなほど真っ青な顔を後にする。

「レイミィ！ アオイ！ クロコ！」

どこに居る。

頼む。誰でもいい。

返事をしてくれ。

「テポン！ トロス！」

もうすぐ人混みを抜けてしまう。

構わない。もう一周すれば良い。

誰かが見つかるまで、何度でも。

居ないのならあの穴倉の中を探せば良い。もしかしたら、あそこは空洞のままかもしれない。

食料もある。水もある。どれほどの人数が居たとしても、一日は――。

考えて、もどかしさにイラついた。

――そうだ。これほどの破壊力を持つ爆弾は、まだ後三つある。

仮にみんなが生き残っていたとしても、待機している他の場所で爆発が巻き起こるかもしれない。

「ラック！ クリィム――」

言い終えて、後ろから腕を掴まれた。

「サ――」

胸がすくような気持ちだった。

嬉しさが、緊張からの解放が爽やかな風となって全身を通り抜け

て――衝撃。

全てが歪み、頬に鋭い痛みが叩きつけられる。

何が起こったのか理解出来ない。そのまま倒れそうになるのを、その腕がさらに胸ぐらを掴んで止めた。

身体が浮かび上がるように引き上げられ、その腕の主の元へと身体は否応なしに近づいていく。

「うるせえ！ 誰だって誰かの事が心配なんだよ！ だが騒いだら収集がつかなくなる。怪我人だって出てくる。それがわかって、自分を抑えて静まり返ってんだ！ それをよオ、てめえ……」

巨軀が頭ごなしに怒鳴りつける。

大木たる男が、ジャンの沸騰しきった頭に冷水たる正論を叩きつけた。

「テメエ勝手なのは好きにしろ。だが迷惑をかけるな。勝手に死ぬ」「くっ……」

自分の感情を抑える為でもあった行動は果たして抑えこまれて、動きを止まれば頭が働く。

想像するのはいつでも最悪の結末だ。

血なまぐさい最後。

されど、最後とは言うが、まだジャンは終わらない。そのみんなの最後を経て、その人生を続けなければならぬ。下手をすれば、犠牲になった連中よりも苦しまなければならぬかもしれない。

眼を開けていれば、水の中を見ているかのように世界が不鮮明になった。

男が舌打ちをして、ジャンを突き飛ばす。そのまま姿勢を維持することが出来ずに、力なく倒れこんでしまった。

——自分の人生を無茶苦茶にした男を葬った。

それで、それから自分の人生はひたすら上に向いて進むだけだと思っていた。

現実是非情だ。

まだこんな仕打ちをしてくれる。

おれは一体——誰を憎めばいいんだ。

「元氣、出して？」

気配が不意に強くなる。

足音が目の前で止まり、少女の声が降りかかった。

見あげれば——肩を過ぎる長い茶髪。尖った長い耳に、大きく丸い瞳。愛嬌のある整った顔が、そこにはあって……心臓が止まる程

に、瞬間的な言い知れぬ至福が全身を飲み込んだ。

手を差し伸べる少女に手を伸ばし返して、自力で立ち上がる。

そして改めて少女を見れば――先程の影とは異なるように、黒いショートカットに尖ってなど居ないヒトの耳を持つ女の子が、そこに居た。

幻覚だ。

理解した途端に、言葉にならぬ嗚咽が喉の奥から漏れ出した。

「ありがとうな。君は、一人――」

「こら、ノキ！ 勝手に一人で行っちゃだめでしょ？」

視線をあわせて訊いてみれば、それが終わるよりも早く母親らしき影が少女の腕を掴み上げる。

それからジャンの存在に気づいたらしい彼女は彼を一瞥するなり、その砂埃にまみれた薄汚い姿からタチの悪い連想を経て、引きつった笑顔による会釈と共に遠くへ逃げていく。

ジャンはそれを見送って嘆息した。

「良かった。一人じゃ、無いんだな」

呟いた瞬間に、瞳からこぼれた熱い何かが、頬を過ぎていった。

## 爆弾魔？

「私は怒りを禁じ得ない」

ジャンの後を追うようにして走りだした一行は、勝手に始めたジエームズの独白を聞いていた。

「この爆発のせいでブローニング社とロミントン社は参加を中止するかもしれない。ふざけるな。私の生きがいを潰すつもりかッ！？」

なんの権限があつて！？ ぶち殺すぞゴミめら！」

「ええ、その勢いでぶち殺してくれると助かるわあ」

「にしても、随分じゃねえか？ これでほんとに、目的がわけわからなくなってきたしな」

だがこの展開は予測できた。

制限時間は指定されていたが、その時間に一斉に爆弾を作動させるとは言っていない。

つまり、この犯行にはゲーム性がない。となれば、犯人が愉快犯である線は途端に消えていた。

が、そうなるとなぜわざわざ犯行予告を送ったのか、という疑問が浮き出てくる。

《計画的、突発的な行動と思われます。この爆破から犯人像が判断できました。男性、あるいは女性で、二〇代から四〇代、あるいは五〇代から六〇代。体型は筋肉質、あるいは痩せ型で、時々中肉中背から肥満型、着膨れ、もしかすると着痩せしているように見える可能性もあります》

「ふざけてる状況じゃないぞ」

《これは失礼》

無表情での陳謝。

やがて往来を抜けると、思わず溜息が漏れてしまうほどの人混みがあった。

「嫌がらせか」



ぼつりとジェームズが毒づく。

「そう文句タレんなよ中佐殿」

「……なぜ貴様がそのあだ名を知っているのだ？」

「いやあ、アンタの事なんて呼べばいいか分からなくて、適当に呼んでみただけですよ」

「よもや偶然とは恐ろしいものよな」

やれやれと肩をすくめるジェームズは、ふと何かを見つけたように声をあげた。

「ん……あれは少年ではないか。さっさと先に行って、何をしているのだ」

「っていうか、少年って歳じゃないと思うんだけど？」

「少し黙れ」

毛嫌いするように鋭く睨めば、クロアは鼻を鳴らして首を振る。

随分と嫌われたものだと思いがちながらも、先行するジェームズより先に進んだ。それを咎められないのは、女性である彼女が茫然自失とするジャンを介抱するのが適切であると踏んだからだろう。

駆け寄るクロアを見ながら、ジェームズは隣に來たウィルソンに耳打ちをした。

「どう思う？」

「……なんの話？」

「奴だ。恐らく、グルだろうとは思うのだが……」

《思いました》

「お前はマジで黙ってろ」

《酷いです》

わざとらしく眉尻を下げて目を薄くする。口角を下げて肩を下げれば、思わず抱きしめて慰めてやりたくなる少女の出来上がりだったが――ここ数年の付き合いで、これがわざとである事を理解しているウィルソンには通用しない。また、ジェームズは興味なさそうに一瞥してから、台詞を続けた。

「しかし、なぜ我々に目をつけたのかわからん。それこそ本当に、

我々に教えなければ完全に隠れて行動ができたものを」

「アレじゃないか？ マジで——これが犯行予告だったり。十二時までに見つけろってさ」

「なるほど、私達にのみこのゲームに参加させるというわけか。ならば、なぜ？」

「ジャンを見て言ってたろ。」一人くらいは典型的な正義漢が欲しかった”ってよ。んでその取り巻きを見つけて、人数合わせができたって考えれば自然だ」

「女狐が」

「なら今の内に締め上げちまうか？」

腰に刺す剣に手をやるウィルソンに、軽く笑いながら、ジェームズも上着の下に備えてあるホルスターに突き刺した自動拳銃を抜いて、薬室に弾薬を送り込んだ。

今殺すか。

いや、まだ解決するまでは殺せない。

それに、下手に手を出せばまた爆弾が作動する可能性もある。今の爆発や被害を考えれば、そもそも脅しなんてものが通用するとは思えない。

——ゲームに乗るしかないのか。

打ちひしがれているジャンを見て、ジェームズは嘆息せずには居られなかった。

彼の友人らは果たして巻き込まれたのだろうか。確認する時間はなかったが、思い当たる場所が被害にあったのだろう。いくら頭の中で死を否定しても、あの説得力のある破壊力がそれを全て飲み込みに払拭する。悪夢だ、と思うだろう。

今回のことが、トラウマにならないければ良いが——。

「いや、今はまだ様子見だ。くれぐれも魔術を封じられぬように気をつけてくれよ、大魔導師殿？」

ジェームズが言えば、ウィルソンはぎょっとしたように目を丸くした。

「なぜ俺の肩書きを？」

今は単なる武器商人だが――そうなる前は友人の父親が創設した魔術師組合に所属し、そこで己の力を高めて見事『大魔導師』の称号を得たのだ。確かにその方面では名は広まっているが……彼、ジームズと言えば根っからの叩き上げの軍人で、魔術魔法共に持たぬ生粋のヒトとも言うべき男だ。彼がそれを知るはずもない、思っていたのだが。

「なんと呼べば良いのか分からず、適当に呼んでみただけだ」

「はっ、偶然ってのは怖いなあ」

「まあいい、少し作戦を練ろう」

「了解」

「ねえ君、大丈夫？」

見ていて哀れになるほど顔を蒼く、悲壮感溢れる姿に、思わず垂れる手を取って握った。

反応は鈍く、焦点が合わぬままで顔だけをクロアに向け、ジャンは引きつった笑顔を見せた。

「大丈夫ですよ。おれをどうにかさせたいしたもんだ」

声に感情はなく、力さえも無い。

どう声をかければいいのか、またなぜ彼がここまでショックを受けているのか分からず、クロアはただ立ち尽くすしか無かった。

そうすると、やがて後ろから遅れて三人がやってきた。

「少年はもう使い物にならん。放っておいて他を当たるぞ」

「そう……でもほかって？　ここの調査はいいの？」

「作業だけで時間を喰う。それより、手分けしてめばしいところを探すのが先決だ。なあ、ウィルソン？」

「そういう事だ」

《しかし、どうやって爆弾を発見するのです？　相手が見知らぬ上、その性格すらも不鮮明。最も人が集まり効率的に殺戮できそうな場所が真っ先に潰れた現状で、他を当たるもクソも吐物もないでしょ

うに》

「良い事思いついた」

ウィルソンは指を鳴らし、タスクの肩を軽く叩いて、親指で先ほど通過してきた往來を指した。

「もしかするとオレたちの宿に仕掛けられてるかもしれねえな。見てきてくれ。お前にしかできないことだ」

《主人……ようやく私を信賴してくれているのですね。その節穴にようやく眼球が生まれたことを嬉しく思いながら、私は行きます。どこまでも……！》

飽くまで顔に表情というものは無いながらに彼女は胸の前で拳を握り、大きく頷いて踵を返した。

そのまま、先ほどまでの疾走が嘘のような、それを遥かに上回る速度で屋台の裏を走り去っていくのを見送りながら、ウィルソンは嘆息混じりにぼつりと漏らした。

「ありゃ逝ってんな」

「やだ、頭のネジ……」

「貴様らは随分と余裕があるようだな。少なくとも今回の被害は、これだけでも冗談で済まないレベルだろうに」

重そうに弾薬が山ほど詰まった紙袋を降ろし、ジェームズは疲れたように首を振る。ついでならタスクに荷物をおいてきてもらいたかったが……そんな事を漏らしていると、しっかりと前が見えているのか不安になる足取りで、ジャンがその傍らにやってきた。

「どうした少年」

「……みんなは、まだ、生きてます」

「そうだな。最後はどこで別れたんだ？」

「……あのフードコーナーで。ですが、もう一時間も経過してるし」「なら安心しろ。私は食事ごときに十分以上掛けたことがない」

だが、そもそも武器に興味のない者ばかりであった場合は話は変わる。そして女の子同士ならば話しに花が咲いて、それこそ数時間でも居座るだろう。

可能性は、一概に低いとは言えない。

むしろ……。

思わず口に出しそうになる言葉を飲み込んで、ジェームズはいつもの調子で言った。

「どちらにせよ、この広い街でちょうど九人が巻き込まれるというわけもないだろう」

「そう、ですよね……？」

「ああ。気軽に待っていれば、向こうから探しに来るだろう」

「なら、おれも一緒に、爆弾を探します」

「期待しておこう」

肩を叩いて、ジェームズはクロアへと向き直る。

毅然とした態度で、動揺など微塵もない口調で、ただ最低限の情報だけを得ようと口を開いた。

が、その刹那――ソレを発見<sup>み</sup>た。

それでも慌てふためくこと無く、周囲への説明の有無を判断するために目だけで周囲の三人を一瞥し――動く影に反応したのだろう。同様に、谷の中腹辺りから逃げ出した男の影を、ジャン・ステイールはただ呆然と見つめていた。

この谷は土地を有効活用するために、上部へ向かうにつれてその開き具合は広くなる。そして幾つかの段を構成し、壁に穴を作った幾つもの空間を作り出していた。

その不審人物を発見したのは、三段からなる通路の、その一段目だった。

外套を翻して、腰のポーチいっぱい詰め込んでいるウインチ用のワイヤロープを引っ張り出し、その束をジャンに押し付けた。

ワイヤロープの先端は弧を描く半円の鋭い鉤爪が装備されており、それはさながら登山用品のようだった。

「行け！ 少年！」

ジェームズが叫ぶよりも早く、片手でワイヤロープを緩めて余裕を持たせながら、ジャンは半壊した屋台へと走りだす。そうしてそ

の前に到達するやいなや、迷わず地面を弾いて高く飛び上がり――

軋んで、衝撃に一部を崩す屋根へと着地。

そして飛び移るようにして、横並びの屋台を伝い、走り去っていく男の背を追う。

眼下の景色は流れに流れ――それを認識する暇も置かずに、手にしたワイヤロープを投擲。鉤爪はジャンよりやや高い、だが登るにはあまりにも低すぎる位置に深々と突き刺さるが、ジャンは構わず飛び上がった。

握っていたロープを投げ捨て、代わりに腰の鞘から短剣を抜く。

壁に迫る。その視覚情報がどうしようもなく恐怖を煽り立てるが、完結しようとする行動に恐れていても意味が無い。そう切り捨てて大きく息を吸い込み――壁にぶつかると共に鉤爪を力強く踏みしめる。

勢い、体重を伴った衝撃によって瞬間的な付加重量は、その手のひら大の鉤爪が堪えられるものではなく、着地した瞬間にそれは脆く、突き刺さった壁ごとにわかに崩落して――逆手に握った短剣を壁に突き刺す。

鉤爪と壁の接地面を強く蹴り飛ばして跳躍。短剣を支えにして、勢いと腕力でさらに上へと飛び上がる。

さらに手を伸ばして壁に腕を叩きつけ、短剣を引きぬいて登る。爪を立てて、壁に張り付く形で体勢を維持してさらに刺突。壁を蹴って垂直に飛び上がり――通路の足場に手が掛かる。

勢いを決して止めること無くさらに上り、短剣を引きぬいて身体を引き上げた。通路にへばるように上り詰めたジャンは、その通路の先をさっさと走り去っていく男の影を捉え、立ち上がり様に短剣を納め、そして代わりにバスタードソードを、その腰から引きぬいた。

閃く銀光。鋭い刃が煌き、そして通路左手にある壁へと突き刺した。

大気中の魔力が集中する。

壁に飲み込まれている刀身が、それに反応して鈍く輝くのが良く判った。

「大地の激昂っ！」  
アース・ビック

壁の中で、何かが蠢くを感じる。

そしてそれを知覚した瞬間——はるか前方で、壁が通路方向へと隆起するのを認識した。

それは今まで見てきた四角柱ではなく、先端を鋭く尖らせる八角柱であり——刹那、その隆起が男の肉体を切り裂いた。

そう理解した瞬間、飛び出してきた隆起の柱の上に、軽々と飛ぶ上がる影。それはおよそジャンの肉眼では捉えきれぬ速度で攻撃を回避した、男の姿だった。

さらにもう一本の八角柱が、先に進もうとした男の足元から突き上がる。それとほぼ同時に、頭上の壁から直角に折り曲がり、振り落とされる柱。二対の先端が轟音と共に衝突し、大地を激しく揺るがす衝撃を巻き起こした。

その中で最後の四本目が、不可避たるように通路の前方から後方へと飛び出してきて——衝撃。衝突して一本の巨大な石柱となった二、三本目の柱の土手っ腹を穿つ。

あの爆発にも似た凄まじい衝撃が、辺りに伝播しにわかな衝撃波となって肌を叩き——。

「くそ！」

通路から下の地面へと飛び降りる男の姿を見る。怪我一つなく、またジャンを一瞥する余裕すらある男はそれ以上の目立った行動は無く、ジャンがそうしていたように屋台の屋根から屋根へと移って走り、そして降りると、呆然と通路を見上げる人混みの中へと紛れ込んでいった。

——この先には採石場しかない。

向かうとしたら、その目的とするならばあの『戦車』しか無いのだが……関係者以外立ち入り禁止で隠れる場所も無かった採石場に侵入できる者など居ない。故に、あの場以外で戦車の存在を知る機

会などないはずなのだが……。

「くそつたれ、逃がすかよっ！」

考える暇など無い。

犯人がそこへ向かったのなら、そこがどん詰まりならば、ただ追  
い詰めれば良い。

それだけだ。

難しいことではない。

ジャンは剣を引き抜き、ゆうに己の身長の数倍はあろうかという  
高さから力強く跳躍した。

「不味いな」

肩に掛けた長細い袋から軍用銃を取り出し、手馴れた操作で弾薬  
を装填し終えたジェームズは、そのド派手な戦闘を見てそう呟いた。

「少年は、あれが幻影だと気づいていない」

——初手の八角柱によって貫かれた影が、そのまま柱の上に飛び  
乗ったことに疑問を抱かなかったのだろうか。

そもそも、最後の飛び降りた所でさえ屋台にはなんの衝撃もない  
ところを見ても、おかしいと思えないのだろうか。

最も、友人らの仇たる男を前にしているのだ。興奮は理性を抑え  
つけてまともな思考力を失わせるから、仕方のないことだろうが。

やれやれ、と肩をすくめて、ジェームズは置いていくこと無く用  
心深く、他の銃や弾薬を手にとって走りだした。

「また走るのう？」

間延びした声の不平に、短く舌を鳴らす。

「嫌なら待っている」

「んん……ならそうするわ。ここでまた何かあるかもしれないしい」

「ああ、それじゃあ頼んだぞ」

「ええ、頑張って」

軽く手を振って、クロアはジェームズたちとは反対方向、爆発が  
起こったフードコーナーへと向かっていった。



ジェームズらは再び屋台の裏側を通って採石場へ。

その往復に、ウィルソンはくたびれたように嘆息した。

「まったく、オレは何やってんだか」

「私も同意見だ」

銃の長身に沿う金具を起こして引き、弾薬を、引き金を弾くだけで発射できるように薬室へと装填しておく。小気味の良い金属音が鳴り、購入したばかりでまだ試射すらしていない狙撃銃『ウォンチエスターM70』を眺めれば、少しは気が紛れた。

思わずほころぶ頬を引き締めて、ジェームズは改めてため息を吐く。

「まあ良い、あの女狐の監視が出来るだけマシだと考えるか」

「権力者でも居ればいいんだけどなあ。騎士とか、実力行使できる権力者。今は国防省連中しか居ないだろうし……しかもあの爆発で避難してんだろ——って、オイオイ、もしかして……」

自分で言いながら何か予感めいたものがよぎったのか、顔をひきつらせてジェームズを見た。

彼はその反応に、なんとなく察しがついて、小さく頷く。

「可能性は否定できない。いや、ある意味高いのかもしれないな。まだ、その『発表会』で展示した新兵器は残っているのだろうか？」

「ああ、っていうか、あそこでしか保管できないからな。んでこの街で現時点で『最大戦力』に成り得る兵器だ。もつとも安全な場所に避難しようとするなら、下手な避難所より一番強い信頼できる物の近くがいい」

「まったく——これは謝礼で金貨一〇〇枚はくだらんど。……ひゃ、一〇〇枚か……一年分以上の儲けは、なかなか。ふふふ、どう使ってくれようか」

「オレも、今回のことを表彰されて営業の仕事を少し減らしてもらいたいもんだなあ」

まるで緊張感の無い苦労人の呟きは、目的地に到着するまで続いた。

「あれほどの爆発は、一体何トンの爆薬を仕掛ければ良いのだ？」  
恐怖と言うよりは、興味津々で『ガウル帝国技術・開発部長』で  
ある男は顎に手をやり考えた。

すでに流れてきている情報によれば、三万平米の広さを持つ空間  
が崩落に飲み込まれたらしい。そこに押し寄せていた客はおよそ数  
千に及ぶ。死傷者は、その参加人数をそのまま適用できるだろう。  
採石場に避難してきている二十組の代表各位は、突然の、そして  
未知であり命の危機に晒される出来事にその表情を恐怖に固めてい  
る。腐っても軍部出身、国防省やら何やらから出てきているという  
のに――不甲斐ない連中だ。

男はそう思いながら、あるいは、と考えた。

「魔法である可能性は否めないな」

「魔法、ですか。魔術は選択肢に入らないのですか？」

戦車の車長が口を挟む。

操縦手、砲手、装填手は戦車のメンテナンスに取り組んでいて、  
今は坑道の奥へと引っ込んでいる。ここにウィルソン・ウェイバー  
がいればまだ話は進展したが、居ない者をいつまでも頼っていても  
仕方が無いだろう。

「私の知る限り、これほどまでの威力を持つ爆発の魔術は無い。…  
…ウィルソンの受け売りだがな。一度、私も質問をしたことがある  
から、よくわかる」

爆発は、魔術として扱うのは非効率だと言っていた。

まず座標の指定。ついで魔力の集中に、他の魔術以上に時間がか  
かる上に、程度の低い爆発ですら多くの魔力を消費しなければなら  
ない。確かに爆発の熱風や、そこから巻き上げられる瓦礫、そして  
衝撃波など、派生した影響によってダメージを与えることはできる  
だろうが、そんなことをするくらいなら他の魔術を使用して敵を追  
い詰める。

それに、広大な空間の四隅にその魔術を発動させたとしても――そう考えるが、その前提がまず無い。一度の魔術で大気中の魔力が余す事無く消耗し、次に続かない。一度で終わりだ。なら、その一度にありったけを込めたとしても……やはり駄目だ。根本的に、やはり効率と燃費が悪すぎるのだ。

それほどの高威力にするためには魔力が必要だし、一時的に魔力を増幅させる触媒や薬物を使用するならばまだ可能性はあるが、それほどのリスクを負ってまで遂行しなければならぬ、到達しなければならぬ目的が未だ判然としない。

だが、ここまで来れば次の狙いくらいは推測できていた。

「そして魔法と言えども、無条件での魔法でこれほどの威力を持つ者が居るならば、かなりの手練だ。正直、ウィルソンだけでは不安に思う……だが」

男は不敵な笑みを浮かべて、指を立てる。己に注視を促す所作は、それ故に周囲の興味を引いていた。

「条件付をする事で、その効果は限りなく増幅する」

「条件付け、ですか？」

「ああ。魔法というものは、そもそも型にはまったものじゃない。個人が、生まれながらに持つ特異体質であり、特殊能力だ。そして精神、肉体の成長と共に魔法も成長し、その転換で魔法の効果も大きく変わる事もある。また、己の意思によってそれを変えることすらも可能だ、と言われている。事実、その成功例が幾人かいるしな」  
「楽しげに語る一方で、多くの代表者らは素人でも少しの工夫でこれほどの兵器たる力を持てるのか、と驚愕する。そして恐怖した。

我々は素人に殺されるのか。

命を削り育て増強してきた軍の代表たる己が、訓練すらしていない、ただ魔法を持つというだけの素人に。

しかし、それでも取り乱さないのは幾多の修羅場をぐり抜けてきた男たちだからだ。実際に戦場を経験していない者も多数だが、頭に、魂に叩きこんできたこれまでの戦歴、その情報、勝利、敗北

が無自覚に己を戦士たらしめている。

次に備えて軍力を。いつかに備えて武具の買い付けを。それをこなしてきても——実際に己の命が危機になれば、そのタフネスな精神力は摩耗しきって赤子同然だ。

それ故に、その中で唯一冷静である男は、すでにその場を掌握しきっていた。

「だから、魔法によって作り出した爆弾を、例えば——『どこそこに仕掛けたから、何時までに見つけて解体しろ』、だのと典型的な犯行予告を行えば、その身は少なくとも危険に晒されることになる。鋭く賢い、あるいは直感の鋭い者ならば、その場でその相手を疑えるはずだからな。つまり、その時点で『犯行予告をする』条件付けが完成し、そのリスクに応じて爆弾の威力が跳ね上がる——そういうった事も可能だ」

最も、他にも様々な手段があるのだろう。今挙げたのは、その中の単純でわかりやすい効果の一つだ。

が、単純でわかりやすいが故に、その行為自体は簡単で、リスクは高い。

犯人である『魔法使い』自体の爆弾の威力がそもそもわからないから判断しかねるが、基準となる破壊力が高く、魔法を精錬していたならば、不可能ではない。

「……しかし、それはよく分かりましたが——犯人の目的は、なんでしょう」

「さあな。犯行が組織的に行われているのか、個人で行われているのか……今はその判断すら難しい。ともかく、私の部下が来るまで少し待とう。我々にできることは限られている」

男の声は、台詞に反してどこか力強い、頼れるものがあった。

そして彼はそう告げるなり踵を返して——代表各位をその場に残し、車長と共に坑道の奥へと進んでいった。

## 爆弾魔？

《やれやれ、私の主人はいささか『倉庫』使いが荒いようです》

人型武器倉庫たる『タスク』は、眼球に直接施されたいくつかある魔術の内の一つである視力強化を発動し、ウィルソンの指示通り谷の頂上からクロアの監視を行っていた。

《バカを演じるのは、何やら内なる私というものを見つけたような気がしましたが――》

あの、心底軽蔑しきった相棒の視線は、決して純粹な演技のみによるものではないだろう。ここまで、主人と配下という形で行動を共にしてきたが、配下としての彼女はそんな立場などお構いなしに暴言を放ってきた。無論、冗談としてなのだが……この機会を利用して仕返しをされたのならば、いささか腹立たしい。

なぜか、あのウィルソン・ウェイバーが上に立つと”ムカつく”のだ。

苛立たしい。

せっかくしおらしい仕草を見せても無視するし――。

《む……あの女狐が動きましたか》

ジェームズの口調を真似て、タスクは一人呟いた。

次いで鼓膜たる部分に刻印される魔方陣が作動した。発動する効果は――物音や音声を限りなく適切に受け取る魔術。特定の方角のみ、その音を拾う力を強化するものだ。特定の方角とはつまり、耳を向ける方向であり、彼女は横目のクロアを監視し続けながら、耳を傾けた。

一時期、ウィルソンと組んだばかりの時はなぜ自分は人間ではないのだろうかと嘆いたものだが――割りきってしまったえば、これほど便利な身体もないだろう。人間のように排泄面での不便はないし、また女性的特徴は胸しかなく生殖器が無いのが残念だが、子も授かれぬ肉体なのに”そういった行為”ができてしまうほうが虚しいだ

ろう。どちらにせよ、換装によって”そういった身体”にもなれるのだから、関係のない話だが。

『サニー、サニーちゃん！？ どこに居るの！？』

クロアは人混みをかき分けて、そう叫んでいた。

(サニー……なぜあの女狐が……ああ、あの時か)

彼女に対して、誰一人として名乗るものは居なかった。それは用心の為ということもあったが、ジャンだけは単に忘れていたというところだろう。だが、あの爆発の直後——その不安を思わず声にして、妹たるサニー・ベルガモットの名前を漏らしていた。

それを思い出して、なるほどクロアは納得する。

あの時、心配してふと口を衝いて出る名前は、その人にとって心底大事にしている者の名前だ。

クロアはそれを狡猾に利用しようとしている。

その行動は、普通に見ればジャンの為を思っている素晴らしい女性と見ることが出来るだろう。だが、爆弾の存在を知っていて、それを未然に防ごうと考えている、かつその情報を初めて受け取ったと言う人間であるならば、そのようなムダは省くべきである。

責任者だ。ならば、他者の、たかが”安心”のための行動は控えるべきなのだ。

(なるほどクズめ)

そのままボロを出し続けて、他の仲間の姿も見せてみる。いずれその目的さえも見ぬいてやる。

『あなたが、サニーちゃん？』

やがて、人混みの中からぴょんぴょん跳ねてその己を主張する姿があつて——クロアは一瞬だけ、その口角を釣り上げてからその影へと迫っていった。

『わ、私を知っているんですか？』

人混みをかき分けて出会う少女。何度見ても十九歳には見えぬ少女の頭は、クロアの肩に顎を乗せるのが精一杯である程の矮わいく躯で、それ故に綺麗に整い柔らかである茶髪や、鋭く尖った耳など、その

容姿をタスク以上に人形の如く、客観的に可愛らしいものとした。

『うん。”カレ”から聞いて、探してきてくれて。”カレ”は今、あの爆発の原因を探りに行ってね』

『そうですか……あの、私も、みんなも一緒にいて大丈夫だったの  
で、ジャンにそう伝えて貰えますか？ 私と一緒にいきたいけど、  
多分……ううん、絶対に足手まといになっちゃうし』

『そう、いい子ね。”ジャン”にはしっかりと伝えておくから、サ  
ニーちゃんたちは安全な場所に避難してて。人混みの中だと動きを  
取りにくいし、そうね——”街の入口の、木造建築の宿屋”とか、  
案外大丈夫かもね』

『わかりました。ありがとうございますっ！』

派手で胸元を大きく開けたドレスを身につけているクロアに大し  
た疑問も抱かずに、サニーは素直に言葉を聞いて素直に頷く。そう  
して深くお辞儀をしてから、彼女の背で控えていた友人たちにその  
言葉を伝達し、改めて穏やかに微笑むクロアへと、また大きく頭を  
下げた。

《なるほど。これで体の良い人質というわけですか》

ならば、彼女があの場合を離れてから先に救出しに行こう。下手  
に利用される前に動かなければならないし、実際にクロアと鉢合わ  
せすれば、頭の切れる二人のことだ。勝手に感づいてくれるに決ま  
っている。

殺気すら無く人を殺せるクロアを見ながら、そろそろ動くか——  
彼女が立ち上がる中で、クロアの意図のつかめぬ言葉を聞いた。

『ねえ、聞いて。私の名前はクロア。ブリックから来た……この爆  
破テロの犯人よ』

「故に、仮に」

戦車が駆動し、採石場へと姿を表す。その周囲に、戦車が備えた

小銃を手にとりて身を守らんとする代表各位が並んでいた。

戦車の先頭には研究・開発部長が立ち、傍らには戦車長が。

そして彼の言葉は、剣を振り抜いてその空間へと乱入した——どこか見覚えのある——青年によって、続きを失っていた。

部長を護るように戦車長が腰のサーベルを抜き、構える。だが目の前の青年ジャン・ステイルはそれなど興味がないように辺りを見渡して……目的の物を発見出来なかったのか、齒を噛み締めて地団駄を踏んだ。

「すみません、ここに不審人物が来ませんでしたか!？」

半ば叫ぶようにジャンが訊く。

その言葉に、部長はたと気がついた。

そういえばこの男は、あのケンタウロスの傍らに居た男で——となれば、アレスハイムからの使者か。

アレスハイムと言えば異世界関連の研究で最先端を行く国であり、その純粋な軍事力ではヴォルヴァ大陸二位とされているが、実力としては異人種、異種族を有効活用し、またガウル帝国顔負けの魔術研究によって強大な魔力を有していて——先日 of 軍事国家とまで呼ばれている『ヤギユウ帝国』と正面衝突した際には、魔術一つで二万の軍勢を殺戮したらしい。

その情報はすでに世界で出まわっており、アレスハイムの強国然とした立ち振る舞いは、改めて評価し直されている。

そして世界各国から代表が集まるこの催し事に参加した二人組のうち、一名のケンタウロスは明らかなまでに騎士であろう。もう一人はどうかと思っていたが、今の様子を見るに、確実に騎士かそれに準ずる地位の筈だ。

単体で、さらに剣を抜いた所から判断するに、実力にも自信がある。

信用するに値する男か——。

短く思考し、戦車長が戸惑ってちらちらと背後に控えた部長の様子を伺い始めた所で、彼は肩を叩いて前に踊りだした。



「いや、見ていないな」

「気をつけてください、どこかに隠れているかもしれない——今回の犯行の、犯人と思われる男です」

「ほう、どうしてそう判断した？」

「“段”の一段目でフードコーナーから避難してた人たちを観察してて、おれに存在が気づかれたと分かるや否や、逃げ出しました」

「ただ犯人と決め付けられるのが嫌で逃げただけなのではないか？  
言い分は聞いたか？ 最初から殺しに掛かったわけではあるまいな？」

「そ、それは……」

——ついカツとなって魔術を使用した。

それも、この前会得したばかりで、肘の魔方陣によって体内の魔力を排出して魔力量を調整しなければ発動しなかった、中位魔術を恐らくあの不意打ちは、いくら手練でも直撃すれば無事ではすまない。

……いや、そもそもあの一撃目は、本当に避けられたのだろうか。  
誰の目から見ても、確実に貫かれていたのではないか？

「ふむ。冷静な判断ではなかったようだ——」

「ちよっと待ってください。一つ、良いですか？」

自分の中では解消できぬ疑問をそのままにする訳にはいかない。  
それに、この男たちには充分な情報を与えられていない。ここで不要な人物と判断されて切り捨てられるわけにはいかない。少なくとも、今回の件では最前線に立っていたのだから。

「おれは大地の激昂アース・ビックの初撃を当てました。ですが、その男は上手くすり抜けて——いや、よく考えれば、柱を通り抜けてその上に立たないように見えました。魔術で、そういった事は可能ですか？」

何かがおかしい。

何かがひっかかっている。

そして、これは決して逃して良い情報ではないと、無意識による警鐘が頭の中で鳴り響いていた。

——まとめよう。

爆発はフードコーナーで起こった。

そこに駆けつけた時、不審な男を発見した。

攻撃を仕掛けたが、ことごとくが外れてしまった。

それを追ってここに来たはずなのに、その男の姿はない。

そして、よく考えてみれば攻撃は外れた以前に、”当たったが効いていない”ように見えた。

つまり、ここから導き出される答えは……。

「順当に考えて、その姿は幻だったか——瞬間的な超速再生を持つ異人種だったか。後者については知らないし、その可能性がある存在を、私は吸血鬼以外に知らない。ならば前者、『幻影』だろう」

——あそこで発見した男は幻影、つまり魔術が作り出した幻だ。何が目的でそんな事を。

考えた刹那に、クロアの姿が脳裏をよぎる。

ブリックの魔術は、一般的な攻撃魔術やら何やらとは異なり、奇術めいた魔術を得意とする。

つまり、簡単にいえば人の心理をついたものや、こういった幻、

そして補助系統の魔術だ。

もし本当に、クロアがブリック出身であるならば——魔術制限を  
リストリクト  
発動させたところを見るに、幻などは容易に出せる筈だ。

そして、あの幻が、クロア自身からジャンたちを引き剥がす事が目的だとしたら……。

「魔術で、爆発系統のものってあるんですか？」

己の不安を確かなものとするように、疑惑を確認する作業へと移る。

部長はうんざりとした様子で肩をすくめ、

「あるにはあるが、今回ほどの爆発力は再現不能だ。あるとしたら魔法だろうな」

そして。

部長はジャンの言葉を待たずに続けた。今度は、背後へと首を回

して、戦車長へと説明するような口ぶりだった。

「条件付け、仮にそれがもし己を危機に晒せば晒すほど効果が高まるといったものならば——故に、その犯人の情報が広がれば広がるほど、多くのものが認知し今にも殺害されそうなほどの危機に晒されれば、その爆発力たるや、この都市を壊滅に導くだろう」

「その目的は？」

ジャンが訊く。

部長は肩をすくめた。

「タイミングを見れば、世界各国から集まったこの代表を叩いて潰そうというものだろう。なぜ我々なのか、と言う理由までは分らんが」

最初の爆発によって脅し、こういった重要な参加者は余す事無く同じ場所に避難することを考えたのだろう。つまり最初で誘導し、次で本命と言ったところだ。

ならば、『四つの爆弾』とはなんだろうか。

ただの脅しか？ あるいは、残りの三回を手探りで発動させ、そのいずれかで本命を当てるということだろうか。

「ブリックからの参加者は？」

「ふうむ、やはりその線か——どうだったか。そもそもブリックの交流はないから詳しくないのだが……」

ソレもそのはずだ。彼だって参加者の一人であるし、そもそも主催はアレスハイムだ。参加者名簿はジャンらが持っているはずなのだ。

「あ、ああ。我々です。ブリックからの視察団は」

ワンテンポ遅れて、誰かが読んだのか、戦車の後ろのほうから声を上げ手を挙げて二人の男がやってきた。

背広に身を包む、痩せ型でひよろながの男だ。頬がこけて体調でも悪そうな、だがそれ故に研究者然とした風貌の、短髪の男。それに追随するのは同じような長身の、だが腰にサーベルを携えた背広姿の男だ。こちらは対照的に、頭は綺麗に丸めていた。

「出店してるのは一店だけで、扱っているのは『スクロール巻物』を始めとした魔術仕様の道具です。が……ブリックは、アレでも治安は良い方の筈だったんですが……」

気が弱そうに男が説明した。

となれば——この犯行は独自のものだ。しっかりと国民を管理できていないブリックに責任はあるが、十年近く続くこの催し事がこれまで無事で済んで来た事を考えれば、今回に限ってこんなことが起こるとは誰も思わないだろう。

そうすると、やはりこの犯人の独断による決行と考えてまず間違いはないはずだ。

犯人は——クロア。まだ迷うところはあるが、この線は間違いではないだろう。

「——おい、少年！」

考えていると、背後からジャンを呼ぶ声がやってきた。

振り向けば頼りになる二人の男。彼らは息を切らすこともなくジャンの傍らにつくと、まずウィルソンが口を開いた。

「ハルト部長！　こんな……まだ試しても居ない『システム』に頼ってないで、避難するべきだ！　その時間はあつた筈だ。あんたなら判断できたはずだ！」

「ふむ、ウィルソン。果たしてこの街に、避難できる安全な場所、という所が存在するのかね。君はそれを説明できるか？　できることなら、本心から案内して欲しいと思っているのだが」

「……だが、戦略魔術の改変なんて、実験で成功しても現場じゃ……」

「弱音を吐いている場合か。貴様が作り——」

開発・研究部長ハルト・エアの言葉が空气中に溶けて消えた。言葉は半ばで止まり——そして、その続きなどどうでも良くなるような紅い輝きが、周囲を満たしていた。

足元から放たれる凄まじい輝き。

その広大な採石場を埋め尽くすほどの魔方陣が、突如としてそこ

に集中していた。

空気中の魔力が余す事無く飲み込まれて消え失せ、そして靴越しに、戦略級魔術でも放たれるのかと覚悟してしまうほどの膨大な魔力を大地が孕んでいた。

その場にいる全てのものが、それを理解した。

「――あらあ、皆さんもう集まってらっしゃるう？」

間延びした声が、妙なまでに鋭く胸に突き刺さった。

呼吸が乱れる。途端に跳ね上がる心臓を、その鼓動を感じながら、ジャンはゆっくりと振り向いた。

「ジャン”も居るわねえ。ねえ、聞いてくれる？」

名乗った覚えはない。

だというのにその名を呼ばれて、ずきりと胸の奥深くが痛みを走らせた。

今からすぐにここを逃げろ。頭の中で警鐘が鳴り響く。無意識の己が大音声で叫びまわる。やかましい、そう叫びたいのに、今では目の前の、艶やかな肢体をさらけ出すような女性を前にして、指一本動かすことができなくなっていた。

魔術の効果ではない。頭では理解していたはずなのに、実際に”騙された”と実感した途端に、その衝撃が精神をズタボロにしてくれたのだ。

なぜ、なぜ、なぜ――意味もなく繰り返す。

答えなど無い。

クロアはただ利用しただけなのだから。

「私はクロア。クロア・ヴェーラ・アリサ。これが本名で、今回の爆破テロの主犯格――っていうかあ、私だけが犯人なんだけどねえ。単独による犯行で、爆破予告による成果。これは任意の場所に、私が口にした途端に爆弾が仕掛けられるってこと。その場所や破壊力を正確に伝えれば伝えるほど、正確性と威力が上がる仕様になっているわ。最初にあの爆発力が発揮できたのは――その三人が、独自の捜査で、いずれ私が犯人だってたどりつける逸材だったから、な

のかなあ。詳しくは分からないけど、魔法の性格を考えればそういうことになるけど」

突然の独白。

そして、その中から見えた、独白の理由。

共に、地面の、採石場を埋め尽くす程の巨大な魔方陣の輝きが、さらに増した。

ジャンが思わず剣を握る。今こいつを殺せば、少なくともその発動だけは止められる。いや、止めなければならない——そう動き出そうとした瞬間。

彼女は胸の下で組んだ腕を解き、口元の笑みを残したまま、指を鳴らす形で手を止めた。

それ故に、ジャンも動けなくなる。その唯一彼女を止められる行動でありながらも、同時にここに居る全員、下手すればこの都市ごとを世界から消滅させてしまう爆発の契機きっかけと成り得るそれを、ただの思わせぶりな行動であっても、それが本当に魔法を発動させる行動であっても——そう疑わせる、思わせることで、ジャンを含める全員の、指先の痙攣すらも許されなくなった。

魔法が魔法であるだけに、解決手段は彼女の意識が失われるか、命が失くなるか。どちらにせよ、クロアの意味が反映されなくなる形に移らなければならない。

殺すも気絶させるも、その一撃で行わなければならないのが肝要だ。下手に意識を、反撃の意思を残せばその瞬間に爆発は巻き起さる。その時点で全てが終わる。

「まあ、ジャンが動いた場合、吹き飛ぶのはここじゃないんだけどねえ」

「……どういう、意味だ？」

「会ったわよ、サニーちゃんと。他にも、蛇の娘とかも居たわね」

「無事だったのか!？」

「やあね、がっつかないの」

ジャンの反応が予想通りだったのか、クロアはいかにも愉快気に

破顔して、焦らした。

「保護したわよ」

「……三つ目の、爆弾か」

「そう、鋭いじゃない。正確には二つ目だけどね。三つ目は街の出口。四つ目がここ」

「交換条件は？」

ジャンの言葉に、クロアは首を傾げる。

冗談でそうしているわけではなく、本当にジャンの言葉の意味が分からない様に眉をしかめていた。

「何を言ってるのう？　今まであなた達と”交渉”した時なんて、一度でもあったあ？　そもそも、あなた達と交渉したところで得られるものなんて一つもないもの」

「――発言の許可を」

棒立ちしていたジェームズは、彼女の言葉が終わると共に声を発する。決して気分を害さぬよう、適切な判断による言葉だった。

「いいわよ」

「目的は、ここに居る世界各国の軍部代表の殺害に相違ないな？」

「そうね。だってお偉い方がこんな危険な目にあえばみんなだってわかるでしょ？　こんな危険な武器や兵器を作ったからだって。これは私なりに、世界平和を望んだやり方なんだけどなあ。そりゃあさ、結構人死んじゃったし、危ないけどさー。世界が平和になる、その為の犠牲って考えれば、光栄じゃない？」

「そうだな。お前の奇抜で常識はずれな行動を除けば、その思想は正しい」

――ジェームズは毅然と言い放ち、そしてその口角を吊り上げた。握ったままだった長銃ストックの銃床を右肩に押し当て、銃身手前の被筒ハンドガードに手を添えて銃を支える。左手で弓状の金具――引き金に指を掛けた。

「だがその反社会的な行動は罰さねばならぬ。それが、私の仕事だった」

狙撃銃に備え付けられている照準器から覗いて狙うのはクロアの額。もっとも適切に撃ち殺せる部位であり、またこの距離ならば、彼女の反射的な回避よりも早く確実に頭を破壊できるはずだ。

「いいの？ あんたが発砲できるのは、少なくとも私の爆弾の作動を知覚してから。それじゃ、遅いと思うけどお」

「貴様は二つ目は、そのサニーとやらの避難所と言ったはずだ。『二つ目』なのだろう？」

「……そっ、それがどうしたの？」

「貴様の魔法はどうやら己に何かを課す事でその威力を増幅させるようだ。だからその正体も明かした。我々と同様に、貴様も追い詰められていることになる。こう喋っている内にも、私は貴様を撃ち殺せるのだからな」

「説明になってないんだけど」

クロアの表情から笑顔が消えた。いや、正確には——引きつった、無理やり作り出している笑顔に変わったのだ。明らかにまるで凶星を、痛いところを突かれている。隠し通せると思っていた場所を暴かれてしまったかのような、あるいはその分厚いカーテンに手をかけられてしまったかのような、危機感。焦燥。

「この場に仕掛けられた爆弾が四つ目。貴様が口にした数の、最後の番号だ。そして今は一度しか爆発して——」

衝撃。

凄まじい地響きが、大地を激しく揺らしていた。

遠くから響き渡るけたたましい爆発音。そして視界の奥では、巨大な火柱が上がるのが見えていた。

距離からして、街の入口付近だろう。

共にやってくる衝撃波が、街に波紋となるように伝播して——。クロアが背を向ける。

凄まじい衝撃波の中、少しでも距離を稼ごうと必死になって前に進み始め——迷うこと無く、ジェームズは引き金を引いた。

が、弾丸はまるで見当違いの空の彼方を穿つ。



衝撃が、精密な狙撃を許さないのだ。

「少年！　ここが爆発するのは次の次だ！　それまでにヤツを仕留めろ！」

金具を引いて、空になった葉莖を排出する。そうして元に戻せば、装填した弾丸が発射状態に移行。

次いで発砲。が、当たらない。

ジェームズは舌打ちをして、未だに動かぬジャンの頬を殴り飛ばす。

青年はよろけ、だが倒れない。頬を抑えて、何が起こったのか理解できぬようにジェームズを、そして背後のウィルソンを見た。

「安心しろ。サニーちゃんたちは大丈夫だ。タスクが保護した」

「ほ、本当ですか？」

「オレを信じろ」

「――信じます」

頷き、咄嗟に地面に突き刺そうとした剣を握り直して、前へと向き直る。

今度は背中を叩くジェームズは、ジャンが呆然としていた理由を悟ったようにぎこちない笑顔を見せた。

「爆破にはいくらかタイムラグがあるらしい。もっとも、三つ目が終えた時点でこの爆弾の威力はとんでもないことになるだろうが――」

それを見ぬいた要因は、まずそういった番号が付いていること。

そして、今にも爆発させてやろうかと言う態度に出ているのにもかかわらず、明らかに巻き込まれる位置にまで術者自身がやってきていること。

いくら術者だろうと、魔術魔法にかかわらず、己の攻撃を受けて無効化できる者はそうそう居ない。居たとしても特殊な攻撃であり、明らかに爆発のみの能力とした魔法で、それが可能であるわけがない。

ならば、彼女はいずれ脅しとも取れる二つ目、三つ目の爆弾を作

動させた後、一人で逃げるつもりだったのだろう。だからわざわざここに来た。全員が集まっている事と、逃げぬ事、反抗しても無意味であることを教え込むために。

「――ヤツを殺せ！ 私が許可する！」

「……殺す、んですか」

「五万人の参加者の命と、たった一人の犯罪者の命。それを図ろうとする貴様の天秤はぶっ壊れているに違いないな。測るな！ こう喋っている時間すら惜しいのだ！」

発砲。発砲。発砲。

鼓膜に焼き付くほどのけたましい発砲音は、されど標的に当てられない。衝撃の余韻が、腕を致命的に痺れさせていた。慣れぬ重さによる疲労も原因の一つだ。

またウィルソンを見る。

彼も一緒に行ってくれば――そう思ったが、ダメだ。先ほどの部長との会話を聞く限り、最後の手段である魔術の発動に、深く関わっているらしい。

やはり動けるのは自分だけか――。

大きく息を吸い込んで、力強く頷いた。

ここまでで六〇秒もの時間が経過した。次の爆破のタイミングとしては、そろそろだろうと推測される時間だった。

「わかりました」

ジェームズの返事を待つ間も無く、ジャン・ステイールは走り出した。

## 爆弾魔？

その日の寝起きは最悪だった。

まるで耳元でガンガンと金属をかき鳴らされたような、あるいは銃声が繰り返されたようなけたたましい爆発音と、幾度ともなく宿屋自体が揺れる衝撃。二度寝、三度寝を経ていい加減眠気も覚めて衝撃にも我慢ならなくなってきた頃、窓の外空はすでに赤らんでいた。

二、三時間は眠っていたのだろうか——そろそろ街に出ようと、槍を手にとって扉を開けようとドアノブを捻って押し開けようとするが、ビクともしない。恐らく、あの常識はずれの衝撃によって歪んでしまったのだろう。

寝起きで苛立たしいこともあって、彼女はその馬の足でそれを蹴り開けた。心地よいくらいの清々しい破壊音と共に扉は穴を穿たれ金具をひしゃげさせて吹き飛ぶ。さっきの、爆発じみた衝撃を言い訳にすればいいだろう、そう呑気に思っていたのだが——。

外に出てみれば、そんなわけには行かなかった。

正確にはそんな余裕すらなかったと言えるだろう。

街は喧騒に塗れていて、多くの人々が叫びながら採石場の方向へと逃げ出している。少しでも通りに足を踏み入れようものならば、ケンタウロスの巨軀は瞬く間に障害物へと変わるだろう。

——まったく、何が起きているのやら。

そう嘆息した瞬間に、逃げ出す多くの来客者の反対方向——つまりこの都市の入り口である谷の裂け目の方向から、就寝中に覚えた大地を揺るがす凄まじい衝撃と、そして嫌になるほど耳にこびりついた爆発音が鳴り響いていた。

「何が、起こっているんだ……？」

ユーリアは未だ夢の中に居るのかと思って頬をつねり、その痛みから現実だと認識したが——突拍子のないこの現象に、彼女はしば

し呆然とした。

怒濤の勢いで押し寄せる人波に、ジャンは抜いたバスタードソードを納めぬ訳にはいかなかった。

人混みの中に紛れ込んだクロアの姿はすでに見失われていて――己の行動、判断、決断の遅さに自分をふがいなく思った。

どうしようもなく自分が阿呆なのだというのはわかる。そして、今そうやって自分を責めている時間すら惜しいのだってよくわかる。激流を押し分けて流れに逆らって前進する事さえも苦難で、ようやく屋台の裏側へと到達できたのはそれから三〇秒もかかってからで――それから半ば崩壊し、真新しい武具を散乱とさせるその上を走りだした。

――これ以上遅れば、さらに三つ目の爆弾が作動する。

時間はない。だが、三つ目が発動した時点でタイムラグの大まかな時間が把握できる。が、それが利点になるとは到底思えなかった。

その五キロに及ぶ直線の通りを走りぬけながら、人並みの中を、そして前方、谷の上を全て見渡す。

だが、あの派手なドレス姿のクロアを発見するには至らない。

果たして、本当にここを先行しているのか。どこかに身を隠しているのではないか――自分が何か、途方も無い大間違いを犯しているのではないかという漠然とした焦燥が、ジャンの胸を焼き焦がした。

前方に見える空は既に茜色に染まりつつある。クロアと出会ってから、どれほどの時間が経過したのだろうか。

そして、まだ出会ったばかりのあの頃、まさかこんなことになるとは思わなかった。

本当に彼女を殺さなければならぬのだろうか。

やり方はごく卑劣であるものの、己の能力を把握して存分に活用できているのだ。その方向性さえ違えば、ごく真っ当で正義感溢れ

る女性だったのではないだろうか。

殺さずに、更生することは出来ぬのだろうか――。

「ジャンッ！」

今更になって迷っていると、頭の上から呼ぶ声がした。

見上げるまでもなく、その声はラアビのものだった。反対側の”段”を見上げれば、大通りを挟んで並走するボーアの姿がある。

「この先、五〇メートルの所を走ってるわ！ 話は聞いてる、バックアップは任せてちょうだい！」

最早仕事どころでは無くなったのだろう。そもそも、彼女はいかにして楽に仕事をこなすか常に考えているような人間だ。このような大事に乗じて仕事をサボることなど、お手の物だ。

が、助かった。距離はそう離れておらず、そしてまた彼女がまだここに居るという事が把握できたことに一先ず安堵する。

「この調子だと二〇秒くらいで人並みが途絶える！ そこで勝負をかけなさい！」

「了解。わかりました！」

――人並みの密度は、気がつけばまばらになるほど薄れていた。あれほどの人は今、採石場付近に集合しているのだろう。

ウィルソンになにか考えがなければ――そして、ジャンがここでヘマをすればその生命が余す事無く犠牲になる。彼女の、あっぱれな思想のもとで狂った手段によって殺戮が行われるのだ。

ならば、急がねばならない。

手段など選んでいられない。

殺すにしろ殺さぬにしろ、彼女だけは止めなければならぬのだ。

ジャンは腰から剣を抜き、そして力いっぱい地面に突き刺した。  
「アース  
ピック大地の激昂っ！」

叫び声と共に、魔力をはらんだ刀身が大地に干渉する。そして意思のままに、その隆起は丁度足の下から行われて――低空飛行で突出した四角柱が凄まじい勢いで前方へと加速する。ジャンは剣を握ったまま、その先頭に乗った形で急行した。

全力疾走など鼻で笑えるような速度が、その巻き起こる暴風が、高速度で背後へと送られていく景色が、ジャンを捉えていた常識というものを尽く吹き飛ばす。

咄嗟にやったことだが——こういったやり方もあるのだと、新たな使い道をジャンは学び……。

「ちよっ、もう来たのおッ!？」

既に人気の無くなった大通り。その中央をなりふり構わず走るクロアを、常識はずれの速度を孕む長大な物体が通り過ぎた——彼女がそう理解した瞬間、同時に、その物体の上から飛び降りる影があった。

高く跳び、そして着地する。片膝について、剣を握る腕を伸ばし……己が世界を救う英雄にでもなったのかと錯覚しているような格好つけの姿勢で、ジャン・ステイルは目の前に現れた。

衝撃で砂煙が舞う。

彼女はその男を前にして立ち止まるしか術を持たず——だがせめて、とばかりに右腕に刻まれた魔術紋様を輝かせた。

詠唱など無い。

術名の咆哮さえも無い。

その光輝と共に、クロアの身体はまるで霧に飲み込まれたかのように曖昧になって、そして、分離。気がつけば、彼女の肢体は五つの影となってジャンの前に立ちはだかっていた。

「これはねえ、君が引つかかった幻影——」

バスタードソードの切っ先が地面に触れる。

今はそれだけで充分だった。

クロアの言葉など、最初から聞くつもりなど無い。その命を奪うにしろ何にしろ、最初から全力で——最初から己の考えを押し付けるつもりだった。

アース・ベリック  
「大地の怒り」

術式発動の契機となる発音が早いか、クロアの五つの影は瞬時にして股下から突出した錐状の隆起によって切り裂かれた。音もなく、

空気を引き裂いたかのようなにわかな衝撃だけを大気に伝播する。

直後、鮮血が宙に散った。

隆起によって背中を深く抉られたクロアは、周囲を鮮血による血溜まりを作って横たわる。喘ぐような呼吸を繰り返し、痛みに耐えられぬように目を強く瞑る。

痛々しく肉を、そして骨さえもむき出しにする彼女の傷口は深く放っておけば数分以内に大量失血による死を迎えるだろうということとはすぐに分かって――。

衝撃。

大地を打ち鳴らす、大太鼓を撃ったかのような凄まじい爆発音が再び鉦山都市を飲み込んだ。

『三つ目の爆弾』の作動。

二度目からおよそ五分が経過してからの事だった。

が――実際にはタイムラグなど無しで発動させることができるのかもしれない。ジャンらは下手に動けぬのを良い事に自分だけが逃げ、そして危機に陥らぬ限り時間を稼いで、もし自分もダメだと判断できる状況になったなら――自分もろとも、爆弾を作動させる。

そういった考えがあつての事かもしれないが……。

どちらにせよ、彼女の意識がある以上ジャンは動かなければならない。

足を一步、否、それに至らぬ筋肉に力を込めたその瞬間、彼女の痛みを抑えた凜とした声がジャンを止めた。

「今この瞬間、私を中心とする半径二〇〇メートル以内に地雷をしかけたわぁ。下手に動かないほうがいい――動いた瞬間にドカンだし、一步目が無事でも、その瞬間に私に同調して動いてくれている四人の部下が君を殺しちゃうぞ」

彼女の言葉に嘘はない。

紡がれるのは、限りなく純度の高い真実のみだ。

クロアが虚構を作る理由など無く、かえって不利だと思われる真実を伝えるほうが彼女にとってメリットとなる。どちらにせよ隠す

必要のない事実であるならば、吐露して魔法の威力をあげたほうがいい。彼女はそう考えていた。

だが――仮にそれが真実でジャンを圧迫するほどの窮地に導くもののだとしても、それ故に魔法が致命傷を与えるほどの威力に跳ね上がったとしても、それが足を止める理由になるかと言えば、否である。

幸い、切っ先は未だに地面に触れていて――。

「アース・ビック大地の怒り」

ジャンの眼前から隆起。天高く突き上がる錐状の大地は、その刹那に、根元から火焰を吹き出して衝撃と共に弾けて吹き飛んだ。

凄まじい爆発に、思わずよろけそうになる。それは連続して、不特定に出現するのではなく、ジャンからクロアへと一直線に地面を突出させて――そしてその度に、爆発がそれら全てをはじき飛ばしていく。

爆発の衝撃と爆音が、視界を砂埃や煙で余す事無く埋め尽くして五感の多くを奪い去っていく。その中で、さらに自身へと肉薄する幾つかの影と、その気配だけは良く判った。

土の臭い。焼けた火薬の匂い。額から汗が吹き出るほどの高熱。聴覚が麻痺するほどの爆発音。

そのなか、爆音に紛れる足音。地雷に引つかからないのか、爆発はない。

どこからともなくやってきた影が接敵する。逆手に握ったナイフが、狡猾に俯き加減の喉元に喰らいつき――その皮膚を切り裂こうとするよりも早く、折り曲がる肘関節の内側を、ジャンの手が掴んで動きを止めていた。指先を筋に食い込ませ、振り向きざまに肘を顔面に叩きこむ。足を払って地面に倒し――後退ついでに顔を蹴り飛ばし、男の背中に飛び乗った。

次の影が真正面から切迫。濃厚な煙故に、その距離が完全に縮まぬ限り存在は知覚できなかったが、思いの外未熟であるらしい彼らへの対応は、刹那的な思考と反射的な行動とで充分だった。



己が身に引きつけた剣を振り払う。すると、それは面白いように影へと肉薄――逆袈裟に胸を切り裂き、その返して怯んだ影を切り伏せる。男の低いうめき声と共に、また一つ安全な足場が完成する。「――ジャン！　こっちで二人仕留めた！」

嬉しい報告は、まるで見計らったかのように叫ばれる。

ならば、と返事の間も置かずにクロアが倒れている方向へと駆け寄ろうとして――その血の臭いが、不意に濃厚になっていることに気がついた。

むしろ、クロアから距離は離れていたはずだ。風もなく、故に……。

「くそ！」

「――ジャンくん。彼らは私を慕ったけど、私はその実、捨て駒にしか使わないわ」

煙の外側、彼女が向かっていた方向から声が響いた。

「それで、実際の所タイムラグなんてのは一分だけなのよお？」

彼女の言葉に呼応するように、不意に足元から眩い輝きが放たれた。あの採石場に発現した『四つ目の爆弾』だ。

「返事がないわね。絶望してくれたかしら」

力のない言葉。彼女とて、しゃべるだけで精一杯なのだろう。あの傷は、決して幻影などではないはずだ。この錆びた鉄のような臭いは嘘ではないはずだ。

「私の目的は、復讐――」

輝きが増す。

それが、彼女の言葉が真実である証左だった。

「でも、私がやる事と言ったら、その憎んだ連中と何も変わったところはないのね」

輝きが増す。広がる魔方陣は、彼女の独白と共にその規模を拡大していく。

クロアがその胸の内に秘めていた、ひた隠しにしていた真実と共に、魔法は戦略級魔術ほどの威力へと上昇した。

「君を選んだ理由はそこ。君みたいな、自分の正義を押し付けがましくぶつける人に、私を止めて欲しかったのかも。私も、自分なりの正義だったんだけどね——って、こんな事いつでも仕方が無いんだけどねえ」

やがて煙が、自然な風の流れと共に消え去っていく。

よく晴れ、澄んだ大気の中。クロアのどこか悲しげな笑顔が、ジヤンを出迎えていた。

「巻き込んでごめんね。でも、私はこの魔法、止めるつもりはないから」

「復讐と共に……この街と共に死ぬ気か？ いや、そんな事はどうでもいい——アンタは、自分勝手な復讐のために無関係な大勢の間を巻き込むのか？」

「巻き込むわ。だって、それこそ私にとって関係ない事だもの」

「アンタは……間違ってる」

「腐るほど思想があるんだし、間違ってるも何もないんじゃないの？ そりゃ人に害するとか、そういった面を見れば私のは大間違いだろうけど——ま、もう言うことはないわ。すっきりした。君も、思った通り、私を殺せなかったし」

クロアの何気ない一言に、ジヤンは思わず言葉に詰まった。

——あの時。地雷を無数に仕掛けたと宣言した直後に放った『大地の怒り』は、彼女への道を切り開くだけで、クロア自体を貫くことはしなかった。それは、ジヤン自身に彼女を殺すつもりが——否、その覚悟が無かったからだ。

正直に言えば怯えていたのだ。

人を殺すということ。憎んでもない、大勢を殺した犯罪者に、自らの手を下すということに。

もし勢いさえあれば彼女を殺害できた。これほどまで爆弾の規模を広げることもなく、またそもそも爆弾さえも消失していたかもしれない。

あの時に理性すら投げ捨てていれば。妙なまでに冷静でさえなけ

れば。

いくら考えても悔やまれることだが、それでも、その行為にジャン・ステイールは後悔をすることが出来なかった。

「おれは……」

目を細めて、あまりにも苦い苦悩を飲み下すように口角を下げた。

「あんたを、殺せない」

「だけど。おれは。」

「そう。育ちのよさそうなお坊ちゃんだもんね」

「あんたの犯行を、止め——」

言葉も半ばだった。

だが、その台詞は強制的に打ち止めされる。

それは——誰一人として動けぬその状況の中で、唯一の部外者たるソレが、音もなく忍び寄って来たからであり。

また彼女が振るう槍の石づきが、鋭くその側頭部を叩き割り——鈍い音と共に、クロアは姿勢を崩して吹き飛んでいた。すぐさま地面に叩きつけられ、幾度か弾んで、崩壊した屋台の手前で落ち着いた。

——足元の巨大な魔方陣が光を失い失せていく。

全てを威圧していた強大な魔力が、共に空气中に霧散して戻ってきて……。

「まったく。寝呆けて居たとは言え、相棒である私を忘れてくれるなんて、随分寂しいじゃないか」

ジャンの振り絞った格好つけも、最期だからと全てを吐露したクロアも、その全てを台なしにし——功績者となったユーリアは、台詞とは裏腹に優しく微笑んで、ジャンを迎えていた。

胸の中に広がる、暖かな感情。

その安堵を体中に感じながら、ジャンはすり減った精神力でなんとか剣を納めて、へたり込んだ。

肉体的、体力的な面はまだ充分に余力を残している。だがクロアとの対峙や、戦闘以外でもあまりにも考えることが多すぎて、精神が

もたなかった。限界だったのだ。

ジャンは胸の奥底から息を吐き出せば、座り込んだユーリアの手が、暖かく、優しく、さながら母のように頭に触れた。

「確かに強くなった。だけど君には、全てを背負うのはまだ早い。今はちよつとずつ拾っていけば良い。君の周りには、それを手伝ってくれる大勢の仲間が居るんだからな？」

「……はい」

——いつか、こんな事が前にもあった気がする。

それは今、この場に立っているきつかけとなった出来事だ。

思い出したくもない、既に復讐は果たした忌々しい思い出。だが、そのなかで決して忘れてはいけない事もあった。

それが、彼女との出会いだった。

彼女が居たからこそ強くなろうと思った。

彼女が居たから挫けても、また立ち上がった。自分の中の正義も、殆どユーリアの為にあるようなものだった。

また助けられた——だが今度こそは。

いや、いずれは、きつと——今度は、おれが助ける立場になりた  
い。

今回の騒動を経て、ジャンの決意はより強固なものになると共に——その日だけは、存分に己の精神的な弱さに、打ちひしがれていた。

## お開き

「これはいい銃だ。私の目に狂いはない」

アレスハイム城下町を始めとするいくつもの街から派遣された馬車は、その日の内に多くの参加者たちを最寄りの街へと送り届けていった。

年に一度の展示会・見本市は言うまでもなく中止となり、戦車も既に夜を迎えるよりも早く、ウィルソンの手によって本国へと送られることになった。そのついでとばかりに代表各位も、今回の出来事を見直し、改めて大魔導師の称号を持つウィルソン・ウェイバーを評価しなおすという事を代償に、直々にそれぞれの本国へと送り届け――。

落ち着いた頃、世界はすっかりと夜の帳が落とされていた。

街に残されているのは、元々の住人に加えてジャン一行に、ユーリア、ジェームズ、ウィルソン、タスクの十四名のみである。

さすがに全ての後片付けは後日行われるということだったが、放置された武具をメーカーごとに仕分けし直し、梱包するという作業はゴミとなった屋台を排除することよりも骨を折る事だろう。

またジェームズは、放置された弾薬箱を一つ拝借しており、鼻歌を歌いながら月夜の下で銃の試射を行っていた。

サニーたちはマイン・アバンの代表者が用意してくれた道具を使って野営の準備を行い、残されたジャン、ウィルソン、タスク、ユーリアはそれを眺めて、談笑に浸っていた。

が、ユーリアは未だ寝足りないのか、うつらうつらと船を漕いで半ば夢心地である。

「今日はなー、マジで……おれのせいで皆が死にそうになったかと思ふと――死にたくなるわ」

肩を落として大きく息を吐く。

あのフードコーナ―で犠牲になったと思われる数千人――実際に

数えてみたところ、その人数は千人にようやく到達するかといった数だったが、そういった犠牲になった人々は未だそのまま放置されている。二次災害もそうだが、まず根本的に人手が足りないのだ。

明日になれば、派遣された多くの作業員が来るという話だが、今夜ばかりは辛抱しなければならぬ。

《そんな日もありますよ》

傍らのタスクが事もなげに言った。

《別にステイル様は特別なんかじゃないんですし、それが普通です。むしろ、ここをどう乗り越えるかが肝要なのでは》

「正論だけど、もっと優しい言葉を掛けてやれ」

《……ねえ、ステイル様。私はなんだか、身体がほてって――》

「そりゃ甘い言葉以前に変態だ。ボケが重なりすぎて対応できねえよ」

《主人も欲しがりやさんですね》

「……やっぱ黙ってろお前」

隣でまた表面上の貶し合いが開始した所で、呆然と空を見上げようとする。と、顔を上げれば現品限りで手に入れたお気に入りの狙撃銃を抱えるジェームズが、その姿に気づいたジャンへと軽く手をあげていた。

荷物は既にサニー達に預けてあるので、彼の手荷物はそれに加えて弾薬箱のみとなっている。

ジェームズは、まるで本屋の主人らしからぬ立ち振る舞いで銃を片手に持ち替え、そうして少しくたびれたように息を吐いてジャンの前に腰を下ろした。

無論、彼らのために用意された座席など無く、故にその一行は瓦礫の真ん中、その地べたに座り込んでいるわけである。

「話は聞いていた」

「耳がいいんですね」

「すまん嘘だ」

「なにその無意味な嘘っ?！」

たはは、と笑いながら、ジェームズは幾度と無く銃の金具を引き、薬室の中が空であることを、装填されている弾丸が無い事をしっかりと確認してから――容赦無く、その狙撃銃の銃口をジャンの額に押し付けた。

「少年、お前がどれほどしょげていようと仕方が無いことだ。終わってしまったのだからな」

「……ですが」

「私だってしょげたいさ。存分に落ち込みたい気分だ。お前より遙かに――なんせ、少年より人生経験も豊富でこういった修羅場もいくつもくぐってきているのにもかかわらず、私はあの時、あの女狐を射殺出来なかったのだからな」

ふん、と鼻を鳴らして肩をすくめる。

どれほど毅然としていても、惘然と言葉を紡いでいても、ジェームズとて人間だ。今でこそその感情を表には出さずに隠しているが、ジャンと同じで自分のミスを悔いているのだろう。

そして今回、ジャンの最後の決断こそ遅かったが――決定的なミスというわけでもなかった。結果的にクロアは自身が出た街を出るまで、また街から出る事が不可能になったと判断できるまで『四つ目の爆弾』を作動させるつもりなど無かった様子だし、その作動さえもユーリアのお陰で防いでいる。

もっとも、最後の最後で良い所を持っていかれたのは少しばかり……嬉しかった。

自分だけではない。頑張っているのはもちろん、今回のことに関わって、自分と同じように動いている人間はたくさんいる。そう考えると嬉しくなる。

多くの人と、繋がっているような気がした。

もう自分だけが頑張ろうという事はない。自分だけでダメなら、仲間がいる。頼れる人がいる。

もうひとりじゃない。

今までの今までだったから、そう確信できるまで一年近くかかっ

てきたが——今回のことで、決定的に身に染みてしまった。理解できてしまった。

こんなにも気遣ってくれる友人が、仲間が居るという事が。

「にしても今日は災難——っと、そうだ、本題を忘れるところだった」

ストレスにしかならぬ人混みに、新兵器視察、そして爆弾魔への対応——本当にこれが一日で済んだのかと思えぬ濃厚な出来事にかき消されかけていた記憶が、今日を思い起こしたことによって脳裏をよぎり、そして腰の邪魔臭い違和感がそれを確定させた。

ジャンはその本題が何であるか、しっかりと言葉に具現できぬまま腰に手を伸ばして、そして『ヤギユウ帝国』の吸血鬼から受け取った短剣を、鞘ごとベルトから抜いた。

「ウェイバーさん」

ジャンが呼ぶと、忌々しげにタスクへと細かく小さく連続した舌打ちをしていたウィルソンが顔を上げて、呼ばれた方向へと顔を上げる。

「どうした？」

「あの、ちょっとこの短剣を見てもらいたいんですけど」

「おう。貸してみろ」

男気のある声で差し出した手に、その質素というよりはシンプルな牛革の鞘ごと儀礼剣のような短剣を手渡す。一、二度力いっぱい壁に突き刺したそれだが、その刀身には傷一つなく、刃こぼれすら無く——それ以上に、土や砂などの、そういった汚れすらついていなかった。

そこから必要以上の鋭さと、短剣としては頼もしいくらいの頑丈さを認識したのだが……やはり得体のしれないものには違いない。

だから、どうせ武器商人のウィルソンが居るのならば見てもらおうと思っていたのだが、彼は彼で、それを見た途端に表情を陰しくしていた。

《主人》  
マスタ



心配なのか、あるいは呆然とする主人を注意するのか、タスクは短く彼を呼ぶ。

「いや、こいつは……違うな。模造品だ」

《しかし、そのような技術を有する者が居るのでしょいか？ 果たして……》

「ああ、居るし、知ってる。今回のあのクロアなんてとても女狐と呼べなくなるような、恐ろしい『魔女』だ」

《……ああ、あのお方、ですね》

「知ってんのか？」

《ええ、私の開発に携わっていますから》

「なるほどな、俗物に手を貸すとなると——何か、考えでもあるのかねえ」

やれやれと肩をすくめ、鞘から剣を抜く。それを手元でじつくりと、あるいは空に掲げるようにして遠目に見てから、鞘に収めてジャンに返した。

「これが、なんだったんですか？」

結局、そのタスクとの会話を理解できなかったジャンは訊く。

ウィルソンは話すべきか否かと迷ってから——あの魔女が作り出した模造品なら、その『魔術』もしつかりと”模倣”されているのだろうと考えて、短く息を吐き、口を開く。

「ああ……世界に十本だけあるつー、天から落ちたんだか、異世界から来たんだか、そういった特殊な鉱物を使用した武器があるんだ。それがその一本かと思ったんだが……どうやら人の手によって意図的に模造された作品だ。だが、それを模造するだけでもかなりの実力があるつーわけで——その短剣に刻まれてる魔術も、戦略級の威力を誇る。もっとも、一度使用して、その短剣が耐え切れるかわからないがな」

「戦略級……これに？」

ウィルソンの言葉を受けて、にわかに信じられないように改めて短剣へと視線を落とす。

確かに装飾は見事だが、取ってつけたような鞘だ。それに、さすがにそれほどの物のようには見えないが――。

「『火炎龍の鉤爪』つってな、対個人として最大級の威力を誇る。戦略よりは戦術寄りだが、その十本の中で唯一単体のみに発揮する魔術だ」

「……ウェイバーさんが持っていてくださいよ。おれ、いらないです」――そんな強力な魔術を持っても模造品だという短剣を、ジヤンが所持する理由はない。使い道など無いし、たとえ自分より遙かに格上で手も足も出ない敵を前にしたとしても、使おうとも思わないだろう。己が勝てぬ敵には潔く負けを認める……というほど戦闘に全てを賭けているわけではないが、そんな反則的な力を使っても勝とうとは思わない。

なんだか癪なのだ。

自分が本気でぶつかっている所に水をさされるような、そんな不快感。決してそんなことはなく、その強大な武器を持ち得る運さえも実力の内と考えるのが自然だったが――未だ未熟である己がそうするのは、酷く信条に反した。

彼がその武器を手放そうと考えるのはそういった理由からだった。「要らねえよ。オレが持ってたってしょうがねえって」

「だけど」

《くどいですね。我々が欲しいのはそんな模造品などではないのです。ですが少なくとも、いずれはスティー爾様の命を救うことになりうる武器なのですから、持っていて損ではないでしょう》

「道具で生き残ったって、それは、おれの力じゃないでしょう？」

《相変わらずですね。それがどれほど強大な力を持っていようと、使うタイミングを間違えれば通用しない。逆に、タイミングさえ合えば『火炎龍の鉤爪』を防げる相手でも、決定打たりえます。それはつまり、スティー爾様の實力ということなのではないですか？》

相手に隙を作り、そこに攻撃を叩きこむ。その叩きこむタイミングを創りだすのはやはりジヤンであるために、彼女の言葉は概ね正

しい——それでいてジャンにはそれに反論することが出来いほどに正論だった。

ぐう、と思わず声を漏らせば、隣のジェームズはどこか機嫌がよさそうに笑った。

「ぐうの音が出るならまだ大丈夫だな。それ、その機械娘を論破してみろ」

「そっ、できませんよ、そんなことっ！」

《ほう、ステイル様がこの私に知能で勝負しよう？ いいでしょう、時間はあります。受けて立ちましょう——》

あの出来事がまるで嘘のように、ジャンの日常は再構成される。

多くの人々の犠牲。それは、ジャンにとって初めてというわけではなかったが——それでも、出生の地が焼き払われてからは初めてだった。

別にそれを、必要以上に背負うということではなく、気にしすぎることもなく。しかし決して忘れることなどはなく、それを確かな一つの経験として、その身に深く刻んでいた。

——クロア・ヴェーラ・アリサは背中に負った致命傷を、サニー・ベルガモットの魔法によって完治させられた後、手足を縛り耳栓に目隠しで拘束された状態のまま、一度アレスハイム城下町へと搬送されることとなる。

彼女の出身はブリックであり、その身も未だブリックに置いているということだったが、犯行の場合はアレスハイムであるために、司法の全ては被害国に任せられ——彼女の処遇は、ジャンが王国に戻って暫くしてから下されることになった。

## 潜入

受刑者の朝は早い。

午前六時三〇分――。

まず牢獄が無数に並ぶ区画にけたたましいベルが鳴り響いて、共にそのベルの音が鉄格子の南京錠に刻まれた『施錠』の魔術を一時的に解除し、扉を解放する。いわゆる開房だ。

その騒然とする目覚ましと共に、二〇〇人からなる懲役受刑者は、未だ夢心地――といった穏やかな顔ではなく、まだこの『刑務所』に入ってから日が浅い者は地獄を見るような、既に慣れているものは気怠げな格好で自身の寢床となる牢獄の前に並ぶ。基本的にその部屋は二人一組で使用するものであり、だからといって二段ベッドのどちらを使うか、によって優劣が決まるわけでもなかった。

ここで未だ夢の中に入れば、筋肉の鎧に身を包んだ屈強な刑務官が使い古され血が滲んだ警棒を手に、その牢屋へと駆け込んできて、悪夢さながら、ベルの騒音よりも激しくたたき起こしてくれる。その際の”不慮の事故”で怪我をしてしまったも、七時三〇分から開始される作業への配慮は一切行われない。それは”自業自得”と判断され、刑務官の心証を著しく悪化させるからだ。

――点呼が終了し、その後三〇分かけて数人の刑務官が囚人を前にして居房の点検を行う。鉄格子が致命的な、あるいは局所的な錆びかた、ないし破損していないか。違法とされている道具などが隠されていないか。そして典型的に、穴が開いていないか、など。囚人の趣味によって、入手が許可された女性の色っぽいポスターだとか雑誌、あるいは小説など、居房によってその空気や内装が異なるが、一つの部屋でも長くとも五分はかからない。

それから受刑者は、みな一列になって食堂へと向かう。

長机がところ狭しと並んだ大広間に、一列になってカウンターに並ぶ。食堂は据置きされている配膳台の向こう側に調理場があり、

そこでは『調理担当』の受刑者が朝昼晩に渡って総勢五〇〇名分の食事を用意する事となっている。彼らは極めて模範的な囚人と認められた者であり、余った時間は読書なり運動なり、自由に時間を使うことが許されていた。

順番が来ると、配膳台に山積みされているいくつかの窪みがあるトレーを取り、フォークを乗せる。流れに則って進んでいけば、ローパンを二つにバターを一欠けら渡される。ついでコーンフ레이크を乗せられ、飲み物は自由に持っていける。種類はミルクにコーヒー、紅茶とオレンジジュースだ。

食事が終われば、それぞれ持ち場に向かって作業着に着替える。およそ七時三〇分に開始される作業に、それぞれ持ち場について準備を開始。始業のベルと共に作業が開始する。

洗濯や清掃、畑仕事や離れにある工場での物作り。そして唯一ある図書館の管理。

一度十時に十五分の休憩を挟み、十一時五〇分から四〇分間の昼休憩。畑仕事など、施設から外に出る者には調理担当者が運んできた弁当を、それ以外の者は食堂にて昼食をとる。昼には肉を挟んだサンドイッチが出る。

十二時三〇分から作業を再開し、十六時三〇分に終了。

その後夕食に移り、朝同様に全員が食堂に集合する。

還房後に刑務官がしっかりと施錠がなされているか確認して周り、一九時まで余暇。その後仮就寝となり、二一時に消灯、就寝。

土日の休日には時間がやや前後し、週に三度ある入浴は夕食の後に差し込まれる形となる。

――また、禁錮刑や死刑などが告げられたものは、懲役受刑者の居房の地下にある独房にて、その多くの時間、あるいは余生を過ごすことになっていた。

しかし、模範囚とは程遠い印象のジャン・スティールは――その早朝のベルよりも早く、悪魔の囁き……というよりは、はあはあ、

という醜惡な吐息によって目を覚ますのがお決まりとなっていた。

「息がくせえって、おとといから言ってたんだろうがっ！」

勝手に二段ベッドの上部に登ってくる筋骨が隆々とした角刈りの男の顔面に、力いっぱい肘を叩きこむ。男はどこか嬉しげな悲鳴と共にはしごから転げ落ち、そしてびたん、と地面に張り付くように叩きつけられた。

「つれないこと言わないでよスーちゃん？」

「てめえいい加減にしろよ、これ以上おれの安眠を妨害するようならな、マジで再起不能にするぞ」

「そんなあ、あたしってばただちよつとだけケツを借りようとしただけなのに」

「なんだそんな事かちゃんと返せよ」

「うん、二分で終わる」

軟膏の入った円筒状のケースを掲げて、男は痛みなど知らぬようににこやかに笑った。

それに背筋が凍るような気配を覚えて――ジャンはベッドから飛び降りて、男の分厚い腹筋の上に着地する。鍛えに鍛えて筋肉が目立ち始めたジャンなど足元に及ばぬような男は、まるで肉厚のゴムを踏みしめたような感触だけを与えて、くふう、と息を吐いて身体をくの字に折り曲げた。

「貸さねーよ！ おれの純潔まで返せんのか？ ああ！？」

「責任は取る」

「じゃあお前の被害にあって人工肛門になった三人には責任を取ってんのか？」

「いやあ、あれは単なる性欲のはけ口だし？」

鉄格子を背にしてジャンが立ち直れば、男はその一回りほど大きな巨軀で両手を広げて、野生動物が威嚇するようにその身をさらに大きく見せていた。

これ以上騒げば刑務官が来るだろう。そうなれば、非常に面倒なことになる。

ジャンは苛立たしげに頭を掻きむしった。

「まったく、なんでこんなことに――」

今回の事のきっかけは、およそ一週間前の出来事だった。

「職業体験……ですか？」

アレスハイム城、その王座の間に呼ばれたジャン・ステイルは、王の言葉を反芻するように繰り返した。

レヒト・アレスは頷き、その蓄えに蓄えた白い髭を撫でるような所作と共に言葉を続けた。

「一週間前の『展示会・見本市爆破事件』での働きを正當に評価して、貴君ジャン・ステイルを例外的に騎士へと迎え入れようという意見が多く出た。が、誠に残念なことに貴君は、大枚叩いて入学した学校にろくに通っていないと来ている――もつとも、これはわしの不手際が原因だが――そこを配慮して、今月から無期限の職業体験を行い、そこでの評価で入団を判断しようと思う」

――諦めた道だった。

騎士というのは、魔法を持たなければ決して就くことの出来ぬ職業であった。だからこそ、夢を見てこの城下町へ来たのだが、魔法を持たぬことが発覚し、絶望した。

しかし、新たに道を歩み出そうとした所で、これだ。

ふざけているのだろうか。

高揚する心が、思っても居ない言葉を生み出した。

だが、本当にそれで良いのだろうか。喪われた道が切り開かれたのは喜ぶべき事柄だが、それはあまりにも都合がよすぎる話なのではないか？

そう思ったが、この話は既にかなり前の段階から考えられていたのだろう。

まず不自然なまでの、国政で行われていたのではないかと疑うほどの、個人に対する集中的な訓練。それにはわざわざ他国から呼ん

だ傭兵団の隊長に加え、警ら兵隊長や騎士団の特攻隊長なども勢ぞろいした。

そして次に、先週にあった武具メーカーの展示会・見本市への視察。

後者の時点では、もはやこれは確定的だったのではないだろうか。致命的なまでにヘタを打たなければ、今回のような呼び出しはあったのではないだろうか。

考えても無駄なことだが……いやしかし。

この感情の昂りは、相手を負の感情で疑わねば収まる所を知らぬようだ。

釣り上がりそうになる頬肉を気力で抑えつけて、ジャンは頷いた。

「正直な所、それほど目立った功績を残した覚えはないのですが」

「今回のことの対応は、貴君を始めとした有志が動いてくれた。巻き込まれたわけだが、そのきっかけは貴君が妙なことに絡まれたから致し方なく……と、多くのものから聞いたのだが、間違いだったかな？」

「つまり……おれが居なかったら、誰も動かなかった、と？」

「動いたには動いただろうが、最善の手段は取れなかっただろう。」

もっとも、今回とて最悪であり最善であったのだから……」

レヒトは言葉を濁すように、台詞を尻すばみさせていって咳払いをして言葉を止めた。

「ともあれ、貴君がどう疑おうと決定したものは決定してしまったのだ。それを受けるか否か、出来れば早い回答が欲しいのだが――」  
「ぜっ」

言葉を出そうとして、口の中にあふれていた唾液が垂れそうになる。

ジャンは興奮を飲み下すようにツバを飲んで、喉を鳴らし、片膝をついたまま、顔をあげた。

その顔はさぞや輝きに満ちていたのだろう、レヒトは、まるで玩具を買い与えてやった子供の予想通りの反応を見るように、微笑ん



でいた。

「是非、お願いします。職業体験でも、なんでもやります！ 騎士になれるなら、おれは……っ！」

「ふむ、そこまで我が国の騎士になりたいと望んでくれているのなら、正直素直に嬉しいと思う。――さっそくだが、ならばまずはじめの職業体験だ」

感慨に浸る間も無く、レヒトが指を鳴らせば近衛兵の一人が一枚の紙切れを懷から取り出し、王へと差し出した。

――この幾度か続く職業体験をそつなくこなせば、いつか騎士になれる。逆を返せば、ミスばかりしていれば騎士になる夢が再び断たれるということだ。

もしかすると、この職業体験の状態で都合よく面倒な仕事を押し付けられるかもしれない。

だがそれでも、もしそうだったならば最早騎士と判断しても良いのではないか……今は、どうあってもポジティブにしか考えられずに、レヒトの言葉を今か今かと待っていた。

王は一つ咳払いをしてから、口を開く。

「城下町より東に進んだ所にある『シサイド刑務所』に、危険な薬物が出回っているという話だ。ここ二週間ばかり、第二騎士団が搜索を行なっているが、売人の足取りはつかめていない。そこで、貴君には内部から流通経路を見つけて欲しいという事だ。ちなみに現在までで、薬物過剰摂取オバードーズによって死亡した受刑者が二名出ている――」

その後、幾度ともなく刑務官が総出で抜き打ちで居房の点検や所持品のチェックなどを行ってきたが、その成果は皆無と言ってもいいくらいであるらしい。

故に刑務官からの流通を疑っては見たが、数年前の大規模な人事異動によって総入れ替えされて以降、イレギュラーな大仕事に参加した受刑者への酒やタバコの差し入れすら行われていない。

加えて不定期に行われている薬物チェックも、受刑者全員がスル

ーしているということだから、おそらくは違法薬物などではなく、  
新手法の脱法ドラッグか何かなのだろう。

そこで、ジャンには直接刑務所に受刑者として侵入し、あらゆる  
受刑者から情報を聞き出して、恐らく居るだろう『調達屋』と接触  
する。これが最初の目的であり、最終的には経路を見つけないとい  
うものだ。

情報の漏洩や、刑務官による処罰の躊躇、あるいは度合いの低減  
によってあからさまな”待遇の差”が目に見えぬように、刑務所側  
にはその作戦内容を告げずに置き――背中や肘の魔方陣は、意図的  
に傷つけられぬように、人工皮膚によってカバー。が、どちらにせ  
よ、刑務所自体に施されている魔術制限によって、魔術自体が発動  
しないようになっていた。

「加えて、魔法を持つ者には特殊な首輪が付けられていてな。魔法  
が発動すると自動的に首輪が締められ、骨をへし折るようになってい  
る。だから事実上、魔法さえも封じられているということだ」  
なるほど、しっかりと考えられている。

体術ならば、警ら兵――つまり警察と軍の両方を兼ねる憲兵――  
の隊長を務め、さらに軍部で副大臣の仕事をしたエミリオからみ  
つちりと教え込まれているために、下手な素人や軍人さえも、素手  
で対処できるだろう。

相手が武器さえ使っていなければ、の前提だが、刑務所であるか  
ぎりその心配は無用である。

だが、それよりも気になったのが――。

「いやしかし――受刑者は、職業ではないんじゃないですか？」

話の腰を折られて、レヒトは途端に不機嫌に舌を鳴らした。

「やかましい、『潜入捜査官』という立派な職業と考えられるだろ  
う。ともかく、数日後に遣いの者を寄越す。それまでに準備を済ま  
しておけ――」

その後、人工皮膚の施術やら、当分家を明けるなどの旨を伝えた後、ふと思いだした。

机の上に置きっぱなしにしておいた、タスクから渡された――否、金貨一枚で買い取ったプレゼント。それは、あの事件の前にタマと約束した物品だ。漠然と、何かを買って欲しい、と言われていたから困ったが、猫といえ、の品物だから間違いはないだろう。

いつも世話になっているし、サニーにも何かを買ってやろうとは思ったが、誕生日の時にネックレスを買ったのを思い出す。これ以上甘やかすのはよろしく無いとの判断が、それを却下させていた。

――だから出かける前に、タマへ、と張り紙をしてあの包みに張り付けて置いたのだが、果たして気づいてくれただろうか。

そう心配するのは、馬車の中だった。

そしてやがて、海沿いにある殺風景な建造物の前に止まって――ジャン・ステイルは受刑者として、犯罪を犯した連中と共に中へと連れ込まれて……。

その後の出来事は、まさに想像通りだった。

居房に入るまで、鉄格子から手を伸ばして脅かしたり、罵詈雑言をわめきちらすなど、受刑者からの洗礼の一部を受け――そして、例の『同性愛者』の居房へと叩きこまれた。夕方、ちょうど余暇であったから……。

思い出すだけでも気分が悪くなる。

ジャンは、その男を前にして、大きくため息を吐いた。

壁に張り付いた時計は夜光塗料が塗られているのだろう、暗闇でもよく分かり、現在の時刻が未だ午前二時であることが確認できた。いくらあの事を思い出しても、その時のような高揚はもうない。むしろ、なぜ仕事を選ばなかったのか……ただそれだけが悔やまれた。

「……なあ、頼む。もう寝かせてくれよ」

はしごを掴んで、ジャンは今にも泣き出しそうな声で懇願する。

男――『トニー』は、やれやれと肩をすくめてから、無言のまま

下のベッドにその巨軀を滑りこませて寝転がった。

「そうねえ、好きな男に強要しても、気持よくないしねえ」  
そういう問題ではないのだが。

ともかく、今は眠れるのならそれでいい。奴が殺気とも取れる興奮をまき散らせば、否応無しで目が覚めるのだ。それまで眠れば充分だ。

「ああ、満期までじっとしてろ」

「ねえ知ってる？ 獄中出産ってできるらしいわよ？」

「てめえは獄中死してろ」

「ひどいわっ！ あたしに死ねっての？ 何もしないのに！」

「強姦未遂は何もしてないに含まれてんのか……まあ、だから捕まっただろうけど」

「いや、ただの窃盗よ。盗んだのは貞操だけどね」

「強姦じゃねえか……」

はしごを登り、硬いマットレスの上に寝転がる。随分と最悪な寝心地だったが、それでもコンクリートの床よりは遥かにマシだった。冬で海の近くであるから、城下町より遥かに寒かったが、三日目となれば慣れざるを得ない。いや、実際には慣れてなど居ないのだが、そう思い込まねばやっていけなかった。

明日はがんばろう——本来の職務に対してそう考えていると、自然と意識は吸い込まれるように落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1050x/>

---

続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

2011年12月29日01時55分発行